

始



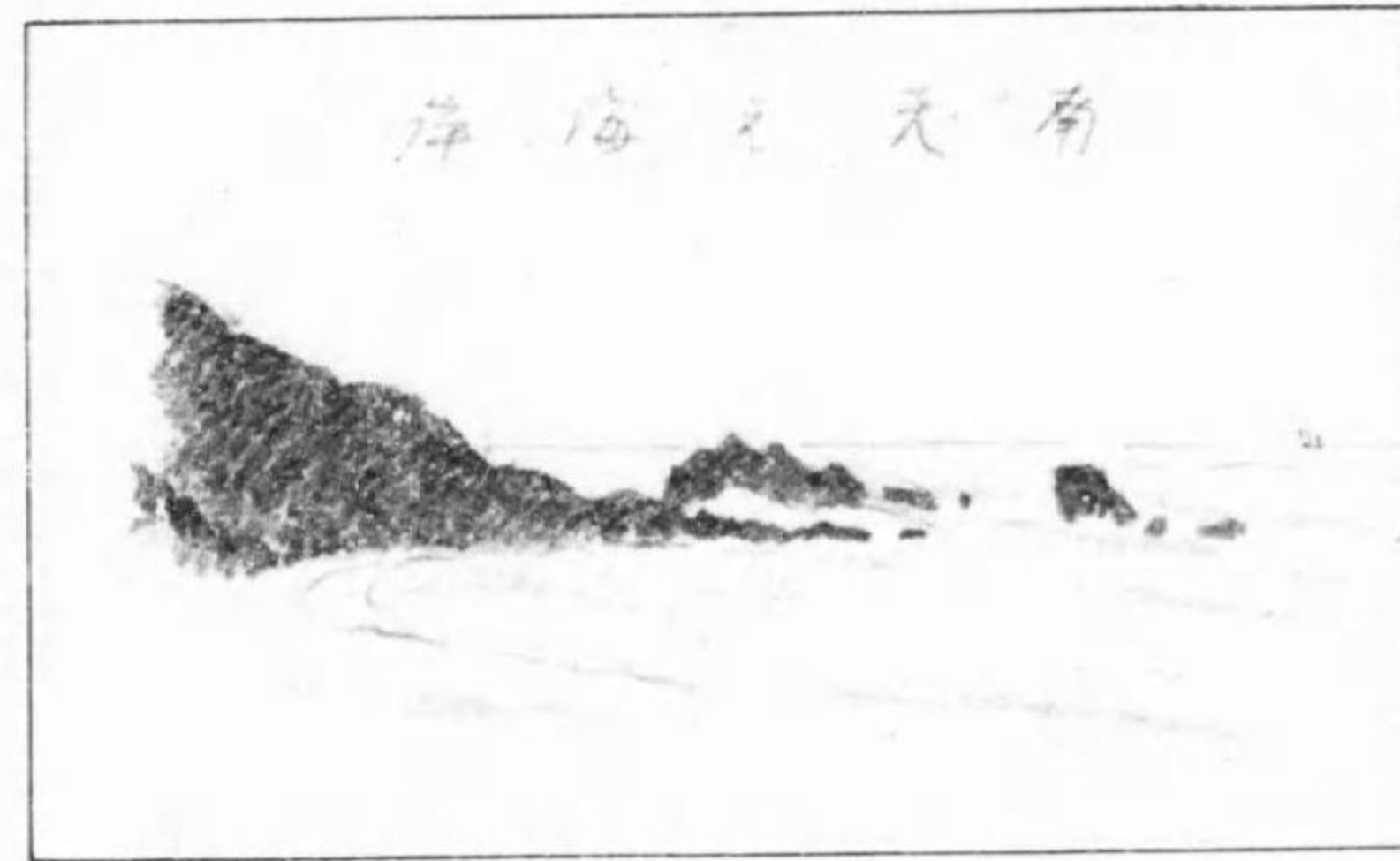
特 219
678

佐藤清勝 著

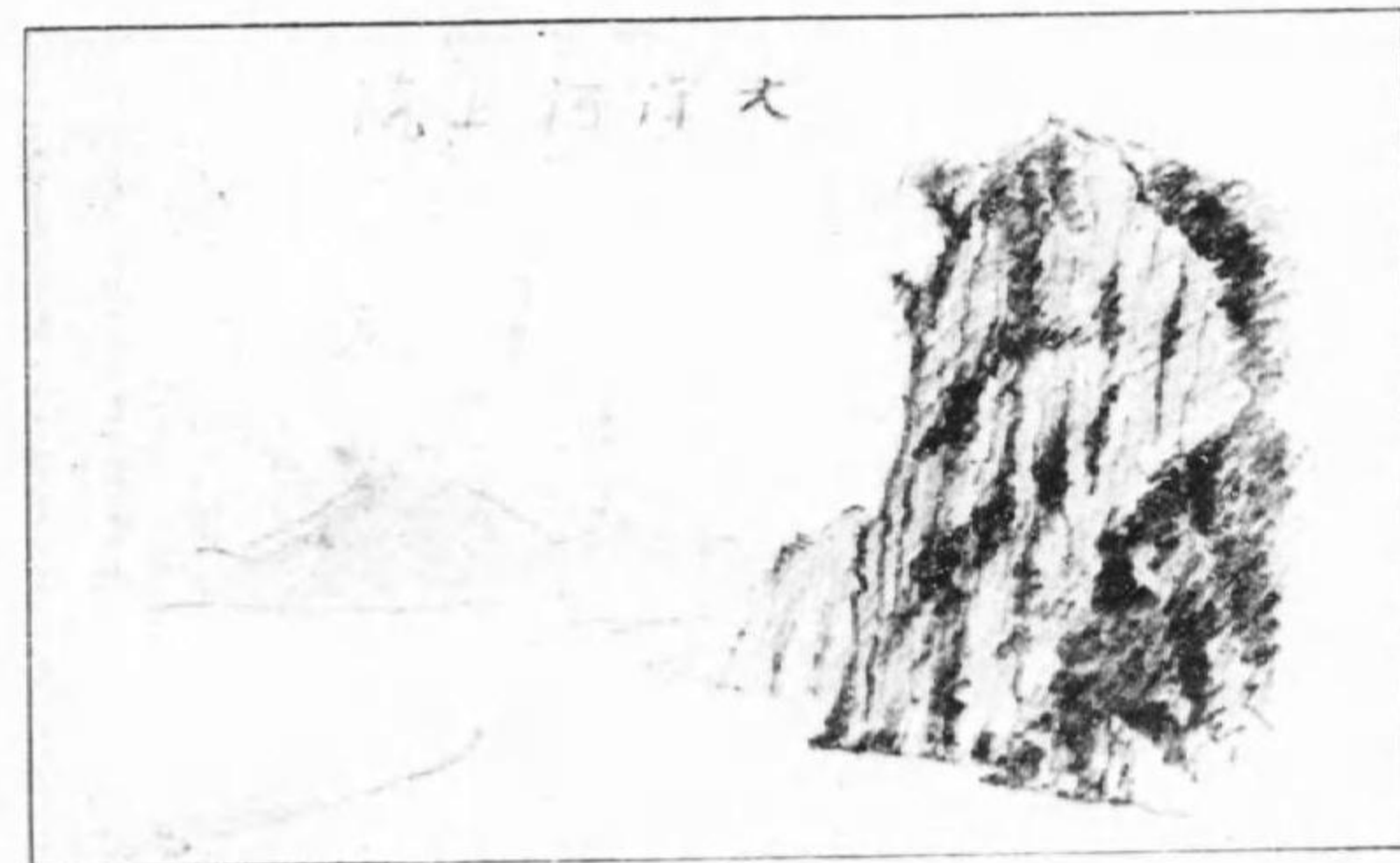
予が観たる日露戦争



軍事普及會出版



(照參頁九四第) 岸海之澳尖南



(照參頁三六第) 流上之河洋大



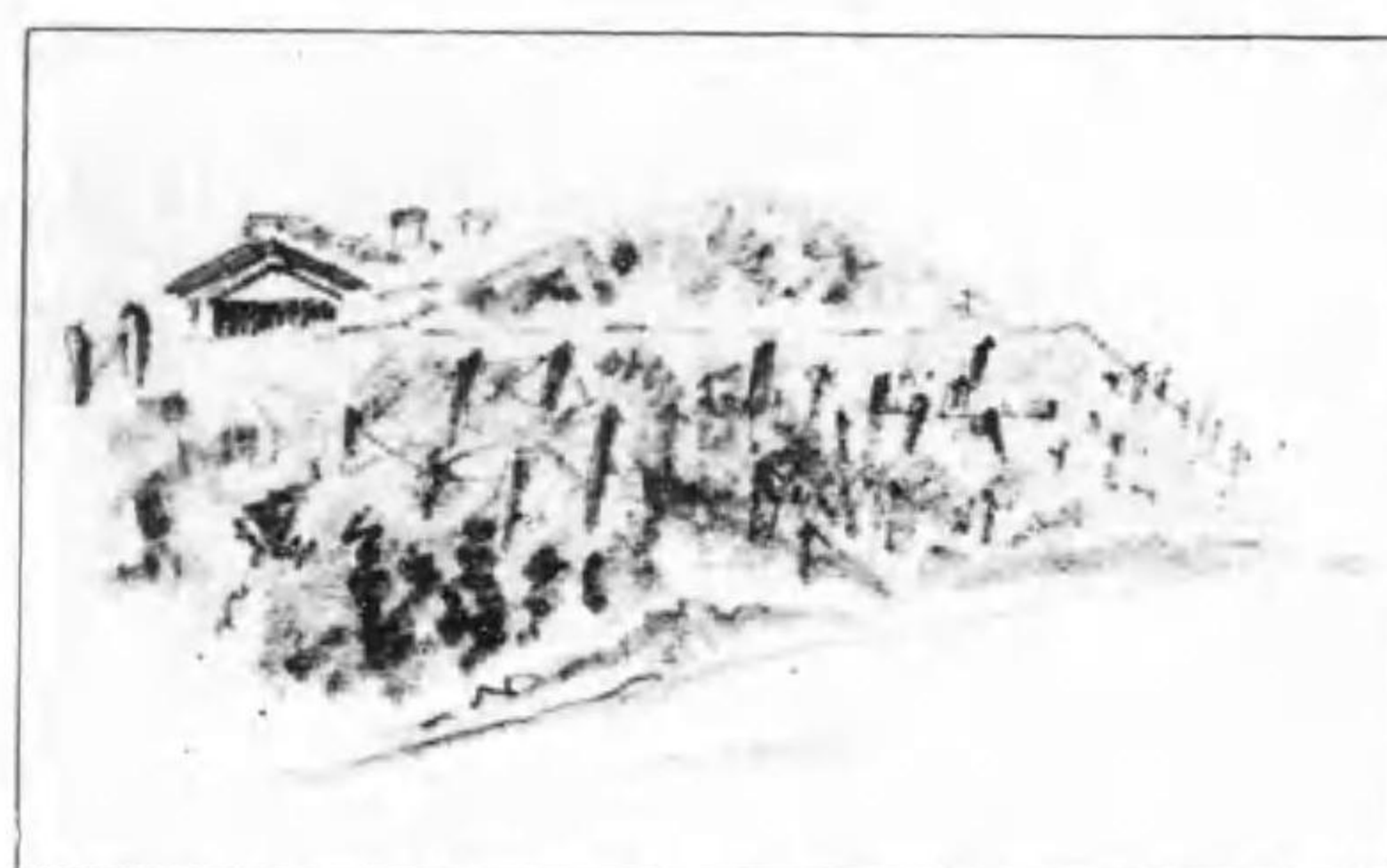
(照參頁八九第) 近附溝道二路水河洋大



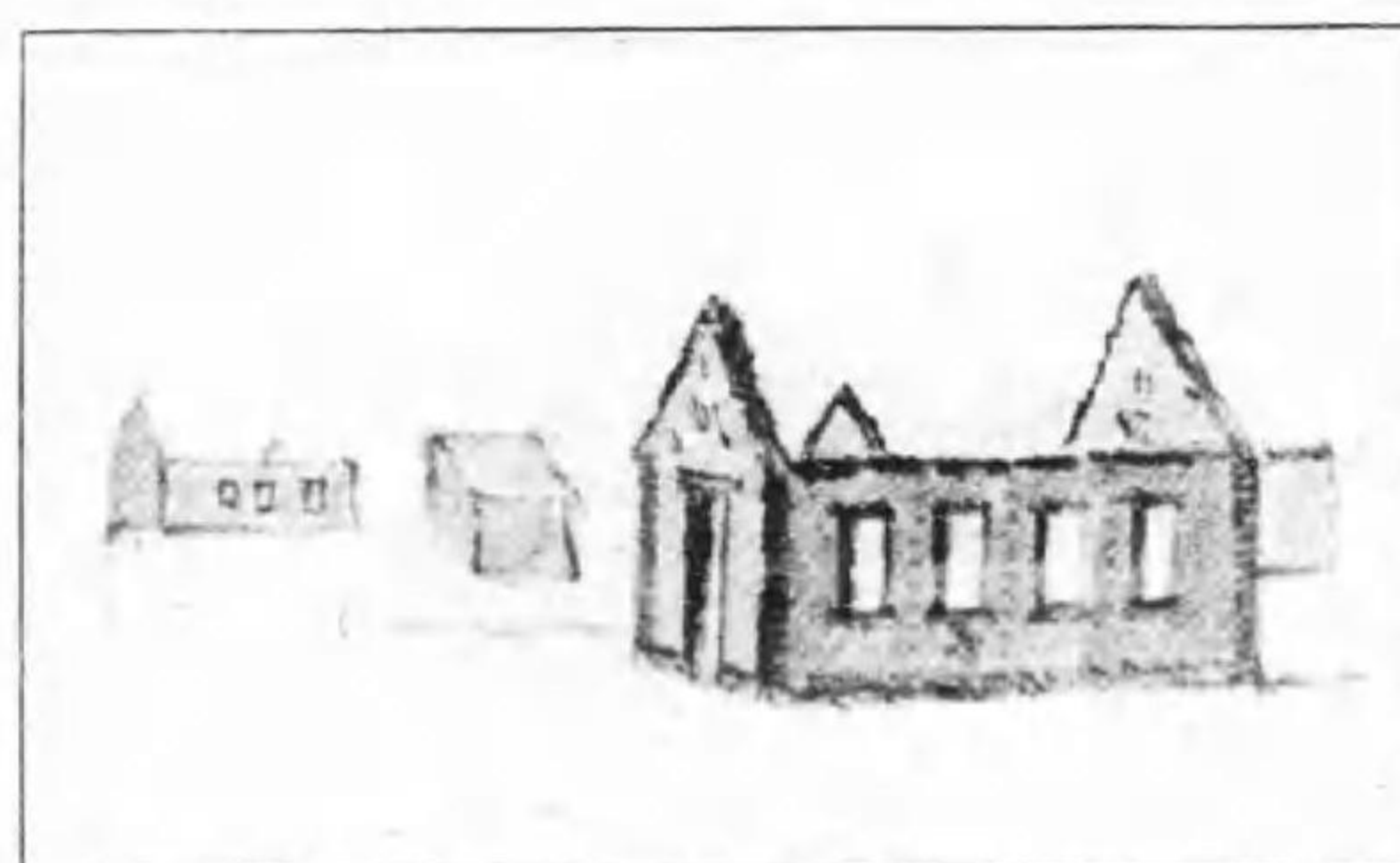
(照參頁二九第) クンヤジの那支



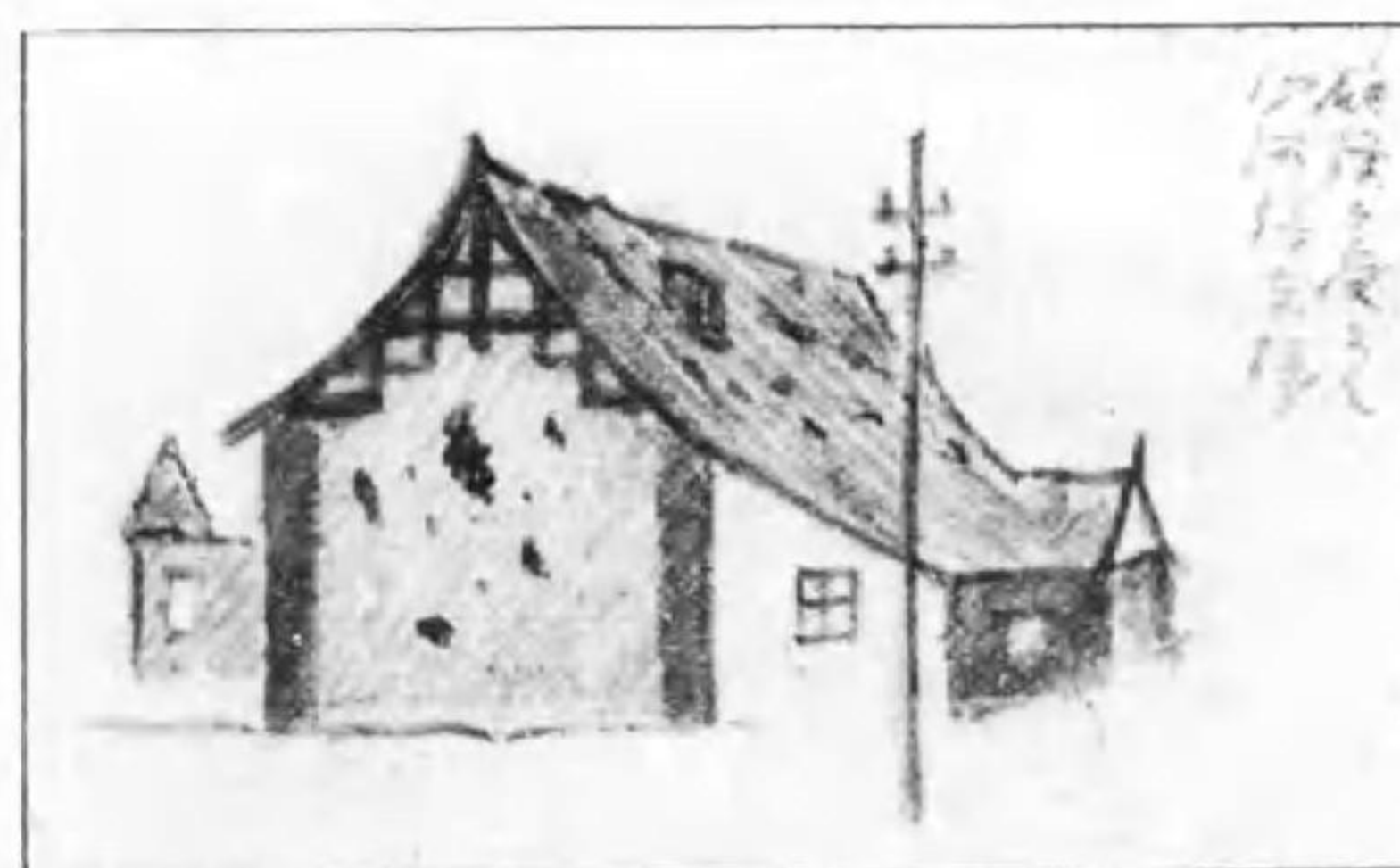
(照參頁六五一第) 塔 嘛 喇



(照參頁三六一第) 網 條 鐵



(照參頁四六二第) 場 車 停 河 沙



(照參頁四六二第) 同

例 言

一、本書は著者が日露戦争従軍中自己の經歷、感想及び所見等を記録して自己將來の記念及び参考に資せんとしたものであつて、全く自家の記録たるに過ぎないものであつたが、今回軍事討究會の勧めにより公刊したものである。従つて讀者の希望に充たざる點も多々あるであらふが、斯の如き性質のものであることを讀者豫め諒解せられんことを望む。

二、本書は著者が明治三十七年六月大孤山滞在中に筆を起し、爾後閑暇ある毎に記録し、就中遼陽奉天、鐵嶺滞在中に於てし、東京歸着後即ち明治三十九年三月擱筆したるものであつて、其後何等の修正又は加筆することなく、二十五年間篋底に藏したるものである。従つて感想所見等は戦役中の記録その儘であつて、今日より見れば不適當なる所見もあるであらふが故らに是を修正することなく、諸賢の批判に委ねることとなした、讀者豫め諒解せられんことを望む。

三、本書は著者が随時隨所に於て記述したる一連の記録であつて、何等の章節表題等を設けることなかつた、然しながら斯くては繙讀に不便尠からざるを思ひ、今回章節を設け、節を附し、表題を加へて、多少體裁を備へたのであるが、然しながら是が爲め本文

に修正を加ふるを欲せざりし爲め、間々本文と表題と一致せざる所もあるであらふ、
讀者豫め諒解せられんことを望む。

四、本書には戦役當時發表せられたる大本營の公報を掲載したる處尠くないが、右は
參謀本部編纂の日露戦史と相違する點なきにしもあらずと思考するも、故らに是を
修正するを欲しなかつた、讀者豫め諒解せられんことを望む。

二

本書公刊に際して

著者識す

自序

歲月は匆々として去つた、日露戦争二十五週年は來つた、嘗て
は世界に文明と富強とを誇りたる白人種に、一大打撃を與へて
彼等の鼻柱を折り、嘗ては世界最強の軍國として西歐を憎伏し
たる露帝國に、一大痛棒を加へて、鷲鳥旗の面目なからしめたる
痛絶快絶の戦争も、今は老人の語る昔話と爲つて、世界征討の雄
圖も、亞細亞經營の籌謀も、泡沫夢幻と消えて、泰平の亨樂に陶醉
し、文弱の宿弊に沈溺し、今は一發の銃聲にさへ腰を抜かすの爲
體である。

予は幸運兒であつた、世界の歴史上、一大轉期を劃する斯の戦
争に従軍するを得た、而して従軍中の秒時を偷んで、予が經驗を
記述した、然しながら、是れ唯た自己の閱歷を後に殘さんが爲め

であつた、それ故に今日まで匡底深く藏して、未だ嘗て他に示すを欲しなかつたが、而かも時勢は遂に是をして匡裡に潜在するを得ざらしめたのである。

日露戦争當時予は一大尉であつた、加之直接に劔電彈雨を冒し、龍攘虎搏の活戰場に馳驅するを得ず、僅かに戰場の後方に在つて戦況の大體に通ずるを得、且つ屢々軍の要樞を窺ふことを得たが故に、戦争の全般に亘る觀察と記述とを爲すを得たることを倖とするものである、固より頗る經驗に乏しき黄吻若輩の記述である、到底是を世に公にし是を天下に示すの資格なきものである。

然しながら是の記述は、戦塵濛々の裡軍務倥傯の中に執筆したものであつて、戦後に於ける諸資料や諸記憶を集めて輯成したるものでないか故に、其の記述は眞實であり、直截であり、時として交戦の必要上今日まで秘せられたる事すらもある、然しな

がら斯の如きは敢て問ふ所ではない、要は是の戦争が國民の赤心と碧血とにて彩どられ、献身殉國の大精神によりて生じたる國民的一大活動の状況を記すれば充分であり、且つ是が記述の眼目であつた。

是の記述を終へたる後、偃武四半世紀、嘗ては舉國一致、盡忠報國に燃へたる國民も、泰平の毒氣に魅せられ、或は國際親善、世界平和の巧言美辭に酔ひ、軍備の撤廢、制限に雷同し、屈從し、國家の安危を顧みず、徒らに歐米の物質文化を摸倣して奢靡と懦弱に陥り、或は國家を眇視し、祖國を賣りて階級争鬪を高唱し、上下反目を激成し、徒らに唯物思想に沈溺して國家を衰頹の淵に擠さんとしつゝある現状に於て、是を坐視するに忍びないのである。文恬武熙の世、歌舞管弦に非ずんば戀愛文學を以て風靡するの時、粗笨蕪雜の武骨文章が到底時人を喜ばすに足らないことを知る、然しながら聊かたりとも國民をして戦争の往時を回顧

せしめ、忠君愛國の至誠、上下一致の努力、百萬將卒の奮闘、悽愴慘
 憎の光景等を眼前に映ぜしめ、幾萬の生靈を埋め、幾十萬の鮮血
 を染めたる東亞の戰場を回想せしめ、是等の生靈と鮮血とをし
 て意義あるを得せしめ、以て軟弱游蕩の雰圍氣中に於ける一陣
 の清風たるを得たならば、是れ實に筆者望外の倖である。

昭和五年三月

日露戦争二十五週年記念日に於て
 佐藤清勝識

予が觀たる日露戦争 目次

第一章	大詔の煥發	一	第十	陸上第一の衝突	五
第一	暖爐會議	一	第十一	千載の遺憾	六
第二	記憶すべき日	二	第十二	露探の嫌疑	七
第三	連勝の第一歩	二	第十三	露艦の武装解除	七
第四	諸君萬歲	三	第三章	初陣への出發	八
第五	大詔の煥發	四	第一	萬歲又萬歲	八
第六	泣言的宣戰	六	第二	兵站監部の誕生	八
第七	非常なる一夜	七	第三	初陣の意氣	九
第二章	最初の自由行動	七	第四	嚴父の訓戒	九
第一	擯斥すべき行動	七	第五	夢幻の一瞬間	九
第二	一髮千斤の機	八	第六	困難と混雜	九
第三	彼我の海軍力	九	第四章	水陸の緒戰	九
第四	陸兵の仁川着	九	第一	陸兵の消息	九
第五	殉國の覺悟	一〇	第二	鴨綠江畔の戰況	一〇
第六	秘密裡の行動	一〇	第三	大和魂の精華	一〇
第七	港口の閉塞	一〇	第四	國力増進の表現	一〇
第八	決死の行動	一三	第五	赤十字旗の濫用	一〇
第九	耐へ兼ねたる予	一四	第六	遺憾なる掃海	一三

第七	弱き天祐説……………	三
第八	舊友の負傷……………	三
第九	第十師團一部の上陸……………	三
第五章	姫路より廣島……………	三
第一	不愉快なる検査……………	三
第二	師團主腦の出發婦人の熱心……………	三
第三	不吉なる門出……………	三
第四	姫路を後に……………	三
第五	祭禮の御輿……………	三
第六	幾度の感謝……………	三
第七	精神か金力か……………	三
第八	一攫千金の滿洲經營……………	三
第六章	第一、第二軍の戦闘……………	三
第一	南山攻略の捷報……………	三
第二	南山攻撃の戦況……………	三
第三	雪裡店雙陽邊門の占領……………	三
第七章	乗船より上陸……………	三
第一	雄渾壯大の光景……………	三
第二	緑の山紫の山……………	三
第三	五里霧中の進航……………	三
第四	信號の交換……………	三

第五	初對面の大陸……………	三
第八章	上陸後の初動……………	三
第一	初夜の支那家屋……………	三
第二	南尖より大孤山……………	三
第三	混雜と喧噪……………	三
第四	不思議なる車……………	三
第五	愚劣なる軍政官……………	三
第九章	得利寺の戦闘……………	三
第一	海軍の協力……………	三
第二	得利寺の戦況……………	三
第三	勇將にして愚將……………	三
第四	疾風迅雷的行動……………	三
第十章	常陸丸事件……………	三
第一	常陸丸の沈没……………	三
第二	國民の度胸……………	三
第三	敵を侮れる結果……………	三
第十一章	大孤山……………	三
第一	水陸兩路の輸送……………	三
第二	第一軍諸隊の通過……………	三
第三	商衝と塔山……………	三
第四	巡檢の招待状……………	三

第五	天后宮の正殿……………	三
第六	絶對的平和思想の中毒……………	三
第七	地獄の縮圖……………	三
第十二章	捕虜の待遇……………	三
第一	無意識的敬禮……………	三
第二	世辭と追従の結果……………	三
第三	優遇と虐待……………	三
第十三章	旅順港外の海戦……………	三
第一	旅順港外の海戦……………	三
第二	成算なき行動……………	三
第三	策の上なるもの……………	三
第十四章	遼陽に向ふ各軍の前進……………	三
第一	分水嶺の占領……………	三
第二	進路の打開……………	三
第三	分進合撃の戦略……………	三
第四	後方の守備……………	三
第五	無神經と無感覺……………	三
第六	蓋平及大石橋の占領……………	三
第七	第一軍の前進……………	三
第八	誤れる敵の判断……………	三
第九	夜襲の要訣……………	三

第十	第四軍の成立……………	三
第十一	軍兵站部の成立……………	三
第十二	禮拜と人生の意義……………	三
第十五章	支那事物の觀察……………	三
第一	支那家屋の標本……………	三
第二	支那人の心理狀態……………	三
第三	馱馬と車輦……………	三
第四	于家屯碇泊場……………	三
第五	ジャンクの構造……………	三
第六	堅牢と實用……………	三
第十六章	各地の視察……………	三
第一	初乗のジャンク……………	三
第二	海底電線の價値……………	三
第三	『ノア』の獨木舟……………	三
第四	自然的平和と猛獸退治……………	三
第五	南尖の滞在……………	三
第六	閑暇と靜養……………	三
第十七章	大孤山より岫巖……………	三
第一	道即河河即道……………	三
第二	混雜の中心地……………	三

第三	悲慘なる傷病者……………	一〇三
第四	嚴然たる圍壁街……………	一〇三
第五	志士の靈を吊ぶ……………	一〇四
第十八章 柵木城の占領……………		
第一	柵木城附近の戦闘……………	一〇五
第二	側背攻撃の成功……………	一〇七
第三	酷烈ある暑氣……………	一〇八
第十九章 第一第二軍の戦況……………		
第一	陥落の期待外れ……………	一〇九
第二	様子嶺の攻撃……………	一一〇
第三	滿洲の豪雨……………	一一一
第二十章 八月の海戦……………		
第一	旅順港外の海戦……………	一一三
第二	卑怯なる露艦隊……………	一一四
第三	對島沖の海戦……………	一一五
第四	宋襄の仁……………	一一六
第五	珍客の待遇……………	一一七
第二十一章 第一回旅順攻撃……………		
第一	至仁なる聖旨の拒絶……………	一二八
第二	自尊心と輕侮心……………	一二九
第三	旅順第一回總攻撃……………	一三〇

第二十二章 遼陽の攻略……………		
第一	我滿洲軍の作戰計畫……………	一三〇
第二	必死の輸送……………	一三三
第三	戦捷の眞價値……………	一三三
第四	遼陽攻撃の砲聲……………	一三四
第五	露軍意氣の今昔……………	一三五
第六	際限なき平野……………	一三五
第七	遼陽の陥落……………	一三六
第八	遼陽攻撃の戦況……………	一三七
第九	彼我の戦闘計畫……………	一四〇
第十	門達の祝捷會……………	一四一
第十一	富庶の市街……………	一四一
第十二	晝夜兼行の砲彈……………	一四一
第二十三章 大石橋と營口……………		
第一	押領者の利口娘……………	一四七
第二	人力押送の鐵道……………	一四七
第三	水陸兩路の輸送……………	一四九
第四	贅澤なる建築物……………	一五〇
第五	遠大永久の計畫……………	一五二
第六	一攫千金の夢……………	一五二
第七	馬賊の操縦……………	一五三

第八	網渡りの道路……………	一五四
第二十四章 海城より遼陽……………		
第一	戦傷者に對する同情……………	一五五
第二	凄愴たる新戰場……………	一五五
第三	遼陽戦後の小康……………	一五九
第二十五章 第二回旅順攻撃……………		
第一	強襲攻撃の失敗……………	一五九
第二	青銅白砲の無力……………	一六〇
第二十六章 遼陽の周邊……………		
第一	遼陽の價値……………	一六三
第二	耻辱を記念する築城……………	一六三
第三	珍らしき汽車の黒煙……………	一六四
第四	露國の鐵道車輛……………	一六五
第五	冷血動物支那苦力……………	一六五
第六	野花一輪の手向……………	一六六
第二十七章 沙河の會戦……………		
第一	彼我兩軍の對峙……………	一六七
第二	勝利疑なしの宣言……………	一六八
第三	斷乎たる攻勢的決心……………	一七〇
第四	戰場への出發……………	一七二
第五	凄愴の一夜……………	一七三

第六	三塊石山の光景……………	一七三
第七	沙河會戦の戦況……………	一七四
第八	容易ならざる戦捷……………	一八〇
第九	攻撃中止の眞因……………	一八〇
第十	敵軍輸送力の誤算……………	一八二
第十一	唯一の失策……………	一八三
第十二	最大の苦痛を忍ぶ戦傷者……………	一八三
第十三	冒險的大夜襲の成功……………	一八四
第十四	クロバトキンに對する批評……………	一八五
第十五	地下の冬營……………	一八六
第十六	木炭の城廓……………	一八六
第二十八章 旅順攻撃とバルチック艦隊……………		
第一	第三回旅順攻撃……………	一八七
第二	失敗を重ねたる原因……………	一九一
第三	施すべき目下の對策……………	一九九
第四	無力極まる萬國公法……………	二〇〇
第五	バルチック艦隊の進航……………	二〇一
第六	第四回旅順攻撃……………	二〇二
第七	將帥の冷靜なる頭腦……………	二〇三
第八	敵艦隊の斷末魔……………	二〇三
第二十九章 新年と旅順閉城……………		
		二〇四

第一	正月前の餅搗き……………	二〇四
第二	國民の同情……………	二〇五
第三	第三軍の戦闘經過……………	二〇六
第四	偉大なる戦捷の光輝……………	二〇五
第五	特種の新年……………	二〇五
第六	一段の光輝を加へたる報道……………	二〇六
第七	攻防兩者の喜悅……………	二〇七
第八	ステツセルの面目……………	二〇六
第九	旅順の俘虜と戦利品……………	二〇六
第十	旅順陥落の祝賀……………	二〇六
第二十章	牛家屯襲撃と黒溝臺戦……………	二〇四
第一	夢驚かすミスチエンコ……………	二〇三
第二	不警戒と風聲鶴涙……………	二〇四
第三	露軍攻勢移轉の好機……………	二〇四
第四	股々たる砲聲……………	二〇五
第五	黒溝臺の戦況……………	二〇四
第六	クロパトキンの不決斷……………	二〇四
第七	我軍勝利の秘訣……………	二〇五
第二十一章	開城後の旅順……………	二〇五
第一	第三軍の北進……………	二〇五
第二	ステツセルの厚顔無恥……………	二〇五

第三	國民自尊心の缺乏……………	二〇三
第四	旅順攻撃の物語……………	二〇三
第五	東郷大將の伏奏と敵艦隊……………	二〇四
第六	意義ある大連の改稱……………	二〇五
第二十二章	奉天の大會戦……………	二〇五
第一	大會戦前の大展開……………	二〇五
第二	大會戦の序幕……………	二〇五
第三	露軍の配置……………	二〇五
第四	奉天會戦の概要……………	二〇五
第五	十五珽臼砲彈の落下……………	二〇六
第六	軍司令部の大混雜……………	二〇六
第七	二十八珽榴彈砲の砲撃……………	二〇六
第八	支那人と同宿……………	二〇六
第九	驚くべき戦場の光景……………	二〇六
第十	砲兵觀測臺上の展望……………	二〇六
第十一	奉天會戦の戦況……………	二〇五
第二十三章	會戦の論評……………	二〇三
第一	露軍將帥の無能……………	二〇三
第二	危険と忍耐……………	二〇四
第三	防禦工事の價値……………	二〇五
第四	主攻撃の方面……………	二〇六

第五	機關銃の威力……………	二〇六
第二十四章	新戦場の跡……………	二〇七
第一	至尊の御沙汰に感泣……………	二〇七
第二	新戦場の通過と回顧……………	二〇九
第三	野獸の如き露人……………	二〇九
第四	無用の工事と精神の人……………	二〇九
第五	碎けたる露人の傲慢心……………	二〇九
第六	奉天の入城式……………	二〇九
第七	裸で逃たる露兵……………	二〇九
第八	野に滿ちたる鹵獲品……………	二〇九
第二十五章	奉天の周邊……………	二〇九
第一	愛親覺羅氏の舊都……………	二〇九
第二	福陵及び北陵……………	二〇九
第三	腑甲斐なき滿洲人……………	二〇九
第四	散亂せる人馬の死屍……………	二〇九
第二十六章	大會戦後の小康……………	二〇九
第一	會戦後各軍の前進……………	二〇九
第二	無耻の將帥か忍辱の君子か……………	二〇九
第三	一週年の回顧……………	二〇九
第四	大宣橋の渡橋式……………	二〇九
第五	戦地の招魂祭……………	二〇九

第六	下劣なる衆議院議員……………	二〇七
第七	精神的強力……………	二〇八
第八	所感の一文……………	二〇九
第二十七章	日本海の新戦……………	二〇九
第一	バルチック艦隊の接近……………	二〇九
第二	日本海の大戦……………	二〇九
第三	ネルソン以上トラファルガー以上……………	二〇九
第四	深謀遠慮の戦略……………	二〇九
第五	拙劣なる敵の行動……………	二〇九
第二十八章	評論の評論……………	二〇九
第一	新聞紙の愚評……………	二〇九
第二	盲目の論評……………	二〇九
第三	新聞記者の無識……………	二〇九
第二十九章	支作戦と新編成……………	二〇九
第一	諸部隊の新編成……………	二〇九
第二	北韓軍の行動……………	二〇九
第三	樺太に於ける作戦……………	二〇九
第四	慢性的恐露病……………	二〇九
第五	北部樺太の占領……………	二〇九
第六	鮮血の翻弄……………	二〇九
第七	諸司令部の編成替……………	二〇九

第八	諸部隊の編成替	三三
第九	偵察戦の状況	三三
第十	八月中旬に於ける敵状判断	三二
第十一	新師團の戦地到着	三三
第十二	北韓軍其後の戦況	三四
第十三	兵力分割の害	三四
第四十章	戦争と日本國內	三六
第一	完全なる學國一致	三六
第二	數百萬のナイチンゲル	三七
第三	綽々たる國家の富力	三七
第四	國內の協力一致	三八
第五	半狂的非國民說	三九
第六	奢靡の風漸く萌さんとす	三九
第七	外國の信用と日本研究	三九
第四十一章	戦争と露國內	三九
第一	露國民の失望と騒亂	三九
第二	暴徒の征討に勇なる軍隊	三九
第三	戦争終結の決議と暗殺	三九

第四十二章	媾和會議の失敗	三四
第一	媾和會議の提唱	三四
第二	會議の経過	三五
第三	戦死者の英靈を如何に慰めん	三五
第四	冷淡なる政治家	三六
第五	見縊られたる原因	三六
第六	無氣力の我全權	三六
第七	荆柯蘇武の氣概	三六
第八	最少限要求の貫徹	三六
第九	國家的大人物の缺乏	三六
第十	帝都の燒打と國民の不滿	三六
第四十三章	平和克復と凱旋	三六
第一	平和克復の大詔	三六
第二	凱旋	三六
附錄		
第一	休戦に關する日露議定書	一
第二	媾和條約	一
第三	十月十六日現在に於ける出征軍戰鬪序列	六
第四	日史抄録	三

予が觀たる日露戦争

佐藤清勝 著

第一章 大詔の煥發

第一 煥爐會議

陸軍砲工學校教官たりし予は、他の教官と共に業務の閑に、屢々煥爐を圍んで國家の前途を物語り、且つ慷慨して諸種の議論を戦はして居つたが、中には戦争の將に始められんとして又少しも始まらないのに焦心して、遂に政府は戦争をする決心が無いのだとか、或は最早露西亞に見縊られて仕舞ふたのだとか嘆息する者もあつて、此の煥爐會議は諸種の議論の下に常に絶へなかつた、處が二月四日の新聞に在芝罘日本領事の發した電報が、俄然且つ最も劇烈に我々が寢耳に水を注いだ曰く。

旅順港内に在りし露艦は全部港外に出で或る方面に出發せりと。

其處で、此煥爐會議は愈々沸騰して、或る者は遂に佐世保が封鎖をされまいかと氣遣ふた者もあり、或は仁川に居つた千代田艦が、敵の爲めに沈没されたと云ふ風説さへも起つた、或は是れでも日本は戦争をせんのかと煩悶の餘りに絶叫した者もあつた、實に我々は國家の前途を憂いて學校を退いたのであつた。

五日の日も又學校へ出て同じ議論を叫びながら、又退出して其の日は別に何事もなく経過しかつたが、その夕方

近衛師團に動員令が下つたと云ふ風説が、何處ともなく傳つた。

第二 記憶すべき日

明れば實に明治三十七年の二月六日の朝である、砲工學校の小使が五日の夕動員令か下つた、教官は午前九時迄に學校に集合せよとの校長の命令を傳へた、予は思はず果せるかなと叫んだのであつた。

此の日は即ち我國から露國へ自由行動を取るとの、最後の通牒を發した日であつた、併し實は前日即ち五日の夕聯合艦隊に出發を命じ、且つ近衛、第二及第十二師團に動員令を下したのであつた。

學校では時の校長代理木全工兵大佐が教官を呼び、學生を將校集會所に集めて動員下令を傳へ、且つ學校解散の命を傳へ、遂に其日一日は書籍文具を返納するとかで騒がしく終つた。

爰に於て絶叫し、嘆息し、慷慨したる苦悶も去つた、我々軍人は一般に喜悅の色が顯はれた、日露戦争は遂に事實となつて光輝ある我日本國の名譽と威風を世界に發揚したのである、嗚呼最も愉快なる最も偉大なる且つ又最も記憶すべき此戦争よ。

第三 連勝の第一歩

六日の日も過ぎ又七日の日も過ぎ、人は皆尙ほ帝國の實力を疑いつゝ、渺漠たる且つ遼遠なる此戦争の前途を喜びつゝ且つ又憂いつゝ來るべき軍事的行動の情報の一片を鶴首して待ち受けたが、八日の夜も過ぎて未だ來なかつた、時しも九日の正午頃號外が來た曰く瓜生少將の率ゆる艦隊は仁川に於てワリヤーク、コレーツの二艦を撃沈し又汽船一艘を沈めたりと、忽ちにして我々の愁眉が開いて欣然たる一般の感情を全國に普及したのであつた、是れが即ち考へて見れば連戦連捷の一着歩である。

此の間に砲工學校の解散が元へになつた一個の悶着もあつたが、是れは言ふにも足りない、予は専ら兼務たる陸軍技術審査部審査官の職を奉して小石川の同審査部に通つたのであつた。

第四 諸君萬歳

十日の朝技術審査部に出勤する途中、時事新報の號外賣が、旅順港外に於て敵艦に水雷襲撃を行ひ其三隻に大損害を與へたと云ふ事を傳へた、餘りの成功に却つて其實否を疑ひながら審査部に行つたのであつたが、正午我々の晝食中に陸軍省から電話が掛つて今朝の時事新報の號外は事實である諸君萬歳ではないかと云ふのである、茲に於て我々の喜びは今更の如くなつて我々の晝食に非常なる花を咲かせたのであつた。

扱てこの第一の號外は次の如くである。

二月十日午後零時十五分 仁川發 同三時十五分東京着

九日午後仁川港第二艦隊旗艦浪速に於て司令官瓜生少將發海軍大臣宛

九日正午露艦ワリヤーク及コレーツ仁川港より出で來る、我艦隊是れを八尾島以西に迎撃す、砲戰三十五分の後彼は仁川港に退却せり、午後四時三十分コレーツ爆發し、其後ワリヤーク及露國汽船ズンガリー破壊沈没せり、我艦隊は一つの死傷者なく艦隊損害なし軍氣大に振ふ。

而して其第二の詳報は次の如くである。

東郷聯合艦隊司令長官九日午前十一時發午後二時着

聯合艦隊は去る六日佐世保を發したる後總て豫定の如く行動し八日正午我驅逐隊は旅順にある敵を攻撃せり、當時敵艦隊の大部隊は旅順口外に有りて我驅逐隊の水雷に罹りしもの少なくもボルタワ形一隻、巡洋艦アスコルド形二隻なるを認む、我艦隊は九日午前十時旅順口外に達し正午より約四十分間港外に残留せる敵艦隊を攻撃せり。

其の攻撃の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少なからざる損害を與へ大いに彼が士氣を沮喪せしめたるものと信ず敵は漸次港内に逃走せるものゝ如し、午後一時戦闘を止め引揚げたり、此攻撃に於ける我艦隊の損害は輕少にして寸毫も戦闘力を減ぜず、死傷は五十八名にして内戦死四名負傷五十四名なり。

仁川方面に向ひたる分遣艦隊の戦報は先に瓜生司令官より直接電報せるが如し。

我驅逐隊は敵の砲火を冒して攻撃を果し、遂に其大部は本隊に合せり、艦隊に御乗艦の各殿下は皆御無事なり。我將卒一般の戦闘に従事せる情況は頗る沈着にして、恰も平常の演習に異ならず戦闘後に於ける士氣は益々旺盛にして然かも舉動愈々沈着なり。

今日來風波ありて艦船の交通不通なる爲め未だ各艦よりの詳報に接せず、取敢ず右概況のみ報告す。

第五 大詔の煥發

我々が晝餐の最中、十日の時事新報の號外が來てから此詳報を手取る迄は實は尙ほ一般に旅順口外に於ける海戦の結果を氣遣ひつゝあつたのである。此間に於て我々は明治三十七年の紀元節を迎へたので有つた。而して此の國家の最大祝日に當つて更に最大紀念の號外が來たつたのであつた。夫れは外でもない二月十日に發せられた宣戰の大詔である。

宣戰ノ詔勅

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス
朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク各々其ノ職務ニ率ヒ其ノ權能ニ應ジテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義ト爲シ且暮

敢テ違ハサランコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ列國トノ關係年ヲ逐フテ益々親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露國ト齟齬ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ

帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國ノ安危ニ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラズ依然滿州ニ占據シ益々其地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セントス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セン乎韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ亘リテ屢々折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナン露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス事既ニ茲ニ至ル帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

明治三十七年二月十日

内閣總理大臣兼	伯爵	桂	太郎
海軍大臣	男爵	山本	權兵衛
農商務大臣	男爵	清浦	奎吾
大藏大臣	男爵	曾禰	荒助
外務大臣	男爵	小村	壽太郎

陸軍大臣	寺内正毅
司法大臣	波多野敬直
逓信大臣	大浦兼武
文部大臣	久保田 讓

第六 泣言的宣戦

同日に露帝も又宣戦布告を發した。

朕カ忠實ナル臣民ニ下ノ事ヲ宣ス

朕カ主トスル平和ヲ維持スルノ目的ヲ以テ朕ハ東洋ニ於ケル靜謐ヲ鞏固ナラシムルニ全力ヲ盡シタリ此平和ノ目的ヲ以テ朕ハ韓國ノ事體ニ對シ兩帝國ノ間ニ現存スル協商ヲ改定セントノ日本政府ノ提議ニ對シ同意ヲ與ヘタリ然ルニ該問題ニ就キ開カレタル商議ハ未タ終了セザルニ日本ハ朕カ政府ノ最近ノ回答ニ於テ爲シタル提議ニ接スルヲモ待タスシテ露國トノ商議及外交關係ノ斷絶ヲ知照シ來レリ此外交關係ノ斷絶ハ即軍事行動ノ開始ヲ意味スルトノ豫告ヲ與フルコトハ無クシテ日本政府ハ其水雷艇ヲシテ旅順口ノ外側ニ在リタル朕カ艦隊ヲ突然襲撃セシメタリ朕カ太守ヨリ此報告ニ接スルヤ朕ハ直ニ干戈ヲ以テ日本ノ挑戦ニ應スヘキヲ命シタリ朕ハ此決意ヲ爲スニ當リ深ク上帝ノ救護ヲ祈リ朕ノ臣民カ其祖國ヲ防護スルカ爲皆齊シク走テ朕ノ命ニ赴クヲ疑ハス朕ハ偏ニ名譽アル陸海軍ニ上帝ノ加護ヲ祈ル

吾々は此滑稽なる且つ哀れむべき泣言的露帝の宣戦を手にすると同時に、最も莊嚴なる最も神聖なる詔勅を拜讀しつゝ異様な感覺を以て、日清戦争に於ける兩國のそれに甚だ相似たらん事を覺へたのであつた。そうすると其處へ

前記の旅順口外に於ける海戦の號外が來たので雀躍しつゝ更に此感覺を高めたのであつた。吾々は日本の兵力の如何許りなるかも算せない。又日本の富力の如何許りあるかも顧みないで、遂に戦の始まりに於て終局の勝利を獨斷したのであつた。此意氣こそ戦争の勝利の基である。

第七 非常なる一夜

十一日の夜は非常なものであつた、唯一言非常なものと云ふより外にない。東京の町の至る處に提灯行列や旗行列が行なはれて沸くが如き萬歳の聲と、崩るゝが如き勇躍の音とは東京の全市を震蕩させたのであつた。而うして非常なる祝捷の日に當つて、露國全權公使男爵ローゼンは新橋を夕方六時に出發したのであつた。其の時に新橋附近を通行した人の話に依ると、東京中でも新橋京橋間近が殊に盛んで、同時にローゼンの出發を見んとて群がった群衆が立錐の地もなく押寄せた。其中をローゼンはどんな感想を懐きつゝ過ぎたであらう。如何なる豪傑でも敵國の喜び、即ち自國の悲しみを現はす最も熱烈なる舉動を目前に見つゝ心を動かさない譯には行かない。ローゼンは實に氣の毒なる境遇を経たのであつた。

第二章 最初の自由行動

第一 擯斥すべき行動

明れば二月十二日非常なる喜びを以て激昂したる我々の頭腦は又攪亂された。それは浦鹽に在つた露艦ロシヤ、グロンボイ、リウリツク、ボカチール及四隻の運送船は日本海岸酒田港の附近に現はれて、卑怯にも武装もない小さな

商船を沈めて鬼の首を取つた様に北海道の方に進んだとの號外の來た事である。

吾々は此卑劣なる露人、而も軍人の舉動を見て憤慨よりも寧ろ擯斥の目を以て見たのであつた。果せるかな彼は遂に何んの取り留めたこともなく浦鹽へ歸つたやうであつた。

併し此報道は一般に觀察すると多くの人に憂懼、寧ろ狼狽の感動を與へた。未だ敵國より海岸を荒された覺へのない國民とは云ひながら此位の事に狼狽してはならん。斯の如き號外は十二日より後ち二三日續いて中には風聲鶴唳の滑稽なものまであつた。

第二 一 髮千斤の機

前後の様様を綜合して見ると露國の意志は次ぎの様であつたらう。外交を無闇に長引いて其の間に軍備を整へ、二月四日に旅順口外で勢揃ひを行ひ、夫れからゆつくりと門出の祝をして、十日頃から旅順港及浦鹽港の双方から同時に海を壓して、支那海及日本海に出撃すると云ふ計畫であつたらしい。處がそうは行かん、五日の日に御前會議があつて廟議一決して此大戦争をやることになつたので、五日の夜から反對に我聯合艦隊が佐世保を出で、八日の夜襲となつたのであつた。傳へ聞く處に依れば此夜には敵の太平洋艦隊司令長官スタルク夫人の祝宴があつて、芝居を行るとか舞踏を行るとかと云ふ夢中の間に、劇甚なる水雷の二、三發も發してツエザレウイツチ、レトヴィザン、ポルタワの三隻に大損害を與へて、敵の膽を一氣に踏み潰して仕舞つたのであつた。處が萬一にも日本がもう二三日遅かつたならば彼我地を換へて我艦隊も敵艦隊の如き哀れなる運命に遇つたかも知れん。危いかな危いかな一髮千斤を釣るが如きである。其處は叡明なる 陛下の決斷で危きを變じて安きをなし給ふた非常なる御恵みに感謝しなければならん。

然に敵將スタルクは、芝居を見て居つて武士のたしなみもなく、むざ／＼と其艦隊を敵の襲撃に委したのは如何にも馬鹿な寧ろ哀れむべき者である。噫、誠に油斷は大敵である。敵の連戦連敗は遂に油斷の賜である。人は之を鑑

みて慎まなければならぬ。世は、遂にスタルクに觀劇將軍の名を與へた。是れ武士としては千歳の恥辱ではないか。

第三 彼我の海軍力

二月八日以前に於ては、彼我の海軍力を比較するに先づ均勢である。我には戰闘艦三笠、初瀬、朝日、敷島、富士、八島外に稍々劣勢なる鎮遠、扶桑。巡洋艦、常盤、淺間、八雲、吾妻、出雲、磐手、及歐洲から廻航中の日進、春日、並に高砂以下十四隻水雷母艦一隻、砲艦十二隻、海防艦十五隻、合計約二十二萬噸位であつた。敵國では、戰闘艦ベトロバウルスク、ポルタワ、セバストポール、ベレスウイツト、ボビエダ、レトウキザン、ツエザレウイツチ、巡洋艦リウリツク、ロシヤ、グロンボイ、バアヤン、アスゴルド、ワリヤーク、並に劣勢の巡洋艦七隻、砲艦二隻、驅逐艇十四隻、水雷艇若干、合計二十一萬噸位であつた。

而かも最初の二日間に、レトヴィザン、ツエザレウイツチ、ポルタワ、ワリヤーク、バルラダ、デイヤナ、アスコルド、ノウキツク、コレイツの九隻六萬七千噸程はやられてしまふて、遂に戦争の終り迄で否中程迄でも足も腰も立たなくなつて哀はれ海面の波に弄ばれつゝ浮んだのであつた。

然るに此劈頭第一の敵の損害に對照して、我に於ては更に二隻の装甲巡洋艦即ち日進、春日が太平洋の青波を蹴つて太陽の出づる方向に揚々として航海し、二月十六日に横須賀に相前後して入港したのであつた。彼は數隻を失ひ我は最新造の新勢力を加へて兩國海軍勢力平衡は茲に忽ち破れて日本の方なる天秤の皿は遙かに下に下つたのであつた。此船は「アルゼンチン」共和國の伊太利のゼノアに注文して建造したものを、日露兩國が購買の競争の後に、専ら英國の努力に依り我有に歸して、義侠心強き英國人の大多數と若干の伊太利人とが運轉しつゝ、途中露艦の傍を過ぐる等の危険を冒して日本に到着したのであつた。大なる歓迎會が横須賀に於て行はれた。

而して又此最も愉快なる日に於て東郷聯合艦隊司令長官から、二月十三日は大風雪を冒して驅逐隊の一隊が旅順口

外の敵艦に襲撃を試みたとの報道が傳はつた。

第四 陸兵の仁川着

二月八日以来の非常なる海軍の成效に眩惑されて、我陸軍の行動は忘却否實は秘密にされたのであつた。然し二月五日我聯合艦隊に出港を命ぜらるゝと同時に、歩兵四大隊を基幹とせる混成支隊は艦隊の諸艦と共に舳艫相含んで佐世保附近を出發し、九日瓜生少將の率ゆる艦隊が仁川に於て敵艦を撃沈せると同時に、仁川港附近の海灣より上陸して仁川に入り直に列車に乗り、五千許りの軍隊が一時に京城に乗り込んだのであつた。此時まで仁川及京城附近に在つた、我國民の悦びは如何ばかりであつたらふ。若し彼等が胸中を解剖したならば次ぎの様であつたらふ、露國は朝鮮の北境龍淵浦を占領し、傍若無人の振舞をなし益々我國權を壓迫せんとして居る。駐韓露公使は勝手に王城に入つて我政策を恣まゝに破壊して居る。而して又海上に於ては彼の艦は二隻我の艦は唯千代田號が一隻あつたばかりで其の心細さ加減は如何様であつたらふ。然るに敵艦の撃沈で悦び返つて居る處に又もや思ひ懸けなく天から降つたよりに五千ばかりの陸兵が打寄せたのであるから恐らくは涙を流して喜んだであらうと考へられる。而して之と反對に仁川京城邊にあつた露人は非常なる恐慌を來たしたことは駐韓露公使が日本兵から擒にされまいかと氣遣つて佛國公使館へ逃げ込んだ一事でもわかる。堂々たる一國の使臣が他國の兵が來たとて逃げ込む様な卑屈な舉動をしたので遂に後世の笑ひ者となつた。總じて歐羅巴人は口許り利巧であるが、其の心事陋劣なるに至つては實に三文の値もない。

京城に入つた陸兵は同地の鎮靜となつた後は北方に行進をした筈である。

第五 殉國の覺悟

大本營は宣戰詔勅の下つた翌日、即ち二月十一日に宮中に設けられた。參謀本部及海軍々令部を其事務所當てられた、翌十二日各師團長の會合あり後ち宮中に召され我々軍人に勅語を賜はつたのであつた。

勅語

朕ハ東洋ノ平和ヲ以テ朕カ衷心ノ欣幸トスル處ナルカ故ニ清韓兩國ニ關スル時局ノ問題ニ付朕カ政府ヲシテ昨年來露國ト交渉セシメタリ然ルニ露國政府ハ東洋ノ平和ヲ顧念スルノ誠意ナキコトヲ確認セシムルノ止ムヲ得サルニ達シタリ蓋シ清韓兩國領土ノ保全ハ我日本ノ獨立自衛ト密接ノ關係ヲ有ス茲ニ於テ朕ハ朕カ政府ニ命シテ露國ト交渉ヲ斷チ我獨立自衛ノタメニ自由行動ヲ執ラシムルコトニ決定セリ

朕ハ卿等ノ忠誠勇武ニ信賴シ其ノ目的ヲ達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセンコトヲ期ス

大本營が設置された頃は近衛師團では略ぼ動員が終つて出征の將校は總て宮中で拜謁を賜つた。考へて見れば昔から戰の門出に拜謁を賜つた事は多くはない。補正行が四條巖に決戦をする前に後村上天皇の宮に詣ふたのは著名なる事實であるが、其外は阪上田村鷹の東征と豊臣大閤の朝鮮征伐の前後位であつたかと思ふ。而かも其れが全軍の總大將一人に止まつたのに今日は若年將校にまで拜謁を賜ふと云ふ事は誠に畏いことである。是れ計りでも身を以て國に殉ずるの覺悟がなくてはならぬ。

第六 秘密裡の行動

師團の出發の日是一般に秘密にされ我々は充分に知ることを得なかつたが、二月の中頃から三月の上旬に亘つたことは事實である。つまり今日の鐵道では一日四列車を發して一箇師團に十五日を要するのである。何時までも島國的の考へを止めて大陸的に、換言せば三呎六吋軌道を止めて、少くとも四呎八吋の準軌道にしなければ將來大陸に兵を出す時に機先を制することは困難ではあるまいか。西伯利亞鐵道で莫斯科から東亞まで一軍團の兵を送るに僅か三十

六日を費すのみであると云ふのに寧ろ我々は意想外の感に打たれたのである。

近衛師團及第二師團は廣島に集中して、第十二師團と共に第一軍司令官黒木大將の隷下に屬した。而して第十二師團は八尾島沖海戦後陸續として仁川に上陸し、京城を経て平壤方向に前進したのは事實であるが素より軍事機密の四字の下に世間に隠蔽されて陸軍の行動は寂として聞へなかつた。

第七 港口の閉塞

今は尙海軍活動時代である。東郷大將は二月八日九日並に十三日の襲撃、若しくは攻撃を以て満足して居らぬ。其處で敵の敗殘艦隊を最も直接に無能に歸せしめんとの考案から旅順口閉塞の計畫を立てた。果然二月二十六日の號外は二月二十四日の夜決死の將卒を汽船五隻(天津丸、報國丸、仁川丸、武揚丸、武洲丸)に乗せ、暗に乗じて敵の海岸砲火並に探照燈を物ともせず驀然旅順港口に進め自ら爆沈して港口の閉塞を行ふたと云ふ事實を傳へた。愉快なる此報道は日本武士の精神を遺憾なく發露した。西曆一千八百九十八年米西戦争の初めに當つて米國の海軍大尉ポフリン氏は外七名の勇士を率ひて攻馬のサンチャゴに一隻の汽船を沈めたといふ話は、其當時世界の最も大なる賞賛を得たのであつて、米國一人が其勇を誇つたのであつたが、此位のことには日本武士には朝飯前の仕事である。決死の士を募つた時に當局者が其の多數に持て餘して寧ろ斷るに困難をしたと云ふ位で、千餘名の中から僅かに七十七名を擯んで出發させたといふことである。其意氣の盛んなる閉塞船の發程に於て既に港口の閉塞を遂げる位な勢である。其結果は素より完全と云ふ事は得なかつたが其行動の頗る壯んなるのに嘆賞措く事が出来ない。

三月六日は上村中將の率ゆる艦隊が浦鹽港を砲撃したと云ふことや、同じ九日に旅順口外に於て驅逐艇の格闘をしたことや、同じく十二日に富士八島の二艦、鳩灣の外から旅順の市街を砲撃したといふことや、其の都度號外を以つて傳へられて、海軍の活動を實現したのであつたが、三月二十七日に於て、又もや旅順港口の閉塞を行ふたので

あつた。

第八 決死の行動

其當時旅順では召還されたる中將スタルクの後任として、戰略家を以つて有名なる、マカロフ中將が到着したのであつて、彼は敗殘の艦隊を修復し、將卒の士氣を奮興して、大いに成すことあらんとしたが、其矢先に此閉塞を行ふて、敵の活動を絶對的に阻止しやうとしたのであつた。其處で六十五名の決死の勇士を四隻の汽船(千代丸、米山丸、福井丸、彌彦丸)に乗せ、海軍中佐廣瀬武夫が此一隊を率ひて眩むが如く輝く探照燈の下を眞一文字に旅順港口に突入し、各爆沈を終つて閉塞を實行した、其號外の一片を記して見よう。

聯合艦隊は、去る二十六日再び旅順口に向ひ、同二十七日午前三時半、敵港閉塞を執行せり、四隻の閉塞隊は驅逐隊及水雷艇擁護の下に、旅順港口に達し、敵の探照燈の照射を冒して、港口に直進し、約二海里に達する頃、敵の發見する所となり、兩岸の要塞及哨艇より、猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず、四隻は續いて航行し水道に闖入し、第一の千代丸は黄金山の西側に於て、海岸より約半鏈の處に、投錨爆沈し、第二の福井丸は、千代丸の左側を過ぎて、少しく前方に進み投錨せんとする時、敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し、次で其位置に爆發沈没し、第三の彌彦丸も、福井丸の左側に出で、投錨爆沈せり、第四の米山丸は、少しく後れて港口に達し、敵の一驅逐艦の艦尾と衝突しながら、既に沈没せる千代丸と福井丸との間を過ぎ、水道の中央に投錨せし時、敵の魚形水雷一發を受け爆裂し、情力のため左岸に近く船首を左にして横に沈没せり。敵の猛烈なる砲火の下に於て、斯の如く閉塞船が勇敢沈着、其任務を遂行したるは、其の事業として聞然する所なく、寔に稱賛するに餘りあり只遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に、猶ほ空隙を存し、完全に通路を閉塞するを得ざりし事なりとす、此の壯烈なる閉塞の再舉は、前回之に従事したる勇士の切願を容れ、將校及機關士は主として、前回のものをして之に

任ぜしめ、下士以下のみは新志願者を以つて交代せしめたり。閉塞隊員中戦死者、中佐廣瀬武夫、兵曹長杉野彌七、外下士卒二名、重傷中尉島田福藏、輕傷大尉正木義夫、大機關士栗田富太郎、外下士卒六名にして、其他は悉く無事、我水雷艇隊、驅逐隊に收容せられたり。戦死者中廣瀬中佐及杉野兵曹長の最期は、頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや、杉野兵曹長は爆發薬に點火する爲め船艙に下りし時、敵の魚形水雷命中したるを以て、戦死せるものゝ如く、廣瀬中佐は乗員を端艇に乗り移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め、三度船内を捜したるも船體漸時に沈没、海水上甲板に達するを以て、不得止端艇に下り本船を離れ、敵彈の下を退却する際、一巨彈中佐の頭部を撃ち、中佐の體は一片の肉塊を艇内に残して、海中に墜落したるものなり、中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず、其最後に於ても萬世不滅の好鑑を残せるものと謂ふべし。閉塞隊員の擁護收容に付ては直接其任に當りし水雷艇隊、最も其力を盡し天明過ぐる迄、敵の砲火に曝露して、其任務を遂行せり、就中、蒼鷹、燕の二艇は、閉塞船隊を護衛して、港口より約一海里に達し、敵の驅逐艦一隻と會戦し、多大の損害を加へ、敵は汽罐を破裂されたるものゝ如く、盛に蒸汽を吹きつゝ退却せり、閉塞隊の端艇が、港外に退却するとき、目撃する處に依れば、敵艦と認む可きもの、黄金山下に於て、全く進退の自由を失ひたるものゝ如くなりしと云ふ。

我水雷艇、驅逐隊は、天明過ぐる迄熾んなる敵の砲火を蒙りしに拘らず、寸毫も損傷なし、閉塞隊員の收容は、千代丸及彌彦丸の乗員は燕に、米山丸乗員は端舟三隻に分乗して、鵜雁に收容され、福井丸の乗員は霞に收容されたり。

第九 耐へ兼ねたる予

予は陸軍技術審査部の第一部に、日々出勤をしてマキシム及ホツチキス兩機關砲の研究、並に修正や遊動防楯の設

計や、改正三十年式小銃使用法の起草や、無線電信の諮詢に答ふる等の仕事を、致々とやつて居つたが其内には近衛師團も出發する、而して三月六日には、第一師團の動員も下つて、吾寓居たる四谷信濃町附近の貸家も、逐次其主人を失ひ、竊かに戦時職務の來らざる事を嘆息して居つたが、現在の職務も、勿論陸軍には必要缺く可からざる業務であつたから、斯く思いつゝも熱心に其職を務めて居つたが、餘り居宅附近が淋しくなるので、予が家も他と同様に心得、巡查の留守見舞に妻が拶揆に困つたといふ事もあつて、最早耐へ兼ねて來た。其處で父上や某將の處などへ、激烈なる手紙を送つて出征の盡力を乞ふた、時日は遠慮なく速かに経過したが一向に何んの消息もなかつた、其の内第一師團の經理部で徵發する補助輸卒隊用の徒歩車輛の検査など云ふ事が起つて、深川の隅田川岸の埋立地に行つて、三四日の間に二萬の車の検査をやつた事もあつて、随分骨も折れた。其後又青山練兵場で、四五千の同じ検査に従事し、雪は降る日は暮れる、篝火を焚いてやつたこともあつた。而うする内に二月も濟み、三月も過ぎて櫻花爛熳と云ふ時節にもなつたけれども、其頃は寧ろ櫻よりも新聞の號外が花であつて、役所から歸りに毎日號外の聲を二つや三つは聞かなかつたことはなかつた、中には非常なる捏造の報道もあつて、中央新聞の如きは又中央の嘘かと云ふ位であつた、而して日曜日もなく、又祭日もなく忙がしき且つ面倒なる仕事をやつて居つたが、餘り心氣を腐らしてはならんと云ふので、審査部の傍なる後樂園に庭を見たり花を見て、陽氣なる處幽邃なる處風雅なる處などを眺め半日を送つた事もあつた。

第十 陸上第一の衝突

二月廿八日に平壤の七星門外で、我騎兵が初めて敵の騎兵と衝突したと云ふ號外が、三月一日か二日頃に來て今迄に海軍の行動計りを耳にして居つた我々には、最負目とは云へ大いに感動を與へた、併し西方の事は秘密にされてゐるから、何時近衛師團が出發したのであるか、彼等は何處に上陸して何をして居るのであろうかとの問題が、常に

吾々の同僚の間に起つて、而かも未だ朝鮮の海岸に上陸したやうな様子もない、それであるのに三月六日に第一、第三、第四師團の動員令が下つた。是れが第二軍で軍司令官が奥大將であるといふこともわかつた、而うして見れば第一軍は遂に何處かに向つて出發したのであるうか、是等の解釋に大いに苦しんだのであつた。

第十一 千載の遺憾

そうすると第一師團は動員の終るか終らないに續々出發する、不思議だ不思議だと云ふ内に、予が前年まで教育をし指揮をした野戦砲兵第一聯隊も出發すると云ふので、三月十七日に我最も親愛なる第一中隊が、品川の停車場を發すると云ふことを聞いて、其の日一日暇を乞ふて早朝から品川の停車場に行つて見た、別に停車場の外観は軍隊の出發するとも見へなかつたが、構内へ入つて見ると果して砲兵が居つた、丈けの高い滑稽好きの某大尉が居つた、第二中隊であつた、ハツト思ふて予の中隊はと聞いた、今日午前三時の汽車で出發したと云つた、大いに驚いた否悲しんだ。成る程午前三時でも十七日には相違ない、神ならぬ身のかう早う出發するとは知らなかつた、噫予が中隊は遂に去れり、親愛なる士卒に最後の別れを告ぐるを得なかつたのは、予が千載の遺憾である、せめてと思つて中隊長以下に余が名刺を托して、其遺憾の幾部分を消さうとした、さうこうすると發車時間が来るプラウトホームに東京各區の總代が若干来て音楽隊の奏樂と共に汽車は動いた、一齊に萬歳を叫んだ。かくの如くにして第二中隊も去つて聯隊本部も去つた、最後のものゝ場合には、大迫旅團長も見送りに來た、予が愛する且つ將來有望なる某少尉の父も其の子息を見送りに來て居つた、併し一般に其見送りは盛なりと云ふを得なかつた、是れを關西以西のものに比較すれば、殆んど見送りをしないと云ふてよい位であつた。

東京人種はかくの如き事に於ては一般に冷淡である、勿論馬鹿騒ぎをして見送る必要はないが、せめて兵卒に快感を起さすだけにやらなければならん。

第十二 露探の嫌疑

三月二十日には我陸軍が定州を占領したと云ふ報道があつた。此頃に至つて漸く近衛師團と第二師團は、大同江の川口鎮南浦から上陸をしつゝあると云ふことを風の便りに聞いた。實際此頃に軍機が漏れると云ふ噂が高くて、露探が居るとか、何某は露探であるとか云つたが爲に、東京で而も陸軍省直轄の技術審査部でも中々情報も傳へて呉れなかつた。此露探の件に付ては最も忌しい事であるが、二六新聞の社長で衆議院議員たる某が議員で露探であるといふ一般の輿論の下に、騒動が起つて遂に議員の内から除名をされた。實際彼の前後の舉動を観察すると大いに嫌疑を免かれない。假令露探でない迄も、男子が敵國探偵であると云ふ噂をたてられると云ふ様では、宜敷愧死すべきである。

外の議員も宜敷詰腹を切らすがよい、實に衆議院の中から此の如き者が出ると云ふ事は國家の大なる汚辱である。

第十三 露艦の武装解除

三月十八日に上海にあつた露艦マンジュル號の武装解除を終つたといふ報道も傳つた、是より先き日本の巡洋艦二三隻は上海にマンジュルが居ると云ふので、同地に出かけて行つた、勿論衆寡敵せずであるから如何とも出來ないが矢張り大國といふのを鼻にかけて同港に豪然と構へて居る、國際戰團條規から云ふと二十四時間以内に交戦國の船は出港せねばならぬのであるのに、元來野蠻國の露西亞であるから戰團條規などは氣にもかけない。支那が又支那で老耆國であるから、露西亞の鼻息を覗ふて武装解除を要求しても手強い事は出來ない。日本は日本で馬鹿正直をやつて居るから中々抄取らない、やつとこのことで一ヶ月半もかゝつて武装解除を終つたと云ふが、露人も又腰拔ばかりである、若し萬一にもマンジュルが日本の艦であつたなれば、萬死を冒しても出撃し得る丈けはするであらうが、どうも

弱虫の寄合であるから命の惜さに遂に武装を解除した。然し又一方から見るとたつた一隻の砲艦でもままと破壊を免かれ、戦争の後には又役に立つ、是が日本の馬鹿正直から露西亞に儲をさせたのである、元來戦争は力の勝負である、換言すれば、勝ちさへすれば理屈は立つ、世界の列國が略ぼ同等で平衡を保つて居るから戦闘條規なんと云ふものもあるのであるが、若しも一方が非常に強かつたなればこんなものは反古に等しい、戦争をやるには、苟しくも戦闘に有利である以上、何でもかまわずやつて排けて、其の後のつくろいを國際法學者だとか外交官だとか理屈を云つて、世を渡るものにさせるがよい、一ヶ月半もかゝつて二三隻の艦を派遣して漸く一隻の艦の武装を解かしたと云ふことでは、情けないではないか。

第三章 初陣への出發

第一 萬歳又萬歳

予が親友某大尉も、三月二十日頃に遂に出發した、兄弟の如く親しくして居つた友が居なくなつて、唯西方の天を睨むで予は東京の一隅に居残つたのである。處が四月十四日から又々徒歩車輛の検査にと、八王子から甲州の方へ出張を命ぜられた、何んでも砲兵工廠の工長を四五人連れて、同日の正午飯田町から汽車に乗つて出發したが、八王子で第一師團の經理部々員と會合するために、同地に下車して何とか云ふ宿屋に入った、同僚の某輜重兵少佐と話をして居つたをりに、號外／＼と叫んだ、工長の一人が飛んで出て之を買ひ求めて、讀むた事實は次の如くであつた。

十三、十四日に亘る海戦で、敵の旗艦ベトロパウルスクが自分の沈めた水雷か日本の沈めた水雷かは知らぬが、

是れにかゝつて黄金山下で沈没して提督マカロフが死んだ、と

云ふので、萬歳々々と叫んだ、それから又前記の經理部々員に會つて予は半部の検査員を率ひ、汽車に乗つて猿橋まで行つた、途中は何んのことはない、マカロフ戦死の話で持ち切つて愉快々々でやつて行つたが、其の夜は淋しいながら猿橋の旅舎の二階で夢に耽つた、其の夜は明けて停車場前に検査すべき車が集まつて居ると云ふので其處へ行つて見ると、不思議なことには昨日まで何んの話もなかつた同僚某大尉が居つた。何の爲めに來たと問ふたら唯君は萬歳であると云ふ、萬歳ではわからんと尋ねたら君は第十師團の兵站副官に當つて、其動員が十六日であると云ふのだ、又々萬歳ではないかと呼んだ。其處で初めて事實がわかつた、某大尉は予の代りに來て予は東京に歸れと云ふのだ。百餘りの車を皆見たが一つも合格するのがない、經理部々員は氣の毒な顔をして車の持主に旅費を拂つた、それから萬事を某に申繼いで停車場の待合室に入つた、今朝から車の世話の爲に來合せて居た、郡長の某といふ頗る元氣の老人が又不思議にも貴公は若しや正さんの子息ではなむか聞いた、然りと答へた、是は珍らしきことであると老人は云つた。夫れから種々談話をして見ると、此老人は予と同國で父上の朋友であると云ふことが分つて、夫れが又偶然にも而かも出征の門出の前に顔を合すと云ふのは、逢ふと別れを同時にした頗る奇遇である。況してや目出度いと云ふので待合室から老人と同僚と、而して予と三人馳せ出で、停車場前の茶屋の二階で酒を飲んで愉快目出度と大騒ぎをして、汽車の時間も間に合ふか合はぬかの中に漸く乗つて歸つたのである。此の出張は最も愉快な最も不思議な且最も目出度い出張ではなかつたらうか。マカロフが死んで出陣の報道が傳つて、老人から門出を祝された妙からざる縁起を有して居るのであるからである。汽車の中では諸種の空想を描いて來たが、今や予が前途は晴れて輝々たる且つ燦爛たる光彩を放つて居る、恰も宿雨去つて天に沖する富嶽の白雪を見る様であつた。

第二 兵站監部の誕生

一週間以上も旅行すべかりし予は、揚々得々として家に歸つた、迎へたる妻は事の意外なるに驚いた様だが、欣然たる予が顔色を見て事の憂ふるに足らざるを知つた様だ。予は唯一言行くぞと云つた是れが十五日の夕方であつた、明れば十六日予は馬を飛ばして砲工學校に戦時職務を確かむべく往つた、果して某大尉の言に違ひない、正午頃に至つて予が赴任すべき師團に動員令が下つたことを傳へた、時しも大に雨が降つて居つたが、更に馬を飛ばして烈しい雨の中を通つて、時の大本營即ち參謀本部へ行き、將來予と共に職を同じうすべき人を求めた、兵站總監部の參謀室で、第十師團の兵站參謀たるべき騎兵中佐吉田平太郎氏と端しなく出會ひ、是から動員の準備に取りかゝらうと云ふ事で、予も大なる頼みを得て遼遠なる予が前途に、大なる光明を得たのであつた、是が即ち第十師團兵站監部の誕生である。

第三 初陣の意氣

勿論戦争前から武装は完備して居つたが、猶ほ準備に準備を重ねて諸種の物を調べた、中には好奇心に驅られて餘計なもの迄も作つた、而して一方には兵站總監部の參謀室に於て、早朝から深夜迄頭を突き合して、書類を取調る、物品を調達する、圖書を受領する、參考材料を蒐集する等に忙殺され、知己への暇乞さへも十分に出来なかつた位であつた。東京出發の日は愈々二十日と定まつた、十九日の日は親類知己を招いて小宴を張つたが、其の邊の騒ぎは例に依つて例の如しで記さずとも分る。此最中に故郷からの腕白時代の朋友が、不思議にも二三年振りに突然やつて來て、是は圖らず不思議な時に會つたと云ふことから、騒ぎが大きくなつて熱を吐く酒を呑む、又熱を吐く所謂氣焰萬丈で、心は既に滿洲の野に飛んで居るのであつた、其席で友人に示したのが次の一句である。

方是男兒報國秋

鐵鞭可斷黑龍流

皇軍所向無敵

猛進直衝東歐洲

生れて二十七歳是れが予の初陣の意氣であつた、女子と生れたならばいざ知らず、既に生れて男子である、殊に志して軍人となつた甲斐あつて、一生の中に此戦争に臨むを得るのは予が幸福である、是さへ在れば縦へ地獄に往つても閻魔の前で、冥土の土産に此戦争の談話をして威張つて見せる、ものに依つたら閻魔を降服さして、地獄の征伐をやつて青鬼赤鬼どもを手下に使ふて、せめては地獄の下でもロスケの餓鬼共を征伐して呉れよう。

第四 嚴父の訓戒

十九日の夜に暇乞に本郷なる父上の許に行つた、酒半ばにして次の如きことを云はれた。

後方勤務に就いて居るものは、殊更常に次の事を忘れてはならん、それはと云ふと何時でも不意の事變に遇ふても、是れに應ぜらるゝ丈けの仕末をして置かねばならん、戦闘線に居るものは、常に眼前に敵を控へ居るから敵に對する懈りは餘りないが、後方では一般の人心が敵を眼前に見ないから、自然弛み勝ちになつて却て不意な事が起り易い、それであるからふだんから能く心掛けて、不意のことがあつても周章狼狽して他に笑はれる様なことがあつてはならん。

是れは誠意を以て訓へたる父上の言葉であつた、予素より心に期する處であつたが、此訓戒を今更の如くに聞いた此時の父上の言葉は殊に心肝を貫いて予が生涯と共に、予が頭腦の中に残つて居る、今も猶記憶して居る。

第五 夢幻の瞬間

四月二十日は即ち予が戦時職務に就くべく、都を出發した日であつた。午前九時には新橋の驛に着いて列車の中に

入った。故舊親戚皆送つて呉れた。汽笛は鳴つた、汽車は動いた、萬歳を叫んだ。唯一種夢幻のように、此一瞬間は去つた、品川の灣頗る静かに、輝々たる太陽の光りを反射して、我出征の前程を祝ふやうであつた。

品川で吉田中佐と會ふと、旅行の件を得て諸種の物語の中に富嶽の下を過ぎ、濱名の湖上を走り、關ヶ原の古戰場を過ぎ、近江の八景を右に見て、知るも知らぬも逢坂の關を越へ、淀の川瀬の水打ち渡り、幾世ねさめの須磨の浦邊を傳ひつゝ二十一日の午後二時に姫路の驛に着いて、第十師團司令部に車を飛ばした。

第十師團兵站部は、同師團司令部の構内の元師團經理部の跡に設けられ、一部は總社(射楯兵主神社)の中に設けられてあつた、予が到着した時は予と同僚たるべき副官歩兵中尉吉川高光と、三等主計森眞夫と憲兵中尉中村孝三郎と理事坂田八十郎の四氏が既に到着してあつたが、其他は總て未だ到着して居ないので、以上四氏さへも指揮をする人がないので手がつかんらしい風であつたが、予と吉田中佐の到着したので、是より以上の六人の者が兵站監部の編成に取り掛らうと云ふのである、到着の日は計畫上副官室にあつた部屋に二三脚の机と半紙が四五枚と、鉛筆と筆が若干あつたばかりで恰かも身代限りの家の様であつた。それで其の日は何を仕様にも手が付かない、一先予等が宿舍と撰定されてあつた鹽町の長澤と云ふ家に宿つて、長き旅の疲勞を回復すべく靜に眠むつた。

第六 困難と混雜

其翌日から實は其前々日からも、輪卒や馬卒や馬匹が逐次到着したので之等を受取り被服を着せ、宿舍を與へ、給養をなし、繋着する等、随分大騒ぎであつた。其中に各部の部長部員等が追々と到着する、是等を帳簿に記するとか兵器被服糧秣の受拂とか、諸種の雜然たる業務の下に一週日餘りも混雜の中に經過してしまつた。時の兵站監は榊原工兵大佐であつたが、未だ鎮南浦碇泊場から到着されずして、専ら吉田中佐が兵站監代理をやつて、兵站監部の諸隷屬部長を集めて訓示を與へるとか、會報を行ふとかされるのであつた、斯様な具合に新編成をする、當時の困難と混雜は

一通りでなかつた。書記の手が足りないで、録事を使ふとか憲兵が武器の授受をするとか、兵站司令部の下士を借りるとか、獸醫部長が鞍馬の調教をするとか、随分門達の事をやつたが兎に角協同一致で種々の事をなした。其中には兵器被服器具等の分配上の整理が擔任の副官や主計に十分出来なかつて、予が肝癢を起して是等の後仕末を一氣にやつて、屢々深更に到る迄事務を執つたこともあつた。一般に動員擔任部隊たる、某司令部の冷淡なるを憤つたが兎に角にも四月三十日に兵站監部の人員が揃つて動員完結といふことになつた。此の頃のことを考へて見ると、殆んど萬事のこと夢中に過ぎ去つたと云ふてよろしい、而して兵站の各部隊長も隨分動員の爲に感亂したもので、甚しいのは兵站にあつて兵站監部のあるのも知らない、従つて勿論兵站監の隷下に屬すべきものであるや否やも知らないで、當部から人を馳せて呼びに遣つた位である、随分豫後備役の諸君方で、高さの一尺もある様な桶形の帽子を冠つた人や、羊羹色の肋骨付の人が顯はれて來た、併し何れも皆老いたりと雖嬰鏢たりと云ふ風で、元氣は中々あつた。外の事は如何でも此元氣さへあれば十分である。

第四章 水陸の緒戦

第一 陸兵の消息

此の動員の間即ち四月二十五日に於て、浦鹽方面の敵艦が元山沖に於て、元山守備歩兵約一ケ中隊を乗せたる金洲丸を撃沈して、陸兵の殆んど全部は最後の銃火を放つて船と共に海底の藻屑となつたといふ報道が、其の一兩日後に於て傳つた。國民は露艦の暴狀を憤慨すると同時に、最も悲惨なる最後を遂げたる陸兵を哀悼した。或ものは軍艦の護衛なき冒險的航海を非難した、然し此位のこととは戦時に於ては免かれ難きことである、唯水底に葬られし將士は如何にも残念であるに相違ない。

其當時の兵站監部の職員を重ねるものを擧ぐれば、前記諸氏の外に、兵站經理部長三等主計正赤尾清穆、兵站軍醫部長三等軍醫正荒井多門、兵站獸醫部長三等獸醫正岸本雄二、兵站電信部長工兵少佐大谷深造及び郵便部長通信事務官米田奈良吉といふ役割であつた。

今迄寂として音のなかつた我陸軍は、今は何をしてゐるのであるか、二月九日第十二師團の一部が仁川に上陸してから殆んど三ヶ月も経つに、僅かに平壤の七星門外で敵騎と衝突をしたとか、或は定州を占領したとか云ふ位のこと、指を折つて數ふる位の僅かの情報ほか、我々の耳には入らない。一體近衛師團や第二師團が廣島に集中したといふことだが、其後は何處に如何にしてあるであろうか、海軍は度々の水雷襲撃間接射撃や港口閉塞をやつて赫々たる功名を轟かしたにも拘はらず、陸軍は最近の三ヶ月間に何を居るのであるかと云ふ、素人的觀察の下に起る批評が殆んど總ての人の口から出た。實際我々軍事的觀察力を有する者でさへも、殆んどこのことを口にする位であつた、併し考へて見ると二ヶ師團の鐵道輸送に一ヶ月を要し、水路輸送及乗船上陸の爲に又一ヶ月を要し、而して鎮南浦から四五十里ある、義州附近まで前進するに少くも半月を要し、鴨綠江を隔て、對岸に寄る敵を攻撃するの準備に又半ヶ月を要すると計算したならば、決して怪しむに足らないのである。新聞記者や書生などが知りもしないで彼は云ふのは誠に片腹痛い。彼等是一個師團に幾何の兵員があつて幾何馬數があるかも知らない。或は知つて居つても貳萬に五千といふ人馬の數は、幾何の大いさを有してゐるかも知らない、況んや其の輸送に幾日を要し、又如何なる面倒の有るものなるやを知らない、彼等新聞記者なる者の軍事的學問の素養のないことに就いて滑稽な談話がある、旅順口外海戰の號外を海軍省で新聞記者等に讀むで聞かした時に、レトヴィザンといふ山は何處にありますかと聞いた者がある、是れで他は推して知るべしである。斯様な者の云ふことは齒牙に介するに足らないが、隨分陸軍の運動の緩慢なるを詰つた新聞紙もあつて、國民は實際待ちつかれて居つたのである。處が俄然五月一日の夕方號外が飛んだ、それは一日の午前九時に九連城を占領したと云ふのであつた。我々未だ内地に居る者は、如何なる戰

鬪をしたかは詳細を知るを得なかつたが、實に劈頭第一に陸戰に於て勝利を得た事を知つた、此時まで我日本國の實力を知らない多くの外國人等は、日本は海軍では勝つたが、陸軍では世界第一の陸軍國たる露西亞に勝つことは出来まいと、觀察をして居つた、事實は案に相違して我勝利となつた、神戸邊で獨佛の商人等が賭をして大いに損をした者があつたといふことである。

第二 鴨綠江畔の戰況

公にされたる戰報の一部は次ぎの如くである。

四月三十日午後九時五十分黒木大將發 五月一日午前一時四十五分大本營着

- 一、第十二師團は今朝午前三時水口鎮に於ける架橋完成續て渡河午後六時豫定の陣地に就く。
- 二、野戰砲兵第二聯隊及重砲兵聯隊は、未明までに豫定の陣地に就く、午前十時四十分鈴定島より中江臺に出したる我歩兵斥候に對し、九連城北方及東方高地に在る敵の砲兵、之に向ひて射撃せるを端緒とし猛烈なる砲戰を開けり、午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈黙、馬溝東方の高地に在る敵の砲兵約八門は、九里島西方の架橋點に向ひ射撃を續行せり、我義州東方に布置せる近衛砲兵之に應ず、約十分の後馬溝東方の敵砲兵亦沈黙す、午後零時半兩方面の敵砲兵再び射撃を開始す、我射撃のため一時二十分頃再び沈黙せり、我砲擊の結果敵に充分なる損害を與へたるものと認む、我軍の損害は輕傷將校五下士以下即死二負傷二十二なり。
- 三、鴨綠江本流の架橋は午後八時完成し、諸隊は續々虎山北方の高地に前進す。
- 四、細谷艦隊の支隊は、安東縣の下流に於て戰鬪に參與し、就中裝砲汽艇は敵の砲兵及歩騎兵と最も劇烈なる戰鬪を爲し歩騎兵約四百を撃退せり。
- 五、軍は豫定の如く明日未明攻撃を實行せんとす。

六、敵の砲兵は發射速度大にして其曳火彈は確實に七千五百米突以上に達す。

五月一日午前十時二十五分黒木大將發午後一時三十五分大本營着

軍は豫定の如く天明を以て砲戰を開始す。

午前七時五分檜樹溝西北方高地に在る敵の砲兵を沈黙せしめ、同七時三十分より各師團は攻撃前進に移り八時十五分より九時の間に於て、九連城より馬溝、檜樹溝北方に亘る高地線を占領せり委細後より。

五月一日午後十一時二十分黒木大將發、同二日午前四時三十分大本營着

敵は九連城西北高地に於て再び抵抗を試みしも、午後一時五十分より退却を始め、右翼第十二師團は大樓房、中央近衛師團は蛤蟆塘、左翼第二師團は安東縣に向ひ、又軍の總豫備隊は遼陽街道を前進し、午後六時軍は安東縣より老古溝を経て、梨樹溝に亘る線を占領し、特に蛤蟆塘附近にて三面より敵を包圍し、激烈なる戰鬪の後砲二十門、馬匹車輛共悉皆、將校二十餘名下士卒多數を捕虜とせり。

我に對せし敵は狙撃歩兵第三師團の全部、第六師團の第二十二、第二十四聯隊と「ミシチェンコ」の騎兵旅團、砲約四十門、機關砲八門にして鳳凰城方向に敗走せり、我軍の死傷は多くも將校以下七百ならん、目下取調中、戰利品速射砲二十八門、小銃及彈藥等多數なり。

我砲兵の効力は頗る偉大にして、捕虜將校の言に據れば昨今兩日の砲戰に於て、敵の軍團長「ザスチチ」師團長「カシタリンスキー」は共に負傷し、其他捕虜騎兵中佐の言に據れば敵の死傷は八百以上なりと云ふ。

摩耶艦は午前十時より安東縣下流に到り、敵の砲兵と約三十分激戰の後之を退却せしめ午後一時龍巖浦に歸れり。當軍司令部は午後五時三十九分九連城に到る。

殿下以下各將校極めて元氣、軍隊の士氣大に振ふ。

以上取敢ず報告す。

二日の夜から提灯行列が行はれて二三日間も續いた、宿直に當つた我は兵站監部の二階から夥しい提灯の行列と云ふよりは、寧ろ群が師團司令部即ち我兵站監部のあつた前を通過した時の嬉しさうなる國民の舉動は今も猶ほ我が眼中に残つて居る、而して此行列は其翌夜吾が宿舎たる長澤の家に於ても見た。

第三 大和魂の精華

第十師團の先發部隊は七日の朝から喇叭の音唳と姫路を出發した。目的地は神戸であつた。市民は路傍に大なる景氣を以つて是を送つた、而らすると其日の夜に又々號外が飛んだ第三回旅順の閉塞之である、その公報を見れば次の如くである。

聯合艦隊は豫定の如く行動し、五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を執行せり。閉塞船隊及之を掩護せる赤城、鳥海、第二驅逐隊、第三驅逐隊、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九驅逐隊、第十驅逐隊、第十四驅逐隊は、二日夕刻艦隊と分れ、豫定航路を旅順口に向ひ前進せしが、不幸にして午後十一時頃より南東の強風俄に起り、波濤高く爲に閉塞船隊は離散し相失ふに至れり。閉塞船隊指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め、閉塞事業中止の命を下せしも其信號通達せず、午前二時迄通信に盡力せる間に、船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり。然るに三河丸は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て、前續船既に港口に突進せるものと思考し、直に港口に向ひて邁進し、佐倉丸と思はしきもの之に續く、敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し、強力なる探照燈と猛烈なる砲火を以て之を防禦せしも、三河丸は港口材料の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し、佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈没す。之に續て遠江丸、江戸丸、小樽丸、愛國丸、朝顔丸も相續て港口に向ひ猛進す。此時敵の防禦砲火猛烈を極め、其敷設水雷は前後左右に爆發し、閉塞隊員の負傷する者最も多かりしが、遠江丸は港口防材に衝突し船首を東にし、

殆ど港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し、江戸丸は港口に達し將に投錨せんとする際、高柳指揮官は腹部を射られて戦死し、指揮官附海軍中尉永田武次郎直に之に代り、投錨を命じ續て爆沈せり、小樽丸、相模丸と思はしきものも又港口に入りて沈没せるものゝ如く、又愛國丸は港口より約五鏈の處に於て、敷設水雷に罹り瞬間に沈没し、指揮官附内田機關長青木好次以下八名行方不明となれり、朝顔丸と思はしきものは舵機を損じたものゝ如く、港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり。右八艘の閉塞船の内五艘は港口に入りて爆沈せしを以て、港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對しては、充分閉塞せられたるものと認む。

今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備増大したるに依り、前二回のものに比し頗る慘烈を極め戦死負傷は甚だ多く、特に小樽丸、相模丸、佐倉丸、朝顔丸四隻の閉塞隊員は一も收容する能はず、其最後の勇行さへ之を知るよしなかりしは、遺憾至極なりと雖も其忠烈の事蹟は、永く帝國の史上に特記すべきものなりと信す。閉塞隊員の收容に従事したる各水雷艇隊及驅逐艇隊は、翌朝迄風濤と戦ひ敵に抗して能く其任務を盡し、特に水雷艇隊は港口に接近して、閉塞隊員の約半部を收容せり、此難業中第六十七號艇は敵弾に汽管を破られ、負傷卒三名を出し、一時敵前に於て進退の自由を失ひしが、其僚艇第七十號は之を救助して曳行せり、又蒼鷹も敵弾に左舷機を傷けられ卒一名戦死し、準にては下士一名戦死せり、其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし。

第三戦隊は三日午前六時、第一戦隊は午前九時、旅順口外に達して驅逐隊水雷艇隊を掩護集團し、午後四時まで各方面に分れて閉塞隊員の搜索收容に盡力せしが終に得る所なかりし。此日濛氣頗る深く爲に敵狀を見ること能はず、夜に入り我艦隊は各々集合地點に引き揚げ、四日朝より更に豫定の行動を續行せり。

最も壯烈にして且最も困難なる、此閉塞の事業を三回迄も實行したと云ふのは、實に實に世界海戦史上に全く無い事で、恐らくは大海軍國たる英國に於てすらも、決して成し得ないことであろうと思ふ。是れが即ち大和魂の精華にして、大和民族の特性を現はしたのである。敵たる露人すらも此壯舉に讚美の聲を漏らして居る、第二回目閉塞のときに廣瀬中佐は、遂に軍神の異名を得たのも誠に偶然でない。而して第三回の閉塞で殆ど閉塞の實をあげたからして、廣瀬中佐も今は地下に瞑する事を得たであらふ、是れから見れば亞米利加のポフソン大尉の閉塞の如きは赤子の戯れに過ぎなう。

第四 國力増進の表現

此閉塞は多くの損害を被りたるが、誠に己むを得なかつたのである、夫れは第二軍が五月五日に、船艦相啣んで鹽大澳に於てする上陸掩護から起つたのである。我が敬愛する某少尉が本土を去るに臨み、從來の厚恩を謝し貴官の武運を祝すと認めてよこした端書の日附が、四月二十日である事から推測すると、第二軍は四月二十日以後に宇品を解纜し、鎮南浦附近に大集合をして、それから鹽大澳に向つたのであらう、聞く處に依れば此時には宇品に百何十艘と云ふ、大汽船が揃ふて淀泊をして居つたと云ふ、其の壯なることは誠に前代未聞である。是が黃海を壓して前進をした時の壯觀は、如何様であつたらう。顧みれば日清の役に御用船になつた船が僅かに三四十艘で而かも大きなのが二千噸位であつたのに、今は六千噸内外の大船が百何十艘と揃ふに至つては海運業の發達も實に驚くべきではないか。換言すれば日清役以來國力が、恐らくは十倍以上にもなつたのであることを、始めて今眼前に見るを得たのであつた。古來海運業の發達する否とは、國家の隆替に關する事甚大である。コロンブス亞米利加を發見して以來、南亞米利加の殆んど全部を屬地にしたスペイン國も、其次に起つて種子島へ火繩鐵砲を傳へたポルトガルも、其次に起つて専ら長崎で貿易を營んだ和蘭國も、又其次に起つて印度エジプトを征伐した佛蘭西も、而して又佛蘭西に代つて印度を横領した英國も、皆航海業の最も盛んなる時代が、其國の最も隆盛なる時代であつた。海運業の發達は誠に國家の爲に喜ぶべき事である。

第五 赤十字旗の濫用

一方に於ては旅順港口の閉塞を行ひ、他方に於ては鴨綠江で破れたる敵を追撃して居る間に、第二軍は上陸を開始して先づ貔子窩を占領し、次いで普蘭店を占領して上陸掩護を行ふた。敵は其以前から我軍が營口に上陸する風説を信じて、營口に兵力を集めたから普蘭店附近に兵力を持つて來るといふ事は出來ない、即ち此處は旅順要塞よりも大石橋よりも、双方から離れて居たので我軍は一人の敵をも見ずに、悠々と一時に三箇師團の上陸を終つた。而して我先進部隊は普蘭店附近で東清鐵道を破壊した。此破壊の前我軍が鐵道線路に迫つたとき、南から北に走る一條の列車があつた、我軍が小銃射撃を始めると赤十字の旗を出した。我軍は射撃を止めた、汽車は全速力で去つて終に影を匿した、此事が公報に掲げられて赤十字旗の濫用を詰つた。此事柄を観察すると如何にも馬鹿氣て居る、露西亞の狡猾は今に初まつた話でない、成程赤十字旗を濫用したのは不都合であるが、日本の兵隊も何たる事である。譬て見れば十歳位の小兒が、仲の悪い友達に出會ふて、其小兒の持つて居る玩具を一寸貸して呉れと迫まられ、小兒は何の氣もなく是を渡すと之を持つて逸散に逃る、逃げた後で小兒はワァーと泣いたと云ふ様な話で、如何にも小兒らしい事である。いくら陸戦條規で赤十字旗が中立を意味すと云ふた處で、其旗を樹てた者が中立であるか何だかを確かめ得ないで射撃を止めると云ふ馬鹿があるものか、譬へば小銃や大砲を撃ちながら白旗を揚げたとて、何人が是れを降参人と思ふものか。若し赤十字旗が實際の中立を表して居るか否やを確かむる暇なく、而かも時機を逸すると云ふ様な場合には赤十字旗があるが白旗が有る方がドシ／＼射撃をするが好い、是れが條規の活用である。若し陸戦條規なるものを墨守しなければならぬなら、始めから戦争なんかはしないが好い。而し汽車を逸したのは致方が無いとしてもこんな馬鹿氣た事を世間に發表して敵の狡猾を咎めたとして、自分が笑者になるより外に三文の得もない、是れを露國政府に詰つたとて、そんな事實は無いと云はれてしまへはそれぎりである。一體日本では軍人は軍事外何事も知らないからであらう。

元來戦争は外交の手段である、それ故に外交の事位は心得て居らなければならん、戦地で汽車を逸したものは仕方がないが、こんな事を發表するようでは困る。

第一軍は九連城を占領し敵を撃破した後、更に前進をして五月六日には鳳凰城を占領し、七日第十二師團を以て寬甸を占領した。

第六 遺憾なる掃海

五月五日に海軍の陸戦隊が、鹽大澳附近に於て第二軍の上陸掩護をやつて、夫れから大密口の掃海に着手した。其の日の十二日である、十三、十四日と同じ掃海を續けて居る内に十四日に宮古艦が敵の機械水雷に觸れて沈没した。元來掃海といふ作業は頗る危険な且つ困難な作業である、繫留水雷とか、電気水雷とか浮標水雷とか、云ふものであれば、繫留纜、網雷覽、浮標索とか云ふものを、錨形道具に依つて引かけ、夫れによつて其位置を知ると云ふことも出來るし、電気水雷の如きは、唯電纜を切れば危険がないのであるが、獨り此機械水雷に至つては、是を探るには頗る困難で、又是れに觸るれば爆發をするから、頗る危険であるのである。然し此の危険な掃海に宮古の如き艦を用いるのは頗る同意をしがたい、此艦は明治三十二年頃の進水で、装甲巡洋艦に次ぐ有力なる巡洋艦の一つである、其噸數も六七千噸あつた速力も二十節以上ある此艦を危険なる掃海に使ふて、ムザ／＼と敵水雷の犠牲に供するとは、遺憾極まることである、こんな掃海には三等以下のボロ艦を使ふて澤山である。

第七 弱き天祐説

そうすると又其翌日即ち十五日に軍艦春日が、同吉野に衝突をして、數分間の間に同艦は沈没してしまつた、而し

て又一方に於ては戦艦初瀬は、旅順港前を航行中敵の水雷に觸れ、又もや沈没してしまつた。海軍の公報では、非常に濃霧の爲めに此の出来事が起つたことを告げて居る、以上は事實であるが、此濃霧の危険を冒して迄も行動しなればなかつたであろうか、既に旅順口は閉塞されてある、第二軍の上陸は秩序よく實行されてある、夫れは海軍に於てしなればならん仕事はあつたやろうが、此濃霧の危険を冒して迄も、有力な戦艦、巡洋艦を沈没さしてまでもしなればならん仕事は何んであつたやろう。僅かに金洲半島をめぐる蓋州角の砲撃位の事で、此軽卒なる運動をなしたのは如何にも残念である、艦船の衝突、水雷の觸発は、元より一種の天災と云ふ様なものであるが、今少し慎重に動作をしたなれば、熟練なる我海軍軍人の手腕を以つて、充分此災を免れ得る事を予は斷言する。此報道を聞いて露國は如何に喜んだであろうか、恐らく宙を飛んで舞ふたであらう、山來路傍の人が我陸海軍の成効を見て天祐に歸するもの多しと口癖の様に云ふものがあるが、予は天祐なるものを知らない、畢竟するに計畫を慎重にし、注意を周到にし、而して事に當つては勇猛にして且つ果斷、是を實行するのが成効の原因である、何爲ぞ天の祐である、何んと弱いことを云ふものなるか、要は人力を以つて人間界のことを善にもすれば且つ惡にもする、幸にもすれば災にもするのである。若し夫れ事を實行するに、慎重周到な注意を缺いたならば天は決して所謂天祐なるものを我に授けては呉れない、初瀬、吉野の沈没は最も適切なる證據である。

第八 舊友の負傷

第二軍は普蘭店を占領し、其附近で東清鐵道の破壊や電線切斷を行ふてから後ち、其主力を以て旅順の咽喉即ち金

洲に向つて南下した。十六日には十三里臺附近に在る敵を攻撃して、是を南方に撃退し、九里庄北方高地より陳家屯に亘る高地を占領した。敵は退却したが尙金山にある砲兵が、我れに向つて時々彈丸を送つたと云ふ事である。此戦鬪は元予が屬して居つた野戰砲兵第一聯隊の第一大隊が放列を布いたのであるが、敵は充分に前面の地區を測量して居つたものと見へ、最も有効なる彈丸を送つて、無残や此名譽ある初陣に大隊長水谷少佐は重傷を負ふて間もなく歿し、森下大尉、板倉、菊地の兩中尉及島田少尉の四名をも傷けた。

第九 第十師團一部の上陸

神戸を發して我第十師團の第一梯團を輸送した數十隻の船舶は、一時鎮南浦附近に集合してから、大孤山の西南凡七里にある南尖に上陸をした、是が五月十九日である。鴨綠江の戦に膽を潰した敵は祿に海岸監視哨を置くでもなければ唯無意味に小なる部隊が此處彼處に徘徊することであつたから、上陸は難なく出來王家屯附近で僅少なる敵を撃退した位で、二十日に其大部は大孤山街に入つた、此王家屯附近の戦鬪と云ふのは、實は彼我双方共に同一地に宿營せんとした出會頭の衝突であつて、將校二名下士以下四名を捕虜にし、又若干の戦利品があつた。劈頭第一の衝突としては先づ目出度い方である。

第五章 姫路より廣島

第一 不愉快なる検査

我兵站監神原大佐は我々に顔を會さない前に、第三軍の工兵部長と云ふ職に轉じ、其代りに新に奥山歩兵大佐が兵站監となつて、五月六日着任された。八日に姫路城南練兵場で兵站諸部隊の武装検査をされた、兵站監部自個及び

兵站司令部四個、野戦兵器廠一個、兵站彈藥縱列一個(實は半縱列)、兵站糧食縱列一個、輜重監視隊三個、衛生豫備廠一個、患者輸送部一個、豫備馬廠一個、補助輸卒隊七個、合せて人員約八千餘名、馬九百の大いさで實に練兵場の三分の二を充滿した。此検査に於て次きの事が分つた、兵站諸部隊の被服殊に補助輸卒隊の被服が甚しく悪いと云ふ事と、諸縦列の馬匹が全く無調教で且つ非常に悪いと云ふ事である、馬は勿論臨時徴發であるから致し方はないが、被服が悪いに至つては甚だ面白くない。元來戦争に出るには一切のものが新しと云ふのがたてまへである、假令たてまへでなくとも是れから戦争に行かうといふ者に、毛の切れた服や襦の當つた服を着せると云ふことは、召集に應じて入つた兵卒輸卒等に甚しく不快な感覺を興ふるではなからうか、若し吾人が兵卒輸卒であつてこんなものを着ねばならんと云ふことなれば戦に行くのを斷るであらふ。せめては精悍、袴下でも新品が調ふて居ると云ふことなればまだしものこと、それさへ二着の内一着は古品であつたと云ふではないか。予は此検査を非常に不快に感じて宿に歸つた。兵站監や參謀長が是等の交換に關して、大いに盡力をされたのは尤の次第である、抑も此様なことをしたのは果して何人の責任か。

第二 師團主腦の出發 婦人の熱心

九日の日に野戦隊の一部と第五補助輸卒隊が神戸に向つて出發をした。是が兵站部隊の中で最初に出發したものである。師團司令部は正午頃列車に乗つて姫路驛を出發した。群集が此師團の主腦を見送るべく停車場に押寄せた。プラウトホームは立錐の餘地がなかつた。例に依つて音楽隊が樂を奏する、何處かの女學校の學生が其先生らしき熱心なる婦人の發唱に依つて、黄な聲をして唱歌を歌ふ、何んでも旅順の海戦と云ふ題と出征を送ると云ふ題らしかつた。此先生らしい婦人の舉動が群集の中から際立つて見へた、元來婦人と云ふものは群集の中に在つて仕事をすることをおまぬものであるが、彼の女は憶面なく且つ熱心に生從を指揮して歌はせて居つた。婦人の感動から起る熱心と云

ふものは恐ろしいものである。汽車は西に向つて動いた、萬歳の聲が響いた、汽車は其濃厚なる烟を残して其の影を黒點の中に没した。

第三 不吉なる門出

姫路には野戦部隊の幾部を残して、歩兵の大部分は出發したのであるから、一時に寂寞となつた。さうすると十二三日頃から歩兵第四十聯隊が鳥取を出發して、姫路に宿營をした、此聯隊の出發の時に於ける最も悲惨なる話がある。出發の前日に兵卒に炙いた鱈を給したとかで、一個大隊を除くの外の大隊の兵士等は出發の時から非常なる腹痛を感じ、鳥取の町を過ぎるか過ぎない内に大いに吐瀉を初め、路傍に仆れる者、甚しい者はその爲めに、絶命したものであつたと云ふ騒ぎで、是等の兵卒の收容や看護のために、非常なる困難を來したと云ふことである。夫れは兎も角も是等兵卒の門出を見送らんが爲め路傍に群集した彼等兵卒の親戚故舊は、如何に此様を見て驚いたであらうか、中には見るに忍びず感慨胸に迫り、泣いて居つた老人があつたと云ふことである、如何なる文明の人でも縁起を云ふのが人情で、此晴々しい出征の時に此慘劇を見ては、此聯隊即ち愛すべき子や孫や、而して夫たる人の前途が氣遣はれたであらうと思ふ。此事の起りは僅かなる不注意から起つたのであるが、此の如き日出度い日の前後には充分演しまなければならぬ。

殆ど十年振りに予は予が幼年學校在學當時の恩人たる山縣少佐に會ふた。少佐は歩兵第四十聯隊の第一大隊長として出征すべく姫路に來たのである。少佐が突然兵站監部に予を尋ねて呉れ、後に予は少佐の宿舎に訪問したのであつた、少佐は予が非常に大きくなつたことを唱へた、幼年學校時代の予は若年であつたのだ、眞に懷舊の情に堪へなかつた。

第四 姫路を後に

此間第十師團兵站部は依然として姫路にあつた。師團の第二次輸送梯團は二十日以後に廣島に向つて出發する豫定で、第十師團の兵站監部も此梯團の中に加はるべく命令された。夫迄は人馬材料被服器具等の交換や修理や諸種の器械調辨に彼はやと忙殺されて居つた。併し事務は稍々整頓して、僅かに其緒につくを得た。斯様にして五月に入つてから十日も過ぎ二十日も過ぎて、二十一日に兵站諸部隊の宴會を姫路借行社の二階でやつた、予は準備委員の一人に撰ばれ、彼是の周旋をして最も愉快に此宴會を終つた。

二十五日が我兵站監部の出發すべき日と定まつた。諸種の物品を片付るとか停車場司令部と交渉をするとか、移轉の命令を出すとか大騒ぎをして、電信部郵便部の荷物の如きは二十四から積んだ、二十五日の早朝から補助輸卒の一小隊も使ふて停車場に運搬する有様、馬匹を積む、此馬は調教のしない野馬であるから、蹴るとか喰付くとか負傷者を出すなどの混雜をして漸く納つた。今度は荷物を積む、軍隊教育の少ない輸卒等の仕事をするのであるから、緩慢で容易に拂取らない、時間はそろ／＼迫つて来る、大聲叱呼して發車の三十分前に漸く積載を終り、夫れから兵員を乗車せしめると云ふので、予は何から何迄で殆ど凡べてのものを搭載乗車せしめたのであつた。其世話のやけた事、とても一通りや二通りでない何んでもかでも、囁んで碎いて赤兒の口に入れる様な世話までしなければならなかつた。後から考へて見ると自分ながらも好く出来たのに感服する位であつた。其頃の兵站監部の車輛と云へば僅か十二輛の輜重車があるのみで、荷物は表面上甚だ澤山では無い様であつて、線區司令部では僅かに有蓋貨車の三四輛程しか準備しない、然るに實際は如何であるかと云ふと、圓銀二十萬圓もある其の重い事、これだけでも忽ち貨車の三輛位はいる、又郵便電信材料などは、姫路郵便局の倉庫を借りて格納してあつた位であるから、是れも一通りの容積では無い、其外諸種の荷物、衛生材料、獸醫材料等は勿論の事、遂には酒保の荷物迄積まなければならのであるから、中

々線區司令部の配當した數位では足りない、大いに其派出員と交渉を行ふて漸く出發し得るに至つたのである。由來動員計畫の内にも馬匹車輛等の豫備数が極めて少ない、單に机の上の計算では考への届かない處があつて實際の役に立たない、他にも此様な例か少くない。

第五 祭禮の御輿

例の如く奏樂と萬歳聲裡に汽車は動いた、柴野留守師團長以下多くの見送り人の影をば早や後にして、姫路の城も霞の中に消へて仕舞ふた、時恰も晩春暑くもなく寒くもなく、而して又天氣は晴朗である普通の旅行をするに於てすらも、愉快極まる時である、況んや名譽ある此の戦争事業の一部を行ふが爲に出發するのである、何人と雖なんぞ夫れ愉快ならざるを得んやである。更に況んや至る處に於て非常なる熱心と非常なる景氣を以て、我が列車を送迎するに於ておやである、實際を云へば予は東京を出發する時の東海道附近の景氣に物足らぬ心地したのであるが、今度の出發たるや誠に天壤の差である、予は實に其の送迎の熱心なるに感服をした。町村はいざ知らず田畑の上に耕す翁媪でさへも鋤持つ手を止めて、是を天空にかざしつゝ其の枯れた聲をさらに枯らして萬歳を呼ぶではないか、路傍に守をされてゐる二三歳の小兒ですらも、紅葉の様な愛らしき手を聞いて萬歳を呼ぶではないか、小學校の小兒や娘達が日の丸の旗を振りつゝ萬歳を唱ふるの云はずもかなである、其外列車が停車場に着くと茶を運んで呉れる、菓子を入れて呉れる、甚しいのは汽車の進行途中に、大きな密柑やせんべいの袋、豆入の袋、遂には大きな旗の棒までも、磔を投げる様に列車の中へ投げ込むのもあつて、頭や首に瘡を出かした者もあつた。若し夫れ此の熱心なる且つ盛んなる送迎を、戦争以外に於て考へたならば、此の列車は天國に向つて進むのであろうか極樂に向つて進むのであろうか、如何に考へて見ても此の列車は黒い幕を掲げて待つて居る死の神の許に、少なくとも悲慘なる鮮血を流しに行くものとは思へない。斯様なことは冷靜なる頭腦を以て考ふる我々の口から出るのであるが、實際此の送迎を受けつゝ

ある間は何事も忘れ、萬衆に昇かれて神殿に向ふ御輿の上に乗つてゐる様で、其の何處に向ひつゝあるかを考ふる暇もないのである、人が萬歳を叫べば我も亦萬歳を叫ぶ唯、斯の如き有様であつた。

第六 幾度の感謝

平時ならば列車の中に居て、眺めも飽かぬ山陽道の好風景を見ながらに、楽しい歴史物語でもしつゝ行くべきであるが、今は只旗や提灯や萬歳を叫ぶ人の爲に、あたり好風景も蔽はれて汽車は遂に其の日の夕に岡山に着いた、軍隊食堂に於て食事をすべく命ぜられた、看護婦會とか婦人會とか云ふ高潔なる且つ艶麗なる子女が、武骨なる且つ粗漫なる我等以下兵卒の傍に侍して、食事の助けをして呉れる、西洋人迄も來つて同じようにこの勞を執る、其の如何なる程度迄國民が我々を待ちつゝあるかを想像し難い位である。此待遇を受けて何人か國家のために死を辭するものがある。予は食堂を出て、停車場建築物一方の二階に登り一椀のビールを與へられた、其處に居つた奥山兵站監が其人を予に紹介をした、予は始めて之れが岡山縣知事夫人である事を知つた。

一時間ばかりの下車の時間が終つて汽車は再び我々を乗せて動いた、多くの見送り人をプラットフォームに残し列車の煙は彼等を招く様に逐次其の呼吸を早めて、西へ〜と走つた、同様なる景氣と同様なる送迎に幾度か感謝しつゝ、予等の列車は進んだ、備前備中備後も過ぎ糸崎にて唯小時間の下車をした後、その夜の三時に列車は廣島驛に着き、最も愉快なる此列車より下るべく餘儀なくせられたのであつた、人馬材料の卸下を終へて兵站監部の宿舍と定められてあつた吉川旅館に着いた時は日は已に東天に昇つて居つた。

第七 精神か金力か

此の記録の筆の跡が流るゝ歲月を畫きつゝ最早内地を出發せんとする間に當つて、此の戦争に大關係を有してゐる一事を取り殘すことは、この筆が承知しないのである。ナポレオンが戦争に一番必要な物はなんであるかとの問に對して、七度答へた即ち金であるといふ話は、文明の利器が戦争に應用される様になつてからは、益々適切になつて來た是れが爲政府では事業繰延等をやつたが、なか〜夫れ位では足りないもので、二月十三日に一億圓の國庫債券を内地で募集して、五月二十三日には第二回の同額の債券を同じく内地で募集をした。是に應ずる者が常に募集額の四五倍以上にも昇つて、頗る景氣の好い事である、戦争前では、日本國自らの富の程度を自覺しなかつたものか、伊藤侯とか井上伯とか云ふ元老までが此の金といふ事に非常に心配をした相で、戦争をすとかしな〜とか大議論があつた中でも此の金問題か、中々勢力を占めておつたと云ふ事である。處が實際思つたよりは金が出る、案じるより生むが易いと云ふ譬の通り、なにやつて見ればやらぬ前に心配するよりはたやすいものである、戦争前に即ち明治三十六年の晩秋鴻の臺の總寧寺で二人の中學校の書生に會つて、種々談話の内に予が試に戦争は起るであらうか如何であらうかと問ふた。彼等は曰く、戦争をすとかしな〜とか云ふ話があるが日本も露西亞も金がないから起る氣遣はな〜といと一般の評判であると答へた、其處で予は其の説を攻撃して次ぎの如く云つた、今日の學生は理屈が勝つて元氣が乏しい、若しも金がないからとて戦争が出来ないと云ふのなら戦争は金の競べ合ひになるから、先づ戦争をしない前に兩國の金を競べて少ない方が負けたと云つて降参をすればよいことになる、これでは昔から戦争なんかは起りはしない、況してや昔から金が無くても戦争をやつてしかも成功した〜めしは幾らもある。亞米利加の獨立戦争は竹槍に席旗を立てると云ふ姿から始まつて、七年間も戦争を繼續して遂に獨立したではないか、佛國の大革命の後で非常に國が疲弊をして居つた際でも、英獨伊墮の聯合軍を總て打破つて却つて各國を威服させたではないか、露國の壓迫を受けつゝあつた瑞典、諸威の貧弱を以てカール十二世は露國に侵入したではないか、伊太利は分裂の後漸く是を統一しサージニヤ王國の寡兵を以てしても、奥太利の守備軍を伊太利半島から追ひ退けたではないか、それから昔に遡つて此類を數へて見れば幾等もある、苟くも國民が戦争をする氣になれば金がなくとも戦争が出来る、皆が着てゐる衣

服を一枚づゝ脱ぐと思へば金は出来る、況してや日清戦争以來一般に富んで来たのである、予等が中學校に居つた時代は、破れ袴をはいて居つたものであるが今の學生は皆羅紗服を着てゐる、其羅紗服を止めさへすれば、金は出来るのである何とて金が足らんと云ふぞ、抑も國の元氣は青年の元氣である、伊太利を興復してサージニヤ王國を建たのはマジニイ等の若年なる人の手から出来たのである、其青年が弱いことを云ふ様では誠に情ない。

貴君等のような青年が居つては國家のためにならぬ、寧ろ死んでしまふが好いと過劇に言つたので、右の書生が非常に怒つた事があつたが、實際其通りである。嘗に第一第二回募債のみならず、其の後に發表をした、第三第四第五回の募債に於ても常に募集額の四五倍の應募があつて、國民の資力の裊々として餘裕あることを證明して居る、寧ろ當局者も驚いた位であらうと察せらる、此處に至つて精神一到何事か成らざらんと予は力むのである。

第八 一攫千金の滿州經營

廣島滞在中親族故舊にも予が兄上にも會つて別れの盃を汲んだのである。併し予は日々劇務の爲他の人々の様に、到る處に散歩する程の暇はなかつた、殊に來るべき船舶輸送の指揮計畫をする大任務を帯びて居るから、宇品まで二三度も通ふて彼是と氣ばかりでも忙しかつた。面會人も中々少くなかつた、中には兵站監部の酒保にして呉れと頼むで來る向もあつた、其の頼み方が餘りに横着ではないか其の人の曰く、戦争は益々有利で結局の勝利は疑ひないが、其の後を經營する事が中々六ヶ敷い、それで此の滿州經營と云ふ事には今から手を出して地盤を固めて置かなくてはならん、私共も大いに是に志ざして居るから滿洲へ渡つて何か一事業を初め様と思ふ、それで兵站監部の酒保にして連て行つては呉れまいかと、斯様に云ふのである。其の云ひ方が餘りに面憎いから予は次の様に答へた、滿洲經營には君等の様な何か事業をして見ようかなんと云ふ薄弱な事では何が出来るものか、寧ろ君等の様な一攫千金式の商人が渡つては、日本の信用を害して經營どころか却て大なる害となる、少くとも一億圓位の大資本を以つて第

一に義州から奉天までの鐵道をかける、遼河の水路に汽船を浮べる、到る處に通信機關を擴張して商權を一時に我に握ると云ふ様にしなくては、百圓や千圓位の資本を以つて居る小商人共が蠅のたかる様に集まつたとて、何で滿洲經營が出来るものか、兵站部の酒保となつて一攫千金を夢見るよりは、廣島の町に屋臺店でも出すがよからうと大いに擊退をしてやつた事もあつて、こんな詰らない事に随分時間を潰された。

第六章 第一第二軍の戦闘

第一 南山攻略の捷報

五月二十六日に廣島に着くと、其の翌日號外賣が、予が泊つて居る旅館の前を頻りと通る、此の號外を見ると第二軍が金州及南山を攻撃して、是を占領したと云ふのであつた。茲に於て第二軍の進路が北に向ふのではなくて、南であつたことを知つた、ことに金州及南山は金州半島の咽喉に當つて、旅順攻撃の一着歩であつて首尾克く此の攻撃に成功したのと鴨綠江畔に於ける第一軍の成功は共に非常に喜んだのであつた。實は鴨綠江畔に於ける露兵を打ち破つたと云ひながら、猶敵前上陸をやつて後間もなく南山の堅固なる防禦陣地を攻撃するのであるから、頗る困難であつたらうに、此敵をも打ち破つて、茲に初めて露國陸軍の手並も分り胸を撫で下したと云ふ姿で、大いに喜んだ譯である。併しその死傷が約二千もあるのに少なからず眉をひそめた、實際此の時の我々の頭腦の中には日清戦争以來勿論兵數の少ない戦争を見てゐたのであつたから、鴨綠江畔の戦闘で五六百の死傷數すらも少しく多い様に感じたのに、今は二千といふのであるから實は聊か驚いたのであつた。併し其の後の戦闘の死傷が往々萬を數ふるもので考へて見れば、二千位は少しも驚くに足らないのである、殊に幾度か歩兵が突撃を繰返して成功せず、最後に最も猛烈なる突撃を行ふて漸く是を占領したと云ふのであるから、是は寧ろ二千の數は少いと云つてよい位である、而して未だ後方に

彈藥縦列などが上陸しない折、即ち充分の彈藥を持たない時に於て、假令死傷の數は多くとも歩兵の全力を用ひて幾度か成功しなかつた突撃を更に士氣を鼓舞して、一氣に是を占領しようといふ軍司令官の決心は、頗る適當であつたと考へる。併し此の攻撃は、實は頗る危険な攻撃であつた、即ち充分なる彈藥を持たないことである、併し之は止むを得なかつたのである、何んとなれば若し總ての彈藥縦列が上陸する時迄この攻撃を實行しなかつたならば、海城附近にあつた敵兵は南下して腹背敵を受くることになる。此場合の危険は寧ろ此豫備彈藥なき攻撃よりも一層危険であつたからである、兎に角この危き戦鬪を猛烈果敢に實行して成功したのであるから、更に一倍の喜びを加ふるのであつた。

第二 南山攻撃の戦況

此戦鬪經過は概要次ぎの如くである。

五月二十六日 午前着電

攻撃軍は本日(二十五日)豫定の如く第一線を龍王廟、三里庄、陳屋店、王家屯の線に進め午前五時半頃より同九時に渡り、金州を攻撃し又南山の敵砲と交戦す。

金州附近の敵狀に變りなく敵砲兵は盛に我隊を搜射し、目下猶時々我を砲撃中なるも我損害大ならず。

軍は明朝金州南山の敵を攻撃せんとす。軍の攻撃に連繫して金州附近を砲撃すべき艦隊の一部は本日來らず。

五月二十六日 午後着電

彼我の砲戦は二十六日早朝より約五時間に亘り其の間我軍艦三艘も金州灣に至り我に協力し、又敵砲艦一艘は大連灣にありて我が左翼を砲撃す、而して今や砲兵戦鬪にして金州のみは午前五時二十分我右に歸したり。

五月二十八日 大本營着 奥大將報告

軍は豫定の如く二十五日を以て攻撃準備を終り、同二十五日夜半より運動を起し、第四師團を右翼に、第一師團を中央に、第三師團を左翼に併列し、金州南山に向つて前進せしむ。此夜迅雷風雨咫尺を辨せず運動頗る困難なりき、同時に一部隊を以つて金州城を攻略せしむ。

二十六日午前四時三十分砲火を開始すべき筈なりしも、濃霧の爲五時三十分全砲兵は内山少將の指揮を以つて、南山に向つて砲撃を開始し、同六時頃より我艦隊の四隻は金州灣より此砲撃を援助せり、敵は全備砲を以つて是に應戦し茲に激烈なる砲戦を交へ、約三時間の後南山の敵火大いに減衰せり、此に於て各師團の歩兵は前進を起し一進一止して敵の砲火を冒し、敵の第一線を去る約三百乃至五百五十米突の地に達せり。

午前十一時敵の露天砲は我が激烈なる砲火に依り、悉く沈黙せしも速射野砲約二中队は疾く退却して、南關嶺の高地に據り終局に至る迄時々我を射撃せり。午前十時頃敵の砲艦一隻和尚島砲臺東方に來り、午後二時頃迄我第三師團の左側背を砲撃し、且つ小蒸汽艇五艘に搭載せる陸戦隊を紅土涯附近に上陸せしめんとせしも、我一部隊之に向ひしを以て終に歸還せり。又南山南方大房身に在る敵の九洲知米砲四門は、午後七時頃迄我第三師團に向つて砲撃を繼續せり、我左翼に在る砲兵之と應戦せしも距離遠くして充分の效力を現す能はず、敵の占領せる南山の陣地は峻峻なる高地線に半永久築城を施し、大小砲約七十門、機關砲八門を備へ、連續圍繞せる數層の塹壕線には銃眼を穿ちたる掩蔽部を作り、其の前方には數多の地雷及鐵條網を設け、且つ此間隔を補ふに多數の機關砲を以てせり。之に對する我砲兵は全力を擧げて、之か破壊に努力し又屢々陣地を交換して敵に近接し、以て歩兵の前進に勢力を與へたりしも、敵砲兵の抵抗頗る頑強なりしを以て午後五時に至る、此の時我歩兵の爲未だ突撃の進路を開くに至らず、又我左翼に在る第三師團は敵の包圍を受くるのみならず、敵は漸次其歩兵を左翼前に増加し、且つ南關嶺に在る敵砲兵二中队は此の攻撃を援助し、益々師團の左側に迫らんとす。而して我携行砲兵彈藥は爲に盡きんとして、戦鬪を永く繼續する事能ざるに至れり、依つて止むを得ず歩兵をして損害を顧みず強襲を

行はしめ、砲兵は補充し得る彈藥を竭くして敵を猛射せしめたり。我第一師團の歩兵は意氣衝天の勇を鼓して、敵陣に向ひ突撃せしも敵の猛烈なる亂射と側射に依り、多數の死傷者を生じて前進を繼續する事を得ず、頗る苦戦に陥りしが、恰も好し此時金州灣に在る我艦隊は敵線の左翼に向つて、更に猛火を開き砲兵第四聯隊に協力し敵砲兵の撲滅を勉め、第四師團は此の期に乗じ全力を擧げて敵の左翼に迫り先づ高地線に進む、此に於て第一及第三師團は之に協力し全線を擧げて、勇奮突入し累々たる死屍を越へて敵兵に肉薄し、劍尖相接する迄に激戦し遂に南山を攻撃して各堡壘上に國旗を翻せり。時に午後七時過ぎなり。

敵は潰亂しつゝ旅順方向に退却せり、此退却に當り敵は大房身の火藥庫を爆發したり。軍は一部を以て敵を追撃したる後全隊戰場に露營す、此時士氣大いに振ひ萬歳の歡呼諸方面に起り砲兵は全力を盡して敵を追撃す。

我に對せし敵の兵力は野戰軍第一師團、野戰砲二中隊、要塞砲兵、海軍兵若干なり、察するに敵は旅順及大連灣を掩護する爲め、成し得る限り南山陣地に據り我前進を防止せんことを勉めたるものにして、尙其防禦工事を増加する計畫ありしが如し。

敵の死傷は不明なるも戰場に遺棄せし死體のみにも五百名を下らず、捕虜は將校以下若干名、戦利品は砲約六十八門、機關砲十門、發電用蒸汽機關一個、電氣燈三個、ダイナモーター一個、地雷鐵罐約五十個、其の小銃及び彈藥諸材料等なり、其詳細は目下取調べ中我軍の死傷將校以下約三千五百名。

終に臨みて海軍の有力なる援助に對しては深く其厚志を謝す。

五月二十八日 午前大本營著

軍は今朝(二十七日)午前十時三十分中村少將の指揮する一支隊(歩兵砲兵及工兵より成る)を派遣し、南關嶺を占領し、主力は本日南山附近の諸部落に宿營し、諸隊の整頓を計り準備出來次第豫定の線に向ひて前進せんとす。

敵は旅順方向に退却し其の一部は今朝三十里堡(青泥窪西北方)の停車場を守備しありしが、午前十時頃同停車場

を燒きて旅順方向に退却せり。

昨二十六日の戦鬪に於ける戦利品の主なるもの大小口徑砲約五十門、敵の遺棄せし死者のみにも約四百我死傷三千内外にして目下尙取調中。

第三 雪裡店暨陽邊門の占領

第一軍は鳳凰城、寬甸城を占領してから更に進んで、其左縱隊は五月十二日雪裡店を占領した。其右縱隊は同二十八日を以て暨陽邊門を占領した。是より先五月十日に敵は鴨綠江の上流を繞りて、朝鮮安州の兵站司令部を襲ふたといふ出來事もあつたが、其兵站司令部に附屬されて居つた、一、二小隊の歩兵と、比隣兵站司令部の守備兵の應援とに依つて首尾よく是を撃退した、實際此頃は第一軍の戦鬪部隊が鳳凰城及寬甸を占領した後で後方では油斷の起るべき時である。殊に鴨綠江と云ふ河を控へて長白山脈の支脈が其前面を掩ふて居るから、此の間をくゞつて敵が來襲しやうと云ふことは恐らくは夢にもなかつたであらう。然し兵站司令官の搜索が行き届いて、比隣兵站司令部の兵の援を受くるまでに餘裕のあつたのは、萬一に備ふる兵站司令官の周密なる注意から起つて賞すべき事である、元來戦争では不時の出來事が起るのが常であつて、常に此の變に應ずるの心掛けがなくてはならん。

第七章 乗船より上陸

第一 雄渾壯大の光景

六月一日は我兵站監部の乗船すべく命ぜられた日であつた。船は佐渡丸と云て六千噸程の歐洲通ひの郵船會社の汽船であつた、兵站監部と共に此の船に乗るべく命ぜられたのは歩兵第四十聯隊の一中隊(中隊長竹本大尉)野戰砲兵第十聯隊の一中隊(中隊長平江猛虎)第十師團第六補助輸卒隊の二小隊であつた、予が乗船の計畫は吉田中佐及兵站監の

是認する處となつた、荷物は五月三十一日より、人馬は六月一日早朝より搭載を行つた、搭載は困難なる作業であるが一般の熱心と協同動作とによつて無難に終つたのが、午後四時であつた。予は船の上に在つて一般の監視をなし、又船内に於ける注意や命令を印刷して居つたが船の上甲板に立つて、宇品港の全般を眺めた時に壯大なる一種の感覺に打たれた、廣くもない港の中に數十艘の大汽船が碇泊して、曾て想像したよりも實際は更に盛んなものである、海岸には小棧橋が十數箇あつて荷船、馬船、蒸汽船等が、殆ど海の全面を掩ふて陸と船との間に入り交り動いて居る、一見頗る亂れ易い様で實は整然として少しも過らない、船夫もよく慣れ頗る柔順であつて幾萬の人馬を乗船せしめた後であると云ふ事が分る。明治二十六年に廣島を去つた時に見た宇品は未だ寂寥たるもので、寧ろ風景の好いのを賞した位で、幼きをり父上と共に小船に乗つて此近海を魚釣したときの感想と、今は全く異なつて雄大なる日本國力發展の門口の様に思はれた。

午後四時總ての搭載が終つて佐渡丸は其雄大なる船體を以つて滑かなる海面を泡立てつゝ宇品を後に出帆をした、彼れのビストンの呼吸は漸次早まりつゝ沖へ沖へと進行する間に、似の島や宇品島の影も何時しか海面の彼方に雲とまがう様になつて、西の空の夕べが斜に海面の一方を輝す頃には既に宮島の影も見えずなつて、名も知らない島と島との間を走つてゐた、此の夜は晝間の氣配りと疲労との爲めに上甲板の船樓に設けられてあつた寢室の内に、吉川氏と共に快き眠りを彼のハンモックに似たる寢臺の上に貪つたのである。

第二 緑の山紫の山

象の吠ゆる様な汽笛のために眠りを醒まされて起き上つたときに、遙か彼方に一艘の船が留まつて彼れと是れとの間に信號があつたらしく、我船は漸く向ふの船に近付いたときに此の船は昨夕我より前に出帆した關西丸であると云ふ事を知つた、此船の汽笛に故障を生じて進行が困難であると云ふ事を知つた。而して此船には數多の電信材料、

就中二千本餘りの電信柱が搭載されてあつて、此電柱の到着が此故障の爲めに遅れるとの大江電信部副官の報告があつた、又此船には糧秣の幾部分が搭載されてあつて糧餉部員も乗り込んで居つたのであつたが、此部員は此船から我船に乗りかへをした。斯様な事のために我船は暫時燈籠に其進行を留めたのであつたが、事の處置が終つて船は再び朝霧の間を悠然として馬關海峡の方に進行を始めた。明治三十五年春砲臺見學のために一週間許りも滞在をして、種々の面白き話の種を作つた門司と下ノ關の間を過ぎて、幼き折り單獨の初航海をして其の狂瀾怒濤の爲めに小さき胸を痛めた玄海灘に出で、六連島を右に見て北々西の方向に進行をした。彼の青々たる筑前の山も長門の峯も別れを惜むが様に、美しき青や緑や而して紫迄の光線を我々の眼に注いだ時の我々の感想は何んとなく別の物であつた。是れは日本を一步離るれば決して再び此青き山紫の山我々は再び是を見る事か出来るであらうか、予は實に生きても死んでも見ないと云ふ決心を持つて居つた。考へて見れば日本は誠に天與の國である、其氣候、其風土、其景色、殊に其秀麗なる山水に於て幾千年の昔我が祖宗の生活したときから、今日に至る迄、最も幸福なる恩澤を潤はしつゝ來つたのであるから、其住居を變ずることを嫌ふ處の一種の情が先天的に我國人の腦裏にあるのであるが、今から先きは此美麗なる本國を去ると云ふ考を抱いてはならん、國家の氣運は此美麗なる島國に立籠る事を得せしめのである。今は亞細亞的日本若しくは更に大きへ云へば、世界的日本とならなければならん時である。軍事にあり、學事にあり、將た農業にあり、商業にあり、工業にあり、大いに外に向つて發展をしなければならん、斯様にして日本國人の總ての者が引込み思案を止めて、大いに世界少くとも亞細亞に移住もし殖民をして立廻り、此八千萬米突を中徑とせる地球表面も狭いと云ふ様になつて欲しいものである、寧ろ青い山紫の山、而して紫の山を戀しいと云はうぞ、懸軍長驅赴く處に其子孫を残して大々的大日本帝國版圖を造ると云ふ考へでなくてはならぬ、予が決心は即ち是から起つたのである。

第三 五里霧中の進航

豊岐對島の影も見しや見ざりしや、船は唯其の推進機の廻轉と舵機の動かし方に依つて、我が眼界の達する水平線を圓形に畫く中に進行するのである。巨濟島沖も何時しか過ぎて、朝鮮の西南角を廻る頃から南より来る暖流は黄海の面を拂ふ冷氣に其姿を變へつゝ海面一體霧を形造るのである。今迄晴朗なる天候と浪靜なる海面に寧ろ航海の愉快を感じて居つた吾々に大なる不愉快と危惧とを與へた、船は殆んど五分間に一度程宛大いなる汽笛を鳴らしつつ、若干速度を緩めて進行するのであつた、船長はアンダソンと云ふ英國人で大膽に此航海を續けた。

初めの頃は何れも皆愉快相に此甲板の上に出でて海面を眺め風景を賞して安樂椅子も多く占領され、相互の古い航海の經驗を物語つて、航海は愉快なものであると云ふ心持が自然に起つて諸種の空想を逞ふした、或者は相並んで其洋行の物語りを歩みながら得意に語つて居る、或者は彼が喫む煙草の煙を輪に吹きつゝ海面の一方を見ながら得意に島や陸や、而して岬の名を語つて居る。斯様な有様であつたが船中生活の二三日も過ぎると漸く趣きが變つて船樓の一室に籠つて新聞や雑誌を見るものも有れば、喫煙室の内に黒白の勝負を争ふ者もあつて、漸く無聊を感じて遂に三日目の夜に兵卒の中から藝人を撰んで廣間に狂言の花を咲かせた事も有つた。

第四 信號の交換

四日目の朝、白翎島沖に達した、此島には當時我海軍根據地のあつた長山列島から来る處の、海底電線の中繼をする信號所が設けられてあつた。船長は宇品碇泊場司令官より此島にて信號を交換すべく命ぜられた、然るに昨夜來の霧は白翎島の山角を顯すかと思へば、又忽ち遮り晴れんとしては又忽ち蔽ひ、遂に船を此處に繫留して殆ど一日以上を経過し、最後の處置として船長は主計長と下士と水夫とを乗せて白翎島に送つた、是れが歸りを待つに又殆ど半日を

費して敵に對する航海の安全を確め得た。再び霧中を其不愉快なるブウー／＼を續けつゝ進行をした。六日の朝未だ東雲の暗黒王の支配せる世界を訪れぬ前に、船は其錨を海に投げた、總ての人は甲板の上に立ちて其の上陸すべき清國の地をみるべく、背をこらした。東天の一角を赤く色取りをした、光明王の恩澤の一部を凝視せるものゝ方向に投げ與へた時に、我々は其の貴なる服をつけたる丈の短き巾の廣き未だねむ相に寝てゐるらしい、清國の山河に初對面の挨拶をした。

第五 初對面の大陸

予が最も記憶すべき紀念日の一つは六月の六日である。即ち清國の海岸に上陸した日である、船の投錨をした處は上陸すべき南尖澳から凡二里を隔てた處であつて、此處から人馬材料は中繼船艇船及小蒸汽船等に依つて海岸まで運ばるゝのである。海岸とは云ふものゝ滿朝の時には別に不都合も無いが（海岸が非常に遠淺であるから）干潮の時には船から更に水中腿に達するへん迄入りて十町餘りも渉るのであるから、其困難は一通りで無い。若し雨や風の有つた時なれば更に此の困難の十倍以上も感ずるのであらうと察せられる、然し遼東半島の海岸は至る處如斯きであるから致し方がない。

予は人馬材料の積み卸しを監視すべく最後まで船内にあつた、甲板の上に立つて大陸とは如何なるものであるかと眺めた時に、殆んど地平線に接する處に薄黒き一直線が、綠色の海と瑠璃色なる空とを境して、渺漫なる其の真相を顯して居る。唯僅かに西北の方向に少しく高く恰も此の一直線を畫いた時に、過ちて筆の尖を此線の外に挑ねて、幼き時用器畫を學むで屢々失敗をした線の其の様な此の筆のはじきは即ち大孤山である、若しも此の山さへも無かつたなれば殆んど何處に上陸するや豫想の付かん事であるが、抑も大陸とは平地と云ふ意味であるか、其れ共又大陸の山なるものは、我々の目につかぬ程低きものであらうかとの奇妙なる疑問が胸中に浮かんた。是が予が初めて大陸

なるものを見た時の感想である。

本船と海岸との間に幾度か小蒸汽が數多の艇船の列を率ゐて蜿蜒長蛇の如く走つて居る、此等の船を監視する様に我々の視線が大孤山に通ずる方向に一艘の帝國砲艦が其の旭日旗を橋頭に翻しつゝ、莊嚴なる態勢を保ちて居る、此の小なる砲艦でさへも敵地に上陸する我々の爲には頗る意を強くする處のものである。

第八章 上陸後の初動

第一 初夜の支那家屋

午後五時頃に予が乗つて居る艇船は小蒸汽に引かれて陸の方に進んだ。一時間半ばかりして漸く陸に近付いた。木もなく草も無く極めて露骨に其地質學的岩層を顯はして居る此半島の最西南角を廻つて僅かなる曲形を畫いた處、即ち是が上陸點と指差された。陸には白き三角形の天幕が設けられて有つて、此寂寞たる地を更に一層寂寞に感ぜしめた。運好く満潮の時であつたから靴の尖をも水に浸すことなく岩角を傳ふて上陸をした。兵站監及參謀は予を海岸に迎へて全部の上陸を終つたことを告げたときに、予が勞を謝し且其安心の色を表はしつゝ予と共に本夜宿泊すべき人家の方に徐ろに足を運んだ。四五丁も進んだときに設營の主計は予等を迎へ暗き陰氣なる且つ一種異様の臭氣ある支那家屋の一方の部屋に予等を導いた。主計の語る所に依れば此處が此村中の最良の家であると云ふたのに却て予には寧ろ是が家であるかと疑つたのである、家なるものは入口の左右に六疊ばかりの只二つの部屋があつて、壁は何十年かの煤煙を以つて掩はれてをる。腰をかくる處には唯粗大な竹を以て作られたる敷物といふよりも寧ろ席が敷かれ、土間は彼が祖先からの堆き塵を以て満たされてをる、家具と云へば唯僅かに長持の様なる大なる箱があつて、是等を見得べき光線を通じて居るその窓は各室に一つ宛あつて、之に拵つてをる障子は殆ど其骨ばかりが無作法に露はされ

てをる。若しも此家を日本に持つて來たなれば人は物置か倉かといふであらう、斯様なる家に兵站監、參謀、副官、主計理事、憲兵長までが宿つたのであつた、何たる不景氣なる家であるぞよ。

兵站監部の上陸は當時大孤山にあつた第十師團司令部に電信によつて報告された。師團司令部よりは敵の僅かなる騎兵が此前夜に行はれたる奇襲に脅かされし結果、南尖半島に侵入したとの報知を傳へた。其處で其夜は憲兵をして此村落の近傍を搜索せしめ、又碇泊場のための守備歩兵一分隊を、特に此村落の北方に移して警戒せしむる等の處置をして衣帶を緩めず睡りに就いた。而うすると憲兵が屢々報告を齎らして、或は銃聲が聞へたとか、或は向ふの丘に敵が現はれたとかいふので有るから其夜は疲勞をして居りながらも僅かに假眠をする位で少しも寝なかつた。夜が明けて是等の事實を精確に調べると全然嘘で、所謂風聲鶴唳に驚かされたのであつた。

第二 南尖より大孤山

六月七日は憲兵を先頭に、いはゞ警戒斥候の任務を持たして進め、其後から乗馬者、徒歩者、荷物といふ順序に南尖から大孤山に向つて行軍をした。地形は大うねりの波形をして、限りなく續き、森もなければ林もなく、只僅かに谷間に小部落を點在するのみで、其他は一望千里、長の二三寸ばかりの高梁の芽が此平原の全部を美しく蔽てをる。朗かなる天候は初夏温暖の光線を此の平原に注いで、此幼なき植物は生々として其生活を樂しむが様に其緑の色を顯はしてをる。嗚呼此の平原、此の植物、汝等は戦争の起つてをるのを知つてをるのであろうか。馬脚は砂塵を揚げて西北に其半身を天空に捧げて居る、大孤山の方向に進んで其日の午後二時に車馬絡繹たる大孤山街の内にある師團司令部に着いた。先發者が兵站監部のために撰定をした家に赴いて予等は武裝を下ろした、恰も此の時は第十師團司令部が岫巖から南下した敵を撃攘すべく大孤山を去つて土城子を経て東房身に向つたときで、敵は野戰砲兵一中隊に歩兵の一大隊ばかりを合した位のもので、東房身西北一帶の山地を占領してをつた。師團は敵の砲數から打算して此敵を可成優勢な敵だと

考へて大袈裟に是を攻撃しやうとしたが、元より弱小の敵であるから岫巖方向に退却した。師團は之を追撃して再び岫巖西北方高地に據る敵を攻撃して、六月八日に遂に岫巖を占領し此敵を追ふて王家堡子附近まで達した。最初東房身附近に顯はれた敵の兵力を過大に見たものであるから第一軍から近衛師團の淺田旅團を基幹として作つたる混成旅團を、鳳凰城から岫巖方面に南下せしめて、第十師團に協力したのであつた。敵はこの支隊が側面に現はれたので退却を始めた、而して第十師團が此敵を攻撃しやうとした時に淺田支隊は既に戦はずして岫巖を占領したのであつた。

第三 混雑と喧噪

兵站監部は大孤山に到着するや否や師團の糧餉部がやつてをつた大孤山土城子間の糧秣輸送を引受け、先づ土城子に兵站司令部を開設した。司令官は歩兵少佐芦原市氏である、而して軍が岫巖に向つて前進をしたときに、更に兵站司令部を東房身に置いた、司令官は歩兵少佐岡泰郷氏である。此司令部は間もなく孫家屯に移つて又暫くの後小灣溝に移つた、而して東房身には支部が置かれてあつた、最初兵站監部の輸送のとき只僅二箇の兵站司令部しか連れて來ないものであるから、兵站監部は自ら大孤山兵站司令部を兼ねた、兵站經理部は専ら車輛を集めて糧秣の輸送をする、監本部では軍用旅券を與へるとか、宿舍及給養をするとか、斯様な分業の下に兵站司令部の業務が實行されて隨分混雑と多忙を極めた。時としては南尖から上陸をした補助輸卒隊などが、其非常なる道路の泥濘のために、一日で大孤山に達する事か出來ないで途中で日が暮れる。宿る處もなければ給養をする處も無く夜半に人を馳せて其の困難を訴ふるので、夜半から五六百人前の炊出しをして握飯を拵へ輸卒隊の彷彿をせる處まで持たしてやつたこともあつた。或は又夜半に四五百人の補充兵が到着して其れ宿舍を與へろ、それ飯を食はせといふので宿舍を案内するやら。飯を炊くやら、大混雑で炊事係などは殆ど毎夜ろくに寝ない位であつた。而して又經理部の方では其周圍に設けられた兵站倉庫の前に、毎日少なくとも三百、多いときには五六百の支那馬車が夜の明けぬ中から集つて大に雜踏を極める。殊

に彼の粗大に岩丈に出來てをる支那車輛が、互に競争をしてガラ／＼ゴロ／＼轉ばすし、此音と同時に彼等が牛馬を御する聲、即ちウオー／＼レイ／＼アタ／＼エエイ／＼イ、／＼、といふ様な不思議なる牛馬間の言葉を使ふて、其が一時に幾百といふ程集るから其喧しいことといふもの譬ふるにもの無い、如何なる形容詞も恐くは此喧噪を表はすことは出來まい。其が毎朝三四時から始まるのであるから、殆ど夜半から起される様な感覺がして、非常に支那人を面悪く感じたことも屢々であつたが、考へてみれば是が野戰師團の生命を繋いでをる緒綱であるかと思へば致方がない。

第四 不思議なる車

一體支那馬車といふものは内地で見ることを得ない岩丈なものである。其制式は恐らくは一千年も前のものであるうかと思ふ程簡單で、且大きく且粗大なものである。其車輪の如きは最も單簡なる考案で片假名の「キ」の字の周圍に輪を畫いたといふ形で幅とか轂とかいふものが全くない、而して其輪鐵は一條の鐵片ではなくて輻の周圍に厚い板を大きな釘を以て打付けたものである。其車輪と車軸との關係は全く普通の車の様ではなくて鐵道に用ゆる其れの様である、而して此車軸の上に巾二尺五寸長さ五尺もあつて非常に太い材木や厚い材木を以つて造られたる車臺が乗せられてある。即ち車の磨擦は車輪と車軸間に生ずるものではなくて車臺と車軸間に生ずるものである。車臺の前には大なる轆桿が二本連接してある、此の轆桿の間に丈夫なる支那馬を入れて車の負擔量の一部を此馬の脊に負はせる、此馬の前には少くとも二頭、多いのは四五頭の牛馬を着けて無雜作に二本の綱によつて車を挽く様になつて居る、其轆具を見ると最も簡單な頸圈と是に連る轆索とより出來て居る、其頸圈たるや一見頗る滑稽である、藁か綿を入れた首巻に左右二本の棒を此の首巻の上から當てたばかりである。然し此構造は極めて單簡なるにも拘らずよく支那馬の馬體に適合して同時に支那馬も亦是を輾くに慣れて居る。而して又此最も簡單に且つ最も粗大に出來てをる支那馬車は、實際を調べて見ると支那の土地の運搬具としては極めて適當なのである。支那の道なるものは全く皆自然道路で、し

かも其土質が極めて緻密なる粘土性であるから、少しく車を運行すれば直に深い轍痕を印して殆ど破壊に至らしめる。四五十輛の車か通つたものなら忽に泥濘となる、然らずとも道其ものは平時から非常に悪く、川には橋梁の架設がない、斯様な始末であるから連も尋常一様の車を以つて此土地に運轉せしむることが出来ない、是は要するに最も悪い路を車輪の半分も泥中に没入しても馬の力でウン／＼何でもかでも轆きすり廻すと云ふ流儀であるから、此粗大なる岩丈なる不可思議の車が此の土地に於て鼻を高くしてをるのである。

第五 愚劣なる軍政官

此車に就いて思ひ當つたことがある、如何なる理窟があつても、又理想の事柄であつても、又はいかに好いと感じたる車柄であつても、其の土地に適はなければ役に立つものでない。今日人權論が熾になつて博愛主義が廣まつて、壓制のことや肉體の刑罰がいやに文明を氣取つて不道理の様に感ぜられて居るが、是は文明の理想と事柄を觀察してをる人間の間に於けることで、昔から非常な壓制の下に生活し殘酷な刑罰の下に懲戒されて居る者に向つて、何で此人權論と博愛主義から起る政治の仕方が役に立つものか。事實が既に此の事を證明してをる、軍が清國に上陸すると軍政委員なるものが編成されて、人口の千以上もあろう乎といふ町には軍政署と云ふ役所が設けられて、是が荒されたる戦場の後にあつて其の地方の政治に與かると云ふ其意はきわめて宜しいが是を編成してをる人達が極めて其要を得ない、戦争前から支那に於て支那人を教育するとか、支那の或顧問をするとか、統一的に是を云へば支那人を容に取つて生活をして居つた、今一つ云ひかへれば支那人の爲を計つてをつた所謂支那通の人間を長官として、其の下に生嚙りの法律をやつた憲兵長や憲兵が附いて、大きな軍政署となつて相槌を打つてをる。彼等の頭には日本で聞いたの事だか薩張判らん、軍政を布くと云ふよりは人民の太鼓持となつて相槌を打つてをる。彼等の頭には日本で聞いた人權論や法理論より外にない、人權論や法理論は、何處へ行つても神聖なる理窟で是に敵するものは無いと云ふ様な

考へから政を布くと云ふことは人民に恩を看せる事であつて、刑罰を加ふるには充分なる證據に依らなければならんと云ふ誤解からして、軍隊に非常なる不利益を與へる。即ち支那人は恩に押れて日本人は氣安い人間である、日本人の罰は恐い事はないと高をく／＼つて仕舞ふから、支那人等は益々附上る、金は取れる丈取つてやれと云ふ流義で驚く程物價を高くする、露探は白晝を横行してをる、其揚句は鐵砲を窃む、軍馬を横取りするといふ様な事になつて、萬事が馬鹿氣で話にならない。彼等支那人は幾千年の昔から壓制に壓制を加へられて。其官吏官廳に對する思想は地層の下にある石盤石の如く壓迫されて、扁平になつてをるのである、其の受けてをる刑罰は、太古代から少しも變化のしたことの無い、我々が小兒の時に聞いた、地獄のやうな怖しい肉體的のものである、其れでも今日迄彼等支那人は何の不平もなく虫けらのやうに其の生命を食つてをる、又實際彼等愚昧の人民を治めて行くのは、是より外にないものである。恰も到處人の歩けない様な悪い道を有つてをる、此支那に於て物を運搬するに支那馬車より外にないことと同様である、又彼等支那人に美妙なる人權論と緻密なる法理論とを當てはめ様として、大なる不利益を來たしたのは恰も數多の自轉車を此地に持つて來て、悉く毀はして終ふたのと同様である。實際我兵站監部でも二十輛餘りの自轉車を内地から持つて來たが、遼陽まで來る内に完全なのが僅かに四五輛しか残つてをらなかつた。

第九章 得利寺の戦闘

第一 海軍の協力

我海軍は、五月十五日に蓋州角の砲撃をしてから後、其の一部を以て南山攻撃の準備の爲に五月十七日に金洲灣を掃海し、他の一部は十九日に第十師團の上陸を掩護し、而して翌二十日には、又他の一部が旅順口の強行偵察をして、同じく廿六日に砲艦を以て金洲灣に於て南山攻撃を援助した。五月卅日に第二次、六月六日に第三次、翌七日第

四次の旅順口強行偵察をして、最後の日には蓋州附近の沿岸の威嚇砲撃までもやつた、而して同じく十三日に又もや第五次の旅順口強行偵察をやつた、翌十四日には他の一部を以て小平島附近に於る、陸軍の威力偵察に勢援するため小平島以西の陸岸に在る、敵兵及其哨處を砲撃したが、殊勝にもノーウキツク及驅逐艇十艘も旅順口の方向より進んで来た、其處で敵を誘ふがために退却しつゝ砲撃をしたが、敵は午後三時頃元来た方に引返したといふこともあつた是等の動作は専ら水雷艇隊や驅逐艇隊の行ふた處で、南山蓋州等の砲撃は砲艦が行ふた所で海軍の主艦隊の大部は長山列島の根據地に假泊して居つたのである、以上の諸動作は何れも其目的を達し、又多少の損害を敵に與へたが、唯聊か不幸なる事は六月十三日水雷布設隊の臺北丸が機械水雷を沈設中に、其水雷が爆發して將校以下二三十名の損害を受けた事である。

第二 得利寺の戦況

六月十八日 午後大本營着 奥大將發

六月十三日軍は普蘭店大沙河の線を出發し右縦隊を大沙河に沿ひ、中央縦隊を鐵道線に沿ひ、左縦隊を吳家屯(復州街道上)四川溝大河岸に通ずる道路に沿ひ、騎兵部隊を皮子窩熊岳街道を前進せしめ各縦隊は其進路上の少數の敵兵を驅逐しつゝ前進せり。十四日左縦隊は那家嶺附近に達す、右及中央縦隊は相連繫して、得利寺南方約十二吉羅の趙家屯大平溝の線に達し、敵兵大房身より北部龍王廟に亘る線を占領するを知り、更に進んで王家屯廟家屯の線を占領し、午後三時より日没に至る迄砲戦を繼續せり。

十五日軍は得利寺附近の敵を攻撃せんがため右縦隊をして、宗家屯より溫家屯北方高地に亘る線を固守せしめ、中央縦隊をして夜間を利用して虞河屯附近より大陽溝西方高地に前進せしむ、此朝濃霧あり午前五時三十分砲火を開始し、砲戦漸次劇烈と爲りつゝある間に中央縦隊の復州河以北の地區は漸次苦戦に陥りたるも、其攻撃前進は

著しく進捗し、加ふるに本日黎明復州方面より急行せる歩兵及砲兵より成る一隊は、午前九時三十分王家屯西方高地に達し、中央縦隊と協力し午前十一時大房身附近の敵を驅逐するを得たり。然れども龍潭山山嘴及龍王廟高地に在りし敵の砲兵は猛烈に此の方面を射撃し、中央縦隊及復州方面より來りし一隊は、此猛火を冒し險崖峻坂を攀登して前進せるも右縦隊の右翼隊方面の敵兵は依然優勢を以て我に當り屢々攻勢に轉ぜんとせり。因て軍の總豫備隊たる歩兵を前後二回此方面に増加す。是より先右縦隊の右翼隊方面危急を告ぐるに當り、騎兵部隊も亦右縦隊の右翼に到着し、之に連繫し猛烈に敵の左側背を脅威せしめたり。敵は全く我包圍中に陥りしも、頑強にして屈せず。而も敵の後續隊戰場に到着したるが如く屢々逆襲を以て戦況を挽回せんとせしも、遂に我軍の攻撃力に抵抗する能はず午後三時頃より退却を始め、我追撃射撃に因り潰亂せしも、軍は地形上猛烈なる追撃を行ふを得ず此夜戰場に夜を徹せり。

此日左縦隊の主力は高家屯附近に於て北方に對し陣地を占領し軍の左側を掩護しありしが、午前十時五十分敵の歩兵約七八百馬家房身より西龍口を経て吳家屯方向に退却せるを知り、歩兵二中隊砲兵一中隊を紅家屯東方高地上に差遣して之を待つ、午後一時後に至り敵兵豫想の如く龍口後以西に退却し來りたるを以て大に之に損害を與へたり。

此日戦闘に參與せし敵の兵力にして、始より陣地に在りしものは歩兵二十五大隊騎兵十七中隊砲九十八門なるも、戦闘間更に後方より増加せし部隊あり。

敵の死傷未詳なるも、戰場に遺棄せる死屍は右縦隊方面のみにて約六百にして、軍旗及速射砲十四門等を鹵獲し捕虜は第四聯隊長以下將校六下士卒三百なり、又捕虜將校の言に依れば第一軍團長輕傷、第一師團長重傷、第一聯隊長戦死、第二、第三聯隊長負傷せりと。我軍の死傷目下取調中なるも千名以下なり。

十五日の戦鬪は兵力約二師團半而も堅固なる陣地に據れる敵を攻撃し、遂に之を潰走に至らしむるを得たるは偏に陛下の御稜威に依る。

第三 勇將にして愚將

此戦鬪は滿州に於ける第三回の戦鬪であつて、勝利は矢張我軍の得る所となつた、然し考へてみれば随分危ふい戦鬪であつた。是より先クロバトキンは其兵力を遼陽附近に集結して、我軍を此處に引附け一舉に決戦して、逸以て勞を迎ふると云ふ戰略的考案を以てをつたのである。然るに皇帝及政府の命令に依つて速に旅順を救援すべく餘義なくされたのであつた。其處で彼は約二師團半の兵力を猛將シタケリベルグに授けて金州及南山を攻撃した我第二軍の背後に向はしめ、クロバトキ自身は主力を提げて其後援として海城に來たのであつた。其南下の速力は極めて大なるもので、忽ち大石橋、蓋平、熊岳城、瓦房店を越へ得利寺附近まで前進した時に、我第二軍の北進と相逢ふた。彼は金州より旅順に向ふ我軍の背後掩護のために出されたる一小部隊に遭遇せんことを豫期してをつたのであろうに、計らずも大軍の北進するを認めた時に慮外の感覺から恐らくはシタケリベルグが我軍を非常に優勢なるものと判断したのであろう。彼は其任務を行ふに躊躇した、其處で非常なる速力を以て南下しつゝありし其行進を俄かに止めて、得利寺附近の隘路口を扼せんが爲めに其北方高地に於て守勢を取るべく決心をして、其兵力を此處に集むるのに忙しかつたのである。即ち露軍の士氣は此處に一頓座を來し我軍の思ふがまゝに委して彼を攻撃せしめたのである。戦が始つて彼は頑強に抵抗したに拘らず、終に包圍攻撃をされて敗走した。若しもシタケリベルグが正當に我兵力を判断し適當なる決心を以つて大速力なる其南下の運動を繼續したなれば、第二軍が南山攻撃の後戦鬪力の回復や、戦鬪序列の變換や後續上陸隊の到着等にて混雜しつゝあつて未だ充分彼に備へざる内に、彼が我軍を攻撃して雌雄を決したならば天は或は勝者の榮譽を露軍に與へたかも知れない。而もシタケリベルグは其判断と決心を誤つて得利寺附近に

嚙り付いて終に旅順を救援すべからざるの大勢を造つたのである。彼シタケリベルグは勇將たりと雖も遂に智將たりといふを得ないのである。

第四 疾風迅雷的行動

是に反して我第二軍は南山攻撃の後僅か半月経つか経たぬ間に速に整頓し、速に戦鬪力を充實し、速に第五師團の増加を得て敵に南下の行動あるや、忽ち是を迎へ、忽ち是を攻撃し、忽ち之を包圍して敵を敗走に陥らしめた。誠に此間の行動は疾風迅雷耳を掩ふ迫なしといふべきである。軍司令官及將卒一般の意氣は戦ふに先ち、既に敵を壓倒し、殆ど同兵力を有してをつた敵をして、策の出づる所なからしめたのである、危き此戦鬪を毫も躊躇することなく斷々乎としてやつてのけたのは炯々たる戰略的眼光と、澄々たる實戰的勇氣を備へたる奥大將の指揮によるといふはなければならぬ。而して又我將卒の勇敢であつたのは固より言を待たない。

第十章 常陸丸事件

第一 常陸丸の沈没

此赫々たる戦捷を博したる同じ日に於て悲むべき事件が起つたのであつた。上村海軍中將の率ふる日本海艦隊が對馬海峡附近を警戒してをつたにも拘はらず、敵の浦鹽艦隊即ちロシヤ、グロンボイ、リユーリックの三隻は濃霧に乗じ對馬海峡を通過して午前十時頃當時近衛後備歩兵聯隊を乗せて航行しつゝあつた常陸丸と、野戰鐵道提理部の人員材料を載せてをつた佐渡丸とを砲撃及水雷の發射を以て攻撃し、爲に常陸丸は沈没し、佐渡丸は淺に沈没を免れ、他船の援助により門司に皈航した。即ち是が爲に常陸丸では須知中佐を初めとして二千餘の兵員を、又佐渡丸にあつて

は二三百人の人員を魚腹に葬つて終つた。露艦は此慘劇を與へた後逸早く其影を隠して終つた。公報によれば、上村艦隊は敵艦の沖の島附近に現れたことを知つて警戒艦對馬號をして敵と接觸を保たしめ、其通信に依つて日本海艦隊の各艦を合して敵艦に向んとしたが、雨露のために終に敵艦を見失つて其日一日搜索をなし、又翌日も搜索をなし遂に敵艦を発見することが出来なかつた。十九日に至つて豫定の地點に皈航したといふことである。常陸丸では三十名ばかり佐渡丸では殆ど其大部分の人員が救はれて九州及長州の沿岸に漂着した。

第二 國民の度胸

此の事に關しては頗る内地人を騒した、是がため得利寺戰鬪の大捷は全く打ち消されて終つて、驚きと怒りと悲みの爲めに今まで引きたつてをつた人氣を一變して陰鬱なる梅雨の天候の様にな愉快と濕潤とを以て満たしたといふことである。上村艦隊の行動に關しては勿論非難を免れなかつた、極端なるものは遂に上村中將を露探とまで云ひ、或は其留守宅に石を投げたといふ話であるが、考へて見れば情けないことではないか。四五十萬の人間を出して戦をせやうといふ國民が、たつた二三千ばかりの人員を無くして終つたとて左程に悲しむにも足りないではないか、大なる戦争をする間には少しばかりの犠牲はある、日清戦争以來連戦連捷といふことが國民の頭に殘つて居るから少しの戦敗もなく、少しの損害もなく、此戦争を終へやうといふことを熱望してゐるのであるが、不如意勝なる世の中のことこそ甘く行くものか。三井や岩崎の店でも儲けばかりが續くものでない、戦争でも同じことである、此戦争を始めた時には日本が一躍して黄海の制海權を得て遼東半島に上陸するなんといふことは夢にも思はなかつたのである、海戦にも幾度か失敗し、陸戦にも幾度か失敗しても最後の勝利を得るといふ決心で戦争をしたのではないか。其れが是ればかりのことであるが、國民全體が憐れんだり、怒つたり、悲んだりするようでは餘りに情けない、露國に對して戦争をしやうといふ初めの決心は今何處にあるか、別けて露探であるなど、人は人を誣ふるも程がある。苟くも一個の

艦隊司令長官に對して斯くの如きことをいふのは正當侮辱である、又罪もない留守宅に石を投げるといふが如きは言語同斷である、國民は須らく戦時に於ては萬事を軍人に一任し、聊かなる欠點のごときは是を許容するといふ大度胸を有たなければならぬ。

第三 敵を侮れる結果

然し翻つて上村艦隊の行動を軍事的に觀察したなれば、一言を費すのが適當であることを言明する。吾輩は僅かなる軍艦を以て對馬海峡を警戒してゐる上村艦隊が其警戒線以内に敵艦を進入せしめたことに就ては世人が云ふ如く非難はしない。勿論上村艦隊の任務が頗る困難なのである、殊に濃霧の時に於て然りである、然し乍ら吾輩の見る處を以てすれば敵艦の侵入を知らなかつたといふよりは、寧ろ其後の處置に於て不同意を表するのである、第一彼は對馬艦から露艦を見たといふ信號をしたときに自ら其軍艦を集めるのに汲々したばかりで、即自衛を行つたばかりで何故に其本艦より比較的快速なる軍艦を出して對馬に合せしめ其勢を以つて對馬艦等をして勢よく露艦に近接せしめて我運送船に對する敵艦の動作を不可能に歸せしむるか、尠くとも敵の動作を妨害せしむることが出来なかつたのであるが、第二に少くとも四、五艘の水雷艇を對馬艦に送つて、此軍艦をして敵を誘ふやうな方法手段に出なかつたのであるか、而して第三に頗る判断が悪い、敵とも對馬海峡に我警戒艦隊が在る位のこと知つてゐる、何とて此際敵艦が同一地點にグズ／＼するものか、其れを上村艦隊は四日間もかゝつて其附近を搜索したといふのは寧ろ滑稽である、其露艦が北海道附近に顯れたといふのを聞いて搜索を止めて歸航したといふのは笑止千萬である、此出來事の起つた最大原因は餘り露艦を侮り過ぎて油斷をしてをつたからである。

第十一章 大 孤 山

第一 水陸兩路の輸送

對馬海峽附近で遭難した常陸丸、佐渡丸と相前後して第十師團の第三梯團が輸送された。幸ひにも兵站の諸部隊は此難を免れて、六月の廿日頃に其全部が大孤山に到着し終つた。同時に後備歩兵第四十聯隊も到着し、兵站の諸機關も全く揃ひ抽巖以南の各處に是等を配置して兵站事務を遂行した。抽巖には既に兵站司令部が置かれて藤村歩兵少佐が司令官であつた、初めは大孤山より土城子、小灣港を経て抽巖に至る間の陸路によりてのみ輸送したが、大洋河の偵察が遂げられて以來大孤山より水路此河を廻り龍王廟を経て硝子河に至り、此處に糧秣を揚陸して是より三道虎岑溝を経て陸路抽巖に至る道筋に依つて相並んで水陸兩道より輸送をした、抽巖には第十師團司令部があつて、野戦隊の中心となつてをつたから、此處に糧秣を蓄積するのである。此水路の輸送は大孤山の南約一里なる干家屯からジャンクによつて龍王廟に運ばれ、龍王廟からは水が浅いから大漕子、小漕子と稱へるノアの洪水時代の様な獨木舟によつて運ばれるのである。ジャンクは元より澤山あるが獨木舟は河の上流下流を搜索して、僅か百五十艘ばかりしかないものであるから元より多量の輸送は出来ないが、夫れでも毎日一個師團半分位は送ることが出来て尠なからず輸送業務を助けた、且其運賃は陸路に比して頗る安價であるから國家經濟から云へば非常によいものである、殊に患者の後送に就ては山や川を過ぎて支那馬車の上で絶へず動揺せらるゝよりも頗る平穩に輸送することが出来るから最良の道である。

第二 第一軍諸隊の通過

第十師團の兵站輜重が上陸すると相前後して、第一軍に加るべき近衛後備歩兵旅團、第一軍兵站監部に屬すべき補助輸卒隊及第一軍各隊の補充人馬が皆南尖から上陸して、大孤山龍王廟を経て安東縣に向つた、之が爲め南尖、大孤山間通路の中央點肅家屯、龍王廟の西南約二里の所にある山嘴等に糧秣を積んで是等通行部隊のために糧秣を分配した。近衛後備歩兵旅團長は當時酒井少將であつて、我兵站監部に一泊された。閣下は常陸丸の沈没によつて其部下一ヶ聯隊を失ふたことを非常に残念だといつてをられた。併し實際此第一軍諸隊の南尖上陸は當に我兵站に大なる混雜を與へたのみならず、諸隊それ自身も兵站を設置しない道路を行進するのであるから、大なる困難を感じたであらうと思ふ。此頃は第一軍の主力は鳳凰城附近に滞在して是等の増加部隊や、補充人馬の到着を待つてをるのであつて其最前線は豐陽邊門、賽馬集の線に停止し、六月十二日に其最右翼を以つて懷仁を占領した位のことである。

第三 商衝と塔山

大孤山の町は大孤山なる山の南麓に沿ふて建てられたる人口四五千を有する町であつて、鳳凰城若くは安東縣から金州に至る街道上の稍繁華なる所である。十年前までは大洋河の下流として大孤山に沿ひたる川の一部の水深が大船を入るゝに差闕なかつた時には遼東沿岸の貿易港の一つであつたが、今は河床が高まつて大船を容るゝに適しないから其商業も漸次衰微したが、夫れでも少しは昔の面影を残してをる、日清戦争の時にも、兵站監部が此處に置いてあつた、其時に焼けた町の中央部が今猶空虚になつて、草木の生るのに任かしてある。町の東端に近く大孤山の山の一支脈が延びて来て、茲に小高い丘をなし其上に一つの塔が建てられてある。此塔が大孤山全體の風致をつくつて一種繪の様な床しい景色を現してをる。此丘の下を大洋河の一支流が青々と茂る葭の間に銀の帯のやうに其麓を繞つてをる。初夏の夕に稍隔つて此景色を眺めた時あつたか、或る時は大孤山の山の頂上から漢雲がユラ／＼と此塔の方向におりて来て盛氣樓の様なる景色を現すこともあり、或時は西天の夕陽が此塔と山の一角を閃々と照らして黄金色の

殿堂や寶玉のやうに見えたこともあつた。

第四 巡檢の招待状

大孤山に到着してから間もなく此町の巡檢候補の千在淵と云ふものが、少しばかりの支那料理を持つて来て我々に面會を求めた。初は兵站監には會はなかつたが、二度目には遂に面會して御世辭をならべて飯つた。そこで支那人に對する政略上から此千在淵を招待しよう云ふ議論が起つた。此頃内地から陸軍通譯が數人配屬されて、其内の一人が千在淵に送る招待状に對する一條に於て彼は切りに支那の風習を説いて、支那人の悦ぶ赤紙の上に支那流にかいた招待状を作らんことを主張した。予は彼等の云ふことを耳にもかけずに白紙に日本流にかいたものを作つて彼をして持ちゆかしめた。そこで彼は大に怒つて此様なことならば通譯は要らないと叫んだのを端なくも予は聞いた。そこで其晩予は其頃監部に居つた通譯どもを招いて次の様に説いて聞かせた。抑君等の職務と予の職務とは或點に於て相似てをる、予の職務は兵站監の意圖を發表するのが専務である、諸君等の職務は支那人に對して吾々の意志を發表するのが専務である。若しも予が兵站監の部下に其命令を傳ふる時に適當の威嚴を有する文字を以てしなかつたならば、部下は其の命令に對して如何なる感じを持つてであらうか、言はずとも諸君は既に御承知であらう。即ちいかに兵站監の意志を發表するのが本務であるとは云へ、何でもかでも意志の發表さへ出来ればよいものといふ譯にはいかない、諸君に於ても支那語の通譯さへ出来れば其他は何でもかんでもよいと云ふ様では諸君の職務の盡し方が充分といふ譯にはいかん。兵站監は諸君の知らるゝ通り地位のある人、支那の役人に對しても充分の威嚴を持たなくてはならぬ、諸君が通譯する時でも此心懸を充分に持つてをらなければならぬ。昔伊藤侯が清國に使して李鴻章と會見し頗る不満足なる條約を結んだのは其時の通譯に此呼吸がなかつたからだといふことである。然るを諸君の或るものが支那流の招待状を送らねばならんと云ふは何事である、支那に來たならば何事も支那の風習に據らなければならんと云ふ理窟

が何處にある、諸君の論法を以てせば、日本人が支那服を着て鬘髪を垂れて支那料理を拵へてでなければ支那人を招待する事が出来ないといはなければならぬ、斯様な仕方は屬國の仕方である堂々たる大軍を出して露國を征伐すると云ふ此日本國民が斯様な腐つた亡國の根性を以て居つては我祖先に對して申譯がないではないか、元來日本人が支那に來て支那の安寧を維持してやる限りは、日本人が成る丈支那語を使はない様にして彼等支那人に日本語を使はせる様にするがよいけれども、今日の處では夫れでは用が便しないから、諸君の力を借るのである何を苦しんで斯様な亡國的の言を吐くぞ、予の言に對して諸君の御意見は如何であるかといひ終つたときに通譯一同は噤然として一語をも發し得なかつた。

第五 天后宮の正殿

巡檢千在淵の招待は、大孤山天后宮の正殿に行れた、相應の御馳走があつて先づ一通りのあしらひをしてやつた、尙又天后宮の前に一同が相並んで寫眞を取つた、此宮はいはゞ大孤山の氏神で以前述べてをいた丘から大孤山の方へ上つて行こうと云ふ中腹にあるのである、其の建物は割合に見事なものであつて、高さの一丈餘りもある巾の廣い石段を登ると其處に門があつて、此門を入ると左右に各一軒の家があつて家の間に中庭を造つて居る、門からは眞直に敷石の道があつて五六間進むと其處に又門と段とがある、此の門を這入ると同じ様に左右に家があつて、此家を連接してをるのが本堂である、本堂は日本の佛閣の様に構造されてをる、柱や、鴨居や、梁、屋根裏は總て赤く塗つてあつて、且つ處によつては青や緑や黄の色を施されてをる、堂の内部は敷石をしかれて開け放されて居る、宴會の席を設けたのは即ち此處である、其後部は佛壇の様な體裁になつてをつて此前部と後部とは十枚以上もある扉を以つて界されて居る、此扉には諸種の彫刻が施されてをる、此扉の上や屋根裏に近き當りに諸種の文字をかいてある額が掲げられてをる、柱にも諸種の文字がかいてある、看板の様なものも掲げてある、一見此殿堂は燦爛として輝いてをる、

此額や看板にかいてあるのは概ね天下泰平海不揚波と同じ様な意味の文字である。

第六 絶對的平和思想の中毒

斯様な文字は此宮計りでなく多くの民家にも赤い紙に書いて貼つてあるが、彼等支那人の絶對的平和思想が表はされてあるのである、則ち彼等の平和思想なるものは其の古代の人が言つた様に右の頬を打たれたならば左の頬をも差向けよといふ流儀でどんなことがあつても、大きくいへば國が亡びても、小さく云へば一身が滅びても平和が望ましいと云ふのである。晉に今日そうである計りでなく古い歴史から今の世まで皆此の流儀でやつて來たのである、漢の武帝でさえも匈奴の侵襲に堪へずして王昭君を彼れにやつて和を請ふたではないか、まだ漢、晉、唐時代までは一步を譲つてをくとしても宋から以下は殆んど見るに忍びない程の有様で、金が攻めて來たら黄金や寶を與へて和を講ずる、そこで暫く戦が已まる安心をして居ると黄金が手に入るか入らぬかに又攻めて來る、復た財寶を出して和を講ずる、又攻めてくるといふ風で、金がすむと元が又興つて同じ流儀をやつて顔眞卿や文天祥がいくら奮張つても宋は到頭亡びてしまつた、元の末でも明の末でも皆此の様である、如何に猛烈な勢で起つた代でも暫く立つと皆此の絶對的平和思想の中毒に罹つて癡痺してしまつたのである、現今の清國の状態も亦此の通りで、康熙乾隆時代の盛んなる勢の迹でも始めは今の黒龍江以北一帶の地を取られ、又烏蘇利河以東の土地を取られ、その次には土耳其斯坦を取られ、今や西藏も滿洲も將に取られんとして居る、それでも彼等支那人は平氣なもので其田畠を荒らされても、其の家を壊はされても露西亞人が來れば露西亞人に諂ひ、日本人が來れば日本人にへつらひ、恰も無神經の牛馬の様に其の生命を貪つてをる、あゝ何と絶對的平和思想といふものは情ないものではないか。

第七 地獄の縮圖

記述は横道へ這入つたが、兎に角斯様な絶對的平和の文字が殊に際立つてこの堂を飾つてゐる、斯様な處で酒を飲んでやや其の酔ひがまわつた頃に解散して、それから巡檢の案内で宮の左前の低ひ處に立てられてある地獄の室を巡覽をした、所謂地獄の酷刑が小さな像によつて一つ一つ表はされてゐる、鋸で頭から人間を挽き割る所や、臼の中へ倒さまに人を入れて廻してゐる處や、其他蛇の池や、針の山や、煮殺しの釜や、最も異様な恐ろしいものがある、殊に珍らしく感じたのは閻魔大王の前に在る鏡に罪人として寫つてをる有様の一つの内に、牛馬を虐待して居る處がある、これは佛教の生物博愛主義から起つたことであらうが、一つは古代から支那には牧畜業が盛んであつて、牛馬を愛護する思想から起つたものであらうと思ふ、日本にもこの種の繪は少くないが、家畜を虐待する罪は餘り畫れかてない、是を以つて見ても道德は社會の習慣から起るといふこと、即ちカントの經驗哲學説が實際であるといふことを證明してゐる。

第十二章 捕虜の待遇

第一 無意識的敬禮

予が大狐山に到着した翌日、第十師團司令部から捕虜を受取つた、將校が二名と兵卒が十名ばかりであつた、將校の一名は二等大尉で上品な小作りの温順な男で、他の者は傲慢で、且つ狡猾そうな顔付きをして居る中尉であつた、兵卒の重なるものは髪は黒い比較的脊の低い西伯利亞哥薩克で、是に二三名の髪の赤い丈の高い歐羅巴哥薩克を混じて居つた、兵卒は穢い狭い支那倉庫の一室に銅ふてあつて、將校の爲には稍々廣いが併し乍ら陰氣な別の室を設けて此處に銅ふてあつた、何れも歩哨を以て監視させてあつた、予が初めて彼等の室に赴いた時に、兵卒等は非常に汚い着物を着て中には襦袢ばかりしか着ないで土間の上に敷いてあるアンペラの上に不作法に寝て居て、恰も乞食の寄合の

やうであつた、予が其窓の前に立つて彼等を眺めても依然として臥て居つて敬禮をする様子もない、予は其處で禮式をせよと一聲大喝をした時に彼等はあわてゝ立つて無意識的に敬禮をした、手を舉る者もあれば腰を屈むる者もあつた、次に通譯を介して服をつけ靴を穿き帽子を冠つて整列することを命じた、再び予は彼等が整列をし終つた時に敬禮と叫んだ、通譯が其の言葉を譯し終らぬ前に彼等は手を舉げて敬禮をした、それから予は彼等に我將校の巡視の際には必ず如斯敬禮を嚴格にせねばならぬと告げた、其の後は彼等の氏名を點呼した、其族籍、年齢、所屬隊等を調べて筆記したる後、將校の方の部屋に赴いた、大尉の方は正服をつけてあつて直に敬禮をしたが、中尉の方は外套を被つて居つて起きなかつたから、兵卒の方でやつたと同じ筆方で其の不禮を詰つた、中尉は其の權幕に恐れて慌てゝ敬禮をした。

第二 世辭と追従の結果

予か敬禮を矢笠しく云つたのは、戰勝國の威嚴を保つ爲であつた、一體日本人は西洋人と見れば猫でも杓子でもえらい者の様に思つて、こちらからビョコ／＼頭を下るが癖である、其自重心のない輕薄なる舉動は嘗に一個人のみならず國家の體面を汚すのである、其れが無智の人民や、淺學の書生などなればいざ知らず、堂々たる國家の政治に與る人、取り別け外交官の肩書を持つて居る人達でさへも、西洋人に向ふと、誰にでも彼れにでも頭を下げて御世辭や御追従を並べる、外交上の談判を行ふ時でも斯様であるから、外交は常に引け目を取つて國力發展の妨害ばかりして居る、日露談判破裂の際、露國に居つた某公使に露人が何故日本が戦争を開いたかと聽いたとき、同公使は是に答へて、政府は戦争をしようとは思はなかつたが、國民が戦争をせよと矢笠しくせまつたから致方なしに戦争をしたのだと云つた、其口振があなたの國へ對して戦争を致しましてどうも相済みませんと云はぬ許りである、何たる卑屈の外交家だろう、立派な公使ですらも此の通りであるから、他は推して知るべきである、徒に夜會や舞踏や晚餐などを催

して國費を濫費することばかり知つて居つて、いざと云へば三文の價値もない、彼等は國家に最も無用なる寧ろ有害なる者である、抑々此の日露戦争が起つた原因の一つは慥に彼等が自稱して外交家と云ふ者どものベコ／＼主義である、即ち此の戦争は露國が日本の實力を知らなかつたから起つたのである、日本の實力を知らなかつた露國人は勿論愚昧であるが、此の實力を露國に知らさなかつたのも悪い、之を知らさなかつたのは専ら外交家どもがベコ／＼主義をやつて、自ら二等國以下の交際法をやつて居つて、日本の實力を隠蔽したからである、明治三十三年の北清事變の後に、露國が滿洲の撤兵を仕様かしまいかと云ふ際に、今少し外交上力を振つたならば如何に頑冥の露國でも日本をかくまで見くびりはしなかつたのである、従つて撤兵は實行されて今度の戦争なんかは勿論起り様がないのである、由來外交家は失敗を重ねて、軍人が其臂拭ひをする許りである、何と辯にさわることはないか、而しこのビベコ／＼主義は實際外交家ばかりではないのである、國民一般に此の氣風があつて、敵の捕虜に向つてさへも此のビベコ／＼主義をやつて居るのであるから、強ち外交家許りも咎められない、理屈はさておき予は斯様な具合に之を巡視しかつ其受領を終つた。

第三 優遇と虐待

予と共に同行をした露語の通譯は、諸種の捕虜に關する用向から彼れは捕虜に漸次接近して、捕虜も又彼に向つては我儘を云ふのでは等を眞に受けて、彼は屢捕虜の要求を我々に傳へた、或は酒をやつてくれ、或は煙草をやつてくれと、幾度か予に向つて迫つた、彼は捕虜に對して大に同情を寄せて其の情實を語るのであつた、實際我々の見る處を以てしても、捕虜は憐れなる者に相違ない、併し乍ら予は遂に此の要求を逐一撃退した、予は常に此の通譯に次の如く答へた、なる程今日は世界晴れの戦争をするのである、従つて文明國のやり方をしなければならん、が然しながら捕虜を虐待するなと云ふことはあるが、何處に捕虜を優待せよといふことがあるか、此の優待虐待といふことは、

勿論漠然たる意味で、如何なる程度に遇するかと云ふことを現はしては居らないが、予の見る處を以てすれば、日本の兵卒が受けて居る給養より善い給養を捕虜に向つてするといふことは優遇であると解釋をする、今日野戦に従事して居る兵卒等は、如何なる給養をうけてゐるであらうか、彼等兵卒は生煮の飯に味も香りもない、罐詰の肉や、乾物を食ふて居るではないか、酒や煙草などは全く得られない、それでも戦術上の諸種の困難なる勤務に服してゐるではないか、然るを何爲れぞ我が

天皇陛下の思召によつて、纔かに其の生命を保つてをる捕虜なんぞが、如何なる面をさげて煙草や酒を請求せられやうか、請求するものはどうせ恥も義理も知らない捕虜であるから仕方ないとしても、之れを眞にうけて捕虜のために願出るといふ氣が知れない、今少しく考へて貰ひたいものだと思つたことであつた、然しながら通譯は幾度か同じことを繰り返して、又幾度か同じき予の説明を聞いた、遂に予の蔭にまわつて迄も捕虜の請求を満足せしめやうとした、世の中には廣大無邊の仁者もあるものである。

第十三章 旅順港外の海戦

第一 旅順港外の海戦

海軍は數度の旅順口偵察を行つた後、根據地にあつて敵を監視して居つたが、六月二十三日敵艦の出勤を認めて之を攻撃した、其の詳細は次ぎの如くである。

二十六日 午前大本營着電 東郷聯合艦隊司令長官發

聯合艦隊は、一昨二十三日旅順口外に於て、敵艦隊を攻撃せり此日早朝より敵艦隊（戦艦ヘレスウエイト、ボルトーワ、セワストポリ。装甲巡洋艦バイーン。巡洋艦バルラゴダ、ヂアナ、アスコリド、ノーウキク）は數隻

の掃海汽船を先頭として漸次に港外に出でんとするもの如く、封鎖勤務に在る我哨艦は無線電信を以て、其舉動を警報せり、此に於て敵の出勤に對する豫定計畫に基き各方面にある諸隊は直に發動の準備を整へ在泊せし艦艇は、逐次に出港して急速旅順口に向ひ、特別任務にある艦艇の外我艦隊は悉く豫定位置に集中せり、是より先第一驅逐隊（司令海軍大佐淺井正次郎）第四驅逐隊及第四艦艇等は港外にありて始終敵の動靜を監視せしが、午前十一時に至り、敵艦隊は戦艦ツエサレーウキク、レトウキク、ボベীগを加へ全力盡く港外に出現し、其數多の掃海艦艇は我機械水雷敷設面を航破して漸次に通路を開かんとするを見、屢々近づきて之を妨害し、午後三時頃第四驅逐隊第十四艦艇は此掃海を掩護せる敵の驅逐艦七隻と砲戦して之を撃退し、其一隻は我砲弾のため火災を起し港内に遁入せり、次で敵艦ノーウキク其驅逐艦を掩護するため近づき來りて、我を砲撃せるを以て我驅逐隊艦隊は遂に退却して戦隊に合せり、之れ當日戦隊の發端とす、然るに敵は其掃海を急行し、敵の艦隊はノーウキクを先頭とし掃海汽船の後方に隨ひ、沖合に出で來り、午後四時過ぐる頃第三戰隊は其部下を集團して敵と接觸を保持し漸次に之を南方に誘致せり、敵は初め東南の針路を取りしが次で正南に變針するが如くなりし、此時第一戰隊は遇岩の南方に於て尙ほ敵の視界外に在りしが、先づ驅逐隊水雷艇隊を集合して襲撃準備を爲さしめ徐に敵の洋中に出づるを待ちしが、午後六時十五分に至り始めて敵艦隊を明に遇岩の北西約八海里に見たり、敵はツエサレーウキクを先頭とし戦艦を前に巡洋艦を後に十の單縱陣を爲し、「ノーウキク」及驅逐艦七隻を右側に置き南に向へり、我艦隊は戦艦を掲げて戦艦の熱するを待てり、午後七時三十分彼我の距離一萬四千米突に入り、我艦隊は敵の隊列に對し倒に「イ」の字を書きしが、敵は次第に右方に針路を轉じ、我と同方向に進まんとするもの如く、我も少しく右方に轉針して終始敵の先頭を壓せり、然るに午後八時を過ぐる頃敵は遂に針路を北方に反轉し旅順口に向ふ如くなるを以て、我艦隊は一齊に右八點に回頭し横陣を以て暫く之を追ひしが時將に日没（八時二十二分）に近く水雷攻撃の時機漸く熟せしを以て、午後八時二十分驅逐隊水雷艇隊に襲撃を命じ

同時に艦隊は左八點に回頭して單縦陣に復す、各驅逐隊水雷艇隊は直に我艦隊の後尾を過ぎ疾風の如く敵に向ひて進めり、午後九時三十分の頃第十四艇隊は港外約五海里に於て敵艦隊の後尾に對し既に第一の襲撃を試み第五驅逐艇隊は之に續けり、敵の艦隊は倉皇順序を亂し旅順口に向ひしが遂に港内に入る能はずして、午後十時三十分の頃皆港外蠻子營砲臺の前面より城頭山の下に投錨せり、是より終夜我驅逐艇隊は敵艦隊及敵要塞の無數の探海燈と猛烈なる防禦砲火を冒して天明に至る迄連續前後八回餘の襲撃を爲せり、此襲撃中奏功を確認したるは午後十一時三十分頃鮮生角の方面より迂回して急進したる第十六艇隊の攻撃にして、若林少佐の指揮せる白鷹はペレスウエート型と見たる敵艦の艦首に對して斜に二個の水雷を發射し同艦の大火焰を揚げて轟沈せるを目撃せりと云ふ、其他の效果に就きては敵防禦砲火の音響激甚なりしと、海面を打てる敵弾に依り無數の水柱上りしたる我艦隊より確實に之を認め得たるものなし、翌日天明港外を偵察したる第四、第五驅逐隊其他哨艦の見る所を綜合すれば、敵艦隊は數に於てペレスウエート型戰艦一隻を減じ、外にセワストポリ型戰艦一隻チアナ型一等巡洋艦二艦だけは自力にて航行し得ざるだけ損害を受けたるものと認む、蓋し當夜月明にして襲撃に便ならざりしと、敵艦の碇泊陣列我發射線に對して狭少の正面を顯したるため、攻撃の效果は多大ならざりしも、我攻撃隊に於ても敵砲火の猛烈なりしに拘らず損傷意外に少く、第一驅逐隊の白雲は敵弾に士官室を破られ火災を起し、同時に舵機を損し下士卒三名戦死し、宮川少軍醫外下士卒二名負傷し、第十四艇隊の千鳥は其後部汽罐室に炸發せざる巨弾を受けたると、第二十艇隊の第六十四號艇第十六艇隊の第六十六號艇が少許の損害を受けたると、第十二艇隊の第五十三號艇の准士官一名負傷したるに過ぎず、各戰隊の諸艦に至りては素より損傷なし、此戰鬥に於て聯合艦隊が少許の損害を以て、敵を屈したるは一に大元帥陛下の御稜威に依る。

二十四日旅順口港外の敵艦は、或は曳かれ或は自力にて順次に港内に入り、午後四時頃城頭山下に擱坐せりと見へたる一艦の入港するを最後として、港外亦敵影を見ず、此に於て聯合艦隊の諸隊は、再び豫定の配備に就けり。

第二 成算なき行動

スタルク中將其の職を解かれマカロフ中將其後を襲きて旅順口に來り、中將が抱懷せる攻勢的意見を遂行せんがため、屢々活潑なる運動をなし、世人も亦中將が平素の議論を想起してしかあらんことを豫期して居つたが、不幸にも四月十三、四日の海戦で世人が哀惜の下にペトロパウロスクと共に深く沈んで海底の藻屑となつてしまつた、其後任としてスクイドロフ中將は太平洋艦隊司令長官となつて、露都を出發したときに其任地たる旅順口は早既に遮斷されてしまつて、彼は遂に止むを得ず浦港にロシヤ以下三四隻の艦隊を率ふるまで、旅順に残つてゐる太平洋艦隊の主力は其頭腦を缺いで纜に手足のみ活動する位のこと、最早此艦隊も其未來の存在が餘り長くはあるまいし、一方に於ては旅順港口の閉塞が三度までも行はれてあるから、此艦隊は旅順の陥落と共に熨斗を附く可かりしものならんとして一般に風評されておつたか、健氣にも港外に出動をした、然しながら遂に大損害を受けて港内に遁鼠をした、實際此の場合に於て旅順港内に屯留せる艦隊を如何にすべきやの問題を解決するのは頗る難事である、退いて港内に留るとしたならば旅順要塞の陥落と共に犬死をするのみである、進んで日本の艦隊と戦ふとしたならば同じく破滅を免れない何れにしても成算はないのである、予を以て是を見れば寧ろ全艦隊が破滅をしても運を天に任せて逸出を圖るのである、既に斯く決心したからは日本艦隊と遭遇しても遁れ得るだけは遁れ、戦ふの止むを得ざるに至つたならば充分に戰鬥して己が受くる損害の量丈けを敵に與へるまでにするのである、萬が一にも遁れることが出来得たならば勿論幸であるが、不幸にして全滅しても日本艦隊をして復起つこと能はざらしめたならば、波羅的艦隊を更に東洋に廻航をして將來に海上權の恢復を圖ることが出来たかも知れない、敵艦隊の今回の動作を概評すれば初めは脱兎の如く、終りは處女の如しと云ふてよからう、其の逸出を決心したのはよいが遂に其の決心を翻して前と同じき状態を港内に於

て取るに至つたことの腑甲斐なきよ、此の出動のため「ベレスウエート」を失ひ其他にも大損害を受けて此の憐れなる艦隊は倍々憐れなる運命に遭遇しなければならぬ様になつた。

第三 策の上なるもの

此に反して我艦隊は毫も損害を受くることなく敵の企圖をして空しく畫餅に歸せしめたのは、東郷司令長官の深謀遠慮である、所謂策の上なるものである、日本の艦隊は將來のため其の勢力の保持を必要とするのである、徒に猛り狂ふて敵の損害を受くるは未だ上々の策ではない、此の點に於て予の最も同意を表するものである、殊に水雷の夜襲を以て奇功を奏し得たのは近來の快事である、今回の海戦に於て二月八日の奇襲を初とし水雷の偉大なる効果を認めたま國の如きは此の現象を見て遽に水雷艇の軍艦に優る説を立てて多くの水雷艇を建造せんと議論が一時熾に起つた、然しながら世界に於て水雷艇を最も有効に使用し得るのは只此の尅々なる武夫によつて國をなす日本國より外にはあるまい。

第十四章 遼陽に向ふ各軍の前進

第一 分水嶺の占領

第十師團は淺田支隊の兵力を合して六月二十五日より岫巖附近の其の宿營地を發して、二十七日拂曉より分水嶺に據る敵を攻撃した、同師團參謀長の通報は次の如くである。

通 報 六月二十五日午後十一時着電

師團は前進準備のために析木城街道上分水嶺の敵を攻撃せんが爲め左の部署を爲せり。

淺田支隊(更に山砲一中隊及工兵一中隊を増加す)を以て析木城街道上及其東方の地區より攻撃せしむ、(二十六日岫巖出發王家堡子附近に止まり翌朝より攻撃)

丸井支隊(歩兵第二十の一大、歩第三十九聯、砲一中、工一中、衛生隊半部)は二十五日岫巖出發大朱屯(岫の西北七里)附近に止まり、二十六日接官所に止まり翌未明一部を以て大石橋方面に對し警戒せしめ主力を以て分水嶺の右側背たる三道溝附近に進出して之を脅威せしむ。

鍾田大佐の率ゆる歩四十の二大隊及砲一中隊、工一小隊は二十六日徐家堡子附近に止り、二十七日未明より淺田支隊の左翼に連り敵の右翼を攻撃せしむ。

東條支隊(更に砲一中隊を増加し)は二十六日未明出發周家庄より下哈峪の南方高地を占領して、丸井支隊を掩護せしむ。

師團司令部は二十七日夜半出發析木城街道王家堡子に至り二十八日再び岫巖に歸來す。

通 報 六月二十七日午後零時十五分着電

午後四時より淺田支隊は砲戰を開始し七時三十分敵の砲兵は沈黙し、八時五十分敵は全く陣地を捨てて退却せり敵の兵力は歩一聯、砲八門我死傷甚なし。

師團長は三間房に在り。

通 報 六月二十八日午前七時十分發

昨日の戰鬪は凡て師團の豫定計畫通りに實行せられたり、敵の兵力は歩兵八大隊砲十六門にして正午頃小孤山附近を北に向ひ退却せり。

我軍死傷者約百名(大庭少佐戰死)敵の捕虜將校四、下士以下約九十名本日より丸井少將の指揮する混成一旅團を分水嶺に位置せしむる筈。

東條支隊は昨日半日敵の砲兵二大隊より砲撃を受けたりしが依然新開嶺の天嶮を守備しつゝあり。
師團司令部は今夕刻岫巖に歸る。

第二 進路の打開

此の分水嶺の占領は第十師團の現在の位置に立脚點を與へたのである、而して又將來前進の爲めの扉を開いたのである、岫巖は分水嶺方向から導かれる谿と、新開嶺方向から導かれる谿との落ち合つた點にある稍廣い平地の上に置かれたる町であつて、いはゞ摺鉢の底の様な所であるから岫巖を占領した計りでは常に敵から制せられて安んずる位置でない、そこで第十師團は岫巖占領の後先づ第二軍に聲援する爲めと自己の位置を固める爲めとの目的を以つて、六月十五日東條少將の率ふる混成一聯隊(歩兵第十聯隊基幹)を以て新開嶺を占領した、新開嶺は岫巖より蓋平に通ずる街道上の最高點である。然し第十師團の前進すべき道路は第一軍と第二軍との間にあつて連絡を取るといふ任務上からして、新開嶺の方向ではなくて寧ろ分水嶺の方向である、而して敵も亦海城から中將アレキセーフの率ふる一枝隊を此の方向に派遣をして、第十師團を牽制してをつたのであるから、新開嶺よりは分水嶺に兵力を置いて居つたのである、そこで分水嶺の首尾よく占領されたのは則ち前進路を開くといふことと現在の位置を固めたことになつたのである。

第三 分進合撃の戰略

參謀本部の滿洲に於ける第一の作戰計畫といふものを漏れ聞くに、最初の作戰目標は遼陽であつて、第一軍は安東縣より第二軍は金州より此の作戰目標に向ひ協同して前進し、當時大孤山上陸軍と稱して居つた第十師團を兩軍の中央から進めて其の連絡を保たしめ、別に第四軍を編成して之を營口に上陸せしめ第二軍の左に聯つて遼陽の側背に向

ふて、以上三個の軍と一箇の獨立師團とを以つて滿洲地方に於ける雨期以前に遼陽の前面に於いて一大決戦を交へようとするのである、即ち遼陽の戦鬪は七月の十四日に始まる豫定で先づ第一軍は鳳凰城に第十師團は岫巖に第二軍は蓋平に一旦集結して、六月二十日頃から遼陽を中心とする圓弧上にある此の三つの軍をその中心に向つて相連繫して進めやうとするのであつた、所がどうしても旅順港の閉塞が完全に行なはれないものであるから第四軍を營口に上陸せしむることを遂に斷念して、第十師團に第五師團を加へて此の大孤山上陸軍といふものが第四軍となつたのである、然るに又此の計畫通りに行かなかつたといふのは得利寺の戦鬪後第二軍の兵站が困難を極めた點からして、其の前進に著しい障礙を與へて熊岳城附近では一日二食しか給ふことが出来んといふ次第であつたから、六月二十日迄に蓋平に到着することは出来なかつたのであつた、即ち第一軍も第十師團も其の出發を暫時見合せといふことになつたのである、分水嶺攻撃の二十七日となつたのも此の理由である、而して以上の計畫が暫時延ばされて、遼陽攻撃は遂に八月下旬に行ふやうになつたのである、嗚呼遼陽攻撃世界最大戦の一つに數へらるべき此の戦鬪は當時未だ頗る遼遠であつた。

第四 後方の守備

第十師團が岫巖を占領するまでは敵の騎兵の小部隊が同地より眞直に南方に通ずる道路、即ち新店を経て莊河に通ずる道路を南下して、屢々兵站線路の側方を脅やかし岫巖を占領した後に至つても蓋平方面から敵の騎兵の一小部隊が莊河附近に出沒して、我が兵站線路を脅やかし殊に南尖より大孤山に通ずる、道路は危険を感じるので南尖の北方約一里なる孤家屯より岫巖まで、兵站線路の西面一帯に後備歩兵第四十六聯隊を配置されてあつた、それにも拘らず時々夜間に敵騎が現はれて電信建築班までが之と戦つたといふ報告さへもあつた、或は又莊河附近の敵騎を掃蕩するために歩兵の一二中隊を遠く此方面に派遣したこともあつた、斯様な有様であるから大孤山の西端には金州街道上と

岫巖街道上に常に外衛兵が設けられてあつて大孤山街には其の直接の掩護として少なくとも歩兵一中隊が屯在してあつた、兵站監部でもいざと云へば直接の自衛に任んずるために輪卒に戦利小銃を支給して操法の演習を命じたこともあつた、然し此事は記述する今日から考へてみると杞憂のやうであるが、當時の感情は斯くの如くせざるを得なかつた、晝間支那馬車の通行や棧橋の陸揚げ等のため頗る喧騒であるのに打つて變つて、夜間は氣味の悪い様な静肅が全市街を脅やかして居るやうであつて、歩哨交代の靴音や誰何の聲より外に犬の吠聲すらも聞かなかつた、臘月の夜には大孤山の影が黒く眼前に横はつて悪魔に魅られる様な感覚がした。

第五 無神經と無感覺

斯様な警戒を以つて、我々は最も多忙なる業務に服しつつあつた間に、支那人と云ふ奴は如何に考へて見ても氣の知れぬ奴である、彼等は我々が大孤山に上陸してから暫くたつと、兵站監部より程遠からぬ處に小屋を設けて毎日々々朝から晩までのべつ幕なしに芝居を行ふた、町の各方面から諸種の人が此處に集まつて照ても曇つてもこの小屋の前に立見をして年百年中お祭をしてゐる様である、暫くすると大孤山の山の中腹でも同じ芝居が始まつて、同じシユウ／＼ジャン／＼とやつてゐる、その見物人の内に最も甚しいものは支那の官兵である、この舞臺の前に悠々と又銃をして腰掛に腰をかけて演劇を見てをる、勿論戦争があらうがなからうが彼等に何の關係もないのである、彼等の社會觀は實にこの芝居によつて現はされて居る、彼等の國が云ひ換へれば彼等の宗祖の土地が露西亞人に取られやうが、日本人に取られやうが彼等はそんなことに無頓着である、まして戦争位のことは何んでもないのである、寧ろ戦争のお蔭で金が儲る、自分の一代さへ金でもためることが出来たならそれが何よりである、殆んどその一生は金の爲めに使役されて齷齪して居るばかりでその他は何もないのである、世の中に生れて來たといふことは、その種族や先祖や子孫や國家の爲めに、更に廣く云へば一般人類の爲めに利益を計り、自己の義務を果すといふやうな面倒な

ことでなくて、只最も簡易に金を儲けることであると考へて居るのである、金より以外のことは絶對的零であるから所謂醉生夢死するのである、人が如何に心配しやうが喧嘩をしようが災難があらうが、自分は芝居の前に大きな口を開けて鼻水を垂らし涎を流して立ちすくんで居るのである、彼等は神經もなく感覺もなき枯木の様なものである、憐れなるものは支那人である。

第六 蓋平及大石橋の占領

六月二十日に滿洲軍總司令部の編成がなつて、大山大將は總司令官に、兒玉大將は總參謀長に同日親補された、これが即ち遼陽の決戦に於て三軍を統轄してクロバトキンに對抗するのである、總司令官は七月六日東京を出發し七月十四日青泥窪に上陸し、爾後陸路第二軍の後を追ふて八月の上旬頃には大石橋に到着されてあつた、此れより先第二軍は得利寺に於て戦捷を得た後、六月二十一日には敵を壓迫して熊岳城を占領し、茲に最も困難なる給養上から略々半月間の滞在を餘儀なくせられて、七月九日には蓋平にあつた敵を攻撃して是れを占領した、其の詳細は次の如くである。

七月八日午後大本營着電

敵は海山寨附近より蓋平附近に亘る間及西臺北方高地附近を占領し、午後一時頃よりは鐵道列車を以て海山寨附近に軍隊を下車せしめつゝあり、湯地南方約二里の花紅溝附近にも敵兵あるもの如し。

軍は豫定の計畫に依りこの敵を攻撃せんとす。

七月九日 午前大本營着電

軍は本日午前五時二十分より蓋平附近にある敵に向ひて砲撃を開始し、午前八時頃大平屯高地蔡家屯高地、東雙項山にありし敵を驅逐して該地を占領せり、敵は石門及海山寨附近に放列を布き尙頑強なる抵抗を続けつゝあ

り。

同 日本營午後着電

蓋平附近の敵は昨夜來著しく其の兵力を減じ蓋平附近の陣地を我軍のために奪取せられたる後、石門、海山寨、高家屯附近の險要に據りて再度の抵抗を爲したるも、正午頃我軍は更に此の敵を攻撃して同高地の線を占領せり。敵の砲兵はその後紅旗廠、腰嶺子、石佛寺の高地に在りて、我追撃隊を砲撃せしが、午後三時に至り砲聲殆んど沈黙せり。

此戦闘に於て小泉少將は大腿に銃創を受けたり、他は取調中。

第二軍は蓋平占領の後此處に其兵力を集結して暫時敵と對峙してあつたが、二十日頃より前進を起し、七月二十四日には大平嶺を占領し二十五日には遂に大石橋を占領した、同時に一部隊は營口を占領した、大平嶺戦闘（俗に大石橋の戦闘）の詳細は次の通りである。

七月二十四日 午後大本營着電

軍は敵の監視部隊を驅逐し二十三日午前十一時頃より湯池南方下湯池附近より孟家屯南方高地、神樹屯附近を経て朱家屯附近に互る陣地を占領し騎兵は左側黃粮堆附近にあり。

敵の砲兵二中隊は海城街道上茶棚屯附近にありて、五臺山附近を射撃し、又騎兵の大集團は大平山より南方昌邑屯に前進せり、敵本陣地は湯地の北方後老溝より大平嶺青石山南部田家屯を経て牛心山に互る線にありて、堅固なる防禦工事を施せり、而して敵の大集團は大平嶺の西北青石山の北及橋臺舖の西に在り目下陣地及敵狀の偵察中なり。

七月二十六日午前 大本營着電

軍は湯地西南約四基米突の古寺勾附近より老老婆店及臥龍崗を経て五臺山に互る線に展開し、二十四日早朝より

攻撃前進に移り午前九時我右翼部隊は大平嶺西南約三基米突標高百八十の高地附近に達し、敵の砲兵は望馬臺、青石山東方鄭家溝附近及前是老溝附近にありて、射撃をなしつゝありて其數約五中隊なり、海城蓋平街道には未だ戦闘起らず。

七月二十六日 午後大本營着電

軍の前面に在る敵の砲兵は其威力より判斷するも百門を下らず、我砲兵は地形の關係上有力なる射撃をなす能はずして、軍の攻撃前進は敵砲火の威力に妨げられ戦闘を持続しつゝ日暮るゝに至れり。

軍の前面にある敵の兵力は約五師團にして二十四日交戦せし其の砲兵は約十六ヶ中隊餘なるが如し。

此夜彼我兩軍は密に相接觸して對峙し、特に蓋平より海城に通ずる街道に沿ふては、敵兵約二師團あるものと判斷せるを以つて、軍は之に對し嚴なる戦備を取れり、二十四日日暮の爲砲戰を停止したる後、軍の右翼大部は午後十時夜襲を以つて大平嶺の東西に在りし敵の第一陣地を奪取し、夜半より更に第二陣地を攻撃し、之に隣接する諸團體も又未明山西頭東方高地を占領せり、之が爲め敵は大石橋方面に退却したるものゝ如く青石山は午前七時過ぎ敵の抵抗を受くることなく我軍の右に歸したり、軍は大石橋に向ひ敵を追撃す、軍の死傷者は兩日を通じて概數八百餘名なり、尙詳細取調中。

七月二十七日午後 大本營着電

軍は二十五日右翼部隊の強襲に次ぎ天明より敵の陣地を砲撃せしも、二十四日の如く猛烈に應射せず、依つて午前六時過ぎ攻撃前進を開始せしに敵は今や退却をなしつゝあるものゝ如し、依つて直ちに之を追撃して大石橋以北に前進せり。

敵は正午頃其大縱隊の後尾を以て大石橋を通過して北方に退却し、大石橋及牛家屯附近は目下盛に焼けつゝあり。

石山附近の敵の陣地は其工事頗る堅固にして田家屯、二道河子間約四里に亘り巧みに地形を利用して塹壕、砲臺、副防禦等を構築せり。

同 上

軍の一支隊は二十五日營口を占領せり、營口停車場の諸建築物は悉皆破壊せられ、同地に在りし露國船舶は凡て遼河上流に逃れ、其守備兵は東北に退却せり、又遼河には中立國船舶自由に出入しあり。

第七 第一軍の前進

第一軍は鳳凰城附近に其兵力を集結し一部を以て寬甸及賽馬集を占領し、第二軍及第十師團の運動を待つて暫く此附近に停止の姿であつたが、六月十二日には其最外翼の一部隊は懷仁を占領し、遠く鴨綠江の上流を擁し、其現在の位置を堅固ならしむることに努めてをつた、所が六月二十二日に敵は混成一聯隊ばかりの兵力を以て、殊勝にも饒陽邊門に攻め入つてきたが、盡く撃退せられてしまつてから其後は此れに懲りて暫く手出しもし得なんだ、其處で第二軍及第十師團も漸次前進するの模様となつたから、此の軍に於ても將來の爲の門戸を開くがために丁度第十師團が分水嶺を占領したと同日、即ち六月二十七日に鳳凰城遼陽街道上の分水嶺に其の先進部隊を進め、又其の一部團(第十二師團)を饒陽邊門、遼陽街道上の北分水嶺に進めた、此の二要點には意外にも敵の僅少なる兵力があつたのみであるから難なく占領することが出来た、所が七月四日の夜半又も敵は二大隊ばかりの兵力を以つて摩天嶺及新開嶺の我が前哨に夜襲し來つたが、是も亦遂に我兵のために撃退されてしまつた、而して一方に於ては我は義軍と云ふ特別編成のものを以て、七月六日に城廠を占領した、然るに敵は鳳凰城及饒陽邊門から遼陽に至る道路上の最高點を前回の撃退にも懲りず、再び占領せんとして七月十七日敵の軍團長ケルレル自ら其兵を指揮して我が前哨線に來襲したが、是も亦終に撃退された、此の夜襲は近時に於ける夜襲の稍大いなるものである、是の戦闘詳報は次の通り

である。

七月十九日 大本營着電 黒木大將報告

七月十七日に於ける摩天嶺附近の戦況

摩天嶺方面。午前三時頃敵兵摩天嶺西方の前哨に來襲す岡崎少將の指揮する歩兵某聯隊は直ちに摩天嶺に於ける豫定の陣地につき、又五峰觀西北方高地に在りし砲兵も同時砲列に就けり、午前五時過ぎ敵の歩兵約二大隊は我前哨の退却に尾して摩天嶺西方の山嶺に展開す、我全線之に向ひて射撃を開く、爾後敵兵益々増加し、午前七時三十分には其兵力約四聯隊以上となり、屢々我左翼を包圍せんとせしも、我摩天嶺最高地占領部隊の爲め其目的を達せず、午前九時に至るまで我歩砲兵は此數倍の敵と對し頗る勇敢に抵抗せしが、遂に敵は左翼より逐次退却を始む、我歩砲兵は射撃に依り之を追撃し、更に此際到着せる歩兵某聯隊の一部と共に、全線追撃前進に移り騎兵聯隊も亦之れに参加せり、敵は甜水店及塔灣方向に退却し内約七大隊は金家堡子附近の高地に停止せり、午後二時敵の砲兵四門は塔灣附近より我追撃隊を射撃す依つて追撃隊は李家舖子西端に停止し敵と對峙せり。

新開嶺方面。敵偵察のため新開嶺よりマクローメンザ方向に派遣せし歩兵某聯隊の一中隊はマクローメンザ東方に於て、北方山地より來れる敵の歩兵約一大隊及塔灣方向より來れる敵の歩兵二大隊と遭遇し、苦戦最も力め増援隊と共に此敵を西方に撃退し、午後一時頃マクローメンザ東方高地を占領し摩天嶺より塔灣方面に退却せる敵を猛射せり。

小高嶺方面。小高嶺東方約一里に在りし歩兵某聯隊の一部は敵の歩兵約一聯隊の攻撃を受けしも、此の敵は摩天嶺の敵と同時に退却を始めたるを以て該聯隊は小高嶺まで之を追撃せり。

下馬塘方面。午前八時頃敵の歩兵約一大隊騎兵一中隊下馬塘西北方に在る我前哨中隊に來襲す、中隊は苦戦最も力め、曹長以上悉く死傷せり、其後敵兵増加して約一聯隊に至りしが、我前哨本隊の二中隊及某聯隊の一部之に

増援し、午後四時五十分に至り終に之を黄家堡子方向に撃退せり、又橋頭方向よりは敵の歩兵約八中隊騎兵一二小隊徐家堡子に來襲し、之に對せし我歩兵隊は工兵隊の増加を受け午後一時に至り之を西北方に撃退するを得たり。

様子嶺方面。様子嶺方面の敵情偵察の爲め派遣せし偵察隊は午前五時リホ嶺を發し午後三時歸還せり、偵察の結果、敵は歩兵三中隊砲八門をスウイチャンザ西方高地に現せり。

此日來襲せる敵は軍團長ケルレルの指揮する狙撃第三、第六師團及歩兵第九師團を以つて編成せる約二箇師團なるものゝ如し。

西師團に於ける我死傷將校以下二百九十九名にして、敵の損害及鹵獲多數なるも、其數未だ詳かならず。

第八 誤れる敵の判断

元來摩天嶺及連山關といふのは朝鮮から遼陽へ進入する道路の最大なる難關で、日清戦争の折でも第五師團の富岡聯隊が屢々此の方面に向つたのであるが、所謂一夫險に當れば萬夫も敵する能はずといふ險處であるから、常に老將宋慶の配下のために阻止せられて遂に此の方面を思ひ切つたといふ姿であつた、此の難關を我第一軍が六月二十九日に苦もなく占領してしまつたのは如何にも不思議である、是には何か大なる理由がなくてはならぬ、恐らくは敵が我軍の行動に迷はされて判断を誤つたのであらうと考へらる、則ち淺田支隊が第十師團に増援に來て其赤帽子の兵隊を岫巖邊で敵の眼の前にも付かしたのと、第一軍が五月の上旬鳳凰城に到着して以來殆ど二ヶ月の間少しも動かないのにと依つて、敵は我第一軍が寬甸、賽馬集方向に微弱な兵力を残して其大部分は岫巖方向に轉進したのだと考へたのであらう、或は我第二軍の前進に對して、此の軍が第一軍よりは倍以上も優勢なものだと考へて、海城に兵力を集結するに忙しく第一軍の方を顧るに及ばなかつたといふことであらうが、兎に角此の要點に充分なる兵力を置か

なかつた過誤からして、ムザ／＼占領されて後になつて大いに後悔し、之を取り返そうとして二度迄も逆襲をして見たが、何としても既に喉首を押へられてしまつてをるから、したばたする許りで、起き上ることも出来ないといふ姿である、七月十七日の夜襲の如きは二箇師團餘りの兵力を以つて、僅か一箇師團以下の兵力で守備をして居つた我前哨に迫つたのであるが、今いつた理屈から到底取戻すといふことは出来ない、況してや世界無比の日本の兵が居るのであるものを、何とて彼に渡すものか摩天嶺の回復は遂に思ひ切らねばならなかつたのである。

第九 夜襲の要訣

摩天嶺の敵の夜襲は見事に失敗し、大石橋(太平嶺)の我が夜襲は見事に成功した、同じく夜襲をして一は失敗し一は成功する所以のものは何であるであらうか、勿論夜襲の方法にも因るであらうが夜襲を受くる處の軍隊の警戒法及戦備の程度如何と其元來の志氣の盛衰とに大に關係することが想像される、摩天嶺の我軍が倍數以上の敵に對して如何に頑固に抵抗し且つ歩哨線後の諸隊が如何に能く急に應じて處置をしたかは、公にせられたる戦報に依つて證明することが出来る、之に反して太平嶺の夜襲は如何に敵を驚かし、又如何に敵が狼狽處置を失したかを見る事が出来る、要するに夜襲の成否は夜襲を受くるものゝ如何によつて定まるのである、而して夜襲を實行する上に於ても少くも顧慮すべき點がある、敵のやつた方法は其兵力を我全正面に展開して各部一様に行つた、我の行ふ方法は一箇師團の全力を固めて敵の最左翼に向つて行ふた、以上二つの方法の何れが優るかといふことは大に研究すべき問題であらうと考へらるゝが、用兵上の理屈を以て推せば我軍の行ふ方法が有利であると考へられねばならぬ。

第十 第四軍の成立

營口に上陸すべかりし第四軍は、旅順港口閉塞の困難なることより断念されて第十師團に第五師團を加へて之を編

成することと廟議が一決した、そこで六月二十日頃に第四軍司令部及同兵站監部の動員が令せられて、編成地は軍司令部か東京で兵站監部は廣島であつた、軍司令官は野津大將、參謀長は上原少將、兵站監は古川少將(宣譽)、兵站參謀長は古海中佐(嚴潮)といふ役割であつた、軍司令部は首尾よく編成されたが、此の兵站監部の現出は頗る奇態を演じた、即ち其動員完結の日に於て復員を命ぜられて、漸くに四方から集つて來た人馬が忽ちにして解散をして召集に應じた人達は、呆れ顔に此の復員令を迎へたと云ふことであつた、抑々此の奇態なる現象は何から起つたのであらうか、其の原因は軍司令部と兵站監部の動員は常に同時であるべきといふ考へから起つて、其の動員符號を同一ならしめたといふことである、然るに此の軍司令部と兵站監部の編成は、常に同時であるといふ考は實際ではなかつた、實際上から云へば第十師團の兵站監部は此の場合に於てどうしても、第四軍兵站監部にならなければならぬ、此の條文と實際とが、參謀本部や陸軍省で議論して居る間に猶豫の時間がなくなつて斯様な始末になつたのである、而して此の兵站監部の解散と同時に將校同相當官以下五六十人の者が、第四軍兵站監部に變化すべく第十師團兵站監部に増加されたのであつた。

第十一 軍兵站部の成立

七月十四日に野津大將を始め、第四軍司令部の各員が上陸をされたとの報道が、南尖にをつた吉川副官から到着して一同大孤山の西端まで迎いに行つた、午後四時頃に軍司令官以下が大孤山に到着されて當時後備歩兵第四十六聯隊本部のあつた所の一部と、病院の一部とに宿舎を設けた、是がため大なる混雜を惹き起して、夕食の供給の爲に監部の主計と軍司令部の文官との間に衝突まで始まつたが、夫れは内々として表面は事もなく其夜を通過して翌日の正午過に軍司令部は大孤山を出發して土城子に一泊の上、七月十六日岫巖に到着した、大本營の命令で、此日を以て第四軍の戦闘序列を成形するといふので、我兵站も第四軍兵站部と改稱した、是より先七月七日に第四師團の補助輸

率四隊も大孤山に到着し、同じく十二日に第一師團の兵站司令部六個も此處に到着して、何れも兵站監の隸下に入つて稍軍の兵站部らしくなつた、而うして同じく十九日には憲兵長大尉水町千里以下二十三名、同じく二十五日に軍醫部長二等軍醫正山本照、參謀砲兵大尉木村戒自、副官歩兵大尉隈部又雄以下二十三名の者も到着し軍の兵站監部も出來上つて、來るべき軍の活動と共に此の兵站も亦大いに活動せんとして、生々たる活氣が總ての人の顔の色に表はれた、海城以南の險路も分水嶺附近の山道も只一呑に呑んで、軍は遠く北へ北へと前進をしても、我は此兵站を以て占領後の地域を何處迄も擴張して、同時に軍の需用を満足せしむるといふ決心が一般の人の考の上にのぼつた、希望に満ちたる此の兵站部の誕生は斯くの如くであつた。

是より先第十師團が分水嶺を占領した後間もなく王家堡子に兵站司令部を開設した、歩兵少佐伊東武氏が司令官であつた、王家堡子は岫巖の西北七里大洋河の河流を、六七度も横切つて達する所の此の溪の中程にある小なる部落であつて、其初め茲に野戰倉庫を設けて第一線に近き諸隊の爲めに糧秣を分配したが、七月の下旬頃から眞の兵站司令部の業務を開設したのである、又第一師團兵站司令部が上陸をして間もなく岫巖の東方約七里硝子河の大洋河に注ぐ合流點なる硝子河と云ふ村落に兵站司令部を開設して、大洋河の水陸輸送に依る糧秣を揚陸した、歩兵少佐和田盛治氏が司令官であつた、此水路の中點龍王廟に此司令部の支部を設けて第十師團補助輸卒隊長騎兵少尉田中憲夫氏が其長であつた、而うして大孤山にも別に兵站司令部を設けて從來兵站監部が兼ねてをつた其業務を之に移した、砲兵中佐高山信明氏が司令官であつた、是は兵站監部が漸く岫巖に前進すべきの時期が近づいたことを示すものであつた。

第十二 禮拜と人生の意義

我兵站監部の大孤山にあつたときの事柄の内でも尤も嚴肅に、且つ最も悲哀に、而も最も壯烈に我々の感情を刺激し

武夫の一滴の涙を注かしたものは、新聞の戦鬪に於て戦死したる歩兵少佐青木敏行氏の遺骸が到着したときと、分水峯の戦鬪に於て戦死したる歩兵少佐大庭景義氏の遺骸の到着した日のことであつた、兵站監は自ら恭しく是を其寢室の一隅に安置して、香花供物を供して、予等は此遺骸に向つて最上の熱誠を捧げて、禮拜をしたときの感想は、永く此戦役の錯綜したる事物の記憶の内に、言ふべからざる一種の光明を放つて、最も深く我々の脳裡に刻まれたるものであつた、若しも人間なる者が此不可思議なる天體の一球上に生れいでて、如何なる事をして早晩其影暗き草葉の露と消ゆるまでに其月日を送ること、即ち人生の意義は固より絶對的のものではないが、遊牧野蠻の民ならばいざ知らず、苟くも國を建て社會を成し家を造り其祖先の偉業を繼承して、之を子孫に傳ふる上に於て其國家のため、其君主のため其社會のために、其一身を犠牲にし、其靈は神に祀られ其名は後世に垂れて、其子孫を鼓舞し其民人を教養し其國家を保護するを得たならば、人生の意義に於て充分にして且つ正當なりといふを得べきか、只營利に汲々として、人生の何たるをも解せず功利以て社會を蠱毒し奸譎以て世を欺き、徒に一身の計をなすものは、假令陶朱、猗頓の富を累ぬと雖も世に出で、爲すこともなく行ふこともなく、醉生夢死する者と人生の意義に於て何ぞ異なる所やある、此の意義を以て之を解すれば兩少佐の靈や今は地下に其微笑を湛ふるならん、況してや國家の運命は兩少佐の死後に於て倍々發展し國家の威風は揚々として世界を靡かしむるに於てをや、兩少佐の遺骸の南尖に向つて送らるる時に我々は最も嚴肅に之を我門前まで見送りに出でた。

第十五章 支那事物の觀察

第一 支那家屋の標本

兵站監本部のあつた所は雙合慶といふ支那人の家であつた、支那家屋の模範として説明すると、街道に沿ふて長屋

體の家があつて、此長屋の略中央に門がある、此門を這入ると略々二百坪許りの中庭があつて、此中庭を長方形に取り巻いて相隣接したる平屋が建てられてある、門から眞直に煉瓦敷きの道が正面なる主屋の方に導かれてある、主屋には敷石の玄關風のものがあつて、此の玄關の扉は佛壇の扉の様に左右に開く數對のものである、是より内に入れば土間があつて其左は客間其右は主人夫妻の居間ともいふべき二個の部屋がある、此客間の向ふに一室があつて老主人若くは隠居の居間ともいふべきものがある、此處には別に前と同じ様に扉を備へたる入口がある、此入口の正面に貨殖の神が祀られてあつて大なる佛壇の如きを形造つてをる、以上が主屋で幅三四間長十三四間の建物である、街道に接したる長屋と主屋との間を連接するものが二個宛相並びたる左右の棟である、一方の列が物置で他の方の列が若夫婦か若しくは子供の家であろう、是は主屋よりは稍小さく且粗末なるものである、此の二棟を家の人は西院と呼んで居つた、主屋の東に聯つて是よりは稍小さな家屋を成して居るものを東院とよんだ、東院の各家屋は西院のよりは尙粗末で下女下男の部屋と倉庫であろう、此等の家を圍んで堅固なる高き石若しくは煉瓦の塼が儼然として取り巻いてをる。

第二 支那人の心理状態

最初兵站監と參謀長とは予が所謂隠居部屋に同室されて、予等以下は所謂東院をつた、而かして支那人等は門に眞正面をしてをる予が所謂主人室及客室を占領して、時折は其玄關に椅子を出して腰掛けてをる、通譯に此處を明け渡さんことを要求せしめたが、中々明けわたさない、其處で何時まで斯うやつてをつても外聞が悪いから、予は強制的に支那人に談判して終に支那人を東院に移らしめて、所謂主人の部屋を兵站監室に客室を副官事務室に宛てた、夫れから逐次西院の各家屋を明けさして下士や輪卒や軍役夫を入れて遂に西院全部を占領した、其處で予は支那人なる者を知つた、彼等は我れが壓迫せざれば何處までも横柄に傲慢である、日本人がやる様に、人の機嫌を取るとか客が來

たならば最上の部屋を明けて通すといふ風ではなくつて、若し其最上の部屋を要求しないならば、此客は是を要求し得る程勢力の強いものでないと考へて、即ち自己よりは下位な者だと考へて傲然としてをるのである、其辯威しには忽ち屈服する人民で、彼等は自己を威す人は自己よりは勢力のある上位の人だと考へるのである、而うして此威しに逢うて我を惡むとか怨むとかいふ風ではなくつて、威した結果は益尊敬するといふ風である、此觀察は此場合のみでなく、予か支那人に出逢うた總べての場合から得たものである、何と奇妙なる民族ではあるまいか、是も數千年來其壓制的官吏の爲めに醸成せられたるひねくれた思想である、凡そ上に立つて下を治めて行く者は、先づ威を以て下の心を我に向はしめる、下の者が此手段に依つて上の存在を充分に認めるときに、恩を用いて下の心を飯服する様にす、是か數千年前から今日に至るまでの支那人の遣り方の大原則である、若しも此方法を倒にして先づ恩を用ひて後威を用いたならば、如何であろう、恩は普及することが困難で且つ狎れ易いものであるから、下の者が充分に上の者の存在を認めない、少しは眼の前にちらついても充分に心の奥から存在を認むることが出来ぬ、夫れであるから何と告げた所で只上の空を通るばかりで心の奥から従ふものでない、加之恩に狎れた後で威を用ふるときは下は上を怨むばかりで、益々政が亂れるといふことになる、是等の理屈は頗る明白であつて、殊に支那人のやうなひねくれた思想を以てをつて、太古代から壓迫された人民に向つては、益々威を先にして恩を後にしなければならぬといふことか、最も適切に顯はれてをるに拘らず、滿洲に於ける我軍隊一般の任方が此原則に反對してをるのは、嘆かわしいことである、宿營をするにも成丈け遠慮をして、村の端や家の隅に這入り、立派で大きな家のある處は却つて歩哨を設けて軍隊の宿營を禁ずる、徵發は絶対的に行はないで、どんなに價が高くても金と交換をする、日本人が支那人に對する犯罪は何處までも探索して、支那人の眼の前で之を罰するといふ様な遣り方をして居る、恐らくは上の人が露兵は戾殘忍である、是を追ひ拂う日本兵は温和主義であるといふことを支那人に見せやうといふのであろう、否寧ろ軍政官の口からも此の言が出て居る、之が鳥渡見た所では理窟さうに考へられるが、却て之が誤謬の最大なるものであ

る、何となれば此温和主義、此遠慮主義なるものが、却て支那人をして日本人は氣易い人間である、従つて日本人は露西亞人程畏敬するに及ばないと先づ第一に感ぜしめる、此感覺が先入主となつてをるから次で起るところの感覺は輕侮的となり、彼等自らは傲慢となる、茲に至つて赫々たる戰捷の餘威も彼等に一の刺撃を與ふることなくして終る、恐らくは彼等は日本人は戦争には勝つが怖るゝに足らないと考へて居るのであろう、是でどうして將來滿洲を經營し統治することか出来るものか、今の様にして居つたならば幾萬の人命を犠牲にし、幾億の軍費を投じて購ふたところのものも悲しや終に水泡に飯してしもうであらう、是れで忠勇義烈の死者の靈を慰むることが出来やうか、愛國の熱誠を以て軍費を捧げた國民に酬ふことが出来るであらうか、此情けない實例は近く現在朝鮮の事態に於て現はれてをる、噫々。

第三 駄馬と車輛

頗る煩雜なる業務に服しつゝあつた予は遽に閑散なる身となつて一時は殆ど茫然とした位であつたが、無益に其日を送るよりはと思つて、尙大孤山に残つて居る二三の諸隊を訪れた、時しも臨時編成の駄馬縦列や、車輛縦列の編成最中であつて、此縦列長で監視隊長たる小林及坪内の兩中尉が熱心に編成に従事してをつた、駄馬縦列といふのは、軍が王家堡子から直接に遼陽に通ずる山路を輸送すべき將來を顧慮して作られたもので、是には岸本獸醫部長が莊河附近から買ひ集めた六百頭ばかりの支那馬を宛て、赤尾經理部長の計畫して作つた支那風の駄鞍を負はせるのであつた、之には中々議論もあつたが兎に角實行したのである。車輛縦列といふのは兵站糧食縦列の代用をする目的で、時の大孤山軍政官牧野少佐の盡力に依つて驅り集めた支那馬車を以て作られたものである、駄馬縦列は軍の行進路が海城方面に變つた爲めと、駄馬に適當しない支那馬に不完全な駄鞍を乗せた結果、多くの鞍傷馬を生じた爲めとによつて大なる効力はなかつたが、車輛縦列の方は岫巖以北の險惡なる道路上の糧食輸送に大なる効果を認めた、何でも

支那では運搬具として支那馬車が第一等である。

第四 于家屯碇泊所

次には大孤山南方約一里にある于家屯碇泊處に行つて見た、此處には南尖碇泊所からの出張所があつて、軍を給養すべき糧秣の揚陸地である、糧秣船は此處から海上五六里もある大鹿島沖に着いて、是れから二艘の蒸汽船と數十艘のジャンクを以つて満潮の時を計りて此處に揚陸するものである、地理上から云へば于家屯は大洋河の河口に近き處で糧秣の大部分は于家屯から更にジャンクに依つて大孤山に運ばれ、夫れから前方へ陸送する、其一部は同じくジャンクに依つて龍王廟に運ばれ、夫れより獨木舟に乗せられて水路硝子河に運ばれるのである、即ち于家屯は糧秣輸送の起點であつた、夫れで數多のジャンクや小蒸氣や來多までが此處に幅濶してをる、陸岸には糧秣の小山が列をなしてをる。雨期を顧慮して是等を容るべき倉庫の建築も始まつてをつた、船と陸との間には、輪卒や、水夫や、人夫が點々として往復してをる、中々繁昌なものであつた、名もなき只青草や葦の生ひ繁つてをる、此野原や渚が一朝にして此の繁昌を來す、洵に戦争は驚くべき影響を及ぼすものである。

第五 ジャンクの構造

于家屯迄往きには馬で、復りにはジャンクで、此處に又此ジャンクなる特異の物を發見した、此船には勿論大小はあるが、先づ日本の百石積み位のもので、たまには千石船以上のものである、其外觀は西洋船よりは寧ろ日本船に接近しておるが、其の船も船もなき形と、其恐ろしく頑丈なる構造が特點である、何しろ大きな且厚い材木を無作法に連結して船底と船側を形造り、是と直角に恰も日本船の船と船とを切捨て、其切つた部分に板を張つたといふ形である、船の中央には全く箱のやうな船倉が設けられて、其船體の大きさに比較して頗る少量の物體を積載すべく構造され

て、此船倉の後方には、纜に水夫の起臥の出来る小さな部屋が設けられてある、船倉及び此の部屋には各蓋があつて、假令海洋の大波瀾が船の上を起す時でも箱の中に密蔽されて浮袋のやうに漂ふことの出来る爲めである、船側と船倉とは甲板を以て連結されて居るが船側は甲板の上に出ないで、つまり船側と甲板とは一種の箱をなして居るのである、即ち波が甲板の上を浸すことも容易である換りに、水は直ちに甲板から船側へ入り落ちることの出来る構造である、櫓は通常二本あつて大なるものは船の中央に小なるものは船の船に近く建てられてある、其帆は二十本ばかりもある竹の横竿に連結されて風の力が帆の各部分から直ちに櫓に及ぶ構造である、此船は全體から觀察すると日本船よりは波浪の大なる大海に、且つ風の強烈なる荒海に浮ぶのは餘程都合よく構造されて居るのである、畢竟支那の海かこの船を生み出したのであらう、只其積載量の太たく少きは缺點であるらうか、是も此海を航海するには余儀ないのであらう、水夫等は其備貨の安い割に、よく働いて此小なる積載量の缺點を補うておる。

第六 堅牢と實用

元來支那の物體を觀察すると其常に頑丈なる構造と武骨なる連結法とが特點であつて、即ち支那人の仕事は日本の様に外觀的のものではなくて、寧ろ頗る實用的のものであることを表してをる、物を造るに充分多量の素材を費つて惜しまないこと、其連結法も馬鹿らしき程丁寧であるといふことを知る、是で支那人の氣風が着實で、其思想が永久的であることを知ることが出来る、嘗て有形上の物體のみならず其他のこと殊に商業のやり方なぞも矢張り然うである、能く信用を重んじ永遠の取引をすることに於ては日本人の遠く及ばない處である、日本の商業上常に外國人から排斥される、即ち觸れば壊れるといふやうな物品を外國人に賣捌いて、一攫千金式の遣り方をして常に失敗をしてをる、此點に於ては寧ろ支那人を手本としなければならん、殊に戦地に來てをる商人等はむしろ商人と云ふよりも詐

欺師の方で、箸にも棒にも懸らない、我々は支那人に對してすらも恥かしいと思ふことも度々あつた、情けない者どもである。

第十六章 各地の視察

第一 初乗のジャンク

予はジャンクに乗つた、帆を揚げた船は出た、大孤山は前面に横つて其嵯峨たる巖骨を現して、巨人の拳の様に筋張つてをるが、又幾分新緑の色を所々に湛へて盛夏の生々したる光線を反射してをる、前に記したところの只一個の塔がこの山の最も恰好よきところに建てられて、繪の様な風致を造つてをる、山の左右に擴つてをる青空の一部はこちらに延びて河のほとりの滴る様な緑色の葦原と境を分つてをる、海からは軟風が葦の葉を弄んでサハ／＼と吹いてをる、此氣持善き風景の間を大きな帆を揚げて爽かに通過した、船は間もなく大孤山に着いた、此處には町の西南端から約二丁程突出されてある棧橋が二つあつて、一つは在來のものを修理をし、他の一つは経理部で全く新造したもので、此二つの棧橋が其尖端で相連結されてをる、船は皆この尖端附近に集つて、所謂船檣林立の姿を現はしてをる時しも干潮の時であつたから、米を一俵づゝ荷ふて此棧橋の上を蟻の行列の様に支那人が行き通ふてをる、是れが即ち陸送さるべき糧秣の揚陸であつて、殆んど朝から晩まで荷物の行列が絶へないで一種の奇觀をなしてをる。

第二 海底電線の價值

干家屯から還つた翌日南尖に海底電線の端末が連結されるといふので、電信部長と共に馬を駢へて、かつて珍らしさうに上陸した碇泊場の方に赴いた、上陸の當時まだ纔に二葉の芽を出したばかりの高梁も、今は早や三尺餘りに延

び一面の野原を綠色に蔽ふてをる、晴れやかなる空は此綠色と相接して親しさうに、天地の數限りなき幸福を相喜ぶがようにしてをる、十町位毎に點在してをる支那の村落を縫ふてをる道が處々上りつ下りつ此大うねりの原を横切つてをつて、其傍には内地で見る様な電信柱が其針金を誘ひつゝ道案内をしてをる、時折は此電信柱のために我々は内地に居るのではあるまいかと思ふ様な、不思議な疑問が心の裡に闘ひつゝ此平原を過ぎて南尖に着いた、其夜は碇泊場の司令官なる元の我聯隊長熊谷大佐や、部員の山内大尉などゝ談ひつゝ、海底電線の到着を待つておつたが、十時頃に始めて電線が港の北方なる一岸に着いて、此處に設けられた天幕の中に其通信の試験を行ひつゝあつた、電線は中徑八耗か六耗かの極細い部類のもので、我々が想像したよりも餘りに簡單なる爲めに失望したが、しかしながら次のことを知つた、是等の海底電線は戦争の始め頃概ね五百哩ばかり密かに英國から購ふたもので、先づ長山列島と白翎島次ぎに此島と釜山との間に沈設されたもので、是に依つて旅順に對する我が艦隊の根據地と、大本營とが交通し得る様になつて、我々が朝鮮沖を通つたときに白翎島で信號を交換すべく、船を停めたのも、此電線の爲であつた、此處に連結する所のもも長山列島から連絡された第二軍の上陸點、鹽大澳から導かれて南尖に來たものである、元來海底電敷設は丁抹の海底電敷設會社の専有する特權であつて、平時此電線の賣買や敷設は矢釜しいものであるが、今は是等の敷設を終つて殊に海軍根據地と大本營との連絡は、軍事上頗る重大の價值あるものである、鹽大澳と南尖との連絡は則第二、第三軍と第四軍との直接通信に充つるもので、同時に第二軍と第一軍とを聯ぬるものである、是は第十師團の兵站電信部が上陸するときに、安東縣と大孤山との間に電線を架設したからである、此海底電信が布設せられない前の第二軍と第四軍との通信は、長山列島から朝鮮に出で、安東縣から岫巖附近に達するといふ非常なる迂路を採らなければならなかつたのである、然るに今は最早直接聯絡が出来るので是等の軍事上の利益も亦頗る大ひなるものである、同盟國たる英國の厚意に對して感謝をせねばならん、其夜は電信部長と共に非常に穢き支那家に睡つて翌日大孤山に還つた。

第三 ノアの獨木舟

南尖から還つた翌々日、又馬に跨つて龍王廟に向つた、二十名ばかりの補助輸卒の守備をしてをる紅旗溝で大洋河を渡つて午後一時頃目的地に着いた、紅旗溝は大孤山より安東縣に至る本道上の渡河點であつて、海運杜絶した場合の第四軍の退路に當つてをる要點である、初めは第十師團の工兵隊が此處の守備に任じてをつたが師團と共に前進したのである、其處で舟に經驗のある輸卒を撰んで之に戦利銃を持たして守備に當らしめたのである、砲兵曹長本城鯉太郎が其長であつた、龍王廟は前に述べたごとく水路輸送の中繼所であつて人口の四五千もある、稍繁華なる町である、第十師團第四補助輸卒隊が此處にをつた。

翌日此水路を實檢せんがために龍王廟から大洋河を溯つた、ノアの洪水時代にあつたらうかと考へらるべき獨木舟が此河の運搬具である、此舟を支那人は其大小によつて大漕子、小漕子と名づけてをる、何れも長さ三四間で幅の三四尺ある材木の内部を掘つて舟にしたものである、勿論舟と見るよりは丸太と見るべきものである、斯様なものを二個若しくは三個横接して舟のやうな筏のやうな物を造つて是に糧秣を積むのである、然し積載量は割合に大きくて單獨の小漕子に三四十俵も積むことが出来て支那馬車に比し二倍の積載量を以てをる、此舟自身は勿論帆檣はないのであるが、連結したものは檣を立て、帆を揚げることを支那人に教へた、其處で彼等は其の所有してをる縲纒の總てのものを聚めて帆を造つた其様が眞の縲舟たるを表明して、頗る見苦しいといふよりは寧ろ滑稽の様を現してをる予等も此舟に乗つた、初めは櫂や櫂を使つて舟を動してをつたが、龍王廟から半里ばかりも進むと夫れからは三人の支那船頭が何れも水中に入りて船を曳き、若くは押すのである、是は水が浅いのと流が急なる爲めに此方が速いからであるが、一つは又彼等船頭なるものが漕ぐことに於て不熟練であるからである、即ち支那馬車を陸上に曳く換りに此船を水上に曳くので、寧ろ舟の性質を失うてをるのである、支那人は終日水中に其身體の半部以上を浸して頗る根

氣よく一日六七里の水路を溯るのである、而うして此の進行上屢々舟を停めて炊爨をし、且つ喫食をして少しも其進行を急ぐといふことはなく實に氣の長いものである、特に尤も彼等に就いて一の可笑しきことは、彼等は禪を締めた儘で舟の上に踞んだり寝たりしてをる、其有様は奈何にも太古風で而も彼等は平氣なものである。

第四 自然的平和と猛獸退治

舟は間斷なく此流を溯りつゝある間に、河は漸く平野から山の方へ其兩岸を導いてをつて高き堤防も、又漸く低くなりつゝ、或は礫に沿ひ、或は谷に沿ひ、或は稀に山麓に迫り、或は急に斷崖に接し、蘇東坡か所謂赤壁とまでは稱へずとも數十丈の絶壁下に奔湍急流泡沫を飛ばす處もあり、河峽を出づれば又綠野千里馬牛豚羊群をなして彷徨するもあり、天然の美景は此處に至つて我々が曾つて大陸とは没趣味のものなりとの感想を醸さしめて、大陸にも亦是有るかと思はしめたのであつた、殊に我々の眼が未だ曾つて遭遇しなかつた牧野の景を特殊の感を以て深く我々の頭腦を充した、十歳ばかりなる小兒が其鞭を揚げつゝ豚牛の一群を率ゐて一視同仁に彼等をいたはりつゝ、綠の野の彼方此方に草を求め木影を求め、時には又水を索めて、なたらなる此水際に誘ふて行く様の奈何にも詩的にして、且つ平和的なものである、若し夫れ牛の背に座して笛を弄ぶの想あらしめたならば、實に此景は繪である、春來れば花咲き、夏來れば葉繁り、秋來れば實結ぶ、天地は平和に自然を循環せしめつゝ、動物も植物も將た山川迄も此自然的なる平和を樂しみつゝある間に我々は今何をしてゐるであろうか、同胞の血はあけに地を染めて、骨は露はに地を蔽ふて悽愴悲慘の極を演じてをるのである、是は抑も何が故なる乎、將た誰の爲なるか、憎きはスライヴ人に非らずや纒かにドン河の上流に一小部落を成して東羅馬帝國の粟を食ふて居たこの種族が、幸運にもその版圖を廣めて近世史上に平和擾亂の事蹟をのみ残して居る、その呑噬飽くなきの欲は、ポーランド、フィンランドを押領し、土耳其を脅かし、土耳其斯坦を許取し、パミールを煽動し、遂に沿海、黒龍の二州より滿州までも占領し、至る處に平和を破つて

ゐるこの憎き、世界平和攪亂者を我々は何處迄も屈服せしめなければならん、否、彼等は人間ではない、其の國は表面歐州文明の幾分を装ふて居るけれども、其實は野蠻人よりも、尙下劣の獸類である、此獸類を對手に戦争をするのは残念であるが世界平和のため致し方がない、我々は此の猛惡犖犖なる獸類を如何にしても退治し、殲滅しなければならん、此の殲滅の後にはこの輝いたる光、この晴れ渡りたる野、この清らかなる水の様な平和の希望がひらめいてゐるのである、けれどまてよ今暫くは猛獸退治を続けねばならのである、飽くまでも退治するのである。

第五 南尖の滞在

我々は此感慨に打たれつゝ、其夜龍王席から約七里なる二道溝といふ山間の一部隊に泊つた、此地にをつた補助輸卒が非常なる熱心を以て予等をもてなして呉れた、例の喪風呂に入つた予は其厚意を謝した、其夜支那人が御馳走の積りで爐を焚いた、終夜熱くて殆んど寝れなかつた、朝起きて見ればアンペラが焦げて居つた、朝又船に乗つて同じ大洋河を溯りつゝ、碇子河の兵站司令部に着いて諸種の要務を談じた後、その翌日同じ河を下つて夕暮に龍王席からジャンクに乗りかへ、夜の間には大洋河に出で翌日の正午頃大孤山の棧橋に着いて此水路の巡視を終つた、此水路に於て毎日輸送しつゝある糧秣の量は略一個師團半で、其輸送材料はジャンク四五十艘及び大小漕子百五十艘ばかりである、龍王席から歸つて大孤山の予が室に着くと、當時南尖に上陸すべき歩兵第三十五聯隊第一大隊及第九師團後備工兵第一中隊に命令を傳達すべき任務を以て南尖に出張の命令か届いてをつた、そこで其日の午後四時に大孤山を出發して南尖に向つた、予は隨行をしてをつた松井軍曹と予のために派遣されておつた輸卒とを後に殘して予等の荷物を取纏めて出發を命じた、午後九時半頃に予は南尖守備隊の兵卒から案内されて六月六日始めて此の地に上陸した時と同じき陶家屯の支那家屋に五六日間の滞在をすべく這入つた、其夜は兎に角速に眠つてしまつたが、夜半松井軍曹と輸卒とが此の家に着いた、上陸すべき歩兵及工兵隊は未だ其船さもへ南尖に到着してゐなかつた、一日の後此船は着い

て、次いで上陸した大隊長及中隊長に命令を傳達し、且つ一般の狀況行軍に關する注意を與へた、尤も必要なる二三の支那語すらも教へて大隊長及中隊長は憂慮と危懼とを以て上陸した際に於ける、予が應接に非常なる喜悅と安心の色を動かして尠からず満足をした、元來南尖には兵站司令部を置かるべき地點であつて若之有つたならば兵站司令官は、則ち現在予の受けた任務を行ふべきであつた。然るに最初兵站監部の上陸せしとき兵站司令部の缺乏其他諸種の關係から此處には遂に兵站司令部を置かれなかつた、其代りに吉川副官が殆んど二ヶ月の間監部の支部として出張をし諸隊上陸の後に於ける給養宿營等非常なる困難の任務に服しておつたのである、處が監部の岫巖に前進する前の日に吉川副官は召還されて、氏の任務は南尖守備隊長をして兼ねしめることになつた、即ち半小隊ばかりなる兵力を率ゐてをつた、若林少尉が其後を繼いだのである、けれども此の守備隊は長く南尖に止まつて居つたので、一般の情況も注意の事項も知らない、是れ予が南尖に派遣された理由であつて、初めて戦地に上陸する部隊のためには最も必要なることであるといふ事を、予は大隊長及中隊長の現した強盛なる表情に依つて知つた。

第六 閑暇と静養

南尖に四五日間の滞在をしておつた間に命令傳達の外一つのなすべきこともなかつたので、此機會を利用して姫路以來最も繁劇なる業務に服して、殊に大孤山宿營間その業務と暑氣とのために時々逆上した結果、腦の痛苦を感じておつた不快の身體を健康にすべく努めて此附近の山野を散歩し、或は海岸に徜徉する等に日を送つた、詳しく云へば野道を歩んで誇り顔に咲いたる桔梗や、女郎花や、野菊や、姫百合や、さては名の知れない色々の花までもつんで持ち歸つた、或は怒濤の岩を砕くばかりに打寄する絶壁の上に立つて、渺漠なる黄海の地平線に眸を凝らして微かなる烟や小なる帆を眺めた、或る時は芝生に腰を下して、豚や羊を飼つて居る廣き野の面白き景色に半日を送つた、或時は紙と鉛筆を携へて此のあたりの風景を描寫しつゝ自ら喜んだ、或は日の西に傾く頃から海濱に出でて水面を拂ふ涼風に暑

熱の苦悶を癒した。此特異なる生涯は長き戦争の諸種の變遷する生活中に於て、遂に二度びすべからざるものであつて、予をして此生活中に在りながら常に戦地にあるや否やを疑はしめて時折は濟まざる様な感情を自ら禁じ得なかつた、されど予は遼遠なる將來と繁劇なる職務とに堪へ能ふやうに健康を保持することは、更に必要であると考へて勉めて頭腦の熱を發散することを圖つた、兵站監參謀長等と料理人の調味したる食膳を共にしたるときよりも、今は漸く不快の感覺を離れて雑語の肉類に野菜を混じて、不きように煮た手料理の菜も今は大いに味よく感じた、兵站監等は予が身體の状態を知つてつたのであるふ、兎に角予は天の冥護に依つて不健康なる身體を回復することが出來たのであつた。

第十七章 大孤山より岫巖

第一 道即河、河即道

八月十一日に岫巖の兵站監部に歸還すべき命令が來たので、直に仕度を整へて南尖を午後四時に出發して、日の暮れぬ内に大孤山に着いた、松井軍曹以下に予等の荷物を結束して一日後れて岫巖に向つて來ることを命じた、翌日早朝大孤山を發し、土城子に於て二三時間の休息をした後、更に前進して午後九時頃に小灣溝の兵站司令部に宿つた、此間の道といふものは我々が想像したよりも尙一層の險惡なるもので、處々峠があり、河があり、岩石か道に横るかと思へは泥濘脚を没する處もあり、特に小洋河の河流を縫うやうに道づけられてあるのであるから、少しく雨でも降れば殆んど道一ばいが河となつて忽ち交通を杜絶する、是が爲め日々五六百輛の支那馬車が運轉をして居つても、雨降りには殆んど一輛の車も兵站司令部に集つて來ないと云ふことになつて來る、加之又一方には阪路が急峻であつて、これでも道であるのかと思ふような所もあり、之が爲め行進途中往々支那馬車の轉覆してをるのを見受けた。

時には此轉覆の際馬を殺すこともあると見えて道の真中へ其腹部から臟腑を投げ出して横つて居る馬の死骸のあつたのを見受けた、夫れでも支那人は利を得るには如何なる犠牲を供することも無頓着であるといふために絡繹として支那馬車の交通が降雨の時の外は絶えないのである、運搬をなし賃金を得るためには支那馬車ばかりでなく、驢馬の行列も往復して居る、先づ鹿位の大きさの驢馬の背に簡單なる馱鞍を乗せて之に米若くは麥の二三俵を束ぬてをる、此驢馬を十頭ばかりも手綱なしに放した儘一人の支那人が其群の中にあつて追ふて行くのである、只驢馬には道草を喰はせぬために其口に小さな籠を箝めてあるものが多い、其溫和なる顔と小なる體と小足に歩む其歩行とは何となく愛らしく見えて、殊によく従順に人について行く、坂を上り下り、河を渡つて少しも驚く様子もない所が感服である、由來支那人は家畜を使ふに頗る長けて居ることは此の一事でも解る。

第二 混雜の中心地

土城子、小灣溝とも山間の一村落で、僅に家の四五十軒位しかない處であるけれども、今は兵站司令部の有るが爲に人夫車馬などが輻輳して非常に賑やかである、此賑やいの中心になつてをるのは饅頭粉の鍋焼や、饅頭を賣つてをる露天の飲食店で、泥に塗れた手を以て立ち乍ら之を食ふて居るものもあれば、歩きながら埃を帯びた其口の内に押し入れるものもあり、是等と連つて食ひながら喧しい程がやゝ囉つてをるものもあつて、尤も下劣なる彼等の生活を忌憚なく現はして居る、甚しいものは馬と共に路傍に眠つて全然で馬の友だちのやうに感ぜられた、此賑やかな混雜の間に糶秣の小山が並んで之に依を積むものもあれば、依を卸すものもあつて、輸卒等が此小山の頂上に立つて支那人を指揮をしてをる、是等の輸卒や糶秣を肩にして往復して居る支那人との間に何とかかとか大きな聲をしていひ合つて居る、其矢蓋しいこと暨へやうがない、そこへ復た縦列が來るとか、補充の軍隊が通行するとか、此野原の一方には小屋を掛けて多くの人の炊爨をするとか、湯茶を供するとか、又其の傍に抗を打つて馬を繋ぐとか、兎に角斯

様なる混雑を以て兵站司令部の附近は日を送るのである、戦線に立つて敵弾の下を馳驅して困難なる任務を遂ぐるは勿論言ふまでもないが、戦列隊とは違つて其戦つて居る日でも、其憩ふて居る日でも此處では間斷なく殆ど常に晝夜兼行して其繁雜なる業務に忙殺されてをる、兵站の職員等の勞苦も中々大抵のものではない。

第三 悲惨なる傷病者

八月十三日に小灣溝兵站司令部を出發して北に向ふた、行こと三里ばかりで、土門子嶺といふ峠を越す時に彼方からも此峠を越さんとしつゝある患者輸送の支那馬車の列に出逢うた、此峠は小洋河の流れ居る谷と、大洋河の流れ居る谷とを境する處の山の一支脈を越ゆる處で、此通路上の最も險阻なる地で、山の岩を割つて、不完全に道づけたのであるから、阪は急峻なるばかりではなく、到る處に岩の瘤を露して其通行の困難なることは一通りでない、斯の如き路の上を患者を乗せて支那馬車を轉ばすのであるから、患者の苦痛は見るも氣の毒である、其白い病衣を着て、頭や手足を纏帶しながら車に揺らるゝよりはと思ふてか、或は杖をつき、或は俱に助けられつゝ其覽東なき歩行を續けて車に沿ふて行くものもあり、歩むに堪へずして甚しく揺られ病軀を車に横へながら、其窪んだる眼を閉ぢつゝ行くものもあつた、或車には金巾製の日覆を設けてあつたが、半数以上は其病衣を着た體と青白き顔とを日光に曝しつゝ行くので、人をして轉た感涙に咽はしむるのである、敵のために斃れたるものは尙更であるが、敵の爲めに傷つけられて不行届なる治療や看護と、不完全なる運搬のために其苦悶に更に苦悶を加へつゝ天の一方を呪んで盡くることなき怨恨を訴へつゝある彼等患者は何たる悲惨な事ではないか、非道なる剛愎のために、此戦争を惹き起した露西亞人に對し天は其懲戒の鞭を加ふることなくんば是等不幸なる死傷者に對して天は其職分を怠るのである、然しながら、安心し玉へ、死傷者諸士よ、天は公明正大である、諸士の讐を報ひて諸士が祖宗の靈を呼び起し、祖宗の國家を九鼎大呂の安きに置くの時は刻一刻に來りつゝあることは確實であると、斯様なることを考へつゝ何時しか此の行列

を後に見送つて馬を岫巖の方に飛ばした。

大洋河を渡つてから十丁ばかり進むと、高粱の野を越へて彼方に儼然と現はれ出たのは二階の樓を持つてをる樓門である、此門の前に大なる衝立があつて、練門形の其口を塞いでをる、此樓門は此處に來て初めて見るを得たので、支那市街の特徴であるので岫巖なる町の威風を造つて居る、此門を過ぎ行く事暫くにして兵站監部に着いた、八月十三日午後一時であつた。

第四 嚴然たる圍壁街

予は今岫巖に着いた、再び元の繁劇なる事務に當るのである、然し乍ら業務が繁多であればある程身體を健康にしなければならん、其處で予は毎朝稍早く起きて一時間ばかりの乗馬を一箇の課業のやうに實行した、岫巖附近の到處に蹄の跡を印した、此運動と同時に岫巖に關する若干の智識を得る事が出來た、岫巖は分水嶺方向から來る所の大洋河と、新店方向から來るところの一支流の落合ふ所にある、平野の西北方に建てられた人口六七千ある稍富庶なる一市街で、鳳凰城もしくは安東縣から海城、若しくは蓋平に通ずる道路上の要點であつて、即ち此四點を以て作る四邊形の對角線の交叉點に當つて居るのである、町の中央より稍西北方に偏した處に長さ約五百米突を一邊とする正方形の圍壁があつて是を城と稱してゐる、方形の各邊の中央には「アーチ」形の門があつて、昔は此門の上に樓閣のあつた様な痕跡がある、圍壁の内外面は大なる煉瓦を累ねたるものであつて壁の高さは一丈四五尺もあり、其の厚さは一丈二三尺もあつて壁の外面上端はノルマン建築風の凸凹を並へた形をなして居る、斯様なる城の形は瀋州到處殆ど皆同様であつた其差は大小と新古とにあるのである、兎に角斯様なる城を町の略中央に置いて、城内には専ら官吏の役所や、居宅があり、城外殊に南方には商家がある、大體の町の規模は大孤山よりは頗る整頓をしてをつて、町幅の如きも相應廣く、商業も繁盛であつて、此附近に於ける行政の中心點である、岫巖と大孤山とは東京と横濱の如き關係を

なしてをる、町の北方及東方に接して大洋河が流れてをって、廣き河原を作つて居る、其の西方には新開嶺から来る山の一支脈の端末がやゝ近く迫つて此の町を瞰制して居る、此町の名物は岫巖石の細工物であつて、附近の山から出る蠟石に似寄つた、而もやゝ堅き岩石を採つて此町で細工をしてをるので、茶碗や印材の様なもの其重なるものである、以上は此岫巖の地理學的記述に止まつてをるのであるが、七月の下旬頃までは第十師團の大部が此町に宿營をして居つて、師團司令部も、旅團司令部も、兵站司令部も、病院も、此町の内にあつて物資の豊富なるだけに大ひなる給養上の便益を得たのである、戦略上からいつても、交通上から云つても、確に軍事的要點である。

第五 忠士の靈を吊す

最も没趣味なる清國の山野も、今は最も莊麗に着飾つて、誇り顔に其全盛を示してをる、樹といへば揚しかなない林でも、滴るやうな翠色をして其下に涼しい蔭を作つてをる、野は一面に高粱や黍や、蜀黍や、瓜や、茄子までも正に實を結んで其の頭をうな垂れてをる、予はこの間を毎朝馬に騎つて朝露の玉のような粒がきら／＼と今正に上つて来る太陽の光線を反射しつゝあるのを見ながら、最も爽快なる感覺を以て通り過ぎた、或時は山の陰にある山寺を訪れ、或時は畑の中にある小池の蓮花を見舞つて、清らかな其の花の香りと美しさを予が室に持皈つたこともあり、或時は大洋河の積に出で其速なる流を眺めたこともあつたが、此乗馬運動の間に最も深き感動を與へたのは岫巖の西に最も近く突出した山の尾の頂上に戦病死者の墓が建てられてある處に赴いた時であつた、地は高燥にして且清らかに、兵站司令部の行届いたる手入によつて墓地の境界を定めて、掃除も又出来て居つて人をして肅然として敬意を催さしめるのに充分であつた、一名の將校と十數名の下士以下の墓が其四角の柱のあたまを揃へて二列に並んでをつた、嗚呼忠勇なる諸士の靈よ、諸士は國家存亡の岐るゝ此大難に殉じて岫巖附近の一滴の露と化してしまつたが、諸

士の名譽は國家と共に不朽に傳ふるであらふ、諸士の戦死の場所も雖ては我大和民族が移り來つて此の地點に諸士の靈を祀ることもあらう、今や戦争は益好望であつて既に我軍は海城を占領し、將に遼陽に於て一擧に敵を包圍せんとしてをる、諸士の靈安んじて地下に瞑すべきである、と斯様な獨言をしつゝ是等の墓に默禮して山を下つたこともあつた。

第十八章 栃木城の占領

第一 栃木城の戦闘

第四軍兵站監部の岫巖に到着したのは七月廿九日、即ち軍が栃木城攻撃の目的を以つて前進した直ぐ後で、監本部は第十師團司令部の宿舍の跡に這入つたのである、而して此の時には最早軍は小孤山附近へ前進して、今や敵の陣地を攻めようとする時であつて、既に小孤山には仙波工兵少佐が兵站司令部を開かんとしつゝあり、又王家堡子より北方に進んだ一支隊のためには大野歩兵少佐が南馬峪に兵站司令部を開きつゝあつたのである、而して兵站の方では従來岫巖大孤山間及び岫・硝子河間にあつた兵站輜重及補助輸卒隊の大部を岫巖以北の輸送に用ひて大なる活動を始めた、臨時車輛縦列及臨時駄馬縦列も漸く編成が完結して此活動の中に加つた、古澤歩兵少佐は其部員を率ひて栃木城占領の後には此處に兵站司令部を開かんとして軍司令部と共に行進をしてをる、而も此際には予はいまだ大孤山附近を巡視つゝあつたのである。

愈々軍は七月三十日を以て栃木城北方に據つてをる敵を攻撃することに着手した、其戦闘の概要は次の通りである。

八月二日午前六時大本營着電

第十八章 栃木城の占領

軍の前面に在る敵は紅密峯北方高地より章三峪を経て三角山東方高地に亘り堅固なる防禦工事をなし紅密峯南方高地には砲兵肩牆を見る、又老達子附近には約三大隊の敵兵あり。

軍は此敵に對し去る七月三十日主力を以て大房身西方高地より下八岔溝北方高地に亘る線を左翼隊を以て賈家堡子南方高地より英落山西南高地に亘る線を占領せり。

翌三十一日拂曉軍は主力を以て三角山東方高地の敵に向ひ左翼隊を以て東西楊樹溝北方高地の敵に向ひ攻撃を開始し、左翼隊は午前八時頃東楊樹溝東北方標高三百四十五米突以西一體の高地を攻略せり、然るに二道溝方面にありては敵は益々其兵力を増加し、其の砲兵は約二十一門に増加せしも我左翼隊は新に來着せる一支隊と協力し猛烈なる砲戦の後之を攻撃し午後三時の頃遂に之を北方に撃退せり。

軍の主力は午前十時三十分頃大平峯西方高地の敵陣地を攻略するを得たるも章三峪及小房身東方高地にある敵砲兵より猛烈なる射撃を受け前進を繼續する能はず、其後敵は漸次新銳の兵力を増加し午後五時半頃に至り全線攻勢に轉じ來れり、我歩砲兵直に之を撃退し敵に多大の損害を與へしも敵砲兵の猛射のため追撃する能はず遂に近く相接して夜を徹せり。

是より先我左翼隊は敵を撃退し、其退路に迫りしを以て敵は夜陰を利用し逐次其陣地を撤し海城方向に退却せり敵は數ヶ月を費して築造せる堅固なる防禦陣地に據り特に速射砲を猛射し我砲兵を苦しめ大に攻撃に困難を感じしめたり、我軍の死傷約四百名にして敵は屍體約百五十を戰場に残し退却せり。

我に對せし敵は歩兵約二ヶ師團砲兵約七中隊なるが如く、而して中將アレキセーフ(歩兵第五師團長)之を統率せり。

鹵獲品野砲六門捕虜若干。

此日炎熱酷しく、正午室外華氏百二十度に上る。

第二 側背攻撃の成功

此戦争に於て敵をして退却せしめた譯は、第五師團が敵の側背に迫つて退路を遮断せんとする勢をなしたからである若しも此側背の脅威がなかつたならば析木城西北方高地の敵陣地は容易に奪取することが出来なかつたばかりでなく或は敵の逆襲の爲不利な戦闘をしたかも知れなかつた、實際現地を見ると紅密峯は析木城より海城に通ずる道路上の一個の峠であつて、是に連つて居る高地は此附近に於る地勢上最高なる一線を形つくつてをる、此の高地の最高點は即ち章三峪であつて、前面には析木城の東及北面を流れてをる沙河の谷が廣がつて、一帯の地勢を瞰制し最も防禦に適したる陣地であつて、剩へ敵は紅密峯から章三峪を経て揚樹溝に亘つて堅固なる防禦工事を施してをつたのである、此陣地の東方面から攻撃をしたものは第十師團と後備歩兵第十旅團とで、即ち是が主力である、南方から攻は我歩兵の撃したものは第五師團である、處が第十師團方面は谷を通過して敵陣地に突入するのであるが、章三峪にあつた敵砲兵は我歩兵の前進すべき總ての谷を猛射するので、第一線も豫備隊も共に敵弾を蒙つて、大に困難をしてをる際に敵の一部は逆襲に轉じ、我兵が之を撃退したといふものゝ歩兵第十四聯隊の如きは敵の銃劍突撃まで受けて随分危うかつたのであつた、幸にも第五師團方面の攻撃が頗る進捗して敵の退路に迫つたものであるから敵は終に退却するに至つた、元來防禦工事に據る敵を攻撃するの秘訣は正面攻撃と同時に敵の翼側を包圍することであつて、今日まで露軍に對する我軍の攻撃功を奏したのは殆ど皆此秘訣によつたのである、鴨綠江畔の戦闘では第十二師團が水口鎮以北の高地から敵の左翼を包圍し、南山の戦闘では第四師團が金州灣の海水を渡つて同じく敵の左翼を攻略し、得利寺の戦闘では騎兵第一旅團は敵の左側背に迫り、分水嶺の戦闘に於ても東條支隊が新開嶺方面から敵の右側背に迫り、何れも敵は退却を餘儀なくせられたのである、此包圍的形勢を作るのは我軍の戦略的進路の良好であつた爲、常に敵陣地の正面に進む部隊と之と直角なる方向、即ち敵陣地の側面に進む部隊とが出来て彼是相應じて敵を攻撃し、敵に退却

を餘儀なくせしめたのは大本營に於る最初の作戦計畫の巧妙なるのに依るのである。

第三 酷烈なる暑氣

析木城戰鬪の公報にも示され如く、此頃の氣候は非常に酷烈であつた、恐らく此土地の最高温度であろう、地理學上の緯度から之をいへば滿洲は我北海道に當つてをるのであるから、夏は甚しく暑くなりそうに考へらるゝが滿洲に来て初めて夏も又太た酷烈な氣候であることの理由を知つた、土地の寒暖は其地表面の受る光線の角度と熱度とに原因するのは其小部分であつて、實は土地の太陽熱を受る時間の長短即ち此熱を吸收及反射する時間の長短に専ら原因するのである、即ち緯度の高き地方は夏至及冬至に於ける晝夜の時間の差が緯度の低き地方よりは著く大なるのである、假令ば東京邊で夏至に四時に日出で、八時に日暮るゝものなれば、滿洲では三時に日出で、九時に日暮るゝので、夏は滿洲では著しく太陽の光線を受けてをる時間が之を受けない時間に比して長いのである、而して冬は之と全く反對であるから夏は烈しく暑く、冬は亦烈しく寒くなること云ふ道理である、緯度の高き地方の冬の太甚しく寒いことは誰も承認することであるが、同時に夏の酷たしく暑きことは一般に考へられて居らぬ様であるが實際は今云ふ通である、而して一年の氣候は長き冬と長き夏との循環であつて、春と秋とは宵に出る三日月の如く現るれば直ちに其影を隠してしまふので、隨て春秋の最も愉快なる時候に於ける綺麗なる花の色を見ることが出来ない、我々の郷國は是に於て益々天地間の一大樂園であるといふことが明かである、左なくとも本國は懐かしいものであるに。

析木城附近の戰鬪の時から第五師團は第四軍司令官の指揮下に入つて、茲に初めて實際の軍を成した、此戰鬪が終つてから軍は第二軍と協力して海城に向つたのであるが、敵は析木城附近の戰鬪に於て敗走した後、海城の支ふるべからざるを知つて兩軍此處に向ふた時には敵は早既に海城を去つた後で、兩軍の先進隊が八月三日に苦もなく海城を占領

た、第四軍は第二軍と相連つて析木城から海城に亘る道路以北の一帶の村落に宿營して戰鬪後の休養をやつた、同時に遼陽攻撃の準備のために一支隊をタンカンズイから吉洞峪の方に出した、是がため析木城海城及吉洞峪に兵站司令部が開かれて海城には志賀中佐吉洞峪には加島中佐が兵站司令官となつて居つた、而して糧秣の主なるものは海城に集積さるゝのであつた、大孤山より海城まで其距離殆ど五十里である。

第十九章 第一第三軍の戦況

第一 陥落の期待外れ

五月廿六日を以て我軍が南山を攻略し、續いて第三軍が南關峯を過ぎて青泥窪を占領したことまでは一般に知れわたつてをたつたが、其の後該方面に於て我軍が如何に活動してをるかは何ての者が尤も熱心に知らんと欲する處であつたが遂に一つの便りも得ることが出来なくて只徒に空想を逞うしてをたつた、六月も過ぎ七月も過ぎ未だ何の便りもなかつた、然しながら旅順は必ず攻落せなければならんと云ふことゝ、軍隊が絶へず此の方面に活動して居ることは信ぜぬものはなかつた。然しながら旅順が何時落るか云ふ時間の問題に於て種々議論があつた、或者は旅順要塞は地形の峻なるに加へて、露國が數億留の金をかけて數年間かゝつて造つた要塞であるから、此陥落は容易なことではないと云つた、或者は如何なる堅固の要塞でも大和魂の氣力を以て進めば屹度思つたよりは容易に落るであろう、歐羅巴人のいふのは只有形的であつて無形の精神力は未だ試験されないから難攻不落などゝ虚勢を張つてをるが、日清戦争の時でも廿四時間経ぬうちに落したではないかと大なる氣焔を吐くものもあつた、而して一般の者の考へは旅順要塞の築城が如何に堅固であるといふことを知らないのと、日清戦争に於ての記憶との爲に第二の説に賛成して、六月頃からも旅順は落ちそうなものといふこと云ひ合つてどうして旅順の陥落に手間がとれるであろうかとつぶやいてをたつた、内

地の新聞などは陥落日の投票をやつたりして只管に待ち焦れてをつたが、實際は陥落どころか中々旅順要塞に近寄ることが出来なくつて、七月廿八九日頃に漸く長岑子、英格石の線に達したと云ふ情報が陰かに我々の耳に達したといふ始末であつた、然しながら大本營は第三軍即旅順攻圍軍に關する戰報を未だ少しも公けにしなかつたので、内地では八月に至つて今かくと其陥落を待つて居つたのである。

第二 様子嶺の攻撃

第一軍は摩天嶺及之に連る一帯の高地に於て敵將ケルレルの指揮した逆襲を二回までも撃退した後、七月三十一日より榆樹林子及様子嶺附近に於る敵陣地を攻撃し同日より八月一日まで攻撃を繼續し之を占領した、其の詳細は次の通りである。

八月二日午前大本營着電 黒木大將報告

軍は榆樹林子及様子嶺附近を堅固に占領せる敵に對し七月卅一日拂曉より攻撃運動を開始せり。

榆樹林子方面の攻撃運動は同日黄昏前までに豫定の如く進捗し敵の兩翼を撃破したるも、敵の兵力強大にして其陣地堅固なりし爲夜に至るも之を撃攘するを得ず、依つて翌一日未明再び攻撃を開始し正午に至り漸く之を撃退して老鶴溝、榆樹林子西方約一里半に至る迄之を撃退せり。

様子嶺方面の攻撃も漸次成功し、卅一日午後一時過より塔灣及マクローメンザ方向より共に歩兵の攻撃前進に移り黄昏前に於て其陣地の大部を奪取せしも、敵の一部は最も頑強に抵抗し夜に入るも退却せず、各攻撃團隊は戰團隊形を以て夜を徹し、八月一日未明再び攻撃を開始し、午前八時様子嶺附近一帯の高地は全く我有に歸せり。戰團の終結せざりしは左の諸件に依る。

一、地形峻峻にして攻撃動作に不便なりしこと

二、良好の砲兵陣地なく爲に我砲兵の威力を發揚し得ざりしこと

三、百度以上の炎天にして軍隊の勞苦著しかりしこと

我に對せし敵の様子嶺附近にありしものは、狙撃歩兵約二ヶ師團半、砲兵約四中隊にして湯河沿方向に退却せり、又榆樹林子附近に在りしものは少くも、二ヶ師團及之に屬する砲兵にして其大部は安平方向に退却せり。

彼我の死傷は尙取調中。

鹵獲野砲若干あるもまだ精確の報に接せず。

第三 滿洲の豪雨

予が岫巖に到着した頃から滿洲の所謂雨季の本性を現はして殆ど連日人々の頭腦を壓迫する様に蒸し熱く、且つ毒氣のあるやうな雨を降らした、之が爲に到る處の河を忽ち漲らして非常なる濁流と急流とを惹起して、我兵卒輪卒等の生命を奪つたこともあつた、或時は岫巖の北方で此處から王家堡子に通ずる道路上大洋河に我工兵が架設したる橋を流して、其の跡に第十師團の架橋縦列が岫巖に残して置いた制式の架橋材料を以て橋を架け直したが、又此橋も其次の雨に流されて之がため大なる騒動を惹起した、其一つは此橋を架けた第九師團後備工兵第一中隊（中隊長大尉久津田義）が橋梁守備に當つてをつた、兵卒が出水の爲に橋の流失を慮つて此橋の上で作業をしてをつた際に増水の急なる爲め橋と共に流れ去つたこと、今一つは制式材料を流してしまつたことであつた、其處で此處から五六里下流にある硝子河の兵站司令部に電報を打つとか河の沿岸の處々に人を出して、兵卒と材料の搜索をやるとか、随分騒いだものであつたが遺憾乍ら其の兵卒は終に溺死し、只材料のみをわずかに拾ひ得た、此の兵卒は公務の爲とは云へ甚だ氣の毒なものである、或時は降雨と雷鳴の爲空中電氣が起つて岫巖海城間の電信が不通となつた、此頃の電信は第四軍と第二軍とは海城と蓋平と二ヶ所相通じ、其後のもの即ち新開嶺を経て蓋平に連絡するものは將に撤收せんとし

つゝあつた、第四軍と第一軍との連絡は王家堡子から吉洞嶺を経て摩天嶺方向に達するもので、何にしても海城岫巖間の不通は、當時蓋平にあつた總司令部と第一第四軍との通信を遮断するので、同時に起つた鹽大澳南尖間海底電線の不通は更に此故障をして大ならしめたので、遂に電信部長の請求によつて第一第四軍の通信を兵站監部の二名の下士に持たしめ、此降雨と出水とより起る道路上の大危険を冒して蓋平に往かしめた、此下士はよく此危険に打ちかつて略一週間の後監部に還り來つたが、其語る處によれば殆ど身の丈に近き深き水を渡つて前進したといふやうに非常なる困難であつたそうである、又或時は殆ど一週間の降り續きの爲に兵站線路上の到る處支那馬車の通行を止めたので、當時析木城及海城に軍の七日分位あつた糧秣が盡きはせぬかと、兵站監參謀長其他我々に至るまで非常に心配して空のみを眺めて居つたこともあつた、幸に一週間目に雨がやんで斯様な不幸を免るゝことが出來たが、其の心配は實に一と通りでなかつた、また或時は海城の南に宿營して居つた第十師團第六補助輸卒隊の輸卒が海城の南を流るゝ沙河の流を渡つて對岸にある徒歩車輛を流さない爲に之に向つたが、見るゝ水の深さが増して剩さへ流は早くなつて終に二人の輪卒を流してしまつた尤も不幸なる出來事が起つた、元來清國の山は樹が生へて居らぬから降雨に際しては忽ち増水し數分間のあいだに忽ち數尺の深さを増し、其猛烈なる勢は迎も内地では見ることとも想像することも出來ぬ位のことである、嗚呼この雨、あゝこの河、汝等は洵に天地間に於ける無慈悲なる惡魔の使者であらうか。

第二十章 八月の海戦

第一 旅順港外の海戦

我第二軍は七月廿四日大平嶺附近の戦鬪の後同廿五日大石橋を占領し、續て第四軍も亦七月卅一日に析木城附近の

敵を攻撃して八月二日には兩軍相並んで海城及牛莊を占領し、第一軍も之と同時に楡樹林子及様子嶺を占領し、今日まで各個に動作したる三軍は今より總司令官の指揮の下に正々堂々遼陽に向つて敵を壓迫せんと擬して一大決戦將に始まらうとしてをる、此の矢先きに我海軍も亦旅順港外に於て遁走を企てた敵艦を大に撃つて敵の企圖を全く遮り、且つ大なる損害を與へた、公報の示す處は左の通りである。

八月十二日午前九時十分着 東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は一昨十日敵艦隊の旅順口を脱出して南下せんとするを遼岩附近に邀撃し、次で之を東方に追撃し、午後一時より日没迄激戦し敵に多大の損害を與へたり、此戦鬪の後期に於て敵の砲火は大に衰へ陣形は全く潰亂し各艦個々に分裂し、アスコリド、ノーウキツク、驅逐艦數隻は南方に遁航し、其他の諸艦は各自旅順口に向ひ、我驅逐隊、水雷艇隊に追尾襲撃せられ、更に少なからざる損害を受けたるものゝ如く、ツエサレウキツチは其救命浮標及屬具等の戦場に漂流せるに徴すれば或は轟沈されたるならん、驅逐隊、水雷艇隊襲撃の結果に就きては未だ詳細の報告に接せず右アスコリド、ノーウキツク、ツエサレウキツチ、バルラーダの外は昨朝旅順口に遁入しやるが如し、我艦隊の諸艦には大なる損害なく今後の戦鬪に支障なし、死傷は全體を通じて將校以下約百七十なり、

八月十二日午後大本營着 東郷聯合艦隊司令長官報告

一昨日の戦鬪にて敵の戦艦六隻の内五隻は非常なる損害を蒙れるものと認む、ボペーダの如きは櫓二本とも折れ、巨砲は發射せざるに至れり、旗艦レトウキザンは三千五百米突の距離にて我集弾を被り其損害最も大なりと認む、敵巡洋艦の被害は比較的大ならず、但しバーヤンは出て來らざりし、我損傷は既に應急修理を了せり。

八月十六日 大本營海軍幕僚公報

東郷聯合艦隊司令長官の最近の報告によれば敵艦バルラダ型一隻は去る十日夜我水雷攻撃のため轟沈せる事確實なるものゝ如し。

第二 卑怯なる露艦隊

旅順口は今や我第三軍の爲に攻圍せられんとするの形勢となつた、若しも旅順要塞が我軍の手に落ちたならば此の港を根據としてをる敵の太平洋艦隊は勿論、我有となるべきものである、假令旅順要塞が世界の想像する様に難攻不落のものであると假定しても、我陸軍の爲に陸上の連絡を斷れたるを以て永く此港にをるよりも寧ろ我艦隊と雌雄を決するか、若くは遠く遁れて中立港に武装解除をした方が戦争後の海軍勢力のためには、此港で袋の鼠とならうよりは有利である、それ故に敵艦が我封鎖を脱出せんとするのは當然で、既に六月廿三日に於て第一回の脱出を試みたが其の目的を達し得ないで却つて損害を受けて元の巢へ這入つた、そこで今度は餘程大決心をしつらしく、而して逃げ得る丈は逃げ様と思つて出てみたが、又もやマンマと撃退されて二三艘を除くの外は又しても元の港へ歸へつた、其逃げようと云ふ決心はよろしいが之を實行する丈の勇氣がない、假令艦隊を全滅にしても此艦を日本に渡さぬといふ決死の勇氣を以てしたならばアスコリト、ノーウキツクの如く逃げをふせたかも知れない、然るを彼等露西亞人は二度もやつてみたが沈没と溺死が恐ろしさに何時までも思ひ切れない、丁度毒蛇に嚙まれて其儘にしてをけば其毒が全身にまわつて死ななければならんと云ふことは知つておるが、其咬まれた一本の足を切る段になつて少しく切つて見ると痛い、そこで切ることを止める、そうかうして居ると毒が段々體にまわる、是れではならんと、又今度は大憤發で其足を切るとドーも痛いので、又止める斯様な事を繰り返して到頭蛇の爲に殺されてしまふのは丁度露國の艦隊である、何と卑怯未練ではないか。

此脱出は露國太平洋艦隊の最後の活動であつて此海戦のために受けた損害は遂に回復することが出来ず、此年の十月五日以降我大口徑攻城砲のために破壊さるゝ迄旅順港内に潜んでをつたのである、其昔威風堂々と我港灣に出入して其虚喝的なる四本もある煙突を見せつけて、我國民を威した露國太平洋艦隊の末路も其腑甲斐なき軍人の爲に憐れなるものとなつてしまつた、僅にアスコリドとツエサレウキツチは上海に逃げて武装を解いた、而して之と同時に逃げたノーウキツクは八月廿日に樺太島コルサコフ港で我千歳、對馬のために砲撃され、翌廿一日に淺瀬に乗り上げて殆ど沈没してしまつた此艦は、彼の艦隊中最も快速力の巡洋艦であつて、常に艦隊の先登になつて我々とよく戦つた艦であつたが、是すらも到頭此姿となつてしまつた、卑怯なる軍人を載せた軍艦其のこそ哀れなるものである。

第三 對島沖の海戦

八月十日の敵艦隊出撃と相應じて同じ日頃から浦鹽艦隊が出港して、八月十四日に對馬沖に於て我上村艦隊と戦つた其結果リュウリツクは沈没されて、他の二艘は辛ふじて浦鹽に逃げた。是より先此艦隊は七月二十日頃日本海に出て、津輕海峡を通つて二十三日頃には九十九里濱沖から伊豆の海岸に迄來つて、英國の汽船ナイトコンマンダ號を撃沈し、同じく三十日頃悠々と又津輕海峡を通り去つたのであるが、此艦隊の出沒の爲には嘗て常陸丸、佐渡丸の遭難一件から内地人の非常なる心配を惹起したが、而も此時までは日本の艦隊は此艦隊の爲に少しの力を分けることも出来なくつて、常に恣に悪戯を逞うせしめたのである、それで内地人は對馬沖海戦の結果を喜ぶことは八月十日の旅順港外の海戦よりも更に夫れ以上であつた、此海戦の詳細は次の通りである。

八月十五日午前五時三十五分大本營着

上村第二艦隊司令長官報告

十四日天明出雲、吾妻、常盤、磐手は韓國蔚山沖に於て索敵行動中浦鹽艦隊三隻の南航するを發見せり敵は我隊を見るや北に向ひ遁走せんとするを以て直に其前途を扼し午後五時二十三分に至り戦鬪を開始せり

敵の殿艦リュウリツクは常に後れ勝にて絶えず激烈なる砲火を被れり其他の二艦は屢々勇敢に之を掩護し遠ざかれれば轉回して之に近づき近づけば又前進せり依つて我隊は屢々丁字形を畫きて敵に集彈するの利を得たり其結

果敵艦をして何れも數次大火災を起し多大の損害を負はしめたり特にリュウリツクの如きは遂に進退の自由を失ひ砲力も又全滅に近づき時々緩慢なる發射をなすのみにして其艦尾は著しく沈み且少しく左舷に傾斜するを見たりしが敵は遂に之を捨て、遁走せり恰も好く第四艦隊戦場に近づき浪速、高千穂のリュウリツク攻撃に進むを見たるを以て本隊はロシヤ、グロンボイを追撃せり此間激戦約五時間に及び敵の二艦は全速力を以て逃走す

午前十時十九分我艦隊は右舷に廻頭しリュウリツク搜索のために南航せるにリュウリツクは遂に沈没せるの報に接せるを以て直に全隊の集合を命じ其沈没位置に至り浮泳する人員約六百名を救助し得たり

我艦隊は多少の損害を受けたるも何れも重大ならず士氣極めて旺盛なり

備考 司令長官海軍中將上村彦之丞は出雲に、司令官海軍少將三須宗太郎は警手に坐乗せり第四艦隊司令官は海軍中將瓜生外吉なり

第四 宋 襄 の 仁

浦鹽艦隊の大損害は著しく國民を悦ばしたけれども、上村艦隊については或る一派の人より非難を免れなかつた、それは外でもない、此海戦に於て一艦を沈めて其一艦の全員を救助したといふことである。世界の新進國として文明的襟度を表すのは強ち不必要ではないが、然し乍ら敵の追撃をやめてまでも一艦の全員を救はなければならなかつたであらう乎。此公報を充分に詮議すると戦闘開始が午前五時二十三分で、夫れから戦闘は約五時間續いて、即ち午前十時半頃にロシヤ及グロンボイを追撃したことになる、而して一方には午前十時十九分我艦隊は右舷に廻頭とあると、戦闘が終つた時が即ち艦隊の轉廻した時であつて、ロシヤやグロンボイを追撃した時間殆ど零である追撃の一時間も二時間もして其上で轉廻すると云ふなれば誰も非難はしないが追撃をすらかしないに俄に轉廻して敵兵救助に

は如何にも訝しき次第である、即ち追撃をしないでも敵兵を救助しなければならん云ふ上村艦隊の處置は宋襄の仁たらざるを得ない、抑々是等の人達の考へは誤謬に陥てをりはしないか、戦争をすることは敵の戦闘すべき材料を破壊することであつて、是さへ出来得れば充分である考へてゐるのではあるまいか、詳しく云へば軍艦や大砲や、砲臺を破壊して仕舞へば敵兵は出来るだけ救助をしない考へてゐるが、昔から今日まで非常に度々戦争をやつてをるが、其戦争の直接の目的は敵の兵力を減ずること、即ち之が爲には相互に其敵を殺傷し合ふことであつて、どんな戦争でも此殺傷いふことをせずに戦争をしようといふことは考へられて居らぬ、若しも上村流の考へであつたらば、砲弾は堡壘や大砲や軍艦を破壊する榴弾若しくは堅鐵弾のみで澤山である、人馬を殺傷する目的で作つてある榴散弾や片鐵榴弾はやめてしまはなければならん、夫れでも世界は之を禁じて居らぬばかりでなく、益此種の彈丸を研究して其丸子や鐵片の數を殖やそうしてをるではないか、即ち戦争の本義は敵を殺傷するものである、何の必要があつて艦の乗組員を一人も残らず救助せねばならんか、是は一步を譲つてをくもするも我が大なる損害を被つた敵艦の追撃をさしをいてまでもリュウリツクの乗組員を救助しなければならなかつたであらう乎、世の中から宋の襄土を以て目せられても致方がない、而して我々も亦此點に關しては絶對に同意することが出来ない。

第五 珍客の待遇

日本人が露西亞人に對する仕方は此上村艦隊の事のみならず、捕虜の取扱ひの如きも頗る其要を得ない、松山に捕虜收容所を造つて非常に捕虜を優待して居る、或は散步を許すか、或は居室を持たすか、其便宜を與ふこと至らざるなく盡さざるなしである、遂に彼等捕虜は日本人を毆打する、暴行を働らく、女郎屋にあがつて酒を飲む、其揚句に喧嘩を始める、甚だしいのは日本の婦人を辱めやうとしたこともある、是等の事實は着々新聞紙上に載つて、内地に居るものは如何に感じたかは知らぬが、我々戦地にあるものは斯様な不都合を働く捕虜ならば、其數が何千あ

ることも何萬あるとも一人も残らず斬つて捨てたいといふ感覚が起つて、我々の血管に血を漲らすのである、其馬鹿らしき加減は殆ど口が開かない、今日では捕虜といふ特別な名稱を日本では附けてをるが、西洋では之をブリッナーといつて牢獄に投ぜらるゝ囚人といふ字と同じ字である、昔から擒まれば全く奴隸のやうに扱つたもので牢獄に投ぜらるゝ者もあれば、野原に曝さるゝ者もあり、全く人間の取扱ひをしなかつたものである、西洋の文明國と稱する普魯士亞でさへ、西紀千八百七十及七十一年の戦役で佛國の捕虜を矢來の内へ追ひ込めて、一週間も水一つあてがはぬことさへあつた、斯様な性質のものを珍客が來たやうに非常なる優待をして恣に跋扈せしめてをる、捕虜に對する當局者の仕方は勿論同意が出來ぬが、人民の方でも捕虜に金錢をやるか、品物を贈るか、馬鹿けたことをやつて、何たる間違つたことであらうぞ、一體今日の日本人は無暗に外國に對して體裁を飾らうとしてをる、全然虛榮心に満ちた女のやうである、其身體にドンな苦痛があつてもドンな健康を害することがあつても無暗に着飾つて、只着物がドーであるか、帯がドーであるか、頭がドーであるか詰らないことに氣を取られて、而して自分のすべき事なんかはそつちのけで、漸次不利の境遇に進んで行くのも知らないで前を見、後を見、左右を視、只人がアもいゝはしまいか、斯も考へはすまいか心配して、心の中に一物のもなき輕薄な者と同様である、一人の女や一人の輕薄者ならば何たることもないが、國が擧つて女となり輕薄者となるのは洵に情けない次第である、今少し萬事を下腹に力を入れて根據ある考へを以て政府、人民共に仕事をしなければならぬ、捕虜なんかに離脱して機嫌をこるようでは東亞に牛耳を執つて世界を指導するやうな大國民となることは到底出來ないのである咄。

第二十一章 第一回旅順攻撃

第一 至仁なる聖旨の拒絶

旅順攻圍軍たる第三軍は安子零一帯の高地に據る敵を驅逐した後、長岑千英格石の線に達し、進んで鳳凰山を踏えて小孤山より水師營に亘る線を占領して、旅順背面防禦の堡壘線に迫つて將に本攻撃に移らんとして居る、第九師團も此頃には既に上陸を終つて此軍の戦闘序列に入り、第一師團と第十一師團との中間に其の位置を占めた、今や旅順は陸正面は勿論海正面に於ても東郷艦隊のために全く封鎖されて一般の形勢漸く迫つてをる、國民は南山攻撃以來此方面の狀況が發表されなかつたからして、其陥落を今か今か待ちうけてをつたらしいが、八月十三日次のことが發表されたので最早旅順の命脈は旦夕に迫つてをるものと考へ更に其陥落を待ちあぐんで居たのであつた。

訓令 參謀總長候爵山縣有朋詔を奉じて、左の訓令を滿洲軍總司令官に與へたり。

大元帥陛下は至仁の聖意を以て旅順港要塞内に在る非戦闘員をして可成鐵火の慘害を免れしめんことを望ませ給ふ。

右の聖旨に對し貴官は旅順口要塞内にある婦人小兒僧侶中立國の外交官觀戰將校にして避難を希望するものを青泥窪に護送し該地碇泊場司令官に引渡すべし。

作戦に影響する慮り無しと認むる時は旅順港要塞内に在る前項以外の非戦闘員をも同じく避難せしむることを得此訓令は滿洲軍總司令官より更に第三軍司令官に傳へられて、八月十六日午前八時軍司令官は參謀少佐山岡熊治を軍使として敵の前哨に遣はし、陛下の聖旨並に勸降書を敵の要塞參謀長に渡さしめた、然るに翌十七日朝敵の軍使は陛下の聖旨及勸降書も二つながら拒絶したる回答を齎した。

第二 自尊心と輕侮心

此出來事は非常なる憤怒を我國民に起さしめた、彼れ敵將ステッセルは陛下の最も人道に適へる大御心をも辨へず之を拒絶したるは不屈至極である、此傲慢なる拒絶に對し何の面目あつて他日降を乞ふことが出來たであらうか、獸的

なる彼は其傲慢なる意志に非道なる野蠻を以て我皇室を侮辱したのである、何ぞ其肉を食ひ其骨を曝しても飽き足らぬではないか。

然し乍ら斯様な傲慢無禮の回答をなさしめたる理由は別に大に有るのである、露人は元來頗る自尊主義の寧ろ傲慢なる人間である、殊に我國の如きは小國にして頗る侮つてをつたので、鴨綠江や南山の戦闘で敗北しても彼は猶驕慢熱のために少しも其夢を醒さんのである、加之旅順の要塞は敵が其第一第二線の防禦工事を重んじないで最後の直接防禦に全力を注いだのであるから、我攻圍軍の爲に南山及安子零の線を取られたる最後の陣地で充分に抵抗する積りであるから未だ未だ窮してをらないのである、其處へ 陛下の聖旨と共に勸降状を送つたのであるから彼は此勸降状に對して、日本軍が何を云ふか今直に撃退してみせる云ふ反動的感覺が起つて、即ち勸降状に對する感覺の爲に 陛下の聖旨をも拒絶してしまつたのである、而して此不面目を來たしたばかりでなく、敵に倍々堅守の決心を起さしめてドコ／＼までも抵抗せん意氣ぐませたのである、旅順攻撃の困難は其初め攻撃軍自らが招いたまいつても差聞ない、勸降状のごまきは之を送る時機を充分考慮しなければならぬものである。

第三 旅順第一回總攻撃

そこで旅順第一回の總攻撃が八月十九日から開始されて二十、二十一日と戦闘はうち續き二十一日には東鶏冠山砲臺を占領したが、遂に再び敵のために奪はれ二十二日に至つて僅に盤龍山東西砲臺を占領したのみで、最も猛烈なる此攻撃は多大なる損害を受け、最も悲惨なる状況の下に中止するの已むを得ざるに至つたのである、而も是等の結果は姑らく發表することなく戦死將校の氏名すらも遂に公にせられなかつたのである。

第二十二章 遼陽の攻略

第一 我滿洲軍の作戰計畫

第一軍に於て榆樹林子、榛子零の線を占領し、第二第四軍に於て海城牛莊に亘る線を占領してから暫く戰闘休止の模様であつて、就中此頃降りしきつたる雨は八月十七日頃から起るべき豫定の前進を延期せしめた、此間に總司令官の直屬にして到着した部隊は後備歩兵第三、第十一旅團、並に徒歩砲兵第四聯隊、同獨立第二大隊であつて、是が遼陽攻撃に於る我軍の總豫備隊なるのである、遼陽攻撃のための前進に遅延を來したのも一つは此雨の爲に是等部隊が海城に到着するのが遅れたからである、其處で二十日過には是等の部隊も到着して愈々前進に取りかゝろうと云ふ次第である、此時に敵は主力を以て鞍山站から騰登堡に亘る線に在る堅固なる防禦陣地に據り、一部を以て遼陽鳳凰城街道方面なる寒坡岑、大甸子を経て大西溝に亘る峻岑上に堅固に構成した工事に據り、即ち遼陽の東面より南面に亘る半圓形の防禦線を以て我々の前進を待つてをつたのである。

我軍は直接遼陽を包圍する前に先づ此敵陣地を破らなければならぬ、總司令官は如何に此計畫を定めたであらうか則ち先づ第一軍を以て第二第四軍の鞍山站到らざる前に、鳳凰城街道方面の敵を攻撃し之を鞍山站附近敵陣地の左翼後に壓迫せしめ、以て第二第四軍の本攻撃を容易ならしめ、此間に一躍して鞍山站附近の陣地を奪取せんとしたのであつた、此際に於る敵の兵力は鳳凰城方面に五箇師團、海城方面に七箇師團合計十二箇師團であつて、戰闘定員約五分の一の減少を見積るも約十箇師團の兵員を有するのであつて、我兵力の第一軍約四箇師團、第二軍三箇師團、第四軍二箇師團半、之に總豫備一箇師團半を加へて合計約十一箇師團であつて殆ど對等の兵力である、愈々攻撃は前記の計畫を以て先第一軍をして八月二十五日夜より寒坡岑より大西溝に亘る敵を攻撃せしめ、第二第四軍は八月二十六日海城附近の宿營地を發し鞍山站騰登堡の敵線に向つて前進した、二十七日朝には此兩軍は上石橋子より候家屯を経て蘇馬臺の線に達し、將に攻撃に著手せんとしたるに、二十五日夜より二十七日に亘る第一軍の攻撃の爲此方面の敵

は遼陽に退却せるが故に、鞍山站、騰登堡の敵は戦はずして退却し、我第二第四軍は敵を急追して二十八日朝には調軍臺、八卦溝及陶官屯の線に達し敵を沙河以北に撃攘し、第一軍は全く湯河右岸の地區を占領し、是より九月四日に至る間連日連戦敵を攻撃し、第一軍は鎌刀灣附近より太子河を渡り敵の退路を遮断せんとした結果、敵は遂に退却し九月四日我軍隊は全く遼陽を占領したのである。

第二 必死の輸送

八月二十六日から第四軍は大坎子附近の其宿營地を發して、鞍山站附近の敵を攻撃するのに若干の時日を要するであろうと考へてをつたが、案外敵は戦はずして退却したので軍は其前進を繼續した爲め、兵站の方でも大なる恐慌を來した、其處で俄に二箇の兵站司令部を相續して開いた、則ち大塚少佐が大屯に、大野中佐が七零子に其兵站司令部を置いて、之にあらゆる縦列や補助輸卒隊を屬して、海城から送る糧秣を全力を盡して七零子に送つて此に糧秣を分配するといふこととした、大屯及七零子の如きは我軍が行く／＼戦鬪した處であるから土民は殆ん皆逃げて糧秣の輸送どころか、兵站司令部の用をたすにも集つて來ない、其處で縦列殊に車輛縦列や補助輸卒隊が夜を日に繼いで糧秣の輸送をやつた、海城の方でも野戦隊の爲に多くの支那馬車を徵用せられて輸送が思ふ様に出來ない、遂に支那馬車を兵力を以て差押へるといふやうな手段を探つて、兎に角此の大戦鬪に軍隊を飢やしてはならぬといふので、上下共に只全力々々といふで必死になつて輸送をした、斯の如き精神力といふものは誠に畏るべきもので夫れでもさうかこうかして糧秣の供給を缺くことなく、兵站の職責を全ふすることが出來た、實際此間は兵站監以下非常なる心配をされてをつたのであつた、予は實に此時始めて精神力の畏るべきものであるといふことを實際に感じ得たのである。

第三 戦捷の眞價値

遼陽攻撃の眞最中に何處にもなく遼陽陥落の風説が幾度ももなく傳つた、然し乍ら未だ陥落の公報は來らなかつた、此最中に兵站監部を海城に移すこの議が一決して、予は海城に於る設營の爲め九月二日松井軍曹を連れて出發した、岫巖を出てから大洋河の河流を六七遍横切つて、若く戦争がなかつたならば人が通るであろうかと思ふ様な道を、今は此戦争の爲に車馬絡驛を續いて靜肅なる山間の小天地を馬車の埃を以て蓋ふてをる、此道を斷へず西北方に進んで山と河とが天地自然の美妙なる配合の下にある好風景を語りつゝ且つ賞美しつゝ正午頃に王家堡子の兵站司令部に着いて、劇しき夏の暑さ、馬上の疲勞を醫せむが爲暫くの休憩をした、午後二時頃再び其行進を續けんがために出發した、大洋河の河は漸く細くなつて雨降れば河となるべき其の幅の廣々石ころの多き礫の上を馬車の轍痕を逐ふて漸く傾斜せる谿を登つた、淺田支隊が奮戦せる分水岑附近に進んだ時に、路傍の竹藪を同じく此道を登つてをつた輸卒からされて大庭少佐の墓が此内にあることを知つて是に禮拜をした後、又元の道に出るに此前方七八百米突の處に路の兩側を挟んで高まつてをる小山の中腹に築かれたる露兵の掩堡があり／＼見え、更、其後方及左右にこゝかしこ青草の生ひ繁つてをる中から本來の赤き土質を露はしてをつて、二箇月前には露兵が此内に隠れて、而も其銃口のみを出して霰のやうに其彈丸を飛ばした時の右様が想像された、而して是等の陣地から瞰制された此阪路を傳うて前進をすることの如何に困難であつたかも充分想像することが出来る、而も此好陣地に據つてをる敵を猛烈果敢に攻撃して遂に此戦術上の要點を占領し得たのは誠に忠勇なる諸士の偉勳といはなければならん、徒に紙上の戦報を讀んで揣摩憶測を逞ふするよりも戦場に來つて其の地形を見、敵の工事を視、配兵の様を見、詳かに此戦鬪を味ふ時は其戦捷の偉大なる價値を感じるべきが深いのである、是に於て予は趙括の父が、つたやうに用兵は實際であつて紙上の空論でないといつたことを想ひ起して、戦鬪はかりそめに後から批評し得るものでないといふことを悟つた、斯く感じ

つゝある間に馬脚は絶へず予を運んで分水岑の最高點に達した、此點には山の岩石を鑿開して漸く支那馬車の通行し得るだけの道が作られてある、此道の南側に方つて隆起して居る小山の方向に道がつけられてあつたので、予は何心なく此方に進んで遂に其頂點に達した時に我は茲に日本の山砲の肩墻が構築されてあつたことを見た、聞く處によれば我軍が分水岑を占領した後此要點を固守せんがため山砲二門を置いたといふことである、定に此點は分水岑に向ふ前後の谷を二つ乍ら瞰制して最も砲兵に適當した位置である、予は此小山を下つて是より下り阪になつて来る本道を又も間斷なく進んで、露兵の燒きたる數多の鐘詰の殻や火をつけて残したる穀類の跡を看過しつゝ、午後六時頃に小孤山の兵站司令部に旅装を下ろした、岫巖より此處に至るまで約十二里其夜は司令官仙波少佐ミ夕食を共にした後眠りに就いたのであつた。

第四 遼陽攻撃の砲聲

翌三日予は其糧秣積載に混雜せる仙波兵站司令部を出發して何里といふことなしに引續ける支那車輛の列を右にくぐり、左にくぐり小孤山より橋木城に向ふところの谷といふよりも寧ろ大なる幅の礫に沿ふて幾度か水を涉つて河下の方へ進んだ、谷は漸く廣く、山は漸く低く、流は漸く緩く更に進むこと約二里にして橋木城の人家が廣き野原の彼方に其影を現した頃に、北の方に當つて甚だ微に而も地の底まで届くやうなる地鳴のやうな音が晴れたりたる空を傳ふて我々の耳に達した、云わすも之は今正に關なる遼陽附近の大戦鬪の砲聲である、八月二十七日以來此戦鬪を繼續して既に一週間以上に亙る今日未だ雌雄の決せざるか、然り決せざるなり、此物凄き音は我軍隊の精銳無比であつて、其成功を信用しつゝある我々でさへも戦況のなり行如何を心配しつゝ耳を傾ければ、又も「ド、ローン」又一發又一發。正午橋木城に到着して兵站司令官古澤少佐ミ晝食を共にして再び同地を出發した、考へて見れば是が予が少佐に對する應接の最後のものであつた、何となれば少佐は後備歩兵第十旅團の大隊長として其後名譽の戦死を遂げられて、而

も予は此日から少佐の訃音を聞く迄は終に再會の期を得なかつたからである、予ミ少佐ミは素より故き知り合ではなかつた、然しながら予が第十師團に來てから少佐ミ交ること淺くなかつたのである、其豪銳の氣質ミ熱心なる性質ミは予が大に尊敬した處であつて、此時のごときも非常なる熱心を以て兵站司令官の業務を執られてをた、少佐曰く「今や遼陽の大決戦に方り國家安危の別るゝ處、予等が職務ミして此戦鬪に參與することの出来ないのは遺憾であるが、せめてのこゝには戦鬪員に糧秣の不足を訴へしめないやうにしなければならん、夫で予は破格の賃錢を以て車も馬も人も有ゆる運搬力を利用して一俵でも多く糧秣を輸送しなければならん」ミ語つた、予が橋木城を出で、海城に向ふ途中少佐の言の空しからざるを知つた、車を有するものは車に載せ、馬を有するものは馬に駄し、是等を有しないものは肩に擔ひて走る車や馬や人、彼是交つて途を塞いでをる、恰も近所に火災でもあつた時のやうな景氣であつた。

第五 露軍意氣の今昔

橋木城の町の端れを離るゝこと遠からずして、嘗て敵の據てをた紅崖岑に達した、此附近は一連に綿互せる防禦工事があつて掩堡や砲臺に至る軍路が山の中腹に沿うて設けられてあつて、露國人の工事に習熟してをること、其普く到る處に連つてをることを知つた、彼等は千八百七十七年の露土戦役に於るブレブナの突撃に甚しく懲りたものみみえる、彼等は「彈丸は愚なり劍は智なり」ミ會て絶叫したが、今は頗る工事を獎勵して其極遂に工事にひき附けられて何時も守勢をこつておるのである、會ては世界の人を懼れしめた哥薩克兵も今は常に敗走する弱兵になつてしまつた、噫時勢の變遷は何ミ太甚しいものではない乎、願はくは百戰百勝の我大和魂をして世が如何に變遷すること絶對的に變化することなからしめんことを、殷鑑既に眼前に在り深く考ふべきことである。

第六 際限なき平野

紅崑崙を過ぎてゆくこと三四里、山は已に遠く去つて河は已に本流になつてをる、馬に騎つてをる我々の丈にも等しかるべき高き高梁は殆ど際限のなき平野を蔽うてをる、幼少の時から人よりは頗る多く旅行をした予が眼にも斯の如き平野に遭ふたことは初めてである、予は天なるものは高きものであろうか疑つた、何となれば天は我々が眼の届く高梁の梢に直に連つてをるからである、我々は何處から来たかを疑つた、何となれば常に我々の方位を定むるに用ひられたる山が見えないからである、地平線は丸く天と野とを界して、家もなく樹もなく森もなく只丈高き高梁の中の一木道を車の跡を便りに行くのである、此廣闊なるのは我々をして快く感ぜしめたと同時に又茫然たらしめた、遂には又自己を顧みて羅針盤なき船の大海を渡るに比べて悚然たらしめたのである、行くこと暫く沙河の邊りに出て、前方を眺めた時、遙に海城の樓門を見た、一つ二つ三つ漸く近づくに及び猶一個の樓門も見えて此地方に於る繁盛なる町の大なる莊嚴を有してをることを知つた、日清戦争に於て我父の長く滞留して幾度か宋慶の軍を撃退した時の舊事を追懐しながら、予は遂に海城南門外なる兵站司令部にいつて此處に旅装を解いた、小孤山より海城に至る約十一里である。

第七 遼陽の陥落

明くれば九月四日である、予は兵站監部の宿舍を海城北門内の家屋に選定して其設備に奔走した後兵站司令部に歸つた時、遼陽占領の確報を耳にした、心の聲は頗る大きく萬歳を叫んだ、洵に踴躍を禁じ得なかつたのである、八月二十四日より九月四日まで十一日間の最も激烈なる戦闘の後に捷利は終に我軍の有るに至つて、赫々たる帝國の威名を外に發揚したのである、我軍が鴨綠江の戦闘以來幾度か勝利を得たるに拘はらず、我同盟國たる英國を除く外の外國人は猶未だ獨逸皇帝が巧言令色を以て阿諛したる世界の最大陸軍國と稱したるものゝ方に最後の捷利を期してをつて、遼陽では必ず露軍が日本軍を取らるゝと觀察して、幾度か我捷利に冷評的の笑噴を以てした者も、今は遂に其妄想

から醒めて我軍の實力を認めたのであつた、殊に此の戦闘に於て特記すべき所は、此年の春以來半歳以上を費して數萬人を以て構築したる遼陽の周圍を纏ふ半永久の大築城に據つて、彼の全力を集めて戦つたことである、而して斯の如き敵に對して我は殆ど同等なる兵力を以て攻撃し且つ包圍したることである、而も終に敵を撃破して遠く奉天方向に退却せしめた、九月四日は日露戦争に於る最も記憶すべき日の一つである。

第八 遼陽攻撃の戦況

八月二十五日以来の戦況は次の如くである。

八月三十日 午前大本營若電

第一軍戦報

軍に對せし敵は紅砂崙より寒坡崙及大甸子北方高地線を経て大西溝北方高地線に亘り、數月前より準備したる峻山上の強固なる陣地に據り極めて堅固に之を占領せり、之に反し我は良好の攻撃陣地を有せず殊に野砲の如きは本道附近の外之を用ゆるの陣地を缺けり。戦況左の如し。

左縦隊は二十三日より運動を起し少數の敵を驅逐しつゝ、二十五日二道河北方高地よりベイリンヅイ南方高地に亘る線を占め以て翌日の攻撃を準備し中央及右縦隊は二十五日午後より準備運動に就けり。

二十五日夜半より中央縦隊は全歩兵を擧げて敵陣の中央たる弓張崙及其附近の峻山に向ひ、銃鎗突撃を行ひ其攻撃は大いに功を奏し同地附近の敵の本陣地は全く我有に歸せり、然れども敵は近く第二第三線の高地脈に兵力を増發して勇悍に防戦し激烈なる小銃戦となり、二十六日正午に至るも毫も其度を減せず、加之大安平附近の敵砲は盛に我を射撃し其歩兵は屢々恢復攻撃に出んとするの形勢を示せり、然るに我は地形上有利の砲兵陣地を有せず

爲に同縦隊の情況の一時危険に陥らんじたるも遂に能く之を支持し以て敵を湯河の谷地に壓迫するを得たり。右縦隊は拂曉前より紅砂岑七盤岑(弓張岑の北方)及其中間の地點に向て夜襲を行ひ其左翼は敵陣を奪取するを得たるも紅砂岑は遂に全く之を占領するを得ず拂曉と共に激烈なる銃砲戦となり連續黄昏に及ぶ。

左縦隊も亦拂曉より歩兵の主力を以て大西溝北方の高地に向ひ攻撃前進に移り其砲兵は大甸子北方及高峯寺西北高地に於る殆ど半永久的の工事内に在る優勢なる敵砲に對し決戦を求め、午後二時より四時に亘り砲戦最も熾盛を極め此間敵砲は時々沈黙することありしに雖も遂に之を撲滅するを得ず、又敵の歩兵は兵力を増加し我左翼に壓迫し來り漸次危険を感じるに至れり是を以て同縦隊の攻撃前進大に滯滞せり。

之を要するに軍は敵陣地の中央を突破して敵を兩斷し得たりに雖も兩翼は夜に入るも尙之を攻略するを得ず、加之二十六日午後四時前より起りたる迅雷大雨の爲に各山頂は遽に煙霧を以て掩はれ遂に攻撃の目的を遂行するに至らずして夜を徹するに至れり、此夜紅砂岑及大西溝方面に於て敵の新に企圖せし數回の逆襲は常に無効に歸し我は此機に乗じ紅砂岑を占領し同岑にありて最も威力を逞せし敵砲八門を奪取せり。

二十七日雲霧を冒して各縦隊は再び攻撃前進に移りたるも敵は依然頑強に抵抗し黄昏に至り漸く紅砂岑より孫家寒南方高地を経て大西溝北方高地に亘る線を占領するを得たり。

此戦闘に於て最も壯烈を極めしは紅砂岑附近及弓張岑附近の夜戦にして敵は月明に依りて我兵の前進を察知し激烈に射撃するのみならず、岩石を山頂より墜落し我兵の之に觸れて死傷せしもの甚だ夥ならず、然れども我兵は頑として射撃を開始せず堅忍不拔以て急峻なる山嶽を攀登し敵陣地に突撃せり、從て損害の光景は最も悲惨を極めたり但し夜襲の際に於ける損害は比較的多大ならず。又左縦隊方面の敵は頗る優勢なりしを以て同縦隊は苦戦最も勉めたり敵の兵力は歩兵六十五大隊(狙撃第二軍團及戰列第十軍團の全部並第十七軍團の半部)砲百二十門にして其の大部は遼陽方面に退却し一部は近く尙ほ軍の前方に停止しあり。

軍は尙追撃前進を繼續中なり。

二十六、二十七日兩日の戦闘に於て我軍の死傷將校以下約二千にして鹵獲は砲八門彈藥其他多數なり、敵の死傷は未詳なるも多大なるべしと信ず。

九月十二日 午前大本營電 第一軍二十八日より五日に至る戦闘報告。

二十八日 第一縦隊(第十二師團)は少數の敗殘兵を驅逐して夕刻に至り太子河左岸に沿ふ英守堡より雙廟子に亘る線を占領せり、此日同河は増水の爲一の徒渉場を有せず其橋梁は敵兵悉く之を破壊し退却せしを以て同縦隊は同河右岸の地に兵を進むるを得ざりし。

第二縦隊(第二師團)の主力は孫家寒北方高地の敵を、其左翼隊は同地西北方高地上の敵を攻撃し草家峽南方高地より標高二三四を経て小嶺子北方に亘る線を占領し、草家峽西方高地及大石門嶺(望報臺の東南約二二吉米の鞍部)に在る敵と相對峙して夜を徹せり。

第三縦隊(近衛師團)は午前十時來追撃前進を繼續し歩々抵抗する敵を驅逐しつゝ夜に入りて四方臺より响山子に亘る高地線を占領せり。

二十九日 第一縦隊は前日占領せし線に在りて太子河右岸に移るの準備を爲し。

第二縦隊右翼隊の一部は敵の監視哨を驅逐して午前八時過石咀子を占領し其左翼隊は午前六時迄大石門嶺を占領せり。

第三縦隊は徐家溝南方高地線を占領しヤユチ孟家房の高地線に在る敵狀を偵察せり。

三十日 第三縦隊は拂曉より孟家房ヤユチの高地線に在る敵を攻撃し勇戰奮闘して遂に徐家溝北方の高地を奪取し得たるも夜に入りて敵は兵力を増加し野戰電燈を照して盛に同高地を射撃し同高地上の我兵は極めて苦戦せ

り。

同左翼隊は午後六時望臺東方の高地を占領し自後第三縱隊に協力せり。

第一縱隊は雙廟子吊水樓間に一部を残置して主力を以て午後十一時より鎌刀灣附近にて太子河を徒渉し、第二縱隊の主力は一部を石咀子に残置して第一縱隊に續行せり。

三十一日 本溪湖縱隊(近衛後備混成旅團)は午前四時臥龍村附近にて太子河を渡り威善營に在りし敵歩兵を撃攘し之を追ふて本溪湖を占領せり。

第一縱隊及之に續行せし第二縱隊の主力は敵の妨害を受けるこもなく全く渡河を終りて太子河右岸に進出し夕刻迄に官屯よりサンツアゴウを経て水泉に互る丘陵線を占領せり。

但し野砲兵は此夜太子河に架設せる軍橋の完成するを俟ちて渡河し以て所屬縱隊に合せり。

第三縱隊及第二縱隊の左翼隊は昨日の位置に在りて現狀を維持せり、敵は拂曉より逆襲し來らんとする模様ありしも遂に來らず依然砲戰を繼續せしのみ。

一日 第一縱隊及第二縱隊の主力は黑英臺の北方及西南高地及其北方の地區に向ひ拂曉より攻撃を開始せり、敵は黑英臺西北方及スイクワントゥン西方及南方高地並に其北方の村落附近及ツオファンゴウ北方高地に遮蔽の砲兵陣地を設けて盛に我を砲撃し、加之若干の砲を有する敵の一縱隊は第一縱隊の左側に向て前進し來り我攻撃進捗せず夜半に至るも黑英臺附近に彼我の銃砲聲激烈なりし、孟家房附近高地の敵は退却を始め第三縱隊は午前七時乃至十一時の間に於て全くヤウチ北方より孟家房北方に互る高地線を占領せり。

本溪湖縱隊の一部は午前八時より敵と激戦の後三時前之を北方に撃退して香山子北方高地を占領せり午後五時に至り敵は再び南下し來りたるも再び之を撃退せり。

二日 天明後第一縱隊は其右側に進來せし敵を攻撃し苦戦の後石炭坑附近より大窩西方約二千米突の高地に互る線を占領せり、然れども此方面の敵は午後に至り漸次増加し其砲数は約六十門となり又第二縱隊の主力は連續せる戰鬪の後午前二時過遂に黑英臺西北高地を占領し、其一部はスイクワントーンの高地端より高地に向ひ攻撃を試みたるも敵の集中砲火を受けしのみならず、午前十時頃敵の大部分より逆襲せられ遂に其目的を達するこゝを得ず單に黑英臺西北の高地を保守し得たるにすぎざりし。

敵は爾後第二縱隊の占領せる高地に向ひて兩側方より砲約五十門を以て猛烈なる砲撃を行ひ、之に對する我砲兵は有利の砲兵陣地なきため敵砲に對して有利の砲戰を交ふるを得ず、之がため同縱隊の困苦は殆ど極度に達し各將卒は前夜來一回の食一滴の水をも得るを得ず各自携帶の精米によりて僅に饑を忍びしのみ、是前面及側背より受る敵砲彈の爲全く交通を杜絶せられたるによる日没來敵の歩兵二、三旅團は第一第二縱隊に向つて逆襲し來り、同時より黑英臺附近の銃聲は尤も猛烈を極めたり、恰も好し此日午後招致せられたる第二縱隊の左翼隊は之に赴援し戮力奮戦したるも容易に敵を撃退し終るを得ず夜半に至るも銃聲尙ほ盛なり。

三日 軍の前面に逆襲し來りし敵は全く撃退せられたり、然れども敵は依然高地より其北方の地區を嚴守し且つ煙臺東南の地區及羅大臺吳井子附近には強大なる部隊集屯せり。

此日第一第二縱隊は現狀を維持するに止り又第三縱隊の一部の來援を得たり。

四日 拂曉來各方面共極めて沈靜なり招致せられて急行したる第三縱隊早朝官屯に到着せり。

午前十時標高131高地の敵は全く退却し我兵之を占領せり於是軍は直に追撃運動を開始せり。

本溪湖縱隊は平臺子附近を占領し一部を残置して奉天方向を警戒せしめ主力を以つて煙臺に向て急行し正午石炭坑北方三家子の西北方高地に進出し午後六時戰鬪の後玉門子山を占領せり。

五日 昨夜半來第一縱隊は小達連溝附近に於て稍々優勢なる敵と衝突し、其結果彼我混戦に陥り戰鬪激烈を極めて午前六時三十分に至り遂に之を西北方に撃退し、之を追ふて達連溝立林溝の線を占領して停止せり。

又本溪湖縦隊は拂曉來戦闘の後玉門子山一帯を占領せり。

第二縦隊は午後一時三十分三道壩を占領し其砲兵は房身附近より退却する敵の縦隊に向ひ三十分間之を射撃して混亂せしめたり。

第三縦隊の主力は午前八時頃羅大臺附近に達して停止せり。

我に對せし敵の兵力

太子河左岸に在りて我に對せし敵は主として二十六七日に於る戦闘後退却せし敵の一部にして、其第二縦隊方面に在りしものは約一師團なるべく第三縦隊方面に於ては少くも一師團半なるべし。

又太子河右岸に於て一日以降我に對せし敵は戦列第三、第九、第三十五、第五十四師團狙撃歩兵第二、第二十二聯隊及莫斯科撰抜歩兵を混合したる三師團半以上にして其後方及我右側にありしものは少くも三師團を下らず。彼我の死傷

二十八日以後に於る我軍の死傷は未だ正確に調査し得ざるも約四千なるべし、敵の死傷も亦詳ならざれ共戰場に遺棄したる死體等より推察すれば少くも我と同數以上なるべし。

第四軍 戦闘報告

二十九日 軍は黎明より運動を起し再び追撃を繼續し、第五師團は敵の抵抗を受けることなく其第一線部隊を以て櫻桃園東南方高地より櫻桃園を経てテイルに互る間を占領し其主力をタウイジャトウ附近に集合せり、第十師團は近衛師團と協力し徐家溝及孟家房北方一帯の高地に占據する敵を攻撃する豫定なりしが、近衛師團の攻撃準備整はざりし爲スウチウエ東北高地よりシフイヨウヅイ西方高地に互る線を占領し、ウイジャゴウ南側に在りし約一旅團の敵の暮營地を砲撃して之を潰亂せしめ、又タイエルトン東側の敵砲兵は僅かに砲戰を交へたるに過

ぎずして薄暮に至れり。

三十日 軍は未明より攻撃を開始し、第五師團をして方家屯東方高地より新立屯西方高地に互り占領しあゝ敵に對し、第十師團 後備旅團を含む以下同じをして孟家房及クウジャヅイ北方高地に據れる敵を攻撃せしむ。

第五師團は少數の敵を撃退し午前五時より七時の間に於てダワ西南高地よりシャオヤンスイ北端に互る間を占領し、其全砲兵はヤンヅヤジウアン西方高地に放列を布置し第三師團の砲兵と協力し新立屯西方高地に據る敵の砲兵を盛に砲戰を開始せり。

此の方面の敵は方家屯東方及其南方高地より新立屯西方高地及首山堡南方高地を経て、該村西方標高99の高地に互り陣地を占領し掩蓋を有し銃眼を穿てる二重乃至三重の鞏固なる堡壘を構築し、高地脚には鐵條網、狼狽及地雷を設置し其砲兵は少くも四十門を有し全遮蔽の陣地を占領せり。

彼我の砲戰は午後に至るも尙決せず、第五師團の歩兵は屢々攻撃前進を企圖せしも敵の火力毫も衰へざるのみならず、タイエルトン附近の敵砲兵より側射を受けるを以て前進を繼續すること難く、ダワ北方獨立家屋より西方高地の北端を経てシャオヤンスイ北端に互る線に停止し砲戰の結果を待つ己むなきに至れり。

午後五時以後新たに増加せられたる野戦砲兵第十五聯隊第一大隊を黒牛庄附近に、獨立徒歩砲兵大隊をして櫻桃園東北高地に放列を布置せしめ砲戰に参加せしめしも、敵の歩砲兵の抵抗頗る頑強にして我歩兵部隊の攻撃毫も成果を見ずして遂に夜を徹するに至れり。

第十師團は午前六時其右翼隊を以てクウジャヅイ北方高地なる敵陣地の一部を奪取し、續て其中央隊も同高地の西側斜面を占領せり、此方面に於ける敵の防禦工事は未だ完成せず、從て其強度も方家屯附近の工事に比すべきに非ず。雖も、敵の兵力は我に比し頗る優勢にして漸次新銳の兵力を増加し、午前十時乃至十一時の頃には其砲數重砲（十五冊知榴彈砲）を合し約百門に及べり。

第十師團は幸に敵陣地の一部を奪取するを得たるも、今や此の如き優勢の敵に對し我占領せし地區は敵陣地より敵制を受くるが故に我損害は時間の経過と共に益増大し、加之近衛師團方面の情況は全く不明に屬するが故に單獨に敵陣に突入するの不利を避け、其位置を固守するに決し殆ど全兵力をあけて其占領地區を維持するに務めたり、其左翼隊は中央隊に協力し早飯屯西南高地を奪取するの目的を以て猛進しウイジャゴウを占領せしも、早飯屯及バジャカンツイ附近一帯の敵陣地より猛烈なる銃砲火を受け攻撃を繼續すること能はず薄暮まで辛ふじて其位置を保持し、夜暗に乘じ之を舊位置に招致せざるを得ざるに至れり。

第十師團方面の情況右の如く危殆に陥りしを以て軍の總豫備を悉く此方面に増加し、且萬一の場合に備ふる爲第五師團より歩兵第四十二聯隊を割きて總豫備となせり。

三十一日 軍は拂曉より攻撃を再行せり。

第十師團は近衛師團の協力を得るにあらざれば到底攻撃成效の算なきを以て昨夜半來其占領地區に工事を施し、新に増加せし砲兵第十五聯隊第二大隊をしてサンジャツイ東南無名部落附近に放列を布かしめ、天明と共に戦闘を開始し以て近衛師團の攻撃開始の時期を待てり、然るに近衛師團の昨夜半に於ける夜襲は敵の兵力優勢なりし爲豫期の如き効果を奏する能はず、加ふるに其砲兵は彈藥缺乏せしを以て此日續て攻撃を再行するの情勢なし、故に第十師團は優勢なる敵に近く相接し其猛烈なる銃砲火の下にありて終日戦闘を繼續し現在の陣地を固守するの已むなきに至れり、然れども其受けし損害は戦闘の激烈なるに比し掩護の庇護に依り昨日に比し大に減却するを得たり、第五師團は其右翼隊を以て昨日占領せし地區を固守せしめ、其左翼隊をして第五師團左右兩翼隊の間に展開し來りし第三師團主力の行動に伴ひ午前四時より攻撃準備をなさしむ、然るに敵の抵抗は依然頑強にして新立屯西方高地に據れる敵堡壘に對する攻撃は更に進捗せず、徒に損害を増加するの情勢に陥れり、斯くの如くにして徒に時間を経過すれば我砲兵彈藥は益缺乏を告げ志氣愈困憊に陥るべきを以て、第三師團と交渉し萬難

を排し攻撃前進を決行するに決せり、正午頃第三師團の一部は新立屯西方高地東南端の敵堡壘を奪取し得たるも、シャオヤンスイ方向より近迫したる歩兵部隊の攻撃は毫も進捗するを見ず、午後四時以後左翼隊は獨立勇を鼓して前進し敵壘を距る約三、四百米突の線に達せしも、猛烈なる敵火を蒙り瞬間にして多大の損害を生じ、歩兵第二十一聯隊第一大隊の如きは大隊長及將校四名を除くの外將校悉く敵彈に斃れ、今や一の掩護物なき最も不利なる斜面に停止せざるべからざるに至れり。

茲に於て師團總豫備の一部を此方向に増加し、砲兵全力を以て新立屯西方の敵壘を猛射せしめ、且つ第三師團に通報して隣接部隊の援助を請求せり、第三師團は此要求を快諾し、其師團の全砲兵を以て敵壘を猛射し、其歩兵約四聯隊を以て夜暗に乘じ攻撃前進を決行せしめたり、然れども敵火は依然として猛烈を極め、加ふるに地形極めて不利なりしを以て、夜半十二時に至るも第三師團の歩兵部隊は依然敵壘の高地脚に停止して前進するを得ず、従つて第五師團の左翼隊も亦獨力を以て前進を繼續すること難く、新立屯西方高地西側無名寺西方丘阜上の敵堡壘の基脚にある副防禦物に近接して停止し、其工兵隊を以て副防禦物の破壊を試み、敵陣に突入の準備をなせり。一日 軍前面の敵は昨夜半より逐次遼陽の設堡陣に向ひ退却を始む、第五師團は午前二時前後に於て之を偵知し、其左翼隊は直に前進を起し新立屯西方堡壘を占領し、第十師團も亦拂曉の頃早飯屯南方高地一帯の敵陣地を占領せり。

天明の後第五師團は方家屯方向より、第十師團は早飯屯方面より、諸兵連合の追撃部隊を出し敵を追撃せしめ、殘餘の諸隊を整頓し、後遼陽に向ひ前進し、此日第五師團はシツジャワツイ北方獨立丘阜より東八里庄北端を経て方家屯東北高地の北端に亘る線を占領し、ケンリジウアン附近よりユイフウアンミヤオ附近に亘る敵と相對し、師團の主力を南八里庄附近に集結せり。第十師團はタテブシフよりシツジャワツイに亘る線を占領し、ユイフウアンミヤオ附近の敵と相對し師團の主力を早飯屯ウイジャゴウ附近に集結し夜を徹せり。

二日 軍は急に敵を追撃し、遼陽南端に在る設堡陣に據れる敵を攻撃するの目的を以て前進せり。第五師團は午前十時三十分二縱隊となり前進し、其砲兵第五聯隊第一大隊は午後一時五十分東八里庄北端に放列を布置し尋て野砲大隊は方家屯東方高地に、徒歩砲兵大隊は東八里庄南側附近に放列を布置し、チエンジャリンゾイ附近の敵砲戦を開始せり。

第十師團も亦略之に連繫して前進し其砲兵第十聯隊はタテブジフ及シレジャワゾイ附近に、其野砲大隊は早飯屯西北方及セタブジフ北方に放列を布き、木廠北方の河岸及其東北高地に位置せる約五十門の敵砲兵に對し盛に砲戦を開始せり、此日第十師團は第一線部隊を以てタテブジフよりシュジャトウンに亘る線を占領し、總豫備隊をバジャカンツイに前進せしめ、第五師團は其第一線部隊を以て東八里庄北方無名部落よりケンリジユアン北端に亘る間を占領し、總豫備隊をスイリチジウアン附近に前進せしめたり。敵はエフアよりユイフアンミヤオ、チエンジャリンゾイ南端を経てシグウアン附近に亘る線に殆ど半永久的堅固なる五箇の角面堡及數箇の野戦砲台を構築し、之を連接するに一聯の塹溝を以てし、且つ鹿柴、鐵條網、狼狽、地雷等の副防禦物を以て之を圍繞し、加ふるに雜草高粱等を以て、此等の構築物を庇匿するの手段を施せり、故に敵の陣地を明知すること難く我歩兵火の效力充分ならず、且つ砲兵も亦地形上適當の觀測をなすことを得ざりしに因り充分の成果を見るを得ずして夜を徹するに至れり。

三日 軍は攻撃を繼續し兩師團は午前五時より攻撃を開始し、其の砲兵は概ね前日の放列陣地にありて砲戦をなせり、唯第十師團の野砲大隊はタテブジフ北部に陣地を變換し木廠東北高地の敵砲對戦せり、敵の大部は漸次北方に向ひ退却の徵あるも、軍前面の敵の抵抗は依然頑強にして、其歩砲火は著しく衰滅せし微なく、我歩兵の損害は時の移るに従ひ益々増加し、殊に我砲兵は彈藥の缺乏、觀測の困難なりしに依り充分の威力を發揚すること能はず、我歩兵は勇を鼓し敵の猛火を冒して前進し、敵壘を距る三百乃至四百米突の距離に近接し、全力を實行するに至らず。

第十師團長は敵の火力未だ衰へず雖も我砲彈漸次減少し補給の見込なく、而も敵に近接し五十餘門の敵火の下に永く停止するときは徒に損害を増すのみなるを以て、比較的敵火の威力減衰せし、ユイフアンミヤオの敵兵に向ひ中央及左翼隊を以て午後六時斷然突撃を實行するに決し、中央隊及左翼隊は猛烈なる敵の銃砲火を冒し堅固に設備されたる數線の副防禦物を排し、累々たる死屍を越えて敵壘に肉迫し、午後七時五十分頃歩兵第二十聯隊はユイフアンミヤオの東側にある敵角面堡に突入し、續て歩兵第十聯隊第三大隊も此聯隊の左翼に連り堡壘の西側に向ひ突入せり、左翼隊は敵の抵抗非常に頑強なるを以て遂に其の前方二百米突の線に一時停止するの止むなきに至りしが日没を待ちて敵壘に突入せり。

第十師團は翌朝敵を太子河の線迄追撃し、其右翼隊は混成一支隊を以て木廠東北の高地を占領し第一軍と連絡をなせり。

第五師團は第十師團と連繫しケンリジウアンより攻撃前進に移りしも敵壘の銃砲火衰へざりし爲一時停止し、夜半十二時敵壘を占領し、續て敵を追撃し、四日午前二時頃遼陽城北邊及一部を以て鐵道橋左岸を占領せり。敵は三十一日の戦敗後遂次其主力を北方に退却せしめたり、而して最後まで堡壘に嬰守せし敵は約五、六千なるが如し、敵は退却に際し太子河の諸橋梁を破毀若くは燒棄し烟台方向に退却せり。三十日より三日に亘る戦鬪に於て我軍に對せし敵の兵力は左の如し。

狙歩兵第一師團の第三第四聯隊 (六大隊)
 同 第二師團第八聯隊 (三大隊)
 同 第三師團の第九、第十二聯隊 (六大隊)
 同 第五師團(第二十聯隊缺) (九大隊) 計歩兵四十六大隊
 同 第六師團 (十二大隊)
 同 第九師團の第三、第四、第十五聯隊 (六大隊)
 豫備歩兵第七十二師團の第二百八十三聯隊 (四大隊)
 砲兵第三十四旅團の一部
 同 第三十一旅團の一部
 東部西伯利砲兵第四旅團 計砲兵約百四十門
 同 第九旅團

工兵第二大隊 騎兵若干

敵の戦場に遺棄したる屍體の數、鹵獲品等は目下取調中、然れども敵は此戦闘に於て小銃にダムダム弾を使用したる事は其遺棄しある小銃彈及負傷者の創狀に徴し證明し得べし。

鞍山站及遼陽附近の戦闘に於ける我軍の死傷左の如し。

第五師團	將校戦死	一二	負傷	六二
	下士卒の死傷	一、九五〇	合計	二、〇二九
第十師團後備歩兵第十旅團	將校戦死	四二	負傷	一〇五
	下士卒の死傷	四、四四五	合計	四、五九二

野戦砲兵第十五聯隊	將校戦死	一	負傷	二
	下士卒の死傷	三三	合計	三六
獨立臼砲大隊	不明			
	總計	六、六五七		

二十六日 海城附近を出發して以來約十日間連續したる激動に従事し、粗食に甘んじ、睡眠の缺乏に耐へ、不屈不撓の精神を奮勵し、忍耐勇猛に戦闘を繼續し、遂に其目的を達したる將卒の勇は茲に之を特報す。

第二軍戦闘報告

第一線(首山堡附近)の攻撃

八月三十日 軍は首山堡附近の敵を攻撃する目的を以て第一縦隊を右翼、第二縦隊を中央、第三縦隊を左翼とし午前五時沙河の線を發して前進す。

午前六時三十分第一縦隊の先頭櫻桃園西北の部落より頭台子に互る線に達せしとき、首山堡南方鞍部附近より敵の砲兵約二中隊我に向つて射撃を開始す、此時野津軍方向に當り稍々盛なる砲聲を聞く。諸偵察に依るに敵の陣地は首山堡西方及南方高地、新立屯西方高地、方家屯東方高地に互り極めて堅固なる堡壘を設け且つ其周圍に多數の鐵條網あり、第一縦隊は之を正面より攻撃するの不利なるを以て、首力を以て黒牛庄東方高地より、先づ新立屯西方高地の東南凸角を攻略せんとし、午前七時頃より砲撃を開始し、野津軍の左翼に近く相連繫して攻撃準備を爲す、第二縦隊は道路不良の爲め行進遲滞し、其第一線は午前十一時頃大趙家台東南及東部落に達し、次で其砲兵の大部は到着して首山堡東南方鞍部の敵砲兵に向ひ射撃を開始せり。午後一時頃第一縦隊の攻撃は大に進捗せしも未だ高地脚より攀登するを得ず、第二縦隊の右翼は第一縦隊の左翼に連繫し、其左翼は大趙家台附近より敵の右翼を包圍しつゝ攻撃前進す、其砲兵の一部は未だ戰場に到着せ

す。

此時第三縱隊の主力は興隆台附近に在り、又我騎兵團は五仁屯附近より敵の側背に運動し其野砲を以て敵の側背を威嚇せり。

午後四時頃敵の歩砲兵は益々増加の様あり、其右翼はグウヅヤヅイ西北部落に互り、所々に機關砲を備へ其抵抗頗る頑強なり、第二縱隊は全部を擧げて攻撃を續行せしも頗る苦戦に陥り、其左翼は著しく危殆に迫りたるを以て第三縱隊の歩兵の一部を其左翼に増加するの己むを得ざるに至れり。

是より先第一縱隊長に歩兵一聯隊を増屬し、次で砲兵一大隊を増加して攻撃を援助せしむ、該砲兵大隊は午後三時四十分頃櫻桃園に陣地を占め射撃を開始せり。

新立屯西方高地の東南角を攻撃中なる第一縱隊の右翼隊は方家屯高地の敵砲及正面突出部の角面堡より猛烈なる側射を受け一步も前進すること能はざる苦戦に陥れり、此の如くして第一第二縱隊は全力をあげて攻撃を續行するも、敵の副防禦も猛烈なる歩砲火のため突撃を行ふに至らずして日没となり、此に於て軍は夜暗に乗じ副防禦を破壊し、強襲を決行し、若し成功せざれば更に拂曉攻撃を行ふに決す、此日我砲兵は道路不良のため一齊に其砲数を配列すること能はず、故に終日の砲撃も終に敵砲を萎靡せしむるに至らざりしは大に遺憾なりき。敵は此戦鬨間輕氣球を以て我運動を視察し、屢々其軍隊を諸方面に行動せしめたるを以て、其企圖の決戦に在るべきを察知し充分の戒心と奮勵を促せり。

三十一日 午前三時より第一縱隊の歩兵は猛烈果敢なる夜襲を決行せり、拂曉頃其左翼たる歩兵聯隊は首山堡南方高地の南部を奪取せしも、前面及兩側より猛烈なる射撃を蒙り、北部高地よりする優勢なる敵の逆襲を受け、苦戦の後多大の損害を受けて高地脚に退却するの己むを得ざるに至れり。

右翼隊も亦非常の困難を冒して多大の損害を顧みず前進せしも、副防禦堅固にして敵火猛烈且つ高地の攀登頗る

困難なるに依り終に高地脚に伏臥して起つこと能はざるに至れり。

第二縱隊は午前一時より屢々敵の逆襲を撃退し次で攻撃を斷行せんとし、猛烈なる敵の機關砲火を冒して終に敵を鐵道線路まで壓迫し、敵陣を距る五十乃至百米突に近接せしも、高地上の敵より敵射せられ損害甚しく、是より突撃に轉ずること能はずして天明を爲れり、其後第三縱隊歩兵約第五大隊は第二縱隊の左方に展開せしを以て大に戰勢を恢復せり。

午前七時歩兵三大隊を本道方面より前進して第一縱隊の左翼隊に協力せしむ。

情況以上の如く第一第二縱隊は全力を擧げて攻撃を續行し、又我全砲兵隊も各々有効距離に近接して猛烈に敵壘を砲撃せしが未だ以て攻撃の進路を開くに至らず、而して前日の降雨のため彈藥補充に苦痛を感じたり。

正午頃我砲兵の威力は大に發現して新立屯西方高地の東南部は著しく破壊せられたり、此に於て第一縱隊の右翼隊は獅子奮迅の勇を鼓して該堡壘に突入し午後零時三十分終に之を奪取せり、此に於て一部の立脚地を占むることを得たるも他の堡壘の敵は依然頑強の抵抗をなし、且つ方家屯の敵砲兵より猛射を受け又前進すること能はずるに至れり、正面及第二縱隊方面も亦同一の情況にして前進を繼續すること能はず、午後五時頃第三縱隊長の報告に依れば午後三時頃兵力未詳の敵の歩兵(若干の砲兵を有す)首山堡の西北約二里半ペイタイに現れ南進中なりと、仍て豫備たる第三縱隊の殘餘をして之に當らしめたり。

騎兵團は第三縱隊の左翼前方に行動し北方の敵に對して軍の左側を掩護し且つ遼陽方向を搜索す。

午後七時に至り軍は全砲兵を擧げ一齊に猛烈なる砲撃を加へたる後、更に強襲を斷行するに決せり、此砲撃は敵の各堡壘に多大の損害を與へたるが如し。

此夜各方面の歩兵は充分に準備を整へ副防禦の破壊に努め終に勇猛果敢なる突撃により第一縱隊は新立屯西方の高地を、第三縱隊は首山堡西方標高99の高地を、第二縱隊の増援隊は本道方面の高地を全く占領せり、時は九月

一日午前三時頃なりき。

我に對せし敵の兵力は歩兵約二師團（捕虜の言に依れば西伯利豫備第三師團の全部、狙撃歩兵第五師團、同第一師團の一部）砲約五十門なるが如く、午前三時我突撃の頃より漸次遼陽方向に退却せり、第二縱隊増援隊歩兵の一部は之を追躡して午前八時頃西八里庄附近に達せり。軍は第三縱隊をして之が追撃に任じ、首力は占領したる陣地に集合整頓す。

追撃及第二線（遼陽附近）の攻撃

九月一日 第三縱隊は午後一時より追撃運動を起せり、此時敗退したる敵の大集團は停車場附近にありて午後四時頃より列車の貨車数を増加し續々退却中なり、之に對し我砲兵團の有效なる追撃射撃は停車場附近に大混亂を生ぜしめたり、午後（？）時頃第三縱隊の砲兵は尤家庄子附近に達しジグウアン西南側に在る敵の砲兵を射撃せしに暫時にして敵砲は沈黙せり、第三縱隊は尤家庄子東方の村落よりワンバヤン附近に互る線を占領して遼陽附近の敵情を搜索す、軍は戰場附近に宿營し翌二日を期し全力を舉げて前進に決す。

九月二日 午前七時第一第二縱隊は前進を起し遂次第三縱隊の右方に連繫せんむす、諸情報に依れば敵は遼陽停車場西方よりジグウアン附近を経て遼陽南方に互る防禦工事に據り更に抵抗を爲さんむするが如し、仍て直に之を攻撃す。

午前八時頃第三縱隊方面に於て先づ砲戦起る、鐵道線路に沿ふて前進したる第二縱隊の先頭は直に展開し、第三縱隊に連繫す、第一縱隊の先頭は午前九時頃より十時の間にスイリチジュアン附近より西八里庄附近に達せり、其砲兵は西八里庄西南高地に砲列を布き午前九時四十分頃チェンジャリンズイ附近の敵砲を射撃せり。

午前十時野津軍方面に砲聲を聞く、同十時三十分頃より野津軍は攻撃前進に移り其第一線は東八里庄タテブジフの線附近に達せしを知る。

諸報告に依るに敵の右翼は停車場西北方約一里より停車場西南及ジグウアン附近より遼陽南方に互り、其中央及以東には極めて堅固なる堡壘ありて防禦設備完備せるが如し。

正午頃第三縱隊の第一線漸次前進するや敵の砲兵二中隊は揚家林子東北方に現れ砲火を開始し、更に一縱隊は之に續いて南進し、該方面の敵兵稍々増加し其右翼は漸次西方に延伸する状あり、第三縱隊は益々攻撃を力行せしむ敵の抵抗頑強にして戦闘持久の有様を爲れり、此の如くして全砲兵は砲戦を繼續せしむ敵の工事堅固にして其抵抗死守的なるに依り終に突撃を行ふに至らずして日没を爲れり、此夜第三縱隊の右翼の一部は一度ジグウアン附近の敵壘に向ひ突撃を試みしも副防禦機關砲の縦射に阻止せられ目的を達せず、此日停車場附近に火災起れり。

三日 拂曉より砲撃を開始す、敵は依然頑強の抵抗を繼續す、我砲兵は敵の小銃彈の達する點まで前進し、堡壘及機關砲の破壊に勉めに依り、一部の敵は處々散亂の状を呈せしむ他は依然頑強に抵抗し、我歩兵の突撃は尙困難の狀態に在り、此に於て更に更に砲兵の射撃を集中し、其成果を待ちて突撃前進を行ふことと爲り、終に午後七時に至る。此時我歩兵は二百乃至三百米突まで近接しあり、全砲兵は更に最後の猛火を行ふ、此に於て全線期せずして總攻撃を爲り歩兵戰盛に起り夜に入るも尙止まず、此の如くして其夜零時三十分頃終に敵陣に突入して其第一線堡壘を奪取し全線萬歳を連呼して壯烈を極めたり。

此日停車場附近の火災益々熾なり。

四日 午前二時第二縱隊の一部は停車場、第三縱隊の一部は遼陽西北端を占領し、尙ほ進で太子河の線に向ひ敵を追撃せり。敵は遂に太子河右岸に退却す、此際鐵道橋は燒失せられたり、然るに對岸には尙ほ敵の歩兵若干ありしを以て消火すること能はざりし。

此戰關の情況に就いて判斷するに、敵は首山堡附近の陣地を固守し、極力我軍の前進を拒止し、以て他方面に於て攻勢を取り、茲に決戦を賭したるが如し、而して遼陽附近第二線の抵抗は黒木軍に對する敵軍の側背を安全な

らしむるが爲、時間の餘裕を得んことを努めたるものならん、全般に就きて今回敵の防戦は實に死守的にして決して退却の意圖なかりしことを推知し得べし。

第九 彼我の戦圖計畫

此戦圖に於ける彼我の企圖を推考すれば、我は敵の主力が我が左翼前にありて我左翼を突かんことを判断に基き、全軍の總豫備を我左翼即ち第二軍の後方に位置せしめ、以て敵の企圖に備へ、我右翼即ち第一軍を以て速に太子河右岸に進出せしめ、以て敵の左翼を包圍するに同時に、直に其退路に迫り、敵を脅威し、爲し得れば敵を全く包圍せんことを企圖したるが如し、此攻撃計畫の實行は敵の總豫備を太子河右岸に移せるに、遼陽の東北方に連なる山脈により著しく然妨げられ、敵の退路を遮断せんを擬せる脅威の目的を達したりも雖も、全く敵を包圍するを得なんだ、れども敵は之が爲め決戦を豫期せる遼陽の陣地を撤退した、而して敵の第一の企圖は我左翼軍を首山堡附近の陣地に拒止し、同時に右翼軍を响山子附近の陣地に止め、主力を以て我中央軍を衝き、以て攻勢に移轉し、茲に從來敗走の趨勢を挽回せんことをあつたよふである、是れ則ち第四軍の殆き危殆に陥りし所以にして、而も我軍の精銳なる屢々敵の逆襲を撃退し、以て敵の企圖を挫折せしめたのである、之と同時に敵は我第一軍の太子河右岸に進出運動を覺知し、遂に敵は第一の企圖を抛棄し、退却の決心を爲すに至つたのである、而して敵の第二の企圖は其總豫備を太子河右岸に移し、遼陽東北方一帯の山脈に據り第一軍の前進を扼止し、以て其退路を安全にし、他の一部を以て遼陽南方より西方に亘る一帯の防禦工事に據り、第二第四軍の前進を止め、而して此間に奉天に向つて主力の退却を實行せんことを在つたよふである、此第二の企圖は敵に於て遺憾な實行せられた、是に於て兩軍の勝敗は決したが、我は空しく長蛇を逸したるの觀なきにしもあらず、之れ外國觀戰武官等がセダンを以て目せし此戦圖に於て我軍の勝利に嫌らざる所以であつた。

第十 門達の祝捷會

内地では遼陽占領の公報を得て狂するばかりに喜んだことである、然し乍ら國民の多くは軍事上彼我の主力の決戦をなす尤も重要視すべき此戦圖よりも、旅順の陥落に熱中し且つ待ち焦れて居つたのである、是は日清戦争に於て一旦我有に歸したる旅順を支那に還附して、遂に露國の奪ふ所となつた悲憤の感情からして、一刻も早く之を奪ひ回さんことを欲したるに、遼陽の戰略的地位を了解し得なかつたからであるが、兎に角一般に旅順の陥落を待ちもうけて既に七月頃から此祝捷會の爲めに揃ひの衣裳や、提燈や、旗までを準備して、最も甚だしいのは此の祝捷會のために集るべき人々に分配する目的の印刷物まで準備されたことであつたが、七月も過ぎ、八月も過ぎ、遂に旅順陥落の公報が来ないので、此儘にて経過せば夏の衣裳は不都合となり、蓄への提燈や旗の色が褪めはせぬか心配して居つた矢先に、圖らずも遼陽陥落の號外が来たのでソラ出よといふ勢で旅順のために準備したる凡ての物を持ち出して其理め合せに非常なる騒ぎをして此祝捷を祝したることである。

第十一 富庶の市街

我兵站監部は九月三日岫巖を出發して其日王家堡子に、四日柞木城に宿泊し五日の正午過に海城に到着した、海城は遼陽より金州に到る街道に、牛莊(古の遼河々口の港市)から太孤山に到る街道の交叉點である、南滿洲には奉天、遼陽に次で頗る富庶の市街である、市街は比較的完全なる練瓦壁を以て圍まれてあつて、各壁には東西南北の四門を穿つて居る、壁外にも少なからざる人家があつて其位置より東西南北關と稱して居る、城の東方には蕎麥山と名付くる山脈の末端が連つて居つて其餘勢が城の内部に蟠つて、其東方に小山を置いて居る、此小山の上に孔子の廟が祀られてあつて、此處に登る時は城の内外一帯の地形を瞰制することが出来る、城の南方には沙河といふ河が流れて居つて此

河の下流で、城から十町ばかり離れた所に、鐵橋が架けられてあつて、東清鐵道が南から來つて此鐵橋を超へ、城の西北を遶つて北に向つて居る、停車場は即ち此鐵橋以北の地を占めて居つて、四五箇の練瓦家屋に給水塔が支那家屋の中に異彩を放つて居る、停車場の北方十丁ばかりに稍々大きな西洋造りが建てられてある、即ち露兵營である、第二軍の兵站司令部は此停車場に設けられてあつて、第四軍のものは東關沙河の畔りに設けられてあつた、此地の軍政官は元太孤山に在つた中佐木村宣明氏であつた、一般に城内外の商業は頗る活潑であつて、殆き戦争のあるを知らざるものゝ如く、市街を往復する人馬も中々多數であつた、其物資は近く營口を控へて居るから、大孤山岫巖等で見るところを得なかつた内外各種の品を集めて居つて今迄山道を辿つて、來た我々には如何にも都に來たやうな感じをさせた、殊更鐵道と西洋家屋とは一層此感覺を高めたのであつた。

第十二 晝夜兼行の砲彈

九月の五日即ち兵站監部が海城に到着した同じ日に、八月中旬から第四軍司令部に隨從して居つた隅部大尉が歸つて來たので、遼陽の戰鬪に就いて若干の談を聞くことが出來た、敵が輕氣球を揚げて巧みに高等司令部を目がけて射撃をすることや、一日頃から遼陽停車場に火災の起つたことや、敵の汽車が間斷なく太子河の鐵橋を渡つて北行することや、遼陽前面の堡壘が驚く程堅固なことや、敵の榴散彈の破裂高が太た高く、爲めに效力の尠きことや、第五、第十師團の突撃したことや、砲兵彈の殆んど盡したことの詳細なる物語があつた、此砲彈に付いては我兵站にも非常なる心配をして丁度八月中旬頃に第五師團用の砲彈約五千が南尖に揚陸したので、此砲彈のために特別に晝夜兼行の輸送をやつた、詳しく言へば甲の兵站司令部から乙の兵站司令部へ晝間に輸送すること、乙の兵站司令部は其の夕方までに此輸送に要する車輛を準備して砲彈が到着すること直ちに丙の兵站部に夜を通じて輸送する、晝間の輸送に當つた兵站司令部では別に困難もないが、夜の十時頃にもなつて荷の著いた兵站司令部では其混雜は一通りや

二通りでない、而かも斯様な輸送が引續いて何回にも行はれるのであるから、更に困難の度を昂めた、當時第十師團野戰兵器廠は岫巖に、第五師團野戰兵器廠は海城に、其彈藥中間廠は七岑子に置かれてあつて、是等の彈藥は一旦第五師團野戰兵器廠で信管の裝著を受けて、夫れから中間廠に送り、次で彈藥縦列に分配するといふ順序であるが、此彈藥は辛ふじて遼陽戰鬪の終りに間に合つた、從來戰鬪は只一日若くは二日で勝敗の決するものゝ様に考へられた、而うして又過去の經驗がさうであつた、要塞戰はさておいて、ウオートルールの戰鬪でも、サドワの戰鬪でもウエルト、ピオンビル、マルズラツル、グラーパーベロツト、サンブリバーの戰鬪の如き、何れも主力の決勝戰であつたにも拘らず、多く一日間に終つて、未だ會て今回の遼陽戰鬪の如き約十日に互つて戰鬪を經續したことはなかつた、夫れであるから段列や彈藥縦列の編成が一日の戰鬪に堪ふるだけの能力しか持つてゐなかつたに拘らず、此の長時間の戰鬪をやつたのであるから其危いことは累卵もたよならない始末で、洵に手に汗を握らしたのであつた、第二軍方面では全く砲彈が盡きて射撃をすることが出來ず、歩兵の聯隊長や大隊長から矢釜しく砲撃を要求する、それも彈藥の盡きたことを語る譯にはゐかない、此間にあつて砲兵を指揮して居る大隊長や中隊長が苦しきことは恐らく言外であつたであらう、若しも此儘で戰鬪が尙三四日も繼續したなら、何ぞ危いことではないか、將來此彈藥補給機關の編成については大なる改正を行はなければならぬ。

第二十三章 大石橋と營口

第一 押領者の利口娘

九月七日予は第二軍兵站監部へ兵站業務上の交渉のために派遣された、道路の關係から支那馬車に打ち乗つて此日海城を出發した、車に乗つたまゝ沙河を打渡り、唐王山を左に見て、廣袤無邊の田野を東西に分つて居る道路を南に

進んだ、唐王山は敵の豫め構築した、海城防禦の前進陣地であつた、敵は大石橋柵木城の戦闘後大なる努力を費して構築した此陣地を空しく棄て、直ちに鞍山站の陣地に退いたのであつた、海の中央に孤立して居る島の様な此唐王山は可愛想にも惨虐なる露西亞人の爲に傷けられたが、今は我軍の保護の下に青々々綺麗なる緑の色を我々に示して愛らし相に我々を迎へつ、且つ送りつゝある、道は東清鐵道に近づいたり遠ざかつてたり、或は之を横切つたりして古代的道路、文明的道路が世の中の今昔について物語りつゝ連れ合つて行く様である、併しながら支那の道よ汝は東清鐵道の甘言に今まで欺されつゝあつたのである、其綺麗な文明的容貌に迷はされつゝあつたのである、其敏速なる振舞ひ賢い動作によつて昏まされつゝあつたのである、汝は此鐵道が汝の躰なる滿洲の土地を徐ろに横領せんよしたのを知らなかつたのである、此の惻巧なる綺麗なる鐵道の本性は汝の隣に汝の家を押領しようとして居る主人の娘であるといふ事を知らなかつたのである、昔は人の物を取つたり、人の國を奪つたりする事が腕力沙汰に限つたが、今はなかく其様な野暮なこゝばかり仕て居らん、手管をかけたたり、操つたり、嘘をついたり、わなをかけたりする、殊に露西亞といふ國は巧みなものである、先づ宗教を弘める、夫れで騒動を起さず、其間に在つて一方の土地を取る、或は二つの國をけし掛けて戦争をさせる、仲裁に這入つて弱い方から土地を取ら、是と同じ筆法で或は鐵道をかける、或は電信線を設ける、或は船を泛べる、或は港を借りる、斯様なる三番叟をやつて、切り狂言が到頭已のものにして仕舞ふ、世界の侵略政策は世が文明になればなる程陰險で、且つ恐ろしいものである、ルーマニヤ、セルビヤ、モンテネグロを土耳其から獨立せしめ、クリート島を反亂せしめたものは宗教侵略政策で、蘇西の運河を開鑿して印度を征服したのは海運侵略政策で、波斯、中央亞細亞、滿洲等を開拓若くは占領したのは鐵道侵略政策である、世界が既に此様な事をやつて居るのである、何ぞ領土保全や東洋平和など唱へて、宋の襄王を氣取るには足らないではないか、兎に角東清鐵道は滿洲占領の骨子であつたのである、斯様なこゝを考へつゝ、最も凸凹多き道を車の烈しき動搖の下に、顔や肩や腰や躰の到處を幌馬車の各部に衝突せしめ、間斷なく進行を續けて、午後四時頃

に大石橋の第二軍兵站監部に著いた。

第二 人力押送の鐵道

第二軍の兵站監部は上陸當時張家屯附近に在つて後暫くして普蘭店に移り、大石橋の戦闘後間もなく此地に移つたのである、此の軍は初め三箇師團であつたが後更に第六師團を加へて四箇師團となり、又野砲兵旅團及騎兵旅團が加はつて、之が給養には其初め非常に困難を感じて野戰隊に定量の食糧を給するこゝが一時出来ない位であつて、殊に鹽大澳に輸送された米をジャンクに積んで旅順の沖を経て渤海灣に入り龍王廟若くは熊丘城に回漕するといふ冒險的輸送をやつたが爲是等のジャンクは敵艦隊の爲めに押へられたか、或は風雨のために難破したか、多額の糧秣が一時烏有に版して糧秣を輸送しようにも品物が無いので、遽に集積倉庫に請求するこゝか、晝夜兼行で荷積をして糧秣船を送り出すこゝか、非常なる騒ぎをして纜に補給をして一時は非常なる窮境に迫つたが、青泥窪占領後同地に在つた露國の貨車三百輛ばかりを人力を以て鐵道上を運轉するの計畫を立て、漸く之を實行したので、軍の給養が稍確實になつたので、今では主に此方法に依つて輸送をし、支那馬車を備ふこゝを其補助したのである、即ち各兵站部に四五十輛の貨車を分配して、之に輪卒若くは支那人夫を附して一日一回宛此貨車を兵站司令部間に往復するのであつた、同時に營口を占領してからは遼河の水路を利用して輸送を行つた、此頃では其陸路兵站は柳樹屯から遼陽まで水路兵站は營口から小北河を経て黃家岑子にまで延長して居つた。

第三 水陸兩路の輸送

第一軍の兵站は獨立第十二師團の兵站の後を受けて、其初め鎮南浦に兵站監部があつて次で平壤に移つた、鴨綠江の戦闘の後安東縣に移つたが、我々が孤山に上陸した頃に更に鳳凰城に移つた、鴨綠江の戦闘の後朝鮮國內に設け

た兵站線路を撤して、安東縣が起點となつて、遼陽に至るまでの陸路兵站は鳳凰城から二道に岐れて、此處から遼陽に通ずる本街道上に、盤陽邊門から本溪湖に通ずる道路上のものもあつて、此のものは細河沿附近で相合して一線となつた、是と同時に安東縣から鴨綠江及髮河を溯る水路兵站が設けられて、陸路兵站線の終りのものを補ふた、遼陽戦闘後は安東縣から遼陽に達して居つた。

第三軍の兵站監部は青泥窪に置かれてあつて、其兵站線路は金州より旅順に通ずる本道上に金州半島の南海岸に沿ふて設けられたものも二條あつたが、終りのものは後にやめられて専ら本街道上のものに依つた、其延長は青泥窪から土城子附近までであつた。

第四 贅澤なる建築物

大石橋は滿洲の小市街に過ぎない、此市街を隔つこみ十四五丁ばかりに其停車場が設けられ、此停車場は本線と營口線の分岐點であるから其規模は頗る宏大、予をして一驚を吃せしめた位であつた、プラットホームの傍にある驛の本建築の外に、二百ばかりの煉瓦造が井然と市街をなす様に建てられ、其最南端に兵舎を考へらるる建物が二つあり、今は兵站病院となつて居つた、又其北方には監獄を考へらるる建物もあつた、是等の西洋造は専ら兵站監部のために使用され、其外は兵站司令部に屬されてあつた、是等の家の周囲には滿洲に似合はす數多の樹木が植ゑられ、西洋風の棚が此樹木の間を縫ふて居る、各家屋は一家族が獨立生活をなし得るやうになつて居り、恐らく鐵道驛員や守備隊將校の官舎であつたらう、一般に非常に贅澤に造られ雨ふりのときの運動場が設けられたものもあり、窓掛や敷物迄も充分に備へられてあつた、恐らくは退却の際には是等を持去る餘裕がなかつたのであらう、我兵站監部が大孤山以來山道を經過して挾き支那人の家に宿舎を取つたことに比較して、第二軍兵站監部は非常に裕福に且つ贅澤に暮しつゝある様に考へられ、予は全然歐羅巴にでも來たやうな心持がした。

第五 遠く永久の計畫

此停車場を一見するに、露國が如何に此東清鐵道に就て大規模に且つ永久的に經營したかを察知するこゝが出来、此の停車場のために割かれたる地面のみにても數萬坪に達し、殊に停車場其物の設備よりは兵舎や役人の官舎を先にした形跡がある、是等の役人等の妻子を携へて永久に此家に居住するのに遺憾なからしめたこゝが判る、此大規模の設計を視て露國が如何なる事情があつても、ムザ／＼滿洲から兵を撤するこゝいふやうなこゝは出來やう筈がない、滿洲は名義上支那のものたるに相違ないが、露國人が既に茲に大資本を投じて事實上露國のものにしたのである、其資本を投ずるこゝを吝しまざるに同時に其志の遠大なるこゝは誠に感服の外はない、之を韓國に於ける京釜鐵道の如きと比較するときは慚愧の外はないのである、二十七八年戦役以來日本の勢力範圍内にあつて七八年もかゝつて僅か二百哩ばかりの鐵道が中々出來上らない、いざ戦争といふので漸くに政府から金を出して僅かに其竣工を急ぐこゝいふやうなこゝで、是等の對外經營は比べものにならない、實際京釜鐵道否朝鮮縱貫鐵道の如きは民間の事業に委せて政府自ら經營するのが至當である、是等の經營はさて置いて、内地の事ばかりキュー／＼やつて居る、非常なる多額の金を出して一哩數十鎖といふ長たらしき笹子や、小佛の隧道を掘つて詰らないこゝに馬鹿に金を費して居る、軍事上から見ても、商業上から見ても最も險阻なる中仙道鐵道は頗る價値のないものである、ブルームの戰略論やプリヤルモンの國防論を鵜呑みにして愚にもつかない事をやつて居る、日本の國防は大陸と異つてその海岸を警備すればよいのである、最も困難なる中仙道鐵道などに力瘤をいれるよりは露國の經營を學んで、將來は須らく外國にも充分なる實力を扶植するこゝを計らねばならん、予の言が嘘であると思ふなら滿洲に來て見るがよい。

第六 一攫千金の夢

此頃の第二軍兵站監は歩兵大佐今橋知勝、參謀長は砲兵中佐有田忍氏であつた、予は兩氏に面會を求めて我兵站監の傳言を述べて、同時に兵站到關する若干の交渉をした後、其夜同部に一泊して翌日手押貨車に乗つて營口に赴いた、翌日當時同地の兵站司令官兼碇泊場司令官たる、歩兵少佐宮崎氏と若干の交渉をして予が任務は茲に終つた、されど飯途當時營口に上陸すべき補充人馬の海城方面への通路たる捷路を偵察せんが爲め、乘馬を電報を以て海城から招致した、此乘馬の到着する迄の間を利用して營口の町を一見した、シャンパンと呼ぶ支那流の傳馬船に乗つて牛家屯即ち營口停車場の所在地から遼河の岸を出發して、此河の下流を更に河口の方に進んだ、濁流は徐々として幅五百米突ばかりもある、相隔つる兩岸の間を滑に流れて數多の支那船や小蒸汽やボートを泛べて居る、中には三千噸位の汽船が靜かに動いて居るもあれば、牛家屯の岸に横著けこなつて軍需品の陸揚げをやつて居るものもあつた、營口市街の方に進むに従つて船は益々多く、櫓は益々繁く、渤海灣内の一貿易港たることを現はして居る、此船舶の内で吾人の意を強ふしたものは小なりと雖も我二艘の砲艦が碇泊して居つたことである、予が乗つて居つた小舟を岸に著けて、海岸通りさもいふべき營口の市街の一部に上つて夫れから市街の各部を一通り巡覽した、市街は東西一里以上にも延長して居るが其九分通りは支那家屋である、初め海城を出發する前には營口は外國人の市街であるやうに云ひはやされて居つたが、來て見れば西洋造りの家屋は其東方一部分のみで、而も殆ど商館といふやうなものはなく、各國の領事館も税關もか、ホテルもかいふやうなものばかりで、商業は全く支那人の獨占である、晝食を喫せんが爲めに予は西洋料理店の二階へ昇つた、こゝで聞く處によると此頃營口に來て居る日本人は五六百人もあるといふことであつた、併し予が巡覽中に見たものは頗る僅で、それでも殆ど皆狭い支那人の家の片隅を借り受けて纔に店を開いて居るものか、或は市街の淋しい處に日の丸の旗を掲げて居るばかりで、何をして居るのか判らないやうなものであつて、此處に大きな家を構へて居るものは僅に三井の支店ばかりであつた、是には一驚を吃した、これでも日本の占領地であらうかと思ふた、元來日本の商人と云ふものは其の始め、無闇に一攫千金の非常なる野心に驅られて、隙のある處へは抜目な

く侵入して、其方法の如何たるを問はないで、即ち如何なる奸手段でも一時に金を儲けさへすれば手柄であるやうに考へて、殆ど氣違ひのやうに狂ふて居る、さうして一方では少し許りの金がたまつたならば、忽ち大名風を吹かして邸宅を造る、泉水を造る、別荘を造る、妾を置くといふことにはのみ耽つて、更に大々的奮發をして他國人と商業の競争をする、若くは日本の商權を擴める、若くは一地方に赴いて經營するといふやうなことは殆どやらぬ、大なる賄賂を遣つて衆議院や貴族院の議員にでもなれば關の山である、斯様なものばかりであるから赫々たる戦捷の賜たる占領地に於てすら此始末である、支那人等は日本のために占領されて大なる商業の競争者が來るであらうと待ち構へて居る、處へみすぼらしい風をした小商人が碌に商品も持たないでやつて來て支那人の家の片隅を借りる、そこで支那人等は日本の商人といふものは此様な者か直ちに輕蔑してしまふ、日本人は首を縮めて支那人の輕蔑を受けて居る、此様なことでは滿洲さうか營口の經營すらも出来るものでない、情けない話である、實に予は斯様な考を禁ずることが出来なかつたのである。

第七 馬賊の操縦

只少しく面白き話のあつたのは次ぎの一件である、即ち予が食事を終つたときに日本の將校が四五名の支那人を連れて此二階へ昇つて來た、打見れば幼年學校時代の同窓の友であつた、相互に驚いた一應の挨拶が済んで、予は何をやつて居るかを聞いた、馬をやつてをると答へた、馬は何か、馬匹購買か再び問ふた、彼は聲を潜めて馬賊だ、と答へた、夫れから仔細を聞くに、彼は戦争の始めから遼西にあつて今日まで馬賊を指揮して敵の鐵道、電線の破壊や、内部の搜索に従事してをつたが、今回野戦隊の中隊長に轉するので其の爲め馬賊の首領を呼んで馳走をして別れをするのであるといふ事が判つた、彼は切に予との會見を他人に話さないことを告げた、此快男兒の愉快なる物語に感動して潜かに將來に於ける戦闘の成功を豫想し得るやうに考へられて喜んだ、何となれば敵の内情を知る

こゝは軍事上の最大要件であるからである、彼は終りに云つた、彼の如き馬賊の指揮者は尙數多あつて何れも敵地に深く侵入して居るを、語らんを欲する所は互に盡きなかつたが遂に相辭して別れた、船に乗つて再び牛家屯へ歸つた。

第八 綱渡りの道路

翌日呼び寄せた馬が着いた、午後一時此馬に跨つて牛家屯を發した、大高刊を経て感王寨に著いたのは午後六時であつた、此の邊の地形は實に平々坦々殆んゞ方向を失する位な處で、而も到る處に沼や濕地があつて水も亦流るゝ方向に迷ふてをる、道路は此平地中の最低の場處であるから即ち河に云ふか、溝をいをうか、兎に角長く水溜りである、人馬の通行する處は道と畑との界で、稍々隆起してをる處、即ち道の兩側であつて殆んゞ綱渡りをするようである、滿洲には不思議の道があればあるものである、感王寨は一名紅瓦寨といつて二十七八年戦役に宋慶の軍を我第三師團と第一師團とが攻撃して遂に占領した處である、今は第二軍の兵站司令部が此處に置かれてあつて、營口海城間の直通路の中央點である、此處の兵站司令官に兵站交通上の依頼をした後海城への予が道を急いだ、丈高き高梁の中をあらちちら道拾ひつゝ行進をしてをる内に、遂に道を失して暫くは大に困難した、兎に角一個の磁石をあてに東に進んで少しく迂回したが、海城から大石橋に通する本道に出た、日は將に暮んゞしてをる、道は未だ二里を餘してをる、馬は既に大に疲勞して急ぐこゝも出来ない、八里河子に來たとき太陽は全く高梁の中に没して一線の紅の雲が微かに西の方に輝いて、其れすらも今や漸く絶へなんゞしてをる、見てをる間に日は全く暮れて咫尺を辨するこゝが出来ない、空には一つの星も出でなかつた、只前方に行く支那馬車の音を辿つて水溜りの中を涉つたり、溝を越えたりして危き道を沙河の畔りまで進んだ、前日水の出た此河の水深をも確むるのに由なく、只支那馬車が涉つて居つたから涉り得るであらうといふ、覺束なきこゝを頼りにして運を天に任せて大膽に此河を涉つた、中頃馬背に跨りながら膝

に達する水を押分けて必死になつて手綱をかいくり馬首を舉げて流を横切つた、暫くして漸く淺くなり蘇生の思ひをして海城のあたりを望んで一圖に其方向に進んだ。寂しして人通りなき海城の市街を過ぎて兵站監部に著いたのは午後十時であつた、營口から十二里の道を九時間で來た之れが予が是迄の出張中で、最大速度、最大危険、最大困難の道中であつた。

第二十四章 海城より遼陽

第一 戦傷者に對する同情

九月十三日に予は兵站線路を巡視すべき命を受けて再び海城を出發した、雨の爲め支那馬車のために無憐に壞された道を北方に進んで何處まで行つても高梁ばかりなる野を眺めつゝ、初秋の温たかき光を背に負ふて靜かに馬を歩ませた、烟臺も早過ぎて鞍山站の山が我道を遮るやうに前面に現れ出で、次第に大きくくゞなつて鞍のやうな形の峠が遼陽街道上の一つの關門を作つて、東海道上の函根山に相當してをる、此山を少しく左に見て第四軍の兵站司令部所在地たる大屯の方向に進んで行く、途中一つの溝を踏んゞする際、馬は誤つて脚を深き泥土の中に没して左に倒れたので、予は右脚を馬腹の下に敷かれ、少しばかり筋を違へて幾分の痛みを感じたが、再び馬に跨つて鞍山站の東南麓にある、湯崗子に建てられたる露人の浴場の屋根の閃々輝く反射光線を物珍しさに眺め乍ら、何時しか大屯に着いて兵站司令部に行つて、此處の司令官犬塚少佐及副官遠藤大尉に挨拶した、後通行者の宿舎に案内されて同時に醫師の診断を受けた。

翌日大屯を出發せんを試みたるも膝部の激衝を刺撃は未だ去らず、軍醫も絶體に滞在を勧めたので止むなく其日

は此地に滞在して、翌日更に馬に跨つて七岑子に向つた、八月二十七日第四軍が鞍山站から追撃戦闘をした各處の戦場の跡を過ぎて、高からざる山、深からざる谷、なだらかなる坂を幾度か踏んで其の夕七岑子に着いた、その夜は兵站司令官大野中佐に語りひつゝ中佐の隣室に寝に就いた。

翌日又出で、大樂屯に向つた、七岑子以北は總で野戦隊の宿营地となつてを、七岑子にも野戦砲兵第十五聯隊が宿つてをるこゝを多数の砲車、彈藥車の羅列によつて知つた、今まで通過した寂寥たる野に引替えて、今は諸隊の各種の行動が現はれてをる、野戦の諸縦列が其長きく、車の列を移動しつゝ糧秣受領に行く所もあれば、歸る處もある、補助輪卒が四人して一個の擔架を舁ぎながら相連つて、白衣の中から陰鬱なる淺黒き顔を顯して無念な眼を以て人を見やりながら、横つてをる患者を輸送して、汗水を流して屢々其肩を替へつゝ後方に行くのもあつた、擔架に載せられてをる患者も之を輸送してをる輪卒も誠に苦しさうに見えて、轉た同情の感に耐へ得なかつた、或は中立徽章を臂にした衛生隊の兵卒等の一群が患者を送つていつた歸りらしく擔架を捲いて通行するのもあり、是等の間を隙間なく充してをるものは兵站の支那馬車である、燐家爐を過ぎて稍高き峠を踏すあたりから野の高梁は踏み倒され、所々に壕を穿たれ、最も慘劇なる戦闘の跡を最も明白に残して其當時の有様を想像せしむる、峠を下れば直ちに遼陽の市街に連る一連の大平野を駈ろして、恐らくは我軍の砲兵陣地となつたであらう地點もありくゞみ判る、予が今立つてをる此の地點にあつて此大戦闘を眺めたならば眞に愉快であつたであらうこゝ、思はず予は叫んだのであつた、馬脚は坂を下つて來家堡から大樂屯へ直進して此處に宿つた。

第二 悽愴たる新戰場

大樂屯は九月十日頃即ち遼陽の戦闘後に開設された兵站司令部である、歩兵中佐加島義實氏が司令官で當時の兵站線の前端末である、此處で總司令部の兵站參謀長會議に列席された吉田中佐と相會して、予は再び海城に還るこゝな

く遼陽に止まるこゝを命ぜられた、翌朝中佐と別れて大樂屯を發して遼陽に向ふた、十丁餘りを進んで東八里庄附近に至るこゝ、前面には遙に遼陽の圍廓が見へ、左方には首山堡の孤立した山が際立つて高く望まれ、新立屯の高地が其東に連つて、遼陽の第一線防禦陣地が顯れて、如何に我滿洲軍の主力が苦戦したかを想起せしめた、我進路の右方にはタテブシフ一帯の高地が遼陽の東南角に向ふて、第四軍司令部並に第十師團の野戦砲兵が殆ど一週間の間此處にあつて、如何に作戦の指揮と敵砲兵の撲滅にに慘澹たる苦心をなしたかを想起せしむる、而うして遼陽の東から北に連つてをる山脈が之と相對して、包圍の任を以つてをった第一軍の行動を阻止したかを思はしめた、斯様な全景の中に遼陽の喇嘛塔が兀然として幻のやうに此新戰場を眺めてをるやうであつて、遼陽の戦闘を限なく見物したこゝを誇るかかやうに見えた、而うして此塔の下から露軍が糧秣を焼くこゝの焦天の焰が立上つたこゝを回想せしむるのであつた、西八里庄を過るこゝ少しの樹木もなき開豁した平野で、根より三尺位上方で折られた高粱の相連つて一面の應用的鹿柴を作つて、露軍の如何に副防禦に力を用ひたかを推察するこゝが出来る、此野に遼陽の圍廓の中間に、詳く云へば圍廓から千五百米突ばかりを隔て、半永久の保壘線が連つてをった、予が目撃した保壘の如きは二個中隊ばかりを容るゝ強硬の断面を以つてをる角面堡で、大なる壕と、幅廣き狼狽と、鐵條網とが之を纏ふてをり、殆んど人力では奪ふこゝの出来ないやうな、恐ろしき外形を裝つてをる、而うして此保壘の咽喉部から後方千米突ばかりに至るまで滾土對壕の退路が作られてある、此の一個の保壘ばかりでも數百人を數十日使役して作つたものであるこゝいふこゝは疑ひを容れない、即ち露軍が此陣地の防禦に如何に全力を盡したかを察するこゝが出来る、實際此保壘は不可攻である、然るに此保壘正面の傾斜面上に第五師團の勇士の墓が針山に針を挿したやうに建てられてあつて、最後の突撃に無念の涙を飲んで仆れた多くの魂魄が此墓の周圍に彷徨つてをるやうに感せられた、保壘は既に我有に歸して營は既に復されて、今は生残つてをる戦友が、是等の魂魄を慰めるやうに此墓の前に跪いて野道の花を手向ける二三の群があつたのを見受けた、予等は馬を保壘の壕前に止めて禮拜を行ふたこゝに無限の感慨を禁ずるを得なかつた、此

堡壘を過ぎて道は遼陽の南門に直進し、商業に抜目なき支那人等が逸早く店頭に掲けたる日の丸の旗の間をくゞつて、更に北門を出て我兵站の爲めに分配されたる露兵營並に其附屬建築物の所在に達して、此處に是等建築物並に附屬材料の監視と設営との任務を行ふべく露人の家の一室に腰を下ろしたのは九月十七日の午前十一時であつた。

第三 遼陽戦後の小康

我が滿洲軍は遼陽を占領してから第一軍が追撃の任に當つて烟臺炭坑附近まで進んだが、此處に追撃を止めた。第四、第二軍は暫くして第一軍の左に連つて陣取つた、其正面は右翼本溪湖より灰窟、烟臺、小烟臺を経て、左翼は小北河に互つてをつた、是が即ち最前線で諸隊は休養の姿勢を執つて其後方に長く連り、最後方の徒歩砲兵聯隊の如きは、沙河鎮から七岑子に互る線にをり、其縦長十五里以上に達してをつた。總司令部は戦闘中は沙河鎮に在つたが、遼陽を占領するに直ちに停車場附近にあつた元クロバトキンの官舎に其宿營を取つた。第一軍司令部はエミツワンに第四軍司令部は東八里庄に、第二軍司令部は遼陽停車場の西方揚家林子にあつて、第四軍中の第五師團司令部は遼陽北廓外趙家林子に、第十師團司令部は孤榆樹にあつた、此戦力休養の小康なる時期に總司令官並に各軍司令官などの相互の訪問が取り交はされて、各軍各個に執つた作戦經過の後に於ける、初めての會見に喜びの情が充ちてをつたやうに見えた、而うして此間に高級指揮官の稍々大なる移動があつて、近衛師團長であつた長谷川中將が是より先大將になつて韓國駐劄軍司令官に任ぜられた、第二師團長の西中將も長谷川中將と同時に大將になつて遼東守備軍司令官になつた、小川中將は敵弾を受けて内地に送られ、塚本少將が中將になつて其後任に當つた、第二軍參謀長の落合少將が韓國駐劄軍の參謀長に轉じて、野砲兵第二旅團長であつた大迫少將が其後任に當つた。梅澤大佐が少將になつて近衛後備混成旅團長になつた、其他少將以下には若干の變動があつたが一々記載する必要がないから止めて置く。

敵は遼陽戦後遠く奉天附近に退いて其後衛すらも渾河附近まで退いたが、我軍の運動中止を視るこゝもに再び我前面に若干の兵力を前進せしめて、殊にミシチエンコミレンカンブの騎兵團は敵の前面及兩翼を警戒してをつた、クロバトキンは列車に乗つて奉天にあつたといふことである。

予は我兵站の爲めに當てられたる遼陽北端の建築物の一にあつて、宿營の配當や其準備に取りかゝつた、兵站監本部に當つた建物は、コンマンダンター・エター・リョウヤンスカヤに記した大なる看板を掲げた家屋であつて、遼陽兵站司令部といふべき所であつたらう、其前後左右に七八軒の一家族に適するやうな小家屋があつて、其南方に少くも二三ヶ大隊を容るべき兵營的の家屋か三個あつた。此外に未完成の倉庫様の建物も二個あり、前なる小家屋は兵站監部及兵站司令官の宿舎にあつて、後なる大家屋は病院、倉庫、輸卒隊及守備隊の宿舎に配當した、是等の建築物の中には若干の寢臺や、机、椅子、果ては數多の植木鉢までが残つて居り、其退却のときの狼籍の形を残してゐる、従つて、其不潔は甚だしかつた、中には防寒靴、短靴の脱ぎ捨てより、小銃彈の有る儘の箱や、高粱、小麥、蕎麥、粟等の雜穀混合の大なる袋までが散在して其始末に大なる困難を感じた。

第二十五章 第二回旅順攻撃

第一 強襲攻撃の失敗

我北進軍が戦力の恢復に日を送りつゝある間に旅順攻圍軍は第二回の總攻撃を始めた、則ち九月十九日を以つて重砲の砲撃を始め、其夜クロバトキン砲臺、水師營南方壘堡、及二〇三高地に向つて歩兵の攻撃を始めた、翌二十日第九師團はクロバトキン砲臺及水師營南方壘堡を占領したが、第一師團の向ふたる二〇三高地の占領は二十一日に至つても確實に占領することが出来なくつて、遂に二十二日に至つて之を捨て、其他の師團も其攻撃擄取らず、此處に攻圍軍は其攻撃を中止するの止むなきに至つた、之が九月の二十二日であつた。

嗚呼攻圍軍の第二回の總攻撃も、凡ての人の成功を祈願しつゝあつたにも拘らず、到頭再び失敗を重ねた、凡そ完全なる築城を施した要塞を攻撃するには、佛蘭西のボーバンがいつたやうに、充分なる準備を整へて正々堂々其所謂正攻法を以つて進まなければならん、此原則は如何に火器の進歩した今日でも、充分に履行されなければならん。然るに我攻圍軍が此方策に出でないで、常に強襲的攻撃法を採つたのは誤謬であるといふことは、今日に至つて明瞭になつたのである、此の誤謬を犯した所以のものは、第一、我軍に要塞戦の経験がなかつたこと、第二に無形的精神は如何なる程度の有形物にも打勝ち得べしとの信念が強かつたこと、第三に日清戦役に於て一晝夜を經ない内に旅順を取つたこと、第四に攻城砲の威力を信じ過ぎてをたつたこと等である。實際攻圍軍のみならず、國民全體が大和魂を以つて進めば、如何なる金城鐵壁も立所に陥るこゝが出来るといふ考を持つてをたつたのである、換言すれば正攻法なきと云ふものは、魂のない歐羅巴人さもが云ふ處の弱音であつて、日本の軍人には正攻法なきは不用であること考へたのである、其處で國民は何故早 旅順が取れないのであらう、攻圍軍は何をしてをるのであらうと叫んでをたつた、旅順の攻撃の數々なる失敗に就いて、非難をする人もあらうが、其れは致方ないとしても、日本國民就中軍人が大和魂について、最も堅固なる自信を持つてをたつたことは、我國民として頼もしいことであること予は考へる、實際此自信があつたから、參謀官の無謀に近き計畫ですらも一つの小言もなく、多大なる犠牲のあるにも拘らず、幾度か強襲を行ふたのである。若し此自信がなかつたならば、始めから旅順攻撃を不可能であること考へたかも知れん、以上は攻圍に従事した軍隊についていふのであるが、然しながら此攻圍を計畫した參謀官等は、其卓抜なる識見と其冷靜なる頭腦を以て、正當に此要塞を判断し、正當に我軍隊の實力を認識し、正當に攻撃計畫を爲すべきであつた、然るに國民と一般なる誤謬の霧に包まれて、最も剛毅なる士卒の生命を奪つて、而も幾度か失敗したのは、誠に残念なることである、是に於て我々は有形的の力は或程度迄は無形的の力に抵抗するこゝが出来て、強大なる有形力を輕蔑すべきものでないといふことを悟つた。

第二 青銅白砲の無力

然しながら有形的方面のみから旅順を観察するに、露國が此四五年間に巨萬の金額を費して構築した此要塞を彼自らは難攻不落と稱へてをたつた程堅固なものである、其備砲はなかく完全であつて、其守兵は我々が始めに想像してをたつたほど僅少ではなかつた、少くも攻圍の始めに於ては、五萬居つたのであらう。其れに對して三箇師團と野砲一旅團、重砲兵三聯隊を以て大膽に攻撃をしたのである、殊に十五冊の青銅白砲や、九冊の青銅白砲を以て、此難攻撃を始めた、是等の火砲は此要塞に對して頗る微々たるものであつたに相違ない、正攻法を以つてすも、是等の火砲のみであつたならば、或は遂に不落であつたかも知れない、之は我國に於て技術を頗る輕視したからである、抑此戦争數年以前から我々が敵を見做してをたつた所ものは云はずも露國であつた、旅順は如何にしても奪取して十年前の屈辱を雪がねばならなかつたのである、則ち、旅順要塞を攻撃するといふことは、平時から對露作戰計畫の一大要件であつたに相違ない、然るに此攻撃に最も有利なる、重砲を平時から準備するこゝを仕ないで、愈々戦争になつて、此二十世紀の晴れの舞臺に青銅の舊式砲を持出すこゝであらう、是が則技術の今日まで輕蔑されたる結果である、此火砲が甚だ役にたゝぬので、二十八冊の榴彈砲や海軍重砲を持出したのは、既に非常なる人命の犠牲を供した後であつた、爾來我が陸軍に於ても今少し技術的方面に力を注がなければならぬと思ふ。

第二十六章 遼陽の周邊

第一 遼陽の價値

我兵站監部は九月二十五日に海城を出發して、大屯七岑子を経て二十七日遼陽に著いた、是より一日前仙波少佐の率ゆる兵站司令部は我宿舍の前に到着して、司令部開設の準備に取りかゝつた、數日の後此司令部は開設して同時に遼陽北方三里にある臺張子に支部を開いて、第二軍が水路吳大堡子及黃家嶺子に蓄積した糧秣を受領し、且つ野戦隊に分配することになつた。

遼陽は南滿洲に於て奉天に亞ぐころの都會であつて、今より一千年ばかり前に、遼王が都した所だに傳へられてある、市街は正しく井桁の本街を形作つて、周圍は煉瓦壁で纏ふてあり、一邊千五百米突ばかりの方形を作つてをる、此本廓の北に今は廢頽してをるが、幾分の市街が残つてをつて本廓に連る土壁によつて圍れて、又一箇の廓をなしてをる、戸數合して三萬ばかりもあらうが、商業の繁華なる程度は、予が今まで見た中の最大なるものである、市街の東方及北方には、太子河が流れて西方數里には遼河があつてそのほりの牛莊は、昔此河口にある港であつて、遼陽と牛莊とは東京と横濱との様な關係を作つてをるのであるから、遼の都せし時代以前より頗る繁華なる都會であつたことが想像される、其處で道路の關係も亦遼河流域に於る首府であつたことを現してをる、北は遠く吉林に通じ、東は城廠及懷仁に至り、東南に下るものは連山關を経て鳳凰城に至り、南は海城を経て半島の南端金州に通じ、西南に進むものは牛莊を経て山海關に至り、西北は新民府と相通じ、所謂四通八達之地、道路の關係より之を見れば寧ろ交通の便は奉天に勝る、かるが故に商業の中心であることは勿論、軍事上に於ても戰略要點として充分の價値を存してをる、之が露軍の永久的築城を以つて防護し且つ死守したる所以であつて、又我軍の第一に作戰目標として選定したる所以である。

第二 恥辱を紀念する築城

クロバトキンは此歳の春以來非常なる努力と金力とを費して、遼陽直接掩護の一大堡壘系を作つた、右翼は遼陽の西北太子河に接する邊より約千五百乃至二千米突の隔りを以つて、遼陽の西及南を包圍し、右翼朝鮮嶺に至る邊の山脈上に及び半永久的閉鎖堡の數殆ど十五箇を堡壘系の據點とし、之に大小掩堡並に砲臺を前後に排列し、電光形攻路若くば滾土對壕を以て是等を連結し、鐵條網及狼狽を以て、堡壘若くは砲臺を圍繞し、野戦築城と、永久築城に於る總ての防禦術を盡して餘す所なく、遂には殊更に圍廓の瓦壁を崩壊して退却の通路を設くるもの數箇所に達し、盡し得て却つて、其度を過すに評すべきであらう乎、而も半歳の臨時築城は退路を有するが爲に、忽ちに奪ひ去られて、戦敗の恥辱を後世に垂るゝ憐れなる記念物となつてしまつた、昔は韓信水を背にして陣した、今は露人城を築いて猶且退くことのみを努力した、數千歳の古へでも尚ほ韓信は露軍の怯懦を嗤ふたであらう、敵を防ぐの道具は味方を潰ゆるの道具となつてしまつた、愚なる者は露人である。

遼陽の西に停車場があつて、此附近には露人の家屋が相連つて數列の市街をなしてをる、僅々五年の間に彼がなした、設備は驚くべきものである。クロバトキンの居住してをつた官舎も、其屬僚の居住も、鐵道驛員の住宅も、果ては教會、俱樂部、倉庫等に至る迄今尙残つてをる、予が會て大石橋で見た其物よりも遙かに大に、且つ整頓してをる、流石は侵略に長けた露人ほさあつて、敵ながらも稱讚を値ひする、鐵道に關する設備も、非常に多くの支線を八方に延長して無制限に近き廣大の地區を占領してをる、中にも扇形に構築された機關庫は、我國で未だ見たことのないものであつた、今は昔の露人街も都て日本街となつてしまつて、滿洲軍總司令部を初め、後方諸官衙の占領する所となり、意氣揚々たる我軍人の風を切つて通行するのを見るばかりである。

第三 珍らしき汽車の黒煙

十月一日に黒き煙を吐いて汽車は遼陽に著いた、珍らしきことかな、五月三十日以来其の影をも見ることを得なかつた汽車は出征勇士の跡を慕ふて、遙るく青泥窪から來つて今漸く追附いたのである、懐しき汽車よ、汝の爲に残されたる靴は餘りに大きかりしよ、汝は此靴を修理しつゝ歩みしことの如何ばかり困難なりしよ、されど汝の來りし道は、我國の其よりは大に平らなりしが爲め、汝の歩行は思ひしよりも拂取りしことよ、是より汝を伴ふて戦場に行かむ。

當今の戦争では、大軍に供する都ての軍需品の輸送が至大の要件であるから、軍の行動に鐵道は頗る密接の關係を以てをるので、鐵道の利用は戦争の一大要件である、大本營に於ても特に東清鐵道の利用に就いて着眼せられ、六月初めに野戦鐵道提理部を編成し、青泥窪に向つて出帆したが、六月十日に沖の島近海で是等の役員の乗つてをつた船が、浦鹽艦隊のために襲はれて、再び門司に引退した、されど役員及工夫の多くの者は生存したので、再び此處で編成替をして七月初頭に、又も出帆をして青泥窪に著いた、其處で此處に本部を設けて作業に著手した、初めの話では五呎の軌間を有てをる露國式鐵道を三呎六吋の、日本式鐵道に改むるが爲め二本の軌條の間に、更に一本の軌條を置いて、所謂三本の鐵道とするといふことであつたが、軍の前進に隨つて改修すべき鐵道の長さも漸次増加するので、是れに一々軌條を當てがうことは、急の間に合はぬから、遂に此を止めて、一方の軌條を他方の軌條に對して、其間隔を縮小するやうに移した、斯様にして青泥窪から、北方に改修の工事を進めつゝあつた間に得利寺、瓦房店附近の假設鐵道橋が雨期の出水のために破壊されたので、此處で作業が大に滯滞したが、是等の工事も終つて、九月二十日には大石橋まで汽車を通し得るやうになり、夫れから更に大奮發をして、遂に十月一日に遼陽までの開通し得るやうにした、七八九の三箇月間に、六、七十里の長距離を改修した、其迅速の作業は野戦軍の多く感謝する處である、提

理は竹内工兵大佐で、其編成の大略は本部と技術部に別れ、本部は將校部員以下軍人のみで、技術部は總て文官及工夫等で運轉班、車輛班、軌道班、建築班、工作班の五班に別れ、其上に技長があつて、之を統べてをる、各驛には停車場司令部の外に驛長及驛員を置いてあることは内地と異つたことではない。

第四 露國の鐵道車輛

野戦鐵道提理部が、軌道を改修する迄は、第二軍の兵站部が三百輛あまりの露國貨車を運轉してをつたが、軌道の改修と共に是等の貨車は遂次北方に纏められて、遂に遼陽に全く集合してしまつた、是れからは鐵道を第四軍の兵站部で使用することになつて、三百有餘の貨車を、我が兵站部で受取ることになつた、予は此任に當つて、十月三日に補助輪卒二隊を以て、之を受取り、且つ我が管區内に運んだ、此作業に二日間を費した、貨車の約三分の一は土工用の極めて粗糲なる土運車で、其他は有蓋及無蓋の尋常なる貨車であつた、前のものは五六噸の重量を積み得るに過ぎなかつたが、後のものは優に十噸の重量を積載し得るので、我國のものよりは、其大さ積載量等に於て勝つてをる、中には貨車の中に煖爐を備へつけたのもあつて、珍しき感覺を與へた、是等の貨車の中に唯一個の二等客車があつて砲彈が此車の一隅を破壊してをつた、車内は頗る立派に飾られてをつた、面影が残つて支那人等の爲に其皮や布を剥ぎ取られたこと云へ、金屬發條制の蒲團や窓掛の軸や柵や箆筒が残つてをつた、謂はゞ室内が船の客室のやうになつてをつて車内が數個に區劃されてをるのである、我國でいへば日本鐵道の特別客車でもいふべきものであらうか、殊に寒國を運輸するもの丈けあつて、蛇形の煖室蒸氣管が備つてをるのを見た。

第五 冷血動物支那苦力

此貨車受領の際に一事件が起つた、夫れは支那苦力を備ひ、三十輛ばかりの列車を押さして、運行しつゝあつた間に、一名の苦力が小鐵橋を通過する際、誤て車に轢かれて血を吐いて死んだ、所が支那人は此無慘なる最後に少しも驚かない、又少しの同情をも寄せないで、襟を引つ攫んで軌條の側の空地へ引すり込み、血を吐いた體を上にした儘打ち捨てしまふ、其他のものはサツサミ車を押すばかりで見返りもしない、犬猫の死んだのを見るよりも、一層冷淡であつた、而うして、此災難を怖れて逃げるかと思へば、彼等は一向平氣で、只サツサミ押してをる、實に彼等支那苦力は金を溜める動物であつて、其體內には氷のやうに冷き血が流れて居るのである乎、或は金を儲けるが爲に死ぬるのが、本望であるを考へて居るのであるか、是に於て、予は生命よりは金が大切であるを觀する支那人の思想が、眞實であるといふことを確め得た。

斯様に三百餘りの露國の貨車を受取つてから、日々四五十輛の列車を作り、之に糧秣を積んで、千人にも近き苦力を付けて、張臺子迄運行した、是が爲め手押貨車運行規則や、同發着時間表などを作つて、秩序能く實行しようとしたが、未だ準備の整はなかつた事や、苦力が規則正しく集合しなかつた事なきの爲めなかく、精確に實行する事が出来なかつて、或時の如きは日が暮れて、暗の中を燈火なしに、鐵道橋の上を越へるやうな危険極まる事をやつた事も幾度があつた。

第六 野花一輪の手向

予は自己の業務の爲めに、忙殺されつゝある間に圖らずも、最も悲しき報道に接した、或日のこゝ新聞を読んで居る内に遼陽の戦鬪に於て、戦死したる將校の氏名が掲げられてあつた、其の中に予が従兄弟で、しかも近き四五年間予が宅に寄寓して居つた、視威のものゝ名があるのを發見して、今更の様に悲しき感情を、予が胸に漲らしたので

あつた、氏の父は早く没し、氏の弟は他家に養はれ、天にも地にも、唯一人の母と共に淋しき、半生涯を送り、本年の春漸く少尉に任せられ、歩兵第十一聯隊の小隊長として、青年の血氣に充滿せる勇氣を以つて、予等と相前後して、廣島を出發した、然るに氏は今遼陽の堡壘前に義烈の戦死を遂げ、滿洲原上の一滴の露を化して仕舞つた、天龍なき氏の生涯は、茲に終りを告げて、其靈は天地と共に、長へに祭られ、其名は後世に傳はるであらうが、併しながら、故郷に残されたる氏の母が二つなき玉を失ふて、國家の爲めは云へ、如何ばかり悲しき思ひに暮れて居るかを思ふときは、誠に同情の涙を禁じ得なかつたのである、そこで予は直ちに、當時趙家林子にあつた、第五師團司令部に趣いて、君の戦死の當時の有様や其の場所、時日や墓の所在地迄をつぶさに調べ、猶ほ君の功績書を寫して歸つた、丁度其の翌日、東八里庄の軍司令部に用務があつたのを幸ひに、遼陽南方の氏が戦死したる場所を覺しき地點を搜索し、新しき墓碑の前に野花の一枝を手向けて、禮拜をした、その後は等の有様を認め功績書の寫しを添へて氏の母なる人へ予が父に送つた。

第二十七章 沙河の會戰

第一 彼我兩軍の對峙

遼陽の戦鬪で我軍の爲め驅逐せられたる敵は撫順奉天新民廳の線以北に退却して此處に止まつた、即ち奉天附近には第十、第十七、第三西比利亞軍團、撫順附近には第一西比利亞、第五西比利亞軍團、奉天撫順間に第一軍團、奉天鐵嶺間に第二西比利亞、第四西比利亞軍團を置いて、其の右翼新民廳附近に其の左翼營盤附近に大なる騎兵團を派遣し、其一小部隊を永陵附近にも出して、當時輸送中であつた第六西比利亞軍團の到着を待ちつゝある模様であつた、其の兵力合せて八軍團並に騎兵團二個で總計約二十萬であつた。

我軍は東本溪湖から烟臺炭坑を経て、西小北河に通ずる線に前哨を置き、現役八個師團、後備歩兵四個旅團を以つて此の敵に對抗し戦後の整頓と體力の恢復に努め、此處暫らく小憩の姿となりて招魂祭や、慰勞や、訪問等に其の日を過ごして、十月十日には滿洲軍總司令部で軍、師團、兵站の參謀長以上を招待して宴會を催さるゝ筈で其日を待ちつゝあつた間に、俄然十月五日から敵が渾河を渡つて南進するの報を得た。今や敵は増援兵による優勢を恃んで攻勢を取るべく行動するのであらう、然るに我軍は十里餘の深長なる地域に休養的宿營をやつてをつたのであるから、劇かに前方に兵力を集結する必要を生じ、諸隊は一時に後方から前方に活動を始めた。

八日の夜には我軍司令部も東八里庄を出發して羅大臺に進んだ、翌日更に張臺子に轉じて、全軍は十日の早朝から攻撃前進を始め茲に沙河附近に震天動地の大活劇を演じたのである。

第二 勝利疑ひなしの宣言

露將クロバトキンは攻勢的前進を始むるに當て、即ち十月九日左の宣言を軍隊に發し且つ是を世に公にした其の譯又曰く

敵は卑劣にも旅順口に於て宣戰布告前に於て、我海軍を攻撃し、爾來海陸共に同様の方法を採れり、之にも關らず露軍は常に勇敢壯烈に戦ひ以て大に祖國を辱めざるものあり。然りも雖も敵は之が爲に屈服せざるのみならず依然として傲然其の終局の大捷を期しつゝあり、我在滿洲軍は常に少挫折に屈せずして兵氣旺盛なりも雖も、其兵力に於ては未だ日本軍を破倒するに足らず、故に我軍の勇敢にして且つ名譽ある任務を果し終局の勝を制するは尙ほ前途遼遠の事に屬す。此故に日本軍の攻撃に對しては大石橋、鞍山店及遼陽に於て敵を撃破せしに關らず本官は尙ほ時機不到來を爲し、前進攻撃の機にあらずし、常に退却の命を與へたり。汝將卒は其陣地を撤去するに當りては勇敢に防衛を爲して敵屍山積の慘狀を呈せしめ、尙且つ敵の爲に阻害を受けずして餘裕綽々たるも

のありたり。遼陽の戦の如き、五日間の激戦に我前衛及本隊の陣地を遺憾なく防衛し得たる結果として、豫定の如く新陣地に退却せり。又實に奉天に退却せんとするや、黒木將軍の攻撃を受け最大の困難を嘗めたり、道路泥濘にして殆ど通過し得ざるも意せず、終日行進して尙ほ且つ大砲及二輛車の如き夜間手力を以て運搬し、一つの大砲、一名の捕虜若くは負傷兵をも遺棄せずして、殊に貨物列車の如きは全く損破を生せずして奉天に退却し得たるは偉大なるに足るなり。

本官は奉天に退却を命ずるに當りて頗る心中忍ぶべからざるものありも、其退却が却つて將來時機來らば敵を撃破して又立つべからざるに至らしむるに於て必要ありとの確信ありしを以て、忍ぶべからざるを忍び、涙を振ひて退却を命じたるなり。我皇帝は本官に與ふるに敵に對して充分勝利を得せしむるに足るの兵力を以てせり。而して其大軍を一萬ベルスト(六千六百六十六哩)の長程を運ぶの大困難は舉國一致報國の念と熱練を以て排攘し得たり、實に其困難たるや、古今未曾有の事なり、僅々七箇月間に數十萬の兵、數萬の軍馬と輜重車、莫大の糧食は間斷なく西伯利より滿洲に運搬せられたり。今や假に在來の滿洲軍にして其兵力不充分なりとするも、新來の精兵は敵を撃破して陛下の意に稱ふは疑を容れざるなり。爾來敵は大兵を擁して我軍を包圍するの配備を爲し、専ら機を見て攻撃し來りたるも、今や其彼我の位置は全く轉倒し、嘗てより熱望しありたる如く我意の儘に攻撃し得るの好機は來れり、我滿洲軍は實に攻勢を取るに充分の兵力あればなり。

然りも雖も我等は強武勇敢なる敵と戦ひ、捷利を得るに在ることは瞬時も忘るべからず、又兵力に於て充分なりも、尙ほ上下共に如何なる犠牲をも顧みず、終局の捷利を得るの大決心なくんばならず。露軍に取りて勝利の必要なるを銘心せよ、就中過去七箇月間旅順要塞を勇敢に防守したる我軍を救援するに於て、一日も早く勝利を得るの必要なるを記憶せよ。古來我露軍は、戰爭に於て勇敢無比の勳業を建てざるはなく、之がために宇内に名譽を博したり、故に常に極東に於て露國の威嚴と權利の防衛の責は皇帝より、我軍に委せられたることを忘るべ

からず、常に全露國軍の名譽を維持するの任は懸つて我軍の双肩に在るを忘却するなかれ、上は皇帝より全露國民は汝等の爲に祈禱を爲し、汝等の勳功を爲さんことを祈りつゝあるを見よ、此全露國の捧ぐる祈禱なるを思ひ、又汝の責任の如何に重大なるかを考へ、確乎不拔の決心を以て生を惜まずして勇往敢行吾人の任務を最終まで果さざるべからず、神は吾等を庇護せり正に勝利疑ひなし。

第三 断々乎たる攻撃的決心

敵は攻勢を取つた、我は是に對して守勢を取るか、或は我も同じく攻勢を取つて一大遭遇戦を企つるか、一に我總司令官の決心にあるのである、敵は早や九日に於て橋頭本溪湖間の後方連絡線を遮断して、稍々包圍の形を爲し、其の兵力は少なくも我一倍半に及んで、全般の形勢から之を考ふるに、我は殆ど守勢を取るの止むなきに至らんしつゝあるのである。然るに兵力の寡少を、包圍を被むるの危険を顧みず、總司令官は断々乎として攻勢を取るに決心し、十日から總前進を始めた。十二日の夜には全軍の總夜襲を以て敵の攻撃を轉んじて退却に陥らしめ更に之を追撃して最も大なる損害を與へ、敵を殆ど全く沙河右岸の地區に退却するの已むなきに至らしめ、遂にクロバトキンが勝利疑ひなしを宣言せる攻撃計畫を全く水泡に歸せしめたのであつた。此戦闘は十日から十七日まで間断なく繼續して、茲に一先づ攻撃を中止し、一方に於ては一週間以上に亙る戦闘のため生じたる隊伍の混亂を整頓し、一方に於ては將卒の體力を恢復するの餘裕を作つたのであつた。我損傷は一萬五千内外にして、敵の損傷は略ぼ七萬ならんを推算せられた。此偉大なる成功は大なる感動を世界に與へて、クロバトキンの宣言に對しては嘲弄的世評が下されたのであつた。我に同情せる世界の各所からは最も秀逸なる戦捷を祝すの電報が我總司令官に集まつた云ふことであつた。露軍の數字的優勢は遂に日本の精神的優勢に打勝たれて勝利の月桂冠は依然として日章旗軍の載く所になつたのである。

戦闘は十七日以後に於ても間断なく繼續され、遂に自然的持久戦に變化して、茲に戦史上未だ曾て其例のなき半歲の對陣になつた。

第四 戰場への出發

遼陽にあつた我兵站監部では逸早く烟臺に兵站司令部を開設して、茲に彈藥及び糧秣を集積するの計畫を實行した。勿論此の計畫に關しては遼陽、烟臺間の鐵道を利用するの、其の距離の短かきに依りて、遼陽攻撃の時のような實行上の困難を見出さなかつたので、着々として兵站の諸機關は運轉して居るのであるから、我々の任務上の心配は寧ろ少くなかつたのである、唯我五六里前方で戦闘を開始したのであるから、全軍の間断なき砲聲は夜間も絶ゆる間もなく、段々として我々の耳朶に轟くので、例へ全勝は疑ひなしに信じながらも、日日の戦況に對して一方ならず心配したのである、而かも軍司令部より情報の來ることが稀であるから、砲聲に依つて戦闘の繼續するを知らざれば、戦況に對しては五里霧中に彷徨した、味方が進むのか、敵が迫るのか、砲聲は高くもならなければ、低くもならない、諸種の想像を以て戦況を憶断した處で無益の煩悶を増すばかりであつた、そこで予は請ふて軍司令部に出張した。

十月十四日予は馬に跨つて軍司令部に向ふた、朝來砲聲は段々として倍々激烈を加へ、氣は自ら戰場に飛び、馬脚は高く砂を蹴つて、大子河の橋梁や、張臺子の停車場は我知らず過ぎ、其の日の正午前に烟臺兵站司令部に著いた。兵站司令部は今大混雜の眞最中、諸縦列は彈藥、糧食の受領の爲めに三個も四個も押し寄せて、其の馬も車輛もは附近の空地を滿し、人は糧秣、彈藥の積載に織るが如く往復して居る。縦列の或る者は今將に此處に到着せんとして其の長き列を後方に引き、其車は間断なく此處に集まつて來る。又縦列の或る者は此處を出發して行く、車の轉する音、馬の嘶く聲、人の叫び、指揮者の號令等が一種の物音をなして此のパノラマを更に活動せしめ、捕虜は今到着して其

人員調べや、兵籍調べに整列してゐる。補充の人馬や大行李を持たない第八師團の歩兵は其晝食の炊爨を請求してをる、整列して居るものもあれば只一緒に集つてゐる者もある、其の間を將校や、下士や、兵卒、輪卒が散々伍々其の混雜云ふものはナカク一通りでない。

予は手早く晝食を終へて、此の兵站司令部を去つて此處より半里ばかりの總司令部に赴いて予が舊友某大尉に戰況を問ふた、勿論詳細なることは得られなかつたが、全軍一般の狀況として左の數行の文字を得た。

十二日、第一軍、第四軍は優勢なる敵を戦ひ攻撃思はしからず。第二軍は激烈なる戰鬪後砲二十一門を分捕れり。十三日、各軍前進し第一軍は馬耳山、蓮花山の線、第四軍は三塊石、范家屯の線、第三軍は板橋堡、三家子の線に達せり。此の夜歩兵第六聯隊は砲十二門を分捕れり、十四日、諸方面の景況良好にて敵は退却を始めたが如し、但し第一軍方面の敵増加し、第五師團は第一軍に應援せる由、今尙此方面砲聲絶えず。

第五 悽愴の一夜

總司令部の通信所にて第四軍司令部の所在地を調べたるも、只大句云ふのみで何れの地點であるかと明瞭でない、予が所持の地圖には勿論此の地名を見出せない、日は漸う暮れかゝつて来て、天は連日の砲撃に感じたか叢雲を戰場の眞上に浮べて、電雷が悽愴なる此の戰場の光景を更に悽愴ならしめ、人馬車輛の物音と共に一種の痛烈なる感覺を我々に與へた、雨なるか風なるか將た晴天なるかは今日の戰鬪の未知數なるかの様である。

其夜は烟臺兵站司令部に宿泊するに決心して此の地にかへつた、日は暮れた、鐵道線路の延長した方向に天が雷鳴を轟かすかと思ふ三十秒餘りしてドンドン空を掠めて響く不快な音、引續き又雷と共に此のドンドン又一發、又一發、敵の榴散彈射撃である、終夜此の砲聲雷聲は絶えなかつた。兵站司令部の周圍は相變らずの混雜で、夜の暗を破つて、篝火、燈火、篝火があちらこちらに燃へて其間に人の呼ぶ聲、叫ぶ聲、語る聲が、此の間内

から鋭く人の耳を射て、言ふべからざる一種の感覺を與へた、悽絶云ふか壯絶云ふか。

第六 三塊石山麓の光景

其夜は混雜の内に寢た、翌日此の地に彈藥中間廠として派出して居つた、第十師團野戰兵器廠長井手少佐に相伴つて、總司令部から出た電信線により概略の見當をつけて、我軍司令部に行く可く出發した。烟臺を去るこゝ概ね二里、漸く平地から高地脈に進み、滿洲では稀に見る處の二見ヶ浦の夫婦岩のような形の三塊石山下に達した。彈藥縱列、糧食縱列等の車馬が其の麓に不規則に動いておる、此處に野戰倉庫を設くるが爲めである、行く者もあれば、歸る者もある、列を成して止る者もあれば、列を解いて糧秣を卸してをる者もある、歩兵の豫備隊は規則正しく集合して居る、傳騎らしいものが五六騎秣ふてゐる、其の前を乗馬兵が走る、參謀將校が来る、道を問ふ者もあれば、教へる者もある、前面は霞か、砲煙か、朦朧として充分には見えぬが、散兵線か、援隊か微かに一線、二線勿論瀧の音の様な連續せる小銃聲、山雷の様な砲聲は間斷なく鼓膜を襲ふてをる、顧みれば目の下の谷にはまだ、處置のつかない敵の死骸が數十、上を向いて腹を出してをるものもあれば、下を向いて肩を現してをるものもある、谷のこなたには、敵の築いた急造の散兵壕や、掩堡が連らなつて、其の壕の中にも倒さまになつて足のみを現してゐる死骸や、倒れて仰向けに胸を出して居る死骸や、其他諸種の者が此處にも二三十。遙か向ふに分捕りたる敵の野砲の彈藥車が捨てられてある、其の車の下で調べられてゐるのは捕虜であらうか。斯様、有様が一時に眼の前に現はれて我々の感覺を没して仕舞ひさうだ、其間にも眼に見る狀況は絶えず變化して銃砲聲は或は激しくなり、或は緩くなり時折は力なき榴散彈の丸子のヒュンミ音して耳を脅すもある。此の中を馬を走らせて傳騎の教ゆるがまゝに三塊石山の麓を西に離れ漸くに大句云ふ村に著き軍司令部に行つた。彼我の戰況や、將來の軍行動の計畫や、兵站設置の意志なきを聞

き、晝食の御馳走を受け、幾何もなく此處を辭して歸途に著いた。軍司令部は軍司令部丈けに流石は戦闘中でも家中にあつて、比較的沈著に其作戦の指導をして居る。

唯軍司令部附屬の通信所は電信、電話で引きもきらない、總ての傳達は皆此の通信機關の媒介で、今は傳騎を走らすの要もなく、戦闘を現場で命令するの要もない。誠に文明の恩澤である。

烟臺兵站司令部で再び宿泊した後、第三日目の朝此處を出發して遼陽に向ふた。此の途中眼に著いたものは張臺子の北一里ばかりの處に、遼陽戦闘後我軍が構築した堡壘線であつた、強硬掩堡や、野戰砲臺や、其他普通の掩堡が相連なつて、前には鐵條網や、鹿柴を組み、後ろには電光形の退路なきも堀られ、一見工事としては見事のものであつた。敵は我が此の工事を行ふを見て守勢を取るかの如く考へて大いに攻勢を取るつもりであつたろうが。工事に懸著するような弱い日本軍ではない、後方から轟く砲聲を幾度か顧み戦闘の未だ酣なるこゝを感じつゝ遼陽に著いたのが十月十六日の午後一時であつた。

第七 沙河會戰の戰況

沙河會戰の公表せられたる戰況は次の通りである。

九日

右翼軍方面

今九日朝、敵は威寧營より太子河の左岸に移り橋頭に向て前進し、橋頭本溪湖間を遮断せり、其兵力は歩兵約一旅團、騎兵二千、砲二門あり。又本溪湖の東方太子河右岸の地區には増加して歩兵一旅團、騎兵五百、砲八門となれり。

大嶺方面の敵は約混成一旅團なり。綿花堡、八家子共に歩兵一聯隊の敵あり、南に向つて前進す、其後方には後

續部隊あるものゝ如し。

午後二時敵の歩兵約二聯隊上柳河子に進入し、又同時に敵騎一聯隊下柳河子に入り燒達匂に進入せり。敵は其兵力一師團にして既に我陣地前に達す。

中央軍方面

今朝まで此の方面の敵は約一師團にして前黃花店、板橋堡、柳塘溝の線に停止しありしが、午後敵の一縱隊柳塘溝より鐵道線路を南進し、其先頭南五里街に達せり。又柳塘溝より歩兵連續前進す、其兵力三大隊を下らず、尙後續部隊あるが如し。鐵道線路を行進中の敵は長徑約二里にして、尙其後尾を見ず。板橋堡東方高地にも約一聯隊の歩兵を見る。

左翼軍方面

此の方面の敵の運動は活潑ならず雖も敵の主なる兵力は柳塘溝、孫家臺附近に在るが如し。

我軍の狀況左の如し。

右翼軍は橋頭守備隊應援の爲め一縱隊を差遣せり。又七日以來城廠方面にも敵襲を受けつゝあり、本溪湖支隊の方面の敵に對し軍は今朝より一縱隊を以つて増援し之を撃攘せしめ、目下戦闘中なるも其狀況詳かならず。

中央及左翼軍は前面の敵に對して對戦中なり。本官は目下の狀況に於て敵が其兵力を渾河左岸に集結せざるに先ち之を撃破するの目的を以つて明朝より攻勢に轉じ、敵の主力を求め之を攻撃せんす。

右翼軍司令官の報告左の如し。

本溪湖支隊と連絡を通じ得たり、該隊は九日朝より優勢なる敵と凡そ十二時間戦闘を交へ、殊に本溪湖方面は最も劇烈を極めたり、然れ共總て其位置を維持し得たり、威寧營には敵兵約一旅團餘あり、大嶺には昨夜遅く敵の大縱隊到着せり、土門子嶺には約一旅團の敵兵あり、敵は昨夜肉薄し來り一部は接戦をなせり。

軍より派遣したる増援隊は昨日午後四時頃火連寨に到着せり、其一部は午後九時頃本溪湖に到着し一部は土門子嶺を占めたり、平山溝及大魚堡には敵兵密集しあり。

平田大佐負傷

十日

右翼軍方面

敵は可成り強大なる歩兵を以て三家子の東方高地を占領しあり、又葉河勾谷地には強大なる歩兵縱隊開進しあり、燒達勾附近には敵の歩兵約一聯隊ありて附近の高地に工事を施しつゝあり。

又砲兵を有する敵は午後二時二十分が上柳河子、下柳河子に向ひ前進せり。

本溪湖東方高地は敵の強襲によりて占領せられ、其後又火連寨と本溪湖との中間より道路東側の高地を夜襲せられ敵の占領する處となり、爲めに本溪湖支隊は其占領地を固守して夜を徹したりしが、今朝濃霧に乗じ、本溪湖東方の高地を奪取し、又午前十一時本溪湖、火連寨間の高地を恢復せり。

右翼軍右縦隊の前面には敵の歩砲兵ありて全線之を對戦中なり。

午前十一時火連寨東側高地に向ひて騎兵突撃し來り、劍尖相接する迄劇戦をなし之を撃退せり、敵は多数の死傷者を残して高地脚に退却せり。

本日晚に得たる報告に依れば本溪湖方面の敵は増加せられたるものゝ如し、然れ共我兵能く之に對戦しあり。

中央軍方面

右縦隊は本日午前玉門子東方高地に達し、五里臺子の敵を攻撃せしも日没に至る迄未だ全く之を占領する能はず。

右翼軍方面

目下右縦隊は孤家子附近を占領し、中央軍の左縦隊に連繫して五里臺子の高地及二里臺子附近にある諸兵連合の敵を攻撃し、双臺子、二臺子の線を占領せり。中央縦隊は尖臺子、康家臺附近に互る線に達し、前日來大東山堡を占領せる敵に向ひ攻撃して該地を占領せり。左縦隊は西老山屯の敵を攻撃して前進を續行し赫家屯迄前進せり。城廠守備隊は本日午前三時を期し其前面の敵を夜襲し之を東北方に撃退す。

十一日

右翼軍方面

敵の砲兵約五中隊午前十時頃より本溪湖支隊の正面各部を猛烈に砲撃し、右翼より一聯隊、中央より五大隊の歩兵を以つて攻勢を取り來り、目下激戦中、大嶺及び本溪湖間の地點にては砲戦をなしつゝあり。

土門子嶺方面にては目下砲戦中、本溪湖支隊より太子河左岸に出したる一隊は敵を撃退して再び右岸に移れり。

敵は太子河上流大魚堡附近にも若干の砲を備へをれり、要するに土門子嶺より本溪湖に渡る本道東側の敵は砲約八十門にして、其歩兵は二師團を下らず。右翼軍の主力に對する敵は三家子より八家子に互る線にありて其兵力は約四箇師團を下らず。

右縦隊及び左縦隊の右翼隊の正面は激烈なる戦闘を繼續して日没に至れり。

左縦隊の左翼隊は中央軍の右縦隊と協力して先づ三家子附近の敵を撃退せんことをあつても、日没まで未だ其目的を達するに至らず、然れ共正面及左翼の戦況は一般に有利に進捗しつゝあり、軍司令官は夜中に至るも尙前面の敵を撃退せんことを努めつゝあり。

中央軍方面

右縦隊は昨日來玉門子北方高地を占領しありしが、本日午前より右翼隊は右翼軍の左縦隊の左翼と連繫し孤家子方向に向ひ攻撃前進し、左翼隊は抗牛屯及三塊石山東方に向ひ攻撃せしも未だ其の結果を見る能はず。

左縦隊に對する敵は道家屯、十里河、柳塘溝の線にありて頑強に抵抗したる爲め、豫定の攻撃前進を實行する能はずして日没に至れり。本日右縦隊に對する敵は一師團弱なるが如し。

左翼軍方面

本日に於ける軍の攻撃前進は比較的進捗し、板橋堡、柳塘溝の線に向ひ攻撃を續行し、右縦隊は已に楊家灣を占領し、劉三家子方向に前進しつゝあり。

左縦隊は大油蟲堡附近より青堆子を経て李大屯に互る線に前進し、其主力は青堆子、尤家甸子附近に在りて敵の右側背を脅威しつゝあり。軍司令官は日暮まで目的點に達する能はざる時は夜間の行動をも試み、加之明日も攻撃前進を繼續すべし。

此軍に對する敵は少くも二師團を下らざるが如し。

十二日

右翼軍中央縦隊は午前五時ロウコウリン山及八家屯北方高地を占領し、同軍の左縦隊は燒達甸北方高地を占領し、次で敵を撃退し、續て敵を追撃し、中央縦隊は馬耳山を占領し得たり。

中央軍は昨夜半より運動を起し、今早朝三家子より三塊石山の西北方にある高地の線に達し、多分目下敵を追撃中ならん。

左翼軍は十里河、龍王廟、五里街附近の敵に對し昨夜より絶えず攻撃しあるも未だ其成效を收むるに至らず、目下軍の左翼に兵力を増加し敵の右側背を包圍せんしつゝあり。

本溪湖方面の戦況は依然持續しつゝあり。

右の情況なるを以て當方面の戦況は最初の目的を貫徹するため順境に向ひつゝあるものと判断す。

我中央軍は昨夜半の戦鬪に於て野砲二門彈藥車八輛を鹵獲せり。

丸井少將、久能中佐負傷、安村大佐戦死せり。

十三日(午前)

本溪湖方面に於ては各所に於ける敵の逆襲を撃退し橋頭本溪湖間の連絡は今や確實になれり。右翼軍の主力及中央軍の追撃は大に進捗して已に馬耳山蟒家坂の線に達し、砲兵を有する敵の一部隊は包圍せられて大混亂を極め居れり、其の他は逐次北方に潰走せるものゝ如し。右翼軍は本溪湖附近にある敵の退路を遮斷する爲石橋子に向て一部隊を差遣す、午後三時頃には目的地に進出するを得るならん。

中央軍は今朝三塊石山に於て野砲及彈藥車八を奪取せり。捕虜の言に依ればクロバトキンは約三師團の兵力を擁して右翼軍主力に對せし敵の後方に在りしと云へり。

左翼軍の中央縦隊は有力なる敵の抵抗を撃攘して午後一時半頃浪子街附近を占領し、敵砲八門を奪取せり。敵は潰亂して北方に退却せり。追撃隊は直に小東臺を経て劉三家子に向ひ前進す。右縦隊はエンドウニウルの北部に據れる敵の頑強なる抵抗を撃破して潰走せしめ、目下龍王廟南部五里街に向つて敵を追撃中なり、午後零時半頃左縦隊は猛烈に北煙臺を砲撃中なり。

十三日(午後)

曩に電報せし以來右翼軍は北方に向ひ劇烈に追撃を續行しつゝあり。

本溪湖方面の敵の退路を遮斷するため石橋子方向に前進せし一縦隊は目下其運動を續行しつゝあり。

中央軍は尙ほ攻撃前進を繼續して本日中午に東山口、胡家孤家子の線を占領せん。此方面の敵は夕刻に至り續々北方に退却するを見る、黃花甸より敵の大縦隊東南に向ひて行進し、前黃花甸に工事を始めたるの報あるも未だ詳ならず。曩に電報せし左翼軍中央縦隊の鹵獲砲八門は十六門の誤なり、尙追撃中。同縦隊の右翼隊は砲四門を奪取せり、該縦隊に對する敵の逆襲は頗る勇敢なりしも二回共其の縦隊の砲兵多數の歩兵火を以て敵に多大

の損害を與へ之を撃退せり。左翼軍右縦隊は十里河西方に於て敵を追撃中敵砲五門彈藥車五輛を奪取し、合計砲二十五門彈藥車五輛を鹵獲せり。總豫備隊は砲兵團と共に孤樹子附近に移轉せしめ、其の一部は洪家店の敵を撃退し、左縦隊の右翼に連り攻撃前進中なり。

曩に電報せし中央軍に於て奪取せし野砲及彈藥車八は十一の誤なり、此軍にては本日捕虜百五十名あり。
十三日(夜)

本溪湖方面は昨日來屢々敵の逆襲を撃退し、同日午後五時頃より敵兵退却するの徴候あるを以て此の方面の我軍は今早朝より攻勢に轉じたるも、其の後の情況詳ならず、載仁親王殿下の率ひらるる騎兵の大集團敵の左側背に出で、其豫備隊を潰亂せしめたるは此方面の戰況を恢復するに與つて大に力ありたり。而うして此騎兵團は更に敵の背後に向ひ前進する筈。

右翼軍の右縦隊は朝鮮嶺の敵を攻撃中。
同軍の中央縦隊は蓮花山、馬耳山一帶を占領し左翼縦隊の右翼隊は燒達勾北方の高地に在る敵の殘餘部隊を攻撃中なり。

右翼軍の方面は地形に制せられ概して攻撃進捗意の如くならず。

中央軍の右縦隊は午前十時頃胡家孤家子北方高地に向ひ攻撃前進に移り、二時頃には胡家孤家子に在りし敵の砲兵先づ退却を始めたるが如し。

右翼軍の右縦隊は十三日朝板橋堡を占領し、其先進隊は八家子に達せり。而して該縦隊は豫備隊の増加を受け、黃花甸附近に在る約一師團の敵を攻撃中なるも其情況未だ詳ならず。然るに敵は前黃花店に數中隊の砲兵を備へて頑強に抵抗しありしが豫備隊の一部之を攻撃して其進捗今や頗る良好なり。

中央縦隊の追撃部隊は既に劉三家子を占領し、コウスイ屯に向ひ追撃前進中なり。

左縦隊、右翼隊は紅綾堡の敵を目下攻撃中に在り。

十四日

先に通報せし以來右翼軍方面に於ては右縦隊は朝鮮嶺に於ける優勢なる敵と對峙しありしが増援隊の來著と共に其の方面の戰況を有利に復しつゝあり。中央縦隊は進んで蓮花山、馬耳山一帶を奪取して優勢なる敵を攻撃中なり又左縦隊の右翼隊は苦戦の後敵陣の要地たる燒達勾北方高地を占領せり。

中央軍の中央縦隊は沙河堡を、右縦隊は黃花甸を攻撃中にあり。

日没に至り左縦隊の右翼隊は林盛堡を攻撃し、其一部は萬家園子を占領し、左翼隊は黒林屯、富家庄の線を占領せり。

新來の増援隊は續々煙臺及其附近に到着しつゝあり。

十四日

右翼軍方面

橋頭方面に於ては新に増援したる我一縦隊は今十四日朝以來橋頭附近に到着せり。

載仁親王殿下の率ゆる一縦隊は今十四日拂曉太子河右岸臥龍村附近に於て敵と對戰中なり。

本溪湖、土門子嶺間に於て我を攻撃せし敵は今十四日午前十一時頃より退却を始む、依而本溪湖支隊は追撃前進に移れり。

軍の右縦隊は十三日夜一部隊の應援を以て優勢なる敵に對し朝鮮嶺の陣地を確實に維持しつゝあり。

軍の左縦隊は今十四日午前七時頃に至り蓮花山及其北方一帶の高地を占領せり。

中央縦隊は昨十三日夜靠山屯(金鐘山東北)東北方高地附近を占領し、左縦隊の第一線は今十四日朝九時頃西溝

山の高地を占領せしものゝ如し、要するに右翼軍方面の戦況は今十四日朝に至り益々有利の景況に向ひつゝあり。

中央軍方面

中央軍は今十四日朝以來東山口より胡家孤家子に至る線の北方一帯の高地を占領し、續て尙攻撃前進中なり。

左翼軍方面

未だ確實なる報告に接せざるも右縦隊の主力は今十四日午前十一時頃に至り黄花甸東北方高地を占領したるもの如く、中央縦隊は今十四日朝七時頃沙河堡南方高地を占領し、其一部隊は干家窪子に在りし敵の歩兵を攻撃して砲十門を奪取せり。敵は潰亂して東北方に退却せり。今十四日朝以來林盛堡、達連屯の間に敵の歩兵約五中隊マダイジントンに歩兵約一中隊陣地を占領しあり、軍の左縦隊は之に對し攻撃中なり。

萬家園子に在る左縦隊の一部に向ひ今十四日朝敵の歩兵約二大隊、砲兵一中隊逆襲し來りしも之を撃退せり。

十五日(午前)

右翼軍方面

軍の右側本溪湖支隊に對せし土門子嶺及大嶺附近の敵は今十四日午後に至り我攻撃に堪へ兼ね退却せんことを模様あるを以て、同軍司令官は該支隊長に命ずるに敵を北方及東方に向ひ急追すべきを以てせり。此に於て該支隊は即時二縦隊となり、追撃に著手し、敗敵を撃攘しつゝ平台子、下達河方面に前進せり。

敗退せし敵は遼牛条堡附近に停止して防禦陣地を構成しあり。朝鮮嶺附近に於て敵と對戦せる軍の右縦隊は午後に至り前面の敵兵退却するの兆あるを察知し、直に之を撃退して代家峪方面に追撃し。中央及左翼縦隊は相連繫して西溝山附近の敵を攻撃し、之を撃攘して各々沙河の線に前進せり。

左翼縦隊に對せし敵は約一師團にして奉集堡方向に潰走し、其砲兵は塔山附近に陣地を占領して尙我を砲撃しあり。

り。

豫備隊の一團隊は十四日朝以來微弱なる敵を撃退して歪頭山を占領しありしが、午後三時頃前面に敵の車輛縦隊退却しつゝあるを目撃し、直に之を追撃し、且つ其一部隊を松樹嘴子に向ひ前進せしめたり。

中央軍方面

軍は今十四日朝以來長嶺子、蒲草窪及周家坎附近に陣地を占領せる敵兵を攻撃して之を沙河以北に撃退し、沙河の線に達せり。

左翼軍方面

黃家甸に向ひし右縦隊の主力は今十四日午後一時頃に至り敵を北方に撃退して該地附近の高地を占領し、中央縦隊も午後に至り沙河堡南方高地に據れる敵を撃破して該高地を占領せり。

林盛堡に向ひし中央縦隊の一部は左縦隊の一部と協力して激烈なる戦鬪の後午後四時頃に至り林盛堡に肉薄突入し、終に之を占領し、續て敵を追撃中なり。

林盛堡に在りし敵は歩兵一聯隊、砲兵二中隊以上にして四方台に向ひ退却し、該地に至り停止せり。又中央縦隊の一部はリュボク屯に向ひ敵を追撃中なり。

軍の左翼張良堡附近に位置せる左縦隊の方面に在りては午後三時二十分頃に至り敵兵漸次其の兵力を増加し屢々逆襲し來りたるも、該縦隊は盡く之を撃退せり。同縦隊に對せし敵の兵力は歩兵約四聯隊、砲兵約十中隊を下らず。

之を要するに、去る十日以來今十四日に至る數日間の連續せる戦鬪に於て各方面共盡く優勢なる敵を撃破し、續て勇猛果敢なる追撃を加へ、之を渾河の左岸に壓迫し、以て彼に多大の損害を與へ、且つ三十有餘門の野戦砲を奪取し數百の捕虜を得、全然彼の企圖を挫折し、其の攻撃運動を根底より失敗に終らしむるを得たり。

各處に遺棄せし敵の死體は多數にして容易に計上するに至らず、敵の損害其他目下交戦中にして詳細を知るを得ざるも、其數少くも三萬以上に達せしならん。又鹵獲品は前記三十餘門の外彈藥小銃等莫大にして數ふるに暇あらず。

十日より十三日に互り戰場に遺棄せられたる敵の屍體にして既に我軍にて埋葬せしものよみにて約二千以上にして、十四日の戰場に遺棄したる死體も又甚だ多數なり、其の後の捕虜更に百名に達す。

十五日

十日城廠附近にて我守備隊により撃退せられたる敵は平頂山附近に停止せるものゝ如し。捕虜の言に據れば此敵は從來六道河子附近に在りしマドリトフの部下なりしと、又該捕虜の言に依れば敵の損害は將校以下約六十名なりしと。我損害は輕傷將校山田、伊藤兩少尉及松田特務曹長にして下士以下は僅少なり。

十五日(午後)

右翼軍の主力は既に周家坎高地を占領して沙河の線に達したるも、約一師團の敵は三ジョウシザンに在りて尙ほ頑強に抵抗しつゝあり。

中央軍は今や豫定の線に達して今朝(十五日)來大なる戦闘を交へず。

左翼軍の前面に在りし敵は今朝に至るも沙河堡の北部及拉木屯に在りて頑強に抵抗し、軍の中央縱隊は沙河堡の占領に従事し。右縱隊の大部は拉木屯に向て攻撃前進中なり。敵は沙河堡より四方台の間に砲兵約六中隊ありて盛に我攻撃部隊及林盛堡に向て射撃しつゝあるも、其威力は我攻撃部隊を支阻するに足らず。

十五日(夜)

今までに調査し得たる右翼軍方面の敵の損害左の如し。敵の遺棄せし屍體は本溪湖方面にて太子河の左岸に三百五十、本溪湖支隊の前面に千五百、大嶺に三百、土門子嶺附近に二百。右縱隊の方面に二百、コウインコク附近

及土門子嶺北方に各々六百、見道附近に三百、平拉山北方無名寺附近に百五十。左縱隊の方面燒達勾北方附近に三百、合計四千五百、其の他各所に調査し得ざるもの甚だ多數なり。此方面の敵の損害は少くも二萬以上に達せしならん。

此の方面の捕虜白名なり。又其の後の戦利品は彈藥車六輛、砲彈二千、其の他未だ調査終らず。

中央軍左翼軍方面の敵の損害は調査中なり。

十五日(夜)

取敢へず左翼軍方面の彼我の死傷者及鹵獲品の概數を報告すること左の如し。

去る十日より昨十四日に至る五日間における我軍の死傷は將校以下三千五百内外なり。

去る十日より十三日に至る四日間の戰場に遺棄したる敵の屍體にして既に我軍に於て埋葬せしもの二千に達し、

又昨十四日の戰場に敵の遺棄したる死體も亦た甚だ多數なり、今日迄の捕虜八十名に達す。

鹵獲品の重なるもの砲三十餘門、小銃、被服裝具等多數にして未だ調査を終らず。

十五日(夜半)

右翼軍主力の前面及中央軍の前面 沙河右岸には少數の敵兵あるも敢て大なる戦闘を惹起するに足らず。左翼軍の前面に於る沙河堡及拉木屯(ラムーチン)の敵は續て頑強の抵抗を爲したるも夕刻に至り我兵遂に之を占領せり。

本日午後左翼軍の左翼後李大屯に敵の一部現出せしも我一支隊は之を撃攘せり。

本日日没まで三道岡子附近に騎兵尙ほ殘留して抵抗を爲しつゝあり、我中央軍の一部及左翼軍の一部は目下之を撃攘するに努めつゝあり。

十六日(夜)

城廠よりの報に依れば平頂山に退却せし敵は更に花尖子及興京方向に退却せり、葦子峪、小甸子方向に就ては未だ得る處なし。

寬甸よりの報に依れば懷仁附近に在りし敵は城廠の攻撃に敗れたる後未だ該地に歸著せざるものゝ如し。

賽馬集より橋頭に進せし我支隊は十四日我騎兵團と共に牛心台に達せり、該團の追躡せし敵は同日家阿子(牛心台の東北二里)に停止せり。

城廠より橋頭に向ひし我支隊は十五日高力營の西南約四里の處まで敵を追撃せり。

十七日

高官寨附近に在りし少數の敵は我追撃のため一部は花嶺他は高台嶺に退却し、我追撃隊は高官寨を占領せり。奉集堡の西北約一キロの部落に約一旅團の敵兵集合しつゝあり、其砲兵は其東端に停止しあり。

塔山の東北方高地には約二中隊の肩墻を見る。

中央軍の前面の情況は本十六日夕刻まで敢て變化なし。

左翼軍の左縦隊の前面には今朝來敵は六回の逆襲を行ひしも悉く之を撃退して多大の損害を與へたり、然るに夕刻に至り更に歩兵五六大隊、砲兵二三中隊を有する敵は同縦隊に向ひて攻撃し來り、同縦隊は目下之を撃退中なり。

昨十五日左翼軍方面に於て敵の遺棄したる死體は更に増加し、昨日までに於て約四千に達せり、尙同軍左縦隊の前面には頗る多數の死體あるも未だ調査に暇あらず。

十七日(夜)

上平台子より代家峪に亘り占領しある右翼軍の一部に向ひ敵の歩兵約一聯隊攻撃し來りしも午前九時半頃我反撃のため潰亂して北方に退却せり。

歪頭山方面の敵は尙ほ陣地に留りあるものゝ如きも其情況詳ならず。

其他右翼軍の方面には大なる變化なし。

中央軍の前面にも大なる變化なし。

山田少將の率ゆる混成一部隊は昨十六日夕、左翼軍の一部沙河堡北方の敵に對する攻撃を援助せんが爲其右翼に連繫し、攻撃を開始し、先づ魏家樓子附近の敵を撃退し、敵砲二門、彈藥車二輛を山獲し其後支隊は三道崗子に互りて展開し、敵を撃退して其任務を終り、日没後夜暗を利用して従前の陣地に追却中、午後七時頃に至り約一師團の敵は猛烈に前進し來り、支隊は兩翼を包圍せられ、頗る苦境に陥り、彼我の間に劇烈なる格闘起り、其正面は之を撃退し得たるも、左右兩側は遂に之を拒止する能はざりしを以て、各隊は各一方を突破して従前の陣地に到着せり。此際砲兵は其兵員馬匹の多分を敵彈のために斃され、野砲九門、山砲五門は遂に遺棄するの止むを得ざるに至れり。

左翼軍前面の敵は依然昨日の陣地に停止し、各縦隊の正面は緩除なる戦鬪を交へつゝ日没に至れり。然れ共前面の敵は前日の兵力を増加し、殊に中央軍前面には著しく其兵力を増し、左翼軍の左側支隊に對する敵兵も約混成一旅團に下らざるに至れり。

本日の戦鬪に於て我損害は約千名に達するならん。

十八日(午前)

敵は昨十七日夜左翼軍の右縦隊の正面に二回猛烈なる逆襲を行ひ、又其他中央及右翼軍の方面にも小規模の逆襲を試みたるも悉く之を撃退せり。敵は多數の死體を残して退却せり。

沙河會戦に於る露軍兵力の推算、本月十日より同十四日に至る沙河會戦に於る露軍兵力の推算左の如し。

軍	師	團	大隊數	砲兵 中隊數
西伯利第一軍團	(長中將スタル)	(東部西伯利狙撃歩兵第一師團(長少將ゲルンゲロス) 第九師團(長少將コンドラウツチュエ))	一一二	四四
同	第二軍團	不 明 (西伯利豫備歩兵第一師團(長中將アレキセーフ) 第五師團(長中將モロゾフ))	一一二	四四
同	第三軍團	(長中將イソノ) (東部西伯利狙撃歩兵第三師團(長少將カシタリンスキー) 第六師團(長少將タニコフ))	一一二	四四
同	第四軍團	(長中將ザルバ) (西伯利豫備歩兵第二師團(長少將レウエストン) 第三師團(長少將コッチ))	一一二	四四
同	第五軍團	(長中將ダンゴ) (豫備歩兵第五十四師團(長少將オルロフ) 後任未詳) 第七十一師團(長少將エツク)	一一六	六六
同	第六軍團	(長大將ゾーゴ) (同) 第五十五師團(長少將ライチンガ) 第七十二師團(長少將バラノフスキー)	一一六	六六
第十軍團	(長中將スルチ) (同) 第九師團(長少將ヘルシエルマン) 第三十一師團(長少將マウ)	一一六	六六	
第十七軍團	(長大將ビルテ) (同) 第三十五師團(長中將ドアルスチンスキー) 第三師團(長中將シアンシカウ)	一一六	六八	
第一軍團	(長大將マリーエ) (同) 第三十七師團(長中將チエクマレフ)	一一六	六六	
莫斯科撰抜歩兵第二聯隊				八六
東部西伯利砲兵第二旅團				六六
同	第四旅團			六六
野戰白砲第五聯隊及白砲二中隊				六六
騎 砲 兵				六六
東部西伯利山砲中隊				五五

攻城砲兵一中隊及獨立輕砲兵一中隊
 外に騎兵約百七十三中隊
 歩兵約二十萬 騎兵二萬六千 砲約九百五十門

二七六 一一二二

第八 容易ならざる戦勝

新様にして此戦闘は十月十日から十八日に至る九日間最も激烈に實行された、十八日以後も各方面に於て局部的戦闘は止まなかつた、併し乍ら全軍の活動は茲に一旦中止されたのである。則ち我軍は沙河左岸の地區に停止し、敵も又我に對し此河を隔て、防禦に努めたのである。此沙河左岸の地區に全軍の停止したのは一は體力の恢復、隊伍の整頓に必要であつたのであるが、他方に於て停止をしなければならぬ、更に大なる理由があつたのである。

大本營の最初の計畫では遼陽占領後奉天に退却した敵を進んで攻撃し、奉天を占領した後、更に鐵嶺をも占領して、此に先進部隊を置き其他は奉天附近に宿營して明治三十七年の冬を経過するの計畫であつたらしい。處が敵は速かに増加兵を得て、我より優勢となり、我に向つて攻撃して來た。我軍は總司令官の勇敢にして且つ果斷なる決心の下に敵を迎撃した。此の戦闘は單に一般の戦術上から云へば頗る危険なる戦闘であつたのである。軍の兩翼の位置の保持が確實でなかつたならば、中央の前進を勵まして、若し一翼か包圍せらるれば退路の懸念から、或は陣地を棄つるの止むなきに至つたかも知れなかつたのである。新聞記者が戦さへすれば勝ち、前進さへすれば敵を破る、頗る容易なこゝのように云ふが、決してそんな容易なこゝではない、否危険を冒して漸く勝を制し百敗の中から漸く一勝を得るこゝいふような譯で、戦闘の決勝の時機には總司令官も雖も手に汗を握つてゐるのである、隨つてそれ以下

の者は勿論、必死になつてこの戦勝の一瞬間を持ち耐へるのである。漸く此の一瞬間が過ぎて僅かに一息を洩らすに云ふ有様なので、戯談にも見易く勝てるの、譯なく破るの云はれたものでない、それはいつでも我よりは優勢な敵を引受け、是を攻撃して、包圍しやう云ふのであるから、常に一箇師團を以て敵の一箇師團半、若しくは二箇師團に當らなければならぬのであるからである。斯様にして沙河の會戦は我軍を危険から救ひ出して勝利に向はしめたのである。敵に六七萬の損害を與へたのも、決勝の時機を過ぎて、追撃の時機に於て得た所の收獲であつた、併し乍ら敵を全く奉天方向に退却せしむる能はずして、一旦戦闘を中止し、遂に敵と相對峙して非常な危険で、且つ不安なる冬營を其儘やらなければならぬやうに立ち至つた、此に於て大本營の最初の計畫は止むなく實行をされなかつたのである。

第九 攻撃中止の眞因

前に記して置いた沙河會戦を中途で止めなければならざる最も大なる理由は、砲彈の缺乏であつた。元來我國に於ける平時の戦闘準備が此の彈丸補給の點に於て大いに缺けてをつたのである。常備兵は十三箇師團、戦闘實員約二十萬、後備兵約十二旅團、戦闘實員約十萬、合計三十萬の動員計畫は兼ねてから充分に講ぜられてあつた、處が、砲彈の製造力に至つては此の動員計畫から全く忘れられて、一日僅かに三百の製造力しかなかつた、此の三百といふ數は砲兵一中隊で尋常射ならば約一時間、迅速射ならば七分三十秒の間で打ち盡されるのである。然るに常備、後備合せて約千門の砲兵に對してこの製造力を以つてしたならば、一門に五百發を以て、總計五十萬發の製作に約一千六百日即ち四箇年半を要するこゝとなり、平時の兵器支廠、砲兵工廠の豫備彈藥を消費した後は、殆んど全く戦争は出来ない次第である。愈々戦争を初めて二三回の戦闘の後、初めて多數の彈藥の必要を悟り、それから大騒で機械を据つける、工場を設ける、職工を備ふ、或は私立の工場に其幾分の製作を依頼する云ふやうな騒ぎで、漸く一日五六百

位の製造力を得たが、元よりこんな事では間に合ふ筈がない。そこで更に最も製作し易いやうに構造した鉄製榴彈なごといふものを作つて、漸く一日二三千の砲彈を得るに至つた。此の時は既に遼陽の戦争もすぎ、先づ一安堵して砲彈を補給するため若干の月日を待とうといふ矢先に、計らずも敵から戦闘をしかけられ、其虚實を問ふに遑なく、戦闘を始めて見るに、早や一兩日もたぬ内に彈丸は缺乏しかけた。彈藥縦列は已に砲兵聯隊に其彈丸を讓つて、彈藥中間廠か、野戦兵器廠に来て見るに僅かに二三千しかない、此の彈丸を縦列に渡すに、最早第二の縦列には渡すものがないといふ仕末で、予が烟台に到着した時も、全く此の有様で、彈藥縦列の二箇も三箇も、當時此の地にあつた中間廠前に露營をしてゐるが、此處には彼等に渡すべき彈丸がないので、幾度か遼陽の第五師團野戦兵器廠に補給のこゝを打電しても此處にもない、遼陽から大連に打電して二三千の彈丸を遼陽停車場で奪ふやうに受取つて、晝夜兼行で烟台まで送つた。此の彈丸もその内の一縦列に渡してしまへば最早大連にも砲彈の影も消えて、如何にも仕様がなない、縦列はまだかくも迫るけれども絶対に彈丸のないといふこゝを話すは志氣の關係上出来ないで、只今來るであらう、今來るであらうと言ふ、其の兵器廠員の情けなさ苦しさは誠に譬へ難い、廠員の一人は予に語つた予も又其の眞實であるこゝを認めた、如斯にして沙河會戦は遂に中止するの止むなきに至つたのである、その沙河右岸の地域に敵を退却せしめ得たのは寧ろ天祐である。

之等のこゝは軍の實情であるが、國民否從軍記者等ですらも此の彈丸の補給の困難なるこゝを知らないのである、彼等は寧ろ糧秣輸送の困難なるこゝは知つても、彈丸は常に無盡蔵であるやうに考へて、なぜ戦争を中止したかなぜ戦闘を早く初めないのか云つてゐる素人は罪のない者であるが、軍内部の苦心は誠に慘憺たるものである、つまり砲彈製造に關する平時に於ける準備が全く缺けてあつたからである、是はそも／＼誰の責任であらうか。

第十 敵軍輸送力の誤算

此の戦闘に關して記載すべき事柄が猶一、殘されてある、第八師團は十月十日頃其の先頭を以て青泥窪に上陸を始めた、總司令官は汽車行を以て遼陽に急進すべきを命じた、十三日頃其の先頭は遼陽に下車した處が、此頃の列車は無蓋貨車のみであつたから、馬匹を搭載することが出来ぬ、従つて歩兵は運ばれたが、其大小行李は總べて上陸地に殘されて、其の二箇大隊は歩兵中隊のみを以て十四日煙臺に到着した、處が自己の給與機關がないのであるから、至る處の兵站司令部に於て之が食事を給さなければならぬ、そこで戰場附近の兵站部の混雜を更に大ならしめ、同時に此歩兵大隊も常に給與を他から受けるのであるから、勿論思ふやうに行かなくつて、此の最初に煙臺に到着した二箇大隊の内一箇大隊は、敵が我糧秣集積地たる小北河を襲ふの模様があるので、此の方に急行を命ぜられ其の守備に當つたのであるが、敵の襲來が氣遣ひなきに至つて煙臺に歸らんせし途中、道を失つて北行し圖らずも秋山支隊と合し同支隊の危急を救ひ思はざる功名を博したといふ事柄もあつた。十五日には第八師團司令部が煙臺に到着して、之等大行李なき歩兵のため我兵站に徒歩車輛を是に屬する輸卒を請求して、漸く其の代用を勤めさせた、斯様な混雜で、兎に角第八師團の歩兵は漸く煙臺に集合することが出来て、之れでも總司令官の爲めには最も大なる喜びと安心を與へたのである。なんこなれば此時は最早我全軍は最前線に用ひ盡され、毫も總豫備の兵力が無かつた時に當り、この到着により敵の不慮の行動に對して備ふるこゝが出来るといふ強みを與へたからである、然しながら此の第八師團の到着が今少し早かつたならば、我は此の兵力を全軍の左翼に配置して、敵の沙河堡の陣地を奪つて直ちに本道を奉天方面に突き抜け、更に一舉して渾河の渡河點に迫まつたならば、敵は遼陽に於ける如く、遂に敗走して奉天以北に退いたのであらう。然るを僅かな時日の遅延のために、此の大決戦を中止するの有様となつたのはいかにも残念である。元來此の師團は早くから動員して永く待命に疲れてゐたのに、何故此の師團を速かに出發せしめなかつたのであらうか、由來速かに大兵を一地に集めて、速かに優勢を占め、以て敵を壓倒するは戰略の一大原則であるのに、逐次の増加法を行ふたのは抑も何の故であらうか。予の考ふる處に依れば恐らくは大本營の西伯利亞鐵道輸送力の推

算に間違ひがあつたのではなからうか、遼陽戦闘後既に敵兵の増大したのに始めて其輸送力の大きなきを悟つて、茲に第八師團の出發を命じた、しかも其の時には既に遅かつた、其の大連上陸の時最早沙河戰鬥の始まつた後であつた、輸送力の計算の如きは小事のやうであるが兵家の悔るべからざるこゝである。

第十一 唯一の失策

十七日の戦闘に於て山田少將の率ゆる混成支隊が夕刻其の舊陣地に退却の際、砲十四門を失ふた、此出來事は全戦役中唯一回の失策であつた、實に我陸軍は未だ曾て其の火炮を數に渡したこゝなかつたのであるが、是のみは如何にも残念である、抑も此の出來事の起つた原因は砲兵の使用に於て誤のあつたのが原因である、則ち如何に前進の場合には云へ歩兵と砲兵を同一線上に於て戦闘した結果である、そこで其退却の際俄に敵に迫られ歩兵は砲兵を残して退却し、砲兵は歩兵に援護を乞ふの暇がなかつたので到頭此不名譽を來したのである。此失敗は尙且つ次の教訓を示して居る、退却は戦闘中の最大危険の動作であつて、不完全なる退却は不安の地に停止するよりも一層危険であること云ふことである、之が爲野戰砲兵第十四聯隊の大隊長某は遂に停職の不名譽を負ふた、併し乍ら實は高等指揮官の指揮の誤謬が其の原因であつたならば頗る惘然なるものである。

第十二 最大の苦痛を忍ぶ戦傷者

予が軍司令部との連絡の任務を終へて遼陽に歸つてから後十數日の間戦傷者の後送が夥しく續いた、戦利の貨車に糧秣を積んで煙臺に送つた歸り途には千名餘りの戦傷者を是に乗せて遼陽に送るのである、其の到着は常に日没後で遅きは十一時頃に至つた事もある、此列車が著く戦傷者の歩行し得るものは我兵站監部の前を通つて我隣りに設けられてあつた兵站病院に赴くのである、重傷者はこの列車から擔架で運ばれるのである、此の大數の入院こそ實に内

地に於て見るここの出来ない悲惨な混雑の光景である、彼等の多くは外套を被り、或は杖をつき、或は腕を釣り、或は頭を縛し、或は朋輩の肩に倚り悄然として暗黒の中を無言で通過する際の憐れさよ。一方に於て病院は絶大の混雑を來して殆ど全夜を患者の始末に費し、しかも翌朝に至つて猶前夜の夕食を給するに至らず、其上患部の處置をさへ終らないのである、氣の毒にも患者は空腹を忍んで其の處置を待ちつゝあるのである、痛苦は止まず、飢渴は治まらず、希望は満たされず、名譽の戦傷者をして尙最大の苦悶を忍ばしむ、戦場の慘は憐なり、雖も未だ之に如かず、恐らくは彼等は其の不幸を天に訴へたであらう。然れ共後方の設備は未だ完全でなかつた、時の兵站軍醫部長山本氏、兵站病院長駒井氏は必死となつてこれが處置に奔走したが何にしても衛生員が軍醫以下五六十名を以つて日々千人以上の患者を取り扱ふのであるから、其手の廻り兼ねるは已むを得ないのであつて、衛生部員の増加と設備の行き届かざる限りは、いかなる努力も其の用を爲さないのである。由來前方の編成並に機關は研究に研究を積んで殆ど完全に近いとなつてゐるが、後方の編成並に機關は當時之に如何にもするこゝが出来なかつた。數十萬を以て相闘ふの戦争に於て、如何なるものが最も適當であるかを從來を知らなかつたが爲めに、如此悲惨なる状況を呈するに至つた、願くば戦後充分なる研究を、改良を望むのである。

第十三 冒險の大夜襲の成功

戦傷者の後送と相前後して、多くの捕虜が我が前を通つた、其の中で傷つけられた者は病院に收容されたが、否らざる者は直に汽車で大連に送られた、此の捕虜の中に大尉が自ら三十人許の兵卒を引率して來つたものがあつた。仔細を聞くに此の大尉の率ひて居る兵卒は己が固有の中隊の兵卒であつて、最も新らしく到着した歐露軍團の内に屬するもので、三塊石山の戦闘で其聯隊は殆ど全滅し、二百名餘の中隊も僅に三十名許りとなつてしまひ、遂に捕虜となつたのである、大尉は高慢らしく語つて居たさうだ、其如何に戦闘の激烈であつたかを想像する事が出来る此の三

塊石山の戦闘云ふのは則ち同月十一日の夜に於ける第四軍の夜襲の一部であつた。抑も斯の如き大兵力を以て一齊に夜襲を行ふ云ふことは、未だ前例のないことで、又恐らくは今後に於てもないであらうと考へらるゝ特殊の戦法である、其方法は若干の豫備を除き、その他の兵力を第一線に展開し相捕ふて前進し各部同時に夜襲を行ふ云ふので、随分危険の方法である、則ち若し敵が此の夜襲を豫め知つて稀薄なる正面の一部を逆襲したならば、全軍は二つに分れて不利の戦闘に終るかも知れないからである、乍併優勢なる敵を迎撃して其企圖を空ふせしめんとするが爲には尋常一様の事では覺束ない、そこで冒險ではあつたが、此の猛烈なる方法を以て一舉に數の膽をひしき、其狼狽に乗じて是を驅逐し、且つ殺傷する方法である、誠に危険なり、雖も軍司令官に是を行ふの決心があつたので初めて困難なる戦闘に於て大捷を博したのである。

第十四 クロバトキンに對する批評

此の戦闘の後ちクロバトキンに對する批評が新聞に多く掲げられた、是は彼自ら招いたのである、何となれば彼は此戦闘を爲すべく奉天を出發した時に宣言を發表して、其舌根の乾かない内に、六七萬の大兵を失ふて敗走したからである。批評の重なるものはクロバトキンは軍政家であつて戦闘を指揮する司令官ではない、彼は事を行ふに餘りに大事を取り過ぎる、夫であるから、イザミ云ふ時機に何時でも躊躇して遂に退却のみを行ふのである、彼の高慢なる宣言は今何處にあるや云ふのである。此批評は眞に適中して居る、實際戦争は絶對に危険なことは行はない云ふのであつたならば、昔から寡を以て衆を撃ち得ない道理である。危険な方法でも斷々乎たる決心と充分なる協力を以てしたならば、敵は其威力に壓せられて、我危険は安全なるのである、唯將帥の明不明は則ち此危険なる方法は充分なる此の明を備へられてあつたからである、十一日の總夜襲は明なる證據である。

第十五 地下の冬營

沙河の會戰が繼續しながらも漸次に銃砲火が衰へ、兩軍は沙河を挟んで各々工事を始めた、初めは散兵壕や掩堡であつたものが、漸次に堡壘や砲臺に變化し、又此堡壘砲臺は掩堡や對壕に依つて連絡され、遂に一連の堡壘系を作つた。其の前には鐵條網や、鹿柴を設け、其の後には坑道や、交通壕が設けられ工事は日を逐ふて益々増加する、最初一線であつたものが追々二線にもなり、茲に穴居の冬營をしなければならんやうになつて、小隊、中隊は勿論聯隊本部や旅團司令部迄が穴の中に生活し、此の穴は更に穴の道によつて連絡されて居る云ふ、宛も蟻の世界の様な有様を實現して、古今未曾有の不思議な冬營をやるやうになつたのである。

第十六 木炭の城廓

之に反して後方では、沙河會戰後暫くして冬營の準備を始めた、鐵道提理部の大なる努力に依つて遼陽煙臺間の軌道を改修し、十月二十日頃には汽車は煙臺に通ずる様になつた、間もなく煙臺炭坑にも開通する様になつて、輸送の便利は益々良くなつた。そこで糧秣を送るに同時に、薪炭をも輸送して煙臺に蓄積した、此木炭の調達には時の兵站經理部長赤尾清穆氏の大なる敏腕で、第十師團、第五及第七補助輪卒隊の大なる努力によつて何百萬斤云ふ非常なる大量の木炭を、遼陽の兵站監部附近に集積した、赤尾氏は商人を使ふて滿洲の各地から木炭を集めたのであるが、補助輪卒隊は七嶺子附近の山林を伐採して是を製造したもので、此事業は九月の末頃から始まつて十一月の末に至つたなかゝ困難な作業であつたが、之に依つて三百萬斤以上の木炭を得た、而して第五補助輪卒隊の方は此作業が終つた後も七嶺子の傍なる潘家爐云ふ處に於て木炭の製造を行ふた、其の量もなかゝ大なるものであつて、零點下何十度云ふ極寒の冬を是等の薪炭に依つて經過し得た云ふことに對して、野戰隊及兵站諸隊の凡べてのものが感謝し

なければならん、否充分に感謝したであらう。考へて見るに此薪炭の量は非常なるものであつた、高さ二丈にも積み上げ一個の儼然たる城廓のやうな形をなして人目を驚すばかりであつた。

遼陽の戰鬪後滿洲軍倉庫云ふものが出來て、長は二等王計正日匹信亮氏であつた、最初柳樹屯に大倉庫が建築されて間もなく、營口に其の支庫が設けられ、軍需品の總てが先づ此の二つの倉庫に集積されたのである。處が、遼陽が今は全軍の策源地のやうになつて滿洲軍總司令部を初めとし、各軍の兵站部、遼東守備軍司令部及野戰鐵道提理部の出張所も此處に位置し、益々樞要の土地となつたから、沙河會戰の頃から其の支庫を遼陽に置く様になつた、そこで遼陽停車場の東南方に大なる倉庫を建築して此處に一旦糧秣を集積した上で、各軍の兵站倉庫若しくは兵站司令部に分配する云ふことになり、停車場附近は更に一層の繁華を加ふることになつた。

第二十八章 旅順攻撃とバルチック艦隊

第一 第三回旅順總攻撃

滿洲軍の主力が沙河附近で大會戰をやつて居つた最中に旅順攻圍軍は曾て失敗した攻撃の不成功を今度こそは充分に取り返へさんとして、着々諸種の作業に着手した。其の内の著しき事は十月十三日に旅順要塞の水源を發見して是を杜絶したこと、同十六日に鉢巻山砲臺を占領した事であつた。此水源杜絶には旅順の守兵も餘程弱つたらしかつた、それから漸次攻撃作業を進め同二十六日から總攻撃を初め、二十七、八、九日に砲撃を繼續した上で、同じく三十日に愈々總攻撃を初めた、之より先、此攻圍軍には徒歩砲兵三箇聯隊の持つて居つた加農や榴彈砲の外に、二十八日知の海岸砲十二門を、海軍陸戰隊の使用する大口徑の海軍砲を攻撃正面に備へ付け、是等の諸砲を一時に發射して、しかも三日も經過したのであるから、今は歩兵を以て突撃しても充分敵壘を奪取することが出来る云ふので、此日

の午後一時を期し、歩兵の突撃を實行した、其の結果、第一師團及第九師團の一部が松樹山、二龍山及東鷄冠山北砲臺の外岸頂を占領し、第九師團の他の一部は一戸少將が自ら指揮をしてP砲臺を占領した。第十一師團の方は東鷄冠山の西北にある瘤山堡壘を占領した、併し乍ら遂に敵壘の重なるものを奪取することが出来なくして、此の攻撃は再び中止するの已むを得ざるに至つた、誠に残念な事であるが、此突撃に於て歩兵の二三萬を損傷して、僅にP砲臺と瘤山を得た許りである。

第二 失敗を重ねたる原因

旅順の總攻撃は三度失敗に終つた。第一回は初めから強襲を以て一氣に之を取つて仕舞ふ云ふ計畫であつて、之は勿論失敗した。第二回は砲撃を充分にし、更に突撃を以て之を取らう云ふ計畫であつて、是も又失敗した。そこで此度は海軍砲や海岸砲を据へ付けて、火砲の大々の威力を以て敵の堡壘を破壊し、猶砲撃を充分に續けて其の上で突撃をしよう云ふ計畫であつて、是もたうとう失敗に終つた。抑も近世築城の素質を備へたる完全なる要塞を歩兵の突撃を以て取らう云ふことは大々の誤謬であつた。最初は我々も強襲を以てもう一步、云ひ換ゆれば、我國の大和魂のみを以て如何なるものにも打勝つことが出来る云ふ考へを以て居つたが、第一回の總攻撃の不成功は我々をして歴史の上に反省せしめた、即ち佛蘭西のポーバンが唱へたやうに、先づ砲臺を構築し其後更に平行壕を掘り、其の終りには坑道を穿つて、外岸壁を破壊する、夫れから外壕を占領して、次に胸壁を爆發し、遂に總てを占領する云ふ方法でなくてはならん、此の方法に依るは、殆んど歩兵が曝露して突撃する云ふやうなことはないのである。此の事は戦例も之を示して居るし、要塞戦術の教科書にも記されてあつて、一大原則として遵奉しなければならぬのである。然るに攻圍軍の參謀部では如何にしたものか、常に突撃の方法を固持して失敗に失敗を重ねるに至つたのは實に遺憾である。我々は要塞戦に於ては正攻法の遵守すべきものである云ふ教訓を得たと同時に、又次の事をも悟

つた、火砲の威力と、築城の防禦力との比較に於て、今日迄は前者を過重視して居つた云ふ事である。近世の理論では防禦力は到底攻撃力に及ばない云ふことであるが、之は火砲の精度を完全無缺のものとし、彈丸の所持数を無限大とした理論であつて、實際ではないのである。然るに攻圍軍の參謀部も我々と同じ誤謬に陥つて、砲撃を充分にし、大口徑の火砲さへ用ゆれば攻撃力即ち破壊力は充分である云ふ考へた、是が失敗の第二の原因である。

第三 施すべき目下の對策

八月十日に旅順沖で敵艦を散亂せしめ、同じく十四日對馬沖で浦鹽艦隊を撃破して以來、黃海及日本海の制海權は全く日本のものとなつて、海戦は茲に一段落を告げ、今や僅に旅順港内に潜伏して居る四五艘が残つて居る許りである。そこで露國の海軍省ではバルチック海の戦艦を集めて第二の太平洋艦隊を編成し之を東洋に送つて其制海權を恢復することを圖つた。此の艦隊は十月初め頃オデッサを出發してバルチック海から、北海に進航した、其航速は海里數に依つて計算するに、明治三十八年の一月頃には東洋に到着するであらう云ふことを基礎として、茲に一個の大なる心配が起つた。即ち若し此の新太平洋艦隊が東洋に到着して、我海軍の雌雄を争ふた結果が有利であれば好いが、萬一不利であつたならば、滿洲軍は海上の連絡が絶へて其生存に大なる困難を來すのみならず補充並に増援兵を送る事が出来なくなり、或は從來の戦捷を無にするかも知れん云ふので、大に一般の心配を増加した、之がため今日施すべき策は一刻も早く旅順の敵を片付け、其の兵力を沙河方面に増加して一舉に敵軍を撃ち全滅に至らしむる云ふことである。そこで旅順の攻撃を十月二十六日からやつて見たが、又々失敗したので、這度は愈々一箇師團を増加してさうでもさうでも旅順を陥れる云ふ計畫で、第七師團を大阪から乗船出發せしめた、是で我常備兵は其の全部を盡したのである。

第四 無力極まる公法

バルチック艦隊が進航中に自ら惹起したる事件は其東洋到着の時日を遅延せしめ、茲に我國民の爲に以上に述べたやうな心配の一部分を少しく和らげた。此の事件は所謂ハル事件として八ヶ間しく世間に物議を惹起したものであつた、即ち此艦隊が北海航行中、ハル港附近で英國の漁船を撃沈したこゝから起つて、英國の人民は非常に激昂し、其の内閣も又八ヶ間しく露國政府に詰問した、其結果バルチック艦隊は一旦スペインのビゴ港に抑留されて、佛蘭西が英露の間に入つて調停した結果、遂に仲裁々判に付するこゝ云ふこゝになつて其落著を告げた。此漁船撃沈の事實の起つたのは十月二十日であつた、此事に關して一般に露國艦隊の暴戾を、輕卒を唱へ誹謗の聲が高かつたのである。是がバルチック艦隊の傍若無人なる舉動の初めであつて、是から至る處中立港に立ち寄り多量の石炭や軍需品を搭載して、萬國公法上の議論を高めた、バルチック艦隊は斯様な事には一向頓著せず、づんづん其の航程を急いだ、萬國公法なるものは眞に斯の如き無力、且つ無益の空文に過ぎないのである。此艦隊が一港に於て炭水其の他の軍需品の供給を受けた時に、日本政府がスペイン政府に其の不法を詰つた、處が該政府から他の諸國も該艦隊に炭水其の他を給したから我政府も之を給したとの回答で、我抗議は一撃の下に跳ね返されてしまつた、實に公法云ふものは斯様な無効力のものであるこゝを知つた、それと同時に我政府の幼稚なる外交を世間に曝露してしまつた、此の様な反古に等しい公法なき云ふものを正直に守り、常に之が爲に齷齪して居る我政府の馬鹿らしさ加減がはたで見えるもの氣の毒である、つまらぬ抗議をするよりも我國でもさしづ武器や、彈藥や、其他戦争に必要なものを中立國から買ふがよい、或は中立國を使ふて大に露國の探偵をやるもよい、然るにこんなこゝは外國に氣兼ねして嫁が姑に仕へる様にやつて居る、實に沙汰の限りである。

第五 バルチック艦隊の進航

バルチック艦隊はハル事件の爲に暫く西班牙の海岸に抑留せられたが、二三の將校を陸地の上せて仲裁々判の審問を受けしめられたばかりで、其の他のものは依然として其進航を続け、ジブラルタルで此艦隊は二つに分れ、一つは亞弗利加の西海岸を喜望峰に向ひ航進し、他は地中海をスエズに向つて航進した、行々各處の領海に入つて中立を侵害しながら、悠々其大膽なる計畫を實行しつゝあつた、此艦隊の行動は一々ロイテル其他各地の電報に依つて世界に報道せられ、十一月の末には最早其全航海の半までに達し、我海軍當局者は是が爲に大なる憂慮を抱いた。我艦隊は既に敵の二艦隊を撃破したこゝは云へ、猶旅順港内に四五隻の敵艦が残つて居るのみならず、我艦隊も既に二艘の戦闘艦を失ひ、且つ久しき海上勤務の爲に若干の損傷を被て居るので、一方に於ては速に旅順港内の敵艦を撲滅し、他方に於ては速に艦體を修繕し、少くも一月下旬頃迄に此二つの事を爲し遂げようさ苦心したのである。そこで旅順要塞を陥れ、敵艦を撃沈するため、之が攻略を速にせんこゝを陸軍に迫つた。

第六 第四回旅順總攻撃

此に於て陸軍は此度こそは愈々旅順を占領するこゝ云ふ意氣込を以て、十一月下旬に第四回の總攻撃を實行するの計畫を立てたのである。此攻撃は嘗に第三軍司令官のみならず、滿洲軍總司令官に於ても大々の決心を以て、如何なる犠牲を拂ふとも必ず是を略取しなければ止まないとの考で、愈々第七師團の全部を増加し、十一月二十六日から強襲的總攻撃を始めた、其部署は略ぼ第三回の總攻撃に同じものであるが、第七師團を總豫備とし、其の一部を第一師團に加へて松樹山以西の地區に向はしめた、攻撃の第二日には中村少將の率ゆる決死の旅團を水師營から旅順本街道上を突入せしめた、併し乍ら松樹山、二龍山は勿論、盤龍山及雞冠山方面に於ても外岸壁まで進んだ後、此處に阻止

され、特別任務の旅團は本街道附近に在る補備砲臺のために、又同じく阻止せられ、至る處累々たる死屍を以て滿たさるゝばかりで、攻撃の結果は少しも得る處なく、此儘に過ぎば殆ど全滅に歸するの大不幸に陥るやも計り得なかつたのである。其處で軍司令官は第九師團長の意見を採用して攻撃を中止した。併し乍らせめてもこの旅團港内を敵制し得るに唱へられてあつた標高二百三の高地を占領して、港内の敵艦を砲撃せん、新鋭なる第七師團を此方面に向はしめ、連續七晝夜の激戦の後、十二月五日漸く此高地を占領し、茲に此攻撃を全く中止した。

第七 將帥の冷靜なる頭惱

沙河方面の彼我兩軍は今や全く沈靜になつて、折々交はず歩哨の銃聲より外に聞へなくなり、専ら冬營の準備に著手するのみで、情況の變化は全くなくなつたので、人々の注意は沙河の方面を去つて旅順方面に向ひ、其の陥落を今日か明日かを待受けつゝあつた間に、十一月二十六日から總攻撃の計畫を聞いて、しかも其の兵力の増加も、一般の意氣込み、工事の進歩に依つて這度こそは假令全部の陥落までは行はずとも、望臺一帯の高地位は取れそうなのだ、毎日首を延ばして情報の來るのを待ち受けて居つたが、意外にも情況が頗る困難でナカク、此の高地が取れそうもない許りでなく、特別任務の旅團さへも其效を奏しなかつた爲め、一同の落膽は一通りでなかつたが、情況の進むに従つて漸く二百三高地を占領したこゝによつて此落膽を慰めるこゝが出来た。旅順の攻撃に付ては我々が是迄屢々言つたように、歩兵の突撃を以て取らうと云ふことは頗る困難なるは明瞭である、併し乍ら目下の形勢上バルチツク艦隊は將に來らんとする、我軍艦は速に修繕をしなければならん、沙河方面に大なる兵力を要すると云ふ様な大なる理由のこゝに、旅順を一刻も早く占領しなければならんので、大に此攻撃を急ぎ、又もや突撃を以て正面の砲臺を取らうと云ふのは無理もない次第であるが、併し乍ら旅順要塞の攻撃法に付ては是より外になかつたのであろう。

か。予の意見を以てすれば攻撃の時機は此の時であらねばならんとした處で、最も攻撃に困難なる則ち防禦力の最も強き望臺一帯の正面に向つて強ちに其全力を費さずとも、此の正面は寧ろ牽制的に幾分の兵力を以て陽攻をなし、其の主力を東西太陽溝及二〇三高地方面に注で、敵の防禦力の少ない地點を先づ占領し、防禦線の左翼端を包圍するやうに運動をして遂次正面即ち望臺の方に迫つたならば、今少しく容易に攻撃するこゝも出来、且つ假令望臺一帯の正面を取るこゝが出来ないとした處で、旅順の内部を敵制して多大の損害を敵の軍艦並に建築物に加ふるこゝが出来、第七師團の殆ど全部を盡して迄も二〇三高地の占領に従事しなければならん云ふやうな、大困難なくして此高地を占め得たであらう。抑も陣地に據る敵を攻撃するには、其の一翼を包圍しなければならん云ふ大原則があるのに、何故に此原則に違はずして無益に正面攻撃のみを行ふたのであろうか、其結果は遂に大なる失敗を以て終つた、又中村少將の率ゆる突撃縱隊も、是も又正面方向から行ふたのであろうか、元來突撃縱隊なるものは奇襲の方法であつて、所謂からめての方から攻め入る云ふのが正當であるのに、慙々敵の防禦の完全した本街道方向から突進せしめたのは頗る不審すべきである。予を以て是を見れば突撃縱隊は東西太陽溝方向に用ひなければならんのである、然るに當時は此策に出てずして遂に旅團長以下數多の死傷を作つたばかりで、聊かの效果をも奏し得なかつたのは誠に残念である。今回の突撃を概括して論じたならば、四圍の形勢上焦眉の急に迫まれて、殆ど發狂の體で凡てのこゝをやつた様な有様である、此に於て大軍の將帥並に參謀官なきと云ふものは、如何なる場合に際して、冷靜なる頭腦を以て適當なる判斷と決心により極めて沈著に事を處理しなければならんこゝを明瞭に知り得るのである。

第八 敵艦隊の斷末魔

攻圍軍は漸く二〇三高地を得たので僅に勢を得て此に觀測所を設け、十二月五日から敵の軍艦に向つて二十八珊瑚

彈砲の射撃を始めた、是等の軍艦は既に殆ど動けないようになってゐるので、砲弾は著々之に命中し、多くは沈没して仕舞つた、只僅に「セバストポリ」は旅順港外に逃げ出て、黄金山下に停泊したが、之も又海軍の水雷襲撃に依つて十二月十一、十二、十三、十四日の夜連続四回の破壊に依つて全く海底に沈降して其の用を爲さなくなつて仕舞つた、其他若干の驅逐艇や、砲艦も悉く破壊せられ、往昔二十萬噸の大海軍力を以つて居つた敵の大平洋艦隊も哀れ今は全く烏有に歸し、波から弄はるゝ櫓や、斜めになつた烟突やのなげなげな様になつてしまつた、大艦隊の末路も腑甲斐なき軍人等の爲に此の姿になつて、今や海底に嘆いて居るであらうが、青白き月は悽愴なる光を放つて氣の毒そうに此艦隊の残りの切れ／＼を眺めて居る。

二月八日以来我艦隊の嘆稱すべき行動は遂に未だ一年ならずして殆ど同等な敵艦隊を全滅して今は海戦の一段落を終り、揚々として佐世保に引揚けた、我が海軍軍人の得意は想像に餘りあるのである。併し乍ら此全滅の一部は陸軍の大なる努力に依つて遂げられたのであることを忘れてはならん、同時に將に來るべき敵の第二太平洋艦隊を充分に撃破して、黄海の海上権を保持することに於て更に大なる奮勵を望まなければならぬ。

第二十九章 新年と旅順開城

第一 正月前の餅搗き

旅順攻圍軍は既に港内の軍艦を撃破し、又市街を砲撃して大に敵を苦しめた、旅順の住民なごは其住屋に居るこゝが出来なくて谷の底や山の陰に避けた云ふことである。同時に此度こそは工兵を増加して坑道作業を始め、壕や胸壁の爆發をなし、逐次攻撃して二十八日には二龍山砲臺を占領し、三十一日には松樹山砲臺を占領するに至つた。

明治三十七年も漸く終りを告げて明治三十八年の春を迎へんとして居る、一般に日本の風習に基づいて五合の糶、若干の酒、二三の副食物の材料が支給され、是で所謂正月の雑煮を祝ふ云ふことになるので、至る處で道具が揃はないにも拘はらず、餅搗を始めた。野戦隊などでは支那流の糶に糶を入れて丸太で搗いた云ふ話もあつた。兎に角斯様にして敵と相對峙しながらも新年を迎ふる心持になつたのである。併し乍ら考へて見るに此一事でも今回の戦争に於て諸般の準備が完全して居つて能く痒き處に手の届く程餘裕があつたのである、内地では日清戦役の経験からして、食物が不自由であらうと心配して居つた様であるが、此度の戦争では給與云ふ點に付ては驚くべく完全であつた。初めの程は副食物として牛肉、雞肉等の罐詰、福神漬、乾物、野菜等を送つたが、罐詰も諸種のものになつて、鮭、鱒、しび、鮎、鰻、昆布、鯖等のものもあり。乾物、野菜も切干大根、椎茸、干瓢、高野豆腐、干葱、人蔘、連根、甘藷、馬鈴薯等のものがあつて、大なる不自由を感じるに至らなかつた。此の事實を郷里に告げやうとして例の戦地で作つた餅を極く薄く切り状袋の中に入れ郵便で送つた兵卒もあつた。

第二 國民の同情

給與の完全なることは當に食物のみならず、被服に於てもそうであつた、一般に防寒に關しては非常に早くから準備されて、九月末頃に既に防寒被服が戦地に到着し、其の分配に著手した、第五師團などは冬服の到着が遅くれ、夏服の上に防寒外套を着て、冬服の到着を待つた位である。此防寒被服の一组は外套、毛皮胴着、毛リヤス襯衣、同袴下、同靴下、同手袋、半靴下、同覆面の七種で、外套には別に頭巾及び手套が附屬されてあつた、此の外に軍若くは師團に依つては、藁靴、鳥拉靴等のものも支給された、此に又防寒に關して記憶すべき一事は、國民が滿洲の寒氣と戦ふ將卒に大なる同情を寄せ毛布を寄贈した事である。之は始め僅かな人の發起であつたが、漸次全國に擴がり、

殆き之を寄贈しなければならん云ふ様な形になり、各縣で競ふて寄贈した結果が、遂に何十萬枚となり殆き戦地に在るもの一人に付き一枚を得る云ふ様になつて此の深き國民の同情に對し大なる満足を以て感謝したのである。古來斯様な國民の同情によつて戦争した軍隊は何處にもないのである。クリミア戦争のナイチンゲールの奔走の如きは、唯個人の同情に止まつて居るのである。我國の舉國一致云ふ事が茲に於て世界に輝ひた一個の事實として認められたのである。

日清戦争の時でも、國民が諸種の物品を軍隊に送つた事は事實であるが、今回の戦争に於ても續々として之等の事が起つたので之がため恤兵部云ふものが置かれた、此の恤兵部へ寄贈する金銭は頗る多額なものであつて、恤兵部は之等の金銭に依つて諸種のものを買ふて戦地に送つた。其の品物は扇子、書簡紙入り封筒を始めとし、繪葉書、落花生、氷砂糖、岩おこし、ハンカチーフ、封緘繪葉書、メリヤス靴下云ふ様なものが凡ての者に分配された、此外内地には國民援護會とか、愛國婦人會とか、軍人遺族救護會とか云ふような諸種の會が起つて、之等に多くの金を寄附して遺族を救助するとか、或は軍人出征後の家族の生計を助くるとか、或は職業を授くるとか、諸種の事に用ひられ、如何なる方面に於ても此の舉國一致の聲が限なく響き、其の行き渡りたることは亦も日清戦役の比ではない、是でこそ大敵と戦ふて常に勝利を得ることが出来たのである。

第三 攻圍軍の戦闘經過

日本の風習に従ひ戦地に於ても其宿舍の前に門松を立て新年を迎へ、戦争も遂に明治三十八年に跨るこゝとなつた、我々は勝利を以て輝ひた明治三十七年を送つて、今は將に更に一層光輝ある此の戦争を續けるのである。我國開闢以來三千年、未だ曾て今年の如き目出度い年を迎ふる事があつたであらうか。我々は身體を清めて祖國の方に三拜

して、此の稀なる新年を祝ふた、而して此の喜ぶべき新年を更に喜ばしたものは旅順の敵が開城を申込んだこの報道であつた。開城の條件は決定された、明治三十八年一月二日敵は遂に降つた。

旅順攻圍軍の作戦經過は一時秘密にされたが、十月に至つて發表されて、其の以後のものも逐次發表された。

旅順攻圍軍作戦經過の概要は左の如くである。

五月二十六日 我軍終日劇戦の後南山の敵陣地を奪取す、敵は旅順方向に敗走す。

五月二十七日 中村少將の率ゆる一支隊は進んで南關嶺を占領す、軍の主力は南山附近の諸部落に宿營し、前進準備に従事す。

午前十時頃迄に三十里堡停車場附近の敵は同停車場を焼き旅順方向に遁る。

五月二十八日 中村支隊に屬する一部隊進んで柳樹屯を占領す、該地に在る砲兵及露國建築物の一部は露營の爲破壊せられ、棧橋も又其一局部を破壊せらる、同地に於て火砲四門、同彈藥若干、鐵道用有蓋貨車五、無蓋貨車四十一を鹵獲す。

五月二十九日 軍の各隊は前進し、三十里堡西方約一里の高地線に達す。

五月三十日 軍は更に進んで安子山より臺子山に亘る線を占領す。我に對する敵は双臺溝、安子嶺の線に在り、此日までに得たる青泥窪及柳樹屯の情況左の如し。

一、青泥窪には完全なる倉庫、兵營等百餘棟あり電信局、停車場共に無事、無蓋貨車約三百、有蓋貨車約百三十、棧橋用解舟五十、石炭約二千噸、枕木約二萬本の戦利あり、但し附近鐵道の小橋梁は總て破壊せられあり。

船渠及棧橋完全なり、但し大棧橋破壊せられて其の一部海中に沈み、船渠口に小汽船數艘沈めあり。
二、柳樹屯棧橋の橋脚破壊せらる、但し現地の木材を以て修理し得べく、之に屬せる起重機燒却せらる。

六月一日 旅順方面の敵は依然有力なる部隊を以て双臺溝分水嶺の附近を占領し、其斥候絶へず我前面に近く徘徊し、時々我哨兵に向て狙撃し、彼我監視部隊相距るこゝ僅に一千米突に過ぎず。又敵は往々支那服を着し支那人に擬して我に近づき、突然武器を取り我哨兵を射撃す。要するに旅順の敵は目下南下の徴ある其北方の友軍を策應し以て動作せんとするものゝ如し。

六月六日 敵は石山溝東側標高178高地の東北麓に數多の防禦工事を始む。

六月十三日 有力なる敵の偵察隊我陣地に來襲し、彼我射撃を交換し、敵兵薄暮退却す。

六月十四日 敵の砲艦二隻、戦艦一隻、黒石礁附近に來り我陣地に向ひ數發の砲撃を爲し、約四十分の後西に向つて去る。

此日偵察の結果、安子山嶺及其南方高地には若干の工事あるも、黄泥川大上(下)屯西方高地には工事らしきものを見ず、又敵の死體に依り石溝附近の敵は狙撃歩兵第五聯隊にして、猪圈子溝附近のものは同第二十八聯隊なるこゝを確むるを得たり。

六月十八日 午後四時五十分敵の軍艦三隻、驅逐艦八隻、小平島附近に現れ、我陣地の左翼に向ひ一發の砲弾を送り、間もなく我艦艇と砲戦、約三十分の後旅順港内に退却す。

双臺溝附近の工事は益々増加し、且つ探海燈を設置し、其近海及我陣地を探照す。

歪頭山及双頂山の占領

六月二十六日 右縦隊の左翼は盤道西方及南方高地に向ひ同地の敵を攻撃して之を占領し、左縦隊は三隊に區分せられ、右翼隊は亂泥橋東方高地に向ひ大なる抵抗なく同地を占領し、中央隊は亂泥橋南方標高368及黄泥川大上屯北方高地に向ひ、途中若干の敵を驅逐し、午後一時頃より368の高地に據れる敵(歩兵約一大隊、機關砲及砲若干)を攻撃して稍々強なる抵抗に遇ひしも、午後五時頃全く同高地を占領せり。左翼隊は双頂山に向

ひ若干の敵を撃退して同高地を占領せり。是に於て軍の第一線は右翼安子山より、盤道西方約一吉羅米突に在る高地亂泥橋東方及南方の高地を経て双頂山に亘る線に在り。368の高地(以下此高地を劍山と稱す)歪頭山及小平島の占領は我軍の爲に大連灣の掩護を確實ならしめるに共に、彼我從來の位置を轉倒し、敵の陣地及其背後の状態を知るの便を得たり。此戦闘に於て戦利品の主なるものは六珊米突速射砲二門、砲彈約二百なり。

六月三十日 双臺溝方面の敵情異なるこゝなし、安子嶺方面に在りては同高地南方一帯の稜線より、其東南約三百吉羅米突の山嶺附近に互り、老坐山方面に於ては王家店南北の高地に互り敵の防禦工事あり。

七月三日

盤道及黄泥川大上屯方面に於ける敵の來襲。

右縦隊

右縦隊右翼隊方面に於ては敵情變りなし、左翼隊方面に於ては敵斥候の出沒頻繁を加へ、其動作稍々活氣を帯び來れり。

左縦隊

唯敵斥候の出沒を見るのみ。

中央隊方面

午後一時頃より二時に互り、敵の砲兵約八門王家店南方に現れ、歩兵少くも二中隊劍山方面の我陣地に向ひ攻撃し來る。當方面の守備たる歩兵隊の大部、此敵の射撃を交換す。

午後四時二十分頃同隊の一部に對する敵は増加隊を得て前進を始む、第一線の歩、砲兵、機關砲隊協力して之を撃退す。

午後五時二十分頃敵砲約四門大石洞西方高地附近に布陣し、中央隊の第一線に向て射撃を雨下す、午後七時に

至り全正面の敵兵逐次大白山方向に退却し、其砲兵のみ依然其陣地に在り。午後八時三十分敵兵約一大隊軍樂を奏し、大白山方向より攻撃前進す。我第一線は僅に陣地兩翼の守備兵を残し、其の餘を以て逆襲に轉ず、敵兵我喊聲に驚き退却す。

此日我中央隊に來襲せる敵は歩兵約二大隊、砲約十二門、機關砲二三門にして、此夜大白山東方一帯の高地より、王家店東北方高地に互る線に停止せり。

左翼隊方面

午前五時三十分老坐山北方一帯の高地に在りし我前哨は敵兵前進の微を認め、同六時に至り敵兵約二小隊標高195の高地に、同一中隊標高177附近の高地に出現し、我兵ミ射撃を交ゆ、午後一時より二時に亘り敵兵漸次増加す。我前哨部隊 本陣地に歸還す。午後三時五十分敵兵約二中隊密集隊形を以て老座山北方鞍部を下り、前進を始む、標高312附近にある我砲兵中隊之を急射す。敵兵潰亂して退却す。午後六時半敵兵約一大隊老坐山南方高地に散開し、射撃を始む、同四十五分少くも四門の敵砲、同山の北方鞍部に出現し、我左翼大隊を猛射す。我砲兵之に應射し、敵砲を沈黙せしむ。此夜敵兵晝間の位置を固守して動かす。

七月四日

右縦隊

午後五時敵の歩兵約一中隊盆溝北方約千米突の高地に現れ、五岔營子及其の北方に在る我監視部隊に向ひ發射す。我兵之に應じ、午前九時に至る。同時敵兵約二中隊盆溝村内より前進して其南方約二千米突の高地を占領し、我陣地の左翼に向て射撃を開始し、同時同村北方高地に在りし敵兵約一中隊も亦、盤道西方高地の我陣地向ひて急射を加ふ。我兵之に應射し、銃戰最も熾なり九時四十分左縦隊の右翼隊に屬する砲兵盆溝南方高地の敵を砲撃す。敵兵高地稜線の後方に匿れ、爾後前進せず。此の如くにして遂に日没に至る。

午後十一時半敵の一部隊牧城驛南溝方向より盤道西方の我陣地向ひ夜襲し來りしも、我兵直に之を撃退す。

左縦隊

右翼隊方面

午前七時半敵の歩兵一中隊南盆溝東方高地に、他の一中隊同村東南約千五百米突の高地に現れ、工事を始む。乃ち我砲兵大隊（一中隊缺）之に向ひ急射す。敵兵忽ち稜線の後方に匿る、同時安子嶺附近に在る敵砲約四門我砲兵に向て砲火を開始す。我砲兵遮蔽の位置に轉し、主として敵の歩兵を射撃す。爾後情況の變化なく夜に至る。此日當面に在りし敵の火砲は新式速射砲少くも四門、舊式砲六門なりしが如し。

中央隊方面

午前一時より二時に亘り一二中隊の敵兵劍山に向ひ兩回突撃を試みしも我兵の爲撃退せらる。午前六時敵の歩兵一大隊半、劍山及我陣地の左翼（劍山の東南約三千米突に在る高地）に向ひ前進す。我第一線の歩、砲兵急射を以て其の前進を阻碍す。既にして王家店西方鞍部にある敵砲約八門我に向ひて發射す。午前七時當方面の敵は歩兵約三大隊に増加し、我防禦線の前八百乃至千米突の地點に散開し、我第一線ミ射撃を交換す。其の砲兵は前日の位置より劍山及我砲兵陣地を猛射す。同三十分敵の歩兵約二中隊大石洞方面より前進し來る。依て午前八時我豫備隊は西部猪圈子溝に向ひ前進す。

午前十一時に至る間敵兵屢々前進を企てしも、我兵の猛烈なる射撃に支へられ、終に其目的を達せずして止むたり。正午頃我前面の敵の兵力約七大隊半に上り、劍山西方に尙ほ約一聯隊の敵兵あり。

午後一時二十分劍山東麓に在りし我砲兵二中隊西部猪圈子溝西南約千五百米突の高地に陣地を變換し、敵歩兵火の損害を避く、午後三時五十分敵の砲兵再び劍山を猛射し、其歩兵は屢々前進を企てしも、同地守備隊の強抗なる抵抗に遇ひ、終に其目的を達すること能ず、然れども王家店西南方毛道溝東方高地、並に安子嶺南側に在

りし敵の砲兵は其射距離六千米突に達し、其曳火射撃の威力、精度共に猛烈を極め、我砲兵は甚しく苦戦し、又高地上に在る我散兵も其位置を保守するに困難なるに至れり、加之中央隊前面の敵は目下歩兵約十大隊に増加し、加ふるに敵の艦隊現出して我左翼に向けて砲撃を爲すに至り、戦況轉た苦し。

乃ち午後六時豫備たる歩兵を鐘家屯附近に進め、左縦隊長の命令に屬せられ、又目下戰場に到着しある重砲三中隊を盤道附近に、同二中隊を黄泥川大上屯屯東方に進め、各陣地を占領し、以て中央隊の戦鬪を援け、海軍陸戰重砲隊は南洲河口附近に陣地を占め戦勢を張る。

此夜敵は戦線にありて夜を徹し、終夜銃聲止まず。午後十一時頃敵未詳の敵兵劍山を襲撃せしも我兵之を撃退す。

左翼隊方面

午後六時頃我砲兵老坐山北方鞍部敵の砲兵陣地に向けて砲火を開始す。敵は二三回應射して後沈黙す。然れども其歩兵は同山北方一帯の高地稜線に散開して我第一線を猛射す。

午前十一時半敵の歩兵約一大隊西方より老坐山に向ひ前進す。仍て我豫備隊を第一線に増加す。午後三時頃敵兵漸次増加し、戦勢稍々活氣を呈す。五時頃老坐山北側に在る砲兵も亦射撃を始め、彼我の銃、砲聲甚だ熾なり。午後六時敵艦數隻近海に現出し、我陣地を射撃す。我兵苦戦す、然れども敵の歩兵は敢て高地を降り前進し來らず、其兵力約三大隊なり。

七月五日

右縦隊

午前二時半敵の歩兵前日の位置より前進を初め、盤道西方高地に在る我陣地前約五十米突の地點まで近逼せしも我守備兵之を撃退す。天明に至り敵は再び攻撃を試みしも、其目的を達するに能はずして止む。午前八時

敵の銃火漸く緩む。九時頃に至り逐次退却を始め、偏右棚子及溝口東北方高地に出没し、午後一時以後終に其の影を失す。

左縦隊

右翼隊の方面に於ては特に記すべきものなし。

中央隊方面

午前二時半敵の歩兵一部隊我劍山守備たる歩兵二中隊に向ひ正面及側面より突撃し來る。我兵格闘して之を撃退す。午前六時三十分頃より敵兵退却を初め、午前十時に至り一部は大白山一帯の高地に停止して工事を初め、大部は陸續四方に退却せり。

午前十時半我歩兵一小隊劍山西南に在る舊小哨の位置を恢復せんとして前進し、敵の十字火に陥り、小隊長負傷し、遂に其目的を達する能はずして還る。

午前十時四十分王家店南方高地に在る敵の砲兵我第一線殊に劍山に向つて射撃を開始し、約一時間に及ぶ、爾後緩徐なる速度を以て時々我陣地内を射撃せり。

左翼隊方面

此日朝以來老坐山附近に在りし敵の大部退却せしもの如し、同上一帯の高地上に只監視兵あるのみ、而して大白山東方高地上には敵兵工事を施しつゝあり。

午前十一時頃より敵の艦艇五六隻龍王塘沖に現れ、時々双項山及黄泥川大上屯附近の我陣地を砲撃し、午後六時に至る、此の如くにして我軍依然舊陣地、即ち右縦隊は其右翼隊を以て安子山附近より、王家屯南方高地に互る線を、左翼隊を以て五家屯南方高地の南麓附近より、盤道附近に互る線を占領す。中央縦隊は盤道東南側高地より、亂泥橋東南方約二千米突に互り。左縦隊は其右翼隊を以て亂泥橋南方約三千米突の高地より、劍山、

黄泥川、大上屯附近を経て、双頂山に互る線を占領す。敵は双臺溝附近より、圍屏溝東方高地、安子嶺、毛道溝東方高地を経て大白山に互る線にありて彼我相對峙す。

以上三日間の戦闘に於てせし敵の動作も單に偵察戰、又は威嚇的動作にあらざるこゝ明にして、察するに敵は其防禦線を堅固にせんが爲、我軍に奪取せられたる劍山を恢復し、尙爲し得れば青泥窪に於ける我施設を破壊し以て旅順の命脈を永からしめんとするの企圖なりしが如し。

而して我軍が其の攻撃のため得たる幾多の經驗、即ち敵砲の威力及射法、攻撃部署及其實施、夜襲の方法等は蓋し從來我軍を益すること敢て僅少にあらず。

敵の死傷に關しては其の詳細を知る能はずも、諸種の情報を綜合するに、三、四百を下らざるが如し。又其兵力は歩兵約十三、四大隊、砲少くも二十四門、内八門は最新式速射砲なりしが如し。

七月七日 安子嶺方面の敵兵盛に防禦工事を爲し、同夜敵の一小隊我前哨部隊に襲來せしも、我兵直に之を撃退す。

七月八日 安子嶺方面の砲兵我左縦隊の右翼陣地向ひ砲撃す。

七月十日 南山分捕の砲十二門を亂泥橋東方高地に、又海軍重砲六門を西部猪圍子溝西方約千五百米突の地點に配置す。

七月十二日 午前三時頃機關砲を有する敵兵約一中隊、我陣地の左翼に現出し、我に向ひ攻撃を企てしも、我兵之を撃退す。此日敵兵時々我陣地を砲撃す。

七月十七日 敵の歩兵約一中隊我左縦隊中央隊の小哨前四百米突に現出す。我兵之を撃退す、其後敵兵赤十字旗を掲げ來り、其屍體を收む、我兵特に之を許せり。

七月十八日 敵砲我右縦隊の左翼及左縦隊の右翼を砲撃す。

七月二十二日 軍は前面の敵を攻撃するに決し、部署を定めて各部隊に命令せり。

此夜敵の歩兵約一中隊、黄泥川大下屯附近に在る我前哨を襲撃せしも、暫時にして撃退せらる。

七月二十三日 一兵團を右縦隊及左縦隊の中間に於て豫定の陣地に就かしめたり。

雙臺溝、安子嶺附近の戦闘

七月二十六日 軍は豫定の如く運動を始めたも、早朝來の濃霧に妨げられて、午前七時半攻撃を開始す。敵は頑強なる砲戰を交へ、特に其右翼に在りし敵砲兵は正午頃迄盛に砲撃を行へり。我砲兵は地形のため充分なる効果を收むるに至らず、之が爲我歩兵は正午頃既に前進を始めたも、敵の頑強なる抵抗に遮られ、漸く營城子、偏石棚子附近及大白山附近を占領して日没に至れり。同夜戦闘隊形の儘夜を徹す。

七月二十七日 軍は午前六時より再び攻撃を開始し、我砲兵先づ砲火を開き、右縦隊及中央縦隊の大部溝口北方約二千米突の高地に向ひ前進せしに、敵は我砲撃に對しては黙して應ぜず、而して歩兵の近接を見るや、忽ち猛火を以て之を迎へ、且つ傾斜急峻なる高地の斜面を攀登せざるを得ざるがため、數回の攻撃其の効を奏せず頗る苦戦せしが、午後三時頃我砲火の援助に依り、歩兵の一部辛ふじて同高地嶺頂の一部を占領せり。然れども不撓なる歩兵の抵抗も、近傍よりする敵の側射も、日没に至るまで全部の占領を許さず、劇戰奮闘尤も甚し。又左縦隊は主として大白山東方標高195の高地に向ひ攻撃せしが、地形も敵の動作前記の如くなるに於て午後二時半頃より敵の艦艇數隻龍王塘附近に現出し、猛烈に我左翼を砲撃し、爲に前進運動も亦目的を達すること能はずして止むに至れり。依つて夜襲 決し、二十八日午前一時より三面合撃し、翌朝五時に至り遂に之を占領せり。

七月二十八日 拂曉より更に攻撃を續行せしに、各方面の敵兵遂に其頑強なる抵抗力を消耗し、午前九時頃より退却を始め、正午に至り各縦隊全く敵の陣地を奪取す。尋て之を追撃して午後四時過豫定の如く長嶺子、英

各石の線を占領せり。敵の主力は旅順の本防禦線内に退却せしものゝ如し。

双臺溝、安子嶺及大白山附近の敵の陣地は最も峻峻なる地形を利用し、約二箇月の日子を以て築設したる半永久性の堡壘にして、之を據守せし兵力は旅順守兵の殆ど全部を盡し、砲數約六十門其内四門は重砲なるが如し。諸種の情報に依るに二十六、七、八の三日間の戦闘に於て敵の死傷は少くも一千餘名にして、重砲二門、速射砲三門、機關砲三門、其他若干の戦利品あり。

七月二十九日 軍は占領せる線上に停止し、隊伍の整頓、彈藥の補充等に多忙なり、又前面の敵情偵察に従事す。

七月三十日 昧爽軍は夜暗を利用して敵の陣地に近逼し、天明と共に攻撃を開始し、右縦隊は旅順街道以西の地區より、中央縦隊は干大山方向に向ひ、又左縦隊は五家甸以南の地區より前進し、果敢に敵を攻撃し、午前十一時頃全く土城子南方一帯の高地より、大孤山東方高地に互る線を占領す。敵は旅順要塞内に遁入し、爾後要塞の備砲を以て我陣地を探射す。敵は百餘の死屍を戰場に遺棄せり。

軍は此姿勢に在りて直に攻圍作業に著手せり、我軍旅順の市街に距る僅に一里乃至二里なり。

七月三十一日 敵は其重砲を以て我陣地内を射撃すること前日の如し。

八月一日及二日 敵は大口徑砲其他を以て我攻圍線内を射撃し、又時々有力なる敵の來襲ありしも悉く之を撃退せり。

八月三日 大元帥陛下より勅語を賜る。

八月四日 皇后陛下より令旨を賜る。

八月六日 午後四時半頃より敵兵水師營を焼きつゝあり、又數日來敵兵干大山（水師營西北方約三千米突）附

近より、水師營東北方約五百米突の高地附近を経て、八里庄西北約千米突の高地に互り盛に工事を施しつゝあり、大孤山小孤山は依然敵之を占領す。

八月七日 大孤山に在る敵砲六乃至八門は大に我攻撃準備作業を妨害するを以て、軍は先づ此敵を撃攘するに決し、同日午後四時頃より攻城砲の一部を以て大孤山を砲撃し、次で左翼隊をして同地を攻撃せしむ。

左翼隊は午後七時半頃運動を起し、地形の險惡に日没後の暴風雨を冒し、突撃を行ひ、夜半敵陣地の過半を占領す。

八月八日 朝敵兵其陣地の一部を頑守し、同時敵艦數隻鹽廠近く來りて我側背を縦射し、爲に一時我前進を中止す。午後に至り再び攻城砲を以て砲撃を開始し、同時敵艦を砲撃せしむ。暫時にして敵艦港内に遁入す、尋で日没頃我歩兵更に突撃を行ひ、遂に山上の敵を撃退し、大孤山は午後八時半、小孤山は九日午後四時半全く我有に歸せり。敵は諸砲臺より盛に我陣地内を砲撃せり。

八月九日 午後一時半敵歩兵五、六中隊大孤山及小孤山に向ひ襲來す、同時前面の諸砲臺及鹽廠附近海岸に現出せる敵艦腹背より盛に我を砲撃し、爲に我兵頗る苦戦に陥りしも頑強に抵抗し、夕刻全く敵を撃退せり。然れども敵の砲撃尙依然たり、此戦我側背に向てする敵艦の砲撃一時最も我を苦しめたるも、此方面に對したる海軍砲を、我聯合艦隊に依りて充分の掩護を得たり。

我海軍砲を以てせる旅順市街の砲撃意外の効果奏し、去る七日午前十時頃より市内に大火災を起し、午後一時に至りて止み、又本日午前九時四十分頃敵艦「レトウキザン」號に命中して少なからざる混雜を與へ、且つ汽船一隻（約二千噸）を撃沈せり。敵は砲臺及軍艦より火力を同砲に集注しつゝあるも我に損害なし。

八月十日 午前二時頃敵兵東鷄冠山以南の諸砲臺より、火砲は勿論機關砲、小銃等を以て約一時間頗る激しく射撃せり。然れ共其何の故たるを知る能はず。

八月十一日

參謀總長山縣元帥聖旨を奉じ滿洲軍總司令官へ左の訓令を傳ふ。

大元帥陛下は至仁の聖意を以て旅順港要塞内に在る非戦闘員をして成るべく鐵火の慘害を免れしめんことを望ませ給ふ。

右の聖旨に對し貴官は旅順口要塞内に在る婦人、小兒、僧侶、中立國の外交官、觀戰將校にして避難を希望するものを青泥窪に護送し、該地碇泊場司令官に引渡すべし。作戰に影響せるの慮なしと認むるに於ては旅順口要塞内に在る前項以外の非戦闘員をも同じく避難せしむることを得。

八月十二日

午前十時頃より海軍砲を以て旅順西港内に在る敵の戰艦三隻を砲撃す。

八月十三日

五家房附近に在りし約百名の敵兵同日午後同地を焼き、東鷄冠山に退却せり。敵よりする砲撃前日と異なることなし。

八月十四日

右翼隊は夜間運動を起し前面の敵を撃攘し、干大山より小東溝北方高地及隋家屯を経て、隋家屯西方高地に互る線を占領せしも、礮盤溝西南及小東溝東方高地の敵兵堅固に防禦工事を施し、頑強に抵抗せし

ため之を奪取するに至らず、専ら砲兵を以て盛に敵を砲撃し、遂に夜に至る。

八月十五日

右翼隊は前夜最も敵に近迫して相對峙し、本朝來更に砲撃を開始し、午前十一時頃全く礮盤溝南方及小東溝東北高地を占領せり。

八月十六日

午前八時山岡參謀軍使をして聖旨を傳へ且つ勸降狀を交付し、回答を期するに翌日午前十時を以てす。

八月十七日

敵の軍使來り聖旨に出づる非戦闘員の避難並に勸降を拒絶す。

八月十九日

早朝軍は總砲撃を開始し、右翼隊は石板橋北方標高174高地の敵を攻撃し、午後二時半其大部を奪取す。敵の抵抗頗る頑強にして、前後二回我第一線に向ひ逆襲し來りしも、我兵悉く之を撃退せり。

中央軍及左翼隊は相連撃して前進し、此夜八里庄附近より五家房北方高地、王家屯附近を経て小孤山西麓に互る線に達し停止す。

八月二十日

早朝砲撃を繼續し、右翼隊は午後零時半標高174高地の高地を奪取し、續て椅子山方面の敵を攻撃す。

盤龍山東砲臺前並に東鷄冠山北砲臺前には敵兵電流を通せる鐵條網を張り、更に其内方一面に尋常鐵條網を布設しあり。中央及左翼隊は共に其破壊に努む。

前日來我攻城砲並に海軍砲射撃の効果頗る良好にして、敵壘殊に盤龍山東砲臺、東鷄冠山北砲臺及其中間新堡壘共に著しく破壊せり。

八月二十一日

右翼隊は頑強なる敵の抵抗を排除し、遂に大平溝東南約千二百米突の高地より刺免溝北方高地に互る線を占領す。

中央隊は未明盤龍山東砲臺に向ひ突撃を實行せるも、猛烈なる敵の機關砲の射撃と、鐵條網の破壊未だ充分ならざりしに依り、之を攻略するに至らず。

左翼隊は鐵條網を破壊し、未明に乗じ、東鷄冠山北砲臺に向ひ彈雨を冒して猛進し、午前八時頃同砲臺東南約二百米突に在る中間堡壘を奪取せるも、比鄰堡壘よりする側背射のため損害甚だしく、午前九時頃止むを得ず之を棄つるに至れり。

八月二十二日

午前九時中央隊は盤龍山東砲臺に突入し、正午頃其約三分の二を奪取す、然れ共敵兵複郭に據り頑強に抵抗し、且つ同西砲臺より猛烈なる側射を受け、情況頗る慘憺たり。恰も此時中央隊は其豫備隊より

歩兵二中隊を第一線に増加せり。此二中隊は當時の情況西砲臺攻略の必要を認め、盤龍山東砲臺は其の後間もなく、全く之を占領せり此夜敵兵數回我奪取したる兩砲臺に向ひ回復攻撃を試みしも我兵悉く之を撃退せり。

八月二十三日 夜に入り中央及左翼隊相協力して望臺西北高地及東鷄冠山北砲臺に向ひ攻撃し、左翼隊の一部は此夜望臺西北高地に達せしも、諸方向よりする敵機關砲の猛火中に陥り、多大の損害を受け、遂に山麓の死角内に退避するに至れり。

八月二十四日 中央隊は望臺西北方百米突の高地に、左翼隊は望臺及東鷄冠山北砲臺に向ひ更に攻撃を企てしも、終に其目的を達するこゝ能はず。

此日 大元帥陛下より勅語を賜はる。

八月二十七日 午前二時より同四時に互り敵兵雷雨に乘じ各方面共に襲撃を企て、同時盛に其砲火を我陣地内に集注せり、我兵悉く之を撃退す。

八月二十八日 敵兵頻に望臺及其附近高地に防備を爲し同時我占領兩砲臺に向ひ巨砲及野砲を配置す。

此日皇太子殿下より旨を賜ふ。

八月二十九日 以來敵兵我占領兩砲臺に向ひ時々巨砲を以て砲撃す、同夜十一時頃敵兵百餘名盤龍山西砲臺に向ひ襲撃し來る。我兵近く之を引附け急射す。敵兵多くの死傷者を遺棄して逃去せり。我死傷至つて少し。

八月三十一日 各方面共至つて靜肅なり、只敵兵望臺及其西北方高地に防禦工事を施しつゝあり。

九月二日 右翼隊の野砲及海軍砲を以て旅順市街殊に兵營に向ひ數十發の威嚇砲撃を爲せり。敵も亦前日來こ同じく盤龍山二砲臺に向ひ砲弾を送れり。

九月三日 敵兵我盤龍山砲臺に向ひ大小砲彈約二百發を送れり、之が爲我工事大部破壊せらる。

九月四日 敵の砲撃前日來に比し甚だ少し。

九月六日 夜半敵兵約四十右翼隊の右翼正面に來襲し、我兵之を撃退せり。

中央隊方面に在りても同夜半敵兵約六十龍眼北方我作業隊に來襲し、我兵是を撃退せしも、是がため工事の進

歩全く妨害せられ、又盤龍山二砲臺此日劇しき砲撃を受け、工事の大部破壊せられたり。

九月八日 敵兵我盤龍山二砲臺に向ひ緩徐なる砲撃をなせり、又我各方面對壕作業に向ひ時々重砲火を集中し或は夜に乘じ屢々出撃し之を妨害せんミ力むるも、我に著しき損害を受くるこゝなく、作業を進捗しつゝあり。

九月九日 朝以來敵兵頻々我を砲撃せり、龍眼北方敵壘クロバトキン砲臺に對する我坑道は既に壘前五十米突に達し、東鷄冠山砲臺及北砲臺に對するもの約三乃至四百米突に近接せり。

九月十一日 各方面の對壕作業益々進捗し水師營南方に對するもの、今や敵壘前約七十米突に近接す。

敵兵重砲火を以て我作業を妨害する事前日來ミ異なるこゝなし。

九月十二日 敵兵約三十名午前十時三午後二時に於て東鷄冠山北砲臺に向ひつゝある我作業隊に來襲し、大損害を受けて敗走せり。

諸砲臺觀測處及輕氣隊の報告に依れば東鷄冠山砲臺の敵兵我盤龍山東砲臺に向ひ坑道を掘設しつゝあるものゝ如し。

九月十三日 午前三時頃敵兵約七十名大溝附近右翼隊の右翼に來襲し、直に撃退せらる。

九月十五日 午前三時頃少數の敵兵水師營南方クロバトキン砲臺及二龍山東南堡壘に對する各攻略の作業隊に來襲す、我兵直に之を撃退せり。

九月十六日 午前二時三十分頃敵兵約百名龍眼北方の我攻路に向ひ襲撃し來り、十數分間格闘の後我兵之を撃退せり、次で三時頃約四十名の敵兵再び突撃し來りしも我射撃に遇ふて退却せり。

九月十八日 午前三時頃敵兵二三十水師營南方我攻路頭に向ひ襲撃し來り、二箇の爆藥を投じて去れり。

九月十九日 軍は午後一時頃より攻城砲及海軍砲を以て砲撃を開始し、午後六時頃より龍眼北方堡壘(クロバ

トキン砲臺) 水師營南方堡壘、標高174の東南方高地及標高203の高地に向ひ攻撃を開始す。

九月二十日 軍は昨夜來戰鬪を繼續し、拂曉クロバトキン砲臺を占領し、午前九時四十五分より同十一時四十分の間に於て水師營南方に在る四箇の堡壘園を占領せり。

午後六時三十分標高174の東南方高地に在る二堡壘を占領し、退却する敵に向ひ多大の損害を與へたり。

標高203の高地の堡壘に向つては我兵東北西の三面より合撃し、午後八時約一中隊は嶺頂の西北角に達して此處に據點を作り、以て全部の占領に努む。

九月二十一日 敵は標高203の高地の堡壘に對し、更に數百の増援兵を送りて最も頑強に抵抗し。我兵は依然其一角に在りて攻勢を繼續し、戰鬪頗る劇烈を極む。

九月二十二日 標高203の高地の西北角を占領せる我攻撃兵は連日連夜爆藥を投じ、礮石を飛ばし、最も勇悍に敵を堡壘外に驅逐するこゝを努めたりしが、永く其位置を保守し難きに至り、午後六時頃一先づ攻撃を中止し、舊陣地に引揚げたり。

九月二十五日 午後八時三十分に至り敵は二龍山東方堡壘に對する我攻路に向ひ其附近の砲臺より砲火を集中し、尋て敵兵百名は掩護射撃を爲し、約三十名は突出し來り、我兵凡そ三十分間格鬪を爲し、死體二十を遺して退却せり。

九月二十七日 午前零時三十分敵は二龍山東北堡壘に對する我攻路に向ひ俄然猛烈なる砲撃を加へ、午前一時三十分之を中止するに同時に約二十名の敵兵突撃し來り、爆藥を投じて去り、約二十分の後再び來攻し一時間餘戰鬪の後退却せり。

九月二十八日 午前十時より午後五時迄我海軍砲を以て旅順港内の敵艦を砲撃したるに、七八發は確に命中し、敵は頻りに仰筒を以て防火を努めつゝあるを目撃せり。

九月三十日 本日も海軍砲を以て敵艦を砲撃せしに、ペレスウィット、ボペータに各々五六發命中せりセバストボールは昨夜東港に錨地を換へたるが如し。

十月二日 本日も我大口徑砲及海軍砲の射撃は頗る良好にして、午後二時三十分頃一發確に敵の旗艦ペレスウツトの砲塔左舷に命中し、其他數發の命中彈あり。

同夜午後七時三十分頃より午前四時頃迄の間に於て敵は東雞冠山に對する攻路に向ひ四面より攻撃し來り、午前零時三十分頃に於て戰鬪最も劇烈を極めたりしが、我兵遂に盡く之を撃退せり。

又同夜午前零時三十分頃約一大隊の敵は攻圍線の右翼に襲來し、約一時間射撃を交換して退却せり。

十月四日 大口徑砲及海軍砲を以つて敵艦を砲撃し、ボルタワ、ボペータ、ペレスウツト等に數發命中せり。

午後九時我軍の一隊は鹽廠南方高地に在る敵の四十七密米速射砲を破壊する目的を以て奇襲を行ひ、午前一時三十分全く其目的を達し、速射砲一門、機關砲一門を破壊して小孤山脚の前位置に退却せり。蓋し該火砲は我背後の交通路を射撃し少なからざる危害を與ふるを以てなり。

同夜敵は二龍山に對する我攻路に向ひ數回襲撃を行へり。

十月五日 大口徑砲を以てする軍艦射撃は一發ボルタワに命中し、又海軍砲の射撃は老虎尾半島に在る大建築物に命中して火災を起し二棟延焼せり。

十月六日 大口徑砲の射撃はボルタワ、レトウイサンに各々二發命中せり、又一發は老虎尾半島に在る倉庫に命中し火災を起せり。

十月七日 一日より七日に至る大口徑砲を以てする軍艦射撃に於て少くもボペータに一、レトウイサンに四、ペレスウィットに四、ボルタワに五發命中し、此外尙海軍砲も前記諸艦に命中せしを以て、ボルタワ、ペレス

ウイット、レトブイザンの三艦は最早運動力を有せざるに至りたるものゝ如し、ボルタワよりは六日朝、レトウイサンよりは七日の朝、五六艘の支那船にて水兵の上陸するを見、又ボルタワは此日正午頃現れて東港に入るを見たり、其の他の諸艦も多く東港に移れり、同日迄に敵の病院船三艘西港に避難せり。

同夜二龍山に於る敵の電燈一箇を砲撃して破壊せり。

十月九日 午後四時頃彼我砲戦中敵兵約二中队標高²⁰³高地を下り二龍山方面に運動せんことを海嵐山守備隊にて發見し、急射撃を加へたるを以て前位置に引返せり。又此戦闘間敵は椅子山方向より機關砲七門を二龍山方面に移轉せり。

同夜敵は我夜襲を顧慮し大に警戒を加へたるものゝ如く、午後八時頃より諸方面に於て銃砲を亂射せり。

十月十日 午後九時頃より敵兵約五十名盤龍山東西砲臺に向ひ爆薬を投じつゝ數回襲撃せしも我兵之を撃退せり。

東雞冠山に向ふ對壕作業にも敵は毎夜數十の爆薬を投擲して妨害を爲しつつあり。

十月十一日 午後三時三十分頃敵の驅逐艦九隻二回鹽廠附近の海面に來り、我驅逐艦及陸上砲臺を射撃を交へて港内に退却せり、蓋し我陸上の配備を視察せんとするものならん。

中央隊の右翼に於ては本日龍眼南方鐵道橋附近に在る敵を狙撃して十四名を仆し、又二龍山東方地隙内に於て土工具三十餘、小銃其他鹵獲品あり、

午後七時我右翼隊の左翼に於て歩兵三中队を以て龍眼南方鐵道橋附近に在る敵を攻撃し、午後八時三十分大なる損害を被るこなく之を占領し、爾後其東方二百米の處に第一陣地を構成せり。

十月十二日 同日大口徑砲を以てする軍艦射撃は命中九發ありて、一發は其軍艦に十四分間の火災を起せり。左翼隊方面に於て同夜敵我攻路に爆薬五十餘を投入せり、併し損害は寡少なりし、又晝間反射鏡を立て、我動

作を探らんせしも我之を破壊せり。

中央隊に於て同日敵の發射せるダム／＼彈に命中して負傷せし者あり。

十月十三日 我大口徑砲彈三發ベレスウイットに命中し、内一發は約十三分間火災を起せり、同艦は最早戰鬥力を失ひたるならん。

龍眼に於る敵水道水源を全く閉塞したる結果、是まで水なき河床に三十珊米以上の水量を見るに至れり。

十月十四日 大口徑砲彈十三發松樹山の砲臺に命中し、其他軍艦、堡壘等多少の命中あり。

十月十六日 中央隊は午後四時二十五分より午後五時までの間に於て巧に砲撃の成果を利用して鉢卷山（二龍山の東南方高地）の堡壘及二龍山中腹に在る敵の塹壕に突入し、暫時激戦の後全く之を占領せり。敵の損害は詳ならざるも、死骸の我目撃し得るものゝみにても一百を下らず、野砲一、小口徑砲一、機關砲二、其他小銃爆薬等若干の鹵獲品あり。

十月十七日 午前零時三十分頃敵兵約五十名標高²⁰³高地の南方より該高地に對する我攻路に襲撃し、爆薬を投じ、且つ劇烈なる小銃戦を交へたる後退却せり。是と同時に鉢卷山及二龍山方面にも兵力未詳なる敵の逆襲ありしも我兵盡く之を撃退せり。

又鉢卷山にも四五十名の敵兵數回襲撃せしも盡く之を撃退せり、同高地の咽喉部には尙敵兵ありて工事を施しつゝあり。

午後十時十分三十二時との間に標高²⁰³高地に對する我攻路に二回敵の微少なる部隊の來襲ありしも又之を撃退せり。

十月十八日 投降露兵の語る所左の如し。

此頃旅順の運命且夕に迫り、上官は市民、支那人の別なく強制的に晝夜兼行勞働に服せしめ、殆ど體軀を休息

するこゝを得ず、悲聲四方に聞ゆ、自分等も衣食足らず、数月間給料渡らず、且つ勞働過酷なるを以て決意降参せり。目下各歩兵中隊の兵員は平均七八十名にして外に水兵義勇兵二千五百餘あり。近來我砲撃の害甚しきを以てステツセルは決死隊四百を募り、勳章賞金を約し、諸方に出撃して我火砲を破壊せんを努めつゝあり。

十月十九日 二龍山と東雞冠山砲臺に向ふ對壕作業は著しく敵壘に近接しあるを以て晝夜共敵の妨害を受けるこゝ甚し、然れ共我作業は著々進行しつゝあり。

十月二十一日 敵の妨害は漸次甚だしきを加ふるも我工事は著々進捗しつゝあり。

十月二十二日 二龍山及東雞冠山方面の對壕作業は妨害を受けるこゝ依然たり。

昨夜より本日互り大口徑砲を以て敵の軍艦及器械局に向ひ射撃せり。

十月二十三日 松樹溝附近を往復する敵を狙撃して九人を仆せり。

二龍山附近の敵は此頃木砲を製して爆薬を發射し、我作業を妨害す。

東雞冠山北砲臺に向ふ攻路は約五十米突の距離に近接しあるを以て敵の妨害甚しく、我作業の進捗意の如くならず。

十月二十四日 我砲撃の結果午前二時より旅順市街に火災起り五時頃鎮火せり。

中央隊の二龍山に向ひたる攻路は敵壘前約五十米に近接しあるを以て敵の妨害を受けるこゝ甚しきも、其作業は能く進捗しつゝあり。

此頃敵は東雞冠山北砲臺より坑道作業を爲しつゝあるもの如く、同夜九時頃我坑道頭に向ひ爆發を行へり。然れ共其がために一の損傷なし、同夜二龍山より魚形水雷の頭部二を發射せり。

十月二十五日 午後二時我海軍砲は白玉山右方に在りし二本烟突、三本艦にて千餘噸の汽船一隻を射撃して之を撃沈せり。

十月二十六日 午前八時三十分より大口徑攻城砲及海軍砲を以て重に松樹山砲臺、二龍山砲臺、東雞冠山砲臺及同北砲臺に向ひ砲撃し、二百五十發の命中彈あり。海軍砲も亦松樹山砲臺及二龍山砲臺に多數の命中彈を送れり。而して其結果二龍山砲臺は胸壁上に破孔を生じ、且掩蔽部の若干を破壊し、松樹山砲臺は咽喉部の掩蓋二箇所を破壊し、且つ十五冊米砲一門を轉覆し、他の一門に大なる損害を與へ。又東雞冠山北砲臺に於ては火砲一門を破壊せり。午後二時より他の攻城火砲を以て松樹山砲臺及二龍山砲臺の各前面堤に在る歩兵散兵壕及鉢巻山南部の散兵壕を砲撃して多大の損害を與へ、午後五時を期し右翼隊の一部は松樹山の壘壕に向ひ、中央隊の一部は二龍山及鉢巻山南部の壘壕に向ひ突撃運動を始め、共に大なる損害を被るこゝもなくして之を占領せり。

然るに敵は此壘壕を占領せらるゝと同時に、其附近砲臺は勿論、西太陽溝西方高地及饅頭山、黄金山、白玉山、嚙嚙嘴等の諸砲臺よりも我突撃方面に砲火を集中したりしかば、我砲撃と相和して砲彈破裂の狀況は一時頗る壯觀を極めたり、然れ共敵彈は有効と認むべきもの甚だ少く、且つ敵は二龍山砲臺の斜堤に於て大地雷を爆發せしが我兵は一名も之に罹りたる者あらざりし。

同夜敵の修理作業を妨害するため、攻城砲及海軍砲を以て二龍山、東雞冠山、同北砲臺及松樹山に向ひ射撃を行ひ、尙軍艦及機器局を砲撃せり。

又松樹山及二龍山の敵は銃砲火の援助を以て夜間前後數回襲撃し來りしも孰も之を撃退せり。

十月二十七日 大口徑砲の砲撃を續行し、海軍砲は松樹山、案子山、椅子山、白玉山、二龍山、造船所及敵艦を射撃せり。

射撃効力の特に記すべきものは東雞冠山砲臺に於て砲車一を破壊し、二龍山砲臺の北正面東端より中央に至る

間の歩兵踏架を破壊し、掩蓋を飛散し、一箇の輕砲を毀損し、東正面の砲一門を破壊したるが如し。又同砲臺の東南隅角に數發命中し掩蓋を破壊し、其附近に在りし機關砲二門を飛散せしめたり。

松樹山砲臺に於ては凸角部の砲一門を傾斜せしめ、左翼面中央部に在る十二珊米加農一門を毀損し、又掩蔽部及掩蓋を破壊せり。

同夜東雞冠山北砲臺に對する我作業隊は凸角部外岸穹窓の一部を破壊せり。

敵は砲撃(殊に夜間)爆薬及出撃等有ゆる手段を以て我作業を妨害し、同時に我砲撃のため生じたる堡壘破壊部の修築に努めたり。

十月二十八日 大口徑砲及其他の攻城砲を以て砲撃を續行せり、其結果良好にして大口徑攻城砲の命中彈合計二百八十五、其他案子山、椅子山、²⁰³標高高地の堡壘、白銀山及白玉山等に各々若干の命中彈あり。

海軍砲は主として西太陽溝、椅子山、案子山、東港内の軍艦及旅順の西市街を射撃せり。

射撃の効力の特に記すべきもの左の如し。

二龍山(敵は前日破壊せられたる歩方踏架の一部に土囊を併列せり)は歩兵踏架、堡壘内の構築物を破壊し、咽喉部に少からざる損害を與ふ。

東雞冠山北砲臺は裝藥庫を破壊し、東雞冠山砲臺は咽喉部西側の野砲一門を飛散し、松樹山は掩蓋を有する十二珊米加農一砲車を顛覆し、一砲車を甚しく傾斜せしめ、²⁰³高地堡壘の掩蓋二箇所、鐵條網及散兵壕の若干部を破壊せり。

西太陽溝北砲臺にも備砲其他構築物に少からざる損害を與へたるが如し。

旅順舊市街には火災を起せり、又第二回の火災は黄金山西北麓の製造所にして延焼三時間に及べり。

夜間も例に依り旅順港内機器局を砲撃し、又我對壕作業の援助射撃を爲せり。

十月二十九日 本日は各地の發射彈數を増加して砲撃を續行せり。

今朝未明約百名の敵は二龍山の我攻路頭に向ひ逆襲し來りしが、多大の損害を與へて之を撃退せり。同時約百名の敵は松樹山の我攻路に向ひ猛烈に逆襲し來り、我守兵最も勇敢に之を拒守せしも、終に其の一部を失へり。而して午後二時頃砲兵の協力を得て一舉に之を奪回せり。

二龍山の攻路は昨夜外岸に達し、其一部を爆發破壊せり。

東雞冠山北砲臺東角の外岸穹窓部には昨夜更に二回爆發を行ひ、巨大の破壊孔を穿ち、穹窓内に在りし十數名の敵を仆せり。

砲撃の成果は益々良好にして大口徑火砲の命中彈三百五十に達し、其他瞬眸嘴高砲臺、椅子山、白銀山及各中間砲臺等に少からざる損害を與へたり。

海軍砲は西太陽溝、椅子山、案子山、毅前軍左營、白玉山、松樹山を射撃し、西太陽溝の火藥庫を爆發せしめ、又西港内南側に附著繋留せる掃海艇五隻を砲撃し、其三隻に大損害を與へ、内二隻に火災を起さしめたり。

他の攻城諸砲は午後一時半より支那圍壁及堡壘間隔の砲臺、散兵壕を砲撃せり。

十月三十日 軍は三十日早朝より大小攻城砲及海軍砲を以て砲撃を行ひ、午後一時に至り各方面とも攻撃前進を起せり。右翼隊及中央隊の一部は松樹山、二龍山及東雞冠山北砲臺に對し日没までに其外岸頂を占領し、外壕内に在る側防禦機關若干を破壊せり。

中央隊の他の一部は午後一時七分盤龍山東砲臺、東雞冠山北砲臺の中間に在る砲臺に突入し、敵の猛火を冒しつゝ午後二時頃確實に占領し、工事を施せり。然るに夜に入りて數回の逆襲を受け、十時半頃一たび之を失へしも、一戸少將は自ら散兵線を指揮して前進し、十一時頃再び之を奪還し、其占領を確實にせり。

左翼隊は東雞冠山砲臺及比鄰二砲臺に向ひ午後一時五分突撃を實施し、東雞冠山西北にある敵壘(瘤山)を奪取

せり。

十月三十一日 午後五時頃左翼隊は東雞冠山北砲臺に向ひ突撃を實施し、一部を以て東部頂斜面に達し、工事を施しつゝあり、昨三十日占領したる砲臺及東雞冠山西北の堡壘は其占領益々確實となり。

其他の堡壘、砲臺に對する攻撃作業は益々其歩を進めつゝあり。

大口徑砲及海軍砲を以て港内及造船所に向ひ若干の砲撃を加へしに砲艦ギリヤークに數發命中し、汽船二隻を撃沈せり、又埠頭附近に稍々大なる火災を起し、熾に火焰を揚げたり。

本日夜午後八時半軍の最右翼方面に敵襲ありしも夜半に至り全く之を撃退せり。

十一月一日 大口徑砲を以て旅順西港内に在る汽船二隻（各三千五百噸位）を、今日同一隻（三千噸位）を撃沈せり。

本日水師營南方に於て二名の降参人あり、本日前十一時十分迄に於て元警房（旅順市街の北端）附近に於て二回の大なる爆發あり、多分火藥庫の爆發ならんか。

P砲臺（爾後一戸堡壘と稱す）に於ては野砲三、機關砲二門、魚形水雷三、其他多くの鹵獲品あり、該砲臺に遺棄せられたる敵の死體は約四十なり。

十一月三日 正午より海軍砲を以て東港内造船所其他に向ひ猛烈なる射撃を施せり、其結果午後零時十五分より東港附近に猛烈なる火災を起し、午後四時迄延焼せり。

又本日大口徑砲の射撃は左砲臺（望臺西北約二百米突の高地）に多大の損害を與へ、東雞冠山砲臺咽喉部の野砲、命中し之を毀損せり。

十一月六日 大口徑砲及海軍砲を以て旅順市街北端の武器庫を射撃し火災を起せり。又同日午後二時半松樹山舊砲臺の火藥庫我砲彈の爲爆發せり。

十一月十九日 午後我海軍砲の射撃は機器局附近に在る火藥庫を爆發せしめたり。

敵の各砲臺に對する我攻撃作業 豫定の如く進捗しつゝあり。

十一月二十一日 夜東雞冠山北砲臺前に在る我攻撃部隊に對し敵兵襲來せしも直に之を撃退せり。

十一月二十二日 午後零時三十分頃我海軍砲 砲撃に依り港内機器局附近に大火災を起し、午後九時三十分に至るも尙延焼しつゝあり。

十一月二十二日 我海軍砲のため午後零時三十分頃より機器局附近に起りし大火災は翌二十三日午前二時漸く鎮火せり、多分石炭貯蓄所に點火せしものならん。

十一月二十六日 松樹山及其以東の諸砲臺に對する攻城作業略々完成したるを以て、昨二十六日午後より強襲を試みたるも、敵の抵抗頑強にして未だ其目的を達するに至らず、戦闘尙繼續す。

十一月三十日 攻圍軍は拂曉より砲撃を開始し、午後四時に至るまで數回の突撃を行ひしも、敵の抵抗頑強にして奏功に至らず。午後五時頃二〇三高地西南部に向ひたる部隊は突撃を強行して嶺頂下約三十米突に肉薄し、

午後七時増援隊と共に嶺頂に向ひ突入して遂に之を占領せり。其東北部に向ひたる部隊も亦尋て突撃を實施し、午後八時全く二〇三高地全部を我有せり。

此高地の東側には敵の死屍累累として未だ其數を調査するに暇あらず。

十二月二日 午前十時より午後四時まで軍の左翼方面に於ては彼我の軍使相會して一部休戦を爲し、双方の死傷者を收容せり。

十二月六日 赤坂山の敵兵は二〇三高地に占據せる我兵の敵射に堪はず六日其陣地を撤退し、我兵は午後一時其全部を占領せり。次で午後二時半寺兒溝北方高地、午後三時三里橋北方高地の敵を撃退して我之を占領せり。數日來續行せし敵艦射撃に因りボルタワは右に傾き上甲板まで侵入し、レトウイザンは艦隊左に傾きバーヤン

は坐礁したるが如し。

六日午後四時頃敵の軍使來り約五時間休戦を爲し相互の死屍を收容せんことを提議したるを以て軍は之を承諾せり。

十二月七日 大口徑砲を以て行ひたる敵艦射撃は其成果良好にしてバルラダ、ペレスウイット及ボペーダに各々多數の有效命中彈を見たり、之がたのペレスウエツトは午後三時十五分火災を起し、ボペーダは右舷に傾斜するに至れり。

十二月十一日 大口徑砲を以て旅順内部を砲撃し、ボルタワ、アムール並に黄金山下の無線電信所に大なる損害を與へ、且つ武庫を射撃し、之をして火災を起さしめたり。

數日來續行せし敵艦射撃の結果は海軍參謀の言に據るに、其戰艦四、巡洋艦二、砲艦一、水雷母艦一、合計八隻に止のを刺したるものにして、復之に對し射撃するの必要なきに至れり。

十二月十八日 軍の一部は十八日午後二時十五分東鷄冠山北砲臺の胸壁に大爆破を行ひ同時に突撃に移り、彼我烈しき爆撃戦を交ゆ、敵は防戦最も務め、且つ其機關砲射撃のため我攻撃の進捗一時意の如くならざりき。次で午後七時頃鮫島中將は自ら其豫備隊を率ひて外岸宮密内に前進し、部下の勇氣を作興し、其豫備隊を戦線に加へて最後の突撃を行ひ、遂に午後十一時五十分全く全砲臺を占領せり。

砲臺占領後我は直に工事を施し、今朝に至り其占領確實なれり。

敵は退却に當り其咽喉部附近に埋設せる四個の地雷を自ら爆發せり。

同砲臺に九珊知野砲五門、機關砲二門及多數の彈藥並に四五十の屍體遺棄しありたり。

我死傷は未詳なるも多大ならざるべし。

十二月二十二日 軍の右翼隊は今朝五時頃敵兵動搖の機に乗じ、後三羊頭村北方高地の敵を襲撃して之を占領

し、同時同村西方半島高地の敵を撃壊して又之を占領し、同地に在りし敵の小口徑砲一門を鹵獲せり。

同半島占領後、敵は逆襲し來りしも直に之を撃退し、目下其占領殆ど確實なり。

十二月二十二日 軍は重砲を以て後楊樹溝東方高地の防禦工事及松樹山、二龍山砲臺等を砲撃し、少からざる損害を與へ、其結果を利用し、二十三日拂曉軍の右翼部隊は後楊樹溝東方高地の敵を攻撃し、午後七時四十分同高地の頂界線を攻略せり。

敵は太陽溝及鴨湖嘴諸砲臺より我占領せし陣地向ひ砲火を集中し、次で八時二十分烈しき逆襲を企て、來りて爆藥を投ずるに至りしも、我兵遂に之を撃退したり、爾後敵の砲撃稍々衰へたるを以て我は若干の工事を施設し、其高地の占領殆ど確實なれり。

我攻撃の前後に於る重砲射撃に依り、西太陽溝北砲臺には火災を起し、且砲臺の十五珊知砲一門を破壊し、掩蓋にも多大の破損を與へたり。

去る十八日東鷄冠山北砲臺に於て獲たる捕虜の言、並に二十二日椅子山方面より投降したる露兵の言に依れば二〇三高地の戦鬪に於て東部西伯利狙撃歩兵第七師團長中將コンドラテエンコ、砲兵第四旅團長少將イルマンは戦死し、東部西伯利歩兵第四師團長中將フオークは負傷したるが如し。

十二月二十四日 軍の右翼部隊は二十四日夜十時頃後三羊頭村及小房村の敵を奇襲して同村を占領し、逐次敵を撃壊して、午前二時十五分には大劉家屯の全部を占領せり。

數日來屢次舉行したる我攻撃は毎に其效を奏し、我右翼方面一帯に於ける敵の前進陣地は今や全く我占領に歸し了れり。

十二月二十八日 軍の左中央隊は二十八日午前十二時龍山砲臺正面胸壁の大爆破と共に突撃を実施して該胸壁を占領し、重砲及野戰砲の掩護に依りて、敵の銃砲火を犯して銳意占領工事を施し、其占領略々確實なるに及

び午後四時更に内部重砲線に突撃して直に同線を占領し、尙進んで咽喉部に向ひ同所を頑守せし殘敵を撃壊し午後七時二十分遂に同砲臺を占領せり。

十二月三十一日 軍は本日午前十時豫定の如く松樹山砲臺の胸墻爆破の後、右中央隊の左翼隊を以て突撃を實施し、午前十一時頃該砲臺全部を確實に占領せり。敵は我行ひたる胸墻爆破に續きて砲臺内部に布設したる地雷を爆破し、其一部は該砲臺の南方高地に退却せしが、一部は咽喉部にある蔽部内に於て爆破の爲に墜落したる土砂により填塞せられたり。

松樹山掩蔽部に填塞せられたる敵兵は其後入口を掘開して逐次之を引出し、悉く之を捕虜せり。其數將校二十士以下百六十餘名なり、又該捕虜の言に依れば我爆發のために埋没せられたるもの死者は約百五十名なりと、戦利品は野砲及機關砲等にして員數目下取調中。

三十一日午後六時盤龍山東砲臺前の我作業隊は舊圍壁の一部を爆發し、目下其破壊部に占領工事をなしあり。一月一日 中央隊の一部は敵を驅逐し午前七時日砲臺を占領し次で盤龍山新砲臺を奪取せり。此に於て二龍山

より盤龍山砲臺を徑て日砲臺に至る線を確實に我有に歸せり。又右翼隊の一部は午前八時頃より砲撃を開始し、午後二時に至り頑強なる敵の抵抗を排除し、後三羊頭村南方高地を確實に占領せり。

中央及左翼隊は午前九時頃より望臺に向ひ攻撃を實施し、我砲撃の成果を巧に利用して突進し、午後三時三十分五分全く望臺を占領せり。

本日日砲臺に於て火砲三門、望臺に於て火砲四門を鹵獲せり、詳細目下取調中、又過日松樹山に於ける我戦利品は七冊知野砲三門、五十七密砲二門、機關砲二門なり。

本日午後九時關東要塞司令官ステツセル將軍より開城に關する書面を受領せり。

第四 偉大なる戦捷の光輝

偉大なる戦捷の光輝と共に、明治三十八年の初日の出は闇を破つて目出度き且つ千古比なき新年の天地を現はした、今や五十萬の健兒は滿洲に、黄海に、此輝き渡つた新年を小躍りしつゝ迎へた、予も亦幸に喜びつゝ、且つ勇みつゝ、滿洲の野に於て新年を迎へたものゝ一人であつた。

何たる偉大なる成功よ、回顧すれば昨年正月の東洋の空、陰雲暗曠として和か戦か、戦か和か、國家の將來に向つて憂心仲々居蘇にさへ酔はざりしものを、二月八日以來陸に海に常に成功を續けて、世界の歴史に一大光彩を放ちて東洋に一大武國の存在する、こゝを世界に知らしめ、同時に何事も我に如くものなしを誇つた白人種の鼻柱を折つて、列強をして旭日旗の前に、擡着たらしめたこゝの何たる愉快にして且つ偉大なる成功なるぞ。

戦争は未だ終らざるも、敵の手並は概ね知れて、最後の勝利は我にあるこゝ火を見るよりも明である、一度び捷利疑ひなしを宣言して攻勢を取つたクロバトキンは見事に打敗られて、世界のもの笑ひなり、大に彼の太平洋艦隊を活動せんと試みたるマカロフも、黄金山下の一條の水煙と共に消へて、敵は今肺病患者の餘命を保つて居る様な有様であつて、世界も又其然るこゝを認識して最後の勝利の執れに歸するやを疑はぬやうになつたのは、誠に昨年以來の戦勝に因るのである。

第五 特種の新年

敵前も雖も、戦地も雖も、新年は矢張り新年である、國民の習慣は何れの場合にも依然として保たれて、何處よりか松は折られて其宿舍の門前に樹てられた、餅は何時の間にか搗かれて不調法ながらも雑煮を喫した、屠蘇の香はなし、雖も酒は酌まれた、満目眩々たる原野に反射する新年の初日の出は殊に眩さばかりに輝きて、此壯麗なる且つ愉

快なる天地を更に壯麗に且つ愉快にした此時の感情は、實に欣喜、爽快、雄大、誇負等の複合したものであつた、嘗に我等のみならず最前線に居るものも内地にあるものも恐らくは總て此感情に満たされたであらう。

併し乍ら考へて見れば例年の平和なる新年には山も海も都も里も一樣なる賑を以て屠蘇に酔わぬものはないのであるが、戦時の新年は亦特殊なるものが、特殊の様に於て此元旦を過ぐるであらう、試みに新年を迎ふるものゝ類を思ひ出づれば、歩哨に立ちて新年を迎ふるもの、銃聲に夢さめて新年を迎ふるもの、敵を撃ちて新年を迎ふるもの、賊を擧げて新年を迎ふるもの、地圖を開きて新年を迎ふるもの、馬を走らせて新年を迎ふるもの、穴を穿ちて新年を迎ふるもの、車を挽ひて新年を迎ふるもの、電線を延ばして新年を迎ふるもの、繻帯を纏ふて新年を迎ふるもの、擔架を荷ふて新年を迎ふるもの、算盤を動かして新年を迎ふるもの、郵便を配達して新年を迎ふるもの、筆を持ちて新年を迎ふるもの、歌を唄ふて新年を迎ふるもの、酒に酔ふて新年を迎ふるもの、躍つて舞ふて新年を迎ふるもの、之等は尙幸福に且つ愉快に新年を迎ふるものであるが、尙考へて見れば新年の曙の光が僅に此世を照らしたか照らさぬかの瞬間に傷つくものもあらう、斃るゝものも有らう、亡き人の知らせを聞く人もあらう、詳しく云はば親を失ひ、夫を失ひ、子を失ふ人もあらう、平和なる年の此時でも斯るためしはなきことはなからぬとも、喜ばしく新年を迎えんを豫期したりしもの、胡蝶の夢の覺めしやうに今更の如く悲哀の涙にくるゝ人も多く有るであらうと考ふれば、同じく戦地に在つて喜びの情に滿されつゝ此新年を迎ふる我等の幸運を感謝せねばならん、誠に感謝するのである。

第六 一段の光輝を加へたる報道

沙河方面の大捷利にも拘らず、まだ元日の中ばまでは飽きたらぬ一事があつた、旅順の要塞は未だ陥落せざるこゝであつた。併し乍ら二龍山砲臺は既に爆發せられて、松樹山砲臺は去年の終りの日に占領せられたこの電報が來つた

のをせめてもの心遣りとして、陥落の遠からざるこゝを豫想しつゝ、元旦の祝詞に代へて松の木山占領萬歳と記して、攻圍軍に従ふ我友に贈つた時は、まだ旅順攻撃の前途を氣遣ひつゝあつたに、其日の午後九時に來つた敵將開城通知の電報は、寢耳に水をうづが如く、我々を驚かしめ、且つ喜ばしめた。旅順攻圍に關して大なる悲觀的觀察を持て居るものでさへも、忽ち愁眉を開いて歡喜の情に堪へなかつたのである、こゝに至つて此光輝ある新年は更に一段の光輝を加へて、申分なき新年となつた、此の報知を聞いた國民の喜びは實に如何ばかりであつたらう、嗚呼記憶すべき明治三十八年の新年よ。

我等の想像を以てすれば、内地の元旦は誠に靜かであつたであらう、一般に陸海軍人に對する遠慮と、經費の節約とのために年賀の交換さへも行はざりし處も有つたであらう、然るに開城通知の電報は此の日の夜半に到着して、二日には全く國民に傳へられた。此時の國民の喜びは殆ど發狂の程度で物を叩き、樂を鳴らし、舞ふて、唄ふて、昨日の濕潤なる全國に代へて、今日は熱鬧の全國となつて、燃るが如く、沸くが如くなつたであらう。實に旅順の陥落は遼陽の戦鬪よりも、沙河の戦鬪よりも、國民が待ちに待ち焦れて、昨年六月から今か今か首を長くして居つたのである、攻圍軍の中途の失敗は幾分か國民を落膽せしめて、其陥落は非常に困難なるものとして覺悟をしたりし矢先、しかも元旦に於て此通知を受けたりしこゝの意外なるために、滿腔の熱情を露はして、噴火山の一時に爆發した様にあつたであらう。

第七 攻防兩者の喜悅

内地の人が喜んだよりも、更に大なる喜びをしたのは勿論乃木軍司令官始め攻圍軍の諸士であつたこゝは理の當然である。攻圍軍が此要塞の攻撃について如何に慘澹たる光景に沈み、如何に莫大なる損害を受けて、幾度の攻撃に憂心苦慮したこゝを考ふるときは、實に攻圍軍の將士等は其目的の達成に嬉し涙にくれたであらう。

殊に乃木大將の如き、此攻圍の進行中に其二子を失ふて、如何に勇猛なる大將と雖も尙人情の羈にひかされて、其心腸を傷めたであらうが、今は亡き人の仇をも打ち得たるのみならず幾萬の生命を掌握して、思はざる犠牲に苦しんだる胸中を露らすことを得て、其の喜は恐らく人の想像し得ない位であつたであらう。

併し乍ら此喜びは獨り我軍の將士のみではなかつた、意外にも敵たる要塞の守兵も又狂ふが如くに此開城を喜んで、二日の午後九時に兩軍で開城規約の調印を済ますまでは、未だ敵味方であるのに、敵は既に此以前に其武器を抛ちて我兵と相抱て躍り、且つ舞ふた、我兵も何時の間にか敵の堡壘、砲臺果は旅順の市街にまで進んで、今迄敵であつた露兵と酒を酌み交して、或は料理屋の二階で相唄ふて此頃の一兩日を夢中で経過したと云ふことであつた、之でも露兵の如何ばかり喜んだかを想像することが出来る。

第八 ステツセルの面目

併し乍ら此開城は果して全く力屈しての開城であつたらうか、捕虜の總數は將校約八百、士卒約二萬三千、其彈丸、砲彈約八萬三千、小銃彈約二百三十萬發であつて、糧秣も未だ多量に残されてあつたさうである。望臺一帶の高地が占領されたことは雖も、尙ほ老鐵山の一隅に立籠るこゝが出来るのである。自ら敵の位置になつて考へて見たならば、此要塞の陥落が一日でも遅ければ遅いだけ攻圍軍を此方面に引き付けて置くこゝが出来ると云ふ、莫大なる利益があるのである、人はステツセルを稱して最も勇猛に、且つ執拗なる將官なりと評して居つたが、果して彼は充分に其性能を發揮したであらうか、彼は長き月日の守城に倦むと同時に、我兵の勇敢たるに其判断を過まつたのであるまいか、兎に角此の開城には全然同意するこゝが出来ない。ダンフェル大佐が毒弱の兵と、防備薄きベルフォル要塞を以て、尙ほ普佛戦争に普軍の大兵を引受けて遂に降らなかつたが、佛國政府の命令に依つて名譽ある開城をなしたのこゝ比ぶるに於ては、ステツセル果して何の面目がある、彼も亦口に大言壯語を吐いて、行に臆病未練を遣つたアレキシ

ーフの輩であつたであらう。斯く考へらるゝばかりでなく、此開城には守備將校の内にも大に異論者があり某將官の如きは大なる反對論者で、開城通知の其の日まで鷄冠山砲臺の内に大に防禦策を講じてあつたと云ふことである。或は旅順要塞の今日まで維持し得たのは「ステツセル」でなくて此將官であつたかも知れぬ。

第九 旅順の俘虜と戦利品

公報の示す旅順要塞の捕虜及物件の數は次の通りである。

將校同相當官		下 士 半		關東要塞砲兵	
ステツセルの司令部	九	三九	工兵中隊	六一	二、七八四
關東州長官司令部	六	一五	電信隊	四	二六九
狙撃歩兵第二十五聯隊	四二	一、四三〇	鐵道隊	一	一五五
同 第二十六聯隊	三九	一、四四〇	騎兵	四	一七七
同 第二十七聯隊	五八	二、一七八	憲兵	二	二四
同 第二十八聯隊	四	一、五〇五	狙撃歩兵第五聯隊	三六	一、五四七
第三師團第十一第十二混成聯隊四	四	一九五	同 第十三聯隊	三八	六六五
第七補充大隊	一四	二八二	同 第十四聯隊	三二	八八二
第三補充大隊	一二	三〇八	同 第十五聯隊	五〇	一、三三三
第十聯隊本部	二	六六	同 第十六聯隊	三〇	一、〇〇四
砲兵第四旅團	二六	九〇一	合計	五四四	一七、三九二
五十七密速射砲隊	二	一一三	海軍防禦司令部	三	三
				三	三

予が見たる日露戦争

港務局	六〇	二九
海兵團	五九	二、五三一
水雷團	一〇	一四二
レトウイサン	二二	四四六
ボペーダ	二二	五一〇
バルラダ	一一	二〇八
ベレスウエード	一五	六〇七
ボルタワ	一六	三一一
セバストポリ	三一	五〇七
バーヤン	一五	二五九
ボーブル	一二	九九
ストロデボイ	四	五二
カトワズニ	六	一二四
ギリヤーク	五	七二
アムール	七	一七三
合計	二九八	六、〇七三
裁判官	三	三
野戦郵便電信局員	三三	二三
合計	三六	二六

總合計	二四〇	八七八	二三、四九一
其他人員の概數			
陸軍			
將軍	八		
佐官	五七		
尉官	五三一		
文官	九九		
軍醫	一〇九		
從軍僧侶	一三		
下士卒	二二、四三四		
非戦闘員義勇兵ヲ含ム	三、六四五		
合計	二六、八九六		
此他に在院の病傷	約一萬五六千		
物件			
一、永久堡壘、砲台			五九箇
二、兵器彈藥車輛等			
火砲			
大口徑			五四門
中口径			一四九

小口径	三四三門
砲彈	五四六門
水雷	八二、六七〇發
爆藥	六〇箇
火藥	一、五五八箇
小銃	三〇、〇〇〇吉羅
拳銃	三五、二五二挺
軍刀	五七九挺
小銃實包	一、八九一挺
彈藥車	二、二六六、八〇〇發
輻重車	二九〇
雜種車	六〇六
乘馬具	六五
輓馬具	八七
三、電燈	二、〇九六
合計	一四

右の外多少の修理を加へ使用し得る小汽船三十五隻あり

第十 旅順陥落の祝賀

四、電信機	一五
電話機	一三四
回光通信機	三
五、土工器具	一、一七一
六、馬匹	一、九二〇頭
七、艦艇	
戰艦ベレスウイツト以下四隻	
(セバストポールは全く水底にあるを以て之を除く)	
巡洋艦バルラダ以下	二隻
砲艦驅逐艦	一四隻
汽船	一〇隻
小蒸汽船	八隻
雜船	一二隻
其他民有船	若干

以上は皆破壊若くは沈没せるものなり

旅順陥落の祝賀會として我兵站監部では一月五日に兵站諸部隊の將校並に相當官を遼陽に招ひて大宴會を開いた、集るもの概ね二百人、戦地に於て整へ得る限りの最良の御馳走を列べて、葡萄酒まで抜いた、余興として後備工兵中隊のアンペラを以て造りたる長さ十數米突の擬軍艦を會場の前面に備へて、多くの人の快感をひいに、宴會なかばで黄色藥に點火して其の一部を爆破し大なる喝采を得た、一同は大いに喰ひ且つ飲んで充分なる愉快を盡して解散した。

第三十章 牛家屯襲撃と黒溝臺戰

第一 夢驚かすミスチエンコ

遼陽の野をわたる朔北の風は過ぐる年の十二月までは頗る猛威を逞ふして、寒氣も又頓に加つて夜は氷點下四十度の冷氣を表すことも屢々あつて道行く人の口髯に眞珠の玉を連ぬるこまや、筆持つ人の硯の海に氷の鏡を作りて大に困難せしめたこともあつたが、年明ければ連日の晴天に溫度は頗る昇りて、日中二十度位なるこまもあつて、一ヶ月餘も絶へて消へざりし滿目皚々たる雪も時には處々溶けて地表を現すこまもあつた。清國人は近來稀るな暖氣の年なりと語りつゝあつた。未だ春風駘蕩たりと云ふこまを得ざるも、太陽の光は一般に我々をして頗る陽氣なる感を抱かしめた。敵も味方も尙戦闘動作に便ならずして、沙河の陣地に睨み合をして戰爭中の一小康時を考へて、大なる心な配く其の日を送りつゝあつた間に、俄然一月十一日鞍山店の西方七八里に在る、唐馬塞に敵の騎兵が現はれて、スワミ云ふ間に遼陽、海城間の鐵道は破壊された。十二日には牛莊を包圍して遂に之を占領し、續いて營口停車場のある牛家屯に來襲した、遼東守備軍は北方より第八師團の一部を、南方より後備歩兵第七聯隊を急派して、齋藤旅團長を

して指揮せしめ、此敵に當つた。敵は牛家屯兵站司令部を包圍したるも我軍の攻撃に逢ふて退却し間もなく牛莊をも撤退して、此方面の不安は一時靜穩に歸した。敵はミスチエンコ少將の率ゆる歩、砲聯合の騎兵團で、其の兵力は歩兵一聯隊、騎兵約八中隊、砲十二門であつたようである。此敵は退却の途次更に我第八師團から差遣したる一技隊のために遮られて、同十六日に老鶴境附近で大なる損害を受けて退却をしたと云ふこまである。

ミスチエンコの此行動は勿論我後方を擾亂せしむるためであつたらう、敵は此擾亂の目的は達し得たであらうが、他の作戰と連繫なき行動は唯後方を擾亂したと云ふのみで、何等全局の上に効果を及さなかつた。是によつて見ても敵の行動は、唯一將の拔掛の功名を恣にせしめたのみである。

第二 不警戒と風聲鶴唳

併し乍ら我遼東守備軍でも多少警戒を等閑にして居つたのではなからうか、勿論遼河以西の地は中立地帯であるに相違ないが、敵地に接して居る中立地帯は頗る危いものである。冬季遼河の凍るのを利用して敵が此方向に現はると云ふこまは、敵としてあり得べきこまであるから、是に備ふるの準備をして置くの必要があつたのである。即ち遼河の左岸に守備兵を配置するに同時に、海城附近に稍々強大なる兵力を置いて、此處を一箇の待機陣地として何れの方面から敵が現はれても、直に之に應じ得る配置を取らなければならぬ。牛家屯の如き僅に敵を撃退したと云ふものゝ、若し萬一にも此處を占領されて、其集積したる軍需品を焼かれてもしようものなら、當に後方の騷擾ばかりでなく、或は全局の作戰に影響を及ぼしたかも知れん、幸に旅順の軍隊が北進しつゝあつたから、之を使用するこまも出來たが。若し然らざれば頗る危険なる情況に陥るのであつたらう、併し乍ら實際に於て遼東守備軍には、守備の兵力が至つて寡少であつたから、事實斯様な兵力の配置をなし得なかつたのであらうか。

此騒の後には一種風聲鶴唳的報道が屢傳はつて、或は遼陽の直ぐ西方の楊家林子に二三十の敵騎が現れた云ひ、或は此騎兵は我軍のものだ云ひ、或は遼陽の西方五六里に在る黄泥窪に敵騎が侵入した云ひ傳へ夜半に電話の通報が来るやら、遂には遼陽市民の行ふた爆竹の聲を聞いて敵兵進入に騒ぎ立てた云ひもあつて、一般に不安の念を禁じ得なかつた。是が爲め當時旅順から馬なしに送つた砲車を遼陽の直ぐ西方に列べて、直接の援護をする云ふことになつて、我兵站部でも豫て戦利小銃を各補助輸卒隊に支給して執銃の教練をさせてあつたのを幸ひ、遼陽北方に於て後備歩兵第四十六聯隊の小山少佐の指揮の下に、補助輸卒隊の戦闘教練を演習した云ひもあつた。

第三 露軍攻勢移轉の好機

内地では旅順が陥落するに同時に露軍が總て降参をするだらうと思つて居つたものを見よ友人からの手紙に次の様な俗語が記されてあつた。

難攻不落の旅順も落ちて主の凱旋待つばかり

處が中々そうは行かない、敵は旅順の陥落に落膽したには違ひないが、沙河方面には此冬季中大に兵力を増加し同時に従來クロバトキンが諸軍團を直接に指揮して居つたのを、改めて三箇の軍を編成して、各軍は三乃至四箇の軍團より成り、第一軍は大將リネウイチ之を率ひて我第一軍に對し、第二軍は大將グリツペンベルグ之を率ひて我第二軍に對し、第三軍は大將カウルスバル之を率ひて我第四軍に對し、別にレネカンブは其騎兵師團を以て我右翼前に、ミシチエンコも又其騎兵師團を以て我左翼前に位置して我を包圍するの形をなし、其兵力は少くも我一倍半に相當して居つた。敵になつて目下の状況を判断すれば、攻勢を取るの時機は唯目下である。旅順は既に陥落して、攻圍軍は日を追ふて沙河の線に増加するであらう、攻勢を取るの時機が一日後れば後るゝほき日本軍は優勢になつて露軍

のために不利なるからである。此事を我軍に於ても知つて居るから、一刻も早く旅順の兵力を沙河方面に輸送することを希望して居つた、處が旅順では俘虜並に堡壘、兵器、艦船等の受取に忙はしく、輸送は漸く一月の下旬から始まつて、而も其大部分は徒步行軍に據つて前進するのであるから、我々が其到着を待ち遠く感じた事は一通りでなかつた。敵が今衝いて出はせぬか、今攻勢を執りはせぬか考へて居た矢先に、前記のミシチエンコの別働隊が牛莊方面から出たことから神經を過敏にして居るに、又もや一月二十五日頃から敵の騎兵が長灘方面に出没して、續いて牛居附近を守備して居つた後備歩兵第四十六聯隊の第三中隊が撃破せられて其小行李が夜間に同聯隊本部に來たつて危急を告ぐる云ふような騒ぎがあつて、茲に一月二十六日から所講黑溝臺の會戦なるものが始まつて、二十七、二十八、二十九日に互つて最も危険なる戦闘を繼續しつゝ、遂に敵を渾河以西に撃退して、幸運にも此戦闘の局を結んだ。

第四 殷々たる砲聲

クロバトキンは我々がなせし判断の通り、今を以て攻撃の時機をなし、先づグリツペンベルグの第二軍を以て我左翼を包圍しつゝ攻撃し、若し此運動が成功したならば、全線同時に攻勢に移る云ふ計畫を以て、先づ此一部の攻撃を實行したのである。我軍では目下第三軍は北進の緒に就きたるばかりで、總豫備としては第八師團に、是に附屬せる後備第八旅團より外になつたので、先づ之を以て此敵に當らしめた處が、敵は中々優勢である、其處で更に第四軍の豫備になつて居つた第五師團を之に増加した、處が敵の兵力は約三軍團である、其處で第一軍の豫備になつて居つた第二師團を更に之に増加した、斯様なる有様で二十六日の夜間に第五師團は十里河を出發して狼洞溝に向ひ、二十七日の早朝から其の大部を以て第八師團の右翼に連つて動作し、二十七日には半拉山子附近にあつた第二師團は、小烟臺に向ふて、二十八日狼洞溝より村山少將の率ゆる枝隊の左翼に連繫して敵を攻撃し、二十九日に至つて漸く敵

を渾河以西に撃退したのであつた。

我兵站部では二十六日の晩から軍機電報が來つて、俄に烟臺に糧秣を積むやら、衛生機關を俄に狼洞溝方面に派遣をするやら、大なる騒ぎをして居るに、砲聲は益々劇しくなつて、最も手近に聞える、一日たつ二日たつ内に砲聲は衰ふるだらうと思ひの外益々劇しくなつて朝から晩まで寧ろ夜中まで少しも止まない、而も情況は少しも分らない、事務を取る間も相互に顔を突き合してドーデあらうと氣遣つて居れば、砲聲は更に一段劇しくなつて、我軍の勇氣も成功を信じながらも必配して居た、或る者は第三軍は何故に汽車輸送を以て急進せしめんであらうか叫んだ、實際第九師團の歩兵部隊は此時汽車輸送を以て遼陽に到着し、遼陽西方太子河の左岸に俄に集中したのであつた、勇氣ある黒溝臺攻撃軍は倍數の敵を撃破して二十八日の午後には砲聲は漸く収まつた、危いかな此戦闘よ。

第五 黒溝臺の戦況

黒溝臺攻撃の戦況は次の通りである。

黒溝臺攻撃軍は一月二十五日正午頃黒溝臺方面に來襲せし敵を撃攘すべき任務を有し、大臺附近に集結せり。此日黒溝臺を守備せし我一支隊は約一師團の敵に包圍せられ、頑強なる抵抗の後、夜暗に乗じ古城子方向に退却せり。

二十六日黒溝臺攻撃軍司令官は左翼隊をして蘇麻堡、頭泡の線に右翼隊をして其の右翼に連繫し、砲兵全部をして老橋西端に展開して黒溝臺を攻撃せしむ。

此日飛雪紛々として寒威凛烈、大に視界を妨げ、運動爲に遲延し、正午頃より黒溝臺の攻撃實施中約一師團の敵は長灘方面より前進し、沈且堡を攻撃して之を包圍し、其一二大隊を以て我に向ふの報に接し、古城子附近に在りし部隊をしてこの敵を撃攘せしむ。

左翼隊は蘇麻堡、五家子の線に展開せしが、敵は黒溝臺、頭泡の線を占領し、特に頭泡は其形状恰も城塞の如く之に機關砲を備へ、防備頗る堅固なるを以て、先づ之を奪取するにあらざれば黒溝臺の攻撃意の如くならざるを以て、首力を擧げて之を攻撃し、右翼隊は老橋東側に於て約二大隊の敵を驅逐しつゝ老橋、蘇麻堡の線に展開し全く蔽開地に暴露して勇敢に攻撃前進を行ひしに、敵の砲兵は黒溝臺の周圍に砲列を布置し、總數約三十門、巧に縦、斜射を行ひしを以て我死傷多大にして未だ目的を達するに至らずして日没に至る。

二十七日我右翼に迫りし敵は一時退却せるを以て、古城子附近に在りし部隊を中央とし、兩翼隊の中央に排列し蘇麻堡を左翼とする如く展開し、黒溝臺に向つて攻撃せり。

又狼洞溝附近にありし一兵團をして柳條口及李家窩棚の線を占領して黒溝臺攻撃軍の右翼隊の右側面、及沈且堡左側を掩護せしめ、又其一部隊を修二堡方向に前進せしめ、該方面に現れたる敵を撃攘して遠く軍の左側背を掩護せしむ。

狼洞溝附近に在りし兵團は午前十時四十五分同地を出發し、大臺東側を経て猛烈なる敵の銃砲火を冒し勇猛果敢に柳條口及李家窩棚の線に在る約一師團の敵に對し攻撃前進し、爲に黒溝臺攻撃軍の右翼隊の右側背を安全ならしめたり。

黒溝臺攻撃軍は猛烈に敵を攻撃せしも、敵兵就中其砲數は逐次増加し、我死傷多大にして攻撃の進捗意の如くならず、然れ共諸隊は毫も之を顧みず、歩一步敵に近接せり。

左翼隊は牛居及黃蠟蛇子方面より來る約一師團の敵に側面を衝かれ、又八黃地附近に侵入したる敵の歩兵、及騎砲兵に背射せられ、將校以下の死傷甚だしきを以て其左翼を一時三尖泡に後退するの止むを得ざるに至れり。

夜に入り黒溝臺攻撃軍の諸隊は各方面に於て敵の夜襲を受け、特に蘇麻堡附近に於ては前後より各一聯隊の敵よ

り攻撃を受けしが、終鬪亂撃の後、各方面共悉く敵を撃退せり。

修二堡方面に前進せし我一部隊は優勢の敵に支へられ、徐家窩棚、斜哨の線に停止す。

二十八日狼洞溝附近より前進せし一兵團は巧みに敵を攻撃し、其右翼隊は午前九時三十分柳條口を占領し、其左翼隊は午後三時李家窩棚を占領せり。

黑溝臺攻撃軍の各隊は依然攻撃を續行せしが、中央隊方面に於ては昨夜夜襲し來りし敵の敗殘兵蘇麻堡部落内に潜入しありて、背面より尙我を射撃せしかば、此の隊の一部は背面して此の敵を殲滅し、捕虜二百餘名を得たり。右翼隊は其背面に修二堡に前進せる支隊の現出するを知り、勇を鼓して前進を起し五家子を回復せり。修二堡に向ひ前進せし支隊は優勢の敵を攻撃して同地を占領す、時に午前三時なり。

狼洞溝にありし部隊は午前十一時同地を發し、黑溝臺攻撃軍の最左翼に連りて黑溝臺の敵を攻撃する豫定なりしも、八黄地、哈爾堡の線に在る有力の敵より背射せられるを以て、勢ひ先づ之を撃攘せざるべからず、依つて其一部を割きて修二堡に在る支隊と協力して八黄地の敵を撃退せり。敵は洪家窩棚方向に退却し、其兵力歩兵約一聯隊、騎兵一旅團、砲十二門、機關砲二、三門なり。

二十九日各隊は連續三晝夜猛烈に敵を攻撃せしも未だ其目的を達成せざるを以て、更に諸隊を激勵して夜襲を實行せしめたり。

黑溝臺攻撃軍の諸隊は全滅を期し、數回の攻撃前進を企てしも、敵の砲兵殊、機關砲のため頗る多大の損害を蒙れり、然れ共諸隊は昇天の勢を以つて攻撃を續行す。敵は我猛撃に堪へず午前五時三十分より退却を初めたり、此に於て我諸隊は遂次黑溝臺に突入し、午前九時三十分に至り至る確實に之を占領し、直ちに追撃に轉じ、烟台子を經土台子に至り、又左翼支隊の一部は黃蠟蛇子を占領せり。其他修二堡に在りし支隊は當面の敵を撃攘して七台子及北方約五吉米の無名部落に互り渾河の線を占領せり。

大臺附近に在りし部隊は此の日午前五時李家窩棚附近に在りし部隊と共に微弱の敵を撃攘して莽采河子附近を占領し、其主力は敵を追撃して渾河右岸に進出し、長灘南方千米突に達せり。是に於て軍は全く敵を渾河右岸に驅逐せり。我に對せし敵は西伯利亞第一軍團、集成軍團、狙撃歩兵第二及第五旅團、第八軍團の一部、西伯利亞第六十一師團並に獵歩兵等にして、少くも七箇師團及騎兵一師團を下らず、此の敵は四方台及年魚泡附近に退却せり。

我死傷約七千に達し、敵の損害も亦多大にして、捕虜の言に依れば我左翼に向ひし歩兵四聯隊は殆ど全滅し一中隊にして二三十人に減ぜしもの少からず、又敵の損害は一萬を下らざるべしと云ふ。

第六 クロバトキンの不決斷

グリツペンベルグの率ゆる敵の第二軍はトウ／＼失敗した、其處でクロバトキンの計畫した全線の攻撃も止まつて、我軍は大なる利益を得た。之に反して敵は其の内部に大なる争が起つて、クロバトキンはグリツペンベルグの攻撃を以て獨斷なりと云ひ、グリツペンベルグはクロバトキンの増援兵を派遣しなかつたことを詰つた、其結果グリツペンベルグは歐羅巴に歸還して、クロバトキンのために大なる反對運動をやつた。其處で此グリツペンベルグ對クロバトキンの問題が世界の各所の新聞紙に掲げられて、八ヶ間しい議論となつたが、要するに喧嘩兩成敗たるを免れなかつた。元來クロバトキンの戦のやり方が拙劣である、一たび攻撃の決心を執つたならば全線同時に攻撃に移るか、若しくは少くも全線の砲撃をして其の一部を以つて我一翼を攻撃するの手段に出てなければならん。然るに斯様な方法によらずして、先づ第二軍のみを以て攻撃を行はしめ、其旗色を見て更に攻勢を執るや否やの第二の決心をしよう云ふのは、所謂クロバトキン流萬全的戰術であつて、その特有の流義に依つたのであるから、又々失敗せざるを得なかつた。若しも一たび攻撃の決心を取つたならば、クロバト流の戰術を以つてした處で、グリツペンベルグの攻撃の

結果が不利であつたならば、飽迄も増援兵をグリツペンベルグに送つて、其目的を達せしめ且つ全線の陽攻撃を始め、夫れから本攻撃に移るようになければならん。然るをグリツペンベルグの軍のみを以て一部の攻撃を行へば、失敗するのは理の當然であつて、其の失敗を見て援兵も送らなければ攻撃の決心をも止めて、遂に責任をグリツペンベルグに嫁して仕まつたのはグロバトキン流萬全的戦術とは云へ、如何にも軍人的でない、之が則ち世界の義論に上ぼつた所以であつて、クロバトキンの信用に大なる缺陷を來した所以である。

第七 我軍戦勝の秘訣

併しながらグリツペンベルグの攻撃は我軍に取つて大なる危険を感ぜしめたのである。前にも記した通り、第三軍は未だ到着しない、而かも敵の兵力は大に優勢である、我滿洲軍總司令部と雖も之には大いに心配せざるを得なかつたのである。併しながら例へ逐次増加は云へ、約三箇師團の兵を以つて斷然攻勢を取つて敵を撃退したのは如何にも見事であつた、實に攻勢を取るのはい戦術の秘訣である、如何に優勢なる敵が來たつても、猛然として虎が飛び出づるが如く進むのは我日本武士の特色であつて、クロバトキンの所謂萬全的戦術とは大いに反對であるが。併しながら我軍に於ては如何なる場合に於ても攻勢を取るに云ふことは、則ち我軍に於ける萬全策である。茲に於て攻勢は戦捷の大秘訣であるに云ふことが明瞭になつた、併しながら如何なる優勢の敵に對しても攻勢を取るに云ふことは我軍隊より外に出來ぬことであつて、是が即ち前記の秘訣を我軍隊が獨占して居る所以である。又黒溝臺の會戦に於て戦術上著しき事實は第五師團が所謂ボア―戦術のやうな戦闘展開をやつて、敵砲兵の射界下にあつて大に損害を免かれたに云ふことである、則ち散兵は勿論後方の豫備隊までが四乃至二歩の間隔を各兵の間に取つて展開し、各兵は敵砲兵の發射を見て一齊に伏姿をなし、次の發射に至るまで更に起つて前進し、如斯間斷なく一進一止の運動を續續して敵陣地に突入したのである、此前進の有利であつたことは一般に認められて、全戦役中の特殊の事實となつた、而して

此方法は第五師團が十里河附近に宿營間研究した結果である、從來我國に於て歩兵の教練を規定した操典なるものが連發銃と速射砲時代以前に生れたものであるから、強ちに金科玉條として常に遵奉すべきものでないのである。茲に於て將來益々研究を發達せしめて、速かに操典の如きも改良しなければならん。

第三十一章 開城後の旅順

第一 第三軍の北進

第三軍は旅順の後片附をして一月下旬頃に七八縱隊となつて陸路を北進する筈であつたが、ミシチェンコの別働隊や、グリツペンベルグの攻撃のために稍々其時機が早まり、歩兵の半部は汽車行をして、第九師團は遼陽西方の地に、第一師團は鞍山站西方の地に、第七師團は海城、牛莊附近に一大開進をやつた、さうして第三軍の一部であつた第十一師團は大連から大孤山を経て鳳凰城に進んで、此當時新に編成した後備第一師團(師團長坂井重季)と合して鴨綠江軍なるものとなつた。此の軍の司令官は元第十師團長であつた川村景明大將であつて、參謀長は元野戰砲兵第一旅團長であつた内山少將である。斯様に新に沙河方面に二個の軍が加つて、今や敵を攻撃して之を奉天以北に驅逐しように云ふ大勢が定まつたのである。

第二 ステツセルの厚顔無恥

第三軍で受領した凡てのものは遼東守備軍で受持つことになつて、捕虜の輸送の如きも行つたのである。此捕虜の内では我國に再び敵對しないに云ふ宣誓をして本國に歸る將校も、然らざるものがあつた。要塞の總司令官ステツセルは前者の部類であつて、其他の多くのものも宣誓歸國することになつたが、將官の内に宣誓しなかつたものはフオー

ク、スミルノフ、ゴルバトフスキー及ウイلمانのみであつた。此宣誓歸國については色々人々の考へもあらうが、ステツセルが歸國するといふ一段に至つては、今迄彼に向つて捧けたる尊敬の大部分を減却せざるを得ない、彼は猪武者のやうに勇敢なる將軍として傳へられた、然るに三萬以上の兵を餘して開城したのみならず、半歳以上の間相共に辛苦艱難して城を守つた將士等を日本に送つて、己れ一人本國に歸るに云ふことは、要塞の總司令官として行はるべきことでないのである。元來軍人が戦時に其の敵に對して敵對行爲をせんなきに云ふ誓をするは頗る愧つべきことではないか、夫れも位置の低いものなればイザ知らず、要塞の司令官たるものが恬然之に愧ぢず、且つ部下に對する同情もなく、オメノノ開城の面を下けて本國に歸るに云ふのは畜生同様の根性ではないか。日清戦役に威海衛で藥を飲んで死んだ丁汝昌の方がまだステツセルよりは優つて居るのである。茲に於て予は白人種なるものが、其文明を以て世界に誇つて居るが、其心術に至つては我等よりも下劣であつて、彼等は全く文明に云ふ化けの皮を被つて居るものであると考へる、茲に至てなんでもかんでも歐米人だからと云ふて尊敬するものゝ氣が知れない。

第三 國民自尊心の缺之

大連に於る俘虜の輸送は非常なる混雜なものであつた、我兵站監部に附いて居つた須藤に云ふ通譯が俘虜輸送のため大連に助力に行つて一月ばかりして戻つて來たが、其話に俘虜が俘虜たるにも拘はらず、大に威張つてなんぞか理窟を云つた、彼等は俘虜になつたのを恥とも思はないで、勝手我儘を云ふて苦情を並べて居つた、さうして日本人は遠方から客が來たやうに斡旋奔走至らざるなしで、彼等は俘虜のために追ひ使はれて居るやうであつたに云ふた。何たる馬鹿けたことであらう、通譯の話す處に依れば、俘虜は日本の輪卒が何處かの往來で圖らずも衝突したことがあつて、其時俘虜が日本の兵に斷りを云へし云つたことである、斯様に俘虜が傲慢になつて居る、又曰く俘虜の

子供が輸送中に死んだので死亡證書を書いて呉れし兵站司令部の役人に迫つたときに、其役人が通譯を呼んで死亡證書を露語に翻譯させて渡さんとした。通譯は拒んで曰く、日本の官憲が死亡證書を露語で書くに云ふことはないことだ、其處で始めて日本の證書を與へたに云ふことであるが、之で日本人の如何に俘虜を客あしらいにし、且つ自ら卑屈になつて居つたか云ふことがわかる、斯様な風であるから俘虜の跋扈するのも無理はない、實に我國民の自尊心のないのは驚き入るのである。

第四 旅順攻撃の物語

黒溝臺の戦闘の砲聲がまだ盛んに聞へて居る最中に、第三軍の先頭部隊は驚いたやうな顔をして遼陽に到着した。第三軍に屬して居る朋友の内第一に予を訪ねて來たものは某大尉で、第二番に來たのは某中尉であつた、久し振りの對面で、諸種の愉快なる話をしたが、旅順要塞攻撃の物語りに至つては實に聞くに忍びなかつた。要塞の攻撃法に至つては絶対に不同意であるこの前提を以て某は先づ語つた、旅順の攻撃には其左翼二〇三高地及椅子山の方面を攻撃點として先づ之を占領しなければならんに云ふことは明治二十七八年戦役の經驗を以てわかる、何を苦しんで幾度か正面攻撃のみを続けなければならんか云ふやうなことから、予は略ぼ同一の意見を吐いて、さて其の實況に至つては第九師團某歩兵聯隊の如き全滅に陥つたものもあり、隨て人員の補充に非常なる困難を感じた、それも其筈である、元來堡壘の偵察が不充分で、突撃のときに外壕などは譯もなく跳越すことが出来ると思つて、斜堤頂の處まで驅け付けて見れば深さ十五米突もあり、幅も略ぼ同様であつて、跳ぶにも跳はれず、越ゆるにも越えられず多くのものは斜堤頂上に止まつて仕舞ふに、敵は此處を撃ち出すので、見る間に屍の山を築いて、僅かのものが退いて來るのであるから、全滅は尤である。壕の中に勇敢に飛び込んだものは、側防の機關砲で全く斃されて、之等の死骸をすらも片付ける譯には行かない。斯様な風であるから軍司令部の命令などがサツパリ行なはれないで、參謀等は此要塞の

攻撃はドウしたらよからうか今更のやうに當惑した位であつた。僅かに二〇三高地の取れたのに依つて一縷の命脈を繋いで攻撃を續けるに至つたのである。殊に攻撃に最も必要なる火炮の彈藥が常に不充分なるがために、毎攻撃に彈數を制限せられて、歩兵を援助することすら出来ない、一箇中隊に二三百發の配當を受けて、少しく發射すること直ぐ彈藥がなくなる、射撃はバツタリ止まる、是では歩兵の突撃が出来ないといふので、又一、二百發の配當を受けて又暫らく撃つて直ぐ止む、斯様なことを幾度か繰り返して少しも氣の乗らない射撃をして居つた云ふことである、某中尉は又告げて曰く、旅順の總べての失敗にも拘らず、二〇三高地を占領し得たのは全く兒玉大將のお蔭であつた、最も悲惨なる第四回攻撃の失敗は軍司令官以下の士氣を全く阻喪せしめて、殆んど皆今後如何なることを爲すべきやを知らなかつた、此時に當り二〇三高地を取らねばならん云ふ決心を以つて居つたのは兒玉大將一人であつて、此高地の占領は第一師團及第七師團の兵力を以て大に努力したが、他の堡壘よりする側防的射撃は非常に我軍を苦しめて、幾度かの突撃を失敗せしめたが、此時尙さうあつても此高地を取らねばならん云ふ決心を捨てなかつたので、終に第七師團の兵力を全部を使用して此高地を占領した、而して此高地の占領は直接旅順に致命傷を與へたのであつて、ステツセルをして開城の決心をなさしめたのも此高地のためである、即ち旅順を陥落せしめたものは第三軍ではなくて全く兒玉大將である云語つた。予は此物語を大なる興味を以て聞いたのであつた。

第五 東郷大將の伏奏と敵艦隊

二月の初め頃東郷大將は非常なる歡迎裡に入京して海軍戦局一部の結了を陛下に奏上した、大將曰く旅順艦隊は既に全滅に歸したるも、敵の第二、第三太平洋艦隊は東洋に向つて進航しつゝあるのであるから、未だ其の任務を終つたものでない、随つて今回の上京は凱旋にあらずと、併しながら戦争の初め

に當つて殆ど我と均勢の敵艦隊は黄海及日本海に遊弋して、勝敗の數未だ俄かに斷言することが出来ないとして、勇敢にして且つ訓練ある將卒を乗せて居る我艦隊ですらも悔るべからざるものにして、居つたものが、第一回の水雷襲撃以來事毎に破れて、旅順に於けるものは勿論、浦鹽に於けるものも殆ど全滅。姿になつて、開戦當時に芝罘及膠州灣に遁けた驅逐艦迄も武装解除をして、茲に全く旅順艦隊の全滅を見るに至つたのであるから、大將の喜は恐らく人の想像以外であらう、併しながら恭謙なる大將は自ら謙損して敢て凱旋云はなかつたのである。

此時に當つて敵の第二太平洋艦隊はマダカスカルの佛國領海に入つて、此處に蘇士及喜望峰を通過した二艦隊を集め、且つ遠征の一休憩所として、同時に爾後航海の準備位置として暫らく碇泊して居つた、此碇泊中に將卒の訓練を行ふたる事實もロイテル電報に依つて屢々傳へられた、敵は果して何時マダカスカルを出發するや、是れ世界全般の等しく注目を凝らして居る處である。

併しながら此艦隊がマダカスカルを出發し得るや否やは一個の疑問として考へられた、夫れは扱て置き我海軍に於ては來るや來らざるやの疑問を發するよりも、來るも來らざるも我備を完全にするに如くはなしにして、二〇三高地の觀測に依る敵艦砲撃の頃より、我軍艦をドックに入れて修繕に掛つて、今は其の眞最中である、海軍工場及造船場は實に晝夜兼行の姿であつたのである。

此頃に於て後備第二師團並同師團兵站監部が編成されて、北韓方面に輸送され、其の上陸點は城津であつた、師團長は中將三好成行氏で、兵站監は少將山田保永氏である、此の獨立師團は韓國駐劄軍司令官の指揮下にあつて、北韓方面に敵を牽制するの任務であつた、併しながら其詳細はなかく分らなかつたのである。

第六 意義ある大連の改稱

二月十一日以後遼東守備軍司令官は青泥窪を大連に改稱した、ダルニーは露語不凍港の意義で、敵國がビートル大帝以來常に不凍港を得やうとあせつて居つたが、クリミア戦争の結果でダーゲネルの海峡は露國軍艦の出入を禁ぜられたが爲め其の志を果たさず、其處で中央亞細亞を征服して印度ペルシャの方に此の港を得ようとして見たが、英國といふ強敵があつて此處にも出られず、其處で英佛聯合軍の北京攻撃のときに其の仲裁に這入つて浦鹽斯德まで手を出して見たが、此處も思はしくない、其處で又滿洲に手を出して人の目の前を巧みに瞞着して旅順と大連灣を得て大に喜んで、非常なる宏大の規模を以て設備をしたが、悪事の罪は踵を旋らさぬ内に頭の上に加はつて、日本から取り揚げられて、矢張り不凍港は得られないのである、折角不凍港といふ名をつけて喜こんだのを取り揚げられたのは何たる氣味のよいことではないか、之に反して我はダルニーの名を廢して大連と云つたのも更に大いに心持よきことではないか、大連は大に連戦連捷をして得たといふ意義であらうか、些細の事ながら予は此報知に快感を禁じ得なかつたのである。

第三十二章 奉天の大會戰

第一 大會戰前の大展開

二月の中旬頃には第三軍は既に前記の開進地に集合し終つて、更に之から小北河附近に集中の運動を始めた。同軍司令部も、同兵站監部も小北河に移つた。此地の前方に在つて田村少將の率ゆる騎兵第二旅團と、井戸川少佐の率ゆる馬賊隊とが其の前面を警戒して其の集中を掩護した。之と同時に鳳凰城附近に集合した鴨綠江軍は、所謂義軍と稱する花田少佐の率ゆる馬賊の掩護の下に城廠方向に前進して、二月中旬には既に其の位置に著いて、其の一支隊は葦子峪をも占領し、其の軍司令部は城廠に、其の兵站司令部は鳳凰城に位置して、一大進展の形勢は既に漸く熟して居る

のである。茲に一言を費すべきは第三軍兵站監部は第八師團と共に遼陽に來りたる同師團兵站監部の變形であつて、鴨綠江軍兵站監部は前に大連に在つた元第三軍兵站監部の改稱である、ことである。

第二 大會戰の序幕

是の間に於て戦雲は漸く濃かに且つ漸く動いて、二月の二十日頃には總司令部から戰鬪に關する命令が出て、且つこの實行の爲めに各軍司令官は總司令部に集合した。二月二十四日には鴨綠江軍が先づ動いて城廠と本溪湖との間に在る青河城を攻撃し、二十五日に之を占領したる後、二縱隊となつて撫順の方に行進を始めた。則ち第十一師團は青河城から馬群丹、石佛廠を経、撫順に通ずる道路を、後備第一師團は葦子峪、池塔を経、撫順に通ずる道路上行進した。同二十七日には第三軍が其集合地から三縱隊となつて出發した。則ち第九師團を右翼に、第七師團を中央に、第一師團を左翼にして渾河と沙河との間の地區を相並んで進んだ。

三月一日には第一、第二、第四軍が全線の砲撃を行ふて、第二軍は其翌日から長灘を攻撃して是を占領した、此軍は第四師團を右翼に、第五師團を中央に、第八師團を左翼に配列して李大屯から長灘の方面までを占領して居つたのである、此の軍の後方には全軍の總豫備たる第三師團と後備旅團三個とが狼洞溝附近に控へて居つたのである。第四軍は二日の午後から前面の敵に向ひ攻撃を試みたが成效の見込がないので、敵前に於て其運動を中止した、此軍は第十師團を右翼に、後備歩兵第三旅團を中央に、第六師團を左翼に並列して蒲草窪から林盛堡の間を占領して居つたのである、別に富岡大佐の率ゆる一支隊があつて第四軍と第二軍との中間を填塞して居る。第一軍も二日から前進運動を起したが、其左方に於ては成效をしないで、唯右方に於ては鴨綠江軍と連繫して山地の行進を續けた上に、王富嶺、車頭嶺を占領した、之が即ち第十二師團及近衛後備混成旅團の方である。其左には第二師團、又其左には近衛師團があつて、歪頭山までを占領した、別に三岳中佐の率ゆる一支隊があつて、第四軍、第一軍の間を填塞した。斯

様な部署を以て大活劇の序幕を演じたが、其正面五十里以上に達して、戦闘實員三十五萬を下らなかつたのである。

第三 露軍の配置

敵は元レネンキャンプの率ひたる騎兵團を最左翼に、リネウイツチの第一軍を我第一軍の前面に、カウルスバールの第三軍を我第四軍の前面に、元グリツペンベルグの率ひた第二軍を我二軍の前面に、元ミシチエンコの率ひた（ミシチエンコ黒溝臺の負傷後今はレネンキャンプ代り指揮す）騎兵團を最右翼に置いて、是も同じく三月一日頃から攻勢を取るの計畫であつたさうであるが、青河城の占領に其最左翼を脅やかされてから、全く攻勢運動の計畫を捨て、其最左翼の危険を救ふためにレネンキャンプを其騎兵と共に急に此方面に向けた。且つ敵は我第三軍が城廠方面に運動したものを誤解して此方面を防ぐに全力を用いた、さうして青河城の占領されし後シタケリベルグの率ゆる西伯利第一軍團を第二軍から分離して馬群丹方面に向はしめた。此最初の誤解が兩軍の間に非常なる懸隔を生じて勝負の數を分かつたのである。

第四 奉天會戰の概要

我第三軍は二十七日以後敵の抵抗を受くるこゝなく三月二日に至るまで北方に其行進を續けた。第二軍は第三軍に連繫して長灘占領後、處々敵の抵抗を撃破して蘇胡堡に至るまで前進を續けた。然るに第四、第一軍は突撃のため近きは敵前三四百米突まで前進したが、成功の見込なきに依つて現状維持の姿となつて遂に七日に至つた、是れ敵の防禦工事の堅固なるこゝ、兵力の優勢なるこゝに依り已むを得なかつたのである。鴨綠江軍は其左縦隊を以つて馬群丹、右縦隊を以て池塔まで前進したが、此處に全く阻止せられて之も七日まで進むこゝが出来なかつた。

クロバトキンは我第三軍の渾河右岸を前進しつゝあることを二月二十八日に於て始めて知り、其第二軍を以つて之を防がんとし、一旦奉天西方の豫め構築したる第二線陣地に就かしめたが更らに此第二軍を沙河子附近まで進出せしめて、我第三軍を迎撃せんとした。然るに我第二、第三軍の連繫運動のため其目的を達せずして其第二線陣地、即ち李官堡、揚士屯の線に退いて我兩軍の前進を阻止せんとした。

我鴨綠江第一、第四軍は依然として現状維持の姿であつた間に、我第三軍は沙河子附近に於て一度敵と戦闘を交へしが敵の退却に伴ひ益々北進して、奉天新民街道の北方に出た、大石橋附近に於て再び敵の逆襲を受けしも、之を撃退して奉天を遠く北方に包圍する如く運動した。我第二軍は漸次左方に轉進して揚士屯、李官堡の線に迫つて之を奪取せんとしたが、頑強なる抵抗に遭ひ、加之屢々逆襲を蒙り、頗る苦戦した。我第三軍は九日に至る迄更に包圍運動を續続したが、田義屯附近に於て第三回の逆襲を受け、之も亦頗る苦戦をしたが遂に之を撃退して我第二軍と共に其の位置を維持した。

クロバトキンは嘗て撫順方面に移動したる西伯利第一軍團を再び奉天西方に招致する命令を發して、其第二軍を以て再び逆襲に轉じたが、此の軍團が豫期の時間に到着しなかつたが爲め、何れも失敗に終つた。そこで七日の夜を以て其の第一、第三軍を渾河南方の第二線防禦陣地に退かしめ、之に據つて生じたる剩餘の兵力を其第二軍に加へて、奉天西方及北方の壓迫を免かれんとした。我第四、第一及鴨綠江軍正面の敵は夜に乗じて退却を初めたので、我三箇軍は八日早朝より猛烈に追撃を始め、九日には殆んど渾河の線に達した。我第一軍の一部は更に渾河を渡つて其北方の敵を驅逐した。十日には各軍更に前進し其日の午前十時に第六師團を以つて奉天を占領した。我第四軍の他の部隊及我第一軍は奉天を軸として大なる左旋回をなして、奉天鐵嶺街道上に出で、今將に退却しつゝある敵を横撃し。鴨綠江軍は撫順に至つて停止した。我第二、第三軍は三月九日の苦戦の後十日に於ける敵の退却を追撃並に横撃した。如斯十日十一日を以つて全軍の總追撃をなし、十二日には右翼颯起屯より左翼石佛寺の線に停止して、軍の整頓を圖つ

て小部隊を各軍より前方に出した。

敵は渾河南方の第二線陣地に據らんとしたが、退却の勢遂に支ふる能はずして此處に全軍の潰走となつて、大部は奉天鐵嶺街道及鐵道線路との中間地區を、一部を以つて撫順鐵嶺街道上を遠く開原以北に退却して此處に該戰團の終局を告げた。

第五 十五珽臼砲彈の落下

予は三月三日の午前四時に宿舍を出で、兵站監と共に遼陽から汽車に乗つて當時兵站司令部のあつた十里河に赴いた。内地ならば三月の始めは梅の蕾の綻びて、木の芽も萌え出でて、春の景色の何處かに現はれ、人の心の打笑まるゝ頃であるが、此處の三月はまだ冬の眞最中で、特に午前四時頃は一日の最低温度で、恐らくは零點下四十度位であつたらう、上衣を二枚、袴も二枚、外套迄二枚着てそれでも汽車の中は例の緩急車であるから暖かいと云ふ程ではなかつた、切る様な北風が兩側の戸の隙間から惡魔のように襲つて來るのであつた。汽車は當時重砲の彈藥廠のあつた柳塘溝に着いて、夜道を曉の明星に照らされつゝ、雪に印した足跡をたよりに半里ばかりも進んで、僅かに東の空の白む頃十里河に着いて、兵站司令部の門に足を踏む途端に、大なる響が一發頭の上からあびせかけるようにやつて來た、同時にその家の障子は大なる震動をした、之が其の日の撃ち初めてであらう。敵の十五珽臼砲の彈丸がこの兵站司令部の附近に落下したのである。

兵站司令部に於て三十分ばかりの休息をしてゐる間に、障子の震動は爆聲と共に益々激しくなつた、今にもこの家の屋根の上に落ちかゝつて來るかと思はれるようである。夜は全く明けた車のきしる音、馬の嘶く聲は銃砲聲と相伴つて一種悲壯なる物音を起しつゝ、家の中にあることが却つて大なる危険の如くに感ぜられた、そこで戸外に出で、見れば左程でもないのである。兵站司令部の馬に打ち乗つて予は一人軍司令部に赴いた、前黃花甸に在つたのである、

道はドチラであるか明瞭でないが、電信線を傳つて白雪皚々たる野を紅寶山を左に見、如何にも貧相な村を一つ二つ打過ぎて馬を飛ばした。銃砲聲は追々劇しくなり、敵の十五珽臼砲彈は行く道の左五六百米突の處に幾度か落ち、其の不愉快なる音と黒き煙とを同時に發しつゝ、我々を脅かした。紅寶山の山の頂にある雪は漸く東の空に上つた太陽の光線をギラ／＼と反射せしめて、我行く道を殊更に輝かすようである、十里河を出で、一里半ばかりも來つた馬を止めてその行く手を眺むれば、乗馬者の幾人も出入する所、之が軍司令部であらうと、雪を蹴つて眞一文字に飛び出して見れば果してそうであつた。僅かに五六軒の家と壊れた土塀とがあるばかりで、村といふのも殆んど名ばかりである、併しながら電線は幾條となく此處に集まつて居つた。

第六 軍司令部の大混雜

軍司令部の中は今大混雜の最中である、昨日即ち二日の午後から其歩兵を以て突撃をして見たが、敵前數百米突に止つて進むにも進まれず、退くにも退かれず、既に一夜を明して今はドウしようかと云ふ思案の最中である。參謀部の傍には電話機の七八臺、電信機の三四臺も据へ付けられた一室があつて、此電信電話によつて戰況は時々刻々と報ぜられる。參謀の二三名は常に此處に詰めて居つて對話をして居る、處が目下の戰況に於て今後如何に處置をしようかと云ふことは未定問題である、諸種の議論もあつたが、現状維持と云ふより外に術がない。處が第二、第三軍の狀況も洩れなく報ぜられて、此時第三軍は沙河子附近、第二軍は蘇胡堡附近まで進んで居るのに、第四軍は一步も動けないと云ふ狀況に立ち至り、如何に軍司令官以下が苦慮されて居るかは其混雜によつて見ることが出来る。予は目下の狀況を聞いて之を兵站監部に電報し、且つ兵站の將來に關しても意見を加へた。

第七 二十八珽榴彈砲の砲撃

予の任務は今日では之で終つたのであるが、空しく戦場を去るに忍びずして、再び馬に跨つて三角山の方に赴いた、第一線は砲煙と朝霧とに閉ざされて、其の中から獨り三角山が此附近の平地を見下すように聳へて、其の後には第一軍の占領して居る山々が微に雪の且の覆の中に其半身を現して居る、滿目の雪野は處々電話線を以て横ぎらるゝ許りで、道は勿論人の足跡もなく、進むに従つて銃砲聲は益々熾になつて、時折は敵の榴散弾が目の前に破裂して、其丸子がヒュン／＼と不愉快なる音をして我々の頭上を掠めて行く、思はず首を縮めて後で氣が付いて我々乍ら臆病なのを笑つたこともあつた。其處で馬を飛ばして一息に三角山の麓まで駆け付ければ、折しも發射したる廿八珊榴砲の音に驚かされて馬は益々第一線の方向に延びて居る凹地に走つた、此處では小銃弾や丸子が益々飛ぶようであつてヒュン／＼の音は頻りに聞へるが、今は此物音にも馴れて、漸く馬の頭を回して優々と廿八珊砲の胸壁まで來たつた、此處に馬を繋いで其射撃を見るべく止まつた、此處にあるものは唯二門で、其胸壁は土囊を厚く高く積上げて作られて在つて、其砲床は二月の初め頃から太子河の砂利を運んで作つた處のベトン製である、觀測場は三角山の頂上に在つて、砲臺と電話を以て通信するのである、砲臺の下から單線の輕便鐵道が敷かれてあつて、此鐵道に據つて其彈丸は柳塘溝停車場から運ばれるのである。小さなトロックに此大きな彈丸を二つ宛乗せて輸卒が逐次押して來る、射撃は二分に一發位の割合で極めて緩慢に實行されて、其大なる砲聲には敵よりも味方が驚きそうである。唯今日の野戦に於て發射と共に黒き煙の出るのは異様に感ぜられた。約三十分許り此射撃を見た後、三角山の觀測場まで登つて見たが、我曰砲や野砲の陣地が見ゆる許りで、歩兵の線は霞か霧か將た砲煙かの中に埋没せられ、唯渾河一帶の朦朧たる地形が見ゆる許りであつた。其暇に二十八珊砲の射撃もやんだので、山から降りて時計を見れば早や十二時であつた、一時までに十里河に歸ることを兵站監に約束したことに氣が付いて、馬を飛ばして輕便鐵道線路に沿ふて豫定の時間に十里河に着いた。

第八 支那人と同宿

目下の狀況と、將來の兵站設置に關する意見を兵站監に報告をしたが、兵站監は之を聞いて後木村主計と共に烟臺に歸られた。折しも此處に來合せた岸本戰醫部長と共に兵站司令部の宿舎に着いて、明日の任務のために一夜を明さんとした。宿舎は支那人と同居であつて、狭い炕の上に我々二人の外膳鐵工二人合計四人のものが宿泊するのである。戰場附近の兵站司令部のことであれば、未だ何も揃ふて居らぬ、一椀の飯に汁をかけて、或は飯を一膳喰ふて其の椀に汁を注いで是を吸する、詰り一の椀で飯と汁とを交番にやると云ふ流儀で其日の夕餉を済ました、障子の震動は絶間なく我々を脅かしたが、漸く馴れて今は氣にも留めずに眠に就いた。併し乍ら夜に入つてから四隣の物音は益々手に取る様に聞へて、剩へ砲聲は益々激しくなつた、眠には中々就かれない、そこで外套を引冠ふつて糧秣集積場の方に赴いて此依の山の頂上に立つた。

第九 驚くべき戦場の夜景

若しも世の中に最も壯觀なるものは何であらうかと問ふたならば、戦場の夜景であると答ふべきを知つた。同時に若しも世の中に最も悽愴なるものは何であるかと問ふたならば、夜の戦場の物音であると答ふべきを知つた。唯是より以上に人の形容を許さぬのである、唯此の依の山に登つた一瞬間に感じた處のものが是である、恐らくは我銃砲は發射を止めて居るであらうが、敵は晝も夜も砲撃を止めないのであるから、驚く許の深山なる電光が一行をなして瞬く間に輝く、此輝きが敵の全線に亘つて間斷なく明滅して居る、小銃火の光は其稍々下に天の川のやうにぼんやりと霞んだ様に明るくなつて居る、簡單に云へば驚くべき速度を以て明滅する非常に大なるイルミネーションである、此のイルミネーションの後方に二ヶ所にも三ヶ所にも火事が起つて、天を焦す様に半天を紅に染めて居る。そうかと思

ふと榴霰弾の破裂が時々花火の様に空中に揚つて、俄に暗の空を輝かして、地上に物の影を現はす、其物凄きこと驚くばかりであつた。之等の有様は物其物が自らを現す許りで紙にも筆にも盡し得ないのである。

戦場の夜風は烈しく俵の山を拂ふて予を吹き落さん許りである、加之零下三十度に近き低温度の空気が予をして長く此の上に立つ能はさらしめた、觸るれば切れる様な俵の繩を繰り乍ら足元危く此山から降りて立つた一瞬間は驚くべき壯觀の目から離れた、其代りに何處となく悽愴なる物音が耳を劈いて腦底に達した、銃砲聲が熾に轟く、其間に縦列が車を曳いて走る音が微に聞へる、そうかと思ふと砲弾が家の屋根を打壊すやうな音が聞へる、耳を聳てれば人の悲鳴の聲、馬の嘶き、犬の遠吠へ等が代る／＼、或は遠く、或は近く聞へて何とも言ひ得ない一種の感覺を惹起さしめる、見上ぐれば眞黒な空に星が爛々と輝いて居る。

再び眠に就いて二三時間許りも眠つたと思ふ頃に目が覺めた、銃砲聲は今迄になき烈しさを現して我々の夢を破つたのである、スワヤ敵の夜襲ならんかと頭を上げて耳を傾むくれば益々烈敷なつた、蹄鐵工を起して兵站司令部に赴いて電話で目下の状況を軍司令部に聞かした、間もなく重砲聲は衰へて三度眠りに就いた、戦闘始まつて以來毎夜此通りであるそうである、勿論大なる状況の變化はないのである。

第十 砲兵觀測臺上の展望

予は沙河停車場及其附近の部落の現状を偵察すべき任務を帯びて居つた、明くれば三月四日即ち予の誕生日である、何時もならば母が御馳走を拵らへて知己の人共を呼ぶのが例であつたが、今は戦場に假りの夢から醒めて顔も洗ふか洗ねぬに、早や馬を飛して岸木獸醫正と共に八家子なる第六師團司令部に赴いた。此處は戦線に間近い村落であつて、時折は敵の十五珊臼砲の弾が此村の家の屋根を貫いて、負傷者を生せしめ大なる混雜を起すのであつた。

兵卒等が戦線の方から露兵の死體に繩を付けて引きづつて行くのを見た、砲兵の段列が横隊を以て彈藥補充に進むのを見た、榴霰弾は相變らず頭の上に破裂して屢々其丸子が我々のあたりを掠めた、八家子には高さの三丈許りもある觀測所が設けられてあつた、物好きにも此の上に登つて見た、風は上げしく此臺の上に吹きすさんで危なく感ずるまで此臺を動した、併し戦場は極めてよく展望することが出来る、有名なる萬寶山は彼方に其形を現して其左下に海鼠山が横たわつて居る、是と相對して我陣地には勝山の頂が聳へて、其處に野戦電燈が備つてあると云ふことであつた。沙河堡は其麓に、拉木屯は其左に、地獄の森は又其左に、沙河の停車場は終りの二つの中央後に、それから稍々隔つて左に林盛堡、其稍後方に樹林子と云ふ様な配列に村々が目下に位置して居る、其間に十五珊臼砲の彈丸が今乗つて居る觀測臺の下の家の壁を撃抜いた、混雜は又もや起つた、樹林子には二十八珊榴彈砲が二門、沙河停車場の北端には我十五珊知臼砲が十二門許り備へ付けられて、緩徐乍ら敵の惡彈に應射して居る。沙河停車場の給水塔が臼砲のための觀測臺となつて居る、併し乍ら今日は一般に大なる砲戦はなくて、昨日に比し靜穩である、徐ろに展望臺を下つて馬を飛ばして沙河停車場の偵察を遂げた、憐れにも此停車場の總ての建物は焼かれた上に、砲弾のために破壊せられ、羅馬の墟址のように建築物の殘骸が殘されて、見る影もなき形である。偵察を遂げて歸りつゝあつた途端に、野戦鐵道の建築工が停車場の南方七八百米突の處で鐵道の改修をやつて居つた、其の中に例の十五珊臼砲彈が落ちた、工夫等は道具を捨て、蜘蛛の子を散す如く四方に逃げた、其有様の滑稽であつたことは今も目の前に散ら付いて居るのである、幸に大なる損傷もなかつた様であるが、予は是等を顧る違なく、午後二時發の列車に乗るために烟臺迄馬を飛ばした、汽車に乗つて歸つた。危険の間に出入して幸にも我誕生日は事なく終つた、早速此様を認めて母に送つた、恐らく母は神の冥護に感謝したであらう。

第十一 奉天會戰の戦況

敵は三月十日奉天を占領されて昌圖以北に退却して此戦闘は終つた。戦闘の公報は次の如くである。

興京方面

二月十九日 當方面の兵團は其運動を開始す。

二十日 右翼隊は千合嶺及榛子嶺附近に在りし歩兵約二大隊、騎兵約二中隊、山砲約二門より成る敵を攻撃し、午後四時三十分同嶺を占領せり。敵は死屍二十を遺棄して金斗峪方向に退却す、此日捕虜一名、武器、被服若干の戦利品あり。又其左翼隊は小高力營及蛤蟆嶺附近に在りし歩兵約二大隊、騎兵約一中隊の敵を驅逐し同地を占領せり。

二十一日 午前九時頃敵の歩兵約一大隊及砲四門より成る一隊灣柳河の東方に集合し、又歩兵約二中隊灣柳溝より金斗峪方向に行進するを見る。午後四時頃に至り敵の砲兵約一中隊英守堡（灣柳河の西南三吉）附近に現れ我に對し砲撃を開始せり
我砲兵之に應射して日没に至る、此日灣柳河嶺に運動せし敵の砲兵約二中隊あり。

二十二日 午前十時頃灣柳河附近の敵砲兵は我右翼隊の第一線を砲撃し、正午頃其歩兵約三中隊我右翼隊の左翼に、又約一中隊は左翼隊の右翼に向ひ逆襲し來りしも共に之を撃退せり。此日午後右翼隊は灣柳河附近の防禦工事に據れる歩兵約一聯隊、砲兵一中隊の敵を攻撃して之を撃退し、其一部は敵の抵抗を受くることなく午後四時金斗峪を占領せり。又左翼隊は南臺子附近に開進し、清河城附近の敵に對して攻撃の準備に着手せり、此際敵の歩兵約四、五中隊攻撃し來りしも之を撃退せり。

二十三日 豫定の如く清河城附近の敵を攻撃す。此日降雪紛々咫尺を辨せず、加ふるに太子河の融氷を以てす、之がため諸隊の運動大に困難を極む、特に敵は天險に加ふるに數ヶ月以來堅固なる築城を施せる陣地に據りて頑強に抵抗せるが故に日没に至り終に攻撃を中止するに至れり。

二十四日 拂曉より更に攻撃を續行し遂に午後六時全く同地を占領せり。諸隊は機を逸せず追撃に轉ぜしも、地形と夜暗とに妨げられ速く之を急追すること能はざりし。此日我に對せし敵は馬群丹方向に潰走せり。戰場に遺棄せし敵の死體的百五十、捕虜二十四名、機關砲三門、小銃約二百、小銃彈藥約十萬發等あり。捕虜の言に依れば我に對せし敵は豫備歩兵第七十一師團の全部にて野山砲二十門を有し、各中隊の人員約五十名あり、而して其二三中隊は殆ど全滅に歸せり、又東部西伯利狙撃歩兵の一部も此師團の西方に到着しありと。

二十五日 拂曉より追撃を續行し、右翼隊は西川嶺附近に達し左翼隊の一部は大嶺附近に在りし東部西伯利亞狙撃歩兵第二十二聯隊及豫備歩兵第七十一師團の一部より成る歩兵約三大隊の敵と衝突して日没に至る。

二十六日 早朝より更に追撃を續行し、右翼隊は微弱なる敵を驅逐し、午後三時五龍口を占領せり。又左翼隊の主力は八盤嶺附近に在りし砲兵を有する兵力未詳の敵を驅逐し、更に進んで五百牛嶺を占領せり、大嶺附近の敵と對峙せし我左翼隊の一部は本日此敵を撃退し、多大の損害を與へたり。敵は沿道の村落を悉く燒棄して退却せり。

二十七日 右翼隊は更に追撃を續行し、地塔附近に於て新に來着せし西伯利狙撃歩兵第二十三及第二十四聯隊、野砲八門、機關砲四門より成る敵と衝突して日没に至る、又左翼隊は救兵臺東方高地より五百牛嶺西方高地を経て馬群丹南方高地に亘り陣地を占領せる敵に對し砲撃を開始せしも、地形の關係上未だ攻撃を實施するに至らず。

二十八日 左翼隊は敵を撃退して救兵臺東北高地及五百牛嶺西北高地を占領し、猶夜襲を以て馬群丹南方高地の敵を撃退することを勉めたるも其成果を見るに至らず。此日午後四時頃敵の歩兵約三大隊荒地附近に進入り、其一部は我左翼を脅威せり。

三月一日 左翼隊は一支隊を頭道溝附近に出して我左側を掩護し、且つ沙河方面の右翼兵團と連絡せしめ、尙攻撃

を續行したるも、敵は數線の堅固なる防禦陣地に據り、且つ其兵力漸次増加し、西伯利第二十一、第二十二聯隊も此方面に増加し來り、之がため攻撃進捗意の如くならず、又右翼隊も地塔方面の敵兵漸次増加するを以て現状を維持するの止むを得ざるに至れり。

二日 馬群丹及地塔方面の敵は益々其兵力を増加し、頑強なる抵抗をなし、屢々逆襲を試みたるも盡く之を撃退せり。

三日 戦況著しき發展を見ること能ず。

四日 左翼隊は拂曉より尙馬群丹の攻撃を續行したるも、地形險惡にして目的を達するに至らず。右翼隊は主力を以て地塔附近の敵に對して一時現状を維持し、其一部を馬群丹方向に前進せしめ、左翼隊の攻撃を援助したり。此日右翼隊の左翼に向ひ敵兵猛烈に逆襲し來りしも之を撃退せり、此方面に新に第二十二師團の第八十五聯隊及他の二個聯隊増加し來れり。

五日 左翼隊は早朝より馬群丹方面の敵を攻撃し、漸次其歩を進めたるも、尙未だ敵陣地の全部を奪取するに至らず、右翼隊は依然敵と相對峙せり。

六日 左翼隊は更に攻撃を續行し、遂に夜に至り漸く荒地東北高地より樺子勾西北高地に亘る線を占領するを得たり。右翼隊方面の敵は屢々小逆襲を試みしも悉く之を撃退せり、該隊の右翼にはレンネンキャンプ支隊の一部行動し、又永陵方面の敵も此方面に増加し來りたるが如し。是より先懷仁方面に前進せしめし我一部隊は本日全く懷仁を占領せり。

七日 我左翼隊は引續き杜家堡子北方高地の敵を攻撃せしが、又其目的を達すること能はず、依て一支隊を其左側に派遣し、沙河方面より應援し來る支隊と協力し、馬群丹南方高地の敵を攻撃せしも未だ突入に至らず、我右翼隊方面は狀況依然たり。

八日 更に攻撃を續け、遂に馬群丹の敵を其陣地より撃退し、腰嶺附近よりレントウワン(腰嶺と石佛廠の間)に亘る線に達することを得たり。

九日 左翼隊は敵を急追し、午後五時半頃敵の後衛を驅逐しつゝ、渾河左岸に進出せり。又右翼隊は昨八日より更に猛烈に攻撃を繰返し、夜半まで續行し、本日午前三時全く敵を撃退し尋で追撃に轉ぜり。

十日 敗退せる敵は數日來堅固なる防禦工事を施せる撫順北方の陣地に停り我を拒止す。時に渾河の中流既に解氷し、橋梁に依る外渡河し能はざるを以て、我攻撃甚だ困難なりしも、左翼隊は百難を排し、最も勇敢なる攻撃を行ひ、本日夕に至り全く之を撃退し、續いて夜半に至るまで猛烈なる追撃を續行せり、是に於て撫順附近の地區全く我有に歸せり。又右翼隊は今朝來猛烈なる追撃に移り、本日夕渾河左岸に達せり。此際敵は其附近の陣地に據り抵抗を試みんとせるを以て、同隊は夜襲に依り之を撃攘せんとするや、敵は夜暗に乗じて退却せり。

我興京方面の兵團に對せし敵は東部西伯利亞狙撃第六師團、豫備歩兵第七十一團、同第二師團の第六、第七聯隊、第三師團の第十、第十一、第十二聯隊レンネンキャンプ支隊等にして、我軍の追撃の結果潰亂して北方に退却せり。

當方面に於る敵の死傷は本會戰以來のものを積算すれば二萬に下らざるべく、我死傷は三千八百名なり。捕虜及戦利品は既に報ぜしが如し。

沙河方面

二月四日 右翼兵團方面に在りては、前松木堡子に在りし敵は同村に放火して貼家臺に遺却せり、又午前十一時過蔡家屯の部落に火災起りしも其原因詳ならず。其右翼隊は本日鄧隈嶺、八日地及前肅家河子を、又中央隊は本夜下達具溝より張起寨南方に亘る線を、左翼隊は修家坎の高地を占領せり。此日偏嶺附近の敵は高力營

方向に退却し、高官寨には尙敵騎三中隊内外あるを見る、中央兵團方面に在りては昨夜僅少の敵兵我前哨に向ひ亂射せし外異状なし。

右翼兵團に在りては本日午前敵の將校斥候土臺子北方に近接せしを以て、我前哨之を撃退し、其二名を斃せり。本日午後敵の重砲は包相屯より李大屯屯を、又二臺子附近の野砲は沈且堡を射撃せり、又昨夜歪頭山の西北候家屯に歩兵約一大隊、修家攻に兵力朱詳の敵兵逆襲し來りしも之を撃退せり。

二十五日 右翼兵團方面にありては、其右翼隊は敵の騎兵約三中隊を驅逐し、二馬嶺より二馬嶺堡子を経て楊大人屯(高官寨東北約一里)の東北五道嶺に亘る線を占領せり。又其左翼隊は昨夜姚千戸屯の占領を試みしも、優勢なる敵の抵抗に遭遇し、一時其攻撃を中止し、狄々山及修家攻附近に準備陣地の構成に移れり。

中央兵團方面に在りては昨夜僅少の敵兵小東勾の我作業部隊を射撃せし外異状なし。
左翼兵團方面に在りては昨夜數名の投降者ありし外異状なし。

此日午後四時頃約一師團を下らざる諸兵連合の敵の一縱隊は官林堡より東北に向ひ行進するを見る、又渾河右岸に在りては約二軍團の敵兵長灘より四方臺に亘り陣地を構成し、其騎兵の大集團は大黃旗堡及黃地附近を中心として位置せり、而して遼河右岸には敵の騎兵斥候出沒するのみにして未だ大なる部隊の駐屯するを認めず。

二十六日 天候不良吹雪の状態を呈し、咫尺辨ぜず、右翼兵團の右翼隊は小堡より高臺嶺を経て、王富嶺に亘る堅固の陣地を固守せる歩兵約三千、砲約十五門の敵と相對峙して日没に至る。又中央隊は下達具溝北方高地より松樹咀子に亘る敵を撃攘して之を占領せり。此日劉姓臺子附近の敵砲兵紅三中隊(二十四門)は修家攻に向ひ砲撃せり。

中央兵團方面にありては昨夜來一小隊の敵兵來襲せしも之を撃退し、又本日萬寶山附近の敵砲兵は腰毛附

近を、漢城堡附近の敵砲兵は松木屯及鐵道橋附近を射撃せし外異状なし、左翼兵團方面も亦狀況依然たり。

本日夕刻後獨虎嶺子より前獨虎嶺子方向に敵の騎兵約一聯隊運動するを見る。

二十七日 右翼兵團方面に在りては、其右翼隊は敵の前進陣地たる王富嶺北方の高地を占領し、尙其北方の本陣地を攻撃せんとせしも、此陣地は堅固の角面堡を有し、且つ敵の歩兵約四大隊、砲兵約一中隊馬群丹方向より前進し來り、小堡附近に停止し、我右側を脅威するの狀あるを以て、一時其攻撃を中止し、暫く現狀を維持することとせり。

右翼兵團の左翼及中央兵團は此日攻撃を開始せり、各所の敵砲兵は午後に至り砲數約三百門を顯し應戰せり。萬寶山及其西方高地の敵陣地は我最大重砲のため特に多大の損害を受けたるが如し。

中央兵團方面に在りては本夜四方臺附近の野砲及溫盛堡附近の重砲我鐵道橋附近の前哨に砲火を集中し、午後十一時頃約五中隊の敵歩兵鐵道線の兩側に亘り包圍攻撃し來り、其一部は遂に我散兵壕内に突入し、激烈なる格闘戦を惹起せしも、我前哨は後方よりの増援を得て陣地を死守し、午前三時過終に全く之を撃退せり。此際に於る我損害は五十内外にして、敵の遺棄せし死體は五六十に達せり、此他若干の捕虜及戰利品あり。

右翼兵團方面にありては本日午後に至り包相屯及五家子附近に於て敵の往復頻繁となり、黒林屯金山臺附近の敵は我砲撃中止後再び工事を始め、北臺子及小樹子附近の敵歩兵は頻に亂射を爲し、日没に至り所在不明の敵砲兵再び沈且堡を砲撃せり、又本家萬家園子、三家子、嘔叭臺等の各所に敵兵約一二中隊づゝ來襲し來りしも、悉く之を撃退せり。

渾河右岸に策動せる我迂回兵團は僅少の敵を驅逐し、其右翼隊を以て双樹子附近を、中央隊を以て劉家崗子附近を、左翼隊を以て魏四家子上下方馬附近を占領し、其騎兵は東長崗子を占領せり。

此日我左翼兵團に捕虜下士以下五十九名あり。

二十八日 右翼兵團方面に在りては、其右翼に向ひ馬群丹方向より來進せる敵兵は小堡附近に止まりて南進の模様なし、又本日午後馬群丹の西南三家子より南方二道溝に向け歩兵約二大隊の敵兵前進し來るの報あり。

東勾山及唐家屯北方高地の敵砲兵は本日午前四時より我に向ひて射撃を開始せしも我之に應射せず、午後一時に至り我兵團の全線の砲撃を開始せり。此砲撃は敵に多大の損害を與へたり。又右翼隊は西孤嶺東北高地より王富嶺北方高地を経て松樹咀子南方高地に亘り待機陣地を占領せり。

中央兵團方面に在りては朝來更に砲撃を開始し、漸次敵の防禦工事を破壊し、又其砲臺を沈黙せしむるの状況を呈せり。

左翼兵團方面に在りては敵の野砲兵約七中隊、重砲約十三門我前面に現れ、李大人屯唾叭臺及沈且堡附近を射撃せり、而して我兵團の主力は狼洞溝西方の地區に在りて常に前進し得るの準備をなし、其騎兵隊は後虎嶺嶺子附近に前進せり。

迂回兵團の右翼隊は午前八時尙左門を占領し、八時三十分頃加良子附近に在りし敵の騎兵を撃退し、北進を繼續せり。其中央隊は鄭家屯北方に於て僅少なる敵兵を撃攘し、午前九時三十分其先頭を以て老窩棚に達し、其左翼隊は敵に遭遇することなく北進し、同兵團は本日遂に三道溝より榛子溝に亘る線を占領せり。

三月一日 右翼兵團方面に在りては、其右翼隊は王富嶺北方高地及高臺嶺を占領し、中央隊は東勾山に向ひ攻撃せしも前樓子勾及車頭嶺方向より縦撃を受け、攻撃の進捗意の如くならず、而して左翼隊は松木堡子及姚千戸屯を占領せり。中央兵團方面に在りては砲撃を續行し、敵も亦野戰砲約十五中隊、重砲約四中隊を現し應戦せり。

左翼兵團方向にありては其攻撃漸次進捗し、逐次敵の陣地に近迫するに至りしも、敵は野砲兵約二十四中隊、重砲兵約四中隊を現し、漸次兵力を増加して頑強に抵抗せるを以て、突撃を實行するに至らず、夜に入

り王家窩棚及李家窩棚に對し夜襲を試みたるも、是亦目的を達する能ず、却つて敵の大逆襲を受くるに至れり。然れ共我勇敢なる抵抗は終に此大逆襲を撃退し得たり。又其左翼隊は午前十一時より長灘南方の月堡子を攻撃せり。

迂回兵團は今朝其右翼隊をして一時三家溝より長家窩棚に亘る線を占領せしめ、中央隊をして大黃旗堡及牛心地の線より蘇家安、金海堡間の地區を経て四方臺に在る敵の右側背に繞廻し、蘇家安附近に達したる時、右翼隊と協力して、四方臺の敵を攻撃せしめ、又左翼隊をして中央隊の左翼隊に連繫し、丁家堡子、大橋に亘る線に向ひ敵の背後に在て運動せしめたり、午後十時頃右翼隊は全く五方臺を占領せり。

我騎兵は此日大民屯を其一部は新民廳を占領せり。

二日 右翼兵團の右翼隊は今朝高臺嶺東方高地を占領し、其中央隊は未明長勾附近に於る敵の第一陣地を攻略せしも、其西北に在る敵の第二陣地との中間に深き谷地あるため、此方の攻撃意の如く進捗せず。又左翼隊は夜來敵の企圖せし小夜襲を撃退し、本日馬園子山及狄々山の北麓に沿ふて守備せる敵を撃攘することに著手せり。

中央兵團は砲撃の結果を待ち、萬寶山攻撃に著手し、漸次良好の状況に進捗せしも未だ其成果を見るに至らず。

本夜中央隊は其前面に敵の逆襲を受けしも之を撃退せり。左翼兵團は午前八時頃其左翼隊の一部を以て長灘に進入し、右翼及中央隊を以て北臺子、李家窩棚及王家窩棚を占領せり、尋で田水堡孟達堡の線に向て運動を開始し、金山臺、孤家子、周官堡及王秀臺の線に於て再び敵の抵抗を受けしも、猛烈に之を攻撃して潰亂せしめ、遂に周官堡及王秀臺を占領し、攻撃前進を繼續せり。此方面の敵は東北方に潰走せり。

迂回兵團は其右翼隊を以て張站附近に達し、此夜敵の歩兵約五大隊の來襲を受けしも之を撃退せり。中央

及左翼隊は其左翼に連繫して敵を東北方に壓迫せり。

三日 右翼兵團方面に在りては、其左翼隊昨二日夜半より運動を起し今拂曉後松木堡北方の高地及唐家屯北方の高地を占領し、尋で敵の本防禦線に向ひ攻撃前進せしも、其後の進捗意の如くならず。其中央及右翼隊も亦今朝來攻撃を續行せしが、遂に其効果を收むるに至らず。此夜敵の大部隊我左翼隊の正面に眞面目の夜襲を四回試みしも、皆之を撃退し、多大の損害を與へたり。又約一大隊の敵歩兵奉集堡より土瓦房に進入せんとせしも直に之を撃退せり。

中央兵團は現狀維持の姿勢に在り、本夜數回の小夜襲を受けしも皆悉く之を撃退せり。

左翼兵團は逐次敵を東北方に撃退し、其右翼隊は三家子、小房身、孟達堡の諸部落を、中央隊は銀爾堡、新開河の線を、左翼隊は渾河右岸に沿ひ蘇胡堡の背後倭家堡附近を占領せり。今夕刻に至り武鎮營附近の敵も亦動搖を始めたなり。

迂回兵團の右翼隊は今朝彰驛店附近に於て激烈なる戦闘の後、敵を林家臺方向に進撃し、其他の諸隊は敵を東北方に撃退し、德勝營子、達子堡、拉木河の線に達せり。

四日 右翼兵團方面に在りては、曩に馬群丹方面に派遣せし支隊は本日午後四時頃五家堡子(高臺嶺北方約二吉)に於て僅少なる敵に遭遇し、之を北方に撃退しつゝ前進せり。又其中央隊は本夜其右翼を達具溝北方高地に退け、主力を其左進に集結し、邊牛峯堡北方の高地を攻撃して、敵の第一陣を略取せり。

中央兵團の左翼隊は左翼兵團の右翼隊と連繫して攻撃前進に移り、敵を東北方に壓迫しつゝ午後一時頃來神堡及武鎮營の線を占領せり。其他の諸隊は昨日の姿勢に於て敵と相激闘しつゝあり。

左翼兵團の中央隊は既に蘇胡堡を占領し、其左翼隊は前崔家堡附近の敵を撃退し、而して今夕沙河子と舊鐵道橋の線に亘る敵を攻撃するため、魚鱗堡附近より其右側背に迫り、中央隊も漸次此戦闘に参加せり。

本日師團以上の敵の大縱隊官林堡より邊城子を経て蘇家屯停車場に退却するを見る。

迂回兵團は其一部を以て本夕刻西部李官堡に於ける敵の堡壘を占領し、又其一部は大石橋及前心臺子附近に達せり。而して其右翼隊は左翼兵團の左翼に連繫し敵を攻撃せり。

五日 右翼兵團より馬群丹方面に派遣せし支隊は、午後三時三十分東孤嶺(馬群丹西方約三里)を占領し、尋で其北方に在る敵の角面堡を奪取せり、北大嶺(小堡の東南約一里)には尙若干の敵兵を見る。又左翼隊の一部は今拂曉後松木堡子東北高地に在る角面堡を占領す。此夜右翼隊の正面及堡家訴の北端に向ひ敵兵逆襲し來りしも皆之を撃退せり。

中央兵團の右翼隊は午削八時半頃柳匠屯を占領し、敵の一部を該部落の中央複郭内に包圍せり。又左翼隊は午前八時四十分迄に四方臺、英禹の線を、正午頃西部漢城堡を占領し、高力屯に向ひ攻撃を續行せり。此日蘇家屯停車場は敵の燒棄する處となる。

左翼兵團は朝來達連屯より小蘇家堡の線を占領し、又莫家堡より場士屯に亘る敵を攻撃せり。此際其一部は敵の右翼側を脅威せり。本日蘇胡堡に於て鹵獲せし武器彈藥極めて多し。

迂回兵團は其右翼隊を以て朝來左翼兵團の左翼に連繫して場士屯附近の敵を攻撃し、中央隊を以て西部李官堡の敵堡壘を奪取し、該村附近の敵を攻撃せり、而して其左翼隊は昨四日夜其主力を以て大石橋に、其第一線を以て轉灣橋より五臺子に亘る線に達せり。又其騎兵隊は昨四日夜を以て前心臺に達し、其一部をして揚馬廠を占領せしめたり。

奉天西北方面の敵は目下北陵より李官堡を経て揚子孤附近に亘る堅固の防禦陣地に據りて頑強に抵抗しつゝあり。

六日 右翼兵團より馬群丹方面に派遣せし支隊は稗子勾南方一帯の高地を占領し、三家子方向に敵を追撃して頭

道溝に達せり、此他當兵團の前面状況變化なし。

中央兵團方面にありては奉天街道附近の前面は依然相對峙して交戦し、其左翼方面は沙河堡、東部漢城堡、蘇家屯、北達子營、二臺子の線に停止せる敵と相對し、東部漢城堡奪略の目的を以て猛烈なる攻撃を實施せしも、敵は頗る頑強に抵抗し、且つ逐次兵力を増加し來るを以て容易に發展の時機に至らず。

左翼兵團は蘇胡堡より李官堡に亘る線に正面を擴張し、沙坨子、楊士屯、チエンシチエンの線に在る敵を攻撃せり。

迂回兵團は奉天を其西北方より攻撃する目的を以て、大石橋より平羅屯に亘る線を占領せり。此日約一師團、砲約七十門を有する敵兵高力屯より岔臺の間に向ひ攻撃し來りしも之を撃退せり。然るに敵は再び前進し來り、彼我近く相對峙して日没に至れり。

七日 右翼兵團方面に在りては午前三時頃敵の歩兵唐家屯北方高地に攻撃し來りしも、我頑強なる抵抗に依り、屍體約三十を遺棄して退却せり。又馬群丹方面に派遣せられたる支隊は今朝ターファンザ附近の敵を攻撃して、午前九時三十分同地を占領し、尙續いて敵を追撃せり、其他當兵團方面の情況變化なし。

中央兵團方面に在りては午前二時頃より敵は我右翼の全面に砲火を集中し、尋で歩兵約四大隊以上其正面に來襲せしも、午前四時半頃に至り悉く之を撃退せり。又左翼方面に在りては昨六日夜以來更に東部漢城堡の攻撃を續行し、遂に頑強なる敵の抵抗を排除して本日午前十一時全く之を占領し、尋で高力屯附近の敵を撃退せんことを企圖せしも、敵の猛烈なる回復攻撃を受けしを以て、激戦の後之を撃退したるも、遂に其占領區域を擴張するに至らず。

左翼兵團方面に在りては昨六日夜諸般の手段を盡し揚士屯の奪取を企圖せしも、敵は莫家堡より揚士屯を経て李官堡に亘り堅固に編成せられたる陣地に據りて頑強に抵抗し、且つ其兵力漸次増加し來るを以て遂に

其目的を達する能はず、依て本今朝來更に攻撃を開始し、其攻略を勉めたるも、敵の兵力は甚だしく我より優勢なるを以て、我兵團は極力敵を當方面に牽制し、以て迂回兵團の運動を容易且つ完全ならしめんことを努めたり。此日李官屯の純三分の二は我兵の占領する處となれり、敵は午後に至り約一師團の兵を以て逆襲し來りしも、苦戦の後之を維持するを得たり。

迂回兵團は今佛曉より其左翼を平羅堡北方地區に擴張しつゝ北陵及張家子の線に向ひて繞回運動を開始し、夕刻に至り轉灣橋より張家子に亘る線を占領せり。又其騎兵隊は大新屯青堆子方面に在りて、左側を警戒せり。

八日 右翼兵團及中央兵團の前面の敵は昨夜來全線退却を始めたり、依つて右翼兵團は夜半より直に追撃に移り、白深寨附近に於て敵に追及し、尙ほ興隆甸に向ひ追撃を續行せり。

中央兵團は午前二時頃より敵を追撃し、其右翼隊は娘々寨より班子寨間の地區を潰亂しつゝ北方に退却しある敵に追及し、荒山附近より之を砲撃し、多大の損害を與へたり。

左翼兵團は七日朝以來優勢なる敵を牽制し、屢々敵の逆襲に對して頗る苦戦せしも、多大の損害を敵に與へて悉く之を撃退せり。此際某旅團の如きは李官屯に於て約一軍團の敵より包圍せられたるも、頑強に抵抗し、遂に其位置を確保するを得たり。此際に於る敵の死傷八千内外に達せりと云ふ、午前十一時頃に至り、敵兵動搖を始めたるを以て、直に追撃に移り、敵を奉天に壓迫せり。

迂回兵團は敵の頑強なる抵抗を排し、小集屯、八家子(小集屯東北約二吉)三臺子を占領し、尙ほ追撃を續行し、大平庄より北陵を経て、柳條屯に亘る堅固なる工事に依れる敵と對戦し、其一部は奉天以北の鐵道を破壊して、其運轉を全く停止せしむるに至る。

此日正午約一師團の敵數縱隊と爲り、奉天の東北鐵道線路東側を北方に退却中にして、其一部はウフンチ

九日 右翼兵團は敵を驅逐しつゝ、拂曉渾河左岸に達し、其右岸を守備せし敵を撃攘して、夕刻其一部は護山堡及彭家樓附近に達せり。

中央兵團は朝來渾河左岸に於て防禦工事に據る敵、並に渾河堡附近に在りし敗殘の敵を驅逐し、奉天東北方に向ひ攻撃前進に移りしも、渾河左岸に於て抵抗せし敵は比較的多數なりし爲に、我兵渾河右岸に進出する能はず左翼兵團前面の敵は依然頑強の抵抗を持續し、其一部は尙ほ鐵道橋附近を固守せり。要するに此方面の敵は尙我兵團の繫留する處と爲り未だ退却し能はざるに似たり。

迂回兵團は其攻撃逐次進捗しつゝあるも、敵の防禦物に妨げられ、其進捗豫期の如くならず、然れ共益々其戦線を左翼に擴張し、敵の脱出を阻止せんことを勉めたり。又其左翼は敵の逆襲に遇ひ、若干後退したる部隊あるも、依然攻撃を續行せり。

十日 右翼兵團の右翼隊は馬群丹方面より北進せる兵團の撫順北方高地の攻撃を援助し、本日午前撫順より地塔（撫順西方約二里）北方高地に亘る敵を攻撃し、正午頃之を撃退して追撃に移り、亂泥窪、喇麻溝の線を占領せり。又中央隊は興隆甸北方の高地を占領せる敵を攻撃し、午前十時頃全く之を撃退し、護山を占領せり。而して左翼隊は本日朝舊站西北高地の角面堡及其附近の敵を撃退して追撃に移り、次で彭家樓北方高地より達連堡子北方高地に亘る敵を攻撃し、接戦の後之を撃退し、其砲兵は鐵嶺街道及鐵道線路を退却する敵の大縦隊に對し、日没まで之を砲撃し、多大の損害を與へたり。

中央兵團の右翼隊は朝來七間房附近の敵を撃退し、續て敵を追撃しつゝ午前十時半王家勾東方より趙溝に亘る線に達したる時、約二大隊の敵の逆襲を受けたるも之を撃退し、同十一時頃王家勾より以南の高地脈を占領し、奉天街道を退却中なる敵を攻撃せり。又其一部は昨夜半揚官屯東北方に於て渾河を渡り、王家

子及毛家屯附近に在りし諸兵連舎の敵を撃退し、益々追撃を續行し、本日午前十一時魚鱗堡東北方より二臺子に亘る線を占領し、敵の退却を遮斷しつゝあり。左翼隊は其一部を渾河堡の正面に残置し、主力を以て昨夜半揚官屯西南方に於て渾河を渡り、其右岸に在りし敵を撃退したる後、追撃を續行せり。

左翼兵團方面に於ては今朝まで敵を前面に牽制しありしが、機熟するを待ち、大堡及新堡を攻撃して午前十時之を占領し、續て奉天の西方十里馬頭西塔、大平庄、後頭の線に亘り全軍の追撃前進に移れり。

迂回兵團は昨九日夕以來其左翼に屢々敵の逆襲を受けしも之を撃退し、其左翼を擴張し、殆ど北方より南方に向ひて敵を攻撃せり。

今午前十時頃敵の退路を遮斷する目的を以て胡士臺方向に前進せし我一部隊に對し、約二師團の敵兵攻撃し來り、其戦線を擴張して我左翼を壓迫せんとせしも、翌十一日の朝之を撃攘せり。

此日中央兵團の一部及左翼兵團の一部は午前十時奉天を占領す。

俘虜死傷及戦利品の概要左の如し。

沙河方面

捕虜少將ナヒモフ以下四萬以上

敵の遺棄せし屍體二萬六千五百人

其他の死傷約九萬人

戦利品

軍 旗

二 旒

大 砲

約六十門

小 銃

約六萬挺

予が見たる日露戦争

約百五十輛

約一千輛

約二十萬發

約二千五百萬發

約一萬五千石

約五萬五千石

約十八邦里分

紛三百輛

約二千頭

支那車輛二十三輛分

支那車輛一千餘輛分

約百萬食

約一千八百萬貫

約一萬五千貫

此外土工具、天幕、牛、電線、電柱、角材、鐵寢臺、煖爐等枚舉に遑あらず。
九里溝子東南方にて鹵獲せしもの

八珊半野砲彈藥車

十五珊重砲彈藥車

小銃彈藥車

百五十輛

三百輛

二百輛

土工具車

電信材料車

電話材料車

架橋材料車

輜重車

湯沸車

八珊野砲彈

十五珊重砲彈

土工具

被覆線

氣球繫留索(車共)

電柱

燕麥

此他被服、寢臺、麵包燒車及諸車輛等なり

興京方面

小銃

機關砲

小銃彈

砲彈及藥莢

二千二百挺

六門

約四十四萬發

一萬九千五百發

第三十二章 奉天の大會戰

予が見たる日露戦争

二八二

土	工	具	九千箇
蹄	鐵	線	三百
鐵	線		千二百把
輕便鐵道材料			約十三邦里分
同 貨 車			四百五十輛
被服を搭載せる支那馬車			十 輛
石炭坑機械			八坑分
角 材			四千本

其他雜穀、馬糧多數にして未だ計算に遑あらず。尙牛、馬、天幕、寢具、煖爐、地圖、電話等多數なり。

敵の戦場に遺棄せる屍體約一千二百捕虜八十、敵の損害は二萬を下らざるべし。

撫順附近

粟	梁	一千八百八十石
高 粱		一千七百石
豆 糟		六萬箇
大 豆		七百石
粟 穀		四千貫
粗 製 鹽		六千石
漬 物		一千貫
薪		五十貫

第三十三章 會戰の論評

第一 露軍將帥の無能

奉天以北には一步も退かずと宣言して居つた露軍は、大崩れとなつて先づ吉林長春の線まで落ち延びた、獨逸皇帝が當てお世辭に云ふた、最強陸軍國の面目も無くなつて、如何なる口實あるに拘はらず露國陸軍の弱きことは争はれぬ事實となつた、如何に露西亞最負の獨佛の新聞記者でさへも是を否認するの勇氣がなかつた。併し乍ら此戦争を大體から觀察すると、露軍に大なる過があつて、夫れが爲に敗北をしたのである。彼は我よりは優勢なる兵力を有し、精良なる火炮を持ち、彈丸も亦我より豊富であつたのであるけれども、遂に斯様な事になつて仕舞つた。此大なる誤と云ふのは、敵の總司令官の判断の悪かつたことと常に攻勢を取るのに躊躇したとの二事である。第一のものは旅順に向つて居つた第三軍が城廠方向に來つて、日本軍は此方向から其主力を進めると云ふ判断を下したので、第三軍の行進を戦争の始めに全く知らなかつたが爲に、忽ち奉天の根據を衝かれると云ふことになつて來たのである。第二のものは則ち我攻撃と同じ様に攻撃の決心を取つて其準備に在つたものが、我軍の青河城占領の爲に忽ち脅かされて、攻撃の決心を翻して、守勢に立つたことである。以上のことを綜合して見ると將帥の無能が大なる敗北の原因であつて、同時に一般攻撃精神の缺乏して居つたのが是に附隨した原因である。茲に於て戦争は將帥其の人の技倆に大なる關係があるので、偉大なる將帥を得ると得ざるとは國の盛衰に大關係があるのである。ハンニバル然り、ナポレオン然り、ウエリントン然り、グラント然り、モルトケ然りである。考ふべきことは人材大器の登用である、巧智小才のみを競ふて居る今日の制度は如何なるものであらうか。

第二 危険と忍耐

併し乍ら日本の方を觀察するに、總司令官の計畫は見事に成功して二十萬の損害と、四萬の俘虜と、百門近き野砲を得て、赫々たる榮譽を以て内外人から仰がれたのであるが、内部に這入つて此戦鬪を仔細に觀察すると、頗る危険なる分子が各處に存したのである。第一寡少なる兵力を以て包圍しようとするから、従つて總豫備隊は極めて少ないのである。第二は第二、第三軍が奉天の西方に現れた時に屢々第三軍が其最左翼を包圍されんとし、且つ逆襲を撃退したことである。第三は第二軍が渾河の右岸に移つたために第二第四軍の中間に大なる空隙が出来て、優勢なる敵の逆襲を此方向に受けたならば甚だ危ふかつたのである。第四は第一軍が鴨綠江軍と連絡を取る爲に非常に廣大なる正面を取つて、第一線の兵力は頗る稀薄となつた、此際にリネウイツチが第一軍の正面に突進したならば是も亦頗る危いのである。併し乍ら是等は敵を攻撃しようとする結果から起つた已むを得ざる状況であつて、是等の危険あるに拘はらず、能く各方面の缺陷を補ひ得たのは野戦諸隊の能くこの危険に處する方法を知り、且つ之を實行したのと、攻撃運動の先制に因るのである。第三軍の左翼の如きは殊に危険な状況に陥つて、乃木大將ですらも大に心配した位であるが、兎に角一二日を頑固に抵抗したので、敵の敗走の時が来て、沙河線の露軍の退却と、是に續く敗走とに依つて漸く死地を脱することが出来たのである。第二軍も亦揚士屯、李官堡の線で大に傷められて此處も殆ど守りきれない程になつたのであるが、一度進んだ處は退かんと云ふ考へから、遂に此處も持たへることが出来て、第一、第四軍の追撃と共に前進に移り得たのである。第四、第一軍も沙河線の敵壘を抜かんと試みたが、幾度か失敗して、之も敵前數百米の處に止まつて進退谷まると云ふ情況に陥つたのである。夫れでも皆一刻一瞬たりとも攻撃の姿勢を止めず、且つ能く忍耐したる結果、敵を追撃するに至つた。抑も戦争の最も苦しい時はナポレオンが言つた様に敵も亦最も苦しい時であるので、此苦しい時を辛抱しおしたものが勝つのである、而かも此苦しみに打勝つ

て、敵に徹底的打撃を與へたのは人間以上の成功である。然るを我陸軍は敵を全滅し得なかつたとか、戦利火砲の數が少なかつたなど云ふものがあるが、是は戦争のことを知らない没分曉漢又は新聞記者輩の言である。

第三 防禦工事の價直

此戦争に於て防禦工事の愈々價値あることを表した、露軍の沙河の線に於て一週間以上我攻撃を防ぎ得た處のものは防禦工事であつた、是に反して防禦工事の少なかつた第二、第三軍方面は容易に敵を突破して、奉天の西方まで進むことが出来た。併し乍ら揚士屯、李官堡の線では矢張り防禦工事に妨げられて進むことが出来なかつた、始めの想像では我軍が三角山及樹子林附近に二十八榴榴砲を据へ付けた事から、此巨砲を以て一時に撃出す時は恐らく萬寶山は平地となるであろうと云ふ一般の説であつた、勿論此二十八榴榴砲の弾丸は堅鐵彈であつて、近時の所謂爆裂榴彈なるものではなかつたが、兎に角大なる弾丸であるから、非常なる效力を有するであろうと考へられた、處が實際砲撃を四五日間續けても萬寶山は依然として萬寶山であつて、僅に其の上に構へられた展望臺が破壊された位のこと、其の他の工事に向つてすらも大なる破壊力を呈さなかつたのである。始めに此砲の据付を聞いて驚いた人が終には此砲の效力のないのに驚いた。加之我臼砲や、野砲でも毫も敵の防禦工事を破壊するに足らなかつた、少しの破壊孔を作れば敵は直に土囊を以て之を埋める、夫れ故に防禦工事は少しも變形しないで、歩兵は何時まで経つても突撃することが出来ぬ、第十師團の一部が柳匠屯に向て突撃したのは、寧ろ不可能を遣つたので、其の結果の慘憺たることは勿論知れきつて居るのである。此時に於ける日本の砲弾には爆裂榴彈の様なものではなかつたが、若し假りに全部爆裂榴彈と見做した處が、非常なる廣き正面に於ける一連の掩堡線に對して多數の破壊孔を作ると云ふことは、限りある弾丸を以ては非常に困難であらうと思ふ。我々が旅順の攻圍に於て悟つた攻防兩具の何れが優れりと云ふ問題

は、今回の戦闘に於ても同一なる解決に終つたのである、其處で是からは平時の訓練に於ても、土工作業の演習が極めて堅要なる教練であると云ふことが明瞭になつて來た。

第四 主攻撃の方面

今回の戦闘に於て今一つ明瞭なる解決を與へた問題は、山地、平地の何れを主攻撃の方向に撰定するかと云ふ事柄である。従來は平地は大兵を用ゆるに適し、山地は敵の射撃並に監視を避くるに適すると云ふので、人に依つて、二者何れを取るやの意見を異にしたのである。處が山地では管に大兵を用ゆる事が出来ない許りでなく、敵に山系上の要點を占められたらば一步も進むことが出来ないといふ不利がある。第一軍及鴨綠江軍の三月一日以後九日まで、一步も進むことが出来なかつたのは則ち此理由である。沙河の會戦に敵が主力を本溪湖方面に用ひて成功しなかつたのも此理由である。遼陽の戦闘に第一軍の敵の退路を斷つことが出来なかつたのも則ち此の理由である。夫れ故に今では大兵團の戦闘に於て主力の向ふべき方向は其他の條件がなかつたならば、平地であることは疑ふべからざる事實となつた。これ、工事の威力と、火器の威力と二つ乍ら發達した爲めであると思ふ。

第五 機關銃の威力

此戦闘で尙一つ明かになつたことは野戦に於ても機關銃が驚くべき效力を有して居ると云ふことである、始め我軍隊では第一、第二の繋駕機關銃隊が編成をされて、第一、第二の騎兵旅團に配屬された(明治三十七年四五月の交)。其の次に第一、第十一師團に各々一個の徒歩機關銃隊が編成をされて、旅順の攻圍に之を用ひた。併し乍ら其他の師

團、若くは旅團には未だ一門も配屬されて居なかつたのである。處が沙河會戦が終つて、此陣地の防禦に約百門許の機關銃を内地から輸送して、是を使用することになつた。而して第一、第二軍は各々三十六門、第四軍には二十四門を配屬されたのであると記憶して居る。此銃の始めの目的は兵站に守備隊の充分でないのを補ふためであつたらしい。處が第一線の方が更に必要があると云ふので、沙河陣地の各所に備へ付けることになつたのである。處が露國では既に以前より此機關銃隊を使用して、現に遼陽の戦闘では首山堡附近で我軍が大いに惱まされた、其處で此度の戦闘に於て敵は之を用ひて著しく我歩兵の攻撃を惱ました、特に柳匠屯に於ては此銃の爲に我兵が殊ど全滅されたのである、如何なる勇氣ある隊でも機關銃の射撃の前では其突撃を中止せざるを得ないのである。聞く處に依れば奉天の西方で後備歩兵第十旅團の一部が敵を追撃中、優勢なる敵の襲撃を受けた時に、僅に二門の機關銃が此敵を殆ど全滅したと云ふことである。又聞く處に依れば三月九日クロバトキンが三十大隊の歩兵を提げて、我第三軍の左翼に向つて突撃した時も、五六門の機關銃の發射の音に此逆襲を中止して、終に退却するに至つたと云ふことである。此に於て機關銃が管に要塞の防禦のみならず、野戦に於ても必要な武器であることが、一般の腦髓に刻まれたのである。此戦闘の後六七月の頃各師團に機關銃隊一箇を編成する様になつたのも此經驗に外ならないのである。

第二十四章 新戦場の跡

第一 至尊の御沙汰に感泣

今や第四軍の兵站線路は南遼陽より北鐵嶺に至る、殆ど四十里の長さに達した、兵站監部も指揮の關係上最早遼陽に位置するを許さざる様になつて、先づ宮本副官を奉天に前進せしめて同地に移轉するの準備をなした、昨年九月二十五日以来半歳の長きを此處に暮して、殆ど半永久的に設備をした此土地を去らねばならん、此遼陽滞在間の記録を

終る前に忘るべからざる一事があつたことを記載せねばならん。明治三十八年二月十四日侍従武官長岡澤大將及東宮武官長木村少將が我兵站監部に臨まれて、次の様な 天皇皇后兩陛下、皇太子殿下の御沙汰を傳へられた。

天皇陛下及皇后陛下ノ御沙汰

我出征ノ滿洲軍ハ久シク異域ニ在テ寒暑ヲ冒シ特ニ目下ノ嚴寒ニ際シ將校以下如何許リカ辛苦ヲ重ネツツアルナラン爾往テ親シク其實況ヲ視、別ケテ傷病者ヲ懇ニ慰問セヨ軍國ノ事前途尙遠シ上下協力各々自愛シテ最終ノ大成ヲ期セヨ

皇太子殿下ノ御沙汰

目下寒氣嚴烈ノ際我出征軍人ノ勞苦ヲ思フ傷病者ニ對シテハ更ニ慰問ヲ加ヘヨ軍國ノ前途尙遠シ將校以下各々自愛益々忠誠ヲ擢テ最後ノ勝利ヲ期セヨ

右の御沙汰と共に傷病者に對して 天皇陛下及皇太子殿下より御菓子を賜はり、一般の軍人軍屬には天皇陛下より御菓子(ビスケット及岩起し)及巻煙草を賜はる旨を承はつた、聞く處に依れば右の御菓子は臣下から奏上をして取り極められたものではなく、陛下親らの御創意であつて、以前に恤兵品として分配された岩おこしの上に、飾り付けて在つた松竹梅の模様を菊桐の紋に替へよと仰出されたものだそうである。又聞く處に依れば陛下は出征軍人の遼東の野に寒風に曝されて敵と對峙して居ることを思召されて、昨年の冬以來御座所に暖爐を用ひ給はず、御附の方々よりも、如何に陛下が軍人を日夜御軫念あらせられるかを想像するに足るのである。回顧すれば昨年四月第十師團の動員に際し、伊藤侍従武官を姫路に差遣はされ、同年九月再び侍従武官を滿洲軍に差遣はされ、同時に一般に酒を下賜されて、而して今や三たび之等の武官を差遣はされた。我々は實に恐懼の至りに堪へんのである、太古からの世界萬

國の歴史を緋いて見よ、何時何處に如斯君主のをはせしことがあらうぞ。ナポレオン第一世が屢々病兵を見舞ふた事は事實であるが、彼は軍人のなり上りで其人望を得んが爲に遣つたのである。プロシヤのウイヘルム第一世も又癡兵を見舞ふたことがあるが、彼は戦に敗れた後に於て再びプロシヤの復興を圖るが爲であつた。トランスバールの戦争に莫國のビクトリヤ女皇がチヨコレートを各兵士に分配した事は事實であるが、之は恤兵品の意味に外ならないのである。然るに我 天皇陛下は我々軍人を見給ふこと慈母の赤子に於けるが如く、明け暮れ大御心を注がせ給ふことは實に我々軍人の感泣し膽に銘じ骨に刻むべき事であつて、同時に粉骨碎身して鴻恩に報ふることを努めなければならぬことは勿論である。

第二 新戦場の通過と回顧

滿野の雪は消へて今迄零點下何十度に冷へて居つた土地も漸く暖き南風に濕り氣を帯びて、何處にか春の來つた様な心持のする三月二十五日の朝、我兵站監部は遼陽から汽車に乗つて奉天に向ふた。遼陽停車場を睥睨する様に聳へて居る首山堡と、遼陽の古き歴史を物語つて居る喇嘛塔との影も、何時しか列車の窓から遠ざかつて、今漸く氷の溶けた太子河の流を越へて、汽車は程なく烟臺に着いた。沙河及奉天會戦の時の様な賑かさも全く昔の物語りと消へて、今は寂として聲なき村裏の停車場となつた。唯此停車場に置き捨てられたる三百許りの戦利の貨車か不規則に配列されて、或ものは無慘に壊されたまゝ、或ものは其軌道を脱げられたまゝ、其嘗て愛せられたる露人の乗客から捨てられて居つたのが、殊の外我々の注目を引いた、是は手押貨車を運行した最終點であつたからである。之等の貨車は大連から人力に依つて運行されつゝ、殆ど百里の長程を來たのである。烟臺を出れば沙河會戦に我第四軍の奮闘した波状の山脈を右に見て、重砲彈藥廠の在つた五里街の停車場に來れば、此處も何時の間にかさびれて、唯輕便鐵道が敷れたまゝ残されて在つた、奉天會戦の當時を回顧すればこの輕便鐵道は數多の重砲彈藥運搬の爲め、一方は鐵道

線路に沿ふて北方に延長し沙河停車場及樹林子に至り、他方では此處から東に延び、十里河の北方を過ぎて、三角山並に柳匠屯の前方に迄至つた。之等の有様を見た時に全く要塞戦の様な感覚を起した、恐らくは此様な大仕掛の野戦は古今稀であつたであらうと考へられる。沙河の停車場に到着すれば慘酷に破壊されたる屋根なしの家屋が幾戸もあつて、停車場司令部となつて居る家屋の如きは、其北の方に向ふて居る側面に大小數十の弾痕を受けて、奉天會戦の劇烈なる戦鬪を物語つて居る。此建物の北方四五十米突に十五匁臼砲の肩端か東西に配列されて新らしき戦場の名残りを示して居る、徒歩砲兵聯隊の兵卒等が樹林子の砲廠から恰も二十八匁榴弾砲の各部を分解して運搬し來つたのを見受けた。沙河停車場を發すれば、冬營間に構築した各種の胸牆、塹壕並に地下交通路などが彼是相連絡して、最も危険にして且つ困難であつた冬營の當時を思ひ起さしめた。地獄の森を左に、拉木屯の村を右に、沙河の流を下に列車は遠慮なく新戦場の跡を速に走り、元露軍の陣地を眺むれば、數線に構築された塹壕、並に鹿柴、電光形の交通路、胸牆に利用された鐵道堤、彈丸藥袋の狼籍せる陣地等が一目に見へ、中にも數線に連なつて居る鹿柴並に鐵條網の様は、如何に露軍が防禦に力を盡せしかを想像するに餘りあるのである。第六師團の激戦したる四方臺及漢城堡の村落は無慘に破壊せられ、屋根も窓もあらばこそ、雨露に打たれた儘の土壁計が残つて、小さき枯木が一二本寂しそくに此土壁を見成つて居る。總じて此邊の村は露兵の土窟構築用として家屋の木材を取るが爲め全村破壊せられ、此の人煙稀薄の野を更に破壊し盡して、一面の荒野となしたのである。汽車は程なく蘇家屯に着いて我々は此處に下車した。

第三 野獸の如き露人

兵站監部の一同は蘇家屯に於て待ちつゝあつた乗馬に逸早く打乗り、奉天の方に列をなしつゝ進んだ。蘇家屯から鐵道が北方と、西北の方へと二條相分れて居る、前者は奉天に續く東清鐵道の現在の線であつて、後者は此鐵道の舊

線路である、東清鐵道敷設の當時は、奉天の西北方に廣く瀟漫して居る墓地の爲に、清國政府が奉天の直ぐ西方を通じて鐵道線路を設けることを許さなかつた、詳しく云へば奉天の直ぐ西方を通じて線路を設けるは數百年來の彼等祖先の墳墓を破壊せねばならんと云ふ、祖先崇拜思想より起る支那人の懇願の爲に此線路を許さなかつたのである。そこで露人は心臺子附近から、大石橋方向に奉天の西方を大迂回する様に線路を決定し、莫家堡附近で渾河を渡つて蘇家屯に來つたものであつた、處が露人の專横にして且つ狡猾なる諸種の手段を以て支那の大官等を欺騙して、支那人の最も崇高なる土地として居つた彼の奉天西北方一帶の墓地の中央を貫通して遂に現在の如き新線路を作つて仕舞つた。彼等露人の獸類に近き利己心と、腑甲斐なき支那人の屈從心との結果が、現在の線路を成して居るので、此鐵道の分岐點に於て露人に對する憎惡の念と、支那人に對する憐憫の念とを禁じ得なかつた我々は、滿洲及朝鮮を壓迫したる露人に對し、天皇陛下の大英斷に依つて利己心に満ちたる此敵を撃攘すべく今此處にあるのである。併し乍ら若しも此戦争をせずに露國の言ふか儘に屈從したならば、獸的なる露人の爲に、或は壓迫に壓迫を加へられ終に我々祖崇の墳墓をも堀開せらるゝこと、宛も奉天西北方の支那人の墳墓を堀開せられたる様に立ち至らぬと云ふことは斷言し得ないのである。幸にも叔明なる、天皇陛下の大果斷に依つて、此獸類に等しき敵に膺懲の刃を加へ、再び東洋を窺ふを得ざらしむるのである、今は反對に彼等露人の死骸は滿洲の野至る處に散亂して、野犬の餌食となつて居るではないか、獸類に近き彼等露人の肉は獸類のために喰はるゝは理の自然である、天罰を思ひ知らずや。

第四 無用の工事と精神の人

斯様な事を考へつゝ、我々の縦隊は早や既に本線路と撫順支線路との分岐點を過ぎ、渾河堡の南に亘る敵の第一二線堡壘に達した。此線は臨時築城の小堡壘を據點として、之に掩壕を添へたる堡壘系であつて、奉天の西では我第

二軍が苦戦せし揚子屯、李官堡の線をなし、それより渾河を越へ、殆ど此流に並行して奉天南方の線を形造つて居る、之か則ち遼陽の直接防禦線と同様に、露軍が沙河對陣中に築いたものである。敵の三月八日の退却は先づ此第二線堡壘系に到着して、此處に遼陽に於けるが如く、頑強なる抵抗をなす筈であつたが、士氣沮喪せると、猛烈なる我軍の追撃のために此陣地に據るの猶豫を失つて、遂に渾河を渡つて退却を繼續するの已むを得ざるに至つたのである。此處に於て我々は工事の極めて必要なることを悟つたと同時に、是を用ゆるの精神と術を知らざるものゝ爲めに供せられたる工事は寸毫の價値なき事を知つた。我々は是等の堡壘線を巡視するの時間を持たなかつたが爲に残念にも此を一瞥に附して其行進の歩調を早めた。

第五 碎けたる露人の傲慢心

渾河の岸に至り見れば、此河に架したる大鐵道橋は其二橋節をガードに於て見事に破壊せられて居る、遼陽の戦闘迄は露兵が生意氣にも一旦取られたる土地を再び恢復する積りで、毫も鐵道橋の大破壊や、家屋の焼却を敢てしなかつたが、奉天退却の時は愈々取り返しの見込がないと觀念したか、せめてのことに鐵橋破壊をなしたものと見へる、傲慢心強き彼等の様を見よ、鼻柱は既に折れたではないか、鐵道橋下流の軍橋を渡つて馬を飛ばし、霞の中に現はれたる奉天の側ら、南、西二個の喇嘛塔を指しつゝ停車場の南端に出づれば、露人が立てたる急造の土窟病院ありて、露の衛生部員と看護婦とが並んで歩むのを見た、彼等の味方は今に既に遠く去つて昌圖以北に敗兵共を集めつゝあるにも拘はらず、氣樂なる者ではないか、目を轉すれば焼き棄てられたる停車場の建築物と、土壁と、灰と、木材の残焼とは憐れ果敢なき露軍の最後を語つて居る。此家屋より二三百米突を隔てたる集團家屋の内で、火災を免かれたる二二三の家屋即ち是余等が入るべき宿舍であつた。

第六 奉天の入城式

我滿洲軍は一旦飄起屯、懿路及石佛寺の線に停止した後、三月下旬には更に興京、鐵嶺及法庫門の線に其第一線を前進せしめて、暫く此處に體力の休養を計つた。則ち鴨綠江、第一、第四、第三軍を前に置いて、第二軍を其後方奉天附近に置いて廣合營をした。滿洲軍總司令部は三月十五日を以て奉天なる元増棋の衙門に移り、鴨綠江司令部は撫順に、第一軍司令部は飄起屯に、第四軍司令部は王家河子(懿路の東方一里)に、第三軍司令部は六王屯(心臺子停車場西南約一里)に、第二軍司令部は奉天小西邊門外に位置して、其兵站監部は鳳凰城、遼陽、奉天、馬三家子、遼陽に夫々位置して居つた。

滿洲軍總司令部が奉天に前進の際、所謂入城式なるものを行ふた、之は支那人に對する兒玉流の政略であつて、同大將が臺灣に於て輿に乗つて出入をしたと云ふ筆法で、日本の軍隊の多數及び支那の文武官などを奉天城外から増棋の衙門まで見事に堵列せしめて、大に威儀を張つたのは滿洲軍に於ける一話となつたのである。併し乍ら此兒玉流の政略は實際支那人の様な風俗習慣を持つて居るものには最も必要であつて、先づ滿洲に於て日本の勢力を振ふがためには此筆法でやらなければならぬ。曩に奉天占領の際、我軍隊をして奉天の舊都を尊重せしめ、其内に宿營するを禁ずるの命令を發布して、以て支那人の歡心を買ひたると相並んで、此堂々たる威儀を張つたのは恩威並び行ふと云ふことを政略的にやつたのである、恐らくは兒玉大將の指圖でやつたのであらうが、大將の總てに對する考慮は大なる意味を有するものであると信ずるのである。

第七 裸て逃げたる露兵

我兵站監部が奉天に到着した當時の同停車場附近の有様は頗る慘憺たるものであつた、殆ど總ての家屋は焼かれ、

煉瓦壁のみ残れる家屋、焼れたる材木、崩れたる土壁、捨てられたる灰燼、其他小銃彈藥、諸種の物具等散亂しありて、殊に小銃彈は至る處に散在して居つた、それが爲塵埃を集めて之を燃せば其内に於て破裂し、支那馬車が通行すれば其輪鐵の下に於て破裂する様な仕末で、滅多に交通路以外に馬を飛ばす事も危険であつた。又露兵の防寒靴は此附近一面殆ど平方米突に一個の割合を以て撒き散されて、所謂三十六計跳足で逃ると云ふことを實現したのであつた、加之露兵の捨てたものは飯盒、帽子、襦袢、袴下等色々ものがあつて、或ものは露兵は洗足で逃げるよりは尙一步進んで裸體で逃げたのであらうと笑つたことであつた。唯病院のみは其傷病者、醫師並に之と共に看護看を我軍に残した。是等の病院は比較的整頓し、且つ其構造も美事なものであつて、敵將ミシチェンコの居つたと稱せられた病室などはなか／＼贅澤を極めたものであつた。此病院にあつた傷病者は俘虜として逐次内地に後送せられ、其醫師及看護婦は多く營口から本國に歸還せしめたが、或ものは第一線を通して敵に送られた。

第八 野に満ちたる鹵獲品

奉天停車場の西南に接して第二軍の鹵獲兵器蒐集所があつた、此處に集まつて居つたものゝ重なるものは車輛であつて、其總數恐らくは三、四千もあつたであらう、其附近の野一面を占領して、見渡せば殆ど際限のない位であつた。此車輛の内には砲車、彈藥車、縦列用小銃彈藥車、行李用此車輛の内以小銃彈藥車、患者輸送車、電信建築車、電信通信車、炊爨車、煮沸車、肉汁車、糶秣車、繫留氣球車、其他一般の乗用馬車、人力車等があつた、若しも仔細に點檢するならば、是等車輛の外に尙諸種のものがある。軍樂器、測量器、歩、工兵器具、馬具、鞍具、小銃等即ち是である、兵器以外のものとしては諸種の建築材料、鐵線等より、ピアノ、舞踏具の様なものまであつて、其多數に一瞥を喫せざるを得ないのである、而も之が第二軍のみで蒐集したものであつて、各軍で蒐集したものを集めたならば其如

何に多量なるや殆ど相像し得ない位であらう。

第三十五章 奉天の周邊

第一 愛親覺羅氏の舊都

奉天は現今滿洲の首府であつて、又盛京省の首都である、遼陽の北約二十里、鐵嶺の南約十八里、兩市の中間に在つて、南渾河に面し、東福陵の丘阜に連り、北西二面は廣漠の平野を隔て、遙に遼河に通じ、清の太祖高皇帝及太宗文皇帝の都した處である。府は内外二城を有し、内城は高さ約三丈なる正方形の煉瓦壁であつて、之に八個の樓門を有し、其一邊に大小の二門あり、例へば西方に在る二門を大西門、小西門と云ひ、東南北邊の各門其名を付すること皆之に倣ふ。内城の中央に宮殿が在り、此宮殿を中心として其周圍に井桁形の街衢をなして、其端末は即ち上記の樓門である。樓門は概ね半月形の掩護壁を以て城壁の外部に突起を成形して居る、門の上には通常三層の樓閣があつて、遼陽、海城等で見えたものよりは頗る完全に、且つ美麗である。小西門と小東門とを通ずる街衢上二個の穹窿形の四足門があつて、是にも樓閣を供へて居る、之を鼓樓と名付けて居る。是等の樓閣、樓門は市街の一大美觀をなして、都府の威儀を飾るようである。外城は高さ一丈乃至六尺位の簡單なる土壁であつて、之にも前記の大、小、東、西、南、北、門に應ずる處に、大、小、東、西、南、北邊門がある。併し乍ら此門は勿論極めて簡單なる門であつて、樓閣などはないのである。外城の周圍は概ね三里許りで、楕圓形をなして居る、南北の中徑は約一里、東西の中徑は十町もあるであらう。市街は格子形に近く、稍々整然として居つて、道路の幅も主要なる街衢は相應に廣く、各種の商店軒を並べ、通行の人馬も繁く、商業も頗る繁盛であつて、予等が始めて此市街を見た時其賑しさに驚いた位であつ

た、彼等支那人は何處に戦争があるかと云ふ様にみえる。其店頭の構造も遼陽、海城等のものよりは頗る進歩した外國風の硝子窓付のものもあり、或は内地の勤工場的に商品を陳列したものもあつて、其商ふて居る品物も割合に文明に近いもの、就中日本製の諸物品が多く、我々が却つて日本品の販路の廣大なるに驚いた位である。支那の婦人も人に恐るゝ氣色もなく、盛装をして行くものも多く、彼の女の頭上に結ぶ稚子髻の半徑を著しく大きくして、閩麗大王の髻のように大なるものを差して歩く、極端に言へば女と云ふよりも頭の髻が歩んで行くと云ふ様な風であつて滿洲とは云へ流石は都、華かなる風俗の一端を表はすのである。此外に街衢の處々に辻馬車の溜所があつて、古代の繪に見る様な母衣馬車を轉して、都の特徴を示して居る、尙今迄他所で見たことのない棒持巡査が路上に至る處に立つて居つて、形丈けても市街の安寧を保つて流石は都であると感ぜしめた。軍政署の調査に依ると戸數約三萬、人口約十八萬を有するといふことである。

第二 福陵及び北陵

奉天の滯在聞城内の宮殿並に福陵、北陵を見舞ふて愛親覺羅氏の時代を窺ひ知ることが出来た。軍政署に於て調査した山陵宮殿考を左に記して予が觀察を補ふこととする。

山陵宮殿考

福陵(俗に東陵と云ふ)

福陵は奉天の北東三邦里餘の高地に在り、天聰三年二月(今を去る二百七十六年前)太祖皇帝を葬る、同年十月古制に倣ひ陵土を封じ、寢殿を建て、松樹を植へ、石象、獅、虎、馬、駝等の物を立つ、同十年四月福陵と名付く。順治八年(二百五十年前)増修の工成り、山を封じ、天柱山と曰ふ。其規制石を丈して地宮と

爲し、築くは黄土を以てし、後園にして前方、半月の形を成す、環らずに甃城を以てす。周廻六十二丈四尺餘、前に方城を起し、覆ふに樓門を以てし、樓上に樓名を題す。樓前に三間の寢殿あり、隆恩殿と曰ひ、高皇帝、高皇后の神位を奉安す。東西廡各三間、方城の四隅に角樓あり、前面に隆恩門あり、門前の中央に福陵、聖德、神功の碑あり、護するに亭を以てす。文は康熙席の撰に係る、象、駝、馬、麟等の石像は其兩側に駢立す。其の外に紅門、綠垣あり、周廻六百四十二丈餘、陵の西方に壽康太妃の園寢あり。

福陵山は昔時の東半山なり、順治八年封して天柱山と曰ふ、大清一統志に云く、天柱山は承德縣の東二十里に在る福隆があり焉、近きは渾河其前に環り、輝山、興隆嶺其後に峙ち。遠きは源を長白に發し、俯して滄海に臨む、洵に王氣の鐘まる所なりと。唐書に曰く、高宗、高麗を平く、渤海の大民衆を以て東牟山を保ちて自ら固むと。大明一統志に曰く、東牟山は瀋陽衛の東二十里に在りと、知るべし福陵山は即ち唐代の東牟山なることを。

按ずるに清朝の始祖を肇祖原帝と曰ひ、今の興京地方に勃興し、其玄孫を興祖直帝と曰ひ、父子相傳へて景祖翼、顯祖宜の二帝に及ぶ、以上の廟號、諡號は順治五年の近尊に係り、其陵墓は共に興京の西北一邦里なる啓運山に在り、永陵と稱す。太祖高帝は顯祖の長子にして、明の嘉靖三十八年誕生、萬曆四十四年(二百八十九年前)五十八歳にして帝號を稱し、始めて天命と建元し、都を興京に定め、其の十年三月瀋陽(即ち奉天)に遷都し、翌十二年八月(二百七十九年前)六十八歳にして崩じ、其の子太宗位を嗣ぎ、翌年天聰と改元し、其三年に太祖を福隆山に葬りしなり。

昭陵(俗に北陵と曰ふ)

昭陵は奉天城の北一邦里半強の高地にあり、崇德八年九月(三百六十二年前)山陵なるを告げ、其翌年(順治元年)八月太宗文皇帝を葬り昭陵と名づく、同八年(二百五十四年前)増修の工成り、山を封じて隆業山と

曰ふ、寶成周廻六十四丈三尺餘、繚垣五百九十八丈五尺餘、其他福陵の制と同じ、寢殿には文皇帝、文皇后の神位を奉安し、碑亭には康熙帝撰の昭陵聖德神功の碑あり又陵の西方に懿清貴妃の園寢あり。

大清一統志に曰く、隆業山は承德縣の西十里にあり、昭陵は正興城の東北より疊嶺層巒此に至りて寮平宏敞萬象を包羅し、八荒を統御するの勢あり、遼水右に廻り、瀋河左に繞り、佳氣轉輪囷、葱鬱として永く丕基のむ萬年の帝業を偶然にあらざるなりと。

按ずるに、太宗は太祖の第八子なり、明の萬曆二十年十月(三百三十三年前)誕生、天命十一年八月太祖崩じて其位を嗣ぎ、翌年天聰と改元し、同十年四月(二百六十九年前)國號を建て、大清と云ひ、崇徳と改元す、同八年八月五十二歳にして崩す、太子位を嗣ぐ、之を順治帝と爲し、其元年に都を北京に遷せしなり。

宮 殿(俗に金鑾殿と曰ふ)

宮城は奉天城内の中央に在り、崇徳二年(二百六十八年前)の建造にに係る、繞らずに甃牆(即ち宮城)を以てす、東西三十三丈八尺餘、南北八十九丈五尺六寸餘、東門を文德坊、西門を武功坊と曰ふ、其中間に南向の大門あり、大清門と曰ふ、宮殿の正陵なく、左右に東西角陵あり、其東南に大廟あり、西南に内務府の當櫓房あり、又大清陵の左右前面に奏樂亭各一、東西司房各一、東西朝房各一あり、極南の正面に照壁あり、躡龍を畫く、大清陵内の東西に二層樓各一あり、東を飛龍閣、西を翔鳳閣と曰ふ。宮内所藏の審器今此二閣に藏せり、二閣の後各櫓の直房あり、又大清門内の正面に正殿あり、崇政殿と曰ふ。大朝常朝の日皇帝群臣を朝し、政を聽くの所たり。北京遷都以後の諸帝、奉天に幸する毎に、此殿に御し、朝儀を行ひしと云ふ。殿の前後に東、中、西の三階あり、殿内の中央に御座あり、歷代宸筆の一遍額を掲ぐ、殿の左右に翼門あり、乾隆十三年(百五十七年前)の所設に係る。

崇政殿後の東西に二層樓各一あり、東を日華樓、西を霞綺樓と云ふ、日華樓の北に隣る平屋の師善齋と曰

ひ、霞綺樓の北に隣ること協中齋と云ふ、又崇政殿後の正面二三層あり、鳳凰樓といふ。是より地盤高起すること一丈餘、石階を昇りて樓下に至る、當初樓の上層に金龍櫃十五を設け、歴代の聖容並に朝賀行樂等の圖を尊藏し、中層に金龍櫃十五を設け、(大清受命之寶)等寶璽十顆を尊藏せしが、近世樓屋壞漏せるに及び、他に移藏せりと云ふ。

鳳凰樓後の正面に清寧宮あり、皇帝の正寢たり、太宗文帝は實に此宮に於て崩殞せり、按ずるに、清朝發祥の始、堂子を設け、杆を立て、天を祭り、位を寢宮に設けて神を祀る、之を報祭といふ。北京遷都以後、壇廟を建て、禮文を備へしも舊俗の或は未だ改まざるあり、立杆大祭の禮、宮内報祭の禮の如き即ち是なりと云ふ、今奉天官吏清寧宮を指して祭宮なりと曰へるは是れが爲なり、宮東に二宮あり、北を開隆宮、南を衍慶宮と云ふ、宮西にも二宮あり、北を隣趾宮、南を永福宮と曰ふ、此四宮は后妃皇子女の居所なりしが、今皆屋宇崩落して僅かに壞壁を存するのみ。

清寧宮に東西の兩院(別庭)あり、東院に在る二層樓を敬典閣と云ふ、舊記に據れば上層に金龍櫃二十二を設け、玉牒(帝室の系譜)を尊藏すと云ふ。閣前に介祉宮あり、宮前に頤和宮あり。又西院にある二層樓を崇謨閣と曰ふ、舊記に云ふ上層に金龍櫃二十二を設け、實錄聖訓、老檔冊、舊檔案、實錄圖を尊藏すと。閣前に織思齋、保極宮、迪光殿あり、以上兩院の諸宮は皇室の別宮なりしも今皆荒頽甚しく殆んど足を容るべからず。

宮城の東隣に大政殿あり篤恭殿と云ふ、殿の制八隅になるを以て俗に八方殿と稱す、殿庭の東西に五署あり、最北の兩署は左右翼、王大臣、義政所たり。其樓の八署は八旗官員の朝集所たり、北京遷都以後奉天府文武の各官毎月初め五、二十五等の日此に朝集し、又元日、萬壽節には各官參集して進賀の禮を行ふ。殿後に變駕、鹵簿の庫あり、以上別に縹らずに垣を以てし、宮城と同じく崇徳二年の建立に係る。

宮城の西隣に文潮閣あり、圖書樓と呼ぶ三層六門より成る、古今圖書集成及四庫全書六千七百五十二函を珍藏す。圖書集成は官板の印木に係り、四庫全書は全部楷書し寫本にして、其紙質我美濃白紙に類す、内經部千五百六十八函、史部千五百八十四函、子集部三千六百函、每函六冊乃至十餘冊を容る、文潮閣の東牆に碑亭あり、内に乾隆四十八年の御製に係る文潮閣記の碑を立つ、碑陰に乾隆亭の宗高論を刻す。又閣後に仰熙齋、閣前に嘉陰堂あれと共に甚しく荒頽せり、以上別に綠垣を有す。

按ずるに宮殿の修理は北京内務府の管掌に屬し、康熙十一年(二百三十三年)前該府工部に會同して重修し、自後應修の處あれば該府より工部に移牒し、吉日を擇て修理するの制なりしが、道光帝(道光元年是今より八十四年前)東逃せしを最後とし、咸豐(その元年是五十四年前)以後逃幸の儀なく、隨て修理怠廢以て現狀を呈するに至りしなり。

福陵、北陵共に二百六十年前の建築物としては比較的良く保存されてゐる、此の建築物の内特に異彩を放つてゐるものは、支那固有の文明を代表し建築物に、陶器の術工物が多く使用されてあることである。黄色の瓦を以つて葺きたる屋根、門及扉に印したる青龍の模様、其他屋根裏の諸美術的技巧は殆んど皆陶器製である、而かもこの陶器技巧は總て珪化物を以つて表面を蔽ひあるが爲め、其盛時の古色を今尙存して、如何に過去に於て陶器技術の盛なりしやを想像せしむるに足るのである。其他木石に施せる諸種の彫刻は皆細美を極めて、殊に北陵の大理石の四足門の如きは滿洲に於ても得がたき建築の一つであらう、二陵共同一の經始であつて、唯異る所は福陵の方は山を後に負ふが故に陵の大部は丘上に存し、北陵の方は平地に人工を以て丘を作りたるものにて甚だ高からず、然れとも樹木鬱葱として人をして神靈の地たるを思はしむ。

第三 腑甲斐なき滿州人

併しながら二陵は清國宗廟の地なるにもかゝらず、今は我兵士に依つて守護せられて居る、襄微國の衰れなることは自國の兵を以て之を守護するの力なくして、露人來れば露人に、我國人來れば我國人に縦覽を許さねばならぬ。露人の如きは亡狀甚しき跡を残してゐる、福陵の碑亭の傍にある松の木の皮を削つて露語を刻したる如き、同亭屋上の金色の球を奪ひたるが如き、皆露人のわざである。又北陵の如きは奉天大會戰の激戰地内に投せられ、第七師團の村上聯隊が敵の攻撃を此陵内に死守して露兵の攻撃に對し、陵の最外壁は銃眼を穿つの止むなきに至つた。之等は戰鬪行爲上とは云へ、滿洲人の立場から見れば宗廟を犯されたる一大恥辱とせねばならぬ、然るに彼等は別に悲しむ模様もなく、我兵士等の縦覽に委かして顧ないのである。彼等の腑甲斐なきは寧ろ哀れむ可きものである。

宮殿則ち金鑾殿に至つては殆んど云ふに堪えない、其多くの建築物は殆んど壞廢して古の見る影もない程である、草は茫々として至る處、低きは地上より、高きは屋上より繁生してゐる、彼等支那人は修理の法を知らないであらうか、或は修理の費用がないのであらうか、而かも支那の官吏等は恬然として其縦覽人を案内してゐる。昔は帝王が百官を其階下に跪かした崇政殿の御座の上を、今は靴のまゝで踏みにじつてゐる。御座の周圍に飾られた陸の一部をなして居つた金色の龍頭は已に三四個ももぎ取られてをつた。若し今昔を比較したならば、眞に天壤の差であらう、殿堂若し靈あらば、恐らく今は無念の涙に暮れて居るであらう。

此宮殿は大體より觀察すれば規模の小なるものである、又其構造も明を滅ぼして亞細亞の大半を領有した帝王の始めの住居としては甚だ粗末である、而しながら今日此の内に藏してゐる諸種の寶物を閱覽した時に、此宮殿の狹隘且つ粗末なるにかゝわらず、其勢力の如何に強く且つ遠きに及びしかを想像することが出来る。某帝の被むりし兜の腦天に數百の大なる金剛石を燦めたる如き、二振の金剛刀の柄の全部を金剛石にて蔽ひたる如き、又某帝の衣被の表面全部を眞珠を以つて蔽ひたる如き、何れも皆天下の至寶を集めたるものであつて、思ふに四圍の王侯が清帝に朝参した時に献納したものであらう、斯様な寶玉を集めたるものは恐らくは世界に稀であらう。

第四 散亂せる人馬の死屍

三月も過ぎ四月となつた、今迄枯れた枝を寒風に曝らして居つた柳の木は、緑なる若葉を萌え出で、今迄荒寥たる野の景色を俄かに賑はしめた、同時に島の面に高粱の種蒔く農夫の影も繁くなつた。此の月の中頃王家河子に在つた軍司令部に出張した、奉天の西北なる幾百萬の墳墓の間を横ぎり魚鱗堡に通ずる道を辿つて、奉天——鐵嶺街道に出ずれば、此處より蒲河迄の間に白紙の飛び散りて雪消えの春のやうであつた、之は此の附近で鹵獲したる敵の行李の内容を發いて其儘に捨て置きたるがため、内にありし紙片の風に散らされたものである。道の一側にある地隙の内に捨てられたる馬の死骸は今も尙其儘となりて慘鼻の様見るに堪えない位であつた、其數も多きは二三十、少きは四五相重なつて、全數は百にも近かつたであらうか。兵站司令部の埋没の作業が充分行き届かなかつたであらうが然し乍ら戰鬪の激烈の然らしめたのである。其外露兵の死骸は概ね片付けありしも、其埋葬の淺きと、無遠慮至る處を通行する支那馬車の車輪のため、胴中を踏み切られて現はれてゐる死體を見受けた、其外露兵の捨てたる上衣、襦袢、帽子、靴、雜囊等は所々猶飛び散つて居つた。蒲河に晝食を喫して其夜鐵路に宿泊した。

翌日王家河子第四軍司令部に到り予が任務を果し、次に心臺子停車場を視察して蒲河に來り此處に泊つた。其翌日蒲河を出で、胡土臺の停車場を見んと、蒲河より道を西に取つて進みたるに、遂に道を失し、行く處地隙に遭遇して全く人民の住居せざる村落を幾度か過ぎ、唯磁石を便りにして道ならぬ道を右に左にたどりつゝ、兎に角西南の方向に馬を急がせた、時には屍の血と肉に味を覺えたる野犬の群の襲撃に逢ふて、からくも其の害を免かれ、時には濕地に馬を踏み入れて進退谷まつたこともあつて、人なき野原を非常なる困難を嘗めつゝ、七里の道を八時間餘を費して漸く奉天に歸着した。

第三十六章 大會戦後の小康

第一 會戦後各軍の前進

我滿洲軍は三月十五日に鐵嶺、同十八日に法庫門、同十九日に開原、同二十一日に昌圖を占領して、三月下旬頃から此處に一旦停止の姿となつたが、我騎兵は更に前進して三月三十一日に綿花街、四月三日に四面城、同四日に孤榆樹を占領し、其後金家屯、八面城等の各地を占領したが、敵の騎兵のため屢々包圍せられて思はぬ損害を受けることが屢々であつた爲め、此に歩兵を以て騎兵に代らしめ、四月中旬に其第一線を更に前進せしめ、各軍は二線の重疊配備をなして、第一線師團は康平、昌圖、開原、砂寧堡の線に、第二線師團は法庫門、鐵嶺、飄起屯の線にあつた。そこで各軍司令部も又其位置を轉じて、第一軍は金家屯に、第四軍は梅家寨に、第三軍は法庫門に進んで、第二軍も又漸く總豫備の位置から前進して第四第三軍の中間に其四師團を置くやうになつた、隨つて各軍の兵站監部も間もなく移動して、第一軍は飄起屯に、第三軍は法庫門に、我兵站監部は三月下旬奉天に進んだ、第二軍の兵站監部は又依然として遼陽に残つて居つた。

此處に些か附記しておく可きことは、三月二十日頃に第六師團と第五師團が各々第二、第四軍の戰鬪序列から離れて、それ／＼に第四、第二軍の序列に這入つたことであつた、之がため兵站部の方でも野戰兵器廠と豫備馬廠とが彼是轉換をした。鴨綠江軍のことはしばらく忘れられてあつたが、三月十日に撫順、同じく十一日に營盤、同じく十三

日に興京を占領して、其軍司令部は四月上旬永陵に移つたことは前に記して置いた通りである、而して四月十五日に其右翼部隊は通化を占領して、其第一線は第一軍の右翼に連つて英額邊門から懷仁に及んで居つた、その兵站監部は五月下旬鳳凰城から永陵に移轉をした。

第二 無恥の將帥か忍辱の君子か

敵は奉天退却の際二十萬の損害を受けて潰走した諸隊を、漸く奉化附近で纏め其騎兵團を我と接觸せしめつゝ吉林長春の線に退却せんとしたが、我軍の追撃の止まつたのを幸ひに、奉化附近に停止して一先づ戰團の疲勞を回復せんとした。其騎兵は八面城、綿花街の線に止まつて我を監視し、其後方には稍々有力なる歩兵支隊を備へて居つた。奉化附近に停止したる部隊は此處を本防禦陣地として盛に工事を施した様である。茲に世界の耳目をひいた一事は三月下旬敵の總司令官クロバトキンが其の職を解かれて、間もなく彼は第一軍司令官に任せられ、元の第一軍司令官リネウイツチが總司令官となつたとの電報が傳つたことである。この電報は一般の推測から誤傳であらうとの噂であつたが、月日を経るに隨つて其の事實であつたことを知つた。この不思議なる任免は我々を衝動した、今まで指揮をしたものが先の受命者から指揮を受けると云ふことは我々日本人の性質では絶対に耐へ得べからざることであるのにクロバトキンはこの恥辱的任免を唯々として受けて居る事は如何にも解すべからざることである。或人は如斯ことを甚だしく恥辱と考へぬのは露西亞人の性質であると云つたが、果してそうであらうか。先にグリッペンベルグは黑溝臺に敗れて直に歸國した、其神經質的行動に對してクロバトキンの如き非常なる無神經的行動の存するを以て見れば露西亞人の特性と見ることも出来ぬ様である、クロバトキンの境遇から論じて行けば、其連戰連敗の不名譽を負ふて歸國することは露國人の激昂を招くばかりで有利でない、それであるから恥を忍んでも尙且つリネウイツチの指揮を受ける方が利益である。併し乍らリネウイツチの指揮を受けることは連戰連敗の恥辱よりも更に一層大なる恥辱であ

る、この二箇の事柄の間に彼はその進退問題を決して德義の善惡を捨て、利益の有無に赴いたのではあるまいか若しもそうであつたならば彼は最早個人として尊敬に値すべき人間でないのである、然らずんば支那流の如何なる恥辱を受けても之を忍ぶと云ふ様な忍辱の君子であらうか、先には幾萬の士卒を敵國の捕虜となし、己れ一人故國に歸ると云ふステツセルの如き敗徳者あり、今は又屈辱に甘んずるの所謂君子あり、しかも皆數十萬の生命を掌に握れる人である、露軍の振はざる誠に故なきにあらざるである。

第三 一週年の回顧

指折り數ふれば歲月は早きものである、第十師團の動員下令の日たる四月十六日は其の一週年として今來つた、去年の今日は我は何を爲しつゝあつたであらうか、我陸軍は如何なる計畫を成しつゝあつたであらうか、予は吉田中佐と參謀本部にて相會し、我陸軍は鴨綠江戰團の準備運動を爲しつゝありしのみ、未だ戰爭の前途は頗る遼遠であつた。一週年後の今月今日は奉天に於て予等は奉天戰捷の祝賀會を兼ねて兵站監部の誕生祝をした、我陸軍は既に敵と雌雄を決して最早疑ふべからざる大勢を作つて戰爭終局の豫告をした、その短き歲月に拘らずその成功の偉大なるに驚かざるを得ないのである。

第四 大宣橋の渡橋式

四月二十九日予は渾河の大宣橋渡橋式に參列した、この橋は遼陽奉天街道上渾河に架するものであつて、奉天の南概ね一里に位して居る。其工事は三月の下旬から露軍の造りたる基礎工事を元にして、第三師團、第六師團の工兵及我兵站に屬する第十師團後備工兵の各一中隊を以て、第四軍工兵部長古川少將指揮の下に行はれたのであつた。その

長さ概ね七百米突に達する、半永久的大架柱橋である、渡橋式は大田總司令官の先導を以て行はれて、その後で祝辭の朗讀や、橋梁に關する古川少將の説明があつた。少將の曰く橋の張間の板を假りに縦に繋いで延長したならば富士山の高さよりも高くなり、橋に用ひた釘を横に繋いで延長したならば戰艦を七隻繋いだ長さよりも長い、其橋の長大なることは想像するに足るであらう。この橋を内地で作つたとしたならば恐らく縣知事の二三度の交迭もあつて、四年の後に漸く竣功するであらうと予は考へた。仕事をすると軍隊組織程抄取るものは恐らくは外にはないであらう僅に三箇中隊の工兵を以て一ヶ月内外の間に七百米突の橋を作り得たのである、簡單なる祝宴と餘興とがあつた後解散をした。

第五 戦地の招魂祭

五月六日は例年靖國神社大祭の行はれる日である、我兵站監部では此日をトして戦地上陸以來我兵站部に屬して戰死若しくは病没したるものために招魂祭を催した。祭壇は莊嚴に喇嘛寺の郭内に設けられた、午前八時から佛式祭典が行はれて兵站監は次の如き祭文を讀むだ、部隊及將校同相當官一同の參拜が続いて行はれた。

時維明治三十年五月六日。第四軍兵站監陸軍歩兵大佐正五位勳三等功四級奥山義章。於清國盛京省承德縣奉天府西門外。祭。第四軍兵站部隊戰死者靈。天地清物靜也。諸士靈希々來夫。大宇無邊也。大宙無窮也。生物存々此世。實一沙一粒耳。一瞬一刻耳。其去々此世。或化。戰場一滴露。或爲。寂野一條煙。體軀已寂滅。而百事休焉。雖然其魂魄。長滂。滂天地。至。後世。照。臨其子孫。擁。護其國家。其動績永。照。汗青。幾千百星霜。養。其民人。激。勵其衆庶。悠久不滅也。況。於。諸士臨。邦家大事。盡。瘁。軍務者耶。諸子靈今去幽冥裡不可復見。然其生前功勳不可沒也矣。回。顧。當兵站部。上陸。大孤山。以來到。今日。戰病死者。故陸軍歩兵大尉福田大作以下總三百四十四。就中故陸軍歩兵曹長吉領三七以下十二名者。黑溝臺會戰之際於。牛

居附近。戰鬪。爲。敵彈。登。故陸軍歩兵上等兵大畑藤太郎以下兵卒五名輪卒三名者。奉天附近會戰之際。或戰鬪中。或彈丸搬送中。爲。敵彈。登。無念之一言。睥睨敵。而憤死之狀。今其戰友嘖々所傳也。故陸軍輜重輪卒阪根平太郎以下二名者。於海城南邊沙河。奉命從。車輛收集。事。豪雨俄降河水忽漲。遂溺。濁流中。故陸軍輜重輪卒森幸次郎以下二名者。於五里街。手押貨車運轉中。過。他貨車衝。突。之。遂。壓。死。此等皆忠。其職者。雖。非。戰死。其榮其譽宜。匹。之。也。故陸軍三等軍醫稻田清淳者。於煙臺軍政署醫治。清人傳染病者。遂。自。感受而病沒。其恩及。異域。人澤垂。後世。雖。非。戰死。以可憐是也。此他雖。不幸而爲。病魔所。襲。吞。恨。不。惜。其。歿。祇。禱。上。者。於。其生前。皆。致。勉。其任勸。其務者。其功可。傳。也。予。每。聞。諸士之。訃音。未嘗。人。贊。其功。焉。而悲哉。鞍馬倥傯之際。戰場荒蕪之間。百事缺。施設。祭葬不。如。意。以是。密。懼。諸士靈或。尙。彷彿。幽冥之裡。或馳。驅。妖魔之間。未。得。其。適。歸。處。若。夫。在。叢。莽。陰。處。萬。影。微。處。悵。悵。將。不。絕。噫。非。痛恨之極耶。是予所。常。憂。也。乃。期。奉天大捷戰後。設。壇。供。香。華。招。諸子之英靈。淡。香。清。華。幸。亨。之。招魂祭の當日には餘興として競馬、相撲、芝居等の催しがあつて非常なる賑であつた、兵站部の將校同相當官並に高等文官のためには別に宴會の場所が設けられ、第二軍の樂隊までが來たつて此宴會の興を助けた、此外各隊で造つた諸種の造物などがあつて此日の賑を増した、翌日も亦競馬を除くの外前日の餘興が繰り返された、兎に角戦地上陸以來の賑やかさであつた。

第六 下劣なる衆議院議員

招魂祭の第一日に當時奉天兵站司令部に宿泊して居つた二名の衆議院議員を宴會の席に招いた、此議員は戦地視察のため滿洲に來つたものであるが、其無作法なのに驚かざるを得ない、彼等は一言の挨拶もしないで宴會の席に來つて其馳走を無雜作に食ひ且つ飲んで、又一言の挨拶もなく其席を去つてしまつた。兵站監始めには大いに訝かつ

て居られた、之に就いて思ひ起すのは當時戦地視察の名を以つて奉天に來つた衆議院議員が百名許りもあつた、其多くは奉天兵站司令部に數日の宿泊をして、同兵站司令部の給養を彼是云つて居る、其晝間の行先は福陵や、北陵や、宮殿の見物であつて、夫れ以外には總司令部に伺候するの外は殆ど何處へも顔を出さないので歸つて仕舞ふのであつた戦場の跡や、軍隊や、高等司令部などを見舞つて慰問の一言を述べて行くのは殆ど一人もない、新民應や、撫順の炭坑や、營口すらも視察して行くものは其内の極少數である、殊に兵站司令部を宿屋と心得て、兵卒の前で肌を脱いで酒を飲んだり、歌を唄ふたりして其下等なる人格を表してはゞからないのは誠に言語同断である。予は茲に於て始めて衆議院議員なるものゝ正體を知つた、斯様な人が國の豫算や法律を議決するのであるかと思ふと誠に不安の至りである、滿洲の經營などは思もよらぬことである、衆議院議員の凡べてが此通りであらうとは思はないが、斯様な人が多といふのは誠に情けない次第である、血を流し屍を積むで取つた土地も之では後に屍の山に草が蔓るばかりである。

第七 精神的強力

招魂祭の第二日に亞米利加と、西班牙と、英國との從軍記者が來つた、予は其内の一人なる西班牙の大佐某と一時間餘りの對談を試みた、彼は非常に日本軍隊を稱讃して世辭を列べるのであつた、彼は日本人が身體が小さな割に頗る強いと云ふ事を語つた。予は之に答へて日本人は體が小さいから物質的には弱いのであるが、精神的には強いのであつて、是が敵を壓倒する所以であると云つた時に、彼は大いに感動したらしくイエス、スピリチュアル、ストレンダスと幾度も續けて叫んだ。將來文明の進歩と共に逐次物質的のことが精神的のことが精神的の事を壓倒して行くのであるから、此精神力の保存、尙一步進んで之が涵養發達に深く意を留めなければ、日本軍隊の物質的缺點を補ふ此精神的特點は遂に滅却してしまふかも知れない、大に一般の注意を喚起せねばならんことである。

第八 所感の一文

此頃少しく感ずる處があつて次の文章を作つた。

昔者秦ノ二世皇帝政ヲ失シ所在兵起ル、陳勝吳廣ノ徒遂ニ城ヲ圍ム、帝舞樂燕遊ニ耽リテ事ヲ省セス、劇々タル笙笛、鐸々タル琴瑟ノ間、殿堂樓閣既ニ炎々天ヲ焦ス、始皇ノ末世憐ムベキ哉、帝ノ闇愚ハ固ヨリ語ルニ足ラスト雖モ、國ヲ忘レ、家ヲ忘レ、而シテ己ヲ忘ルルモノ、是レ歌舞ノ致ス所ナラスヤ。「ポーマー」ノ「オデツセー」ニ曰ク、「トロイ」ノ王城、「ヘレン」ノ長圍、解ケテ春陽俄ニ至ル、乃チ宴ヲ設ケ劇ヲ開キ長夜ノ飲ヲナス、「ヘレン」ノ軍虛ニ乘シテ「トロイ」ノ堅城ニ圍ル、歌舞ノ夢忽チ去テ修羅ノ巷トナリ縲紲ノ辱ヲ受ク、亦是歌舞ノ致ス所ニアラスヤ。「アデン」ノ隆盛ヲ以テシテ「ペロピダス」ノ策遂ニ女装勇士ノ嬌姿ト、盤舞演技ノ裡ニ其軍ヲ潰滅シタルニアラズヤ、羅馬ノ都府百花爛熳典章燦然而カモ「ジュピター」ノ殿堂ニ於ケル祝祭嬉舞ノ間「ハンニバル」ノ軍ニ圍マレタルニアラズヤ、陣中觀劇ノ事是カ非カ吾之ヲ知ラズ、然レドモ幾千星霜、汗青是ヲ照シテ事實ノ殷鑑ヲ後世ニ示スニアラズヤ、誰カ曰ハン天ハ晦冥ニシテ事實ハ偶然ナリト、其由テ來タル所ヲ尋ネ、其弊ノ極マル處ヲ探ラバ、世ニ處スルモノ惧レテ懼レサルベケンヤ。戰場ハ室々タリ、千萬ノ枯骨砂塵ニ弄セラル、處、燐光夜半ニ輝キテ腥風空ヲ拂フノ狀ヲ見、鮮血淋漓痛苦ニ呻吟シ、傷痕ニ號泣スルノ聲ヲ聞カハ、誰カ悲慘悽愴ノ感ナカラシヤ、乃チ予ハ曰ク何スレゾ人間ノ心ヲ以テ此間歌舞演藝ニ其耳目ヲ樂マシムルニ忍ンヤト、更ニ予ヲ失シ、親ヲ没シ、夫ヲ失フタル老親妻嫂ノ愁嘆、孤兒寡婦ノ悲鳴ヲ揚ルモノアルヲ思ハザルカ。予ハ再ヒ曰ハン、此際人間ノ心ヲ以テ恬然劇ヲ見ルニ忍ンヤト。實ニ戰陣ハ慘ナリ、銃砲劍戟ノ聲歛マルト雖モ、陣中觀劇ノ心ヲ檀ニスル能ハザルナリ、況ンヤ觀技觀藝ノ弊、遂ニ其中ニ人心ヲ没シ、敵ヲ忘レ、友ヲ忘レ、遂ニ國ヲ忘ル、ニ至ルニ於

テヲヤ。人アリ曰ク小人閑居シテ不善ヲナス、滯陣久フシテ隙ヲ得ルノ時、彼等士卒ノ耳目ヲ慰メ且ツ閑居ノ不善ヲ防ク、是レ良策ニアラズヤト、嗚呼夫レ何ソ思ハザルノ甚シキヤ、舞樂ハ泰平ノ事ナリ、演技ハ平和ノ事ナリ、堂々タル隊長威儀ヲ張り、令ヲ授ケ、命ヲ傳フルモノ何ゾ婦人女子姑息ノ策ヲ用ヒテ是ヲ防止スト曰ハンヤ、若シ夫レ徒然ノ無聊ヲ慰セント欲セバ、士卒ヲ率ヒテ新戰場裡ニ導キ、忠勇義烈ノ魂ヲ尋ネ、邦家ノタメニ殉シタル大義ト名譽ヲ旌表説示シ、涙潸々人ヲシテ泣カシムルモノアラシメハ、卑猥下劣ノ情緒ヲ發動セシムルノ劇ヲ見ルニ優ル萬々ナラズヤ、斯ノ如クニシテ教フベシ、斯ノ如クニシテ諭スベシ、庶幾ハ精神教育ノ一端タルヲ得ン、大敵ニ向ヒ邦家ノ運命ヲ賭シテ戦フノ時、人心ヲ鍛練薰陶スル日一日其要ヲ加フ、噫此際予ハ三たび曰フ人間ノ心ヲ以テ劇ヲ見ルニ忍ンヤト、觀劇ニシテ苟モ事ナケレバ止ム、事アリ變生シ是カタメニ處置ヲ失スルアラバ何ヲ以テカ疎懈センヤ、思ハサルカ昨年二月八日ノ夜敵ノ艦隊提督國交破レテ猶ホ演舞歌技ニ耽ル、轟然一聲色ヲ失シ、遂ニ觀劇將軍ノ異名ヲ受ケタリ、是レ實ニ武夫千歳ノ汚辱タルニアラスヤ、感スル所アリ是ノ論ヲ作ル

第三十七章 日本海 の 海 戦

第一 バルチック艦隊の接近

我大本營が其航速を計算して一月月上旬には黃海に現はれ得ると考へたりし敵の第二太平洋艦隊は、昨冬マダカスカルに集合してから依然として同所に奄留して居つた、一月に至つても出でず、二月に至ても出でず、恰も將に起らんとせし陸上の大會戰の結果を傍觀しつゝあつたかの様である。新聞の傳ふる所に依ればマダカスカル碇泊中は専ら將卒の教育に従事しつゝあつたと云ふ、或は又當時バルチックを出發せし敵の第三太平洋艦隊を待ち受けつゝあつたの

であらうか、然るに陸上の會戰は見事に失敗したので、其不名譽を恢復せんがために、若しくは我陸軍の急追を防がんがためか、其第二太平洋艦隊は三月十六日俄にマダカスカルを出發して、一時は其何處に向つたかの踪跡を失して居つたが、果して印度洋を通過してスマトラ方向に向つた、其のマラッカ海峽を通過するか、又はズンダ海峽を通過するかは未定の問題であつたが四月八日には、シンガポールを通過し同十二日に佛領安南の一港カムランに入つた、此事の確報は越えて十七日に我官憲へ傳へられた。其處で佛國駐劄の本野公使を介して同政府に抗議を申込んだ、佛國政府の曖昧なる辯明に依つて彼是遷延する内に、英國の佛政府への忠告に依つて僅に通知を發して同二十二日に同艦隊の一部がカムランを出發して其中譯を作つた、更に我政府の抗議に依つて漸く二十六日に其全部がカムランを出發した。此間に彼は糧食石炭を積み込み、其他戰鬪の準備を充分に整へたのであらう、而して彼は二十六日カムランを出發したかと思ふと、其翌二十七日に又してもホンコンに入港した、此處で又對佛國政府の抗議が始まつて、英國の強固なる忠告と共に彼は五月八日再びホンコンを出發すべく餘儀なくせられた。然し乍ら此ホンコンの出發は其實尙ほ同港附近に在つたので、佛國の所謂領海三哩的辨明の材料となつたばかりであつた。然るに又同十二日に至つて再びホンコンに入港した、此頃英米の艦隊は南支那海の各地に在つて大に示威運動をやつた、是がために彼は其翌々十四日再びホンコンを出發した、是は其第三太平洋艦隊と聯合せんがためであつた。

敵の第三太平洋艦隊は三月二十一日クリイト嶋スタワンを出發して、同二十四日ボートサイドに着し、二十五日スエズを通過し、四月四日チブチーに着し、此處にて獨逸給炭船より石炭を積み込み、同七日チブチーを出發して、同十七日セイロシ島沖を通過し、五月五日シンガポールを経て、同十五日其第二太平洋艦隊に合したのである。

第二 日本海 の 大海 戦

敵の第二、第三太平洋艦隊は暫く何處に向ひたるや其消息を失して居つたが、同二十五日俄然上海の吳淞に來つたことが傳へられた、併し乍ら是は同艦隊の率ゆる假裝巡洋艦であつた、其主力は上海の沖サドル島附近を通過して同二十七日早朝九州邊海に現れた。此處に敵艦を待ち受けつゝあつた我聯合艦隊は茲に戦備を整へ、午後二時頃より對馬の東南日本海に於て大海戦は開始せられ、戦團は翌二十八日に亘つて繼續し、遂に敵の船艦十七艘を沈没し、五艘を捕獲し、敵の司令長官ロゼストウエンスキー及ネボカドフを虜にし、絶大の勝利を収めて敵國の唯一の恃みとした兩艦隊を全滅した。

當時發表せられたる公報は次の通りである。

天佑と神助に因り我聯合艦隊は五月二十七日敵の第二、第三艦隊と日本海に戦ふて遂に殆ど之を撃滅することを得たり。始め敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基き當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め、朝鮮海峡に全力を集中して徐に敵の北上を待ちしが、敵は一時安南沿岸に寄泊したる後、漸次北行し來りしを以て、我近海に到達すべき數日前より、豫定の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し、各戦列部隊は一切の戦備を整へ、直に出動し得る姿勢を持して各々其根據地に泊在せり。果然二十七日午前五時に至り南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は、敵艦隊二百三地點に見ゆ、敵は東水道に向ふものゝ如しと警報し、全軍勇躍直に發動し、各部隊は豫定の部署に準じて敵對行動を開始せり。午前七時内方警戒線の左翼哨艦たりし和泉亦敵艦隊を發見して敵既に宇久島の北西二十五哩の地點に達し、北東に航進すを報じ、巡洋艦隊(片岡中將直率)、東郷(正路)戦隊續て出羽艦隊も午前十時、十一時の交壹岐對馬の間に於て敵と接觸し、爾後沖の島附近に至るまで此等の諸隊は時々敵の砲撃を受けしも終始能く之と接觸を保持し、詳に時々刻々の敵狀を電報せしかば、此日海上濛氣深く展望五海里以外に及ばざりしも、數十海里を隔つる敵影恰も眼界に映するが如く、未だ敵を見ざる前既に、敵の戦列部隊は其第二第三艦隊の全力にして、特務艦船約七隻を伴ふこと、敵の陣形は二列縦隊にして、其主力は右翼列の先頭に

占位し、特務艦船は後尾に續行せること、又敵の速力は約十二節にして尙ほ北東に航進せること等を知り、本職は之に依り我主力を以て午後二時頃沖の島附近に敵を迎へ、先づ其左翼列先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり。主力隊(主戦艦隊「東郷大將直率」)裝甲巡洋艦隊「上村中將直率」瓜生戦隊及各驅逐隊は正午頃既に沖の島北方約十海里に達し、敵の左側に出でんがため、更に西方に針路を執りしが、午後一時三十分頃出羽艦隊、巡洋艦隊及東郷(正路)戦隊等も敵と接觸を保ちつゝ相前後して漸次に來り合し、同時四十五分に至り正に我左舷南方數海里に於て敵影を發見せり。敵は豫期の如く其右翼列の先頭にボロヂノ型戦艦四隻の主力戦隊を置き、オスラビヤ、シソイベリキー、ナワリン、ナヒモフより成る一隊左翼列の先頭に占位し、ニコライ一世外海防艦三隻より成る一隊之に次ぎ、ゼムチューク、イズムルドの二艦は兩列の間に介在して前方を警戒せるものゝ如く、尙其後方濛氣の中にオレグ、アウロラ以下二三等巡洋艦の一隊、ドミトリドンスコイ、ウラジミルモノマフ其他特務艦船等數連に亘りて連綿航続するを仄に認むるを得たり。是に於て全軍に戦闘開始を命し、同時五十五分視界内に在る我全艦隊に對し「皇國の興廢此の一戦に在り各員一層奮勵努力せよ」の信號を掲揚せり、而して主戦艦隊は少時南西に向首し、敵と反航通過すると見せしが、午後二時五分急に東に折れ、其正面を變じて斜に敵の先頭を壓迫し、裝甲巡洋艦隊も亦航続して其後に連り、出羽艦隊、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷(正路)戦隊は豫定の戦策に準じ、孰も南下して敵の後尾を衝けり。之を當日戦闘開始の際に於ける彼我の對勢とす。

主力隊の戦況

敵の先頭部隊は主戦艦隊の壓迫を受けて稍々其右舷に轉舵し、午後二時八分彼より砲火を開始せしが、我は暫く之に耐へて射距離六千米突に入るに及び猛烈に敵の兩先頭艦に砲火を集中せり。敵は之がため益々東南に撃壓せらるゝものゝ如く、其左右兩列共に漸次東方に變針し、自然に不規則なる單縦陣を形成して我と並航の姿勢を執り其左翼列の先頭艦たりしオスラビヤの如きは須臾にして撃破せられ、大火災を起して戦列より脱せり。此時に當り

裝甲巡洋艦隊も既に盡く主戦艦隊の後方に列し、我全隊の掩撃砲火は射距離の短縮と共に益々顯著なる効果を呈し、敵の旗艦クニヤージスワロフ二番艦、皇帝アレキサンドル三世も大火災に罹り戦列を離れ、敵の陣形愈々亂れ後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く、其騰煙西風に覆きて忽ち海上一面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包み、主戦艦隊の如きはために一時射撃を中止せるの状況なり、又我軍に於ても各艦多少の損害を蒙り、淺間の如きは後部水線に近く三弾を受けて舵機を損し且つ浸水甚しく一時止むを得ず列外に落伍せしが、幾もなく應急修理して再び戦列に入れり、之れ午後二時四十五分に於ける彼我主力戦況にして、勝敗は既に此間に決せり。我主力隊は如此敵を南方に撃壓し、煙霧の中敵影を發見する毎に緩徐に之を砲撃しつゝ午後三時頃には既に敵の前路に出て南東に向針しありしが、敵は俄に北方に向首し、我後尾を回りに北走せんとするが如きを以て、主戦艦隊は急に左十六點に一齊回頭し、日進を嚮導として北西に向ひ、裝甲巡洋艦隊も其通跡を過ぎたる後、正面を變じて之に續き、再び敵を南方に撃壓し、之を猛射し、午後三時七分敵艦ゼムチユグは裝甲巡洋艦隊の後方に突進し來りしも遂に我砲火に因り多大の損害を蒙り、既に戦闘力を失ひたるオスラビヤも同時十分に沈没し、孤立せしクニヤージスワロフは益々大破して其一槽二煙突を失ひ、全艦煙焔に包まれて操縦する能はず、混亂せる爾餘の諸敵艦も更に多大の損害を受けつゝ、又其針路を東方に採れり。是に於て主戦艦隊も亦一齊に右十六點に回頭し、裝甲巡洋艦隊之に次ぎ、遁るを追て益々敵を掩撃し、時々機を見て水雷發射をも試み、午後四時四十五分頃に至るまで主隊の戦闘に就ては別に著しき現象なく、始終敵を南方に壓して砲撃を繼續したるに過ぎず。此間壯烈の事蹟として特記すべきは千早及廣瀬(順太郎)驅逐隊が午後三時四十分の頃、鈴木(貫太郎)驅逐隊が午後四時四十五分の頃、敵の廢艦スワロフに對し勇敢なる水雷攻撃を決行したることにて、前者の奏效は確實ならざりしも、後者より發せし一水雷は敵艦の左舷後部に命中し、須臾にして艦體十度許り傾斜するを見たり。此兩回の襲撃中廣瀬驅逐隊の不知火及鈴木驅逐隊の朝潮は附近敵艦より猛射せられ、共に一弾を受けて一時危殆に陥りしも、幸にして遂に無事なることを得たり。午後四時四十分の頃に至り敵は北方に血路を開くを斷念せしにや、漸次南方に向て遁走するもの如く、依つて我主隊は裝甲巡洋艦隊を先頭とし、之を追撃せしが、少時にして遂に敵影を煙霧の中に失し、南下すること約八海里、行く／＼我右方に離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下特務艦船等を緩射し、午後五時三十分主戦艦隊は再び針路を北方に執りて敵の主力を索め、裝甲巡洋艦隊は南西方に折れて敵の巡洋艦に迫り、爾後日没に至るまで此兩戦隊は分離して各別の行動を執り、相見る能はざりし。

主戦艦隊は午後五時四十分頃其左方近距離に在りし敵の特務船ヴラルに一撃を加へて直に之を撃沈し、尙北方に牽敵し進航せる際、左舷艦首に當り敵の主力の殘艦約六隻の一群が北東に向ひ遁走しつゝあるを發見し、直に近づきて之と竝航戦を再始し、漸次敵の前方に出て、其先頭を撃壓せしかば、敵は初め北東の針路を執りしも、次第に西方に屈折し、遂には北西に向針するに至れり。此竝航戦は午後六時より日没まで連續し、敵は大破の餘其砲力を減少せるに反し、我沈著なる射撃は益々其威力を逞ふし、アレキサンドル三世と見へたる敵艦は早く列外に出て、後方に落伍し、先頭に占位せしボロジノ型戦艦は午後六時四十分頃より大火災を起し、七時三十分に至り俄然爆煙に包まれて瞬時に沈没せり、蓋し火災の彈藥庫に及びしならんか。又當時南方に在りて敵の巡洋艦隊を北方に追撃しつゝありし裝甲巡洋艦隊の諸艦は、既に傾斜して進退自在ならざるボロジノ型戦艦一隻が午後七時七分敵艦ナヒモフの側に來り、遂に轉覆沈没せるを目撃せり。後日捕虜の言に依り之れ即ちアレキサンドル三世にして主戦艦隊の見たるものはボロジノなりしを知るを得たり。

此時夕陽已に暮き、我驅逐隊、水雷艇隊は東西北の三面より漸次に敵に迫り、已に襲撃準備の姿勢を執れるを以て、主戦艦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日没(午後七時二十八分)と共に東方に變針し、同時に本職は龍田をして全軍北航して明朝靄島に集合すべしと傳令せしめ、竝に當日の晝戦を結了せり。

出羽、瓜生戦隊巡洋艦隊及東郷(正路)戦隊の戦況 午後二時戦闘開始の令下に出羽、瓜生戦隊巡洋艦隊及東

郷戦隊は、孰も我主力艦隊と分離し、敵を左舷に見て反航南下し、豫定の戦策に準じて敵の後尾に占位せる特務部隊及オレグ、アウロテスウイートラナ、アルマーズ、ドミトリドンスコイ、ウラジミル、モノマフ等の巡洋艦等を脅威迫撃せり、出羽、瓜生戦隊は終始共同連繫して、午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦隊に對して反航戦を開始し、漸次敵の後備を旋撃して其右方に出て、更に並航戦を試み、爾後機速力を利用し、機宜我正面を變じて、或は敵の左に顯れ、又は其右に廻り、攻撃を持続すること約三十分にして、敵の後方部隊は漸次に動搖潰亂し、其特務艦船の如きは遂に左往右往して爲す所を知らざるの情態に陥れり。此間午後三時過ぐるの頃「アウロラ」と見々たる敵艦單獨敵中より突進し來りしも、我が猛射に多大の損傷を負ふて撃退せられ、又午後三時四十分頃突撃し來りたる敵の驅逐艦三隻も爲す所なくして撃壊せられたり。

出羽、瓜生戦隊協力攻撃の効果は午後四時の交に及んで著しく發展し、敵の後方部隊は全く潰亂して箇々分裂し、其諸艦船皆多少の損害を受けたるものゝ如く、特務艦船中には既に操縦の自在を缺くものあるを見るに至れり。

瓜生戦隊は午後四時二十分頃三橋二煙突を有する敵の特務艦船一隻(或はアナチールならん)一方に孤立するを認め、直に近づきて之を撃沈し、尋て四橋一煙突の特務艦船(或はイルチツシュならん)を猛射して殆ど之を撃破せり。此頃より巡洋艦隊東郷戦隊も來り加り出羽、瓜生戦隊と共同して共に潰亂せる敵の巡洋艦及特務艦船を掩撃しつゝありしが、午後四時四十分の比北方より我主队に撃壓せられたる敵の戦艦(或は海防艦)四隻南下し來りて其巡洋艦に合力せしかば、瓜生戦隊巡洋艦隊の如きは少時近距離に於て之と對戦するの苦境に陥り、孰も多少の損害を受けしも幸に大ならざることを得たり。

是より先出羽戦隊の旗艦笠置は左舷炭庫水線下に一弾を蒙りしが、爾來浸水漸く増加し、其應急修理のため波靜なる所に行くの止むを得ざるに至り出羽司令官は自ら笠置、千歳を率ひ麾下の他艦は之を一時瓜生司令官の指

揮の下に屬せしめ、午後六時油谷灣に赴き、其將旗を千歳に移し夜に入りに出港、北行せしも笠置は修理に時間を要し、遂に翌日の追撃に参加する能はざりし。又瓜生戦隊の旗艦浪速艦も水線に敵弾を蒙り、爲に午後五時十分頃同戦隊は一時避戦して其損傷の應急修理を爲せり。

此時に當り敵は南北兩方面共に既に全軍潰亂滅裂の悲境に在りしを以て、午後五時三十分の比裝甲巡洋艦隊が我主队と分離して此方面に來り、敵の巡洋艦を追撃すると同時に、敵は群を爲して悉く北方に遁走し、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷戦隊も共に之を追撃せしが、其途上に於て既に進退の自由を失せる敵の廢艦クニヤージスワロフ及工作船カムチャトカを發見し、巡洋艦隊東郷戦隊は直に其撃滅に轉じて、午後七時十分カムチャトカを撃沈し、尋て巡洋艦隊に隨伴せる富士本水雷艇隊は突進して「クニヤージスワロフ」を襲撃し、同艦は尙艦尾の小砲一門を以て最終の抵抗を試みしも、遂に我水雷二發の下に沈没せり、時に午後七時二十分なり、幾もなく此等の諸戦隊は爵陵島集合の電令に接し、孰も戦を止めて北東に向針せり。

各驅逐隊及水雷艇隊の戦況

二十七日の夜戦は晝戦の終結後、直に各驅逐隊及水雷艇隊に依り猛烈果敢に開始せられたり。

此日朝來南西の強風浪を揚ること高く、小艇の操縦大に困難なるを認め、本職が直率せし水雷艇隊の如きは晝戦開始に先ち、盡く三浦灣に避泊せし程にて、夕刻に至りて風較々和きしも浪尙ほ靜ならず、洋中の水雷攻撃は我に不利尠からざるの状況なりし、然も各驅逐隊及艇隊は此一遇の時機を失するを恐れ、皆風濤を冒して日没前に來り會し、各々先を争ふて敵に當り、藤本驅逐隊は北方より、矢島驅逐隊及河瀬艇隊は北東方向より敵主力の先頭を壓し、吉島驅逐隊は東方より、廣瀬(順太郎)驅逐隊は南東より其後尾に迫り、福田(昌輝)大瀧、近藤(常松)青山、河田の艇隊等は南方より敵の主力部隊及其左後に併行せる巡洋艦の一群に追尾し、日没の頃次第に三面包圍の形勢を爲せり。敵は此勢威に屈したるにや、日没後倉皇南西に避け、更に東方に變針したるものゝ如く、午

後八時十五分矢島驅逐隊が第一撃を敵主力艦隊の先頭に加へたるを始めて、各驅逐隊、水雷艇隊一時に突進して敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至るまで連続激烈なる肉薄襲撃を決行したり、敵は日没より探照、砲火を以て極力防戦せしも、遂に此攻撃に耐へず、其僚艦相失して四分五裂の状態となり、各々血路を求めて任意に運動せしかば、我襲撃隊の追蹙と共に茲に一場の大混戦を現出し、少くも敵の戦艦ソイベリキ装甲巡洋艦アドミラルナヒモフ及モノマフの三隻は此間我水雷に罹りて全く其戦闘航海力を失ひ、又我軍に於ても福田艇隊の六十九號艇(司令艇)青山艇隊の第三十四號艇(司令艇)及河田艇隊の第三十五號艇の三隻は襲撃の際敵弾のため撃沈せられ、驅逐艇春雨、曉、雷、夕霧並に水雷艇鷲、第六十八號、第三十三號艇等は敵弾又は衝觸等のために多少の損害を蒙り、爾後一時戦闘に参加し難く、死傷も亦比較的尠しとせず。就中福田、青山及河田艇隊の死傷最も多し、但し没沈水雷艇三隻の乗員は友艇雁、第三十一號及第六十一號艇等に依り救助收容せられたり。

後日捕虜の言を聞くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆ど言語に絶し、我艦艇連続肉薄し來りしを以て其應接に暇なく、且其距離餘り近きため備砲俯角の度を過ぎ、照準する能はざりしと云ふ。

前記のもの、外鈴木(貫太郎)驅逐隊及自餘の水雷艇隊は當夜他方面に索敵せしが、鈴木驅逐隊は二十八日午前二時の比韓崎の北東微東約二十七海里の地點にて敵艦二隻の北走するを發見して直に之を襲撃し、其一隻を轟沈せり後日生存捕虜の言に依れば轟沈されたる此敵艦は戦艦ナワリン、にして同艦は兩舷に連續二發宛の水雷命中し、少時にして沈没せりと云ふ、自餘の諸艇隊は終夜各方面を搜索せしも遂に獲る所なかりし。

二十八日の一般戦況

二十八日黎明前日來の濃氣拭ふが如く、主戦艦隊装甲巡洋艦隊は既に韓陵島の南方約二十海里に達し、爾餘の戦隊並に前夜の襲撃を果したる各驅逐隊等も各航路を異にし順次後方より集合の途上にあり、午前五時二十分本職は敵の退路を遮断するため麾下巡洋艦隊を以て東西に搜索列を張らしめんとする際、後方約六十海里に占位して

北進しつゝありし巡洋艦隊は早くも敵影を發見して東方に當り艦隊の煤煙數條あるを警報す、幾何もなく同戦隊は敵に近づき復た報じて曰く、敵は戦艦四隻(後に至り二隻は海防艦たるを知る)巡洋艦二隻より成り今北東に向針すと、是れ問はずして殘敵の主力たりしや瞭なり。此に於て主戦艦隊、装甲巡洋艦隊は其針路を反轉し、漸次東方に向ひて敵の前路を扼し東郷、瓜生、戦隊も亦巡洋艦隊に合して敵後方を抑へ、午前十時三十分の頃竹島の南方約十八海里の地點に於て全く此敵を包圍せり。敵は即ち戦艦ニコライ一世、アリヨール、海防艦ネケラル、アトミラル・アブラキシン、アドミラル・セニヤービン及巡洋艦イヅムルードの五隻にして、他の一隻の巡洋艦は遙に南方に後れて當時其影を失す、固より敗餘の敵艦已に多大の損傷を負へるのみならず、我優勢に抵抗し得べきにあらざれば、主戦艦隊、装甲巡洋艦隊が先づ砲火を聞くや、須臾にして敵艦司令官ネボカトフ少將は其部下と共に降意を表し、本職は特に其將校以上に帯剣を許して之を受けたり。然るに敵艦イヅムルードのみは降伏に先ち其快速力を以て南方に通れ、我東郷戦隊に遮られて復た東方に走れり。此時油谷灣より歸港したる千歳も其朝途上に於て敵の驅逐艦一隻を撃沈したる後、此地に來り會し、直に轉じてイヅムルードに近尾せしが、遂に及ばずして之を北方に逸せり。

是より先瓜生戦隊が北航の途上に在る時、午前七時の頃、西方に一隻の敵影を發見し、音羽、新高の一小隊を有馬音羽艦長の指揮下に之が撃滅のため分派せしが、同隊は午前九時に至りて漸く敵に近接し、其敵艦スウェトラーナが一驅逐艦を伴へるものなるを知り、益々追窮し、戦闘約一時間の後午前十一時六分竹邊灣沖に於て全くスウェトラーナを撃沈し、尙新高は其時來會したる驅逐艦雲と共に殘れる敵の驅逐艦ブイストリーを追撃し、午前十一時五十分遂に之を竹邊灣の北方約五海里の無名灣に擱岸亞米利加丸及春日丸に依り悉く救助收容せられたり。敵の降伏を受けたる聯合艦隊の大部は、爾後尙ほ其地附近に漂泊して敵艦四隻の捕獲處分に從事しつゝありしが、午後三時頃南方より敵艦アドミラル・ウシヤークの來るを發見し警手八雲の一隊は直に之に向ひ、午

後五時過其南走するを追及して先づ降伏を勧告せしも之に應せず、反て彼より砲火を開きしかば止むを得ず砲撃して遂に之を撃沈し、其生存者約三百餘名を救助收容せり。又驅逐艦連、陽炎は午後三時三十分の頃薩陵島の南西約四十海里に於て東方より遁走し來る敵の驅逐艦二隻を發見し、極力之を北西に追躡し午後四時四十五分、追及して戦闘を開始せしに、敵の後續驅逐艦は白旗を掲げて降意を表せり。依つて連は直に之を捕獲せしに、此驅逐艦はビエードウイにして敵艦隊司令官ロゼストウエンスキー中將及其幕僚の移乗し居るを知り、其乗員と共に之を捕虜となせり。尙陽炎は他の驅逐艦を迫撃して午後六時三十分及び七時十分の間に之を北方に逸せり。又午後五時頃西方に索敵したる瓜生戰隊及矢島驅逐隊は敵艦「ドミトリ」の北走するを發見し、之を追尾して午後七時薩陵島の南約三十海里に至りし頃、恰も好し竹邊灣方向より來會しつゝありし音羽、新高の一隊並に驅逐艦朝霧、白雲、吹雪等が既に西方より敵に迫りて砲撃を開始し、瓜生戰隊と共に之を挾撃するの好位を制し、左右相待て日没後まで之を猛撃し、殆ど敵を撃破し得たるも、未だ撃沈するに至らずして遂に夜に入り其影を失せり。此攻撃中止と共に吹雪及矢島驅逐隊等連續之を襲撃し、其効果不明なりしも、翌朝に至り「ドミトリ」は薩陵島の東南岸に漂ひ遂に沈没したるを發見せり。而して同島に上陸したる其生存者は春日、吹雪等にて救助收容せられたり。

聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲々たる際、南方前日の戰場に於ても亦相應の殘獲ありたり。此日早朝戰場掃除の任務を持して出發したる特務艦信濃丸、臺南丸及八幡丸は、韓崎の北東三十海里の地點に敵艦「ソイペリキー」が前夜の水雷攻撃に傷き將に沈没せんとするを發見し、之が捕獲の手續きを了して其乗員を救助收容せり、而して該艦は午前十一時零五分終に沈没せり。又驅逐艦不知火、特務艦佐渡丸も午前五時三十分頃對馬琴崎の東方約五海里に於て敵艦「アドミラル」が沈没に垂んとせるに會し、續て又敵艦「ウラジミル」が著しく傾斜して其附近に來るを發見し、孰も佐渡丸にて捕獲處分を爲せしが、二艦共に大破して浸水甚しく、該艦も又大破して遂に午後零時四十三分に沈没したり。其他麾下砲艦特務艦等にて戦後戰場附近の沿岸等を搜索して救助收容し得たる撃沈敵艦の乗員尠からず、戦利艦五隻の捕虜と合して其數殆ど六千に達す。

以上は五月二十七日午後より二十八日午後に至れる海戦の經過にして、其後當隊の一部は尙ほ遠く南方に敵を搜索せしも遂に其隻影を見ず、日本海を通過せんとせし敵艦隊約三十八隻にして我撃滅又は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦、驅逐艦及特務艦各數隻に過ぎず。而して此二日間の戦闘に於て我艦隊の失ひたる所は水雷艇三隻のみにして、其他多少の損害を蒙りたるものもあるも、一として今後の任務に支障あるものなし。又死傷は全軍を通じ、將校以下戦死百十六名、負傷五百三十八名にして、其細別は別に報告せるが如し。

此對戦に於る敵の兵力我と大差あるにあらず、敵の將卒も亦其祖國のために極力奮闘したるを認む、然も我聯合艦隊が克く勝を制して前記の如き奇績を收め得たるものは一に

天皇陛下の御稜威の致す所にして、固より人爲の能くすべきにあらず。殊に我軍の損失死傷の僅少なりしは歴代神靈の加護に依るものと信仰するの外なく、敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も皆成果を見たるに及んで唯々感激の極言ふ所を知らざるものゝ如し。

戰場に顯れたる敵艦船

戰艦八隻 内
〔六隻 撃沈 クニヤージ、スワロフ、アレキサンドル三世、ゴロヂノ、
オストラビヤ、シリイペリキー、ナワリン、
二隻 捕獲 アリヨール、ニコライ一世、

巡洋艦 九隻内

- 四隻 撃沈 アドミラル、ナヒモフ、ドミトリードンスコイ、ウラヂミール、モノマフ、スウエトラーナ、
- 三隻 馬尼刺へ逃走抑留アウロラ、オレグ、ゼムチユイグ、
- 一隻 浦鹽斯德へ逃入アルマーズ、
- 一隻 ウラジミール灣へ逃走擱岸破壊イヅムルード

海防艦 三隻内

- 二隻 捕獲 アプテキシン、セニヤウイン
- 一隻 撃沈 ウシヤユフ、
- 一隻 捕獲 ビエードウイ、

驅逐艦 九隻内

- 四隻 撃沈 ブイスイ、ブイストルイ、グロムスキ、外一隻
- 一隻 上海へ逃入武装解除ボードルイ、
- 一隻 上海へ逃遁の途損害ノ結果逃没フレステヤースチー、
- 一隻 不明
- 一隻 浦鹽へ逃入ブラウイ、

假裝巡洋艦 一隻

- 一隻 撃沈 ウラール、

特務船 六隻内

- 四隻 撃沈 カムチャツカ、イルキツシユ、アナスイリ、ルツシ、
- 二隻 上海へ逃入武装解除コレヤ、スヴェリ

病院船 二隻

- 抑留アリヨール、カスツロマー内カスツロマーハ解放
- 二十隻 撃沈
- 五隻 捕獲

合計 三十八隻内

- 二隻 逃走後破壊若クハ沈没
- 六隻 逃走後抑留若クハ武装解除
- 一隻 不明
- 二隻 抑留(一隻解放)
- 二隻 逃走

第三 ネルソン以上、トラファルガー以上

英の海軍提督ネルソンがトラファルガーに於て佛、西聯合隊艦を撃破して以來、世界の海戦史上に一大光彩を放ち、同時に海國としての日本帝國の驚くべき力を發揮して世界の饒舌者を啞然たらしめたことの何たる偉大の成功であらうぞ、否東郷大將の威名は實にネルソンよりも聲高に反響したのであつた。世界は五月二十九日我政府で發表した戦報を見て先づ疑つた、然し乍ら三十日三十一日の公報を見て、啞然として其開ひたる口を閉ぢ得なかつた、其成功は確にネルソン以上であつた、二十隻の撃沈既に大成功である、五隻の捕獲更に之に加ふるに於ておやである、假令ネルソンは東郷大將以上の英傑であつたにしても、海戦の成功は確に日本海の方がトラファルガー以上である、海國のために五月二十七日は絶大の紀念日であらねばならぬ。

第四 深謀遠慮の戦略

我聯合艦隊の戦略的行動を論評したならば、此海戦の偉大なる成功は更に一層輝くであらう、聯合艦隊の三月以來佐世保、對馬、濟州島を以て成る三角形内に密に行動しつゝあつたと云ふことは海戦の後に聞いた、敵艦がカムラン香港等に出没する時に於ても、沈着すぎる程靜肅に其位置を轉じなかつたことは、敵をして頗る我艦隊の所在を搜るに苦

しましめたのである、若しも我艦隊の一部を南方に動かしたならば、敵は此艦隊の一部に依つて我主力の存在を判知することが出来たであらう、然らずとも此艦隊の一部を撃破して稍々劣勢となつた我主力を更に撃破するに容易なるを得たであらう、今日の場合を以て考ふれば、我艦隊は既に二隻の戦艦（初瀬、八島）及二隻の巡洋艦（吉野、宮古）を失ひ、開戦の當時に比すれば稍々劣勢となつて居るから、艦隊の力を數箇に分割するは不利益である。然らば常に其力を團結して對馬、函館、宗谷の三水道の何れより日本海に入るや未定問題である敵艦隊の行動に對しては直に之に策應し得るよう以待機の位置を占めなければならん、此位置は實に前記の三角形海面である。何となれば此艦隊の待機の位置は陸地に接近せず（其位置隠匿のため）而かも四方よりの通信網の集合點であつて、時々刻々敵艦隊に關する報導を受け得る處で、同時に風波に對して避難し得る良好の港灣を有する處でなくてはならん。此要件を充足したる地域は實に對馬近海より外にないのである（對島には竹敷港を有し、海底電線を集結して居るのである）斯様な位置に居たならば、假令敵艦隊が函館海峡若しくは宗谷海峡を通過するとしても、直ちに其方向に全力を提げて前進し、敵を迎撃することが出来るのである。何となれば、浦鹽斯德は對島、函館及宗谷の三點を通ずる圓弧の中心點であるからである。斯様にして其一旦撰定した待機の位置を飽くまで變更することなく、敵の中立侵犯的行動あるに拘らず、極めて靜肅に敵を待つて居つたことは我戰略の最も先見的且つ深謀的なる所以である、所謂三年不飛不鳴飛則衝天空なる處のものであらう、我艦隊の作戦行動は以上の如くして稱替措く能はざるものであるが、茲に一言を加ふべきことは、國民は勿論新聞記者までが完全なる秘密を保ち得たことの少からざる利益であつたといふことである。ロゼストウインスキーの語る所は將に此事を指して居るのである。

第五 拙劣なる敵の行動

敵艦隊の最も拙劣なる行動の一つは、シンガポール通過後常に陸岸に近く行動したことである、之に依つて彼の位

置は常に我に於て明かに知り得たのである。其二是シンガポール通過後に於て第三艦隊と合したることである、彼は之が爲に脅かされながら長く其來航を待たなければならなかつたことである。其三は對馬水道を白晝に通過せんと企てたことである、彼は之が爲全滅の災に陥つた。以上の三つものはロゼストウインスキーの否むべからざる失策である、其ネボカトフの捕虜に至つては言語同斷である、彼等露人の厄運に遭遇したときの脆さよ。

第二十八章 評論の評論

第一 新聞の愚評

日本海海戦は赫々たる名聲を中外に傳へた、其極此の海戦を我陸軍の奉天戦に、比較せんと試みた、往々にして其眼前に現はれたる狂喜の情に充ちたる心の尺度を以つて、既に其頭の冷却した奉天戦に當てがつて批評することは、尙ほ熱に依つて膨張した尺度を以つて冷却せる物體を比較するが如きである、此の點に於て已に誤謬に陥つて居るのである。新聞記者の或る者は、奉天戦の結果を以つて其當時決勝的大勝であると云つて置きながら、日本海々戦後奉天戦を聊かの勝利であると云つたものがある、之が冷熱から起る判断の誤謬を指摘して居るのである、彼等は唯戦闘の結果のみを論じて得々として居るが、結果は原因が持ち來す結果であつて、此の原因を探究せず、結果のみを云ふことは誤謬の甚しきものである、陸上は露の歩兵二十四箇師團、騎兵二箇師團に對し、我は常備後備を合し歩兵十九箇師團、騎兵二旅團を以て奉天戦に於て二十萬の損害と、四萬の捕虜を致したことは既に人力以外の結果である、三分の二の劣勢を以つて敵を包圍し、之を退却せしめた丈が既に大々の成功である、況んや二十四萬の打撃を

與へたるに於ておやと云ふべきである、略々同等にして且つ海戦に慣れたる海軍力を以つて、艦型速力共に不揃にて五十年以來海戦に經驗なき弱武者を捉へて之を全滅したと云ふことは、成功は確かに成功であるが、左程に驚くに足らないのである。新聞記者などが兵力の算出すらも出来ない癖に、妄りに戦鬪のことを論評するなどは既に誤謬である、其長廣舌を以つて我陸軍兵力を、敵軍よりも優勢と爲し得ざるを語るものもあるが、奉天戦の時は既に我常備、後備兵力の最大限である、之を彼是云ふは即ち彼等が日清戦争後頻りに唱へた軍備縮少論の結果であらう、前には兵力の過大を唱へ、後には兵力の少なきを責むる、自家撞着の甚しいものである、長廣舌の得々たるは却つて笑ふべきの極である。更に彼等は海戦と陸戦との性質を知ることなくして、徒らに之を比較せんとするは既に誤謬に陥つて居るのである、陸戦は四五十里の廣正面を以つて、破壊力少なき小銃や野砲の力を集めて徐々に敵に迫り損害を與ふるもので、一時に目を覺ます程の効果の顯はるべきものでない、海戦は之に反し大口徑火砲と、水雷との偉大なる破壊力を以つて、千尋の深さを有する海の表面に其破壊を競ふのであつて、勝敗共に迅速に決し、且つ其結果の顯然として人目をひくものであるといふことを知らないのである、斯様な誤謬を敢てしながら、滔々として論議する様の如何にも笑嗤千萬ではないか、液分曉漢は度し難きものである。

第二 盲目の論評

内地に於ける新聞記者の或る者が得意に軍事行動の論評を揚げて、如何にも批評を加へ得たと云はんばかりに、粗末なる文字を羅列して居るものがある、處が彼等はまだ僅かに軍事上の用語を知つたばかりで、戰略や戦術の如きは窺ひ得ない淺薄の智識を以つて、誤つた議論をして居ることが度々であつた、其一例を挙げれば、奉天會戦の勝利の報道が傳はつたときに論じて曰く、奉天占領を以つて未だ安心することが出来ぬ、恐らく敵は鐵嶺に依つて第二の頑強なる抵抗をなすであらう、夫れ故に更に隊伍を整頓して速かに鐵嶺を取らなければならぬ。之は素人の考へで餘計な

御世話でめ、五十里以上の正面を以つて相戦つておつた一方が退却して、其兵力を集合し再び抵抗し得るに至るまで、之を整頓し、之を指揮する爲には又少くも戰場より四五十里も隔たなければ此目的を達することが出来ないこと云ふことは、戦術上の見地から考へ得ることである、何にとて二十萬以上の損害を受けた敵が奉天の北方十八里に在る鐵嶺附近で再び抵抗が出来やうか、假令抵抗をした處で一小部隊が其退却を收容する位のことである、之は議論ばかりでなく實際も此の通りであつて、奉天占領後五日目に第十師團と第二師團との小部隊によつて、鐵嶺は苦もなく占領されたのである、然るに又前記の議論を書いた翌日の新聞紙に次のようなことが論説として掲げられてあつた、鐵嶺は要害の地であつて早くから敵が防禦工事を施して居つた處であるから、よもや敵が此處を捨てムムザムザと退却することは有るまい、故に我軍は勝つて兜の緒を締めて、充分に準備して攻撃に掛からねばならぬ。之も素人の議論であつて一應最もに聞ゆるが、山崎の合戦や宇治の合戦の一大隊にも足らない兵力のせりあいの昔の戦の夢を見るような小さな考へから起つた尤もらしい説である、鐵嶺の地形を知つて居るものは、假令如何に工事がしてあつても大軍の防禦すべき位置でないことは明瞭である、それ故に彼の工事をすきな露軍でさへも、收容のための極く小さいな規模の工事しか造つて居らないのである、筆を執つて尤もらしく議論をせられても我々の目から見れば餘計な世話である、夫れよりは政治經濟のお極まりの議論でもする方がよい、まだ日本の新聞記者はお氣の毒ながら軍事上にかけては明き盲である。

第三 新聞記者の無識

此頃であつた或時汽車の中で二名の新聞記者に逢ふた、其内一人は某新聞社といふ腕印を着けて居つた、試みに彼等に問ふた如何なる事が卿等の仕事であるかと、答へて曰く軍人を唯ヤトラにほめるのが職務である、豪膽とか、勇敢とか、忠烈とか、武勇とか云ふような文字を羅列すればよいのであると。更に問ふた、何處に居つて軍人の之等の動

作を見らるゝやと。答へて曰く、彈の中を飛び歩く様な馬鹿は居りません、戦況は大抵聯隊副官口述、新聞記者速記たと云ふ風で、戦が済むでから四五日後の夜の仕事ですと。此言は恐らく實際であらう、之で其他の事をも推測する事が出来るのである。此の外に二三の會話の後に、他の新聞記者が野戦鐵道に附いて其の便乗の有りがたさを謝し且つ曰く、此の鐵道の貨車はまるで全國各鐵道會社の貨車の展覽會を見るようである、然し乍ら未だ九州鐵道會社の貨車を見た事がないが、九州鐵道は他の内地の鐵道の軌隔よりも廣いのであらうかと、予は其の餘りに新聞記者として無智識なのに驚いた、其處で徐々に其然らざることを告げて且つ曰く、今や奉天戰以後戰鬪は長く止んで、卿等の力を藉るの餘地がないが、滿洲に於ける農商工業並に交通機關等の事を調べては如何であらうかと勧めた時に、彼等は答へて曰く技術上の事や、理學上の様な事は知らないから致方がないと予は新聞記者として、餘りに仙人的なるのに驚いた、然し乍ら實際斯様な人が従軍記者であつたのである。

第二十九章 支作戦と新編制

第一 諸部隊の新編制

我大本營では戰役開始後諸種の特設部隊を編成した、繋駕機關砲隊、機關砲隊、徒歩砲兵聯大隊、騎砲兵中隊、野戰重砲兵聯隊、輕氣球隊、野戰電燈班、野戰鐵道提理部、臨時築城團、臨時測圖部、臨時建築班、手押式輕便鐵道班、撫順採炭班、滿洲軍倉庫、其他後備師旅團輜重のため臨時彈藥大隊、臨時糧食縱列、臨時野砲兵中隊、臨時衛生隊、臨時野戰病院等の如きものを幾箇をも編成した、是等の編成は戰時性德の際であつたにも拘らず、よく計畫され、又よく實行された、戰時に於て喜ぶべき事の一つは何人も皆一様に眞面目に仕事をすることである、如何なる難事でも眞面目に手を下せば成し遂げ得るものである、僅かな事柄であるが、之が戰争の勝敗に大關係を有して居るのである、戰時の様に平時も眞面目に働けば一身に於ても大なる過はないのである。

明治三十七年の十一月には早や既に全國の總ての師團を戰地に送つて、最早是以上に出す兵はないのであつた、然し乍ら敵は其本國の軍隊を間斷なく滿洲に送つて、時間さへ許せば全露國の軍隊を滿洲に持ち來すやも知れん、然るに戰争は何時濟むことか未だ見極めが付かない。そこでどうでも兵力を増す方法を考へねばならんだ、大本營に於ては疾に此點に注意して、先づ三十七年の五月に勅令を發して後備役の年數を十年となし、後備隊を編成することを考へた。其次ぎには三十七年の十二月から全國の各歩兵聯隊補充大隊に二箇中隊を増設して、例年よりは二倍以上の新兵を募つて教育し、之で新に第十三、第十四、第十五、第十六の四箇師團を編成するの計畫を立てた。此外に後備の師團を二箇編成して、其第一師團は朝鮮及び鳳凰城附近の守備に當つて居つた後備隊を以て鳳凰城で編成し鴨綠江軍に加へた、他の一師團即ち後備第二師團は大阪で編成して將來北韓に向ふものと定められた。

第二 北韓軍の行動

後備第二師團は其兵站監部と共に編成完結後、長く内地に止まつて居つた、之は敵の第二、第三太平洋艦隊の來航に依つて餘儀なくされたのである、五月下旬の日本海海戰に依つて海上權の掌握が確實となつたから、其處で輸送が始まつた、其先發部隊は元山に上陸し、此部隊が城津占領の後残りの大部分が此の地に上陸した様である。之までは大いに秘密にしてあつて我々すらも知る事が出来なかつた、六月二十二日に於て鏡城を占領したと云ふ報道が發表された。其後同月二十六日輪城を占領し、七月二日砲兵を有する敵の騎兵約四百と富寧街道上狷項(輪城の北約二里半)附近に於て衝突し、之を撃退した。七月二十五日丸井支隊は富居を、同日池田支隊は白沙峯を占領して、此處に一旦停止し、其主力を富居、富寧附近に一部隊を以て伏虎德峯、仲坪、白沙峯、葛麻德、茂山嶺の線を占領して、將來の前

進準備をする筈であつた、(後備第二師團長は中将三好成行氏、參謀長歩兵中佐大庭二郎氏)

第三 樺太に於ける作戦

第十三、第十四師團の動員は疾に三月頃に行はれて、第十三師團は弘前に、第十四師團は熊本に於て編成された。之と同時に青森に集積場が設けられて、青森貨物廠及青森野戦兵器本廠が編成された。之は樺太に於る作戦の基礎を作るのであつた。

樺太に於る作戦經過の概要は次の通りである。

七月四日

北遣艦隊は此日午前九時陸軍輸送船隊を護衛し樺太に向ひ青森を出發す。

七月七日

此日午前六時既に豫定集合地點に北遣部隊及輸送船隊は集合したるを以て、先づ漂泊し掃海事業の進捗に伴ひ、一隊をして輸送船隊を順次掃海面に嚮導せしめ、他の一隊は掃海入口に達し、汽艇短舟を卸して陸軍の揚陸に助力せしむ、又哨兵を豫定の地點に派遣して警戒をなさしめたり。

陸軍は正午メンヤ附近に上陸を開始し、尋て其歩騎兵はサウイナバアチ村北方高地を占領し、同夜其將校斥候はコルサコフ港南端に進入せり。敵は此日午後二時頃よりコルサコフ港全市を燒棄し始めたり。

七月八日

陸軍は此日早朝大なる敵の抵抗を受くることなく哥爾薩港を占領せり。敵はソロイヨフカ方面に退却し、同地附近の陣地に據りて再び抵抗を試みたるも、午前十一時我兵之を撃壊し、同陣地を占領せり、敵は終に其根據地たるウラジミロフカ附近に向ひ退却せり。

海軍は此日午前三時陸軍の哥爾薩港占領に策應するため、軍艦三隻及驅逐艦二隻を對島崎(元エンツマ岬)附近に派遣したるも、砲火を開くに至らずして哥爾薩港は我陸軍の手中に陥れり。同日午後二時過ぎ驅逐隊は深く千歲灣(元ロソセイ灣)内に入り、ソロウイヨフカ村沖合に至りし時、敵の砲兵陣地より野砲を以て猛烈なる砲撃を開始せしに依り、直に應戰遂に之を沈黙せしめたり。

七月九日

此日我將校斥候は敵を追跡してリストウエニチナヤに進入せり、又歩兵一部隊ノトロ岬(近藤岬)占領の目的を以て軍艦に便乗し哥爾薩港を出發せり。

七月十日

行々敵を驅逐しつゝ北進し、本タウラジミロフカ及ブリジネエ附近に據れる敵を撃壊し兩地を占領せり。

陸兵を塔載せる巡洋艦二隻及び水雷艇四隻は此日ノトロ岬附近に着後、數發の威嚇砲撃を行ひ、尋て陸戰隊を上陸し午前十時同岬を占領せり。

七月十一日

ダアリネエ附近の敵を壓迫し、午後二時より同村西方林縁の本陣地に據れる敵の主力に向ひ攻撃を開始せり、敵の抵抗は極めて頑強なり。

七月十二日

此日未明より更に猛烈なる攻撃を開始し、尋て敵をマウカ方面に潰亂せしめ、こゝに樺太南部の占領を確實にせり。

第四 慢性的恐露病

斯様にして樺太の南部は今や我陸海軍のために確實に占領されたのである。回顧すれば明治初年此島は千島諸島と

交換の名義を以て露國から奪はれたのである、其の當時は露國を世界の一大強國として非常にこわがつて居つたので、近藤重藏や間宮林藏等が苦心して探検した甲斐もなくムザ／＼と露國の洞喝に脅かされて渡してしまつたのである、此頃の我國上下が露國を恐るゝ有様といふものは非常なるものであつた。其後十二年もたつて今の露國皇帝即ち當時の皇太子が日本を巡廻したときに、近江の天津で津田三藏といふものに傷つけられた、その當時の政府の騒ぎようといふものは一通りでなかつた、第一に予が父の勤めて居つた福岡の聯隊にまで警戒せよとの秘密電報が陸軍省から來つた。然し此方は難なく済んだが津田三藏の處刑の一條に於て非常なる失態を演じた。時の總理大臣伊藤侯が死刑に處すると云ふことを小島といふ、時の大審院長に命じた、小島は日本の刑法では謀殺未遂を死刑に處することが出來ないと拒んだ、總理大臣の命令が反古になつた、そこで勅令を以て死刑を命じた。頑固の小島親爺は勅令でも刑法にないことはやらんと拒んだ、そこで勅令を濫用した大臣と、勅令を奉じない大審院長とが出來て、非常なる物議を醸したことがあつた。其次が遼東還附で一も二もなく脅されてしまつた、斯様な恐露病と云ふ慢性的病氣に長く罹つて居つた元老や大臣等が未だに生き残つて居るのだから、此樺太占領といふことも中々議論があつたぞうだ。參謀本部では樺太作戦の謀略を立て、御前會議に出すと、元老とか大臣とか云ふもの、恐露病から否決を喰つて仕舞つた、そこで參謀本部から總司令官や軍司令官の之に關する意見を取つて、又しても御前會議へ出して、將に否決せられんとする處を漸くのこと可決になつて、第十三師團を出發させた云ふ様な有様であつたぞうである。思へば三十四年前の日本と、三十四年後の日本とは非常なる相異のあつたものである、會稽の恥も臥薪嘗膽の後に雪がれたかと思へば、國民の辛抱も殊更に深く感ぜらるゝものである、七月七日といふ日は我國民の一大紀念日としなければならぬ。

樺太占領と同時にセントウラジミール灣を千歲灣、アニツ灣を東伏見灣、アニツ岬を重藏岬、ノトロ岬を近藤岬、海峽を間宮海峽等と改名した、之も吾人の心氣を愉快にするものゝ一であつた。

第五 北部樺太の占領

樺太占領軍は南部を占領した後、更に北部樺太を占領した、七月二十四日以後の經過は次の通りである。

七月二十四日 樺太軍は此日午前九時頃より大なる敵の妨害を受くることなくアルコワ附近に上陸を開始せり、即ち二十四日午後一時樺太軍の上陸護隊は第一アルコワ附近に在りし敵を驅逐し、ポロウインカ及第二アルコワの線を占領せり。當方面の敵は新にニコライフスクより派遣せられたる歩兵一大隊、義勇兵數百及アレキサンドロフ方面より派遣せられたる野砲約八門より成り、東方ルイコフ方向の山地に向ひ潰走せり。

是より先驅逐艦の掩護に依り歩兵一部隊を海上よりアレキサンドロフ淺橋に派遣し、之を燒棄せんとする敵に對して確實に之を占領し、屢々襲來せる敵を擊退して陸上よりの應援を待ち、同淺橋を保持するを得たり。ムガチ占領部隊は水雷艇と協力して微弱なる敵を驅逐し、石炭約四萬噸及輕便鐵道材料を鹵獲せり。午後三時一部隊を以つて第三アルコワを占領し、一支隊をアレキサンドロフに向ひ前進せしむ。此支隊は午後七時十五分敵の抵抗を擊破して全く同市を占領せり、敵は同市東方の角面堡及東北高地に據りて抵抗を持續し、支隊は猛烈に之を攻撃し遂に日没に達せり。

七月二十五日 此日未明よりアレキサンドロフ東方の敵に對し更に攻撃を開始し、之をノオミハイロウスコエに壓迫せり。

尙ほ此日全くゾーエを占領せり、同地及アレキサンドロフは全く火災を免れたり。
七月二十六日 早朝より猛烈に敵を急追しつゝ前進し、其前衛は午後三時デルビンスコエを占領し、騎兵隊はルイコフに進出しノウミハイロウスコエ附近に敵を壓迫し、東進せる支隊は同日午後三時ウエデルニコフスキー附近に陣地を占領せる歩兵連合の敵を擊破し、直に追撃に移れり。

此日午後樺太軍左縦隊の獨立騎兵は敵の退却に尾してルイコフに進ませしも、形勢極めて不穩なるを以て同夜遂に同地を撤退せり。

七月二十七日 軍は敵の主力未だルイコフ西方の高地を撤退せざるの時に乘じ、左縦隊を以て速かにルイコフを占領し、一舉之を殲滅すべきを期し、此日午前三時運動を開始せり。其前衛は獨立騎兵と共に急進し、ルイコフ北端に據れる敵を攻撃して遂に市内に突入し、茲に混亂せる市街戦を惹起し、午前八時三十分全くルイコフを占領せり。

右縦隊(ウエデルニコフスキー附近の敵を撃破し追撃に移りたる支隊)に對せし敵の主力は、昨夜來マロツイモフ(ルイコフ西方約二里)よりパレオ(ルイコフ南方約四里)附近に通ずるの間道を南方に潰走せり。

正午一支隊を南方に派遣し敵を追撃せしむ、支隊はルイコフ南方八吉米の地點に於て敵の歩兵約八百と衝突し其二百餘を殲し五百名を捕獲せり。

昨日來我右縦隊に對せし敵の兵力は歩兵約三千、砲四門及機關砲四門を下らず。又左縦隊に對せしものは歩兵約二千砲四門なりしが如し。

七月二十八日 追撃を續行し、此日パレオ附近の堅固なる陣地に據れる敵を攻撃し、同日遂にパレオを占領せり。敵は潰亂して南方オノル方向に敗走せり其兵力千餘。

獨立騎兵は此日午後パレオ南方の敵を攻撃し、之を其の以南に潰走せしめ、野砲二門、彈藥車五輛、其他多數の小銃及彈藥を鹵獲せり。

七月二十九日 獨立騎兵は其支援隊と共に敵をタウラン(ルイコフ南方約十里)南方に急追す、此日敵はオノル(クウラン南方約十里)附近に停止せり。

七月三十日 午前五時敵の軍使クラウンに來り軍務知事リャブノフ中將の書簡を齎す、其要旨左の如し。

繙帯材料及醫藥の缺乏並に負傷者に對する治療の不可能は人道上的感覺に依り、予をして閣下に向ひ戰鬪の中止を申込むの己むを得ざるに至れり。

軍司令官は之に對し左の要旨の回答を與へたり。

總の軍需品及官に屬する動産、不動産を現在の儘引渡すこと、行政及軍事に關する總の圖書類を引渡すこと、以上の回答を七月三十一日午前十時迄に第一ハムダサ(オノル北方約二里)に提出すべきこと、若し此時刻に回答を得ざれば直に攻撃を實施すること。

七月三十一日 敵の全權大佐トリビチ第一ハムダサに來り、我全權小泉參謀長と會見の結果、我提出條件に一も異議なく、軍務知事リャブノフ以下將校約七十、下士卒約三千二百悉く投降す、依て之を捕虜とせり。

八月一日 午後五時リャブノフ中將以下幕僚五名ルイコフに護送せられ寺院に於て軍司令官と會見す、リャブノフ中將の言に據ればナイオロ附近に將校二、兵百名を派遣しあり、此支隊にはオノルニ來り日本軍に投降すべき旨を電報し置きたりと。

八月八日 オイオロ方面に在りし敵の將校以下百十八名投降す。

八月十日 我一部隊は北遣艦隊と協力しトンナイチャ湖(哥爾薩港東方約七里)東南岸に占據せる殘敵を掃蕩し約百二十名を捕虜とせり、陸海軍協同してグナイチャ湖(樺太の東岸にあり九春吉丹を東に去る約二十哩)東南岸に對し、本日午前六時三十分より裝砲艇隊は湖上より、陸軍兵は東岸湖畔より協同して攻撃を開始し、砲戰約二時間の後敵は白旗を揚げて降服せり、其人員百二十三我陸軍は直に陣地を占領せり。

第六 鮮血の騒弄

斯様にして樺太の全部は我有に歸した、然し乍ら此喜びの聲は長く續いたであらうか、假令軍事と政略とは別物で

あるとした處で、一度同胞の鮮血を塗つて占領した所を一片の口舌の下に抛つといふことは忍びないのである、假令比較的遠方に在つて戦争の悲惨を味はない人たちが其自らに於て痛痒を感ずることが少いとした處で、直接當面の敵としてのきを削つた軍人から云へば誠に情に於て堪へ得ないのである、若しも戦争の後に其土地を奪ふか、若しも其土地に於て我利權を伸張するの必要がない處であつたならば、其地方に於る作戦は餘程考へものである、ましてや樺太の如き昔我有に屬した土地を武力に依つて全く占領した後には、一部分と雖も之を捨つるが如きに於ては全く無意味なる作戦行動であつて、始めから如斯容易に抛ち得るものであつたなら無用なる鮮血を流さない方がよいのである、二十七八年役後の遼東還附、而して又三十七八年役後の樺太割譲は實に國家の政治に當るものが、軍人の鮮血を弄ぶ處のものであつて、軍人そのものゝ立脚點から考へて見れば斯様に弄ばれた鮮血は遂に或は内に向つて逆らないとも限らないのである、かよわき婦人でさへ、其愛情を弄ばれた恨みに蛇になつてまでも之を弄んだ男を呪ふのである、政治上に發言の自由を許されない爲め沈黙を守て居るのをよいことにして、斯様な鮮血の翻弄を重ねる時は不測の禍を内に招くことを忘れてはならん、我々は北部樺太に於て戦死したる軍人の靈に向つて熱き涙を禁じ得ないのである。

第七 諸司令部の編成替

奉天附近の會戦後一方に於て我兵員の體力休養並に兵力の補充を行ひつゝ、他方に於ては編成の改正並に完備及び、武器の一部の變更を行ふた、此事柄の最も始めに行れたものは滿洲軍總司令部の編成改正であつた。是迄は參謀部、副官部、管理部のみであつたのを、之に滿洲軍總兵站監部なる屬部を附屬せしめた、總兵站監部は幕僚の外に、總兵站經理部、總兵站軍醫部、總兵站交通部及び關東洲民政署なるものが出來て、總兵站監は兒玉大將、參謀長は落合少將、總兵站經理部長は片山主計監、總兵站軍醫部長は小池軍醫總監、總兵站交通部長は落合少將(兼動)、關東洲

民政長官は石塚英藏氏であつた。此編成完結後各軍の兵站監部が兵站總監部の隷下を離れて、此總兵站監部の指揮を受くることになつた、茲に於て滿洲軍の全員は全く總司令官の指揮に屬することになつて、統御及指揮の完全を期し得る様になつた。之迄の所では、作戦の指揮は總司令官が擔任し、其後方に連る兵站のことに就ては遠く内地から兵站總監が指揮するのであつて、手と足とは別々の中樞によつて動かされるといふ風であつた。作戦と兵站業務と密接の關係あるものが、別々に指揮されることは大なる弊害を來すことになるのみならず、全軍の活動に障害を及ぼすことが多いのである。則ち是までは各軍の兵站が互に輸送力の競争をする様になつて、爲に支那馬車の賃金はせり上げられて利益を占めるものは支那人許りである、加之遂には支那馬車の奪ひ合が始まつて、兵站と兵站との軌轢が起るやうになつて、不都合なる結果を來したのも總兵站監部のなかつた爲である、此編成は滿洲軍總司令部の生れる時に於て必要なのであつた。

總兵站監部の編成と同時に從來の遼東守備軍司令部なるものゝ編成を更めて、遼東兵站監部となした、其編成は軍の兵站監部の編成と組織に於て同様であつて、唯各部の人員が是よりは稍々大きいのみである。兵站監は井口少將で、參謀長が西川中佐であつた、其處で遼東守備軍司令部であつた西大將は五月九日教育總監に補せられて、同月二十一日東京に凱旋せられた。其他過剰の幕僚、部員等は各所に命課を變更せられ。從來大連に在つた遼東守備軍司令部の後を繼いだが幾もなくして此兵站監部は遼陽に移轉した、此頃は其管轄區域は太子河以南の土地であつたが、七月の始め頃新民府、奉天、撫順、興京、及び懷仁の線にまで擴張された。

第三に行はれたものは、從來軍隊區分に依り第六師團が第二軍より第四軍に、第五師團が第四軍より第二軍に配屬されてあつたのを、戰鬪序列に依つて彼は全く交換することになつた、之が爲三月下旬兵站では野戰兵器廠と豫備馬廠とが先づ交換されて、五月下旬兵站彈藥縱列、兵站糧食縱列及輜重監視隊が交換され、九月中旬衛生豫備員、衛生豫備廠、患者輸送部が交換されて、第六師團の兵站輜重は是に於て全部第五師團の兵站輜重と入れ代つたのである。

第八 諸部隊の編成替

第四に行はれたものは戦利野砲大隊と機關砲隊との編成であつた、之より先第一、第二軍では既に戦利野砲中隊を臨時に編成して、各處の戦闘に參與せしめたのであつた、第八師團で編成したものは如きは、戦利野砲の後車を支那馬車の後に繋いで、之を運搬して居つた、二十世紀の利器を太古代の道具に配合した其の外観の滑稽さは是を見るものをして噴飯せしめた、斯様な有様であつたが奉天附近の會戦に獲た數十門の戦利野砲を應用して、此處に各軍に一大隊宛を配屬した、其編成は現今の野砲大隊と略々同様であつて、戦利の露國馬は専ら其輓馬となつた、従つて支那馬車の如きは勿論なくなつたのである、機關砲隊の方は始め第一、第十一師團で各一隊を有して居つたが、三十七年の暮に約百門の機關砲を第一、第二、第四軍に配當されて、各軍は勝手に臨時の機關砲隊を編成して居つたが、這度は各師團に於て一個の機關砲隊を編成することになつた、一機關砲隊は二十四門の三脚架式機關砲及之に要する人馬材料からなつて居る。

第五に行はれたものは後備混成旅團の編成であつた、徒來は二箇大隊の後備聯隊を三個合して後備歩兵の一旅團を作つて、之を各軍に配當してあつた。即ち第一軍に近衛、第五及び第十三。第二軍に第四、第八、第一及第十四。第四軍に第三、第十及第十一旅團を配屬してあつたが、其内で近衛、第三、第四、第五、第八、第十、第十一、の七歩兵旅團を混成旅團に更めた(近衛後備混成旅團のみは明治三十七年の夏以來現在せり)之がために後備騎兵、砲兵、工兵、彈藥大隊、糧食縱列、衛生隊、野戰病院等を戰地若しくは内地より配屬して旅團長の隸下に入らしめたのである、此編成は頗る複雑を極めたが、然し乍ら軍に一箇の歩兵旅團として存在するよりは有利である。何となれば戦闘員のみでは實際其行動に頗る困難を感じるが故に、他よりどうにかして其輜重を配屬せねばならん、我兵站部の如きは之迄第四軍に屬して居つた三箇の後備旅團の爲著しく兵站の諸部隊を割き取られて、非常なる苦痛を感じたからである。

第六に行はれたものは徒歩砲兵の改造である、元來徒歩砲兵は第一、乃至第四聯隊及第一、第二の獨立大隊を有して、其第一乃至第三聯隊及獨立第一大隊は皆て攻圍軍に従ひ、第四聯隊及獨立第二大隊は總司令部の直屬となつて遼陽及沙河の戦闘に參與したが、旅順開城後徒歩砲兵第三聯隊は旅順及大連灣要塞砲兵大隊に變化し、其他は北進して第四聯隊及獨立第二大隊と合し、更に野戰重砲兵隊(第一軍に従つて鴨綠江の戦闘に參與したるもの及び攻圍軍に屬せるものにて克式十二珊榴彈砲を有せるもの)を加へて、獨立重砲兵旅團なるものを形造つたが、奉天附近の會戦後其所持の九珊及十五珊白砲を新式の火砲に改め、同時に其編成及名稱を變更した、即ち徒歩砲兵第一聯隊は克式十五珊榴彈砲を授けられて野戰重砲兵第二聯隊となつた、之に對して前記の野戰重砲兵聯隊を野戰重砲兵第一聯隊と改稱した、其後徒歩砲兵第四聯隊は克式砲身後座式十二珊榴彈砲を授けられ、野戰重砲兵第三聯隊と改稱し、徒歩砲兵獨立第二大隊は克式砲身後座式十五珊榴彈砲を授けられ、野戰重砲兵第四聯隊と改稱した、野戰重砲兵聯隊の編成は三箇中隊より成る二箇大隊及彈藥一大隊より成つて居る。

第九 偵察戦の情況

斯様にして一方に於て編成及兵器の交換をしながら、他方に於て敵狀の搜索に従事し、敵の狀況を詳かにすること努力した敵は奉天會戦の損害を六月頃迄に逐次補充して漸く定員に近からしめた、之と同時に第十九及第五十九の二ヶ師團を動員して輸送をなすつゝあつた敵の第一軍は東に、その第二軍は西に、その第三軍は第二軍の後方に位置して、其主力は奉化附近に、其騎幕及前哨は遼陽棚窩、四平街、掏鹿、英額城、海龍の線に在つて、而も之より以上の詳細なることは充分に知られなかつたのである、そこで、六月十七日に第三軍、同十九日に第二、第四軍で地形偵察を兼ね一部隊を前進せしめて、茲に三月以降の長き靜謐を破つた、此偵察戦の情況は次の通りである。

第三軍方面

六月十七日 我中央部隊は午前一時四十分田家窩棚(康平東北六里半)に於て敵の騎幕を突破し、之を急追して午前四時より同八時三十分に至る間に於て遼陽窩棚南端及其東方に亘る敵の陣地を攻撃し、同九時全く遼陽窩棚を占領せり。又右翼部隊は途中敵騎を驅逐しつゝ午前八時羅船口(遼陽窩棚東方約三里半)及馬家堡(遼陽窩棚東方二里)を占領し、更に遼陽窩棚北方に退却する敵騎を砲撃し之に多大の損害を與へ、遂に全く潰亂に陥らしめたり。又左翼部隊は遼陽窩棚より西北に敗走する敵騎約千に對し猛烈なる追撃射撃をなし、之に多大の損害を與へたり。

捕虜の言に依れば遼陽窩棚に在りたるものはミスチエンコの指揮する騎兵五千、砲二十門にして、其主力は北方に、一部は東北方及西北方に潰走せり。此戦闘に於て敵は非常の狼狽を極め、混亂して敗退したるの形跡歴然たり、其遺棄したる糧秣及被服に依り察するに、敵の給養は頗る困難の状態に在るものゝ如し、此戰鬥に於て雜穀數百石を鹵獲せり。

敵は退却に當り遼陽窩棚南端の一戸に放火せり、其目的は彼の死屍を燒棄するに在りし事形跡に依り之を推斷することを得たり。

第四軍方面

十九日 午前一時半頃敵に遭遇することなく蓮花街を占領したる我部隊は、爾後吉林街道附近の敵を逐次擊退しつゝ楊木林子(威遠堡門東北約八里)を占領せり。又他の一部は同日午後三時二十分楊子嶺(威遠堡門北方四里半)附近の敵を驅逐して、同九時四十分石灰窩子(楊子嶺北方約三里)西北高地を占領し、尋で同地方及東北高地に據れる敵を擊退し、之を北方に潰走せり。

第二軍方面

六月十九日 鐵道線路附近を前進せし我部隊は沙河子停車場北方約一里の高地に在りし敵の歩騎兵を擊退し、昨午前六時半雙廟子(昌圖東北約七里)南方高地を占領せり。該停車場は全く破壊せられあり、此戰鬥に於ける我損害は負傷卒四に止り、敵の損害は屍體十(内將校一)斃馬三を遺棄せしより察せば比較的多大なりしならん、又機關砲一門、乘馬一頭を鹵獲し、卒一名を捕獲せり。

奉化街道附近を前進せし我部隊は昨十九日午前三時半北房盛勾(興隆泉東南約一里)附近の敵を驅逐し、猛烈なる歩砲火を以て敵を壓迫しつゝ同八時四十分柳條勾(昌圖北方約七里半)にして北房盛勾の北約二里半)を占領せり。

此偵察戦は大なる損害なくして多少の敵狀及地形に關する報告を齎らした、此に由て敵は漸く奉天戰の損害を補充し得たといふこと、新來の歐羅巴軍團が加はつて居ることが出来るが出來た、然し乍ら敵の防禦線、其主力の位置並に戰術單位内に於る兵力の詳細に至つては各軍とも各其判斷を異にした、或るものは敵の兵力が未だ五十萬に達しないと云へば、或る者は既に七十萬以上の存在は慥であるといふた、而して再び敵を奉化附近で攻撃して、之を吉林長春以北に擊退すべきや、或は更に新銳の兵力を得て敵を撃つべきやは大なる問題であつた。然し乍ら一般に前進の準備並に計畫を立て、高等統帥部の指揮に依つて何時にても前進し得る様準備して居つた。

第一回偵察戦の後、敵は復讐的に我に向つて前進した。六月二十一日には歩兵約三大隊、騎兵約四中隊、砲兵約一中隊餘の敵は吉林街道の東西兩地區より我第四軍に向つて、茶棚菴及李家屯に亘る高地及蓮花街附近に現れたが、午後七時半頃我兵のため擊退せられた。又七月一日敵は牝牛河(康平の東北約五里)及獅々谷(牝牛河西北約三里)の兩地に來襲したが、共に我兵のために擊退せられた、此部隊は専らミスチエンコの部下であつた。

第十 八月中旬に於る敵狀判斷

八月十二日早朝より第四軍に於て第十、第六師團及後備混成第三旅團より若干の偵察隊を前方に派遣した、第十師團のものは蓮花街、第六師團のものは双龍子停車場、後備混成第三旅團のものはギョウトン北方高地附近まで進出した後、各々其本陣地に復歸した。是等偵察隊の報告並に間諜の密告等に依つて七月下旬より八月中旬頃迄の敵狀を判断したものは次の通りである。

敵は鐵道線路以西の地區に第二軍(第十軍團、第六西伯利軍團、第十六軍團、第八軍團、歐露狙撃第一軍團)を鐵道以東の地區に。第一軍(第一軍團、第二西伯利軍團、第三西伯利軍團、第一西伯利軍團、第四西伯利軍團)を、奉化以北第二軍の後方及其右翼(蘇太川右岸の地區)後方に。第三軍(第十七軍團、第五西伯利軍團、第四軍團、歐露狙撃第二軍團)を配置し、別に右翼前遼陽窩棚にミチシエンコの指揮する騎兵團(ウラルザバエカル混成師團、高架索混成師團、高架哥旅團)を置き、其後方鄭家屯に獨立騎兵第二旅團を備へ、又總軍の左翼海龍城に一兵團(第五十三師團、第七十一師團、西伯利獨立旅團、プラスツン旅團、マドリノフ支隊、ザバエカル師團)を置き、後方長春及吉林にも一小部隊を残せるものゝ如く、而して其騎幕は遼陽窩棚、鷲鷲樹、双廟子、孤榆樹、大白柳河、南山城子、灣口子、溝、小城子の線に、其前進陣地は八面城、五家窩棚、四平街、廣子溝、葉赫站、掏鹿の線に、其本陣地は奉化南方條子河の右岸に接し、右翼和尚屯より左翼火山峯及其附近に至る。其第二軍司令部は奉化に、第一軍司令部は赫爾蘇に、第三軍司令部は郭家店停車場附近に位置するものゝ如し。

第十九軍團(歩兵第十七、第三十八師團、砲兵第八、第七十四旅團、工兵第十九大隊)の先頭は六月二十八九日頃、第九軍團の先頭たる第五師團は七月二十五六日頃、極東に向ひ輸送を開始せられたりと云ふ、又第十三第二十一軍團も動員せらるゝ形跡あり第九軍團に引續き輸送せらるるものは多分此兩師團ならん。

(歐露狙撃軍團は、從來滿洲に派遣し在りし狙撃歩兵旅團を師團に擴張し、其二師團を以て一軍團を編成せ

しものならん)

第十一 新師團の戰地到着

斯様なる敵の狀況並に將來に於る敵の企圖に對して、今や我軍は晏然として居ることを得なかつた、大本營では七月の初め頃第十五、第十六師團の動員を令し、且つ既に動員せられてあつた第十四師團を七月の中旬から戰地に輸送して之を第三軍に編入し、之に續いて第十六師團を輸送して之を第四軍に編入し、次に第十五師團を輸送して之を第二軍に編入した。八月の下旬頃迄には以上の三師團が凡べて戰地に上陸して、第十四師團は石佛寺附近に、第十六師團は鐵峯附近に、第十五師團の一部は鐵峯附近に、其他は遼陽附近に集中した。然し乍ら此最後の師團の野戰鐵道に依つて輸送せられた時は既に休戰條約の成立せんとしつゝあつた時である。

此の頃の我軍の位置は次の通りである。

後備第一師團司令部は五鳳城に、第十一師團司令部は英嶺城に、第十二師團司令部は(地名未詳)に、第二師團司令部は沙家堡に、第十師團司令部は趙家臺に、第六師團司令部は大牛圈に、第五師團司令部は大平溝(昌圖南方約二里)に、第三師團司令部は長山堡に、第四師團司令部は八岔溝に、第九師團司令部は兩家子(康平の東約五里)に、第七師團司令部は康平に位置して第一線をなし。近衛師團司令部(此師團は七月軍隊區分に依つて第二軍に屬せらる)は菓子園に、第八師團司令部は小明碑に、第一師團司令部は孤樹子(法庫門北方約三里)に位置して第二線をなし。鴨綠江軍司令部は永陵に、第一軍司令部は金家屯に、第四軍司令部は開原に、第二軍司令部は古城城に、第三軍司令部は法庫門に、總司令部は奉天に在つた。而して兵站監部は鴨綠江軍は永陵、第一、第四軍は鐵嶺、第二軍は慶運堡、第三軍は法庫門に在つた。

十二 北韓軍其後の戦況

我滿洲軍は斯様な形勢であつて、今は新銳の兵力を得つゝ前進の準備に怠りなく一般に今一度露軍を攻撃するものと信ぜられて居つた。而して樺太は八月上旬を以て既に全く我有に歸して此方面の作戦は終結を告げたのであつたが只渺々しく進行しないのは北韓軍の状況であつた、是蓋し韓國の不良なる道路に原因するのであらう。此軍は後備歩兵第十六旅團の増加を得て、富居、富寧の線に於て前進を準備し、八月三十一日から運動を起し、九月一日昌斗嶺及峯嶺に亘る敵陣地を攻撃した、其戦況は次の通りである。

九月一日早朝昌斗嶺(會寧東南四里)より五峯嶺(會寧西南四里)に亘る敵陣地を攻撃す、敵は歩兵約四大隊、砲六門、騎兵數百にして巧に地形を利用し、頑強なる抵抗を爲せり。此附近高地は地形極めて峻峻にして、我攻撃困難を極めしも、日南洞(昌斗嶺南方一里)の東方高地より昌斗嶺に向ひ我砲兵の効力を現はせしに乘じ、敵の左翼高地より猛烈なる突撃を行ひ、午前九時十分全く昌斗嶺附近の高地を占領せり。敵は狼狽を極む北方に退却し軍は之を追撃せり。

昌斗嶺西方三吉米の高地及五峯嶺に在りし敵は極めて頑強なる抵抗をなせしも、午前十一時頃に之を撃破し、直に追撃に移り潰走に陥らしめたり。

又他の一部隊は白岨(五峯嶺西方三里)に在りし數百の敵を撃退して之を追撃し、輪洞方面に於ては行々敵を驅逐し前進せり。

第十三 兵力分割の害

斯様に北韓軍は行動したけれどもトゥク豆澗江を渡るまでに至らなかつた、併し乍ら此軍の目的が敵兵の一部

を此方面に牽制するの目的であつたから、其目的は既に充分達し得られたのである、然し乍ら北韓に軍を動かすこと必要であるや否やの根本的問題に至つては俄に同軍の差遣を賛同するとを得ない。朝鮮の地形が大兵を動かすに足らざることが明瞭であるから、屢々北韓に剽掠を逞ふしたとはいへ、露軍の斯様な行動に對して無頓着であればよい、我北韓軍の差遣は自ら敵を牽制するといふよりも、却て敵に牽制せられた嫌がある。浦鹽は敵の軍港であり、且つボセツトにも敵の要塞があるから、我北韓軍が差遣せられなくとも、敵は浦鹽、ニコリスコエ、ボセツトとの三角形地内に多少の兵力を有するのである、而して假令幾分の牽制が出来たにしても我國の陸軍力から見れば一箇師團半の兵力は貴重なるものであつて、徒に此兵力を分離するのは得策でない、樺太軍の如きは外交政策上必要であるから其分割は己むを得ぬとしても、北韓軍の如きは軍事上及政略上大なる必要を發見しない、即ち無意味の作戦ではあるまいか。

我第四軍兵站監部が鐵峇に到着してから間もなく、開原停車場及小灣屯に兵站司令部を置いた、開原の方の兵站司令官は富田少佐であつて、小灣屯の方は仙波少佐であつた。其後間もなく遼東兵站部の管區の擴張に依つて煙臺、沙河、蘇家屯及奉天の各兵站司令部を撤去した。八月には留守第一師團で編成された當軍の兵站電信輜重が到着し、九月上旬には第十六師團の兵站輜重(野戰兵器廠、衛生豫備員、衛生豫備廠、患者輸送部)が到着し、其稍々以前に従來當兵站部に屬して居つた後備歩兵第四十六聯隊が第三軍に轉屬せられて、遼東兵站部に屬してゐた後備歩兵第三十七聯隊が之に代つた、七月下旬我兵站參謀長白水申佐が歩兵第三十五聯隊長に轉じ、其後任として鴨綠江軍參謀依田中佐が着任した、其頃から軍が前進するかも知れないと云ふことで、新民廳で支那馬車を千臺も購買するとか、俄に支那馬車を雇ふとか、兵站司令部を豫め前進せしめるとか云ふ様な騒で、久しく倦怠した士氣を大いに刺撃したが、遂に講和條約の成立と共に是等の準備計畫は畫餅に歸して仕舞つた残念な事である。

第四十章 戦争と日本國內

第一 完全なる舉國一致

今回の戦争で特に著しい事實は國民が完全なる舉國一致をなしたること、之に伴ひ戦病死者遺族の扶助に懇切なる注意を拂ふたこと、戦争のために實業の衰微しなかつたこと、交通及金融機關の穩健たりしこと、内治及教育の好果を呈したること、外國の信用を博したため外債の募集が容易であつたこと、今日まで東洋の孤兒視した外國人が俄かに日本に就いて研究をするやうになつたこと等である。併しながら外交の不振は依然として戦争前に異ならなかつたばかりでなく、戦争前よりも悪結果を來たして千載の憾みを遺した。

日清戦争のときでも舉國一致の事實は充分に認められた、然しながら今回の戦争に於ては正により以上である、國民が戦争を見ること直接自己の上についた出来事の様であつて、其汗水を流して得た金銭や物品を惜氣もなく恤兵とし、或は軍人遺族救護の目的を以て立てられた各種の會に投じ、或は軍隊の出征及歸還を歓迎歡送し、重き戦時税に拘らず能く其の負擔に堪へた、剩へ勤儉の氣風を養ふた。而うして戦争は幾年永續しやうとも之に堪ふるといふ決心を以て自己の利益と幸福を犠牲にしてまでも、一途に國家の目的を達せしめやうと期して居つた。如斯舉國一致は古今東西未だ曾て見ざる處であつて、實に我國の精華として世界に誇るに足るのである、斯様なる國民の後援を有して居る軍人は遺憾なく其の武力を發揮せしむることを得るのみならず、國民の熱誠に向つて充分の感謝を表して居るのである、特に直接受取つた處の諸種の恤兵品や、慰問袋や、毛布や、扇子や其他諸種の日用品に對して爾か感ずるのである。

第二 數百萬のナイチンゲル

新聞紙其他に依つて知る處の軍人遺族救護事業の最大團體は愛國婦人會及國民援護會であつた、其他軍人遺族慰問會とか、或は軍人遺族授産會とか云ふ様なものが各地方毎に成立して、恰も軍人遺族の救護といふことが國民一般の義務であるかの如く感じて、盛に各地方に此事業が行はれた、其方法が管に物品や金銭を贈つて其心を慰め、其生計を助けた許りでなく、多くは軍隊に供給する被服の裁縫や、病衣類の洗濯や其他紡績染織等の工業的職業を授けて自活の方法を立てしむるやうにした、愛國婦人會の如きは全國各府縣に其支部を設けて、以上の授産的事業の外、乳兒の委托場迄も拵らへ、産業に就くことを奨励した。クリミア戦争のときにナイチンゲル嬢一人が軍人に同情する博愛者であつた、日本では殆んど日本全國の婦人がナイチンゲル嬢であつた、數千萬のナイチンゲル之を以ても世界に誇るに足るのである。

第三 綽々たる國家の富力

明治三十七年の農業成績は氣候の順適なると、國民の精勵なるとに依つて近時稀なる豊作であつた、父兄の許より兵卒に送り來る書狀の中に多く此のことが記されてあつた、其心は兵卒をして郷里のことを顧みざらしむるのであつたらうが、實際に於ても又豊作であつたのである、明治三十八年は非常に雨の多かりし爲めに農業は一般不結果に終つた、併しながら尙國民の勤勉によつて其の害を甚だしからざらしめた。工業に至つては戦役以前よりも却而盛んになつて、敵國艦隊の出沒するに拘らず、多額の製作品は海外に輸出された。露國では米國のセントルウイ博覽會への出品を止めたが、日本では大いに出品を試みた。民間一般の商業は儉約を旨とした結果、購買者が少ないがために不振の姿であつたが、外國貿易の方は寧ろ盛況で、明治三十七年の如きは輸出入の總額が近年になき多額で、且つ輸

出の方が輸入を超過してをつた。従つて経済上金融の状況も頗る順調であつて、國家の富力が戦争に於て裨々として餘裕あることを表し、幾年戦争を繼續するも決して金力には窮せんと云ふ自信力を國民に與へた。商業上の物資の集散も、頻繁な軍隊輸送の存するに拘らず、甚だしく障害を受くることなく又、商工業の連繫も圓滿であつた。歐米列國の人民が我陸軍の赫々たる戦勝に驚いたよりも、今日まで貧乏國として考へて居つた日本の此の實力の豊富、即ち有形上の國家の基礎が非常に強固であることについて更に一層の驚きをなしたと云ふことである。

第四 國內の協力一致

古來幾多の政治家がやつた如く、外交上の紛擾若しくは戦争を以つて國內の不和を緩かにし若しくは除去し得るのは自然の勢である。ましてや國家の存亡を賭して勝敗を争ふ此戦争間に於て國內の不和がありさうなことはない、勿論政府のやりかたに就いては多少の議論がないではなかつたが、舉國一致の名の下に凡べての議論は其の聲を潜めた、臨時費の豫算も、勅令の事後承諾も議會を難なく通過して、寧ろ沈靜過ぎる程のものであつた、三十八年の春芳川内務大臣が關西地方を巡回したときでも、一般に地方の風習は勤儉に傾いて同大臣も頼母しい状況であると言つた。教育に於ても好結果を呈した事も同大臣が語る所であつた。或者は戦争は普通教育を萎靡せしめはしないかと心配をしたが、實際は之に反して平和の時と同じように好都合に行はれて、徴兵より來る教員の缺員にも拘らず、當時の教員が互に相繰合せ、助け合つて、之が爲め教育の滯滞を來たすやうなことはなく、且つ戦時に於ける各種模範的の實例が着々被教育者の前に説明せられて、精神教育の大なる幫助をなしたと云ふことである。又被教育者も戦争の永續すべきことを察して、極めて沈靜に其の教育を受けて居つたようである。

第五 半狂的非國民說

然しながら此の戦争の間に不都合なる説をなす教育家があつて、一時社會の耳目を惹いた、明治三十七年の暮に某大學の浮田某といふものが、半狂氣的非日本説をなしたことである。彼は其の學生の前に講演して曰く、降参といふことは強ち恥するに足りない、日本の昔の武士が事に窮すると腹を切るなどといふが、世界の人は其度量の小なることを笑ふてゐる、捕虜になつたからと云ふて耻するには及ばん、窮した時には天命に委せて、時の至るを待つより外にない、洋行でもするつもりで平氣で居ればよい、これが世界の一般のならひであつて、切腹や自殺などと云ふことは野蠻極まると云ふやうな論旨であつた。此の議論を聞いて第一に喧ましく云ふたのは予が父であつた、其の頃の日本新聞の第一面に於て、「迂儒の腐説を駁す」といふ題號の下に數萬言を費して非常にこの説を攻撃した、東京日日新聞でも予が父の説に同意した、而うすると浮田某が其辯解を初めた、其辯解たるや極めて男らしくなく、あの時にはそう云ふたのではないとか或はその言葉はそう云ふ意味でないとか、極めて卑屈な半取消的の辯解であつた、そこで此の辯解を更に攻撃する者があつて、彼は非常に窮した、そこで毎日新聞の島田三郎氏がその中に這入つて予の父の説と浮田某の説とは其の歸する處同一であると論じた、そこで予の父は再び日本新聞に其の説を掲げて浮田の説とは絶対に反對であつて、是を同一などと云ふのは抑も又腐儒の類であると大いに論じた、之と同時に井上哲次郎が又浮田某を攻撃した、新聞上の議論はこの位で止まつたか、世間の噂は非常に高くなつた、或る者は浮田を以て露探などと云ひ出す程に激昂した。元來少しく外國の書籍を読んで、外國の智識を得た多くの者は其の思想も亦外國人の思想に陥つて、其の身體も全く外國人になつてしまふ者が多い、浮田某の如きは此の輕薄學者の一例であつて、日本人でありながら全く日本人たるを忘れて居る、そうして一度世間の駁撃に逢ふや日本人的氣質を放れて卑劣極まる辯解をしてゐる、斯様な人間は國家の蠱毒であつて、殊に社會を教導すべき教育界の大罪惡人である、而うして斯様な人間

の説を聞いて拍手喝采をして居る學生に至つては、更に驚く可きである、教師の云ふことはなんでも盲従するといふやうな青年學生では國家の將來が案じらるのである、而して實際平和主義、個人主義、利己主義などから起る武徳の侮蔑、戦争の排斥、兵役の避忌等は目下青年學生の胸中を傳染する無形上の病患である。之等の點に關しては活眼を有する教育家の奮勵を要する處である、さなきたに今日の一般の思想が輕薄に走りつゝあるのである、憂ふべきものは文明の程度に非ず、財力の多少に非ず、實に日本の思想の銷磨である。

第六 奢靡の風漸く萌さんとす

地方は勤儉であるが、此戦争中帝都の中央から不詳なる風俗の萌芽を發した、商業上購買者の好奇心を挑發せんがために、三越呉服店から發賣した元祿模様の衣服が流行を始めたことである、或者曰く之實に井上某の考案なりしと云ふ、元祿は徳川幕府時代に於る最も風俗の奢侈に、且つ靡亂した際であつて、其模様の極めて華かなると、其座臥の正しからざるとは當時志あるものゝ憂へた處であつた、粉黛嬌姿胡蝶夢八萬塵下無男子といつた處のもの則ち是である、然るに此衣服を復活して奢侈を競ふに至つては之を不詳なる萌芽と云はざるを得ない、是から元祿藝者、元祿踊などゝいふものが出来て、日用の器具に至る迄元祿時代のものを使用すると云ふ様な傾になつて來た。

戦争中に大なる發達をなしたものは繪葉書であつた、明治三十七年の秋頃から先づ美人の繪はがきが大に流行した、此次は繪はがきと云へば即ち美人の繪であつた、之は内地人が戦地に在る者を喜ばしめんが爲に起つたものであらう。明治三十八年の春頃から之等の繪葉書が漸く諸種の繪に變化して、山水花鳥、風刺滑稽等の繪が諸種の印刷及圖案に依つて作られた、其内で戦役記念として最價值あるものは恤兵部及遞信省から發行せられたものであつた、其精巧にして美麗なる優に歐米諸國の繪はがきに匹敵することが出来る。然し乍ら他方に於ては随分如何はしいものがあ

つて甚だしきは風俗を壞亂するといふ理由の下に發賣を禁止せられたものもあつた、一般に之をいへば此時から風俗及精神上の誘惑物が多くなつたのである。

第七 外國の信用と日本研究

然し乍ら戦争の進行は日を追ふて外國人の間に我國の畏敬と信用とを増進した、之がため從來は外債の募集に頗る困難を感じたが開戦以來、外債を募らんとする我政府の意向を見て翕然として之に應ぜんとしたのである。其處で明治三十八年三月二十四日に四分五厘利附三億圓の我外債が倫敦及紐育の市場に發行するの運びとなり、更に同年七月八日に英米獨三ヶ國に三億圓の外債を發行することゝなつた、之は實に利子の他國のものに比し高かつた許りでなく我國の前途に充分なる信用を措いたからである、加之外國人等は從來我國を以て東洋の不可思議なる一國として珍しそりに觀祭して居つたものが、今は一躍して驚嘆の目を以て見るようになつた、其結果が何故に日本が世界の大國たる露國に打勝ち得たであらうと云ふ問題に到着して、彼等ば此處に研究の目を以て我國を見る様になつた倫敦タイムスの日露戦評の如きは直接戦争の批評の外に屢々此問題を提議して、是を解決せんと試みた、曰く日本の露國に勝つ所以のものは日本が高度の文明に達して且つ立憲的政治を行ふて露國と對抗し得た外に、日本固有の武士的精神の存在が有力なる戦争の原因であるといふて居る此に於て我武士道大和魂などゝ云ふ問題まで掲げて頻に是を批評し、且つ稱讚して居つた、之がために在外の我國民は非常に肩巾の廣さを感じて至る處歓迎せられ、且つ濶歩したと云ふことである、戦争の効果は何んと偉大なるものではないか。

第四十一章 戦争と露國內

第一 露國民の失望と騷亂

今回の戦争に於て、我國は實に古今無比の舉國一致を以つて各方面に於て献身的美風を發揮しある間に敵國の状態は如何であつたらうか、驕慢なる露國人は明治三十七年二月八日の水雷襲撃に熱火の如き憤怒を發し、我陸海軍を一時に殲滅せんと意氣まいたが鴨綠江、南山、得利寺の陸戦並に同年八月十日の旅順の海戦に於て、見事に其陸海軍は打ら破れたので、稍々落膽して陸海諸將の無能なるを詰つて居つた、然し乍ら此頃迄は正直なる戦報は多く其國民に秘密にされ、若しくは虚構の戦報を流布して僅に國民の憤怒を抑へて居つた、我閉塞戦隊の旅順港口に自ら爆沈する報じて其海軍の大勝利と傳へた。斯様な有様で其國民の胸中に一大疑惑を湛へて居つたが、其の内に政府の無益なる戦争を惹起して國民を塗炭に苦しましむることを痛論するものが漸く多くなつた、而して遼陽戦の敗報は此聲をして一層大ならしめた。是から漸く我日本國の侮るべからざることを知ると同時に、其政府並に皇帝に對する攻撃の矢を盛ならしめた、そこで皇帝はクロバトキンに奉天より一步も退くべからざることを命じたのみならず、速に攻勢を取つて遼陽を恢復せんことを命じた。然し乍ら沙河の大敗は落膽の聲をして更に大ならしめて、此頃から従來露國皇帝及政府に敵意を有して居つた、虚無黨並にポーランド及フィンランドの人民は積年の宿望を成就するの秋至れりとなして、密に謀反の策を籌らし、動もすれば叛亂の火の手は至る處より揚り掛かつた、最初の騷動は「ワルソー」に起つた、此騷動は漸次歐露の各地方に蔓延して頻りに報道せられた。

第二 暴徒の征服に勇なる軍隊

然し乍ら政府を信用せる國民の一部と官吏は、旅順の要塞の難攻不落なることを確く信じて、之さへあれば尙バルチックの總ての軍艦を東洋に廻航して、我東郷艦隊を撲滅して日本陸軍の後方連絡を杜絶し、以て前後兩面より我陸軍を攻撃したならば、非運なる戦勢を挽回し得るであらうとの一縷の望をその海軍に屬して、所謂バルチック艦隊を出發せしむることを急いだ、一方に於ては嚴に其國內の新聞紙を檢閲して反亂に關する總ての報道を抹殺した、そこで一時頻々として來つた露國內叛亂の報道は俄に其の跡を絶つた、然し乍らこの抹殺政略は何等の用を爲さず、露人が虎の子の如く大切にした旅順は遂に開城の止むなきに至つたことを知つた時、國民は従來我が日本國に對して發した憤怒の聲を其皇帝及政府に向つて發した、抹殺政略は益々反抗を招くばかりで、政府は遂にこの政略を抛つた、同盟罷工並に叛亂は益々其度を高めて、怒の鐵拳は先づ其抑壓を被らしむるものに向つて下り、猶太人の虐殺となり、工場主の放逐となり、更に軍隊と衝突してワルソウの如きは白晝市街戦を敢行して二千人の死傷を生ずるに至つた、而してその極明治三十八年の一月末には數萬の群集が一人僧侶の指揮に依つて自由の權利と國會の開設とをに皇帝に迫つた、そこで軍隊との衝突が起つて、帝都ペテルブルグは修羅の巷となつて、遂には軍隊にも亦この騷動加はるものがあつて、皇帝の祈禱の際發射せる禮砲中に實弾を混じて其の帝座の附近に落下するなどの珍事を惹起し、同じく二月中旬に至つては、モスコウ總督セルウジ一太公か爆發弾を以て非命の最期を遂げた。斯様にして騷動はペテルブルグよりモスコウ、セバストポール、ワルソウ、ロツズ、コウカサス、などの各地に擴がり、プチロフスキー兵器製造所並にセバストポールの海軍工場まで其製造業を中止するの已むなきに至つた。然して戰場に於ては奉天の敗北を來たし、第二第三、太平洋艦隊は全く全滅に歸し、彼等の傲慢心に一大打撃を加へた、時に彼等が落膽の極戦争の敗北は露國を改造するの機會を與へたるものなりと絶叫して、遂には戦敗は幸運なりとして、其騷動は目を追ふて高まつた。軍隊は暴黨の征服に供せられて、戰場に於て頗る阜怯なる代りに、武装なき人民に對しては極めて勇敢であつた。そこで政府の主戦黨も大いに恐怖を來し、従來頗る勢力の揚らなかつた非戦黨が大に勢力を振ふて或は國會を開

くとか、憲法を制定するといふことを布告して、専ら人民の機嫌をとることになつた。而して主戦黨の巨魁なる露國海軍最高司令官アレキシス太公が其職を辭する様になつた。

第三 戦争終結の決議と暗殺

折しも六月十日米國大統領ルーズベルトが兩交戰國に向つて講和の勸告をなしたのを機會として、非戰黨は戦争終結の議を決して其勸告に應じた。然し乍ら今は國民は從來の壓制なる君主專制を脱せんとして争ふのであるから、騒動は依然として到る處に繼續し、波蘭ロツズに於ては武裝せる六萬の職工と軍隊とが衝突して二千人の死傷を生ずる様の出來事が起つた。之と相前後してオデツサに於ても革命運動が起つて、黒海艦隊の一部が之に加はつて中にも戰艦ボテムキン兵卒の如きは、其將校を殺して黒海沿岸の各地に跋扈し、政府はボテムキン擧沈の命令を下すに至つた。續て莫斯科市長スワロフは暗殺せられ、斯様な騷亂の何時果つるかを知り得ない位である。前記の出來事は六月の下旬から七月の中旬に亘つて起つたものである、其後も或はフィンランド總督の彈裂彈に依つて負傷するとか、或は宗務院長の刺客に襲はれるとか鐵道同盟罷工が起るとか、諸種の騷動は平和克復の時に至るまで熄まなかつたばかりでなく、其後と雖も益々激烈且つ廣大に成り行くのみであつた、如何なる人も露國の將來に向つて樂天的觀察をなし能はなんだ。

第四十二章 媾和會議の失敗

第一 媾和會議の提唱

前記の如き國內の事情と、幾度かの戰敗とは露國をして終に戦争を終結するの決心をなさしむるに至つた。惘眼なる米國大統領ルーズベルトは早くも此事を見抜いて、六月十日に兩交戰國政府に向つて媾和勸告の通牒を發した、同十二日に我政府でも御前會議を開いて、之に應ずる事を決し米國政府に其回答をした。露國政府も亦此日に其勸告に應ずるの通牒を出した。其處で先づ何處に於て媾和會議を開くやの問題はルーズベルトの媒介に依つて同十五日を以て華盛頓に決した。其次に起るべき問題は會議開始の時日であつたが、之もルーズベルトの斡旋に依つて同二十八日に同年八月一日より開始することに決定した。全權委員に就いては七月三日我國は小村壽太郎及高平小五郎二氏を以て、露國に於ては、ムラビエフ及ローゼン二氏を以てすることに決した、併し乍らムラビエフは健康不良の理由を以て退き、ウイツテ氏に代ることゝなつた。斯様にして我が小村全權は七月六日勸告を拜受し隨行のものと共に、同八日横濱を解纜した。ウキツテ氏も亦七月十九日ベルブルグを發した。我全權は七月二十八日ルーズベルトとウエスターベに會見した、露國全權は八月六日同所に於てルーズベルトに會見し、同日兩全權はルーズベルトに依つて紹介せられて、同八日兩全權はポーツマウスに着し、翌九日に委任狀を互に示し、十日から談判を開始することゝなつた。

第二 會議の經過

爾後の經過は次のようである。

- 十日 第一回會見委任狀查閱條件提出
- 十二日 露國回答(償金割地拒絶)、第二回會見韓國問題討論
- 十四日 第三回會見韓國宗主權、露國滿洲撤兵、日本滿洲撤兵、滿洲の保全及開放議了
- 十五日 第四回會見、樺太割讓(未決)遼東租借權議了

十六日 第五回會見、哈爾濱以南鐵道讓與、浦鹽線を非軍事鐵道として保有
十七日 第六回會見、戦費、買入艦隊、海軍力制限(未決)
十八日 第七回會見、沿海州漁業權議了
十九日 會見中止二十二日迄金子男、大統領訪問、ローゼン大統領と會見
二十一日 金子男大統領訪問
二十二日 大統領代表者露全權と密會す、露國全權延期を求む
二十三日 第八回會見、既に議了したる八箇條に調印す、次の會見を二十六日迄延期す
二十六日 第九回會見、兩國委員相固持して譲らず、二十八日迄次の會見を延期す
二十八日 會見を延期す
二十九日 第十回會見、我全權償金と樺太の半部を譲り平和會議纏まり終局を告ぐ
斯様にして媾和條件は決定せられ、九月一日休戰條約の調印を終り、同じく五日には本條約の兩委員間に於る調印を終つた。休戰條約は九月十三日から實施せらるゝことになつた、平和は遂に來つた、悲しむべき平和は遂に來つた。

第三 戦死者の英靈を如何に慰めん

外交のことは勿論一般に秘密にされてあつた、然し乍ら一週間遅れに戦地に到着する新聞紙は、略々會見の様を表はして我々をして一喜一憂せしめた。俄然九月十日頃に到着した新聞紙は我々をして驚愕措く能はざらしめた、如何に軍人が政治上の事柄に向つて容喙を許されてないとはいへ、國家の一員である以上是を聞いて驚かさるを得んのである、我々は今この不名譽なる條約を茲に掲ぐるに忍びない。

回顧すれば二十開月の間戦争事業に従事した我等は、今如何なる心を以てこの平和の成立を聞いたであらうか、も

し夫れ十數萬の死者と、數十萬の戦傷者と共に思ひを回らさば、潸然として涙を禁じ得ないのである。滿洲、北韓、樺太、日本海及黃海の到る處に其淋漓たる鮮血を流して、而して得る處のものは殆どないのである、幽瞑の裡に滂薄する戦病死者の英靈は、恐らくは其の行く處に迷ふて彷徨するであらう、十萬枯骨出をなして匹夫國を誤ると云ふのは即ち此事である。

第四 冷血なる政治家

抑も今日の政治家で外交家などいふものは其才を働かず頭腦ばかりであつて、其己を支ゆる處の身幹のなきものゝ様である、彼等は口を以て巧にシヤベリ、其手を以て巧に人をあしるふ、併し乍ら其胸奥には確固たる主義もなく、方針もなく、口と手を動かすばかりである、況んや膽力などいふものは微塵もないのである、恰も幽霊の如く、空に懸つて居るのである、斯様な者がドウして國家の大事を議することが出来ようか。夫ればかりでなく彼等の身體の中には紅なる血が流れて居るのである、其如何に軍人が困苦缺乏を冒して大暑極寒の内に在つて其任務を盡し、劍電彈雨の中に其身を犠牲に供しつゝあり、又如何に國民が悲痛の涙を抑へて其親族故舊を失ふに甘んじ、其生計の道を失するとも厭はず、多額なる國家の負擔に堪へつゝあるのを知らないのである。彼等は贅澤なる衣食住の内に包圍せられて、冬の寒さ、夏の暑さ、況んや戦場の危険、國民の悲嘆などは知り様もないのである。出れば鸞絨の椅子に據り、歸れば嬋娟なる婦女に接して其日を送るのである、則ち國民及軍人に對する同情もなく、親切もなく、徒に世の輕第薄兒と交つて一時を彌縫して居るのである。斯様な冷血動物が何をなし得るものであらうか。戦争中に松本重太郎の百三十銀行の破産を免れしめんが爲に、國庫の百萬圓を密に割ひて與へんとした様な大臣もある。關西中國邊に巡廻して一方に國民の奉公心を獎勵しながら、祇園や名古屋の藝者に浮名を流した大臣もある。戦争中の財政監督の名目の下に相場に手を出した元老もある。戦争の財政に關係ある御用商人から妾を引受けて一人自ら楽しんで居る大臣もある、斯様な者は如何に國民に同情の乏しきかを表白する證據である。

第五 見送られたる原因

既に彼等は冷血にして且つ無足の動物である、何爲ぞ天下の大勢に通ずる事が出来ようか、彼等の考へて居る事は世界の人から嫌はれすまいか、世界の人から笑れすまいか、唯斯様なる事のみである。恰も醜業婦が其客の同情を失はん事を恐れて右所左顧するのと同様である。其初めルーズベルトが媾和の勸告を申込んで来た時に、恰も客引の悪い女に口がかゝつて来た時のやうに恐惶頓首再拜しうろたへ騒いで、唯其回答の遅からざらんことを恐れて、戦捷國の威嚴も態度もなく、亦將來のことも考へなくて直に其返事をした、之が第一に露國から見送られたる所以である。其談判地の決定の時に於ても、只管容の歡心を失はざらん事を努めて、何處へでも、ついで行くといふ様に直に米國に於てすることに賛成した、米國で媾和會議を開くことは對等國の仕方であつて戦捷國のやり方でない。苟も露國が媾和勸告に同意をしたならば、日清戦争の馬關條約に於る如く、彼的全權を我國に呼びつけるがよい、然るを遂に米國に決した、之が露國に見送られた第二の原因である。而して談判の時日が決定するや、充分なる人選もしないで、意力も膽力もないものを、うろたへまくつて、一月も前から早くに出發せしめた。戦敗國の全權は夫れから半月も遅れて優々として出發した、之が露國に見送られた第三の原因である。而して露の全權は大なる法螺を吹いて、新聞記者と語つたり、新聞に投書したりして、氣焰を吐いて居る。然るに我國の方では戸水寛人などいふ人の正當の議論をも新聞に掲載することを禁して、國民が熱心に戦捷國の權利を主張するのを妨げた。全權も又女子供が大勢の人の前に出るのを恥しがるやうに極めて密かに華盛頓に到着した、之が戦捷國の仕方であらうか、露國に見送られた第四の原因は則ち之である。而して會見の第一日に於て會議の結果を秘密に附せんことを主張した、恰も婦女子が、つまらなきことまでも、内證にしたがるのと同様である、之が露國に見送られた第五の原因である。而して會見の第二日に於て、償金及樺太割讓の主題を後廻しにして、附屬の條件たる韓國や滿洲の問題から始めた、恰も婦女子が男に向

つて物を要求する時に、詰らない事に遠慮して自己の希望の最要點を何時の間にか閉却して、些末の物を漸く得るといふ様な風である、之が露國に見送られた第六の原因である。既に談判の最初に於て斯様な弱點を表して居るのである、談判の終局を見ずとも其失敗は豫め知り得たのである。

第六 無氣力の我全權

最初我全權が提出した條件なるものが極めて少ない要求である、既に五六十萬の兵を動かしたる以上二十億の償金は正しき戦争の賠償費であつて、此位の要求は當然である。樺太は既に我軍隊の占領した處、談判を用ひずとも日本の有である斯様なものは寧ろ媾和の條件の外である。普佛戦争の終りにプロシヤが佛蘭西に要求した如く、少くとも五十億の償金と、アルサス、ローレンに匹敵する沿海州位は要求すべきものである。されば假令大讓歩した處で樺太の全部と、償金の二三十億は取れるのである。然るを既に最小限の條件を提出して談判に當り、割地及償金の主題を後廻しにしたるが爲め、狡猾なるウキツテは直に日本の媾和に意あるを知つて、其談判の頗る容易に成効すべきことを悟つたのであらう、ウキツテは恐らく第二日以後胸中笑ひ乍ら討議をしたであらう、斯様なことを知らざる我全權は、附屬の問題を討議して初めて大いに得意であつたらふが、既に附屬問題を議了して之から主題に取掛らふとする、大盤石の如く座つたるウキツテは一步も動かさず、恰も擊劍の先生が修業者を初め充分あしらうて置いて、其呼吸が迫り目が晦むだ時に最後の一本を見舞ふといふ風であつて、日本の全權は既に此時迄に疲れきつたのである、唯腕の先きのこざり合に其全力を盡し終つて、最後の胴や面を切り込む時には手が延びないのである。最後の一段で踏ん張られると、手も足も出様がないのである。若しも割地償金の二條件を前にしたならば、假令割地償金に成功しないにしても、附屬條件をより多く有利に議することが出来るのである、其談判の拙劣古今東西稀である。若しも全權が意力や膽力があつたなら、假令談判は不成功にした處で、尙且つ一片の活路を有して居るのである。西歷一千八百七十

七年露土戦役後に於ける伯林會議に於て、英國の全權ビーコンスフィル侯が、露國の全權ギルコフに向つてなした如く、談判の結果に責任を負ふて會議の席を蹴つて最後の決心を示すがよい、若しも露國に媾和の希望があつたならば、袂を曳いて其退去を止むるであらう、若しも露國が尙は聞かなかつたならば戦争は再び繼續するかも知れん、其責任は自ら負ふて、自ら處決すれば好いのである。然るを空腸動物たる彼等は、全權の任を負ひ乍ら最後の責任を人に嫁して、元老や大臣の意見を聞くなどに至つては、責任も義務も辨へない婦人女子の所業である。

第七 荆軻、蘇武の氣概

彼等は元老や内閣の指示と、ウキツテの強硬に屈して、空前絶後の名譽ある戦争をした國家を空前絶後の不名譽の内に埋めて、夫れでも死に切らずにオメ／＼と生きて居る、其未練な仕方は婦人女子より以下である、昔漢の蘇武は匈奴に使用して飢寒に頻して猶且つ其説を曲げず、荆軻劍を藏して秦に使す、發するに臨むて唄ふて曰く、風は蕭々として易水寒し、壯士一度去つて又歸らず、と而して遂に歸らざりき。苟も君命を奉じて折衝の任に當り、其の千古の屈辱を受けて猶ほ恬然として歸る、誠に人間界のものにあらず、猫と雖も其面に唾すれば猶且つ是を避く、抑も亦是にも及ばざるか。

人は媾和談判の不成功を以て元老及大臣の軟弱より出づると云ふ、素より左様である、然し乍ら談判に關することは如何にしても全權の責任である、其拙劣極まる談判のやり方と、其膽力のなき薄弱なる方法とは、其責を全權に歸せざるを得ない。其元老及大臣に最後の決定を仰ぐ如きは全く全權の資格を没却して居るのである、假令最後の決定が元老及大臣に仰いたものでないとした處で、若しも全權に於て大臣及元老の意見と反對であつたならば、自己の意志を貫徹するが好い、少しは野蠻であるかも知れぬが、談判が不成功に終れば敵の全權を刺して自らも又死するに若

くはない、此位の決心がなくて國家の大事を議することが出来るものか。

第八 最少限要求の貫徹

然乍ら此時に於て戦争を終結するか、若しくは繼續するかは國家の大問題である。今は戦争終結の最良の時機であらう、日本の強盛は世界既に之を認めて居る、然し乍ら露國を絶対に屈伏せんとすることは不可能である、ウラル山を越へてベテルブルグに城下の誓をせんなど、云ふことは空想に過ぎない、假令日本が前面の露軍を突破してハルビン迄前進した處で、露國の直接痛痒を感じないのは同様である。或は又前面の露軍を全く包圍して全滅に歸した處で、歐露の百五十萬の兵を逐次に前進せしめば我は常に敵を有して奔命に疲るゝばかりである。夫れ故に國家の經濟上並に兵力の供給上から言つても今は將に戦争を己むべき秋である、露の唯一の不凍港を奪ひ、滿洲の首府たる奉天を占領し、樺太を平定した今日、既に充分である。或は浦港の攻略を遅せるを憾むものがあるかも知れないが、此要素を攻略する困難と、之を得るの利益とを比較したならば無用の空論であるいふことを斷定することが出来る。斯様に今は戦争を止めるのに最も適當な時機である、併し乍ら戦争を止むるには戦捷國の名譽を保持し得るだけの要求、即ち條件を獲得せねばならん、其最少限は樺太の割讓と、幾分の償金である、之だけを得て而かも戦争を止め様と思ふたならば、少くとも其要求を倍にし之を敵の全權の前に提出するがよい、愚かなるかな今日の政治家たるものよ。

第九 國家的大人物の缺乏

併し乍ら斯様な結果を來した所以のものは國家に大人物なき所以である、今日迄人物を擧用すること唯材と智とのみである、今日迄未だ大人物を見ない、元老大臣と雖も唯小才に長けた者ばかりで、到底誰が外國に使しても同一

な不成功で終るであらう、唯一つ望みあるものは彈丸雨飛の危険を冒し、同胞の流したる血に同情を表する所の唯一箇の軍人が此任務を全ふし得たであらう、才もなく、智もなくとも充分なる膽力と熱誠なる國民に對しての同情を以て居つたならば口舌を煩はさずとも談判は見事成功したであらふ。

第十 帝都の騷擾と國民の不滿

屈辱極まる平和條約は漸く洩れて九月五日には悲憤の聲が爆發して名譽ある戰捷國の帝都の中央日比谷公園に一大騷動を惹起した、其極遂に内務大臣邸の放火となり、國民新聞社の襲撃となり、警察署交番所の焼拂ひとなり、電車の破壊となり、死傷數百、日を重ぬる三日、帝國の歴史に千載雪ぐ可からざるの汚點を残した、抑も之誰の罪であるぞ。

九月七日東京市に戒嚴令を布き、緊急勅令を以て集會及發行の停止を命じて、遂に騷動は鎮靜に歸した、併し乍ら戒嚴令は依然として平和克復の日まで其儘であつた。

第四十三章 平和克復と凱旋

第一 平和克復の大詔

九月十三日より總司令部の命令に依り休戦を實施した、此間も内地では非媾和の議論が盛んであつて、至る處に非媾和大會が行はれた、併し乍ら調印せられたる條約は十月五日全權隨員の一行横濱に到着して、同十四日此條約は華盛頓に於て交換せられ、同十六日に於て發表せられ、此日を平和克復の日となした。同時に平和克復の詔勅が發せられて、殊に我々軍人に最も優渥なる勅語を賜つた、

詔 勅

朕東洋ノ治平ヲ維持シ帝國ノ安全ヲ保障スルヲ以テ國交ノ要義ト爲シ夙夜懈ラス以テ皇猷ヲ光顯スル所以ヲ念フ不幸客歲露國ト釁端ヲ啓クニ至ル亦定ニ國家自衛ノ必要已ムヲ得サルニ出テタリ開戦以來朕カ陸海ノ將士ハ内籌畫防備ニ勤メ外進攻出戦ニ勞シ萬難ヲ冒シテ殊功ヲ奏ス在廷ノ有司帝國議會ト亦善ク其ノ職ヲ盡シテ以テ朕カ事ヲ獎メ軍國ノ經營内外ノ施設其緩急ヲ愆ラス億兆克ク儉ニ克ク勤メ以テ國費ノ負擔ニ任シ以テ費用ノ供給ヲ豊ニシ學國一致大業ヲ贊襄シテ帝國ノ威武ト光榮トヲ四表ニ發揚シタリ是固ヨリ我カ皇祖皇宗ノ威靈ニ賴ルト雖抑亦文武臣僚ノ職務ニ忠ニ億兆庶民庶ノ奉公ニ勇ナルノ致ス所ナラスムハアラス交戦二十閱月帝國ノ地歩既ニ固ク帝國ノ國利既ニ伸フ朕ノ恒ニ平和ノ治ニ汲々タル豈徒ニ武ヲ窮メ生民ヲシテ永ク鋒鏑ニ困マシムルヲ欲セムヤ

嚮ニ亞米利加合衆國大統領ノ人道ヲ尊ヒ平和ヲ重スルニ出テテ日露兩國政府ニ勸告スルニ講和ノ事ヲ以テスルヤ朕ハ深ク其ノ好意ヲ諒トシ大統領ノ忠言ヲ容レ乃チ全權委員ヲ命ジテ其ノ事ニ當ラシム爾來彼我全權ノ間數次會商ヲ累ネ我ノ提議スル所ニシテ始ヨリ交戦ノ目的タルモノト東洋ノ治平ニ必要ナルモノトハ露國其ノ要求ニ應ジテ以テ和好ヲ欲スルノ誠ヲ明ニシタリ朕全權委員ノ協定スル所ノ條件ヲ覽ルニ皆善ク朕カ旨ニ副フ乃チ之ヲ嘉納批准セリ朕ハ茲ニ平和ト光榮トヲ併セ獲テ上ハ以テ祖宗ノ靈鑒ニ對ヘ下ハ以テ不績ヲ後昆ニ貽スヲ得ルヲ喜ヒ汝有衆ト其譽ヲ偕ニシ永ク列國ト治平ノ慶ニ賴ラムコトヲ思フ今ヤ露國亦既ニ舊盟ヲ尋テ帝國ノ友邦タリ則チ善鄰ノ誼ヲ復シテ更ニ益々敦厚ヲ加フルコトヲ期セサルヘカラス

惟フニ世運ノ進歩ハ頃刻息マス國家内外ノ庶務ハ一日ノ懈ナカラムコトヲ要ス僣武ノ下益々兵備ヲ修メ戰勝ノ餘益々治教ヲ張り然シテ後始テ能ク國家ノ光榮ヲ無疆ニ保チ國家ノ進運ヲ永遠ニ扶持スヘシ勝ニ狂レテ自ラ裁抑スルヲ知ラス驕怠ノ念從テ生スルカ若キハ深ク之ヲ戒メサルヘカラス汝有衆其レ善ク朕カ意ヲ體シ益

予が見たる日露戦争

三六四

々其ノ事ヲ勤メ益々其ノ業ヲ勵ミ以テ國家富強ノ基ヲ固クセムコトヲ期セヨ

御名御璽

明治三十八年十月十六日

内閣總理大臣兼外務大臣	伯爵桂	太郎
海軍大臣	男爵山本權兵衛	
農商務大臣兼内務大臣	男爵清浦奎吾	
大藏大臣	男爵曾根荒助	
陸軍大臣	寺内正毅	
司法大臣	波多野敬直	
逓信大臣	大浦武	
文部大臣	久保田讓	

勅語

朕カ親愛スル帝國陸海軍人ニ告ク

朕卿ニ汝等ニ示スニ軍人ノ精神クル訓規五箇條ヲ以テシ明治二十七八年戦役終ルヤ深ク邦家ノ前途ヲ念ヒ汝等ニ諭示スル所アリ爾來十閏年朕カ陸海軍ハ世界ノ進運ニ伴ヒ經校大ニ其歩ヲ進メタリ不幸ニシテ客歲露國ト釁ヲ啓キシヨリ汝等協力奮勵各其任務ニ從ヒ籌畫宜キヲ得攻戰機ヲ制シ陸ニ海ニ曠古ノ大捷ヲ奏シ帝國ノ威武ヲ宇内ニ宣揚シ朕カ望ニ副ヘリ

朕ハ汝等ノ忠誠勇武ニ頼リ出師ノ目的ヲ達シ上ハ祖宗ニ對シ下ハ億兆ニ臨ミ天職ヲ盡スコトヲ得タルヲ擇ヒ深ク其戰ニ死シ病ニ斃レ又ハ癩癩ト爲リタル者ヲ悼ム

朕今露國ト和ヲ講ス惟フニ我軍ノ名譽ハ帝國ノ光榮ト共ニ更ニ汝等ノ責任ヲ重カシメ國運ノ隆昌亦汝等ノ努力ニ待ツコト大ナリ汝等其レ能ク朕カ意ヲ體シ留リテ軍隊ニ在ル者ト散シテ都閭ニ歸ル者トヲ問ハス常ニ朕カ訓諭ヲ服膺シテ朕カ股肱タルノ本分ヲ守リ益々勵精以テ報効ヲ期セヨ

第二 凱旋

平和克復の詔勅は煥發せられた、そこで二十八年十月下旬から凱旋輸送が始つた、その輸送は建制順即ち第一、第二、第三、第四、鴨綠江軍の順序で、軍内の諸隊も亦た軍の建制順で輸送せらるゝことゝなつた。第一第二軍の諸隊は十月より十二月に亘り輸送せられたが、第四軍の諸隊は三十九年一月より二月に亘り輸送せらるゝのである。

戦争は既に済んだ、凱旋までの待遠きこと實に一日千秋の思ひであつた、是の間戦役に従事したる将卒の動績調査を行ふことゝなり、毎日諸部隊より上申する動績書類の調査に凱旋輸送迄の時期を利用し、滿洲に於て是の調査を完了するの決心を以て夜を日に繼いでこれに従事したが、當時兵站監の隷下にある部隊は七、八十の多きに達して居るから、その調査は容易でなかつたが、三十九年の一月下旬には略ぼこれを完了してその第一責任者であつた予は漸く重荷を卸した。

第四軍兵站諸部隊の輸送は二月中旬であつた、而して是の凱旋輸送に關する命令や、準備のために一月二月は驟く間に過ぎて、兵站監部の鐵嶺出發は二月十五日であつた、而して十七日朝大連に到着し、監部は舊露人大連市長の官舎であつた西洋建築の一屋に宿營することゝなつた。乗船までに一日の閑を得たので大連着後直に旅順の新戦場を見舞い、露軍の構築したる諸築城や、是を攻撃するため我軍の作りたる塹壕や、二百三高地の戦場の慘憺たる光景に暗涙を流し、戦死者の英靈を吊ふたる後大連に歸つた。

明くれば三十九年二月十八日である、凱旋すべき部隊は午前九時半までに御用船熊野丸に乗つた、正十時船は黒煙

を揚げて大連埠頭を出帆した、海の全面に張り詰めたる薄氷を割り開きつゝ、靜に陸を離れたる時は實に感慨無量であつた。我等がこの滿洲に二度の正月を爲し、二ヶ年の歳月を過し、今や本國に歸りて再び父母に對面するを得ると思ふ時、二ヶ年の間危険の地に入出し、而かも微傷だも受けず、微恙たもせずして愉快に歸朝し得ると思ふ時、天照大神の冥護に感謝せずには居られなかつた。

船は斯様な思出をなしつゝある間に内地への進航を急いだ、最早大陸の影も見えなくなつた、朝鮮沖をすぎ、巨濟島を巡り、豊岐對馬を遠望し、下關海峡を過ぎ、安藝の似島に着きたるは二月二十一日の夜であつた、一夜を船中に明かし、同島の檢疫所にて檢疫を受け、更に乗船して宇品の埠頭に上陸しだるは二十二日の正午頃であつた、直に打揃ふて監部の宿舍であつた廣島市長沼旅館に着いた。

廣島市長や、市民や、親戚、故舊の歡迎や、祝賀の宴で殆ど夢中に一兩日を過し、二十五日廣島を發し、姫路に着いたのは二十六日の朝であつた。監部の役員に約十日を費し、東京に歸着したのは三月十日であつた。この間亦歡迎や祝宴の連続で殆ど有頂天であつた。さても凱旋は愉快なるものである、恐らく一生涯の中にて斯程のことは他に有り得ないであらふ。

光輝ある日露戦争は終を告げた、平和の時は今や來つた、然しながら戦争は天意である、永久的平和は空想である。我等は次に來る新なる敵を撃攘すべく渾身の力を國家に捧げねばならぬ。これが我等の本分である。

予が觀たる日露戦争 終

附 録

第一 休戦ニ關スル日露議定書

九月一日日露兩國全權委員ハ左記ノ議定書ニ調印シタリ、同議定書ハ同月五日ヨリ實施セラル。

下名ノ日露全國全權委員ハ各本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ講和條約ノ實施ニ至ル迄ヲ有効期間トシテ兩交戰國間ニ左ノ休戰條款ヲ協定セリ

第一條 滿洲並ニ豆滿江方面ニ於ケル兩國軍隊ノ間ニ一定ノ距離(區劃地域)ヲ定ムベシ

第二條 兩交戰國ノ一方ノ海軍ハ他ノ一方ノ領土若シクハ占領地ヲ砲撃スルコトヲ得ズ

第三條 海上ノ捕獲ハ休戰ノ爲ニ停止セラルルコトナシ

第四條 休戰期限中増援兵ヲ戰地ニ派遣スルコトヲ得ズ

其ノ派遣ノ途ニ在ル者ハ日本國ニ在リテハ奉天以北ニ露西亞國ニ在リテハ之ヲ哈爾濱以南ニ送ルコトヲ得ズ

第五條 兩國陸海軍司令官ハ前數條ノ規定ニ遵ヒ雙方合意ノ上休戰ノ條件ヲ決定スベシ

第六條 兩國政府ハ本議定書ヲ實施セムガ爲講和條約調

印後直ニ其司令官ニ命令ヲ發スベシ

千九百五年九月一日

ポーツマスニ於テ

小村 壽 太郎
高平 小五郎
セルジ、ウキツテ
ロ ー ゼ ン

第二 講和條約

明治三十八年九月五日亞米利加合衆國ポーツマス(ニエー

ハムプシヤ州)ニ於テ

第一條

日本國皇帝陛下ト全露西亞國皇帝陛下トノ間及兩國並兩國臣民ノ間ニ將來平和及親睦アルベシ

第二條

露西亞帝國政府ハ日本國ガ韓國ニ於テ政争上、軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ、日本帝國政府ガ韓國ニ於テ必要ト認ムル指導、保護及監理ノ措置

ヲ執ルニ方リ之ヲ阻礙シ又ハ之ニ干渉セザルコトヲ約ス
韓國ニ於ケル露西亞國臣民ハ他ノ外國ノ臣民又ハ人民ト
全然同様ニ待遇セラルベク、之ヲ換言スレバ最惠國ノ臣
民又ハ人民ト同一ノ地位ニ置カルベキモノト知ルベシ
兩締約國ハ一切誤解ノ原因ヲ避ケンガ爲露領間ノ國境ニ
於テ露西亞國又ハ韓國ノ領土ノ保全ヲ侵迫スルコトアル
ベキ何等ノ軍事上措置ヲ執ラザルコトニ同意ス

第三條

日本國及露西亞國ハ五ニ左ノ事ヲ約ス

一、本條約ニ附屬スル追加約款第一ノ規定ニ從ヒ遼東半
島租借權ガ其効力ヲ及ボス地域以外ノ滿州ヨリ全然且
同時ニ撤兵スルコト

二、前記地域ヲ除クノ外現ニ日本國又ハ露西亞國ノ軍隊
ニ於テ占領シ又ハ其ノ監理ノ下ニ在ル滿州全部ヲ擧ゲ
テ全然清國專屬ノ行政ニ還附スルコト

露西亞帝國政府ハ清國ノ主權ヲ侵害シ又ハ機會均等主義
ト相容レザル何等ノ領土上利益又ハ優先的若ハ專屬的讓
與ヲ滿州ニ於テ有セザルコトヲ聲明ス

第四條

露西亞帝國政府ハ薩哈噠島南部及其附近ニ於ケル一切ノ
島嶼並該地方ニ於ケル一切ノ公共營造物及財産ヲ完全ナ
ル主權ト共ニ永遠日本帝國政府ニ讓與ス、其ノ讓與地域
ノ北方境界ハ北緯五十度ト定ム、該地域ノ正確ナル經界

日本國及露西亞國ハ滿州ニ於ケル各自ノ鐵道ヲ全ク商工
業ノ目的ニ限り經營シ決シテ軍略ノ目的ヲ以テ之ヲ經營
セザルコトヲ約ス

第七條

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ交通及運輸ヲ増進シ且
之ヲ便易ナラシムルノ目的ヲ以テ滿州ニ於ケル其接續鐵
道業務ヲ規定セムガ爲成ルベク速ニ別約ヲ締結スベシ

第八條

日本國及露西亞國ハ滿州ニ於ケル各自ノ鐵道ヲ全ク商工
業ノ目的ニ限り經營シ決シテ軍略ノ目的ヲ以テ之ヲ經營
セザルコトヲ約ス

第九條

露西亞帝國政府ハ薩哈噠島南部及其附近ニ於ケル一切ノ
島嶼並該地方ニ於ケル一切ノ公共營造物及財産ヲ完全ナ
ル主權ト共ニ永遠日本帝國政府ニ讓與ス、其ノ讓與地域
ノ北方境界ハ北緯五十度ト定ム、該地域ノ正確ナル經界

日本國及露西亞國ハ清國ノ商工業ヲ發達セシムガ爲列
國ヲ共通スル一般ノ措置ヲ執ルニ方リ之ヲ阻礙セザルコ
トヲ五ニ約ス

第五條

露西亞帝國政府ハ清國政府ノ承諾ヲ以テ旅順口、大連並
其ノ附近ノ領土及領水ノ租借權ニ關聯シ又ハ其ノ一部ヲ
組成スル一切ノ權利、特權及讓與ヲ日本帝國政府ニ移轉
讓渡ス、露西亞帝國政府ハ又前記租借權ガ其ノ効力ヲ及
ボス地域ニ於ケル一切ノ公共營造物及財産ヲ日本帝國政
府ニ移轉讓渡ス

兩締約國ハ前記規定ニ係ル清國政府ノ承諾ヲ得ベキコト
ヲ五ニ約ス

日本帝國政府ニ於テハ前記地域ニ於ケル露西亞國臣民ノ
財産權ガ完全ニ尊重セラルベキコトヲ約ス

第六條

露西亞帝國政府ハ長春(寬城子)旅順口間ノ鐵道及其ノ一
切ノ支線並同地方ニ於テ之ニ附屬スル一切ノ權利、特權
及財産及同地方ニ於テ該鐵道ニ屬シ又ハ其ノ利益ノ爲メ
ニ經營セラルル一切ノ炭坑ヲ補償ヲ受クルコトナク且清

線ハ本條約ニ附屬スル追加約款第二ノ規定ニ從ヒ之ヲ決
定スベシ

日本國及露西亞國ハ薩哈噠島又ハ其ノ附近ノ島嶼ニ於ケ
ル各自ノ領地内ニ堡壘其ノ他之ニ類スル軍事上工作物ヲ
築造セザルコトニ同意ス、又兩國ハ各宗谷海峽及韃靼海
峽ノ自由航海ヲ妨礙スルコトアルヘキ何等ノ軍事上措置
ヲ執ラザルコトヲ約ス

第十條

日本國ニ讓與セラレタル地域ノ住民タル露西亞國民ニ付
テハ其ノ不動産ヲ賣却シテ本國ニ退去スルノ自由ヲ留保
ス、但シ該露西亞國民ニ於テ讓與地域ニ在留セント欲ス
ルトキハ日本國ノ法律及管轄權ニ服従スルコトヲ條件ト
シテ完全ニ其職業ニ従事シ且財産權ヲ行使スルニ於テ支
持保護セラルベシ、日本國ハ政事上又ハ行政上ノ權能ヲ
失ヒタル住民ニ對シ前記地域ニ於ルル居住權ヲ撤回シ又
ハ之ヲ該地域ヨリ放逐スヘキ充分ノ自由ヲ有ス、但シ日
本國ハ前記住民ノ財産權ガ完全ニ尊重セラルヘキコトヲ
約ス

第十一條

露西亞國ハ日本海オコトツク海及ベリリング海ニ瀕スル露西亞國領地ノ沿岸ニ於ケル漁業權ヲ日本帝國臣民ニ許スルヲ爲メ日本國ト協定ヲナスコトヲ約ス、前項ノ約束ハ前記方面ニ於テ既ニ露西亞國又ハ外國ノ臣民ニ屬スル所ノ權利ニ影響ヲ及ササルコトニ雙方同意ス

第十二條

日露通商航海條約ハ戰爭ノ爲メ廢止セラレタルヲ以テ日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ現下ノ戰爭以前ニ效力ヲ有シタル條約ヲ基礎トシテ新ニ通商航海條約ヲ締約スルニ至ルマテノ間兩國通商關係ノ基礎トシテ相互ニ最惠國ノ地位ニ於ケル待遇ヲ與フルノ方法ヲ採用スベキコトヲ約ス、而シテ輸入税及輸出税、税關手續、通過税及噸税並一方ノ代辦者、臣民及船舶ニ對スル他ノ一方ノ領土ニ於ケル入國ノ許可及待遇ハ何レモ前記ノ方法ニ依ル

第十三條

本條約實施ノ後成ルヘク速ニ一切ノ俘虜ハ互ニ之ヲ還附スベシ、日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ各俘虜ヲ引受クヘキ一名ノ特別委員ヲ任命スベシ、一方ノ政府ノ收容ニ係ル一切ノ俘虜ハ他ノ一方ノ政府ノ特別委員又ハ正當

ニ其ノ委任ヲ受ケタル代表者ニ引渡シ同委員又ハ其代表者ニ於テ之ヲ受領スヘク、而シテ其引渡及受領ハ引渡國ヨリ豫メ受領國ノ特別委員ニ通知スヘキ便宜ノ人員及引渡國ニ於ケル便宜ノ出入地ニ於テ之ヲ行フヘシ

日本帝國政府及露西亞政府ハ俘虜引渡完了ノ後成ルベク速ニ俘虜ノ捕獲又ハ投降ノ日ヨリ死亡又ハ引渡ノトキニ至ルマテ之カ保護給養ノ爲ニ各負擔シタル直接費用ノ計算書ヲ互ニ提出スヘシ同計算書交換ノ後露西亞國ハ成ルベク速カニ日本國カ前記ノ用途ニ支出シタル實際ノ金額ト露西亞國カ同様ニ支出シタル實際ノ金額トノ差額ヲ日本國ニ拂戻スヘキコトヲ約ス

第十四條

本條約ハ日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ニ於テ批准セラレハシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ本條約調印ノ日ヨリ五十日以内ニ東京駐劄佛蘭西國公使及聖彼得堡駐劄亞米利加合衆國大使ヲ經テ日本帝國政府及露西亞帝國政府ニ各之ヲ通告スベシ而シテ其終ノ通告ノ日ヨリ本條約ハ全部ヲ通ジテ完全ノ效力ヲ生ズベシ正式ノ批准交換ハ成ルヘク速カニ華盛頓ニ於テ之ヲ

行フベシ

第十五條

本條約ハ英吉利文及佛蘭西文ヲ以テ各二通ヲ作り之ニ調印スベシ其各本文ハ全然符合スト雖モ其ノ解釋ニ差異アル場合ニハ佛蘭西文ニ據ルベシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ茲ニ本講和條約ニ記名調印スルモノナリ

明治三十八年九月五日

即一千九百零五年八月二十三日(九月五日)

作ル

- 小村 壽太郎 (記名)
- 高平 小五郎 (記名)
- セルジ、ウキツテ (記名)
- ローゼン (記名)

本日附日本國及露西亞國講和條約第三條及第九條ノ規定

ニ從セ下名ノ全權委員ハ左ノ追加約款ヲ締結セリ

第一、第三條ニ付

第二、第九條ニツキ

兩締約國ニ於テ各任命スベキ同數ノ人員ヨリ成ル境界劃定委員ハ本條約實施後成ルベク速カニ薩哈噠ニ於ケ

高平小五郎(記名)
セルチ、ウイツテ(記名)
ローゼン(記名)

遼東兵站參謀長
後備步兵第十四旅團長
獨立重砲兵旅團長
滿洲軍倉庫長

步中佐 西川虎次郎
步大佐 齋藤徳明
砲大佐 加藤泰久
一等主計正 日匹信亮

第三 十月十六日現在ニ於ケル出征軍戰闘序列

軍 韓 北			師 團 増 設		軍 守 遼 東		江 軍 鴨 綠		軍 四 第			軍 三 第				軍 二 第				軍 一 第			軍			
二師團	後備第		15	13			一師團	後備第	11	16	10	6	14	9	7	1	8	5	4	3	12	2	G	團 師		
			29	25					10	31	8	11	27	6	13	1	4	9	7	5	12	3	G1	團旅		
			57	49					22	61	10	13	53	7	25	1	5	11	8	6	14	4	G1	聯 步		
			58	50					44	62	40	45	54	35	26	15	1	41	37	33	47	29	G2	隊		
			30	26					22	32	20	24	23	18	14	2	16	21	19	17	23	15	G2	團旅		
			59	51					12	63	20	23	55	19	27	2	17	21	9	18	24	16	G3	聯 兵		
			60	52					48	64	39	48	56	36	28	3	32	42	38	34	46	30	G4	隊		
16	18	17					9	6		11	10	3			5		8	4	1		13		G	團旅		
53	25	3					7	13		12	10	6			11		8	5	1	1/35	29		1	聯		
58	44	32					19	23		22	20	18			21		9	17	15		39		2	隊		
	56	47					36	48		43	40	34			42		38	31	16		1/30		3	隊		
															1	2								團旅		
															13	15									聯	
															14	16									隊	
										S		1				2									團旅	
										F3	F1	S1	13			16										聯
										⊕ F4	S2	14				17										隊
										F2		15				18										隊
24						14	52		14			37			14	49				2			51	步屬軍		
						55	54		59					46	33	1/50									兵スル	
						60	57							1/41											兵スル	
														1/4											後部ニ	

備考
△ハ砲兵廠
アラビヤ數字ハ聯隊番號
Fハ徒歩砲兵
ローマ數字ハ重砲兵
Sハ重砲兵
⊕ハ大隊番號

第一軍司令部

軍司令官
 軍參謀長
 軍參謀副長
 軍砲兵部長
 軍工兵部長
 軍經理部長
 軍醫部部長
 近衛師團長
 近衛師團參謀長
 近衛步兵第一旅團長
 近衛步兵第二旅團長
 第二師團長
 第二師團參謀長
 步兵第三旅團長
 步兵第十五旅團長
 第十二師團參謀長
 步兵第十二旅團長

步兵第二十三旅團長

大將 黒木 爲楨
 少將 藤井 茂太
 步中佐 福田 雅太郎
 少將 野間 騮
 少將 兒玉 德太郎
 一等主計正 關本 茂行
 軍醫監 菊池 常三郎
 中將 淺田 信興
 砲大佐 重見 熊雄
 少將 木村 有恒
 少將 谷山 隆英
 中將 西島 助義
 工大佐 阿部 貞次郎
 少將 石橋 健藏
 少將 小原 芳次郎
 中將 井上 光
 砲大佐 小原 傳
 少將 島村 于雄
 近衛後備混成旅團長
 近衛後備混成旅團參謀長
 後備步兵第十三旅團長
 第一軍兵站監
 第一軍兵站參謀長
 軍司令官
 軍參謀長
 軍砲兵部長
 軍工兵部長
 軍經理部長
 軍醫部部長
 第三師團長
 第三師團參謀長
 步兵第五旅團長
 步兵第十七旅團長
 第四師團長
 第四師團參謀長

第二軍

少將 今村 信敬
 少將 梅澤 道治
 步中佐 永田 克之
 步大佐 可兒 春琳
 少將 澁谷 在明
 工中佐 山田 陸槌
 大將 奥 保鞏
 少將 大迫 尙道
 少將 稅所 篤文
 少將 中村 愛三
 主計監 青柳 忠次
 軍醫監 森 林太郎
 中將 松永 正敏
 步中佐 山梨 半造
 少將 田部 正壯
 少將 兒玉 如忠
 中將 塚本 勝嘉
 步大佐 野口 坤之

步兵第七旅團長	少將 仁田原重行	步兵第二十九旅團長	少將 未 着
步兵第十九旅團長	少將 渡邊勝重	步兵第三十旅團長	少將 太田貞固
第五師團長	中將 木越安綱	第三軍	
第五師團參謀長	少將 野島忠孝	軍司令官	大將 乃木希典
步兵第九旅團長	少將 摺澤靜夫	軍參謀長	少將 一戸兵衛
步兵第二十一旅團長	少將 村山邦彦	軍砲兵部長	少將 牟田敬九郎
第八師團長	中將 立見尙文	軍工兵部長	工大佐 今澤義雄
第八師團參謀長	少將 由比光衛	軍經理部長	主計監 吉田丈治
步兵第四旅團長	少將 依田廣太郎	軍軍醫部長	軍醫監 落合泰藏
步兵第十六旅團長	少將 鎌田宣正	第一師團長	中將 飯田俊助
後備混成第四旅團長	少將 今橋知勝	第一師團參謀長	砲大佐 星野金吾
後備混成第八旅團長	少將 富岡三造	步兵第一旅團長	少將 馬場命英
後備混成第八旅團參謀長	步中佐 高山公通	步兵第二旅團長	少將 中村正雄
後備步兵第一旅團長	少將 隱岐重節	第七師團長	中將 大迫尙敏
第二軍兵站監	步大佐 小原正恒	第七師團參謀長	騎大佐 吉田平太郎
第二軍兵站參謀長	砲中佐 矢野伊平	步兵第十三旅團長	少將 吉田清一
第十五師團長	中將 沖原光孚	步兵第十四旅團長	少將 齋藤太郎
第十五師團參謀長	步大佐 飯田左門	第九師團長	中將 大島久直
		第九師團參謀長	砲大佐 足立愛藏

步兵第六旅團長	少將 小泉正保	軍經理部長	主計監 黒川秀行
步兵第十八旅團長	少將 平佐良藏	軍軍醫部長	軍醫監 藤田嗣章
騎兵第一旅團長	少將 秋山好古	第六師團長	中將 大久保春野
騎兵第二旅團長	少將 田村久井	第六師團參謀長	步中佐 栗田直八郎
砲兵第二旅團長	少將 永田龜	步兵第十一旅團長	少將 石原應恒
第三軍兵站監	步大佐 小畑蕃	步兵第二十四旅團長	少將 香川富太郎
第三軍兵站參謀長	步中佐 竹島音次郎	第十師團長	中將 安東貞美
後備步兵第十五旅團長	少將 松居吉統	第十師團參謀長	步大佐 嶋崎富三郎
後備混成第五旅團長	少將 渡邊章	步兵第八旅團長	少將 石田正珍
第十四師團長	中將 篠田金	後備混成第三旅團長	少將 岡崎生三
第十四師團參謀長	步中佐 高橋義章	後備混成第三旅團參謀長	少將 大久保利貞
步兵第二十七旅團長	少將 藤本太郎	後備混成第十旅團長	步中佐 市川堅太郎
步兵第二十八旅團長	少將 兒玉軍太	後備混成第十旅團參謀長	少將 門司和太郎
第四軍		後備混成第十一旅團長	步中佐 中島誠之
軍司令官	大將 野津道貫	後備混成第十一旅團參謀長	少將 友安治延
軍參謀長	少將 上原勇作	野戰砲兵第一旅團長	步少佐 中川幸助
軍砲兵部長	少將 楠瀬幸彦	第四軍兵站監	少將 福永宗之助
軍工兵部長	少將 古川宣譽	第四軍兵站參謀長	步大佐 奥山義章
			步中佐 依田昌兮

第十六師團參謀長

步兵第三十一旅團長
步兵第三十二旅團長

鴨綠江軍

中將 山中信義
騎大佐 宮崎兼文
少將 仙波太郎
少將 伊崎良顯

鴨綠江軍兵站監
鴨綠江軍兵站參謀長
韓國駐劄軍

大將 川村景明
少將 內山小二郎
少將 原義成
工大佐 太田正徳

軍司令官
軍參謀長
軍經理部長
軍醫部長

軍司令官
軍參謀長
軍砲兵部長
軍工兵部長
軍經理部長
軍醫部長

一等主計正 草野英行
軍醫監 横井俊藏

後備第二師團參謀長
韓國駐劄軍東部兵站監
兵站參謀長

第十一師團參謀長

步兵第十旅團長
步兵第二十二旅團長

後備第一師團參謀長
後備步兵第六旅團長
後備步兵第九旅團長

中將 齋藤力三郎
少將 山田忠三郎
少將 岡市之助
中將 坂井重季

後備步兵第十六旅團長
後備步兵第十七旅團長
後備步兵第十八旅團長
第十三師團參謀長

後備第一師團參謀長
後備步兵第六旅團長
後備步兵第九旅團長

後備第一師團參謀長
後備步兵第六旅團長
後備步兵第九旅團長

少將 草場彦輔
少將 比志島義輝

步兵第二十五旅團長
步兵第二十六旅團長

第十三師團兵站監

關東總督
關東總督府參謀長

關東總督
關東總督府參謀長

少將 山田保永
大將 大島義昌
少將 落合豊三郎

野戰砲兵監
要塞砲兵監
工兵監
輜重兵監
陸軍士官學校長
清國駐劄軍司令官

參謀總長 兵站總監
參謀本部次長
兵站總監部參謀長
運輸通信長官野戰鐵道提理
野戰經理長官陸軍省經理局長
野戰衛生長官
陸軍大臣
陸軍次官
人事局長
軍務局長
陸軍省副官
教育總監
教育總監部參謀長
騎兵監

元帥大將侯爵 山縣有朋
少將 長岡外史
砲大佐 大島健一
少將 大澤界雄

留守近衛師團參謀長
留守近衛步兵第一旅團長
留守近衛步兵第二旅團長
留守第一師團參謀長
留守步兵第一旅團長
留守步兵第二旅團長
留守第二師團參謀長
留守步兵第三旅團長
留守步兵第十五旅團長

砲大佐 松本鼎
少將 豊島陽藏
工大佐 榊原昇造
少將 岡田貫之
少將 南部辰丙
少將 神尾光臣

主計總監 外松孫太郎
軍醫總監 小池正直
中將 寺内正毅
中將 石本新六
少將 本郷房太郎
少將 宇佐川一正
少將 本郷房太郎
大將 西寛二郎
中將 中村覺
中將 大藏平三

留守近衛步兵第一旅團長
留守近衛步兵第二旅團長
留守第一師團參謀長
留守步兵第一旅團長
留守步兵第二旅團長
留守第二師團參謀長
留守步兵第三旅團長
留守步兵第十五旅團長

中將 伊瀬地好成
步中佐 渡邊湊
旅團長少將 東條英教
少將 矢吹秀一
步中佐 渡邊小太郎
少將 内藤正明
少將 山内長人
步中佐 宇宿行輔
步大佐 大生定孝

附錄

留守第三師團長	少將 高井 敬義	留守步兵第十四師團長	步大佐 森 脇 恒
留守第三師團參謀長	砲大佐 佐野 勝次郎	留守第八師團長	少將 河野 道好
留守步兵第五旅團長	師團長兼務	留守第八師團參謀長	步大佐 小泉 策郎
留守步兵第十七旅團長	步大佐 長谷川 良之	留守步兵第四旅團長	師團長兼務
留守第四師團長	中將 茨木 惟昭	留守步兵第十六旅團長	步大佐 川崎 宗則
留守第四師團參謀長	砲中佐 有田 恕	留守第九師團長	少將 佐々木 直
留守步兵第七旅團長	師團長兼務	留守第九師團參謀長	步中佐 平岡 茂
留守步兵第十九旅團長	少將 岡見 正美	留守步兵第六旅團長	師團長兼務
留守第五師團長	少將 眞鍋 斌	留守步兵第十八旅團長	步大佐 栗谷 幹
留守第五師團參謀長	步中佐 志波 今朝一	留守第十師團長	中將 柴野 義廣
留守步兵第九旅團長	師團長兼務	留守第十師團參謀長	步大佐 生井 順造
留守步兵第二十一旅團長	少將 山口 圭藏	留守步兵第八旅團長	師團長兼務
留守第六師團長	少將 岡村 靜彦	留守步兵第二十旅團長	步大佐 石原 盧
留守第六師團參謀長	步中佐 太田 朗	留守第十一師團長	少將 波多野 毅
留守步兵第十一旅團長	師團長兼務	留守步兵第十旅團長	騎大佐 河村 秀一
留守步兵第二十四旅團長	步大佐 湯地 弘	留守第十二師團長	師團長兼務
留守第七師團長	中將 黒潮 義門	留守第十二師團參謀長	中將 勝田 四方藏
留守第七師團參謀長	步大佐 橋本 三郎	留守第十三旅團長	師團長兼務
留守步兵第十三旅團長	師團長兼務		步中佐 福原 錢太郎

第四日 史抄錄

(明治三十七年)

留守步兵第十二旅團長	師團長兼務	留守步兵第十三旅團長	師團長兼務
留守步兵第三十三旅團長	少將 阪本 純熙		
留守騎兵第一旅團長	騎大佐 山本 米太郎		
留守騎兵第二旅團長	騎大佐 森岡 正元		
留守野戰砲兵第一旅團長	砲大佐 藏田 虎助	二月	
留守野戰砲兵第二旅團長	砲大佐 居藤 高次郎	六日	日露國際斷絶。海軍中將東郷平八郎聯合艦隊を率ひて佐世保を發す。
東京灣要塞司令官	少將 多田 保房	八日	第一回旅順港攻撃(八日夜半より九日午後一時まで、敵艦ツエザレウイツチ、レトイウザン、バルラダ、ホルタワ、アスコルド、ノウイツクの六艦に損害を與ふ)栗野公使露都を引揚ぐ。
由良要塞司令官	不詳	九日	日仁川港外海戦ワリヤーク、コレイツ、スガンリ一の三隻を撃破し爆沈せしむ。
下關要塞司令官	中將 新井 晴簡	十日	宣戦の詔勅を煥發せらる。
佐世保要塞司令官	少將 出石 猷彦	十一日	大本營を宮中に置かる。本邦駐劄露國公使ロゼン男東京を去る、浦鹽艦隊、我商船奈六浦丸を北海龍作沖に撃沈す。英、米、伊、西、清五國局外中立を宣言す。
舞鶴要塞司令官	少將 隈元 政次	十二日	佛、埃、兩國局外中立を宣言す。駐韓露國公使立を宣言す。
吳要塞司令官	不詳		
藝豫要塞司令官	砲少佐 内藤 瀧藏		
函館要塞司令官	砲大佐 林 鍊作		
旅順要塞司令官	少將 伊地知 幸介		
旅順要塞參謀長	砲中佐 石光 眞臣		
臺灣守備軍司令官	中將 上田 有澤		
臺灣守備混成第一旅團長	少將 須永 武義		
臺灣守備混成第二旅團長	少將 佐治 爲善		

予が見たる日露戦争

一四

京城より撤退す。

十三日 國庫債券一億圓募集規程發布。獨逸局外中立を宣言す。

十四日 陸海軍大臣各師團長へ勅語を賜ふ。第二回旅順港攻撃。墨、暹二國局外中立を宣言す。

十五日 露國水雷母艦エニセイ號、大連灣口にて自己の水雷に觸れ沈没。

十六日 日進、春日の二艦横須賀に着す。比律賓局外中立を宣言す。

十七日 内務古金銀御下渡。澳洪國局外中立を宣言す。

二十一日 クロバトキン滿洲陸軍總指揮官に、サワロフ同參謀長に親任せらる、敵艦マンジュウル上海の中立を蹂躪す。

二十三日 日韓議定書調印。

二十四日 第三回旅順港攻撃。第一回旅順口閉塞。

二十五日 我巡洋艦鳩灣に於て敵の驅逐艦デレミヤスチ1を撃沈す。

二十八日 平壤七星門外に於て始めて我斥候の衝突あり

三月

一日 新任露國東洋艦隊司令長官マカロフ中將旅順に着す。

二日 帝國臨時議會召集令に出ず。

六日 海軍中將上村彦之丞の率ゆる我第二艦隊浦鹽港を砲撃す。

十日 第四回旅順港攻撃。敵驅逐艦ステレグシチーを撃沈し同レンテルニ一號を破壊す。國庫債券一億圓締切、應募高四倍半なり。

十一日 露艦マンデュール武装を解除す。

十三日 侯爵伊藤博文特派大使として韓國に向ひ東京を出發す。

十六日 伊藤大使韓京に到着。敵艦スコルイ旅順に於て自設水雷に罹る。敵艦バリヤン大連灣口にて水雷に觸れ沈没す。

二十日 帝國臨時議會開院式舉行。伊藤特派大使韓皇に謁す。

二十二日 第五回旅順港攻撃。韓廷龍巖浦開放を聲明す

二十六日 露艦我通信船繁榮丸を撃沈す。

二十七日 第六回旅順港攻撃。第二回旅順口閉塞。

二十八日 我軍定州を占領す。

三十日 帝國議會臨時閉院式舉行。

四月

一日 伊藤特派大使歸朝す。

三日 我斥候義州に入る。

十日 鴨綠江畔に彼我の小衝突あり。

十三日 第七、第八回旅順港攻撃。露國艦隊旗艦ベテロ

パウロスク轟沈。マカロフ提督戦死。キリル大公重傷を負ふ。敵驅逐艦ベストランヌイ轟沈同ボビエダ

に水雷命中す。日進、春日の二艦間接射撃を行ふ。

十四日 旅順港攻撃續行。韓國皇宮焼失す。

二十日 横川省三、沖禎介の二士銃刑の宣告を受く。

二十二日 マギ一女史の一行横濱に着す。

二十三日 上村艦隊浦鹽港の攻撃に向ふ。

二十五日 浦鹽艦隊突如元山に出で我商船五洋丸を撃沈す。

二十六日 浦鹽艦隊の爲めに運送船金州丸撃沈せらる。

我陸軍九里、踏定二島を占領す。鴨綠江に我六十九號水雷艇敵兵を撃退す。上村艦隊元山に歸着す。

三十日 陸軍大將黒木爲楨の率める我第一軍、鴨綠江對

岸の敵を撃退し順次渡河。虎山其他の要所を占領す。上村艦隊浦鹽港外に遊弋す。瑞典、諾威兩國局外中立を宣告す。

五月

一日 午前九時第一軍九連城を占領す。午後蛤蜊塘激

戦。

二日 鴨綠江大捷につき第一軍司令官へ勅語を賜はる

三日 第三回旅順口閉塞。

五日 陸軍大將奧保鞏の率ゆる我第二軍遼東半島に上

陸を開始す。アレキシーフ旅順を去る。

六日 第一軍鳳凰城を占領す。

七日 第一軍の支隊寬甸城を占領す。第二軍普蘭店を

占領す。

八日 東京市民祝捷大會を開く。

九日 外債一億圓募集發表。

十日 敵騎兵安州に來襲す。

十一日 第一軍第二軍初めて連絡を通ず。

十二日 大睿口掃海着手。第一軍雪裡站の敵兵を撃退す

第二軍普蘭店の東北方の鐵道を破壊す。

秋の浦丸撃沈せられたるに確定す。

十四日 宮古艦沈没す。

十五日 初瀬、吉野の二艦沈没す。片岡艦隊蓋州角を砲撃す。

十六日 我軍十三里臺を占領す。

十七日 第二軍三十團堡九里庄、陳家屯等を占領す。我艦隊金州灣を掃海す。

十九日 我軍大孤山上陸を開始す。

二十日 旅順口強行偵察。浦鹽露艦ボカチール沈没に決す。大孤山上陸軍王家屯の敵を撃退す。

二十一日 敵驅逐艦旅順港外にて爆沈す。

二十三日 第二回國庫債券一億圓募集發表。

二十六日 第二軍金州城を占領す。烏海、筑築、平遠、赤城の四艦金州灣を砲撃す。南山占領。東郷聯合艦隊司令長官遼東半島南部の直接封鎖を宣言す

二十七日 第二軍南關嶺、柳樹屯を占領す。

二十八日 第一軍霞陽邊門を占領す。

二十九日 金州南山の大捷につき第二軍司令官奥保章へ

勅語

三十日 旅順口第二次強行偵察。金家堡子及沙子崗に於て彼我斥候の衝突あり。得利寺附近に彼我の騎兵戦あり。

六月

一日 宮本侍從武官は第一軍に、伊藤侍從武官は第二軍に御慰問使として出發す。

二日 奥大將金州の戦功を嘉賞せられし勅語に對して奉答す。

四日 旅順港外に於てグレミヤスチー型ガイダマーク型敵驅逐艦沈没す。

六日 岡澤精、乃木希典、長谷川好道、西寛二郎、兒玉源太郎の五中將は陸軍大將に、東郷平八郎、山本權兵衛の二中將は海軍大將に親任せらる。旅順口第三次強行偵察。海軍中將片岡七郎の率ゆる我第三艦隊南三島を偵察す。

七日 第四次旅順口強行偵察。片岡艦隊蓋州附近沿岸を威嚇砲撃す。第一軍の一部隊塞馬集を占領す。

八日 大孤山上陸軍岫巖を占領す。

十二日 第一軍の支隊懷仁縣を占領す。

十三日 水雷敷設中臺北丸奇禍に罹る。第五次旅順口強行偵察。

十四日 敵艦ノヴィツク其他驅逐艦十隻旅順口外に進み來り我艦隊と砲火を交へ再び港内に入る。

十五日 得利寺戰鬥の大捷。浦鹽艦隊對馬海峡に來襲運送船常陸丸、和泉丸を撃沈し、佐渡を破砲撃壊し去る。

十六日 第二回國庫債券一億圓締切、應募高三倍半に達す。浦鹽艦隊水雷艇の爲めに安靜丸、八幡丸撃沈せらる

十九日 上村艦隊歸港す。

二十日 滿洲軍總司令官及び同總參謀總長の親補の説あり。

二十一日 第二軍熊岳城を占領す。

二十二日 敵霞陽邊門に逆襲す。元帥大山巖は滿洲軍總司令官に、陸軍大將兒玉源太郎は同總參謀長に、元帥山縣有朋は參謀總長に、陸陸少將長岡外史は參謀次長に親補せらる。

二十三日 旅順敵艦隊出港す、我艦隊直ちに攻撃、敵艦

ペレスウィット型一隻撃沈、其他二隻に大損害を與ふ。

二十六日 常宮周宮兩内親王殿下より陸海軍に消毒卷纏帶一千組を賜る。東郷聯合艦隊司令長官に旅順港外戰の殊功を嘉賞せられ優渥なる勅語を賜ふ。

二十七日 東宮殿下近衛師團司令部に行啓。第二軍分水嶺を占領す。此夜旅順港外の敵哨艦を攻撃し二隻を轟沈す。

二十八日 貞愛親王殿下陸軍大將に、威仁親王殿下海軍大將に何れも昇進あらせらる。

二十九日 第一軍北分水嶺を占領す。

三十日 浦鹽艦隊元山を砲撃し我商船諸清丸を撃沈す。

七月

一日 第一軍摩天嶺を占領す。

四日 未明摩天嶺に敵逆襲、我軍直ちに撃退す。

五日 海門艦水雷に觸れて沈没す。北分水嶺に敵兵逆襲し來る我軍之を撃退す。

六日 滿洲軍總司令官大山元帥、同總參謀長兒玉大將以下午十一時新橋を出發す。我軍四臺方附近を占

- 領す。第一軍の支隊城廠を占領す。
- 七日 第二軍塔子溝、大望海塞東方の高地を占領す。
- 八日 夜第六艇隊旅順口にある敵の哨艦を攻撃し、又第五十八艇隊、黄金山下の敵艦を攻撃す。
- 九日 第二軍太平屯、峯屯より海山塞、高屯家を占領し蓋平全く我軍の有に歸す。午前七時敵艦數隻旅順口外に出て來り我第三艦隊と小平島附近に交戦、敵艦遂に港内に逃ぐ露國黒海艦隊三隻ダーダネルス海峡を通過して、巡洋艦四隻はバルチック海リパウ港解纜の準備中なりとの報あり。
- 十日 大孤山上陸軍仙家嶺附近を占領し尋て秀才溝を占領す。
- 十一日 第六水雷艇隊旅順港外の哨艦チアナ型に對し射撃を試む。
- 十二日 露艦アスコルド、水雷の爲めに大損害を受くと
の報あり。
- 十三日 露艦北海に現るるとの報あり。
- 十四日 第一軍山咀子及び老母嶺を占領す、下馬塘に敵兵逆襲し來る。西平號を捕獲す。
- 十七日 摩天嶺に於て三營逆襲し來る。威海衛沖に於て北平號を捕獲す。
- 十九日 第二師團に勅語を賜ふ。第二軍細河沿占領。橋頭附近の激戦。
- 二十日 皇后陛下第一軍に令旨を賜ふ。浦鹽艦隊津輕海峡を通過し太平洋に出でたりとの報あり。渡島國磯谷沖に於て高島丸敵艦の爲めに轟沈せらる。日高國惠山沖に於て共同運輸丸同遭難の報あり。
- 二十二日 浦鹽艦隊伊豆沖にて獨船「アラビヤ」號を拿捕す
- 二十四日 午前七時伊豆國石室崎の南沖合に露艦現れ一小商船を轟沈す。第二軍大石橋を占領す。鮮生角東灣に潜伏せる敵驅逐艦を攻撃し一隻を撃沈す。
- 二十五日 第二軍營口を占領す。
- 二十八日 露國內務大臣ブレイウエ暗殺せらる。
- 二十九日 大石橋の戦鬪に於て敵の參謀長サワロフ中將負傷せりとの報あり。
- 三十日 第十師團に勅語並に令旨を賜ふ。
- 三十一日 陸軍大將野津道貫の率ゆる我第四軍折木城を占領す。

八月

- 一日 昨拂曉より本日正午に至る間に於て第一軍檢嶺林子及様子嶺を占領す。此戦に於て敵の軍團長ケレル中將戦死す。
- 三日 本日正午迄に第二軍海城及牛莊を占領す。
- 五日 曉、颯、電の三驅逐艦旅順港外に敵驅逐艦十四隻と激戦し敵艦遂に港内に逃走す。
- 六日 露艦シウチ遼河にて破壊自滅す。
- 八日 露兵元山に迫る。
- 十日 旅順の敵艦隊出港バーヤン水雷に罹り大損害を被る、黄海大海戦敵の司令長官ウイットゲフト戦死し、ツエザレウキツチ艦長負傷す。此の戦に於て、伏見宮博恭王殿下御輕傷。
- 十一日 敵驅逐艦レンテリスイ芝罘に遁る。敵艦ツエザレウイツチ、ノイイツク驅逐艦ベスチェンミ外二隻膠州灣に遁入す。
- 十二日 東郷聯合艦隊司令長官に勅語を賜ふ。芝罘に遁入せる敵驅逐艦レンテリスイ、我驅逐艦朝夕、霞に捕獲せらる。露艦アスコルド及驅逐艦一隻上海に遁入す。膠州灣の露艦ノイイツク出港す。
- 十四日 蔚山沖の大海戦リユールツク撃沈、ロシヤ、クロンボイ大損害、ク艦副長戦死す。
- 十五日 在膠州灣の露艦武裝を解除す。
- 十六日 午前五時旅順攻圍軍參謀陸軍砲兵少佐山岡熊治を軍使として敵の前哨に差遣し陛下の聖旨並に勅書を敵の要塞參謀長に交付せしむ。
- 十七日 閑院少將宮新橋を出發し西征の途に上らる。關東要塞區司令官ステツセル非戰鬥員避難の聖旨傳達及び勸降を拒絶し來る。
- 十八日 露艦オツワシヌイ型、老鐵山沖に於て水雷に觸れ沈没。
- 二十一日 千歳、對馬の兩艦ノイイツクを旅順口より追究しコルサコフ港に於て撃沈す。
- 二十二日 上村艦隊の蔚山沖に於ける海戦の殊功を嘉賞せられ勅語を賜ふ。海軍少佐博恭王御凱旋。
- 二十三日 日進、春日二艦旅順口を砲撃す。露艦セバストポリ旅順口外に於て水雷に罹り大破。日韓協約調印を終る。

二十四日 旅順包圍軍慰問として宮本侍從武官御差遣の御沙汰あり。敵驅逐艦二隻旅順口外に於て水雷に罹り一隻沈没一隻大破港内に遁入す。露艦ヂヤナ柴根に逃入す。

十一日 我軍烟臺石炭坑を占領す。
 十二日 遼陽に於て敵のダムダム弾を鹵獲す。
 十三日 東宮妃殿下海軍の負傷者に木綿巻軸繻帯を下賜せらる。

二十五日 遼陽攻撃開始。上海に遁れし敵艦アスコルド及びクロンボウイ武装を解除す。

九月

一日 優詔滿州軍總司令官に下る。我左翼中央兩軍新立屯首山堡一帯を占領す。

十六日 敵の第五十四師團第二旅團長フォミン及び第九師團長モルソン遼陽の戦闘に於て戦死せりとの報あり。

二日 我右翼軍、黑英臺附近を占領す。

四日 今朝全く遼陽を占領す。

十八日 軍艦平遠奇禍に罹る。

六日 滿州軍の遼陽攻陥に對し再び優渥なる勅語下る

二十日 饅頭山下に於て敵の掃海汽船爆沈す。

七日 皇后陛下、皇太子殿下、滿州軍總司令官に令旨を賜ふ

二十一日 旅順の敵艦隊遁出を企て果さず。

八日 滿州軍慰問使伊藤侍從武官、高階侍醫新橋を出發す。

二十四日 皇后陛下戸山陸軍豫備病院分院に行啓せらる

十日 我野戰衛生長官の報告に遼陽の役に於ける我軍の死傷者の概數今日迄一萬七千五百三十九名なりとあり。

二十五日 東宮殿下氷川陸軍豫備病院分院に行啓せらる。獨逸皇族ホーヘン、ツオルン殿下來朝正午新橋に來着せらる。陸軍大將長谷川好道凱旋す。

三十日 敵兵渾河にヂヤンクを燒く。

二十八日 東宮殿下瀋谷陸軍豫備病院分院に行啓せらる

十月 せらる。

二十九日 皇后陛下御手製の繻帯五千卷を階軍省に下賜

五日 有栖川宮妃同大妃、北白川宮大妃、東伏見宮妃の各殿下東京陸軍豫備病院本院及び同戸山分院に成らせられ傷病兵御慰問の上オルガン數臺を賜る。昨日より敵發陽邊門附近並び上柳河子、平臺子等に逆襲我軍撃て之を退く。

十五日 我左翼軍沙河堡、拉木屯を占領す。我軍周家屯を占領す。

八日 五月二十六日より七月四日に至る旅順攻圍軍作戦經過の概要を發表せらる。

十六日 兩陛下並に東宮殿下より、滿洲軍に對し勅語並に令旨を賜ふ。此夜七時頃、山田少將の率ゆる混成一部隊は桑蘭子頭に於て猛烈なる戦闘の結果、野砲九門山砲五門を遺棄するの止むを得ざるに至れり。

九日 本溪湖方面戦闘、我右翼軍土門子嶺を占領す。

十七日 波羅的艦隊、丁抹プレートベルト海峡を出發すとの報あり。

十日 堅忍持久奉公の誠を竭せとの勅語下る。沙河大會戰に於ける敵の委棄死體合計一萬三千三百十三人捕虜七百九人なりとの報あり。波羅的艦隊ドーバー海峡ハル沖通過の際英國漁船二隻を撃沈し漁夫十八名を溺死せしむ。細河沿に於ける第十二師團の行動に對し勅語を賜ふ。

二十二日 陸軍大將西寛次郎凱旋す。

十一日 我右翼軍揚家灣を占領す。

二十三日 陸軍大將貞愛親王殿下渡米の途に上らる。沙河大會戰に於ける敵の委棄死體合計一萬三千三百十三人捕虜七百九人なりとの報あり。波羅的艦隊ドーバー海峡ハル沖通過の際英國漁船二隻を撃沈し漁夫十八名を溺死せしむ。細河沿に於ける第十二師團の行動に對し勅語を賜ふ。

十二日 我右翼軍ロウコリン山、八家子北方高地、燒達匂北方高地を占領す。

二十四日 天皇陛下、士官學校第十六期卒業證書授與式に行幸あらせらる。

十三日 我右翼軍は浪子街附近を占領す、我軍大追撃總前進。

二十五日 陸軍大將西寛次郎凱旋す。

十四日 我中央軍並に左翼軍の一部は東山口より胡家、

二十六日 陸軍大將西寛次郎凱旋す。

附 録

二二

- 二十五日 沙河會戦の我軍死傷將校以下合計一萬五千八百七十九人なりとの報あり。
- 二十七日 我右翼軍歪頭山を占領す。
- 三十日 軍艦大和乗組員若干名門司港に於て御用船千代田丸より敵の浮游水雷受取りの際奇禍に罹る。旅順攻圍軍の右縦隊及び中央縦隊攻撃前進、松樹山、二龍山、東嶺冠山の外岸頂を占領す。敵參謀長の報告に去る九日より十八日迄の沙河會戦に於て敵軍の死傷及び踪跡不明總計將校八百名、下士以下四萬五千人なりとあり。旅順港内造船所砲撃、砲艦ギリヤークに數發命中す。
- 十一月
 - 一日 旅順攻圍軍、同港内の汽船二隻を撃沈す。
 - 二日 旅順攻圍軍同港内の汽船一隻を撃沈す。
 - 三日 天皇陛下、東宮殿下、天長節觀兵式に行幸啓。閑院宮載仁親王陸軍中將に陞任あらせらる。東京日比谷公園に國民後授會の大會あり。
 - 七日 波羅的艦隊の一部、一昨日アフリカ洲チュニス國ビゼルク港に着せりとの報あり。
 - 十日 某地守備司令官西大將新橋を出發す。第二回外債一億二千萬圓募集を公布せらる。
 - 十一日 兩陛下赤坂離宮に於ける觀菊の御宴に行幸啓あらせらる。
 - 十四日 第三回國債募集確定、合計二億四千五百八十二萬九千二百圓にして即ち募集高の三倍強に達す。
 - 十五日 皇后陛下東京陸軍豫備病院に行啓あらせらる。敵驅逐艦ラストロブヌイ旅順を脱出す。
 - 十七日 陸軍中將上田有澤凱旋す。
 - 十九日 去る十六日西阿の波羅的艦隊十三隻リバウを出發せりとの報あり。午後旅順攻圍軍海軍砲を以て機器局附近の火葬庫を爆發せしむ。軍艦龍田密輸船ベテラン號(一一九九噸)を拿捕し佐世信に回航す。
 - 二十一日 渾河方面結氷八寸、砲車の氷上行進自由なりとの報あり。沙河方面最右翼軍の一支隊葦子峪を占領す。
 - 二十二日 我海軍重砲隊旅順港内を砲撃し機器局附近に大火災を起さしむ。
 - 二十三日 久瀨宮邦彦王、梨木宮守正王、兩陛下、陸軍

- 步兵少佐に陞任あらせらる。
- 二十五日 沙河方面の敵、興隆屯、房身、小屯溝附近に並に媽々街等に来襲我軍悉く撃退す。
- 二十六日 旅順攻圍軍松樹山及以東の諸砲臺に強襲を試む。
- 二十七日 旅順攻圍軍松樹山其他の敵の堡壘線に對し未だ突入の機に達せず。二〇三高地を數回突撃し其嶺頂に在る塹壕を奪取し尙進んで敵壘奪取を勉めつゝあり。
- 二十八日 第二十一帝國議會召集せらる。天皇陛下中央幼年學校卒業式に行幸。波羅的艦隊蘇士を解纜せりとの報あり。
- 二十九日 帝國議會開院式仰出さる。
- 三十日 帝國議會開院式舉行天皇陛下行幸勅語を賜ふ。二百三高地全部我有に歸す(本日午後八時)。赤阪山砲臺全部我有に歸す。軍艦濟遠水雷に觸れて沈没す
- 十二月
 - 一日 貴族院大山、東郷兩司令官に頌辭を送るの議を決す。
 - 三日 衆議院大山、東郷兩司令官に頌辭を送るの議を決す。海軍砲を以て旅順港内の露艦ホヘーダ、レットウイザン、其他に大損害を與へ計三十發の命中彈あり。
 - 四日 波羅的艦隊の一部本日喜望峰を通過すとの報あり。旅順二龍山外岸客室に於て三十六ミリ速射砲二門を鹵獲す。
 - 五日 蘇士通過の波羅的艦隊は去一日佛領チブーチに到着し港外に碇泊せりとの報あり。我軍旅順の敵艦を砲撃しボベード、ボルタワ、レットウキザンに計三十九發の命中彈あり。我砲彈白玉山の南方火藥庫に命中し火災起り二時間の長き鎮火せず。
 - 七日 旅順港内の敵艦レットウキザン沈降、ボベード大損害を受け、艦腹を現はし、ベレスウキツト火災を起す。
 - 八日 旅順港内の敵艦ベレスウキツト、ボルタワレットウキザン、ボベータ全く沈没バルラダ半沈み、パイアン火災を起しセバストボリを砲撃中なりとの報あり、我砲彈白玉山東南麓並に機器局附近の建築物に

予が見たる日露戦争

二四

多大の損害を與ふ。

十日 沙河方面の敵、北臺子腰屯及、唐家堡子、蒲草窪媽々街に來襲、我軍悉く撃退す。

ウイザン、ボベータ、バルラダ、バーヤン四戦艦、二巡洋艦、殘存すれど艦上人なく全く委棄する状態なり。

十一日 セバストポリ我攻圍軍の砲弾に畏怖し饒頭山西方面に避く。我砲彈ボルタワ、アムール並に黄金山下の無線電信所に大損害を與ふ。數日來の我砲撃によりて敵の戦艦四、巡洋艦二、砲艦一、水雷母艦一、計八隻を略々撃沈す。

二十二日 旅順攻圍軍三羊頭村附近高地を占領す。東郷聯合艦隊司令長官旅順口封鎖の一部撤去の旨を宣言す

十二日 旅順港外のセバストポリに封し、我水雷艦隊襲撃を試む。

二十三日 東郷聯合艦隊司令長官に勅語を賜ふ。旅順攻圍軍後揚樹溝高地を占領す。

十三日 海軍軍砲隊は旅順の老虎尾機器局、魚雷營及、附近の船艇を砲撃、魚雷營火災、船艇六隻命中雜通船三隻破壊。

二十四日 皇后陛下より東郷司令長官に令旨を賜ふ。

十四日 「セバストポリ」に向つて我水雷艇攻撃續行。

二十八日 午後七時半旅順攻圍軍二龍山砲臺を占領す。

十五日 セバストポリ遂に撃沈せらる。旅順の市街砲撃に關し敵將ステツセルの旨を奉じ敵の軍使二通の役告書を齎し來る我軍之を拒む。

三十一日 午前十一時旅順攻圍軍松樹山砲臺の全部を占領す。

十八日 旅順攻圍軍鷄冠山此砲臺を占領す。旅順港内の敵艦全滅僅かにベレスウキツト、ボルタワ、レット

一月 旅順攻圍軍望臺龍山及び後三羊島方面を占領す。旅順守將ステツセル、我軍司令官に降書を致す

十九日 波羅的艦隊の一部紅海のベルム島を通過す。

二月 旅順開城談判終了し開城條約の本調印成る。

二十日 露國第二軍黑溝臺、沈且堡に向ひ南進し來り我軍遊撃奮闘二十九日に至りて之を撃退し、黑溝臺を占領す我軍の死傷七千、敵の死傷一萬三千餘。

三日 第三皇孫殿下御誕生在らせらる。

三月 關し、潰亂せしむ、敵の死傷三百餘。

四日 波羅的艦隊の一部マダカスカル島東海岸タマタペに着す。

十六日 小川又次、川村景明、二氏陸軍大將に任ぜらる

五日 帝國巡洋艦隊瓜哇スマトラ島海岸に遊戈す。

十八日 波羅的艦隊の一部紅海のベルム島を通過す。

六日 旅順要塞陥落につき第三司令官へ勅語

十九日 波羅的艦隊の一部ジブチーに到着す。

露國宮中に御前會議を開き戦争繼續及び二十萬の増援軍派遣の議を決す。帝國巡洋艦ボルネオ及マニラ沖に遊戈す。

二十日 露國第二軍黑溝臺、沈且堡に向ひ南進し來り我軍遊撃奮闘二十九日に至りて之を撃退し、黑溝臺を占領す我軍の死傷七千、敵の死傷一萬三千餘。

八日 波羅的艦隊の一部クリート島スタダ灣を發しポートセツトに向ふ。

二十七日 陸軍大將川村景明男凱旋入京參内す。

十日 北海事件(波羅的艦隊の英國漁船砲撃事件)調査委員會を佛國巴里に開く。獨逸皇帝、乃木大將、ステツセル中將に勳章を贈る。波羅的艦隊の一部ポルトゼツトに着す。敵騎支隊牛莊、牛家屯、鞍山店、海城間營口、大石橋間に進來す我軍之を撃退し敵に多大の損害を蒙らす。

一月 北海事件の密問(波羅的艦隊の英國漁船砲撃事件)を巴里に開く。

十二日 帝國潜水艇隊成る。波羅的艦隊の一部蘇士を通過す。

二月 北海事件の密問終結す。

十四日 我滿洲軍の一支隊牛莊方面に敵の騎兵集團を包圍す。

五日 露國第二軍司令官グリツペンベルグ將軍滿洲より召還せらる。

十六日 東郷大將幕僚を從へて發京再び征途に上る。

六日 東郷大將幕僚を從へて發京再び征途に上る。

十七日 第三波羅的艦隊リボー港を出發し東航の途に上る。露國莫斯科總督セルデー大公暗殺せらる。

十二日 カウルバス將軍露國第二滿洲軍司令官に任ぜらる。

十九日 我興京方面の軍前進運動を開始す。
 二十二日 北海事件調査決定書を發表す。
 二十四日 我右翼軍十九日より前進運動を開始し本日清
 河城を占領す。沙河方面の我軍前進運動を開始す。
 二十八日 我右翼軍前進運動を開始す。

三月

六日 我軍懷仁、漢城堡、李官堡を占領す。
 八日 沙河方面の我軍全線總攻撃に移り鑛道線路より
 渾河左岸に亘る全地區を占領す。大山總司令官全軍
 總追撃の命令を發す。
 九日 我軍旅順を占領す。
 十日 我軍奉天を占領す。捕虜及び鹵獲品多し。
 十二日 我軍營盤(撫順東方約七里)を占領す。
 十三日 奉天占領につき滿洲軍總司令官へ勅語を賜はる
 我軍興京を占領す。
 十六日 我軍鐵嶺を占領す。
 十七日 クロバトキン大將滿洲軍總司令官を解かれリネ
 ウキツチ大將之に代る。
 十九日 我軍開原を占領す。

四月

三十一日 我軍昌圖を占領す。
 二十四日 四分五厘附日本外債三億圓を倫敦及紐育に發
 行するの相談成る。
 二十五日 露國第三艦隊蘇士を通過す。
 三十日 我開原占領兵團綿花街を占領す。

三日 我軍鷺鷥樹及四面城を占領す。露國第三艦隊ベ
 リム島沖を通過しジブチーに向ふ。
 四日 孤榆樹を占領す。
 五日 敵軍昌圖方面に南下し來りしも我軍之を撃退す
 八日 露國第三艦隊ジブチーを出發す。
 十日 波羅的艦隊アナンバ群島(シンガポールを去る
 約百五十哩)の東北約二十哩の海上に碇泊す。
 十二日 波羅的艦隊カムラン灣に碇泊す。
 十四日 我軍英額城及八家子を占領す。
 十五日 我軍通化を占領す。
 十七日 露國第三艦隊錫蘭沖を通過し東航す。
 二十二日 波羅的艦隊カムラン灣を出航す。
 二十四日 敵兵開原附近に南進し來る我軍之を退く。波

羅的艦隊再びカムラン灣に歸る。露軍開原及昌圖に
 襲來す我軍之を撃退す。

二十六日 波羅的艦隊再びカムラン灣を發航す。
 二十七日 露國第三艦隊卑南沖に現る。

五月

三日 我軍八寶屯を占領す。
 五日 露國第三艦隊新嘉坡を通過す。露國驅逐艦四隻
 北海道沖に現れ我帆船一隻を撃沈す。
 九日 波羅的艦隊ホンコーエ灣を出發す。露國第三艦
 隊聖ジエムス灣に現る。
 十二日 波羅的艦隊再びホンコーエ灣に還る。
 十三日 臺灣全島及其沿海を臨戰地域と定め戒嚴令を布
 く。
 十四日 露國第二(波羅的艦隊)第三艦隊相合して北航
 す。
 十七日 露國第四艦隊機裝を了へリポー港に碇泊す。
 十八日 昌圖前面の敵軍又襲來す我軍撃退し多大の損害
 を與ふ。
 二十五日 露國艦隊清國サツドル島沖に現れ對馬海峡に

向ふ露國太平洋艦隊司令長官ビリレフ大將聖彼得堡
 を發し浦鹽港に向ふ。

二十七日 東郷大將露國艦隊を對馬沖に邀撃し、翌二十
 八日に亘り殆ど全滅せしめ戰艦二隻を捕獲し露提
 督以下八千を虜にす。

六月

三日 露國敗殘艦二隻マニラに遁入す。
 十日 米國大統領ルーズベルド氏日露兩國政府に對し
 講和勸告の通牒を發す。
 十二日 講和事件につき御前會議を開かる。露國政府講
 和の勸告に應ず。
 十五日 日露兩全權會見地米國華盛頓に決す。
 十七日 我第三軍の一部遼陽高棚を占領す。
 十九日 威遠堡門及昌圖方面の我軍北進し敵兵潰走す
 二十日 我北韓軍鏡城を占領す。
 二十一日 英額城前面の敵軍南下襲來す我軍邀撃多大の
 損害を與へ追撃に移る。威遠堡門方面の我軍敵を撃
 攘して歡喜嶺附近の高地を占領す。
 二十二日 露國政府ネリドフ氏を講和全檢大使に任命し

予が見たる日露戦争

たりとの報至る。

二十六日 我北韓軍輸城を占領す。

二十九日 我滿洲軍の一部隊大沙灘北方高地及三間房を占領し益々北進す。

七月

一日 康平前面の敵砲十八門を曳きて來襲す。我軍撃退し敵の死傷四百餘。

二日 我北韓軍前面の敵軍南下し來り我軍の爲め撃退せらる。

三日 小村壽太郎、高平小五郎二氏媾和全權委員を仰付られ、桂首相外務大臣を兼任す。露國ムラヴキョフ及びローゼン二氏を媾和全權委員に任命したとの報至る。

四日 我北遺艦隊、陸軍輸送船隊を護衛し樺太に向ひ出發す。

七日 出羽艦隊樺太に迫り掃海及び上陸援護隊の任務に就く。

八日 小村全權委員の一行横濱出帆のミネソタ號にて渡米の途に上る。外債三億圓募集の緊急勅令を發布

二八

せらる。我軍樺太に上陸しコルサコフ市を占領す。露探嫌疑の佛人ブグアン被告事件公判を東京地方裁判所に開く。

十日 我樺太上陸軍ウラジミロフカ及びブリヂネエを占領す。

十一日 日露講和委員會見地は米國ヴァルジニヤ州ポーツマスなりと傳へらる。

十二日 我が樺太上陸軍ダアリネエ密林中の敵を攻撃し敵軍潰亂樺太の南部全く我有に歸す。

十七日 我驅逐艦隊雄基灣を砲撃し、千早艦羅津浦西端ガカ角北方高地の敵を砲撃す。

二十二日 露國全權委員ウキツテ氏巴里に佛蘭西首相ルヴキエー氏と會見す。

二十三日 我北韓軍富寧及び富居附近の敵を撃退す。

二十四日 我樺太軍亞歷山港を占領す。我艦隊の一支隊沿海州に上陸し敵市街を砲撃し大火を起さしむ。我北韓軍富居東北三里の素清より茂山嶺を經新豊山に互る線を占領す。小村全權委員一行市俄古に着し歡迎せらる。

二十五日 我樺太軍ゾーエを占領す。小村全權委員一行紐育に着す。

二十六日 露國全權ウキツテ氏佛國セルヴールを發し米國紐育に向ふ。

二十七日 我樺太上陸軍デルペンスコエを占領す。

二十八日 小村、高平兩全權委員米國大統領とオイスタペーに會見す。樺太上陸軍ルイコフを占領す。

三十一日 北樺太の敵軍降伏し我軍樺太全島を占領す

八月

二日 露國全權ウキツテ氏紐育に着す。

三日 露國驅逐艦二隻鏡城沖に現れ我商船を砲撃し浦鹽方面に航走す。

六日 日露兩國全權委員オイスターペーに大統領ルイベルト氏と會見す。

八日 小村全權委員一行ボーツマスに着す。

十日 日露講和談判開始せられ我より講和條件を提示す我海陸軍協同して樺太の殘敵を掃討す。

十三日 我艦隊の一部間宮海峽ラザレバ角敵守備兵を砲撃潰走せしむ我分遣艦隊堪察加のペトロバウロスク

九月

一日 日露休戰條約の調印了る。我北韓軍昌斗嶺及五峯嶺を占領す。

五日 全國有志國民大會を日比谷公園に開く、地方有志者上京する者多し、政府干渉して國民の大激昂を惹起し、内相官邸に放火し、首相官邸を破壊し國民新聞社を襲ひ、夜に入り各警察署を襲ひて其の或る者を焼き市内の各交番所を焼打し、夜を徹し東京全市騷擾を極む、巡查抜劍して市民の死傷する者多く有志中兇徒嘯集罪を以つて拘引さるゝ者あり。日露講和條約の調印了る。

十三日 滿洲軍總司令部休戰の命令を下す。

十月 十四日 日露講和條約批准交換了る。

十六日 日露講和條約發表せられ詔勅を發せらる。

佐藤清勝 著書目録

斷機概録

日本道徳に關する史實

皇國の危機日米戰近し

世界に比類なき天皇政治

昭和六年三月五日印刷

昭和六年三月十日發行

定價金壹圓六拾錢

著者 佐藤清勝

東京市本郷區彌生町二番地

印刷者 杉田彌太郎

東京市麴町區麴町八丁目一番地

印刷所 杉田屋印刷所

東京市麴町區麴町八丁目一番地

東京府杉並町阿佐ヶ谷四十番地

發行所

軍事普及會

振替東京四九三三四三番

不許	複製
----	----

終

